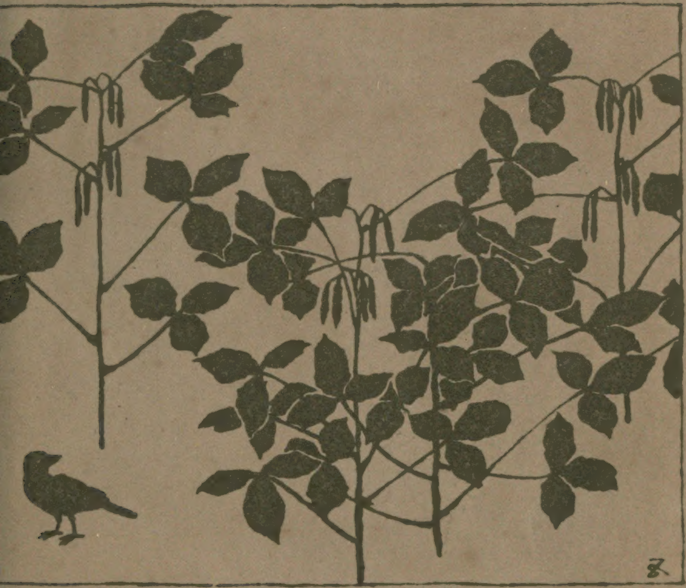
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03009 3645



明治四十五年五月五日印刷
明治四十五年五月八日發行

三國志中卷
定價金八拾五錢

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店
大賣捌所　東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店
同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

（岡山製本）

通俗三國志中卷 終

深く汝が人を傭て作しむるかと疑ふ、今汝に七步の詩を作しめん、若作得ば命を助ん、若あたはずんば二罪倶に罰せん。曹植が曰、ねがはくは題を求て之を作らん。時に殿上に一つの畫軸を掛、二匹の牛築地の下に鬪ひ、一つの牛井に落て死したるを畫きたれば、曹丕これを指て曰、汝この畫を以て題とし、詩の中に、二牛鬪墻下、一牛墜井死る等の字を用ふる事勿れ。曹植乃ち起て七步しけるが、其詩すでに成れり。其詩に曰、

兩肉齊道行　頭上帶凹骨　相遇由山下　欻起相搪突
二敵不倶剛　一肉臥土窟　非是肉不如　盛氣不泄畢

曹丕及び群臣これを見て大に驚く。曹丕又曰、七步に詩を作るは猶遲し、汝聲に應じて作らんや。曹植が曰、ねがはくは又題を聞ん。曹丕が曰、我と汝と乃ち兄弟なり、其意を以て題とせよ。曹植これを聞て乃ち作る。其詩に曰、

煮豆燃豆萁　豆在釜中泣　本是同根生　相煎何太急

曹丕これを聞て頻に涙を流しければ、其母卞氏殿の後より出て曰、兄なんぞ弟に逼ることの甚しき。曹丕打驚き、座を起て申けるは、國法は廢べからずと云ども、孤天下に於て容ずと云ものの無、況や骨肉の弟をやとて、曹植を安鄉侯に貶しければ、乃ち馬に乘て別れ去ける。

曹丕の弟曹植が才と妬で害せんとす
曹植

中へ馳入、主上の令旨なりと呼はりければ、一人も當る者なし。この時曹植は丁儀、丁廙等と酒に醉て倒居たりしかば、許褚こと〴〵く縛て車にのせ、鄴郡へ送り來る。曹丕怒て丁儀、丁廙等をこと〴〵く誅殺しければ、老母卞氏この由を聞て大に驚き、急ぎ殿前に出て曹丕に告て曰、汝が弟の曹植は平生酒を好で、醉後には疎狂をなす、蓋し胸中の才を頼で、妄に放逸を成もの也、汝同胞骨肉の情を思て一命を助なば、吾九泉の下に於て心やすく目を塞ん。曹丕が曰、某も深く曹植が才を愛す、安んぞ輕々しく之を廢せん、惟その性を戒んが爲なり、少しも憂ひ玉ふこと勿れとて、乃ち偏殿に出て朝せざりければ、華歆きたり問て曰、さきに母后の出玉ひしは、曹植を廢すること勿れと宣ひしに有ずや。曹丕が曰、然り。華歆が曰、曹植大なる才を懷て了に池中の物に有ず、今もし除ずんば、後大なる患を成ん。曹丕が曰、われ已に母に向て必ず廢せじと云り。華歆が曰、人みな曹植は口を開けば章を成玉ふと申せども、臣いまだ信なりとせず、今こゝに召て才を試み、若能ずんば殺し玉へ、若その才を惜しと思ひ玉はば、官爵を貶して天下詩文に傲ものゝ口を絶塞玉へ。曹丕これに從ひ曹植を呼よせければ、曹植怖れ懐き拜伏して罪を請。曹丕が曰、汝みだりに文才に傲て、常に無禮の行をなす、家法を以てする時は兄弟、國法を以てする時は君臣、むかし先王ありし時、汝つねに文章を以て愛せらる、我

○曹子建七歩作レ詩

曹丕すでに曹操を葬りければ、華歆が曰、鄢陵侯曹彰は軍馬を交割して已に本國に回り玉へり、臨淄侯曹植、蕭懐侯曹熊二人は、坐ら視て父の喪に奔玉はず、早く令旨を下して其罪を問玉へ。曹丕これに從ひ、いそぎ使を遣しければ、程なく一人の使かへり、蕭懐侯曹熊は罪を怕て自ら頸を縊玉へりと云ければ、曹丕あつく葬らしむ。時に一人の使かへり、臨淄侯曹植は常に丁儀、丁廙と云ものを愛し、日夜酒を飲で喪を發せず、使いま王旨を傳て到ると云ども、端坐して更に動かず、剰へ丁儀大に罵り、汝等みだりに舌を搖こと勿れ、昔し先王ありし時、吾主を立て太子とせんとし玉ひしが、讒人に阻られ玉へり、今王薨じていまだ十日も過ざるに、罪を骨肉に問は何ごとぞと申し、丁廙は、我主の聰明なる、筆を下せば章を成、自ら王者の大體あり、今反て其位を得玉はず、汝等廟堂の臣みな是肉眼の愚夫にして、聖賢を知こと能はず、禽獸に同じきぞと罵り、曹植は大に怒て、武士に命じて某を亂棒に打出し玉へりと告ければ、曹丕聞も肯ず、卽時に許褚を呼出して三千餘騎の精兵を授け、臨淄に行て盡く生取きたれと下知をなす。許褚命を受て飛が如く臨淄に到り、門を守る者共を四角八方へ斬ちらし、直ちに城

り來れりと告ければ、曹丕驚て申けるは、わが弟の曹彰は、心剛にして深く武藝に通ず、今大軍を率ゐきたるは、必ず我と位を爭はん爲なるべし。時に一人すゝみ出て曰、某よく此人の心根を知り、願くは一言を以て之を折ん。諸人これを見れば河東襄陵の人に、賈逵字は梁道とて、乃ち諫議大夫なり。曹丕然るべしとて喜びければ、賈逵城を出て門外に迎ふ。曹彰乃ち問て申けるは、先君の璽綬は何くにかある。賈逵色を正して曰、家に長子あり國に儲君あり、先君の璽綬は足下の知玉ふことにあらず、今問玉ふは如何なる故ぞ。曹彰默然として言なく、進んで宮門に到りければ、賈逵問て曰、足下こゝに來り玉ふは父の喪を發せん爲か、又は位を爭ん爲か、忠孝の人と爲んことを思ひ玉ふか、大逆の人と爲んことを思ひ玉ふか。曹彰が曰、われ來て父の喪を發す、何ぞ異心を存せんや。賈逵が曰、もし異心を存じ玉はずば、何ゆゑに大軍を從へ玉ふぞ、此に因て疑を爲もの多し。曹彰乃ち兵を盡く退け只一人內に入、再拜して曹丕に見え、共に聲を放て哀み哭き、手下の勢を盡く曹丕に與へければ、曹丕乃ち再び鄢陵に囘し、兵を分て守らしむ。此に因て曹丕魏王の位に登り、建安二十六年を延康元年と改め、賈詡を太尉に封し、華歆を相國とし、王朗を御史大夫とし、大小の官僚こと〲く封賞を加て、曹操を高陵に葬り、謚して武祖と號す。

劍を拔て怒りければ、諸人みなこれを怕れ、曹丕を扶て位に卽んとする所に、許昌より華歆馬を飛して馳きたれり。諸人驚て何ごとぞと問ば、華歆申けるは、魏王すでに薨じて天下震動す、汝等久しく君の祿を食うて、何ぞ早く太子を立ざる。諸人みな曰、いま已に太子を立んとす。華歆が曰、われ自ら漢の天子に奏して勅命を取きたれり。諸人これを聞て皆大に喜びければ、華歆懷より詔書を出して高らかに之を讀。その制に曰、

魏太子丕、昔皇天授乃顯考、以翼我皇家、遂攘除群凶、拓定九州、弘功茂績光於宇宙。朕用垂拱負扆二十有餘歲矣。天不憖遺一老、永保予一人、早世潛神、哀悼傷切。丕奕世宣明、宜秉文武、紹熙前世。今使使持節御史大夫華歆、奉策詔、授丕丞相印綬、魏王璽紱領冀州牧。方今外有遺虜、遐夷未賓、旗鼓猶在邊境、干戈不得韜刄。斯乃播揚洪烈、立功垂名之秋也、豈得修諒闇之禮究曾閔之志哉。其敬服朕命、抑弭憂懷、勞祗厥緒、時亮庶功、以稱朕意、嗚呼可不勉歟。

建安二十五年春二月日詔

この時華歆詔を以て魏に事へ、威を成て漢帝に迫り、强てこの詔を申し下せる也。曹丕すでに魏王に登り、百官みな拜賀して慶を述る所に、鄢陵侯曹彰自ら十萬の勢を率して長安よ

きたりければ、夏侯惇あつと吶て昏絶し、此より重病を受て起こと能はず。曹操乃ち前將軍曹洪、侍中陳群、中大夫賈詡、主簿司馬懿を召て申けるは、われ天下に縦横すること三十餘年、こと〴〵く逆徒を滅して、只吳の孫權蜀の玄德のみいまだ服せず、孤いま病危し、必ず逃がたきを知る、汝四人に後の大事を託す、わが長子曹昂は不幸にして宛城に死す、今卞氏が腹に四人の子を生、われ常に三男曹植を愛すと云ども、虚華にして實なし、次男曹彰は勇にして計なく、四男曹熊は多病にして保がたし、惟長男曹丕は篤厚恭謹にして、才智共に備れり、大事を任ずるに堪たり、汝等よく之を佐け、各忠義の心を勵して、長久の計を致せ、怠ること勿れとて、長嘆一聲涙雨の下るが如く、忽然として息絶たり。壽六十六歲。時に建安二十五年春正月下旬なり。文武の百官聲を放て哀み哭き、急ぎ櫬を送て鄴郡に赴ければ、曹丕これを聞て哀を擧、自ら城外に出て櫬を迎へ、孝を掛て祭をなし、哭く聲大に震ふ。中庶子司馬孚すゝみ出て曰、太子哀を止玉へ、主上すでに崩じて天下震動す、諸官なんぞ嗣君を立て萬國を鎭玉はざる。諸人みな曰、太子速に寶位に登り玉ふべけれども、いまだ天子の勅命なし、何ぞ輕々しく行はん。時に兵部尚書陳矯すゝみ出て曰、主上すでに薨じ玉ひて、太子いま側にあり、若勅命の出るを待時は社稷危し、早々に太子を冊て、王位に上せ奉るべし、誰か從はざるべきとて、

還す。この時曹操が病いよ〳〵重り、其夜の夢に三匹の馬が槽を同うして物を食と見ければ、曉に及で賈詡に問て申けるは、われ昔し三匹の馬が同じ槽にて物を食の夢を見て、馬騰、馬休、馬鐵を疑うてその全家を殺したるが、今夜又この夢を見たり。賈詡答て、馬を夢みるは皆吉兆なり、主上なんぞ之を疑ひ玉へると云ければ、曹操これに依て心を安んじ、了に司馬氏の天下となるべきを知ざりけるこそうたてけれ。其夜三更の比しきりに頭目沈迷しければ、几に凭て坐する所に、忽ち殿中に聲あり、帛を裂が如くなりければ、驚て之を見るに、伏皇后、董貴妃、二人の皇太子、並に董承等二十餘人、遍身血に染て愁雲の内に立、隱々として命を索るの聲しければ、曹操劍を拔て虛空を砍に、物の響音して、殿の西南の角震ひ崩る。諸人いそぎ曹操を別殿に扶け出しけるが、次の夜も男女哭き叫音曉に至るまで絕ざりければ、曹操もろもろの大將を集め、孤戎馬の中に在こと三十餘年、つひに怪異の事を見ざりしが、近ごろ此の如は何ゆゑぞと問けるに、諸人みな道士に命じて醮を成しめ、禳をせんとぞ勸ける。曹操申けるは、獲罪於天無所禱と云り、孤天命すでに盡ば、日に千金を用ふとも、安んぞ救ふことを得んとて、了に禳を成しめず。次の日は氣上焦に塞て目に物を見ること能はざりければ、夏侯惇を召て事を議するに、怪き雲の中に伏皇后、董貴妃、その外董承等二十餘人、隱々として出

曹操見をはりてあざ笑ひ、孫權われを爐火上に居しめんとすと云て、群臣に示しければ、侍中陳群、尙書桓楷二人、地に伏して申けるは、漢室安帝より以來、國祚すでに衰て只今日のみに有ず、主上の功德巍々として、生靈みな仰ぎ望む、この故に吳の孫權も外に在て臣と稱す、此天人の應なり、主上早く大魏皇帝の位に卽て正統を繼玉へ。曹操笑て曰、われ漢に事てより三十餘年、すでに功德を立と云ども、身いま王位に至りぬれば、望み已に足れり、何ぞ外に望こと有ん。夏侯惇諫て曰、天下悉く漢の運すでに盡て、世の新に起んことを知、今主上戎に卽こと三十餘年、功業已に百姓に著て、天下悉く心を歸す、古より萬害を除て民の歸する者は、卽ち生靈の主なり、天に應じ人に順て早く帝位に卽玉へ。曹操が曰、施ニ於有ㇾ政、是亦爲ㇾ政、苟も天命在ㇾ孤、孤卽爲ニ周文王一。是に因て其子を天子にせんとする意なりと、人始て知たりける。

○曹丕執ㇾ政稱ニ魏王一

諸人帝位を勸れども、曹操辭して從はざりければ、司馬懿申けるは、いま吳の孫權すでに臣と稱して來り歸す、主上これに官を加へて玄德を伐しめ玉へ。曹操が曰、この理きはめて善とて、孫權を驃騎將軍南昌侯として荊州の牧を領せしむ。孫權これを受て恩を謝し、于禁を送て都に

怒り、此の如き鼠輩を生て世の妨にせんやとて、獄に下して拷問せしむ。獄を司る奉行に呉氏の人あり、皆稱して呉押獄と呼。この人毎日酒食を送て華陀を恤みければ、華陀その恩を感じ、我いま非命の死を受、恨らくは青囊の書いまだ世に傳ず、深く御邊が恩を感ず、我いま書簡を封じて家人に送らん、御邊この書簡を持て我家に行、青囊の書を取きたれ、我必ず盡く傳て神效を繼しめんと云ければ、呉押獄が曰、われ若青囊の妙術を得ば、此役を棄て廣く天下の病人を救ひ、先生の德を全うせんとて、金城に行て華陀が妻を尋ね、書簡を渡して青囊の書を受、いそぎ家に囘て藏し置けるが、十日ばかり過て曹操が病いよ／＼重り、華陀すでに獄中に殺されしかば、呉押獄は役を罷て家に囘り、青囊の書を以て醫を成んと云ければ、其妻叱て曰、青囊の書はわれ已に燒棄たり。呉押獄その故を問ば、妻答て、たとひ青囊の書を學び得て華陀が如く妙を得るとも、只獄中に落て責殺されば、これを傳て何にかはせん、我この故に燒棄たりと申す。此に因て青囊の書世に傳らず。曹操は華陀を殺してより病いよ／＼重り、呉蜀の滅ざることを憂る所に、呉の國より使きたりて書簡を獻りければ、乃ち開き見るに、其文に曰、

臣孫權、久知二天命一、以歸二皇上一。伏望、早遣二大將一、剿二滅劉備一、掃二平兩川一。臣卽率二群下一、納レ土歸降。

華陀が曰、この内に飛物あり、聞人みな信しからずと笑ひければ、華陀刀を以てこれを割に、一つの黄雀瘤の中より出て飛去り、又一人犬に足の指を咬れ、痒して甚だ痛ければ、華陀が曰、痛ものは内に針十箇あり、痒ものは黒白の碁子二箇あり、人みな之を聞て大に疑ふ、華陀刀を以て割開に果して然り、此の如き神效數を知ず、乃ち扁鵲が神醫なり、今金城に居住す、主上なんぞ招き玉はざる。曹操卽時に使を馳て華陀を招き、對面して脉を診しむるに、華陀が曰、これは主上風息の病なり。曹操が曰、われ常に偏頭風を患ひ、不時に發て動すれば五七日飮食すること能はず、汝いかゞして之を治せん。華陀が曰、この病根は腦袋の中にありて、風涎出ること能はず、枉て藥を服するとも、全く治すること能じ、某一つの法あり、先麻肺湯を飮しめ、刀を以て腦袋を砍開き、風涎を取出して病の根を除時は全く痊ん。曹操勃然として怒て曰、汝われを殺ん爲か。華陀が曰、主上聞玉はずや、關羽曾て毒の箭に中りし時、某その臂を砍ひらき骨を刮て藥を與へければ、自然に全く憂なし、今主上の小きなる病、なにゆゑに疑ひ玉ふぞ。曹操が曰、臂の病は骨を刮もげに然り、わが腦袋いかでか臂に同からん、汝必ず關羽と昔し相親み、この時に乘て孤を殺して關羽が仇を報ぜんとの計なるべしとて左右の兵を呼、いそぎ拷問せよと云ければ、賈詡諫て曰、浩る名醫を何ゆゑに殺し玉ふぞ。曹操いよく

曰、華陀字は元化、沛國譙郡の人なり、凡そ病を治するに手に隨て愈ずと云ことなく、若五臟六腑の疼を患る者ありて藥の效なき者は、便ち痲肺湯を飲しむるに、須臾の內に酒に醉たるが如く又死せるが如し、乃ち刀を持てその腹を剖開き、藥湯を以て臟腑を洗に、其人すこしも痛ことを覺ず、乃ち藥線を以て其口を縫に、二十日あまりを經て平復す、其神效此の如し、甘陵の相夫人すでに孕で六箇月に至り、腹の痛堪がたかりけるを、華陀脉を視て曰、脉の中これ男子の胎なり、然れども死せること已に久しとて、遂に藥を與へければ、果して男胎下り、十日あまりして全く痊、ある日華陀道の上に一人呻吟の聲を爲を聞て、此は飲食不下の病なりとて、之を問ば果して然り、乃ち蒜の汁三升を取て飲しめければ、立どころにして痊たり、其人家に囘りて長さ二三尺の蛇を吐ければ、甚だ怪み、蛇を將て華陀が家へ到るに、一人の童子相引て見えしむ、その人傍を見れば、多くの蛇を壁の上に掛たり、又廣陵の太守陳登心中つねに煩懣し、面赤して飲食すること能ず、華陀が曰、胸中に數升の虫あり、內疽を作んとす、此は腥を食て起れる疾なりとて、乃ち藥を與へければ、果して虫を吐こと三升あまり、皆頭赤して動搖す、華陀が曰、これは魚の毒より發れり、今日治すと云ども、三年の後又發して必ず死せんと云しが、陳登果して三年後に死したり、又ある人眉の間に瘤ありて、痒こと忍がたし、

ず禍を成こと有ん。曹操怒て申けるは、われ平生普天の下を遊歴すること四十餘年、上天子より下庶人に及ぶまで怕れずと云ものなし、是何の邪神なれば敢て孤意に逆ふぞ、聖人は怪力亂神を語ずとこそ聞しに、量るにこの木を砍たりとも何の疑か有んとて、佩たる劍を拔て自ら砍ければ、錚然として聲をなし、血迸て曹操が衣に滿。なほこれにも畏れず再び砍んとすれば、血濺で曹操が面に滿、左右近侍の者共までも盡く血に染ければ、大に驚き劍を棄て馬に乘、いそぎ宮中へ逃回りける。其夜二更の比曹操睡こと能はず、殿中に坐して居たりければ、忽然として風ふき起り、一人髮をさばき劍を執、皂き衣を被て曹操が前に來る。曹操驚て、何者なれば此に來れると問に、その人答て曰、われ乃ち梨の樹の神なり、汝建始殿を立る意は漢の天下を奪ん爲なり、剩へ來て我神木を砍んとす、我すでに汝が命數の盡たるを知、こゝに來て汝を殺す。曹操大音聲を擧て、よれや兵共と呼はりければ、彼人劍を持て曹操をはたと砍る。曹操大に叫びけるが、忽然として驚き覺、あたりを見れども人もなく、頭腦しきりに疼で甚だ忍がたかりければ、急ぎ四方に相觸、名醫を尋ねて治せしむるに、百計すれども驗なし。時に華歆告て申けるは、主上華陀と云名醫を知玉へるか。曹操が曰、昔し吳の周泰を療治せる者にあらずや。華歆が曰、尊命の如し。曹操が曰、その名を聞と云どもいまだ其才を知ず。華歆が

○曹操殺ニ神醫華陀一

曹操は洛陽に在て關羽を葬りし後、毎夜睡んとすれば關羽目の前を離れず現れけるゆゑ、心の内驚怕れ、文武の大將を集めて如何せんと議するに、諸人みな申けるは、洛陽の行宮殿宇すでに舊て怪異の事多し、別に新宮を造て遷り玉へ。曹操が曰、われ久しく一つの殿を造て建始殿と名付んと欲す、恨らくは良工なし。賈詡が曰、洛陽に良工蘇越と云ものあり、是に過たる者あらじ。曹操いそぎ呼よせ、圖を造て獻らしむるに、蘇越九間の大殿を畫て見せければ、曹操これを見て申けるは、汝が圖甚だ孤意に合へり、恐らくは棟とする材木なきことを。蘇越が曰、これより三十里去て一つの潭あり、躍龍潭と名づく、前に一つの祠ありて其傍に梨の木あり、高さ十丈あまり、之を用て棟梁とせん。曹操大に喜び、了に人夫を遣して彼梨の木を砍しむるに、鋸も鉞も敢て透らずと申ければ、曹操心あやしみ、次の日自ら數百騎を領して直に躍龍の祠に到り、馬より下て之を見るに、其木亭々として華蓋の如く、雲漢を侵して少しも曲らざりければ、急ぎ之を砍んとするに、郷の老人みな諫て申けるは、この木數百年に及んで神の住玉ふ所なり、老たる神龍この潭に藏て、人ことごとく此を禮敬す、大王もし砍玉はば、必

負なりとて又地上に昏絶し玉ひ、三日の間飲食進ず、但痛く哭て涙を流し玉ふばかりなれば、孔明再三諫て曰、關羽不幸にして已に沒す、主上舊日の誓を思玉はば、宜く仇を報じ玉へ、何ゆゑに痛く憂ひ苦んで御身を殘玉へるや。漢中王の曰、われ呉と誓て日月を同うせじ。孔明が曰、呉の孫權主上の兵を起して仇を報じ玉はんことを畏れ、關羽が首を曹操に送る、曹操乃ち王侯の禮を以て厚く葬りたりと沙汰し候。漢中王の曰、これ何の意ぞ。孔明が曰、これは呉の國より禍を魏に移の計なり、魏には人物多きゆゑ、已に其計を悟り、曹操を勸て厚く葬り、主上をして呉を討しめんとす。漢中王の曰、われ今兵を起して罪を呉に問、弟の仇を報ずべし。孔明が曰、甚だ以て然るべからず、今呉は御方をして魏を討しめんことを欲し、魏は又御方をして呉を討しめんことを欲す、是みな心に深き計ありて、虚に乘て取んと謀る者なり、主上只兵を收て動き玉はず、關羽が爲に喪を發して、呉と魏と不和なるを窺ひ、時に乘て伐玉はば、全く大に功を成ん。百官みな一齊に爭ひ諫ければ、漢中王すこし許容し玉ひ、國中大小の將士こと〴〵く孝を掛て喪を發し、漢中王自ら南門にて祭を設、日夜涙を流して號玉ふ。

王急に召よせて問玉へば、乃ち關羽が表を出す。いまだ披き玉はざる所に、又近臣奏して荆州の廖化來れりと申す。漢中王いそぎ對面し玉へば、廖化哭て申けるは、呂蒙すでに荆州を襲ひ取、兵を進めて曹操と前後より攻るゆゑ、關羽しきりに敗て、わづかに殘れる勢を引て麥城に逃こもる、外に救の勢なく、敵大勢にて取卷たれば、今は定めて敗れ玉はん。漢中王大に驚き、若しかる時は我弟滅れん、如何すべきと宣へば、孔明が曰、劉封、孟達いま上庸に在ながら、救を乞ども敢て動ず、其罪誅を容し難し、主上御心を安んじ玉へ、臣自ら一簇の軍馬を引る、行て關羽が急を救はん。漢中王涙を流し、彼もし亡なば孤なんぞ獨り生ん、孤明日自ら行て救ふべしとて急に兵を集め、又閬中へ早馬を打て張飛に是由を告玉ふ。其夜いまだ明ざるに追々早馬きたり、關羽夜臨沮に走て、呉の大將潘璋が內に馬忠と云ものの手に生取れ、了に節を屈せずして父子共に斬れたりと告ければ、漢中王大に叫で地に昏絕し玉ふ。文武扶けて後宮に入奉りければ、半時ばかりして甦り玉ふ。孔明が曰、主上必ず憂玉ふこと勿れ、死生有レ命富貴在レ天、關羽よのつね剛にして自ら矜り、今日この禍を被れり、主上よく萬金の御身を保て、徐々と仇を報じ玉へ。漢中王の曰、われ關羽、張飛と桃園に義を結びし時、誓て生死を同うせんと約せり、今關羽すでに亡ぶ、孤豈ひとり生て富貴を享んや、若この恨を雪ずんば、往日の盟に

漢中王

関羽の霊漢中王の夢魂に入る

て後つゝが無か、夜いたく深て此に來るは必ず事の故あらん、我汝と義骨肉の如し、何ゆゑに隱れんとする。關羽泣て曰、ねがはくは兄早く兵を起して弟の恨を雪玉へ。漢中王又問んとし玉へば、冷風しきりに起て關羽行方しらず失にけり。時に鼓の聲きこえて夢打驚き玉へば、心の内大に怪み、急ぎ前殿に出て孔明を呼よせ、圓を問玉ふに、孔明申けるは、これは主上つねに關羽を思ひ玉ふゆゑ、心惑て夢をなす、何ぞ疑ふこと有んとて、相わかれて退出し、已に中門の外に出ければ、太傅許靖つと出來り、孔明に向て曰、某いま軍師の府中に行て一大事を告んとするに、已に宮中へ出玉ふと聞て早く此所に馳來れり。孔明が曰、いかなる大事かある。許靖が曰、いづくとも知ず、呉の大將呂蒙すでに荊州を襲ひ取て關羽やぶれたりと申し傳へ候。孔明が曰、さること有ん、我夜天文を考るに、將星すでに荊楚の地に落たり、預め關羽が禍すでに及べることを知、但主上の哭き玉はんことを畏て、いまだ敢てこの事を告ず、昨夜夢を見玉ひしも、眞に此に應じたり。時に傍なる屛風の後より漢中王走り出玉ひ、孔明が袖を扯て、關羽すでに禍に逢、軍師なんぞ我を欺玉ふと宣へば、孔明、許靖驚て申けるは、適より申ことは皆實なき虛言なり、主上なんぞ御心を費し玉へる。漢中王の曰、われ關羽と誓て生死を同うす、彼もし死せば孤豈ひとり生のこらんや。時に近臣奏して曰、馬良、伊籍きたれり。漢中

もし親疎を論じ玉ふ時は、晉の文公の子圉に於るが如し。此に依て漢中王了に呉氏を迎て王妃とし、後に二人の男子を産、兄を劉永字は公壽、弟を劉理字は奉孝とぞ申ける。東西兩川の地、民安く國富でみな徳化に懐きける所に、荊州より人來り、呉王孫權しきりに好を結んで一家の親を成んと云ども、關羽怒て從はずと語りければ、孔明申けるは、しかる時は荊州危し、人を遣して關羽と替らしめん。時に又荊州より早馬きたり、大に魏の勢を破りぬと告ければ、心を安んじて喜ぶ所に、關羽が次男關興相續て馳きたり、魏の七軍を滅して于禁を生捉龐徳を殺したりと告ければ、諸官みな勇み喜ぶ。時に又早馬きたり、關羽魏の勢を打やぶり、威風遠近に振て都の内を震動す、萬一呉の國より後を襲はんことを畏れ、烽火臺を構て怠ず用心すと告ければ、漢中王心の内に喜び玉ひ、諸人みな退出して後、ひとり臥房に在て睡玉ひけるが、何とやらん頻に遍身肉顫て心の中安からざりしかば、起て燭を點じ、暫く書を開き見玉ひ、神思昏沈しければ几に伏て居たまふ所に、忽然として一陣の風ふき通り、傍なる燈火滅んとして復明なりければ、頭を擡て見玉ふに、誰とは知ず一人燈火の下に立居たり。漢中王心あやしみ、汝は何者ぞ、夜中に此内へ來れると問玉へども、其人更にもの云ず。漢中王いよ〳〵疑ひ、自ら起て見玉へば、關羽燈火の影に在て往來して隱れ避んとす。漢中王問て曰、わが弟別

いま沈香を以て關羽が軀を造り、大臣の禮を以て厚く葬り、廣くこのことを世に沙汰せば、立徳深く孫權を恨ん、呉と蜀と兵を交て戰ふ時、却て其虚に乘て之を襲ば、力を勞せずして二國を滅さん。曹操心喜び、仲達が意見まことに神算なりとて、遂に呉の使を呼で對面し、匣を開て關羽が首を見るに、面平日の如くなりしかば、われ久しく將軍に見ずと云けるに、髪も髯もこと〴〵く動て、神威なほ生るが如くなりければ、曹操驚て地に倒る。諸人急に救ひ助け、良久うして人心地つき、左右を顧て、關將軍は眞の天神なりと云ければ、呉の使又關羽が神靈を顯し、呂蒙を取殺せる事を語る。曹操いよ〳〵怖れ、牲を設て祭をなし、沈香の木を刻で軀とし、王侯の禮を以て洛陽の南門より外に葬り、大小の百官こと〴〵く之を送り、曹操自ら祀を成て荊王の位を贈り、その後呉の使を回しける。この時漢中王東川より成都に回り、軍民を安んじ玉ひければ、孔明奏して曰、主上の夫人世を去玉ひて、孫權が妹孫夫人は已に呉の國に回れり、人倫の道廢べからず、必ず王妃を迎て其内を正し玉へ、劉焉が嫡子劉瑁が妻は呉氏の女にして、寡を守て家にあり、殊に賢にして顏色又世に超たり、乃ち呉懿が妹なり、昔し一人の相者あり、この女必ず後に貴からんと云り、國中の人こと〴〵く其賢なるを知る、ねがはくは後宮に納て王妃とせん。漢中王の曰、劉瑁は我と同宗なり、理に於て不可ならん。法正が曰、

を割て好を結ばん、曹操その利を貪て若蜀と和睦をなし、共に兵を起しなば、我國累卵よりも危からん、不レ如まづ使を以て關羽が首を曹操に送り、分明に關羽が討れたるは元これ曹操が所爲なりと知しめ玉はば、玄德深く曹操を恨て兵を引て魏を攻べし、魏蜀共に戰ふ時は、御方その虛を窺て中にて計を行はん、然る時は蜀の國をせめ取て、次に曹操を防べし。孫權大に喜び、この計太だ妙なりとて、卽時に使を馳て曹操が方へぞ送りける。此時曹操は已に洛陽へ回りければ、吳の國より使あり、關羽が首を送ると告ければ、かぎりなく喜で曰、關羽すでに亡びたれば、我なんの憂かあらん。時に一人進出て申けるは、これ乃ち吳の國より禍を移の計なり。諸人驚て之を見れば、乃ち司馬懿字は仲達なり。曹操その故を問ば、司馬懿が曰、むかし玄德、關羽、張飛三人、桃花の園にて義を結び、生死を同せんと誓たり、今吳の孫權すでに關羽を殺して、玄德がその讎を報ぜんことを畏れ、首を以て我國に送る、これ玄德に關羽が討れたるは元吳の國の所爲に有ざることを知しめ、兵を起して魏を攻させ、中にて計を行ひ、其虛に乘て或は蜀を取、或は都を取んと謀し者なり、このゆゑに禍を魏に移の計なりと知る、春秋にも、老龜烹不レ爛、移ニ禍於枯桑一と云り、今日正に是に類せり。曹操大に驚て曰、仲達が言まことに當れり、孤いかゞして之を免れん。司馬懿が曰、この事きはめて易し、主上

通俗三國志　卷之三十三

○漢中王大哭關羽

吳主孫權すでに關羽を殺して荊州を平げ、軍民を安んずる所に、張昭建業より來りければ、よび入て對面するに、張昭申けるは、いま君すでに關羽を殺し玉ひぬれば、我國の禍久しからずして來るべし、昔し關羽、張飛桃園にて玄德と誓をなし、同日に生ることを思はず、必ず同日に死んと約せり、今玄德すでに兩川の大軍を領して、殊に孔明が智、張飛、黃忠、馬超、趙雲が勇あり、若關羽父子が殺されたるを聞ば、必ず傾國の兵を起して勢に乘て攻きたらん、玄德もし命を棄て仇を報ぜば、我國いかゞして防ことを得ん。孫權これを聞て怕れ驚き、色を失て申けるは、われ其計を忘れたり、如何してこの禍を免れん。張昭が曰、少しも御心を苦しめ玉ふな、某一つの計あり、玄德が攻來らざるのみならず我國をして磐石よりも安からしめん。孫權が曰、ねがはくは聞ん。張昭が曰、曹操いま百萬の勢を領して都の中に虎威を逞し、久しく漢上の地を取んことを欲す、玄德もし急に關羽が讐を報ぜんことを思はば、必ず曹操に地

し周瑜雄烈世を蓋ひ、膽量人に過て遂に曹操を赤壁に破り、荊州を取んと計りしが、不幸にして早く死したり、魯肅初て孤に見る時、便ち帝王の大略あり、此一つの快なり、後に曹操東に下る時、魯肅、周瑜計を設て之を破る、此二つの快なり、今呂蒙計を定て立どころに荊州を取、周瑜、魯肅にも勝れりとて盃を與ければ、呂蒙盃を取て飲としけるが、俄に盃を地に拋すて、手に孫權が胷を摑で大音聲を揚、碧眼の小兒紫髯の鼠輩、却て吾を知れりやと罵りければ、諸人驚て起さわぐ所に呂蒙了に孫權を推のけ、大に歩で上座に進み、眼を怒らし眉を張、われ黃巾を破てより天下に縱横すること三十年、一旦汝が詐の計に落さる、我生て汝が肉を啖こと能ず、死して必ず呂賊が魂を追ん、我は乃ち漢の壽亭侯關羽なりと呼はりければ、孫權怕れ驚き、諸將と共に地に拜す。時に呂蒙は七竅より血迸て立どころに死ければ、見る人みな身の毛よだちて怖あへり。孫權乃ち棺槨を備て呂蒙が屍を厚く葬り、南郡の太守潺陵侯の爵を贈り、其子呂霸を憐で父の職を襲しむ。呂蒙死する年四十二歲、時に建安二十四年十二月七日なり。

頭來と呼はる。普靜仰で之を見れば、關羽赤兎馬に乘て靑龍刀を提げ、左に關平右に周倉みな雲の中にぞ立たりける。普靜乃ち手に持たる拂子にて菴の戸を擊、雲長安在と云ければ、關羽が魂魄頓に旨を悟り、雲を離て馬より下、叉手して庵の前に立て曰、吾師は何人ぞ、願くは淸號を聞ん。普靜答て曰、むかし汜水關の鎭國寺にて對面せしが、今日なにとて普靜を知ざる。關羽が曰、某愚なりと云どもねがはくは敎を聞ん。普靜答て曰、昔非今是、一切論ずることを休よ、只將軍の行ところを以て云ん、昔し白馬の戰ひに、顏良いまだ將軍と鋒を交ざるに忽然として殺し玉へり、此人九泉の下に於て安んぞ恨を抱ざらんや、今日呂蒙いつはりの計を以て將軍を害す、之を以て計較すべし、將軍なんぞ心を惑し玉ふぞ。是に於て關羽庵の中に入、普靜を拜して師とし、後往々に來りければ、鄕人その德を感じて山の頂に庿を建、四時必ず祭を致す。吳主孫權は關羽父子を誅して後、酒宴を設て諸の將士を集むるに、呂蒙いまだ來らざりければ、今荆州を得たるは皆呂蒙が計なりとて、人を遣し招しかば、呂蒙乃ち出きたる。孫權自ら出むかへ、其背を撫て申けるは、われ久く荆州を得ず、今これを得て心足れり、偏に是汝が功なり。呂蒙が曰、一つには君の洪福、二つには諸大將の武勇に依り、某なんぞ云に足ん。孫權乃ち呂蒙に上座を讓ければ、再三固辭して其次に坐す。孫權盃を擧て曰、昔

関羽
周倉
関平

晉靜

に大宴、馬に乘時は金を與へ、馬より下る時は銀を與へ、壽亭侯の爵に封じて美女十人を賜ひしかども了に留らず、其後五關に大將を斬たる時も、曹操その才を惜で殺ことを得ず、却て今その禍を受、都を遷して鋒を避んと欲す、況んや君は深き讐なり、狼の子は養べからず、後必ず大なる害を成ん。孫權首を低て、汝が言しかり、推出せと云ければ、武士關羽を引出して關平と共に首を斬、時に建安二十四年十月中旬なり。孫權乃ち關羽が乘し馬は赤兎とて天下の駿足なれば、了に馬忠に賜ひ、青龍の偃月刀を潘璋に賜けるが、其馬この日より草料を食ず、數日ありて死けることこそ不思議なれ。麥城には王甫俄に骨顫き肉驚しかば周倉と相議し、昨夜の夢に關將軍全身血に汚て某が前に立玉へり、急に問んとする時、忽然として驚き覺たり、如何なり玉ふやらんと云ところに、呉の勢關羽父子の首を以て早く城を開けと呼はると告ければ、王甫大に驚き、周倉と矢倉に上て之を望み、自ら矢倉より落て死ければ、周倉も自ら首を刎、麥城つひに呉に屬す。この比不思議なりしは、荊州の當陽縣と云ところに玉泉山と云る一つの山あり。山の上に普靜と云る禪僧一人草の庵を結び居たり。此は元汜水關鎭國寺の長老にして、關羽と舊き友なりしが、天下を雲遊してこの山の閑なるを愛し、每日坐禪參道して、ある夜月白く風淸き折境、心に妄想を拂て寂々として坐しければ、忽ち空中に人聲ありて、還我

を追て進む所に、又四方の伏勢一度に起りければ、關羽馬を飛して山路に走る。時に關平跡より來り、趙累すでに亂軍の中に討れたりと告ければ、關羽哭き哀み、關平を後陣とし、自ら先に進んで路を開くに、殘る兵十餘人に成にけり。已に進んで決石の山路を通に、蘆葭しげりて樹木枝を雑へ、時すでに五更の盡るに及んで、忽然として喊を咄と造り、兩方の伏勢ことごとく起て、長き鎌を指のべ熊手に掛て、關羽を馬より倒に拽落し、潘璋が手下に馬忠と云る大將群り蒐りて、了に繩をぞ掛たりける。關平この由を聞て、急に來り救はんとすれば、後より朱然、潘璋大勢にて取圍。關平只一人なれば、力疲て父子共に生取れけり。吳主孫權この由を聞、自ら諸將を引て來りける時、夜も若々と明て、馬忠乃ち關羽を引て出きたる。孫權申けるは、われ久しく將軍の德を慕て一家の好を結んと欲す、何ゆゑに從ひ玉はざる、將軍つねに天下に敵なしと思ひ玉ひしが、今日何とて我に生取れ玉へる、今日よりして乃ち我に降らんや。關羽聲を擧て罵り、碧眼の小兒紫髯の鼠輩、よく我一言をきけ、吾劉皇叔と義を結んで天下の逆賊を除んとする所に、今日悞て奸計に中れり、我死して敵を滅さんと欲す、豈汝等に降らんやと云ければ、孫權左右を顧て曰、關羽は是世の英雄、われ深く之を惜む、今禮を厚して宥んと欲するは如何ん。主簿左咸が曰、無用々々、むかし曹操この人を得て三日に小宴五日

に上て望み見るに、北なる小路に疲れ弱たる勢、旗の色とゝのはずして見えければ、乃ち左右に問て曰、これより小路の方はいづくへか通ずる。一人答て曰、路狹く險阻に候へども蜀の國へ通るべし。關羽が曰、われ今宵この路より走り去ん。王甫諫て曰、小路には敵の伏勢あらん、大路より走り玉へ。關羽が曰、わづかの伏勢ありとも、我なんの怕か有んとて兵を揃ければ、王甫哀み哭て曰、將軍路に於て能々御身を保ち玉へ、某手下の勢百餘人と命を棄てこの城を守り、微塵になるとも敵に降じ、望らくは將軍速に來て救玉へ。關羽も大に哭て相わかれ、關平、趙累と二百餘騎を從へて北の門より打て出、吳の勢を四角八方へ追散しければ、皆路を開て通しける。關羽眞先に刀を提て、初更の比すでに三十里あまり來る所に、山際より鼓の聲して火の光天を焦し、吳の大將朱然五千餘騎にて討て出、關羽いづくへか逃る、早々に降れと呼はりければ、關羽刀を舞して戰はんとするに、朱然怕れて逃わしる。關羽勢ひに乘て追かくる所に、忽然として鼓の聲響き、四方の伏勢こと〴〵く起る。關羽戰ひを好ず、臨沮の小路に向て走りければ、朱然後より攻かゝりて、傷を被り倒れ死する者五六十人。關羽馬を飛して五六里ばかり走りければ、又一手の勢討て出、吳の大將潘璋四方より火を掛て眞先に馬を出す。關羽眼を怒らし刀を舞して蒐りければ、潘璋戰ひ三合ならざるに馬を囘して逃わしる。關羽これ

ひ天を翔の翼ありとも、吾羅を飛でも出ること能まじ、某すでに計を定め置り、麥城の四方みな大なる路あり、推量するに關羽小勢なれば、ひろき路より走ず、北の方に細く險き小路あり、必ずこれより走べし、朱然に精兵五千餘騎を授け麥城の北二十里に伏て、敵きたらば共に戰を交ず、後より追討にすべし、敵必ず戰はんとする心なく、只われ先にと臨沮を指て走るべし、預め潘璋に精兵五百人を付て臨沮の山路に伏おかば、事必ず諧はん、其外の路條は諸將を分て固く守らせ、只北の門ばかりに弱り疲たる兵を置ば、關羽必ずこの門より走らん。孫權又呂範に命じて占はしむるに、呂範又卦を設て曰、この卦敵人西北に向て走る、今夜の亥の刻必ず擒にせらるべし。孫權大に喜び、遂に朱然、潘璋に二手の勢を付て向はしむ。この時麥城には關羽手下の勢を計るに三百人に過ざりけり。殊更兵糧につまり、矢種みな射盡して守るべき樣なかりければ、いかゞせんと議するに、夜に入て城外より吳の勢名を呼で招きしかば、壁をのり踰て出る者多し。關羽計きはまり力盡、王甫に向て申けるは、我悔らくは御邊の諫を用ひずして今日かゝる禍に及ぶ、今いかゞして計を成ん。王甫淚を流して曰、今日の急なる、太公望が再び出るとも計の施べきなし。趙累が曰、救の來らざるは劉封、孟達兵を按て來らざる也、早く此城を打すて、蜀に入て再び兵を整へ、この恨を雪玉へ。關羽げにもとて矢倉

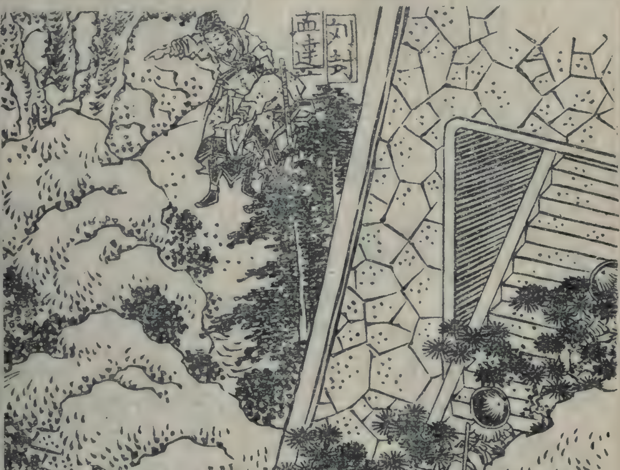
冥土に皈る、世を弃て忠に死し、臣としては孝に死し、子としては快く討死せん、城もし破れば我なんの怕か有ん、玉は砕ても其白を改めず、竹は焚ても其節を毀ず、人は死しても名を失はず、汝再び舌を揺こと勿れ、吾城を出て孫權と快く戰はん。諸葛瑾が曰、わが君孫權ひとへに將軍と一家の好を結び、力を併て曹操を破らんと欲す、將軍いかなれば迷を執て自滅を好玉ふぞ。其詞いまだ畢ざるに、關平劍を抜て走り來れば、關羽急に止めて曰、彼が弟孔明蜀に在て漢中王に事ふ、今もし殺ば其義を傷ん、早く逐出せとて亂棒に打出しければ、諸葛瑾大に慙愧し、首を抱て出にけり。

○關羽玉泉山顯レ神

諸葛瑾城を出て孫權に見え、關羽心鐵石の如にして説べからずと語りければ、孫權が曰、これ眞に忠義の人なり、然る時は如何せん。呂範すゝみ出て曰、某ねがはくは其吉凶を占はん。孫權しかるべしと同じければ、呂範簭を設、三度揲て占に、乃ち地水師の卦に當り、更に玄武の臨應あり、敵人遠く奔べしと申ければ、孫權喜び呂蒙に問て申けるは、敵人遠く奔の卦を得たり、汝いかなる計を以て擒にせん。呂蒙笑て曰、卦の象よく某が意に合へり、關羽たと

の日廖化を呼で叶がたき由を申ければ、廖化大に驚き頭を以て地を叩て曰、もし將軍救玉はざる時は關將軍必ず亡ん。劉封が曰、一杯之水安能救車薪之火と云り、量にこの處の勢を起とも、爭か吳魏の大軍に當らんや、御邊早く外に救を求玉へ。廖化痛く慟て再三求ければ、劉封、孟達虛病して更に出ず。廖化事の諧ざるを知てすべき樣なかりしかば、漢中王に救を求んと思ひ、馬に打のり匐て城を出、成都を望で馳たりける。麥城には關羽日夜救の來るを待けるが、待期過てその沙汰も無りしかば、諸人みな色を失ひ、殘る勢わづかに五六百人に過ず、これも半は傷を帶たるに、城中に粮絶て人馬共に疲果ければ、關羽乃ち趙累に問て曰、いま事急なり、如何せん。趙累が曰、只宜く固く守り玉へ。時に城外より大音擧て、矢を放こと勿れ、關將軍に逢て申べきことありと呼はりければ、關羽よび入て之を見るに、乃ち諸葛瑾なり。關羽問て曰、御邊なにとて此に來れる。諸葛瑾が曰、いま主人の命を受、こゝに來て將軍に諭す、凡そ人の世にある、須く時務を知べし、今勢を以て之を說んに、將軍の統玉へる漢上の九郡こと〴〵く吳に屬して、只この小城わづかに殘り、內に兵粮なく外に援の勢なし、危こと旦夕にあり、將軍早く吳に降り、再び荊州を鎭て一門を扶け玉へ。關羽色を變じて申けるは、われは本解梁の武夫、漢中王と誓を結んで、恩を受ること身に餘れり、豈義に背て敵に降らんや、

廖化
劉封孟達が
関羽を
救ざるを
罵て
成都へ
赴く
廖化


刘封
孟達

を起して其急を救玉へ、若遅時は關將軍必ず亡玉はん。劉封が曰、御邊しばらく休玉へ、吾相議して兵を起さん。廖化乃ち退きければ、劉封いそぎ孟達を呼で申けるは、いま某が叔父麥城に圍る、如何して救ふべき。孟達が曰、近ごろ吳の勢三四十萬、荊州の九郡を取て只わづかなる麥城ばかり殘れり、又聞曹操は自ら四五十萬の勢を率し、江漢に縱横して勢ひ泰山の如なりと、推量するに我等この山城の勢を以て吳魏の猛勢と戰んこと、羊を驅て虎の穴に入るが如し。劉封が曰、われも事の叶はざるを知と云ども、關羽は是わが叔父なり、安んぞ坐ら視るに忍んや。孟達笑て曰、御邊は關羽を叔父なりとし玉へども、關羽は御邊を芥の如す、昔し漢中王位に卽玉ふ時、太子を立んとて孔明に問玉へば、孔明これは一家の事也、關羽、張飛に問玉へと申す、此ゆゑに荊州へ書簡を遣していかゞせんと問玉ふに、關羽怒て曰、嫡子を立て庶子を立ざるは、古今の定れる理なり、何ぞ人に問こと有ん、況や劉封は實の骨肉にも有ず、乃ち螟蛉の子なり、只遠く山中の城を守せて、禍を眞の子に遺玉ふなと答たり、此を以て見る時は、御邊を芥とするに有ずや、天下こと〴〵く之を知、なにとて御邊は隱玉ふぞ。劉封が曰、御邊の言好と云ども、今廖化來て救を求む、いかゞ答て回らしめん。孟達が曰、但山中の小城初て攻取たることなれば、人の心いまだ附ず、輕々しく救がたしと答玉へ。劉封これに從ひ、次

聲を揚、關平、廖化二手に分れて討て入、圍を破て了に關羽を救ひ出せば、荊州の兵親を呼子を呼聲たえず、盡く落ゆきけり。是乃ち呂蒙が成る計にして、關羽が兵のこり少に成しかば、關平申けるは、諸軍こと〴〵く心亂たり、早く城に楯籠て援の勢の來るを待ん。關羽これに從ひ、近き處に麥城と云る古き城ありければ、兵を引て內に入、四方を固く守て共に計を議するに、關平が曰、これより上庸の城へは程ちかし、早く使を馳て劉封、孟達に救を求玉へ、此勢もし來り救ば、姑く蜀の勢の上るを待て、再び荊州を攻取んとて相議する所に、忽ち城外に鼓の聲喊の聲天地を動しければ、關羽矢倉に上て之を見るに、四方八面吳の勢鐵桶の如く打圍で、人強馬壯に隊伍齊々たりければ、關羽左右を顧て曰、たれかこの圍を出て上庸に到ん。廖化が曰、某ねがはくは行ん。關羽が曰、但恐らくはこの圍を出ること能まじ。廖化が曰、某誓て死すとも皈じ、何ぞ圍を出ざらん。關羽乃ち書簡を封じて廖化が衣の內に藏め門を開て送り出す所に、吳の大將丁奉兵を引て遮んとするに、關平城を出て散々に蒐やぶる。廖化この扮に圍を出、上庸を指て馳て行。この時上庸の城には劉封、孟達二人近邊に威を振ひ、大勢を集て居たる所に、廖化きたれりと報じければ、迎へ入て對面するに、廖化が曰、關將軍戰ひ敗て事すでに急なり、今麥城に圍れて吳の大軍日夜に攻、ねがはくは二將軍速に上庸の勢

たりける。諸の大將士卒みな使に逢て故郷の樣を問に、使前の趣を語しかば、諸人みな喜て戰はんとする心なし。關羽下知を傳へ、荊州に攻入んとて兵を進めければ、いつの間にか落たりけん殘り少に成にけり。關羽これを見て深く呂蒙を恨むる所に、忽然として喊を咄と造り、一彪の軍馬路を遮て、眞先に進は吳の大將蔣欽なり。槍を撚て馬を出し、關羽早く降れと呼はりければ、關羽いよ〳〵怒り、我は乃ち漢の大將、豈逆賊に降んやと罵、刀を舞して討てかかり、戰ひ三合ならざるに蔣欽敗て走りければ、關羽二十里あまり追ところに、又谷の內に鼓を打て韓當が一軍左より出、周泰が一軍右より出、喊の聲大に響ければ、關羽深入しぬと思ひ、急に軍兵を引て二三里ばかり退きける所に、南に當て山の上に白き旗を指あげ、荊州の士人こと〴〵く吳に降ると呼はりければ、關羽怒て山の上へ攻のぼらんとするに、忽然として二手の勢討て出、左に丁奉右に徐盛、喊の聲地を動し、鼓角の響天を崩して、關羽を眞中に取こめ餘さじと攻ければ、關羽が勢討るゝ者數を知ず。日も漸く暮に及で、荊州の兵共子は親を尋ね兄は弟を喚、四方遠近喊の聲絕ざりしかば、軍心こと〴〵く變じて、聲に應じて走り去。關羽怒て止れども住ず、手勢次第に減じて三百人に成ければ、吳の大軍これを圍で其密こと鐵桶の如し。關羽力疲て出ること能はず、已に危なりける所に、夜の三更に至て東より喊の

ぶは是盟に負なり、將軍暫く此處に陣を取、使を以て呂蒙に書簡を送り、如何答るぞ見玉へと云ければ、關羽これに從ひ、卽時に書簡を封じて荊州へ使を遣す。この時荊州には呂蒙いよいよ民を懷け、關羽に隨て戰に出たる者共の家には、毎月衣糧を贈て憐を垂、もし病ものあれば藥を飮せなんどして恩を施しければ、人民その德を感じて服せずと云ものなし。時に關羽が使きたれりと報じければ、呂蒙城を出て之を迎へ、馬を雙て內に入。城中の人民使の來れる由を聞、軍に出し者共の其消息を聞んとて、皆街に立て之を見る。使內に入禮了て關羽が書簡を出しければ、呂蒙披き見て申けるは、われ昔し關將軍と好を結しかども、今日の事は國家の命なり、一人の私にあらず、使もし御囘あらば、この事よろしく傳玉へとて酒宴を設て持成、金帛を與て囘しければ、人民みな街に立て、わが子は無事なりや、わが弟は恙なきやと爭ひ問て、文を傳る者もあり、吳主の恩に依て衣食の足ざる者も無、早く囘り來て一門に對面せよなんど言傳するもあり。使囘りて關羽に見え、呂蒙書簡を披き見て更に許容の色なく、今日の事は君の命なり、某が罪に非と申し、將軍の御一族は云に及ばず、諸將士卒の妻子に至るまで盡く恙なく、衣糧を與て憐み置り、必ず御心を苦玉ふなと語りければ、關羽怒て曰、これ皆呂蒙が計なり、われ生て奴を殺こと能はずんば、死して必ず讐を報ぜんとて、齒咬をしてぞ立

で葬しめ、自ら四冢の陣に到て遍く徐晃が戦ひし所を望み、荊州の兵鹿垣固く結たる中へ徐晃深く討て入、全くその功を得たること、孤三十餘年軍を經れども中々及ぶこと能はず、古人の善兵を用ふる者も、いまだ長驅て逕に敵の圍に入もの有ず、夫樊城の圍は古の莒即墨に過たり、徐晃が功は孫武、穰苴にも超たりと云て、摩坡と云ところに陣を取ければ、徐晃兵を收て回り來る。曹操自ら出て之を見るに、隊伍整々として一動一靜こと〴〵く法ありければ、掌を打て笑ひ、徐晃まことに周亞夫が風ありとて、酒宴を設て慶を成、自ら盃を取て徐晃に勸め、襄陽、樊城を全するは皆汝が功なりと云ければ、徐晃拜謝して曰、敵人いまだ滅ず、安ぞ功と云ん、再び兵を引て關羽が首を取ん。曹操喜で徐晃を平南將軍に封じ、夏侯尙と共に襄陽を守て關羽を攻させ、自ら摩披に大軍を屯して荊州の消息を聞。

○關羽夜走麥城

去ほどに關羽敗軍を引て荊州の路に出、進退已に谷ければ、趙累に問て曰、前に呉の勢あり後に魏の勢あり、我その中に在て外に救の兵なし、いかなる計をか用べき。趙累が曰、呂蒙陸口に在し時、常に書簡を送て將軍と好を結び、共に曹操を討んと盟へり、今又魏と好を結

を聞て大に怒り、恨氣天を衝て瘡の口忽ちに裂、昏絶して地に倒ければ、諸將たすけ起して良有て人心地付たり。關羽乃ち司馬王甫を顧て申けるは、悔らくは御邊の諫を聽ずして、今この禍を引出せり、江に沿て烽火臺を構おきしが、何ゆゑに烟を擧て報ぜざる。知ものあり、答へて曰、呂蒙兵を商人に出立せ、大勢を船の底に藏して、先烽火臺を守る者を生取しゆゑ、烟を擧るに暇なく、一夜の中に盡く奪はれたり。關羽嘆息して曰、われ豎子の計に中れり、何の面目ありて兄に見んや。都督趙累が曰、いま事急なり、先人を成都へ遣して救を求め、此より陸を經て荊州を取玉へ。關羽これに從ひ、馬良、伊籍を使として成都へ遣し、自ら兵を引て荊州に向ふ。此時樊城には關羽が退きたるを見て網を出たる鳥の如く喜び、曹仁軍民を撫安んじ、諸將を集て關羽を追んと議しければ、司馬趙儼と云もの諫て曰、昔日孫權關羽と相爭時、御方より其虛に乘て攻んことを恐れ、暫く交を成て好を結び、釁を窺て利鈍を觀る、今關羽敗して散々に走ると云ども、之を放て孫權が害を殘し玉へ、若いま追掛て攻玉ふとも、關羽を討ほどの事は能はずして、却て孫權が禍を御方の禍となさん、將軍よく慮り玉へ。曹仁げにもと同して了に追ず。諸將を引て城を出、曹操に見えて罪を請ければ、曹操が曰、これ乃ち天數なり、汝等が罪にあらずとて、龐德が屍を尋て自ら祭を設け、棺槨を備て都に送り、地を擇

共に交を結で、多く教を蒙ことを得、いまに至るまで恩を忘ず、將軍の英名天下に振て、四海ことぐ〜く歎服す、今幸に對面して其喜に勝ず。關羽が曰、われ御邊と交を結ぶこと尋常ならざりしに、何とて吾子を度々やぶりて苦め玉ふぞ。徐晃これを聞て左右を顧み大音聲を揚て、もし關羽が首を取たる者あらば千金を恩賞せんと呼はりければ、關羽驚て問て曰、徐晃いかなれば浩ることを云玉ふぞ。徐晃が曰、これ君の命を承て此の如し、某が私にあらずとて、斧を打振馬を飛して討て蒐る。關羽大に怒り、刀を舞して二人八十餘合ぞ戰うたる。關羽この時矢瘡全く愈ずして、右の臂力少く見えければ、關平その失あらんことを畏れ、金を鳴して兵を收ける所に、忽然として四方に喊の聲を擧、曹仁兵を引て樊城より討て出、徐晃と夾で攻ければ、關羽が勢さわぎ亂れ、急に襄江の上流を指て奔る所に、呂常一軍を引て路を橫ぎり、魏の大勢後より追蒐しかば、關羽が勢水に溺て死する者數を知ず、我先にと江を渡て襄陽まで退きければ、早馬追々馳きたり、荊州すでに呉の大將呂蒙に奪はれ、妻子一族ことぐ〜く生取れたりと報ず。關羽初て此由を聞、こは如何にと驚て公安の城へ退かんとすれば、又早馬きたり、公安を守る傅士仁城を開て呉に降れりと報ず。關羽色を失ひ牙を咬で立たる所に、兵粮を運ぶ者共走り來り、傅士仁南郡に在て使命を殺し麋芳を引て盡く呉に降れりと報ず。關羽これ

八面魏の勢潮の如に競ひ起り、喊を造り鼓を打て追かけしかば、關平も廖化も之を支ること能はず、皆四冢の陣を指て逃る所に、遠く火の光見ければ、急に馬を飛せて陣中へ入んとするに、盡く魏の勢の旗を立て敵すでに入易りたれば、關平、廖化みな膽魂を失ひ、樊城の大路に掛て走る所に、一手の勢路を遮り、徐晃眞先に馬を出す。關平、廖化力を振て散々に戰ひ、圍を破て本陣へ逃かへり、父に對面して、今徐晃すでに偃城、四冢の陣を破り、曹操自ら大軍を引て十三路に分て此處へ攻きたる、又いづくともなく荊州すでに吳の孫權に襲ひ取れたりと沙汰して、軍中みな色を失ひ候と語りければ、關羽叱て申けるは、これ敵を疑はしむるの計なり、呂蒙病危して小兒陸遜これに代る、我なんの慮ることか有ん、荊州自ら泰山よりも安かるべし。時に徐晃兵を引て推よせたりと報じければ、關羽馬を備て出んとす。關平諫て曰、父の瘡いまだ痊ず、かる〴〵しく出玉ふこと勿れ。關羽怒て曰、われ徐晃と舊き友たり、能かれが手雙を知、もし早く退かずんば一刀に斬て棄んとて、了に諸人の諫を用ひず、刀を提て出ければ、魏の勢これを見て盡く懼れ驚く。關羽聲を擧て徐晃はいづくに在と呼はりければ、魏の陣中より徐晃自ら馬を出し、十餘人の猛將をその後に排列す。徐晃馬上より禮を施して曰、一別已來すでに數年を經たれば、想ざるに將軍の鬢髮こと〴〵く雪の如し、昔し壯年なりし時は

たり、然るに猶この處に留りて物に狂かと呼はりければ、關平きゝもあへず刀を輪して打てかかる。時に前後より喊を造て城中火焔熾なりしかば、關平戰はんとするに力なく、直ちに四冢の陣に走り、廖化が勢と一手になる。廖化迎て申けるは、今日いづくよりともなく荊州すでに吳の孫權に奪はれたりと沙汰して、諸軍みな心驚き、戰はんとする氣色なし。關平が曰、これ皆人を疑はしむるの計なり、再び云ものは立どころに首を刎ん。時に早馬急を告て、北の方第一の陣屋を徐晃大勢にて攻候と報じければ、關平が曰、もし第一の陣屋を破られなば諸處の陣こと〴〵く破るべし、この處は沔水前に流たれば敵必ず來まじ、我自ら廖化と共に行て徐晃を討ん。廖化げにもと同じて手下の大將に申けるは、汝等よく〳〵此陣を守り、敵もし來らば火を擧て相圖をなせ、我急に囘り來ん。諸將みな曰、四冢の陣は鹿垣甚だ堅固にして鳥も翔がたし、何ぞ敵の來ること有ん。是に於て關平、廖化こと〴〵く兵を率して第一の陣屋に來り見れば、魏の勢みな小山の上に陣を取。關平が曰、徐晃が陣の取樣地の利を得ず、今宵ひそかに夜討すべし。廖化が曰、將軍兵を引て自ら行玉へ、某はこの陣を固く守らん。關平これに從ひ自ら一軍を引て魏の陣へ討入けるに、敵一人も見ざりければ、計なりと驚て急に出んとする時、左より徐商右より呂建喊を造て打て出たり。關平大に亂れて本陣に囘らんとすれば、四方

樊城の圍解て全く功を成就せん、若荊州の破れたるを曾て關羽に知せずんば、御方利を失て孫權思のまゝに志を得べし。曹操これを聞て大に喜び、先徐晃が方へ命を傳て早く攻かゝれと下知をなし、自ら大軍を引て都を出、雒陽の南なる陽陵坡に陣を取。この時徐晃は五萬の勢を率し、陣屋を構て居たりけるが、忽ち魏王の勅使ありと報じければ、急に出て迎へ入、その故を問に、使申けるは、魏王自ら大軍を起して已に雒陽を打立、先將軍に命じて早く關羽と戰はしめ玉ふ。時に早馬來り關平兵を偃城に屯し、廖化兵を四家に屯し、前後十二箇處に陣屋を造り、連々として絶ず、次第に攻近付候と告ければ、徐晃乃ち徐商、呂建二人に大將の旗を指せて正道より進せ、自ら精兵五百餘騎を擇で沔水に沿ひ、偃城の後へぞ廻りける。去ほどに關平は父の矢瘡漸く痊たるを見て、偃城まで進みける所に、只今魏の兵よせ來て大將徐晃が旗を指あげ候と告ければ、自ら三千餘騎を引て城を出、兩軍相對して鼓の聲天に震ひ、關平眞先に馬を出せば、魏の陣より徐商槍を撚て蒐出、戰ひ三合ならざるに大に敗て逃わしる。次に呂建馬を出し、五六合戰うて散々に走りければ、關平勝にのりて之を追こと二十餘里。時に跡より人來て城中に火を掛て候と呼はりければ、關平驚き、急に偃城を指て引回ところに、一彪の軍馬路を遮り、徐晃眞先に馬を躍せ、大音聲を揚て、關平知ずや、荊州すでに吳の孫權に襲ひ取れ

○關羽大戰徐晃

孫權すでに荊州を襲ひ取、都へ使を上せて曹操に書簡を送り、われ荊州を攻取、直ちに關羽が後に逼らんとす、早く魏の兵を起してその前を攻玉へ、前後より夾んで攻ば關羽必ず擒と成ん、荊州の破れたることを必ず關羽に知しめ玉ふな、若この事を知せなば、關羽必ず備を成んと云送りければ、曹操文武の大將を集て此事いかゞと評議するに、一人すゝみ出て曰、主上もし孫權が申すに從ひ玉ふ時は、樊城必ず破るべし。諸人之を見るに濟陰定陶の人に、董昭字は公仁と云ものなりければ、曹操が曰、汝が意見いかなる故ぞ。董昭が曰、軍を用ふるの法は人々の便することあり、今樊城久しく關羽に攻られて、其危こと累卵の如し、城中の者共日夜頸を延て救の來るを待、もし孫權が望に任て荊州の破れたることを知しめずんば、關羽いよ〳〵城を攻ん、樊城もし破れなば、御方兵を損ひ勢を失て、却て孫權に利を得られ、荊州の勢盛に震て、後孫權を攻玉ふ時輕々しく圖難からん、不如救の勢を指むけて樊城の急を救ひ、荊州の破れたる由を披露して關羽に知しめ玉へ、關羽もし之を聞ば、前へも進こと能はず後へも退こと能はず、心の內迷を生じて、速に樊城を打すて荊州に立かへるべし、其時後より追掛玉ひなば、

る糜芳は汝と深く友たりと聞り、若ゆいて伴ひ來らば、孤必ず汝と共に厚く用ひん。傅士仁乃ち十騎あまりを引て南郡に到りければ、糜芳迎入て問て曰、なに故に來り玉へる。傅士仁が曰、われ忠義の心無にあらね共、勢危く力盡てすでに吳に降參せり。糜芳が曰、われ久しく漢中王の厚恩を受、いづくんぞ背に忍ん。傅士仁が曰、關羽軍を出す時深く吾等二人を恨みたり、若戰に勝て回りなば、必ず罪を正すべし。糜芳が曰、われ等兄弟久しく漢中王の大恩を受、いま爭か敵に降らんとて、猶豫して更に決せざる所に、忽ち關羽が使きたり、陣中いま兵粮に事を缺、早く南郡公安より白米十萬石を運び送れ、若一日遲き時は四十枚罰し、二日遲き時は八十枚罰し、三日遲き時は首を刎んと云ければ、糜芳大に驚て曰、いま荊州すでに破れたり、十萬石の米をいかゞして送るべき。傅士仁急に劍を拔て其使を斬ければ、糜芳あわてて問て曰、なにゆゑに使を斬玉へる。傅士仁が曰、關羽が意われを殺さん爲にこの事を云送れり、安んぞ手を束て犬死をせん、若早く降り玉はずんば必ず關羽に殺され玉ふべし。糜芳已ことを得ず、吳に降らんと云て議する所に、喊の聲地を動して呂蒙が大軍城を圍ければ、糜芳怕れ驚き、城を出て降人となる。呂蒙引て孫權に見ければ、孫權あつく恩賞を賜ひ、軍民を撫安じて上下ことごとく欣び樂む。

み出て曰、弓を張矢を放ことを用ず、三寸の舌を動して傅士仁を降らしめん。諸人これを見れば、乃ち會稽餘姚の人に、虞翻字は仲翔なり。孫權が曰、いかなる計を用て降しむべき。虞翻が曰、某幼より傅士仁と友たり、もし利害を說ば必ず降らん。孫權しかるべしとて虞翻に五百餘騎を授て公安に向はしむ。この時傅士仁は荊州の破れたるを聞て兵を揃て居たる所に、忽ち馬烟を舉て大勢の來るを望み、門を閉て待ければ、虞翻書簡を箭に挿で城中へ射入しむ。傅士仁これを得て開き見るに、書に曰、

切聞、明者防禍于未萠、智者圖患于將來、知得知失可謂賢哲、知存知亡可識吉凶。大軍之行斥堠不及舉火、此非天命也、必有內應也。爲將不諳此理、獨據孤城而不早降、是欲毀宗滅祀爲天下之譏笑也。荊州已失、生路一塞、度其地勢、將軍在吾軍舌上耳、奔走不得免焉。切爲故人慮、願熟思之、無自後悔。故人虞翻拜書。

傅士仁これを見て、關羽が往日われを殺んと云しことを怨み思て、了に門を開て虞翻を招き、共に故舊の情を訴へ、荊州に來て降參しければ、孫權大に喜び、初の如く公安の城を守しむ。呂蒙ひそかに孫權に告て曰、關羽いまだ降參せず、久うして必ず變あらん、不如傅士仁を厚く賞し、彼に命じて糜芳を招て降しめ玉へ。孫權これに從ひ、傅士仁を召て申けるは、南郡を守

ふ。呂蒙乃ち降參の者を故の如く薦用ひ、關羽が妻子一族をねんごろに持あつかひ、別に宅を構て養おきければ、上下大に喜ぶ。或日俄に雨ふりければ、呂蒙自ら五六騎を從へて四方の門を巡見るに、一人の兵百姓の簦笠を取て鎧を蓋ものあり。呂蒙いづくの者ぞと問に、乃ち同鄕の者なり。呂蒙が曰、われ平生同鄕同姓の人を殺じと誓ひしが、已に法を出して、妄に百姓の物を取ば必ず罪を正さんと觸たり、汝いま罪を犯す、我と同鄕の者なれども、我往日の誓は私なり、今日の法は公務なり、安んぞ己が私の誓を以て公なる法を亂るべきやとて、引出して斬せければ、其人淚を流して告て曰、これは私の鎧にあらず、奉行所より預しゆゑ俄に大雨ふりて濕んことを畏れ、笠を取て蓋たり、元私の用にあらず、將軍ねがはくは同鄕の情を以て憐を垂玉へ。呂蒙も淚を流して曰、われ固に汝が私の爲にあらざるを知、然れども百姓の物を取べからずと法を出したれば、其罪を恕し難しとて、了に首を斬落し、獄門に梟て諸人に示し、屍を厚く葬らしむ。此に因て荊州の人民その德を感じ、三軍震ひ怖て路に遺たるを拾はず。時に吳主孫權諸將を引て來りければ、呂蒙出むかへて城に入しむ。孫權乃ち降將潘濬を用て治中に封じ、獄中より于禁を取出して首枷を解ゆるし、あつく軍民を賞して、呂蒙、陸遜に問て申けるは、今公安を守る傅士仁、南郡を守る糜芳、いかなる計を以て破るべき。時に一人すゝ

に向はせければ、荊州の番兵問て曰、これは何れよりの船ぞ。呉の兵答て曰、我等はみな商人なるが、風に放たれて暫く此にあり。番の者共實なりとして少しも疑はざりければ、呉の兵六七人岸に上り、私に財物を番の者に與てその心を結び、夜の二更に至りて船底より精兵を出し、先烽火臺を守る者共をひし／＼と生取、こと／＼く船の中に捉置て一人をも殺さず。大軍を驅て大に進むに、夜中の事なれば知人さらに無りけり。呂蒙生取を解ゆるし、衣食を與て憐ければ、皆恩を感じて喜あへり。乃ち密に荊州を取の計を問けるに、みな答て曰、某等深く將軍の恩を被る、ねがはくは荊州を取の計を獻て其德に報ずべし。呂蒙が曰、もし荊州を取ば厚く汝等に恩賞を與へん。降參の者共申けるは、某等みな荊州の城下に到り、事の故ありとて欺て門を開かせ、火を放て相圖を成ん。呂蒙しかるべしとて兵を伏て待ければ、降參の者共こと／＼く城下に到り、門を開き玉へ事の急ありと呼りけるに、門を守る者共御方の勢なりと見て大に門を打開ければ、俄に火の手を擧る程こそあれ、呉の勢一度に亂れ入。城を守る大將潘濬ふせぐべき樣無りければ、了に一人も殘らず降人に成て出にけり。呂蒙乃ち數百騎の兵を諸處に分つかはし、路々に榜を立て、妄に人を殺せる者は其三族を夷げん、妄に百姓の財物を取ものは軍法を以て罪を正さんと書て、秋毫も犯こと無れば、次の日城中の人民香華を備て出迎

關羽見了て限なく笑ひ、禮物を收めて使を回しければ、使陸口の陣に回り、陸遜に見て關羽が喜びたる由を語る。陸遜計成就せりとて、密に荊州の樣を窺ひ聞に、關羽果して守りの勢を樊城に引とり、瘡の痊を待て進んと議す。陸遜大に喜び、急ぎこの由を孫權に報じければ、孫權乃ち呂蒙を呼で曰、いま關羽果して荊州の守を廢し、皆樊城に集まり居、この時を失べからず、汝をわが弟孫皎と左右の都督に任ず、共に大軍を引て計を合せ、行て荊州を攻とるべし。呂蒙が曰、君もし某を捨玉はずんば、只一人に命じ玉へ、大將軍二人ある時は軍中必ず變を生ず、昔し周瑜、程普二人を左右の都督に任じて、共に江陵を攻させ玉ひし時、凡そ事みな周瑜が料たりと申せども、程普自ら其功を恃、つひに爭の端と成て國の大事を仕損じたり、此目前の戒なり、君よく〳〵察し玉へ。孫權げにもと悟り、遂に呂蒙を大都督として江東の軍馬を總督さしめ、征虜將軍孫皎を後陣の大將として兵粮を司しむ。呂蒙拜謝して三萬の精兵を擇び、快船八十餘艘を揃て水練の達者をみな商人の體に出立せ、却て精兵を舟底に藏し、次に韓當、蔣欽、朱然、潘璋、周泰、徐盛、丁奉七人の大將を相續て援とし、其餘はこと〴〵く孫權に隨はしめ、手分すでに了ければ、曹操が方へ使を遣して、早く關羽を攻玉へ、御方すでに打起て荊州に向と告知さしむ。元來呂蒙は先陸遜に命じて、大船十艘あまりを商人船にこしらへて潯陽江の北岸

しきりに汝を薦む、必ず辭することと勿れ。陸遜つひに印綬を受、直ちに陸口に行て軍馬を領じ、名馬一疋錦二段、酒肉禮物を調へ、書簡を封じて關羽に送る。この時關羽は瘡の痊るを待ていまだ兵を進めざる所に、忽ち報じて曰、呉の陸口を守る大將呂蒙近ごろ病危して、陸遜と云ものの相代て職を守る、今使を以て禮物を送り候。關羽ひそかに喜び使を呼で對面し、孫權は何とて此の如く不才なる、此小兒を以て陸口を守らしむ、わが荊州泰山よりも安し、何の憂か有んと云ければ、呉の使怖れ戰き、地上に伏して書簡を捧ぐ。關羽ひらき見れば、其書に曰、

東呉陸遜謹致書、百拜大漢將軍麾下、前承觀釁而動、以律行師、小舉大克、一何巍巍。敵國敗績、利在同盟、聞慶拊節、想遂席捲共獎王綱。近某不敏、受任來西、延慕光塵、思禀良規、又且于禁等見獲、遐邇稱羨、以將軍之勳足以長世、雖昔晉文城濮之師淮陰拔趙之略、蔑以尚茲。聞徐晃等歩騎駐旌窺望麾葆、操猾虜也、忿不思難、恐潛增衆以逞其心、雖云師老猶有驍悍、且戰捷之後、常苦輕敵、古人仗術軍勝彌警。願將軍廣爲方計、以全獨克。僕書生、疎遲忝所不堪、喜鄰威德、樂自傾盡、雖未合策猶可懷也。倘明注仰有以察之、僕不勝欣仰之至。

建安二十四年秋九月　東呉陸遜再拜

て詐の計を成、事掌握の中に在ん。呂蒙驚き喜て曰、眞にわが君の洪福なり、幸に御邊を得たりとて、いよ〳〵虛病して外に出ず、私に陸遜を伴ひ、建業に行て孫權に見ゆ。

○呂蒙定レ計取二荊州一

呂蒙ひそかに陸口の陣を離れ、建業に來て孫權に見えければ、孫權問て曰、汝が病いかん。呂蒙が曰、某實は病なし、乃ち兵を慢しむるの計也、關羽が心に慮るは某一人なり、某病甚しと沙汰して此職を退き、別に人を擇で陸口の陣を守らしめば、關羽必ず荊州の備を引ん、其時計を以て攻入ば、勝ずと云こと候はじ。孫權が曰、たれを以てか陸口を守らしめん。呂蒙が曰、某遍く諸將を見るに、陸遜に在ずんば叶まじ。孫權が曰、陸口の守りは第一の要害なるゆゑ、往日周瑜は魯肅を擇び、魯肅は又汝を擇ぶ、汝いま才德ある者を擇出せ。呂蒙が曰、陸遜は王佐の才あり、此職を守るべし、若この人を用ふる時は、外その動靜を窺ひ、內その形便を察して、必ず荊州を襲ひ取べし、この人內に計を藏して外に露さず、もし名高き人を用ひなば、關羽いよ〳〵用心すべし。孫權げにもとて卽時に陸遜を偏將軍右都督に封じ、呂蒙に代て陸口を守らしむ。陸遜拜謝して曰、某年幼して不才なり、恐くは職に負ん。孫權が曰、呂蒙

陸遜

陸遜呂蒙が虚病を察して密計を進む
呂蒙

て其體を見るに、更に病の色なかりしかば、乃ち問て曰、某君の命を承、來て將軍の病を尋ぬ。呂蒙が曰、某病に臥て、出迎の禮を缺、幸に恕し玉へ。陸遜が曰、吳侯すでに國の大事を以て將軍に屬す、將軍時に乘て動ず、空く鬱結して病に臥玉ふは何事ぞ。呂蒙やゝ久く陸遜が顏を守り、默然として答ざりければ、陸遜又申けるは、某一つの方あり、能將軍の病を治せん。呂蒙急に起あがり、左右を退けて問て曰、御邊いかなる方かある、速に教玉へ。陸遜が曰、將軍の志は大にして將軍の疑は盛なり、某年若して不才なりと申せども、昨日將軍の來り玉ふを見て、荊州を取ん爲なることを知、いま又虛病して出玉はざるは、必ず荊州に守の勢多して烽火臺あることを疑ひ玉ふならん、某一つの計あり、將軍の願を諧へ、荊州の兵手を束て降參し、烽火を擧ること無らしめん。呂蒙大に驚き、謝して曰、御邊の言まことに我心腹の論なり、ねがはくは教を聞ん。陸遜が曰、關羽自ら英雄を恃で、天下に敵する者なしと思ふ、古より欺レ敵者亡と云り、今關羽が心に掛る所は、將軍の兵を揃て此處に居玉ふを慮る者なり、將軍この時に乘て虛病して職を退き、陸口の守には名もなき大將を代て、辭を巧にし禮を厚して關羽が德を贊稱し、其心を傲しめ玉ひなば、關羽必ず今は慮こと無と思ひ、荊州守りの兵を收取て盡く樊城に向ふべし、若荊州に備なき時は、御方只一手の勢を以て江に沿

り、某いま計を思ふに、關羽が遠く出たるに乘て荊州を襲ひ取ん、荊州やぶるゝ時は關羽必ず擒と成ん、況や關羽その力を恃み、赤壁に曹操を破てより我國を侮て、動すれば約に背く、今早く兵を起し玉はば、某容易く荊州を取ん、今もし取ずんば、後必ず吳の國の憂を爲ん。孫權が曰、われは先北の方徐州を取んと思ふは如何に。呂蒙が曰、いま曹操遠く河北に在て、東國を顧る暇なければ、徐州を攻て取玉はんこと掌の內に在と申せども、この國は陸路に續たれば、舟軍を用ひ難し、陸路の蒐合は、御方のいまだ修練せざる所なり、假令一擧に取得るとも、之を守るに七八萬の勢を置ずんば保ち難からん、不如まづ荊州を取て長江の險に據、別に良計を成玉ふべし、之に過たる上計あらじ。孫權笑て申けるは、孤もと荊州を取の心あり、徐州を取んと云は汝が心を試ん爲なり、汝速に計を運せ、孤大軍を起して相續ん。呂蒙わかれて又陸口の陣に囘り、密に忍を入て荊州の樣を窺はしむれば、江に沿て二十里三十里の間高き處に烽火臺を構て、守る勢きはめて法ありと申す。呂蒙これを聞て大に驚き、案に相違せる心地して虛病して外に出ず。孫權つたへ聞て心の內憂苦みければ、一人すゝみ出て曰、呂蒙が病は必ず詐にて候はん。孫權驚て之を見るに、乃ち吳郡の陸遜字は伯言なり。孫權心の內安からず、汝試に往て見來れと云ければ、陸遜命を承て直に陸口の陣に到り、呂蒙に見

遷ことを止、しきりに龐德が忠義を想て涙を流して申けるは、孤于禁を知こと三十年、なんぞ量ん危に臨で却て龐德に及ざらんとは。司馬懿、蔣濟申けるは、主上なにをか哭き玉ふぞ、早く使を遣し玉へ。曹操が曰、われ使を吳に遣すべけれども、今先一人の大將を以て、關羽が勢に當しむべし。時に一人すゝみ出て曰、某ねがはくは行て防ん。諸人これを見れば徐晃字は公明なり。曹操げにもとて遂に精兵五萬を起して、徐晃を大將とし呂建を副將とし、楊陵坡と云ところに陣を取、吳の國より內應あらば速に攻かゝれとて、急に吳の國へ使を馳。使すでに吳の國に到り、向に好を結んでより魏の勢しきりに關羽と戰ふ、此に依て荊州の城甚だ空虛なり、早く吳の國の兵を起して虛に乘て荊州を攻取、關羽が後を襲玉へ、我その前より攻てたちまちに關羽を破り、永く好を結んと云ければ、孫權大に喜び、諸將を集て計を議するに、張昭が曰、近ごろ關羽魏の勢を打滅して、威風華夏を震動す、曹操もこれを怕れ、都を遷して其鋒を避とす、今樊城すでに急にして、之を救べき計なく、假に我國と好を結ぶ、事定て後は必ず約を變ずべし。孫權いかゞせんと思ふ所に、忽ち呂蒙小舟にのり、陸口を離て私に來り、君に見て申べきこと有と云ければ、孫權よび入て其ゆゑを問に、呂蒙申けるは、關羽兵を引て樊城を攻、ちか比魏の七軍を平げて自ら妄に傲をなし、天下に敵なしと思ふ心あ

んやとて了に受ず。別に藥一貼を殘し、後に瘡の口を掩玉へと云て相別て去にけり。この時都の内には關羽が七軍を平げ、龐德、于禁を生取たる由を聞傳て、諸方の早馬雪の飛が如く上を下へと騷動して、武士東西に馳ちがひ、貴賤山野に逃迷ふ。曹操この由を聞て大に驚き、文武の大將を集め、孤元より關羽が智勇世に超たるを知、いま荊州を保て虎に翼を生ぜるが如し、況や于禁を生取龐德を斬て、御方の將士こと〴〵く膽を失ふ、關羽もし大軍を引て直ちに都に攻入ば、いかゞして防べき、事の難儀に成ぬ前に、孤早く都を移してその鋒を避べしと云ければ、一人すゝみ出て曰、この事決して無用なり。諸人これを見るに司馬懿字は仲達なり。曹操問て曰、汝いかなる計かある。司馬懿が曰、于禁、龐德が生取れたるは、全く戰ひの强弱に有ず、洪水の爲に浸されし故なり、今玄德と孫權と外親して内疎なり、關羽が志を得ること孫權却て喜ず、若使を遣して吳の爲に利害を說、孫權に兵を興して密に關羽が後を襲はせ、必ず江南の地を吳に與て長く好を結んと云玉はば、孫權喜んで從はん、然る時は樊城の圍自ら解て、關羽必ず擒と成ん。時に一人すゝみ出て曰、仲達が言まことに金玉の妙論なり、主上早く使を馳て吳の孫權と計を約し玉へ、何ぞ輕々しく都を遷ん。曹操これを見るに、楚國平阿の人に、蔣濟字は子通とて、司馬懿と共に丞相府の主簿なり。之に因て了に都を

軍の臂を環の中に容、繩を以て能々縛り、被を以て顔を蒙ふ、病人これを見れば怖れ動ことを思ふ故なり、吾刀を以て皮肉を割開き、骨に付たる毒を刮て藥を用て之を塗、その口を縫時は自ら無事ならん、只恐らくは將軍驚き怕れ玉ふべし。關羽笑て曰、これに過たる易ことやある、何ぞ柱を用ふべきとて酒を出して持なし、自ら數盃を飲で馬良に對して碁を圍み、右の臂を伸て華陀に授けしかば、華陀手に刀を持て、一人の士卒に盆を捧て血を承させ、只今割破候ぞ、驚玉ふなと云ければ、關羽が曰、早く割玉へ、吾なんぞ世間の小兒と同からん、御邊心の儘に療治せよ。華陀乃ち刀を持て皮肉を盡く割やぶり、骨を出して之を見れば、骨すでに毒に染て其色青し。乃ち刀を持て之を割に、滿座みな面を掩て色を失はずと云もの無。關羽酒を飲肉を食て笑ひ談こと故の如く、碁を圍で更に動こと無りしかば、血流て盆に滿、華陀その毒を盡く刮て能々藥を塗、線を以て口を縫了ければ、關羽大に笑ひ、諸人に向て申けるは、この臂すでに伸屈ること故の如し、少しも痛こと更に無。華陀が曰、某醫を業とすること久しけれども、一生將軍の如くなる人を見ず、乃ち眞の天神なり、某已に療治を加る上は、百日を過ずして舊の如く平復すべし、能々愼み護て怒の氣を起し玉ふな。關羽限なく欣び、黄金百兩を以て謝しければ、華陀が曰、某元より將軍は天下の義士なることを知て此に來れり、何ぞこの賜を受

けるは、われ樊城を取こと目前にあり、樊城を取て後の患を除き、長く驅て大に進み、都の内に攻入て曹操が首を刎、再び漢の天下を興んことは、是わが本よりの願ひなり、豈小の矢瘡に因て此ほどの大事を廢せんや、汝等無用の舌を搖して諸軍の心を慢しむること勿れと叱ければ、諸將怕れて退出し、次第に瘡の痛甚しくなりけるゆゑ、四方に人を遣して名ある醫者を尋ければ、或日一人の醫士小舟に駕て吳の國より來る。關平呼入て對面すれば、其人怪しき衣を披て臂に靑き嚢を掛、某は沛國譙の人にて、華陀字は元化と申者なり、關將軍は天下の義士、いま毒の箭に中り玉ふと聞て療治を加ん爲に來れりと云ければ、關平問て曰、御邊は昔日吳の大將周泰が瘡を治したる人か。華陀が曰、然り。關平大に喜び、諸將と共に中軍に入て見れば、關羽は臂の痛甚だしかりけれども諸軍の亂れんことを畏れ、痛を忍で馬良と碁を打て居たりけり。關平乃ち華陀を引て對面させければ、關羽座を賜て傍に坐せしむ。華陀瘡を見んと請ければ、關羽衣を袒ぎ臂を伸て見せしむるに、華陀申けるは、これは弩の矢瘡にして、烏頭と云毒藥すでに骨に透り入り、若早く治せずんば、この臂長く廢るべし。關羽が曰、いかなる物を以て治すべきぞ。華陀が曰、たゞ恐くは將軍の驚き怖れ玉はんことを。關羽笑て曰、われ死をだも顧ず、何の怖るゝこと有ん。華陀が曰、靜なる處に一つの柱を立、鐵の環を打て將

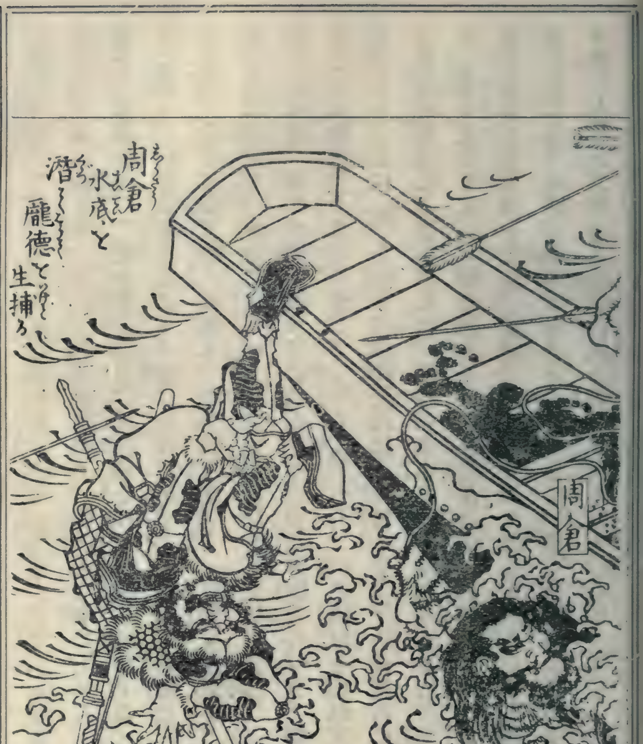
通俗三國志　卷之三十二

○華陀刮㆑骨治㆓關羽㆒

關羽すでに魏の七軍を打平て、一手の勢を陝下に指むけ、自ら大軍を引て樊城の四方を圍み、北の門に馬を立て、汝等城中の鼠、なんぞ早く降らざる、我忽に打破て一人も餘さじと呼はり、大膚ぬぎに成て兵を下知しければ、曹仁矢倉の上より望み見て、急に五百餘張の弩を同時に放ち出しけるに、關羽右の臂を射られ、馬より倒に落たりけり。城中より之を見て曹仁一度に打て出ければ、關平兵を進めて大に戰ひ、父を救て本陣に回り、鏃を掘て抜けるに、元來毒藥を傳たる箭なりしかば、血流れて止ず、臂は青く腫て痛甚だ忍がたし。關平諸將を集めて申けるは、父の矢瘡痛手なれば合戰を暫く閣き、荆州に回りて保養すべし。王甫が曰、某が意も相同じとて、共に帳中に入て其體を見るに、關羽席上に坐して常に異ならず、汝等いかなる故か有と問ければ、王甫が曰、某等みな將軍の矢瘡重を見るに、若敵に臨で怒を發し、又は合戰に出て臂を使ひ玉はんことを怕れ、諸人相議して暫く荆州に回らんと存じ候。關羽怒て申

の馬を水中に斬。諸人みな同音に、某等ねがはくは命を弃て守らんと云ければ、曹仁大に喜び、城の上に弩数百張を設て晝夜怠ず相守り、土を荷ひ石を搬で築地を構しかば、十日の内に水は次第に退きける。關羽は魏の七軍を平げ、于禁を生取龐德を誅してより、勢ひ四方に震て天下驚き怕れずと云ものなし。時に次男關興荊州より來りければ、關羽乃ち諸將の手柄を書記し、關興を使として成都に遣し、合戰の樣を漢中王に報ぜしむ。

龐德叫で申けるは、わが魏王百萬の精兵あり、威天下に振ふ、汝玄德久しからずして擒と成ん、吾なんぞ汝に向て膝を屈ん。關羽大に怒り、推出して斬しむるに、龐德頸を伸て討れたり。關羽その忠義を憐で屍を厚く葬り、又兵船を揃て樊城に攻かゝる。樊城には洪水甚だ溢て白波天に漫り、四方の壁ことごとく落ければ、城中上を下へと騷動し、曹仁を初として膽を失はざるは無。これに依て諸人相議し、今日の危き、力の救べき樣なし、關羽が寄來らざる以前に、密に舟に取のり、夜中に走るべしとて、皆々用意をしたりければ、滿寵諫て曰、此事決して然るべからず。曹仁が曰、城すでに破んとす、安んぞ能守るべき。滿寵が曰、この山水驟に出たることなれば、十日を過ずして自ら退べし、何ぞ洪水を怕れ玉ふ、今關羽いまだ城を攻ずと云ども、已に兵を陝下に指向たれば、許昌より南は百姓大に亂れて其騷動甚し、然れども關羽が輕々しく進まざるは、樊城に敵在て其後を襲はんことを怕るゝ故なり、今この城を弃て盡く走り玉はば、關羽思ふまゝに兵を進て、黃河より南は盡く攻取るべし、願くは將軍心を盡して此城を守り、國家の爲に力を出し玉へと諫しかば、曹仁げにもと喜て曰、もし御邊の教に有ずんば、我必ず大事を悞んとて、自ら白き馬に打乘て諸將を集め、吾國家の厚恩を受、此城の大將となる、若城を弃て走んと云もの有ば、誓てこの馬の如くならんと云て、そ


周倉水底と潜
龐徳と生捕る
周倉

龐德

に戰はしめ、成何を顧て申けるは、吾聞、勇將不㆑怯㆑死以苟免、壯士不㆑毀㆑節而求㆑生と云り、今日は乃ち我死する日なり、汝よく力を振て戰ふべし。成何これを聞て眞先に進けるを、關羽一矢に水中に射て落す。此に因て魏の軍こと〴〵く降人に成けるが、龐德只一人勇を振て時うつるまで戰ひ、荊州の兵數百人小舟に乘て來りけるを、刀を提て飛のり、一人も殘さず斬殺して其舟を掉さし、適に降人に出たる手下の勢を招きのせ、樊城を指て逃入んとするに、向より一人の大將筏に乘て馳きたり、龐德が小舟を撞て倒に打飜す。魏の軍ことごとく水中に落ければ、彼大將水の底を泳て龐德を擒にし、關羽が前に引出す。諸人これを見れば、乃ち關羽が手下の大力に周倉とて水練の達者なり。魏の七軍こと〴〵く水中に死して、降人に成て命を助る者一萬人には過ざりけり。關羽兵を收めて阜の上に陣を取ければ、士卒于禁を縛來る。于禁地に拜伏して、願は一命を扶玉へと云ければ、關羽が曰、汝いかなれば吾を拒ぎたる。于禁が曰、君の命なれば已ことを得ず、將軍幸に憐を垂玉はば、誓て此恩を報ずべし。關羽笑て曰、われ汝を殺は狗を殺が如し、空く刀を汚なりとて士卒に命じ、荊州へ赴て獄中に捉置しめ、又龐德を引出さしむるに、龐德目を怒らし牙を咬で跪ざりければ、關羽が曰、汝が兄龐柔も故主馬超と共に蜀に仕ふ、汝なんぞ速に降らずして、却て我に生取れたる。

動しければ、こはいかにと驚き、急に馬に乘て看時、四方八面洪水驟に漲り來り、魏の勢喚き叫で隨波逐浪、溺れ死する者數を知ず、片時の間に平地水深きこと一丈に餘りければ、龐德諸將を引て小山に登るに、大波天を涵して、見るに膽冷じかりしかば、氣を失はずと云もの無。すでに夜も若々と明て、關羽兵を牽して兵船に取のり、旗を進め鼓を鳴し、喊を造て攻かゝれば、于禁わづかに五六十人を從へ、四方のがるべき路なきを見て降人に成んと呼はりければ、關羽乃ち甲盔を脫せ、繩を掛て船に入、直ちに進んで龐德を生取んとす。龐德は董起、成何二人と五百の猛將を從へ、身には甲盔もなく、皆堤の上に立て少しも畏るゝ色なかりければ、關羽兵船を列て四方を圍み、雨の降が如くに矢を放ちしかば、魏の勢紛々として大半は射殺さる。董衡、董起事の急なるを見て龐德に向て申けるは、軍士こと〴〵く射殺されて、外に去べき道なし、不レ如降人と成て命を扶からん。龐德大に怒て曰、われ魏王の厚恩を受、豈他人に向て膝を屈んやとて、自ら董衡、董起を斬殺し、大音あげて申けるは、再び降らんと云ものは皆此の如くならんと呼はり、弓を取て關羽が船に向ひ、散々に射たりければ、荊州の兵射落さるゝ者多かりけり。已に午の刻に至るまで龐德さらに疲ざりしかば、關羽兵を下知して急に四方より攻させ、大石を飛し矢を放こと雹の如くなりければ、龐德も御方を下知して皆短兵急

用ふるの數を知なり、稱は彼と我との勝負を稱り較るなり、勝はこの五の道を知る時は必ず戰に勝もの也、いま于禁が七軍、地理の廣く平なる所を擇で陣を取べきに、却て罾口川の狹く險ところに聚り居、方に今秋雨連綿として數日いまだ晴ず、襄江の水必ず漲溢べし、我すでに士卒を遣して諸處の水口を堰住させ、大水の出るを待て一度に流し掛、船を浮て攻かゝらば、樊城、罾口川の兵こと〴〵く水底の魚鼈とならん。去ほどに魏の勢こと〴〵く罾口川に移てより、大雨日を經て晴ざりければ、督將成何と云もの于禁に見て申けるは、大軍いま此處に聚り居て、地勢甚低く、四方に山あれども、この陣を去こと稍遠し、この間は大雨ふり續て軍士こと〴〵く疲れ苦む、近ごろ荊州の兵は皆高き處に陣を移して漢水の口には多く船筏を造と承はる、もし襄江の水溢て此處に漲り來らば、御方の勢いかゞして逃るべき。于禁怒て申けるは、憎き己は、無用の舌を掉て人の心を惑す、再び云ば必ず首を刎ん。成何羞怕れて退出し、龐德に逢て右の趣を語りければ、龐德大に驚て曰、御邊の意見甚だ當れり、于禁もし用ひずんば我自ら高き處に移るべし。成何が曰、明日速に陣を移して別に計を成玉へ。是夜も雨風物さわがしかりければ、龐德帳上に坐して居たりしが、俄に四方ひしめき立て鼓の聲地を

○關羽渰殺魏七軍

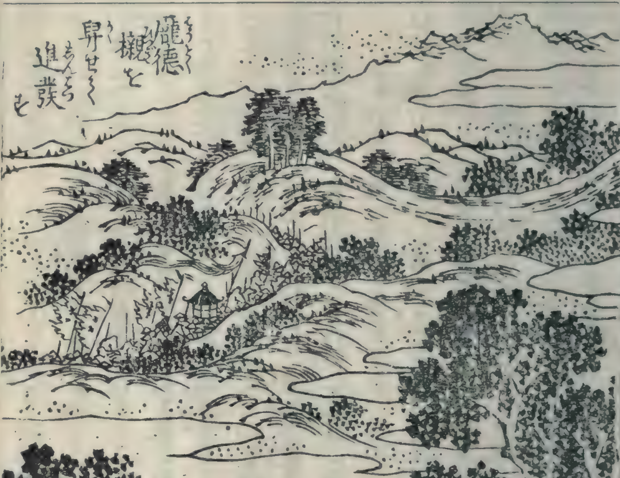
この時關平は父の箭瘡すでに痊たるを見て心の内大に喜び、討て出んと議する所に、魏の勢みな樊城の北十里に陣を移したりと聞て、其計あらんことを畏れ、急ぎ關羽に報じければ、關羽自ら馬にのり、十騎あまりを引て山に登り、遙に敵陣を見渡せば、樊城の内立雙たる旗共さらに整ずして軍士みな疲れ、又城の北十里ばかりにして山谷の中魏の七軍陣を取、襄江白河の流白波天を涵して、水の勢ひ甚だ急なりければ、地理を能々見定め、案内者を呼て曰、樊城の北十里ばかりにして、今魏の勢の陣を取たる谷は如何なる處ぞ。答て曰、罾口川と云ところにて候。關羽喜て申けるは、于禁を擒にせんこと我掌の内にあり。諸將問て曰、いかなる故にて候ぞ。關羽が曰、罾口に入もの豈よく走り出ることを得んや。諸將これを聞て其意を知ず。關羽本陣に回り、時八月の末に至て風雨數日止ざりければ、下知を傳へて多く船筏を造らしむ。關平怪で問て曰、いま陸路の合戰に船筏を用意し玉ふ、是いかなる故ぞ。關羽が曰、是汝等が知ところに有ず、兵法に云り、必勝者有五、一曰度、二曰量、三曰數、四曰稱、五曰勝、それ度は地理の遠近險易廣狹を度て陣を取なり、量は彼と我との強弱を酌量なり、數は機變を

の陣に鑼を鳴して軍を收めければ、龐德驚て引回し、何ごとぞと問ふに、于禁申けるは、都を出る時魏王の戒あり、關羽は智勇共に備て尋常の敵に有ずと宣へり、今一箭に中と云ども、若は計あらんことを畏て、是ゆゑに軍を收たりと云ければ、龐德は其心を知ず、若軍を收ずば、我必ず關羽を斬んものをと云て後悔して已ず。是元來龐德が關羽を射落したるを見て、于禁己が功を奪れんことを恐て、急に軍を收ける也。關羽は本陣に回りて箭を拔瘡を治するに、幸に深手ならざれば藥を傳て之を蓋ひ、痛く龐德を恨で、我必ずこの一箭の仇を雪んと云ければ、諸將みな曰、かる〴〵しく出玉ふこと勿れ、瘡の痊るを待玉へ。次の日龐德兵を引て推よせければ、關羽出て戰んと云ども、諸將諫て敢て出さず。龐德兵を下知して樣々に罵り辱しめければ、關平深く手下の者共を戒て、父に告ること無らしむ。龐德每日戰を催せども、敵十日あまり出ざりければ、于禁を呼で相議し、今關羽瘡を被り、固く守て出ること無、不若大軍を一手に合せ、勢ひに乘て陣中に攻入、樊城の圍を救んと云ければ、于禁心の内に龐德一人が功に成んことを恐れ、偏に魏王の戒を述て敢て兵を動さず。龐德しきりに勸れども于禁さらに從はず。後に七手の兵を樊城の北一里に移し、山に沿て陣を取、于禁自ら大路を支て龐德を山の後に陣を取せ、兵を進めて功を成すこと能ざらしむ。

其鋒を避玉へ。龐德が曰、魏王すでに將軍を擇で討手の大將とし玉ふ、何ゆゑに惰弱なる言を出し玉ふぞ、吾明日快く生死を決し、誓て退くこと無るべしとて、髮鬚みな倒に竪ければ、于禁あらそはずして出去れり。關羽は本陣に回り、關平に向て申けるは、龐德が武藝よく熟して、眞に我對手にも成つべし、又尋常に事かはれり。關平が曰、俗の諺に、初て生たる犢は却て虎を懼れずと云り、父たとひ奴を斬玉ふと云とも、本これ羌國の小卒なれば、何ほどの譽か有ん、萬一失ある時は、漢中王の命に背き、荊州の重任を以て鴻毛よりも輕んずるに似たり。關羽叱て申けるは、われ龐德を殺さずんば何を以てか恨を雪ん、吾意すでに一決せり、再び諫ること勿れとて、次の日馬を進めて出ければ、龐德も刀を提て躍り出たり。關羽大音聲をあげ、今日勝負を決せずんば、我敢て軍を收じとて、二人鋒を交へ、戰ひ五十餘合にして龐德馬を引回し、刀を拖て逃わしる。關羽急に趕蒐、汝刀を拖の計を用ふとも、我なんぞ怖んやと呼はりければ、龐德元より詐て刀を拖の計を成、弓に矢をはげて走る所に、關平父の失あらんことを畏れ、跡に付て馳きたり、龐德が弓を挽を見付て賊將矢を放ぞと呼はりければ、關羽頭を揚て看んとする時、弦音高く聞えて一つの矢左の臂に中りければ、已に馬より落んとするを、關平急に馳付、救て本陣へ回らんとするに、龐德刀を舞して討て蒐る。時に魏

に問て曰、これは何ものぞ知人ありや。一人答て曰、これは關羽が養子にて關平と申す者なり。龐德あざ笑ひ、大音あげて申けるは、われ魏王の命を受、來て汝が父の首を取、汝は乃ち疥癩の小兒、われ汝を殺さず、快く回りて早く父を出し來れ。關平大に怒り、刀を舞して蒐りければ、龐德も馬を出し、戰ひ三十餘合にして勝負を分たず、相引に退きければ、關羽この由を聞て、廖化を大將として樊城を攻させ、自ら關平が陣に出ければ、關平對面して合戰の樣を語る。關羽こらへず自ら馬をのり出し、いかに龐德は無か、早く來て首を渡せと呼はり、鼓を打て喊を造りければ、龐德すゝみ出て大音あげ、吾天子の詔を奉、魏王の命に因て此に來り、汝が首を斬落す、汝が疑はんことを恐れて此櫬を用意せり、汝もし命を惜ば、早く馬より下て降人となれと罵りければ、關羽大音あげて曰、量に汝は西羌の一匹夫なり、惜かな我この刀を汚して汝が如き鼠を斬ことをと罵り、刀を舞して蒐りければ、龐德も馬を進め、二人百餘合戰て、精力いよ〳〵加りけり。兩方の軍勢これを見て皆酒に醉たるが如く、魏の陣に龐德が失あらんことを畏れ、金を鳴して軍を收め、關平も父が年老たるを危み、金を鳴して退きければ、共に兵を收けり。龐德本陣に回り諸人に向て申けるは、人みな關羽が英雄を畏る、今日われげにもと思也。于禁が曰、將軍すでに關羽と百餘合戰うて、更に勝負を分たず、只よく軍を退けて

この時關羽は樊城を圍み、中軍に坐して兵を下知する所に、一人外より來て申けるは、只今承はり候へば、曹操七手組の精兵を于禁に授てこの所に向はしむ、先手の大將龐德は軍中に櫬を舁せ、廣言を出して誓て將軍と勝負を決せんと申し、此より三十里隔て陣を取候。關羽これを聞て勃然として色を變じ、長き髯振ひ動て大に怒り、天下の英雄わが名を聞ては盡く頸を縮めて怕れ逃るに、龐德匹夫いかなれば廣言を放て我を辱しむると云て、卽時に關平を呼よせ、汝は此に在て樊城を攻よ、我は自ら行てこの匹夫を斬んと云ければ、關平諫て曰、父よく三十年の英名を守り、一言の辱に因て、泰山の重き御身を石瓦と共に爭ひ玉ふな、某ねがはくは父に代て戰ふべし。關羽が曰、われ戰に臨毎に身士卒に先だち、向ふ敵を討ずと云ことなし、龐德いかなれば我を輕んずる。關平が曰、世の諺に、螳螂の忿いづくんぞ車に當らん、隋侯の珠は雀に抛打べからず、蠅の止を怒て劍を拔ば、徒に神威を費と云り、推量するに龐德が如き鼠の輩、なんぞ父の自ら出玉ふこと有ん。關羽が曰、汝まづ試に出て戰へ、我も跡に從て進べし。關平心喜び刀を提て打て出、兩方陣を取向て、魏の陣に皂き旗を指擧、南安の龐德と白字にて書あらはし、龐德白き馬に乘て鎧袍日に映じ、五百人の猛將を從へ、かの櫬を舁せて出ければ、關平大音聲を擧て、西羌の小輩主に背く逆賊と罵ければ、龐德左右


龍徳
櫬を
昇せ

龐會
龐德妻

なせ、我もし關羽を殺しなば、首は必ず我自ら取ん、汝等早く彼が屍を取て、この櫬にのせ來れ、魏王に獻て功を顯さんと云ければ、五百人の猛將みな勇み躍て曰、げに淸き大丈夫の所存かな、將軍もし失あらば、某等頸を捨てその讐を報ずべしとて、兵を引て打起ければ、曹操これを傳へ聞、龐德かゝる志ある上は、孤なんの憂か有んと云て喜ぶこと限なし。賈詡問て申けるは、主上なにをか喜び玉ふ。曹操が曰、われ龐德が壯なるを喜ぶ。賈詡が曰、主上差り玉へり、龐德ひたすら血氣の勇を恃で、行て關羽と戰はば、赤裸に成て虎を搏にせんとするが如くならん、世の諺に兩强共鬪時は必有㆓一傷㆒と云り、此國を安んずる良計に有ず。曹操これを聞てげにもと悟り、急に人を走らせ龐德に趕つき、王命を傳て戒めをなし、關羽は智勇兼備りたる大將なり、必ず輕々しく戰ふこと勿れ、取べき時は取、取べからざる時は宜く固く守れ、必ず輕んじて仕損ずること勿れと云せければ、龐德これを聞てあざ笑ひて起けるを、諸人いかなる故に笑ひ玉ふと問ば、龐德が曰、われ今樊城に打向ひ、關羽が三十年の名を挫に足り、主上なにゆゑに思慮の過たる、三軍すでに出て又戒を下し玉ひ、血氣の勇を鬪はしむべからずと宣、是兵の心を弱する也、われ已に關羽を呑んと思ふ心あり、豈等閑に犬死せんや。于禁が曰、魏王の戒從はずんば有べからず、將軍よく愼み玉へとて、樊城を指て打向ふ。

て退出し、家に回りて死人を舁櫬を造らせ、次の日常に親く交る友を集て別を成、かの櫬を座上に置ければ、諸人みな怪をなし、將軍いま兵を引て首途の酒宴をし玉ふに、何とて浩る忌々布ものを出し玉ふと問ふに、龐德杯を擧て申けるは、我魏王に仕て恩を受ること身に餘れり、誓て命を捨んと欲す、今樊城に行て關羽と勝負を決せんに、我もし彼が首を取ずして回らば、是魂魄の浮れ來れる也と思ひ玉へ、この故に先櫬を舁せて打起ものは、誓て空く回らじが爲なりと語りければ、滿座みな涙を流す。龐德又女房李氏を呼で申けるは、われ義に於て君の爲に命を捨ずんば叶まじ、今先手の大將を承はり、行て關羽と戰を決せんとす、吾もし關羽を殺さずんば、關羽必ず吾を殺べし、吾もし殺されぬと聞えなば、汝よくわが子の龐會を育み養ひ、成人もせば敵を討て父が讐を雪しめよ、この子幼と云ども常に替れる人相あり、必ず能わが讐をも報ずべきぞとて別れければ、妻子友人みな大に哭て送りける。龐德已に眞先に櫬を舁せ、兵を引て出ければ、手下に猛き大將五百人あり。怪で問て曰、いま櫬を舁せ玉ふは如何なる意ぞ。龐德が曰、汝等多年われに從て、互に各その心根を能知れり、今われ一大事を以て汝等に囑す、必ず我命に背こと勿れ、我いま樊城に行て關羽と勝負を決せんとす、我もし關羽に殺されなば、首は定て敵の手に渡らん、汝等わが屍を取てこの櫬にのせ、回り來て葬を

に見て右の趣を告ければ、曹操も實にもと同じ、即時に龐德を召て先手の印を剝取ければ、龐德大に驚て曰、某すでに大王の命を受、力を盡して關羽を誅し、都の騷動を靜めんと存ずる所に、いかなれば此の知くに先手の大將を剝玉ふぞ。曹操が曰、孤數年の間汝を用ひて心少しも疑ふこと無りしに、今日汝を用ひて先手の大將たらしめんとすれば、故主馬超いま蜀に在て五虎の官を得、兄龐柔も蜀に在て共に玄德が大將たり、此ゆゑに諸人みな汝を疑ひ、必ず二心を懷んと云、孤背て疑ふこと無と云ども、他人の口を止め難し、是に因て用ふること能ず。龐德これを聞て冠を免で頓首し、面に血を灌で申けるは、某漢中にて主上に降りしより、厚恩を受ること身に餘り、肝腦地に塗るとも報ずること能ざることを思ふ、某むかし故鄕に在し時、兄龐柔と一處に居しが、嫂甚だ不賢にして某に無禮を成けるゆゑ、某ある時酒を過し刀を提て斬殺せり、この故に龐柔が怨み骨髓に入、再び對面いたさじとて誓を成て義を斷たり、故主馬超は勇にして計なく、士に下り禮を施ことを知ず、この故に父の基を守ること能はずして、一身蜀に入て玄德に事、某久しく主上の大恩を被る、何ぞ二心を懷て世の笑を惹んや、ねがはくは能察し玉へ。曹操自ら扶け起して曰、孤本より汝が忠義を知、前の言は諸人の心を安んぜんが爲なり、汝少しも心に掛ること無、力を出して功を立よ、孤誓て汝を疑はじ。龐德拜謝し

申けるは、關羽荊州に在て威風華夏を震動す、此に敵すべき大將なかりしに、龐德いま向はんと云、眞に好對手なりとて、于禁を征南將軍とし、龐德を征南都先鋒として申けるは、孤深く滿寵が人に過たる良策あることを知て、先樊城へ遣はして曹仁を援しむ、されども兵法いまだ其妙を盡ざることを知て、汝二人を差つかはす、我七手組の兵は汝が能知たる如く、皆これ北國そだちの荒武者にて、甲盔馬物の具に至るまで盡く尋常に事かはれり、元より董衡、董超とて世に雙なき大力の大將この軍を總領して、一手毎に大將を備たり、是みな數十萬人の中より擇び出せる者なれば、常に孤旗下を守らしむと云ども、この度の合戰は關羽を破らん爲なれば、この勢を汝に授く、急ぎ打起て勝軍を報ぜよと云ければ、于禁謹で命を受、退出して兵を揃ければ、七手組の大將董衡きたり、密に見て申けるは、今將軍七手の精兵を預り、行て樊城の後攻をし玉ふなれば、合戰に勝を期として回るべし、然るに龐德を先手の大將とし玉ふは大なる悞ならずや。于禁大に驚て其故を尋れば、董衡が曰、龐德は元來馬超が手下の大將なりしが、已ことを得ずして魏に降れり、今馬超は蜀に在て五虎將軍に任ぜられ、龐德が兄龐柔は此も蜀に在て玄德に事ふ、今この者を先手の大將とし玉ふは、是油を潑で火を滅んとするが如し、將軍早く魏王に奏して先手の大將を改玉へ。于禁尤と同じて、夜中に曹操

出す。呂常槍を撚て戰はんとするに、手下の軍勢みな關羽が威風凛々たるを見て、魂を消膽を失ひ、後より我先にと逃ければ、呂常怒りて止れども更に耳にも聞入ず、散々にぞ成にける。關羽これを見て勢ひに乘て揉だりしかば、魏の勢なじかは怺べき、一支も支ず大半討れて這々樊城へ逃入ければ、關羽兵を引て取かこみ、息をも繼せず攻たりける。

○龐德擡レ櫬戰ニ關羽一

曹仁數度の戰に負て樊城すでに危くなりければ、早馬打て救の勢を求めけるに、曹操大に驚き、文武の大將を集めて此事を評議し、列坐の內なる一將を指さし、汝行て樊城の圍を解、曹仁を援よと云ければ、諸人これを見るに、泰山鉅平の人に于禁字は文則なり。聲に應じて進み出て申けるは、某已に大王の命を受、いそぎ打向て敵を破ん、ねがはくは一人先手の大將を副玉へ。曹操諸人に問て曰、たれか先手の大將たらん。時に一人すゝみ出、某ねがはくは犬馬の勞を施し、關羽が首を取て獻り、上は國恩を報じ下は百姓を救べしと云ければ、諸人驚て之を見るに、其人身の長八尺、面黑く髮黃にして、惡鬼羅刹に異ならず。常に靑き色の袍を著て白き馬に乘けるゆゑ、人みな白馬將軍と號す。乃ち南安狟道の人に、龐德字は令明なり。曹操喜で

しむ、豈再び之を代んや、趙累は今兵糧を總司る、是又容易のことに有ず、汝たゞ烽火臺を構て、狼烟を擧るの備を成とて内に入ければ、王甫心の内安からず、如何せんと危みながら、了に荊州へ回りける。關羽は關平に命じ船を浮て襄江を渡し、直に樊城へ向はせければ、荊州の勢みな筏を以て江を渡る。去ほどに曹仁は二人の大將を討れ、樊城に退て滿寵に對面し、われ御邊の諫を用ひず、見苦き負をして襄陽を敵に取れたり、何の計を以て此恥を雪べきと惶れ入て問ければ、滿寵が曰、關羽は世の虎將なり、智ふかく計多くして尋常の敵に有ず、只よく城を守て防ぎ玉へ。其言いまだ了ざるに、荊州の勢すでに襄江を渡してこの所へ攻きたると告ければ、曹仁驚ていかゞせんと膽を冷す。滿寵が曰、只よく〳〵城を守るべし。手下の大將呂常申けるは、某ねがはくは數千の兵を引て、敵を襄江の中に滅さん。滿寵又諫て曰、無用〳〵必ず外に出べからず。呂常大に怒て曰、汝等は皆文官の見、いつを期すともなく城を守らば何を以てか手柄をし功名をも立ん、兵法にも軍半渡を擊とこそ云り、今關羽兵を引て襄江を渡る、何ぞ打向て其半を討ざるべき、若こと〴〵く渡て大軍城を圍なば、敵いよ〳〵根深く蔕固して、急には中々破り難からん、某ねがはくは城を出て關羽を討ん。曹仁これに從ひ、二千餘騎を分て與ければ、呂常乃ち襄江を指て出る所に、向に錦の旗を飄して關羽刀を横たへ馬を

付て一刀に斬殺し、勢ひに乘て攻たりしかば、魏の勢大半は襄江の中に落て溺れ死せり。關羽すでに襄陽を取て民を安んじ、軍を恤ければ、司馬王甫すゝみ出て曰、いま將軍一息に襄陽を攻取玉ひて、魏の將士みな膽を冷と申せども、某よく愚案を成に、今吳の大將呂蒙兵を陸口に屯して、常に荊州を窺の心あり、將軍この處に出玉ひて、吳の勢後より荊州を攻ば、いかゞして拒ぎ玉はん。關羽が曰、われも此ことを慮る所に、汝よくも心を附たり、汝幸に此ことを司れ、江の邊に或は十里二十里の內、高き阜を見立て烽火臺を搆へ、五十人の士卒を分て、ことごとく之を守らせ、若吳の國より江を渡て寄ば、夜ならば火を擧、晝ならば煙を擧、次第に傳て相報ずる時は、片時の間に通ずべし、然る時は我自ら行て討やぶらん。王甫又曰、糜芳、傅士仁二人、江陵、公安第一の攻口を守ると云ども、必ず力を盡こと無らん、この故に然るべき大將を擇で荊州の城を總守らしめ玉はずんば、必ず大なる禍あらん。關羽が曰、われ武陵の人潘濬と云ものを留めて荊州を守らしむる上は、何をか少しも慮こと有ん。王甫が曰、この人は平生疑ひ忌の意深くして、利を貪るの私有、豈政に臨んで利を愛ざる者あらんや、今兵粮を司れる軍前の都督趙累は、忠誠にして廉直なり、若この人を用て荊州を守らしめ玉ひなば、萬に一つも失あらじ。關羽が曰、われ原より潘濬が忠義を知、この故に留めて荊州を守ら

ども、敵を破る武士の道を知玉はじ、豈聞ずや、水來土掩將至兵道と云り、御方いま逸を以て勞を待、なんの怕か候はん、速に出て打破るべし。曹仁げにもと同じて出ければ、滿寵再三諫れども曹仁つひに聞ず。滿寵を留めて城を守らせ、自ら襄陽を離れて陣を取。關羽之を見て關平、廖化に計を教へ、馬を進て蒐らしむ。一番に廖化まづ馬を出しければ、魏の陣より翟元槍を撚て蒐出、二人二時ばかり戰ひ、廖化いつはり負て走りければ、魏の勢勝に乘て追かくる。廖化二十里あまり逃て住りければ、翟元兵を引て攻かゝるに、關平、廖化二手に分れて防ぎ戰ふ。曹仁乃ち夏侯存に關平を攻させ、翟元に廖化を攻させければ、次の日關平、廖化大に敗れて逃わしる。魏の勢二十里あまり追掛ければ、忽然として後に喊の聲を揚、鼓を打て天地を動す。曹仁驚て急に退んとすれば、後より關平、廖化勢にのりて追かくる。魏の勢散散に亂れければ、曹仁敵の計に落されぬと思ひ、一軍を引て襄陽に回らんとすれば、向より錦の旗を前に進めて、關羽八十二斤の青龍刀を舞し、赤兎馬を躍せて馳きたる。曹仁これを見て、魂を落し心を冷して一戰にも及ばず小路より走りけるが、關羽肯て之を追ず。道を遮て魏の勢の來るを待ところに、夏侯存が一軍みな關平、廖化に追れて這々に走り來るを、關羽刀を舞して只一合に夏侯存を斬て落す。翟元これを見て怖れ戰き、馬を飛して走りけるを、關平趕

人走り來り、只今午の時なりと報ず。關羽心の内大に怪み、その子關平を呼て申けるは、われ夢の内に一つの黒き猪が來て、左の足を咬と見たりしが、覺て後も陰々として痛あり、今は年老力も衰て浩る夢を見るならん。關平が曰、猪には龍の象あり、龍の足に附は乃ち天に昇る心なり、父必目出度こと候はん、何ぞ疑ひ怪むべきとて、諸將を集て此ことを議しければ、或は吉事なりと云ものあり、或は凶事なりと云もの有て、更に定らざりけるを、關羽昂然として申けるは、吉事にてもあれ凶事にてもあれ、我年すでに六旬に近ければ、假令ひ死すとも何ぞ憾ん。その詞いまだ了ざるに、蜀より勅使ありて關羽を前將軍に封じ、節鉞を假て荊州九郡を總督さしめ玉ふと報じければ、關羽謹で王命を受。滿座の諸將みな一同に拜賀して、此乃ち猪の夢に應ぜりと云ければ、關羽つひに怪ず、兵を引て襄陽の大路より進みける。樊城には兼てより曹操が弟曹仁兵を揃て居たりけるが、關羽自ら推よすると聞て以ての外に周章し、只堅く城を守らんと云ければ、大將翟元が曰、いま魏王吳の國と好を結び、將軍に命じて共に荊州を攻取しめんとす、今敵自ら來るは此首を送る也、なんぞや引籠て出ざるの理あらん。曹仁これに從ひ、城を出て戰はんと云ければ、滿龍諫て曰、關羽は勇にして計あり、輕んずる敵にあらず、不レ如たゞ堅く城を守て防玉へ。夏侯存すゝみ出て曰、御邊は儒者の道を知玉ふべけれ

馬に乘て之を見るに、先手の大將傅士仁、麋芳二人、宵より酒を飮で夜巡りに怠り、陣屋の後より失火出て焔硝に燒付、兵粮武具こと〴〵く燒て人馬多く死したりと申す。關羽兵を引て之を救んとすれども、焔盛にして近付こと能ず。漸く四更の比に至て收まりければ、城中に回て傅士仁、麋芳を召出し、吾汝二人を先手の大將とす、いまだ軍を出さざる前に許多の兵粮武具を燒失ひ、焔硝を以て多の人馬を打死す、是いかなる故ぞとて、引出して首を刎んとす。費詩急に止て申けるは、いまだ軍を出さざるに先大將を殺し玉はんことは、是不吉の事なり、暫く其罪を免し玉へ。關羽怒の氣さらに已ず、武士を呼で二人か背を四十杖撃せ、先手の印を剝取て、麋芳を留て江陵を守らせ、傅士仁を留て公安を守らせ、猶怒て申けるは、吾いま費詩の告玉ふに有ずんば、汝を市に斬て軍法を正さん、暫く二つの首を預おく、吾軍に勝て回り來り、那時に罪を正さんと罵りければ、二人羞怕て退出す。關羽乃ち廖化を先手とし、關平を副將とし、馬良、伊籍を參謀とし、其餘の大將は荊州に留て四方を守らせ、自ら中軍に備て已に打起時に至り、帥の字かきたる旗を祭て暫く陣中に睡り居たるに、忽ち大さ牛の如くにして全身眞黑なる猪一つ走り來て關羽が足を咬ければ、自ら劍を拔てこれを斬けるに、その聲帛を裂が如くにして霎然として打驚く。是乃ち一刻の夢なりければ、起あがりて其邊を見るに、外より士卒一

を能聞玉へ、夫王業を立る者は用ふる所の臣一人に非、むかし蕭何、曹參、幼より高祖に從て親舊の友たり、陳平、韓信、後に秦の國を逃て亡命の將たりしが、其官位を定むるに至て韓信を王に封じて第一に居しめ玉へども、蕭何、曹參が之を怨たると云ことを聞ず、今漢中王一時の功を以て漢室を崇び隆にせん爲に、新に五虎の將軍を立玉ふ、さればとて漢中王の御心足下を思ひ玉ふこと豈黃忠と同じからんや、況や漢中王昔し足下と桃園に義を結び玉へるの恩あり、然る故に漢中王は乃ち足下なり、足下は卽ち漢中王なり、是同一體にして禍福憂歡を共にし玉ふべし、何ぞ官位の高下を論ずること有ん、某は一介の使、君の命を傳るの人なり、若このことを告ずして回るは、是君命を辱しむるなり、足下よく〳〵之を思ひ玉へ。關羽これを聞て心披け、淚を流し再拜して申けるは、某が不明なる、御邊の敎に有ずんば必ず大事を悞らんとて、卽時に印綬を受たりける。費詩又王旨を傳へ、急ぎ荊州の兵を興して樊城を攻取玉へと告ければ、關羽喜て申けるは、われ久しく樊城を攻んとする心あり、幸に王命を得たりとて、卽時に傅士仁、糜芳を先手の大將とし、先一軍を引て荊州城門の外に陣を取せ、明日一同に打起んと下知しければ、二人命を受て城外に勢を集む。關羽は城中に在て酒宴を設て費詩を持成、夜の二更の比に至りける時、俄に城外に失火出來て焰天に漲りければ、大に驚き甲取て打かけ、

都より白水に至るまで四百餘里が間に館舍を建、驛亭を置て往來の便を通じ、兵粮を貯へ軍器を造て、都を攻るの用意を成玉ふ所に、早馬急を告て、曹操近ごろ吳の國と好を結び、荊州を取んと企る由を報じければ、漢中王大に驚き、孔明を召て計を問玉ふに、孔明が曰、某已に曹操が此計あらんことを量り知れり、假令吳の孫權に兵を起せと云とも、吳の國には知謀の大將多し、必ず曹操に先兵を起して襄陽樊城より荊州を攻さすべし。漢中王の曰、しかる時は如何せん。孔明が曰、只荊州へ使を馳て關羽に官を加へ、早く兵を興して先樊城を攻させ玉はば、魏の勢膽を冷して自然に瓦の如く解ん。漢中王げにもと喜び、卽時に前部司馬費詩字は公擧と云ものを使とし、誥命を捧て荊州へ赴しめ玉ふ。關羽この由を聞て城外に出むかへ、內に入て禮了りければ、關羽問て曰、某をいかなる官にか封じ玉へる。費詩答て曰、五虎大將軍の職を加て、將軍は其第一なり。關羽が曰、五虎は誰々にて候ぞ。費詩が曰、足下を第一として張飛、馬超、黃忠、趙雲なり。關羽怒て曰、張飛は我弟なり、馬超は名將の子孫なり、趙雲は久しく漢中王に從て忠を盡す、此三人は我と位を齊するもさることも有ん、黃忠いかなれば我と同じく位を列ぬる、大丈夫たる者豈老武者と同列すること、是後代までの恥ならずや、我等に於ては此職を受ること御免あれと宣ふべし。費詩あざ笑て曰、足下の詞大に相違せり、某が一言

諸葛瑾

関羽諸葛瑾と罵愧しむ
関羽

て荊州を取の計を議す。

○關羽威震華夏

吳主孫權もろ〳〵の大將を集て荊州を取の計を議しければ、參謀步隲が曰、このこと決して無用なり、曹操漢の天下を奪はんと思へども、怕るゝ者は玄德なり、今使を以て吳の國より荊州を攻よと云は、此禍を吳に假もの也。孫權が曰、しかりと云ども我荊州を取んと思ふこと年久し。步隲が曰、いま曹操が弟の曹仁、兵を引て襄陽樊城に陣を取、荊州を攻るに舟筏を用ふることもなく、陸路より容易く寄る使あり、君まづ曹操が方へ使を遣して曹仁に早く攻かゝらせ、關羽が之を防間に、君吳の兵を起して密に後より荊州を取玉はば、一鼓して事を成ん、曹操早く荊州を攻る心あれども、今滿寵をして我國と好を結しむるは、此その心を試ん爲なり。孫權大に喜び、卽時に書簡を封じて曹操が方へ遣しければ、曹操見了て頻に喜び、我つねに玄德、孫權が力を併せて防ことを憂ふ、今すでに此の如くなれば、先早く荊州を取んと云て、乃ち滿寵を樊城へ遣し、曹仁を助て參謀となし、一同に兵を起して荊州へ攻かゝらしむ。此時に漢中王は魏延を總大將として東川を守らせ、百官を率て成都に回り、官職を定め宮室を造、成

しければ、顧雍が曰、これ皆詐とは申ながら、其中に道理あり、乃ち滿寵を囘して此方よりも使を遣し、曹操と約を定めて前後より一同に攻かゝり、又ひそかに忍を入て荊州の樣を窺ひ玉へ。諸葛瑾申けるは、いま荊州の關羽一男一女ありと承はる、某ねがはくは行て君の世子と婚姻を成しめんことを求め、關羽もし從はば、共に一家の好を結んで曹操を破り、若從はずんば、曹操を助て荊州を取ん、凡そ戰ひに名ある時は人の心みな順ものにて候と云ければ、孫權この議しかるべしとて先滿寵を送て都に回し、諸葛瑾を荊州につかはす。元來關羽は天下の士を輕んじて芥の如に思ひければ、諸葛瑾が來れるを聞ても之を迎ることなく、平坐して對面し、御邊なにとて來り玉ふと問に、諸葛瑾申けるは、某が弟孔明は久しく漢中王に事て厚恩を被る、此ゆゑに某兩家の好を結んと欲す、主人孫權一人の男子あり、幼と申せども甚だ聰明にして吳の人みな之を奇とす、將軍幸に一人の女ありと承はる、願くは婚姻を結んで共に一家の好を成、力を併せて曹操を滅さんことを欲す、是に過たる大慶あらじ、將軍の尊意を聞ん。關羽勃然として怒り、わが虎の女を以て安んぞ孫權が犬の子に嫁しめん、我汝が弟を思はずんば立どころに首を刎ん、必ず再び云こと勿れと云て、左右の者に命じて追立て出しければ、諸葛瑾頭を拘へ、鼠の逃るが如くにして馳かへり、隱さず右の趣を告ければ、孫權大に怒り、文武を集め

滿寵を迎へ、賓主を分て禮了ければ、滿寵申けるは、呉と魏とは本より讐を含の心なかりし處に、玄德が故を以て數年戰ひを交たり、魏王曹操いま某を使とす、共に兩國の好を結て玄德を打滅し、永く唇齒と成て相侵こと無るべしとて、曹操が書簡を呈す。孫權ひらき見れば、その書に曰、

操聞、人生世間、列位在至尊之上、而俾異域之臣者、乃王侯之恥也。不論行而結交者、此大丈夫之恥也。祖宗可得之基業、一旦輕屬他人者、此家門之恥也。仲謀乃東呉之至尊、而受制于劉備、可恥一也。備乃幽燕小輩、素無行止、天下共知、一旦以賢妹妻之、此乃二恥也。荊襄九郡、公父兄皆爲此土而喪身、何輕如敝屣、與劉備而不取、此乃三恥也。夫備特頑頼凶暴、數有侵侮、輕諾寡信、素懷不仁、先背主而後叛呂布、棄袁紹之義、忘劉表之恩、呑併蜀川、占據漢上、負明公與孤之德、雖樵牧亦切齒也。今遣滿寵前來、所有舊怨、一切勿言、可速起英雄之思、索取荊州、上與國家除凶下雪自己之讐。淸平之後、自以江南接連西川、盡屬于公、漢中襄陽、孤當自取、永以爲好、誓不相侵。書不盡言、專祈照察。秋八月吉日書。

孫權見了て酒筵を設て持成、まづ滿寵を客屋に留め、夜中に文武を集てこの事いかゞ有んと議

使この表を傳て都に上りければ、曹操この由を聞て大に怒り、席を織し小兒いかでか此の如なる、吾もし奴を滅ずんば、何の面目ありて天下の人に逢ん、命の在ん程は戰うて、この恨を雪べしと呼はり、即時に下知を傳て傾國の兵を起しければ、一人すゝみ出て曰、大王いま一旦の怒に依て、百萬の生靈を鋒刄に苦ましめ玉ふべからず、臣一つの計あり、弓を張矢を放つことをも用ひず、玄德をして蜀中に禍を受させ、力盡氣衰るを待て、數萬の勢を起して攻玉はば、一鼓して功を成ん。諸人みな驚て見れば、司馬懿字は仲達なり。曹操大に喜び、汝いかなる計かあると問ふに、司馬懿が曰、吳の孫權妹を玄德に嫁しめたりしかども、今すでに取返して共に齒を切の恨あり、大王いま辯舌の人を使とし、書簡を吳の國に送て利害を說、孫權に兵を起して先荊州を攻させなば、玄德必ず兩川の兵を以て荊州を救べし、那時大王進んで漢中を取玉はば、玄德前後を顧ること能ず、勢ひ必ず危からん。曹操げにもと喜び、即時に書簡を封じて滿寵を使とし、吳に行て計を行はしむ。孫權この由を聞きて急ぎ文武の大將を集め、曹操いま使を以て書簡を送る、忽ちに追かへすべきかと議しければ、張昭が曰、曹操元より我國と恨なし、一旦孔明が詞を聞て數年互に讐を結び、百姓をして塗炭の災を被らしむ、今滿寵が來れるは必ず和睦を求むるの使ならん、對面して其故を問玉へ。孫權これに從ひ、自ら出て

逆殲殪、以漸冰消。惟獨曹操久未梟除、侵擅國權、恣心極亂。臣昔與車騎將軍董承、圖謀討操、機事不密、承被陷害、臣播越失據、忠義不果、遂得使操窮凶極逆、主后戮殺皇子鴆害。雖糾合同盟、念在奮力、懦弱不武、歷年未效、常恐殞沒孤負國恩、寤寐永歎、夕惕若厲。今臣群僚以爲、在昔虞書敦敘九族、庶明勵翼、五帝損益、此道不廢、周監二代、並建諸姬、實賴晉鄭夾輔之福、高祖龍興、尊王子弟、大啓九國、卒斬諸呂、以安太宗。今操惡直醜正、寔繁有徒、包藏禍心、簒盜已顯。既宗室微弱、帝族無位、斟酌古式、依假權宜、上臣爲太司馬漢中王。臣伏自三省、受國厚恩、荷任一方、陳力未效、所獲已過、不宜復忝高位以重罪謗、群僚見逼迫臣以義。臣退惟、寇賊不梟、國難未已、宗廟傾危、社稷將墜、成臣憂責碎首之負、若應權通變、以寧靜聖朝、雖赴水火、所不得辭。敢慮常宜以防後悔、輒順衆議、拜受印璽、以崇國威。仰惟爵號、位高寵厚、俯思報效、憂深責重、驚怖累息、如臨于谷。盡力輸誠、奬勵六師、率齊群義、應天順時、撲討凶逆、以寧社稷、以報萬分。謹拜章表、因驛遞上、還所假左將軍宜城亭侯印綬。謹表以聞。仰于天聽。

建安二十四年秋七月　漢中王領太司馬臣劉備拜表

急于隴蜀、操外呑天下、内殘羣僚、朝廷有蕭墻之危、而禦侮未建、可為寒心。臣等輒依舊典、封備漢中王、拜大司馬、以董齊六軍、糾合同盟、掃滅凶逆、以漢中巴蜀廣漢犍爲、爲國所署置、依漢初諸侯王故典。夫權宜之制、苟利社稷、專之可也。然後功成事立、臣等退伏矯罪、雖死無恨。誠惶誠恐、頓首死罪。臣等不勝瞻天激切屏營之至、謹奏表以聞。

孔明、法正等表を以て漢帝に奏し、建安二十四年秋七月、方圓九重の壇を沔陽に築て五方の旗を布つらね、諸の文武みな次第に依て排列し、許靖、法正二人玄德を請て壇に登らしめ、冠冕璽綬を進て群臣皆一齊に拜賀し、嫡子劉禪を王太子とし、許靖を太傅とし、法正を尚書令とし、孔明を軍師として軍馬一應の事務を總督さしめ、關羽、張飛、馬超、黃忠、趙雲を五虎大將軍とし、魏延を漢中の太守とし、其餘の群臣各功を序て官を定め、事すでに調ひければ、玄德漢中王の位に卽、表を上て漢の天子に奏し玉ふ。其表に曰、

備以具臣之才、荷上將之任、總督三軍、奉辭于外、不能掃除寇難、靖匡王室、久使陛下聖教陵遲、六合之内、否而不泰、惟憂反側疢如疾首。曩者董卓僞造亂階、自是之後、群凶縱橫、殘剝海内、賴陛下聖德威靈、人臣同應、或忠義奮討、或上天降罰、暴

超、征西將軍臣黃忠、鎭西將軍臣賴恭、揚武將軍臣法正、興業將軍臣李嚴等一百二十人上言曰、昔唐堯至聖而四凶在朝、成周仁賢而四國作難、高后稱制而諸呂竊命、孝昭幼沖而上官逆謀、皆憑世寵、藉履國權、窮凶極亂、社稷幾危、非大舜周公朱虛博陸、則不能流放擒討安危定傾。伏惟陛下誕姿聖德統理萬邦、而遭厄運不造之艱。董卓首難蕩覆京畿、曹操階禍竊執天衡、皇后太子鴆殺其害、剝亂天下殘毀民物、令陛下蒙塵憂厄幽處虛邑。人神無主、遏絕王命、厭昧皇極、欲盜神器。左將軍領司隸校尉豫荊益三州牧宜城亭侯劉備、受朝廷爵秩、念在輸力以狗國難、觀其機兆、赫然奮發、與車騎將軍董承、同謀誅操、將安國家克寧舊都。會董承機事不密、令操遊魂得遂長惡殘毒海內。臣等每懼王室大有閻樂之禍、小有定安之變、夙夜惴惴戰慄。厪思、昔在虞書敦序九族、周監二代封建同姓、詩著其義、歷載長久、漢興之初、割裂疆土、尊王子弟、是以卒折諸呂之難、成大宗之基。臣等以備肺腑枝葉、宗子藩翰、心存國家、念在弭亂、自操破於漢中、海內英雄望風蟻附、而爵號不顯、九錫未加、非所以鎭衛社稷光昭萬世也。奉辭在外、禮命斷絕。昔河西太守梁統等、値漢中興、限于山河位同、權均不能相率、咸推竇融以爲元帥、卒立效績摧破隗囂。今社稷之難

もし名の爲にするに有ざる時は、卽ち利の爲にす、今君苟も人の疑ひを避て、義を守て某が言を用ひ玉はざる時は、手下の將士みな望を失て盡く外に去ん、君ねがはくは能思ひ玉へ。玄德の曰、帝位に卽んことは我いかに勸め玉ふとも從ふこと能じ、別に再び商議あるべし。時に諸の大將こと〴〵く出て申けるは、君もし位に卽玉はずんば、三軍の心みな變ぜん。孔明又曰、君の御心つねに仁義を以て本とし玉ふなれば、帝位に卽き玉ふことは容易には從ひ玉はじ、今荊州を保ち兩川の地を治め玉へば、暫く漢中王の位に卽て、彌人を用ひ玉へ。玄德の曰、汝等われを尊で王位に進めんとすれども、明に天子の勅命なき時は、是漢に背て僭せる也。孔明が曰、離亂の時は宜く權變に從ふべし、若常の道を守て事に滯る時は、必ず大事を悞らん。張飛すゝみ出大に叫で申けるは、異姓の人も皆帝王たらんことを欲す、況んや漢朝の宗親にしてもし諸人の勸に從ひ玉はずんば、半世まことに夢の如くならん。孔明が曰、君たゞ權變に從て宜く漢中王の位に卽玉へ、臣等自ら表を上て天子に奏すべし。玄德再三從ひ玉はざりしかども、諸軍の心を變ぜんことを恐れ、已ことを得ずして許容し玉ひければ、孔明つひに譙周に表を作らせ、都へ使を上せて漢の天子に奏せしむ。其表に曰、

軍師將軍臣諸葛亮、蕩寇將軍漢壽亭侯臣關羽、征虜將軍新亭侯臣張飛、平西將軍都亭侯臣馬

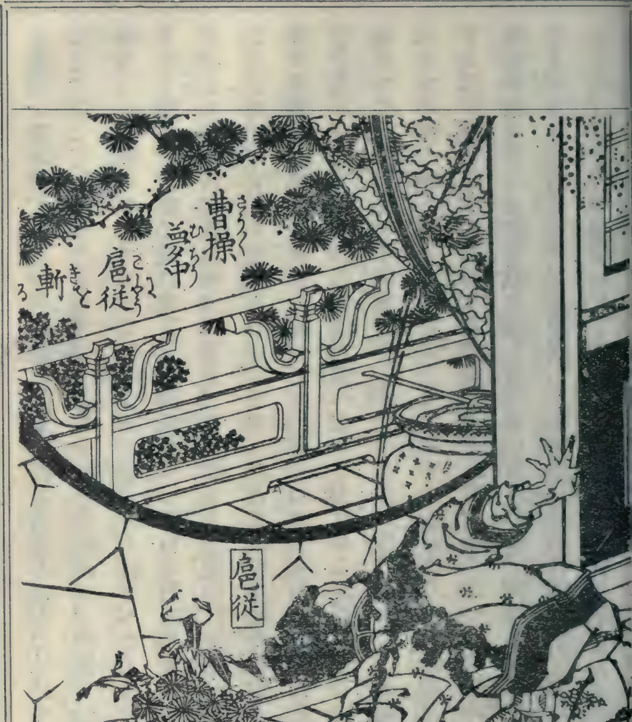
○劉玄德進位漢中王

建安二十四年秋七月、曹操漢中の合戰に打負て都へ逃のぼりし後は、東西兩川の地こと〴〵く玄德に屬して、軍民その德に懐き、諸大將みな玄德を帝位に卽奉らんと思ふ心ありければ、密に孔明と此事を議するに、孔明が心も已に然りとて、法正を伴ひ玄德に見えて申けるは、方に今漢の天子懦弱にして曹操逆威を專にし、天下の民定れる君なし、君すでに御年も五十に過、威四海に震て、東除、西討いま兩川の地を得玉へり、宜く天に應じ人に從て、堯の舜に禪玉ひし例に法り、皇帝の位に卽玉へ、然る時は名正く言順て、國賊を滅さんこと掌にあり、此乃ち天理に順の事なり、宜く日を擇で行べし。玄德大に驚て曰、軍師いかなれば浩ることを云玉ふぞ、我漢室の一族たりと云ども、卽今臣下の身なり、若この事を行はば、是乃ち漢に背く賊ならん。孔明が曰、しからず、方に今四海わかれ崩れて、英雄蜂の如に起り、各〳〵一方に覇として、天下に德ある者同聲相應じ、同氣相求む、この故に身を捨命を輕んじて其主に事る者、

馬より落たる時向歯二つを打損じければ、醫者を召して療治せしめ、方に楊修が云しことを思ひ出して、屍を尋ねて厚く葬り、軍を收めて都に回らんとて、龐德を後陣に備へ、金瘡甚だ重かりしかば、氈車の中に臥て虎衛の軍に四方を守らせ、斜谷を出て回る所に、十方より火を掛て蜀の勢打て出ければ、魏の將士みな膽を冷して散々に逃わしる。曹操驚き怕れ、路を急で退く所に、又山の四方より火を掛て張飛、馬超二手の勢討て出たり。魏の勢みな氣を失て戰ふべき樣なかりしかば、只我先にと逃わしり、京兆府まで落のび、追かくる敵も無りしかば、曹操初て人心地つき、了に都へ上りけり。玄德は大に打かち、劉封、孟達、王平等に命じて上庸、金城等を攻させ玉ふに、城の大將申耽、申儀、みな勢ひ孤にして防こと能ず。曹操すでに漢中を棄て落たりと聞えければ、今は誰が爲に此を守らんとて悉く降人に出、これより東西兩川の地すべて玄德に屬しければ、三軍を賞して百姓を安んじ玉ふ。

人の臣として父子骨肉の間を阻んとす、豈敗れざるの理あらんや。曹操たとひ才を忌の心なくとも、必ず楊修を誅すべし。人の臣たるもの楊修を前車の戒とせば、身を保の本ならん。この時曹操すでに楊修が首を刎、又いつはり怒て夏侯惇をも誅せんとするに、諸將哀んで命を乞ければ、纔にその一命を容し、罪を責て退しむ。次の日蜀の勢推よせければ、曹操出て戰はんとするに、魏延刀を舞して討てかゝる。曹操大音あげ、汝玄德に事んより、速にわれに事へよ、必ず重く用ひんと云ければ、魏延散々に罵り辱しむ。曹操怒て、龐德はなきか、奴原ことごとく討とれと下知すれば、龐德刀を舞して打てかゝり、二人火を散して戰ふ所に、忽然として魏の陣中に火燒あがり、馬超大軍を引て中軍と後陣とを攻ると呼はり、上を下へと騷動しければ、曹操劍を拔て、誰にてもあれ、妄に動くものは立所に斬んと云。これに依て諸將力を合せ、魏延を防で追退けしかば、曹操自ら馬超を防んとて、兵を引て後を顧るに、又張飛が一軍討て蒐る。曹操二手に分てこれを防がせ、自ら高き阜に登て軍の體を望む所に、忽ち一手の勢打て出、眞さきにすゝむは魏延なり。弓を挽て兵と射ければ、其矢曹操が面に中て、馬より倒に落けるを、魏延弓を地にすて、刀を舞して馳きたる。曹操すは討れぬと見る所に、龐德馬を飛して蒐塞り、了に魏延を追ちらして、曹操を救ひ回りける。されども面の矢瘡痛手なるに、

へて、誰にてもあれ門より出すことなかれと云ければ、曹丕まづ來り門より出んとするに、門を守る者みな申けるは、君の命あり、誰にても通すべからずとて止めければ、曹丕つひに出ること能はず、曹子建は兼てより楊修に習うて自ら門に到りけるに、門を守る者共又初めの如く推止めければ、曹子建大に怒り、吾王命を奉て箭の弦を離れたるが如し、何人か吾を遮ぎらんと云て、了に門をぞ通りける。曹操これを聞て曹子建を勝れりとし、他人の教へたるにあらずやと問ければ、子建答て申けるは、某が胸中より出たり、何ぞ肯て人に習はん。曹操大に喜びけるを、或人ひそかに楊修が教へなりと告たりしかば、怒て楊修を殺さんと思へる心あり。楊修つねに答教とて十餘條の教を作り、曹操が問つべきことを集めて、その答を曹子建に教へ、民を治め國を安んずるの道こと〴〵く載ずと云ことなし。此ゆゑに曹操つねに曹子建と事を論ずるに、その答水の流るゝが如くなりければ、心の内つねに疑ふ。後に曹丕ひそかに曹子建が近侍の者を語ひ、彼答教を偸んで曹操に告ければ、曹操これを見て楊修を殺さんとする心いよ〳〵切なり。箇樣の事ども重疊して漢水の傍に曹娥が碑を觀たりし時も、已に殺んと思ひけれども、他人の議論を憚て今までは忍びけり。曹操が才を忌は眞に恨むべき事ながら、楊修


曹操夢中扈従を斬る
扈従

曹操

近付こと勿れと云けるが、或日帳中に晝寢して、被を地に踏落しければ、近侍のもの一人走り寄て、此を取て被せんとするに、曹操がはと躍り起、一刀に斬殺して又原の如く睡りけるが、半時ばかりして夢さめ、驚て此なるものは誰か斬たると問ふに、左右の人ありの儘に告ければ、曹操大に哭て、了に厚く葬らしむ。人みな其心を知ず。曹操まことに夢に人を斬と云沙汰しけるを、楊修一人その意を知、喪に臨んで歎息し、哀れ君は嚢の中の錐なりと云ければ、曹操これを聞て心の内に憎む。曹操が三男曹子建、本より楊修が才を愛して、常に晝夜を分たず道を論じ、甚だ尊び敬ひけり。曹操も子建が才あるを愛して、太子に立んと議しければ、嫡子曹丕この事を聞て驚き、朝歌の呉贊と云ものを召て計を問んと思へども、人の怪まんことを怕れて、絹の嚢を以て呉贊を包んで密に呼入ける。楊修このことを知て曹操に告ければ、曹操大に怒り、明日は路に人を伏て呉贊を捉んとぞ申ける。或人この由を曹丕に告ければ、曹丕驚ていかゞせんと議す。呉贊申けるは、これ究竟の幸なり、明日も絹の嚢を以て箇樣々々に成んと低語ければ、曹丕ひそかに喜び、次の日又いつもの如く大なる嚢を以て通りけるに、曹操が伏勢こと〴〵く出てこれを見るに、嚢の中には多く絹の類を入てさらに怪しき事なかりければ、曹操これより楊修を疑て、曹丕を害するの計なりとぞ思ひける。或とき曹操わが子の才を料ら

夏侯惇が曰、主簿楊修すでに君の御心を察して此の如くに用意を仕り候。曹操いそぎ召出して仔細を問ければ、楊修乃ち雞肋の意を答ふ。曹操大に怒り、汝なんぞ吾軍中を亂ると云て、武士に命じて首を刎させ、陣々にぞ示しける。元より曹操はよく人を用ふと云ども、才能の己を超んことを怕れて、心つねに人の才智を忌にくむ。嘗て園を造らせ、花木を多く種けるが、一年あまりを經て園すでに成就す。曹操來り見てつひに善惡を云ず、筆を取て門の上に活の字を書付て去ければ、諸人その意を知ず。楊修申けるは、門の內に活の字を書ときは、是乃ち闊と云字なり、園の闊きを嫌ひ玉ふものなりとて、又作り改めて見せければ、曹操限なく喜び、誰か我心を知たると問ふに、楊修にて候と答ければ、面には喜べども心の中には深く憎む。ある時又塞北より羊の乳にて造れる酥酪と云ものを送りければ、曹操盒の上に手づから一盒酥と云三字を書、のちに飲んと云て臥處に入睡りける間に、楊修外より來り、彼盒の上なる書付を見て傍の者共を呼あつめ、一口づつ食てけり。曹操しばらくありて睡さめ、酥酪を飲んとするに更に見えず、如何なる故ぞと尋ぬれば、楊修が曰、君手づから一盒酥と書玉へり、此ゆゑに君の命に背ず、了に一人一口づつ食てことごとく此を食へりと云ければ、大に笑て心の中には深く憎む。曹操つねに近侍の者に云ふくめ、われは夢の中に人を殺すことを好む、もし睡ば前に

兵を收めて長安へ回らんとするに、天下の物笑と成んことを恐れて心の中いまだ決せず、案じ煩て居たる所に、折ふし膳夫の官雞を煮て進む。曹操椀の中に雞の肋あるを見て、心の中感を起して沈吟せる砌に、夏侯惇きたり見え、君の下知を聞て例の如く軍中への用心を觸んとて伺ひければ、曹操覺えず口に任せて雞肋々々とぞ申ける。夏侯惇その故を知ず、諸大將に相ふれ、今夜の用心は君の命にて雞肋なりと云ければ、諸人みな大に怪む。時に行軍主簿楊修と云ものあり。雞肋の觸を聞て急に手下の者共に命じ、行裝を催して都に回る用意をなしければ、或人これを夏侯惇に報ず。夏侯惇心おどろき、楊修を召て其ゆゑを問ば、楊修申けるは、今夜の觸を聞て此の如く用意をなす、夫雞の肋は此を食はんとすれども肉なし、此を棄んとすれば又味あり、いま進んでは勝こと能はず、退んとすれども人の笑はんことを畏る、畢竟こゝに在て其益なし、不如早く退くべし、魏王明日は必ず軍を收めて回り玉はん、期に臨んでは士卒みな騒ぐべきと存じ、今夜より支度仕り候。夏侯惇申けるは、御邊よく魏王の肺腑を知れり、我も用意を成んとて、皆行裝をぞしたりける。曹操は心の中煩亂して敢て睡ること能はず、夜更方に自ら斧を提て、たゞ一人ひそかに出て諸將の陣を見巡りけるが、夏侯惇が陣にみな行裝をなすを見て以ての外に驚き、急に本陣に回りて夏侯惇を呼よせ、其ゆゑを問に、

○曹操忌殺楊修

曹操生手の勢を合せて斜谷の界に陣を取たりと沙汰ありければ、玄德諸將に向て曰、たれか行て曹彰を打やぶるべき。劉封、孟達ひとしく出て曰、某ねがはくは行ん。玄德の曰、汝二人共に五千餘騎を引て攻かゝれ、われその功を見て恩賞せん。二人大に喜び、劉封まづ養子たるを以て玄德の威に依て先手に進み、曹彰と二三合戰ひけるが、叶はずして逃わしる。孟達これを見て入かはりて戰ふ所に、忽然として魏の勢後より亂れ、馬超、吳蘭二手に分れて夾んで攻ければ、曹彰つひに散々にぞ走りける。蜀の勢三方より討ちかゝり、中にも馬超が兵は久しく養ひおきたる精兵なれば、其鋒に當る者なし。曹彰のこり少に討れ、馬を飛して走る所に、吳蘭路を横ぎりて討止んとしければ、曹彰をつと喚て戟を舞して打てかゝり、只一合に吳蘭を馬より斬て落し、入みだれて戰ひ、了に本陣に引退く。劉封は初め一戰に打まけ、心の中慙愧して父に見ゆべき面目なく、孟達が打勝たるを見て深く妬み恨んで、是より讎をぞ結びける。曹操は曹彰が打まけたるを見て彌力を失ひ、自ら打て出んとすれば、馬超精兵を引て要害を守り、張飛、趙雲、黃忠、魏延晝夜を分たず不時に來て戰ひければ、ふせぐべき樣なく、了に

すき間もなく推よせ、東の門より火を掛ては西の門に喊を造り、南の門より火を付ては北の門に鼓を打、鐵砲を鳴し矢石を飛して入かへ〳〵攻たりしかば、曹操驚き怕れ、關を棄て走りけるに、蜀の大軍後より追かくる。曹操散々に成て逃る所に、張飛一軍を引て路を遮り、勢に乗て蒐たりしかば、魏の勢したゝか討れ、我さきにと走る所に、又趙雲が一軍後より殺到し、黄忠が一軍前より蒐りければ、曹操魂を失ひ馬を飛して斜谷の界まで逃のび、向を屹と見れば、馬烟天を蒙て限なき大勢はせ來る。曹操色を失ひ、これ若敵の伏勢なればわれ生ること能はずと云て、近く成まゝに此を見れば、敵にはあらで乃ち曹操が次男に曹彰字は子文と云ものなり。幼より武力人に超たれば、去ぬる比五萬の勢を付て代州烏丸の夷を討しめ、別に臨で曹操自ら戒め、居レ家爲ニ父子一、受レ事爲ニ君臣一、動有ニ王法一、爾可レ戒レ之と云ければ、曹彰喜で打たち、了に夷を討て北國を平げ、いま漢中に來て父の戰ひを助んとす。曹操喜で曰、黄鬚すでに來れり、玄德を破らんこと掌にあり。諸將みな問て曰、御方數箇度の戰ひに悉く打やぶられ、人みな氣を屈して戰ふこと能はず、如何なる計をか用ふべき。曹操が曰、わが子北國を平げて、勝に乘たる兵を率ゐ來る、豈蜀の勢を畏れんやとて、斜谷の界に陣をとる。

て早く兵粮の軍を出せと下知すれば、奉行申けるは、前は褒州の界にて、山險く路悪う候、かるがるしくは進みがたし。許褚が曰、われ萬夫不當の勇あり、豈敵を怕れんや、今夜は月も明なれば速に軍を出せとて、自ら刀を横たへて眞さきに進み、二更の比褒州の路を通る所に、忽ち山の凹なる内より鼓の聲天を動し地に震て、一手の勢討て出。まつ先なる大將は燕人張飛、矛を舞して蒐りければ、許褚刀を提て戰はんとするに、張飛矛を指のべその肩を突。許褚この痛手に弱りて馬より倒に落て、すでに討れんとせし所に、手下の大將かけ塞りて戰ひ、雨のふる如く矢を放ちければ、張飛あへて進むこと能はず、只多くの兵粮を奪うて本陣へぞ回りける。魏の敗軍許褚を救うて逃かへりければ、曹操大に驚き、醫者に命じて金瘡を治せしめ、自ら大軍を引て打出る。玄德も馬を出して劉封を眞さきに進め玉へば、曹操大音あげて曰、履を賣たる匹夫、つねに養子を出して我を防がしむ、若わが子の黃鬚だにあらば、汝が養子は粉骨碎身とならん。劉封心怒り、槍を撚て蒐りければ、曹操徐晃を出して戰はしむ。劉封いつはり負て走りければ、曹操兵を引て急に追かくる所に、四方より鐵砲を打かけ、鼓の聲天地を崩しければ、曹操伏勢あらんことを怕れて急に退かんとするに、手下の勢大に騷ぎ、互に自ら亂踏して、人馬おし殺さるゝ者かぎりなし。曹操陽平關に回り、大息ついて休む所に、蜀の大勢

るが、嚴顔が來り代るを以て早く兵を引て馳きたり、已に南鄭を攻とりけるなり。曹操怖れて這々陽平關に落ければ、玄德大軍を驅て自ら南鄭、褒州に來り、百姓を撫治め、孔明に向て、曹操なにとて箇ほどに脆く負たると問玉へば、孔明申けるは、曹操は元より疑ひの心多きものなり、能兵を用ふと云ども、疑ひある時は敗れ多し、某この故に彼を疑がはしむるの計を以て打勝たり。玄德の曰、いま曹操陽平關に陣を取、いかなる計を以て破るべき。孔明が曰、某すでに計を定めて候とて、乃ち張飛、魏延に命じて二手に分て敵の粮道を塞がしめ、黃忠、趙雲に命じて二手に分て敵の積貯へたる山中の兵粮を燒盡さしむ。玄德大に喜び、この計妙なるかなと宣へば、諸將みな案内者を引て出にけり。此時曹操は陽平關に陣を取て敗軍を集むる所に、追々人きたり、今蜀の勢四方八面に打ちりて路々を截ふさぎ、柴を積火をかけて火焰しばらくも絕ず、却てその勢いづくに在と云ことを知ずと告ければ、心の中驚き疑ふ。時に又一人走り來り、張飛、魏延來て兵粮を刼すと告ければ、曹操が曰、誰か行て張飛を退けん。許褚すゝみ出て曰、某ねがはくは行ん。曹操乃ち精兵を授て行て兵粮を救はしむ。許褚千餘騎を引て陽平關を出ければ、兵粮奉行きたり見え、もし將軍の來り玉ふにあらずんば、容易路を通ること叶ふまじとて、酒肉を獻りければ、許褚諸將とこれを飲で思はず皆大に醉けり。許褚酒に醉

乃ち劉封、孟達を左右に備て出玉ふ。曹操鞭をあげてのゝしり、汝は恩を忘れ義に背く反逆の賊なりと呼はりければ、玄德聲を揚て曰、われは乃ち大漢の宗親、勅を承りて汝を伐、汝みだりに天子の儀を僣す、これ逆賊の張本なり。曹操大に怒り、徐晃はなきか、出て玄德が舌を拔と下知すれば、徐晃馬を飛して打てかゝる。劉封急に出むかへ、共に戰ひを交る時、玄德まづ逃回り玉ひしかば、劉封叶はじとや思ひけん、馬を打て逃わしる。曹操大音あげて、もし玄德を生取ものあらば、便ち蜀の主とせんと呼はり、大軍喊を造て追ければ、蜀の勢はことごとく陣屋を打すて、馬物の具を落して漢水の方に逃わしる。魏の勢共これを爭ひ拓て戰はんとする心たゆみければ、曹操金を鳴して急に軍を收めけり。諸將みな問て曰、御方いま勝に乘て玄德を生取んとす、何ゆゑに軍を收め玉へる。曹操が曰、われ蜀の勢を見るに、皆漢水を背にして陣をとる、是疑ひの一つなり、多く馬物の具を弃る、疑ひの二つなり、速に退くべし、敵の弃たる物を一つにても取ば首を刎んとて、急に回らんとする時、孔明旗をあげて下知すれば、玄德兵を引て中軍より進み、左に黃忠右に趙雲、三方より討てかゝる。魏の勢大に破れて走りければ、孔明息をも續せず勢ひに乘て追かくる。曹操散々に打なされ、南鄭まで回りけるに、忽然として五箇所より火を付、蜀の勢喊を造て打て出たり。是元來張飛、魏延二人閬中に在け

れば、趙雲自ら行て埋伏す。孔明は高き山の上に登りて密に曹操が陣を望み、次の日魏の勢來りて戰ひを催せども、蜀の陣には固く守りて矢の一つをも放ず、元より出るもの一人もなし。魏の勢暮に及ぶまで罵れども、敵さらに出ざりければ徒に引回す。その夜の深更に魏の陣に人みな靜まりぬと見えて、篝火の光も幽になりければ、孔明山の上より望み見て、相圖の鐵砲を鳴しけるに、趙雲これを聞て五百の勢一齊に鼓をうち鑼を敲く。曹操大に驚き、すはや夜討の來りたるはとて、上を下へと騷動し、外に出て四方を見れども敵さらに一人もなし。これに依て又しばらく休まんとするに、忽然として鐵砲をひゞかし、鼓を打鑼を鳴して、喊の聲地を動す。曹操終夜安からず、士卒みな甲を脱こと能ず。打つゞいて三日の間此の如くに惱し、山谷響を交てその體なん百萬の勢とも料りがたかりしかば、曹操疑ひ畏れ、つひに三十里退いて濶き所に陣をとる。孔明これを見て打笑ひ、曹操は兵法を知れども詭の計を知ずと云て、丁に漢水を打渡り、水を背にして陣をとる。玄德その計を問玉へば、孔明ひそかに箇樣々々と低語けり。曹操は蜀の勢みな水を背にして陣を取たると聞て、心の中いよ／＼疑ひ、使ひを以て戰書を送りければ、孔明乃ち明日戰ひを決せんと答へ、次の日兩方の軍勢五界山の前に出て陣を張、曹操馬を出して左右に龍鳳の旗を立つらね、玄德に對面せんと呼はりければ、玄德

れを聞て蜀の陣中に鼓を打喊を造り、黄忠、趙雲左右にわかれて驀地暗に討て出、その勢ひ潮のわくが如くなれば、徐晃一支も支ず、大に亂れて逃わしり、是非なく漢水の中に逼入られて、溺れ死するもの大半なり。徐晃は這々に命を扶り、本陣に回りて王平をせめ、汝わが危きを見ながら、何ゆゑに力を添て救はざると云ければ、王平が曰、われ若動かばこの陣をも敵に取れん、浩る爲を思へばこそ適に再三諫めたれ。徐晃いよ〳〵怒て了に殺んとする心ありければ、王平その夜手勢を引て本陣に火を掛、漢水を渡て趙雲を頼み、降參の由を云ければ、趙雲引て玄德に見えしむ。王平拜し見え、漢水の地の利を說、魏を破るの計を獻りければ、玄德限なく喜び、今われ王平を得るは漢中を取の前表なりとて、偏將軍に封じて案內者とし玉ふ。徐晃は本陣を燒れて逃かへり、王平が敵に成たる由を告ければ、曹操大に怒り、自ら大軍を引て漢水に打向ふ。趙雲これを聞て了に漢水の西に引退き、兩軍水を隔て陣をとる。孔明自ら其邊の地理を見るに、水の上流に一つの土山ありて、內甚だ濶く、千人あまりを伏つべかりしかば、是こそ究竟の事と喜び、本陣に回りて趙雲を呼、五百人の士卒を引てみな鼓鑼の類を持せ、水上の土山の內に伏て、或は夜半或は日暮、只わが本陣に鐵砲をひゞかす聲きこえば、御邊も一度に鼓をうち鑼を鳴し、却て出て戰ひ玉ふことなかれ、是敵を疑しむるの計なりと教へけ

は子均とて、今魏の牙門將軍なり。曹操しかるべしとて乃ち王平を副先鋒として向はせ、自ら定軍山の北に陣をとる。徐晃兵を引て漢水の岸に臨み、すゝんで水を渡らんとしければ、王平諫て曰、もし水を渡らば急に退かんとする時難儀ならん。徐晃が曰、汝等が知ことにあらず、昔し韓信が背水の陣は、乃ち孫子が兵法に、致二之死地一而後生と云の意を取れり。王平が曰、むかし韓信が水を背にせしは、陳餘が計なきを知たる故なり、將軍いま趙雲、黃忠が意を料り玉ふか。徐晃が曰、汝は步立の勢を引て敵を拒げ、われ馬武者を引て快く敵を破らんとて、了に其諫を用ひず、浮橋を渡して漢水を超ければ、黃忠、趙雲これを見て玄德に告て曰、敵すでに攻きたり候、某二人ねがはくは此を討ん。玄德しかるべしと許し玉へば、二人兵を引て半途に出、黃忠申けるは、今徐晃勇を恃んで寄きたる、吾等まづ戰はずして飽まで敵の氣を疲かし、暮に及んで彼が退かんとする時、二手に分れて此を討ん。趙雲げにもと同じて固く守りて一人も出あはず。徐晃は兵を引て辰の刻より申の刻まで戰ひを催せども、蜀の勢さらに出ざりければ、已に日の暮るを見て、射手を出して蜀の陣を散々に射させけり。蜀の兵これを見て、只いま徐晃が矢を放つは、必ず引退かんとの爲なるべしと告ければ、趙雲、黃忠げにもさることあらんとて、馬に打のりたる所に、又一人走りきたり、寄手の勢後陣より退き候と申す。こ

操自ら二十萬の勢を率し、野に滿山に漫て追かけたるに、趙雲三千餘騎を引て大勢の圍を打やぶり、黄忠を救ひ出して、近づく敵の大將を數を知ず刺ころし、又取て囘して張著が圍まれたるを救ひ出し、本陣に囘てたゞ一騎門より外に立、曹操が大軍前に來りける時弩を射かけしかば、曹操大に亂れて逃はしり、漢水に落て溺れ死するもの數萬人なり、此ゆゑに全く勝ことを得て候と語りければ、玄德以の外に驚き、その邊を望み見て孔明に向て宣ひけるは、趙雲は世にも膽の太き者かな、一身都てこれ膽なるべしとて、諸將に命じて今より趙雲を虎威將軍と號せよと宣ひける。

○玄德智取漢中

玄德諸將を會め酒宴をなして喜を述玉ふ所に、晩に至て忽ち人走りきたり、曹操又大軍を引て斜谷の小路より進んで漢水の陣に推よせ候と告ければ、玄德笑て曰、曹操たとひ來るとも何ほどの事かあらん、我必ず漢水を取べしとて、兵を率て漢水の西に出玉ふ。曹操敗軍を南鄭に集て徐晃を先陣の大將とし、再び戰はんとて出ければ、一人すゝみ出て曰、某よく此所の地理を知れり、願くは徐晃を助て共に先手に進むべし。諸人これを見れば、巴西岩渠の人に王平字

張郃、徐晃に眞さきにすゝんで趙雲を追掛けるが、日すでに暮に迫て蜀の陣に推よせ、向うを屹と見るに、旗を偃鳴を靜めて人ありとも見えず。大に門を打開て、趙雲たゞ一騎槍を横たへたりければ、心疑て進み得ず、いかゞせんと議する所に、曹操自ら馬を飛せて馳きたり、汝等なにとてかゝらぬぞ、一度にすゝめと下知すれば、張郃、徐晃眞さきにすゝみ、喊を咄と作て蒐たりけるに、趙雲全く動かざりければ、直事ならずと思ひ、急に叉取て回しけるに、趙雲槍を以て後を招き、すはやと呼はる程こそあれ、壕の内より弩をつるべ放ち、その矢雨よりも猶しげく、此時日すでに暮て蜀の勢の多少も知がたければ、曹操怕れわなゝき、跡をも見ずして走りけるに、後に喊の聲ひゞき、鼓を打角を鳴して蜀の勢大山の崩るゝ如く追かけたりしかば、魏の勢互におし殺され踏ひしがれ、黒さは黒し、漢水に落て溺れ死するもの數を知ず。趙雲、黄忠勢ひに乘て追ければ、曹操散々に成て走る所に、忽然として蜀の大將劉封、孟達、米倉山の路より討て出、火を放て北山の陣を焼ければ、曹操膽を冷し魂を失ひ、若干の兵粮を打すてゝ南鄭を指て敗北せり。趙雲つひに曹操が陣に入うつり、兵粮物の具を得ること數を知ず。急ぎ玄德に報じければ、玄德大に喜び、孔明と共に來て漢水の陣を望み見玉ひ、趙雲が手下の者を召て軍の樣を問玉へば、答て曰、曹

ず。その威凛然として當るべき樣なかりければ、張郃、徐晃膽を冷してみな馬の足を立かねたり。趙雲つひに圍を破りて黃忠を救ひ出し、且戰ひ且走りけるに、到る所敢て當る者なかりしかば、曹操はるかに見て大に驚き、あな夥し、彼は何ものぞと問に、知人あり、答て曰、これは乃ち常山の趙雲にて候。曹操が曰、さればこそ凡夫の態にあらずと思ひしが、昔し當陽の長坂にて比類なき働をなしたりし英勇今にあり、輕々しく戰はば、御方の大將みな討れぬべしとて、急に下知を傳へ、趙雲が通る所かるぐ\しく敵すべからずと觸ければ、魏の勢敢て近づき得ず。趙雲すでに黃忠を救ひ、圍を突て走りけるに、一人敎て曰、東南の方に喊の聲聞え候は、必ず副將張著が圍まれたるならん。趙雲これを聞て又取て囘して蒐たりけるに、常山の趙雲と書たる旗を見ては、昔し當陽の合戰を聞つたへたる者みな風を望んで逃わしる。趙雲又かこみを破りて了に張著を救ひ出しければ、曹操これを見て自ら大軍を引て追かくる。趙雲すでに本陣に囘りければ、副將張翼後に馬烟を起て大軍の來るを望み、趙雲に向て申けるは、魏の大勢すでに近附たり、陣門を閉て固く守らん。趙雲叱て曰、汝知ずや、我むかし當陽の長坂に在て、只一騎曹操が八十三萬の勢を打やぶりて、猶草芥の如く思ふなり、いま況や是ほどの手勢を持て豈曹操を畏れんやとて、陣門をことぐ\く開かせ、射手をみな壕の中に伏おき、旗を伏

れば、夜も若々と明て積たくはへたる兵粮山の如なり。纔に守る魏の勢蜀の大勢に怕れて皆散散に走りければ、黄忠兵を下知して乾ける柴を堆く積、すでに火を掛んとする所に、張郃兵を引て馳きたり、入みだれて散々に戰ふ。曹操もこの由を聞つけ、徐晃に命じて助けさせければ、徐晃大軍を引て黄忠を餘さじと取かこむ。副將張著は三百餘騎にて後陣に打けるが、黄忠が圍まれたるを見て大に怕れ、急に退かんとする所に、魏の大將文聘一軍を引て路を遮り、一人も餘さじと取こむる。此時趙雲は未の刻に及べども黄忠いまだ回らざれば、急に馬に打のりて張翼を呼、日すでに西山に傾けども黄忠なほ回り來らず、今は行て救はんと思ふなり、汝よく此陣を守り、壁の際に多く弩を張て敵を待と云すて、三千餘騎を引て馳たりければ、一番に文聘が手下に慕容烈と云大剛の者、刀を舞して討てかゝる。趙雲馬を交へて只一槍に刺殺し、勢に乘て蒐たりければ、又一手の勢路を横ぎり、魏の大將焦炳と云もの三尖刀を舞して眞さきに馬を出す。趙雲問て曰、蜀の勢は何くにかある。焦炳答て曰、すでに一人も殘さず討ころせり。趙雲大に怒り、馬を飛して一槍に焦炳を刺殺し、追討に北山の麓まで來けるに、魏の勢稻麻竹葦の如く黄忠を取かこんで、餘さじと攻戰ふ。趙雲喊を咄と造り、槍を撚て大勢の中へかけ入左に撞右に突人なき所に入が如く、片々として梨花の舞ひ、紛々として瑞雪の飄へるに異なら

は、いま曹操二十萬の勢を分て要害に陣を取、將軍すでに君の御前にて必ず敵の兵粮を奪はんと云玉へり、是少ばかりの事にあらず、如何なる計をか用ふべき。黄忠が曰、われ自ら先手に進んで敵を討ん。趙雲が曰、われ等先行ん、將軍跡より來り玉へ。黄忠が曰、われは是大將軍、御邊は乃ち副將なり、何ぞ我より先に進み玉ふべき。趙雲が曰、御邊と我と同じく君に事て忠を盡す、豈高下を論ずべきや、鬮を拈て先ゆかん。黄忠これに從ひ、互に鬮を拈けるに、黄忠先に拈あたりければ、趙雲が曰、將軍すでに先すゝみ玉はゞ、某なんぞ助ざるべき、時刻を約して、將軍もし約束の時まで回り玉はずんば、某敵陣を討て相救はん。黄忠が曰、これ誠に理に當れり、我もし午の刻まで回らずんば、必ず來て救ひ玉へとて、兵を引て出にけり。趙雲乃ち副將張翼に申けるは、黄忠もし午の刻まで回らずんば、我自ら行て救ふべし、我陣いま前の漢水の流ありて、地險しく路危し、我もし救の爲に出ば、汝は跡に住りて能々本陣を守り、輕々しく動くことなかれと命じければ、張翼謹で領承す。黄忠はわが陣に回り、副將張著に向て曰、われ夏侯淵が首を取て魏の勢みな膽を冷す、今日又君の命をうけ、行て兵粮を刧す、たゞ五百餘騎を留て本陣を守らせ、汝は吾に從ひ來て共に戰ひを助けよとて、三更に勢を揃て四更に打起、張著を後陣に備てひそかに漢水を打通り、直ちに北山の敵陣に到りて窺ひ見

夏侯淵すでに討れて定軍山破れければ、曹操深く黄忠を恨み、自ら大軍を引て徐晃を先陣とし、漢水の邊に來りければ、張郃、杜襲見えて曰、いま定軍山すでに破れて米倉山あやふし、早く兵粮を運で北山の陣に移し、其後に兵をすゝめ玉へ。曹操これに從ひ、兵を按ていまだ動ず。去ほどに黄忠は夏侯淵が首をとり、葭萌關に來て玄德に見えければ、玄德大に喜び、即時に征西大將軍に封じ、酒宴を成て賀を述玉ふ所に、忽ち大將張著と云もの來り見えて曰、いま曹操自ら二十萬の勢を引て攻きたり、張郃に命じて米倉山の兵粮をみな漢水の北山に運び移させ候。孔明が曰、いま曹操が勢二十萬に餘りたれば、兵粮の續ざらんことを畏れて輕々しくは進み得ず、この時御方の大將に深く敵の境に忍び入、その兵粮を燒て輜重を奪ひ、先曹操が銳氣を挫ぐ者あらば、此に過たる功あらじ。黄忠が曰、老夫ねがはくは行ん。孔明が曰、曹操二十萬の勢を引て自ら來る、必ず能大將あらん、夏侯淵、張郃等と同じからず。玄德の曰、夏侯淵は大將軍たりと云ども、乃ちこれ一勇夫なり、安んぞ張郃に及ぶべき、若張郃を討とらば、夏侯淵を斬たるに十倍せん。黄忠奮然として曰、某ねがはくは行て張郃を斬ん。孔明が曰、御邊行んことを願ひ玉はば、趙雲と共に一手の勢を率して、凡そ事みなよく〳〵議して行ひ玉へ、高名あらば恩賞せん、張著、張翼を二人の副將に用ひ玉へ。黄忠領承して退きければ、趙雲申ける

魏の勢互に震動して右往左往に逃ければ、黄忠勝にのりて定軍山に攻のぼるに、張郃新手を引て防ぎ戰ふ。黄忠、陳式兵を二手に分、兩方より攻たりければ、張郃つひに敗れて本陣へ回らんとするに、忽然として山の傍より一彪の軍馬討て出、大將一騎まつ先にすゝみ、大なる旗を揚たりければ、張郃屹と見るに、常山の趙雲と大文字に書付たり。張郃いよ〳〵驚き、進退門なく路を奪て退かんとすれば、向より杜襲敗軍を引て逃きたり、定軍山の本陣を只いま蜀の大將劉封、孟達に奪はれたりと申す。張郃力を失ひ、共に漢水に出て陣を取けるが、杜襲申けるは、夏侯淵討れて此陣に大將軍なし、然る時は人の心も變を生ずべし、御邊かりに都督の印を掛て、人民の心を安んじ玉へ。張郃げにもとて早馬打て急を告ければ、曹操夏侯淵が討れたるを聞て大に哭き、始めて管輅が云しトを信じて、自ら其詞を思ふに、三八縱横と云しは乃ち建安二十四年なり、黄猪遇〔虎〕とは、乃ち歳己の亥に在なり、定軍〔南〕傷〔折〕一股〔〕とは、乃ち夏侯淵と曹操と兄弟の情ある故なり、眞に希有なる神卜なりとて、人を遣して管輅を尋しむるに、已に行方なく出去けり。

○趙雲大戰〔漢水〕

黄忠法正を監軍として定軍山の敵陣を遶す

黄忠
法正

る者數百の勢にて守りけるが、蜀の勢の大軍にて上るを見て一支も支ず、了に山をすてゝ走りけり。黄忠つひに山を攻とり、定軍山と相雙びたれば、敵の虛實を思ふ樣にぞ窺ひける。法正が曰、夏侯淵もし寄きたらば、御方兵を制して敢て動ず、彼が退て回る時、われ白き旗を颯と揚べし、之を相圖に將軍山を下りに討てかゝり、其備なきを攻玉はば、是乃ち以逸待勞なり、反て大將を害すべし。黄忠これに從ひ、次の日山の半に多く旗を立、鼓を設て敵の來るを窺はせける。去ほどに杜襲にげ回りて敗軍の樣を告ければ、夏侯淵怒て曰、黄忠わが對山を取て陣を張、われ速に打やぶるべし。張郃諫て曰、いま此山を取は乃ち法正が計なり、將軍必ず出玉ふこと勿れ。夏侯淵が曰、黄忠山の頂に在て我陣の虛實を見すかす、安ぞ此を打やぶらざるべき。張郃再三諫むれども夏侯淵つひに聽ず、兵を半すぎ留めて本陣を守らせ、自ら黄忠が陣に推よせ、山の麓にひかへて辰の時より午の下りまで散々に罵れども、黄忠さらに山を下ず。法正頂の上より望み見るに、魏の勢みな倦つかれて大半は馬上にて睡りなんどしければ、白き旗を颯と指あげたるに、山上の軍兵一度に鼓を鳴し角を吹、喊の聲大に響て潮の湧が如くに討て下り、黄忠一騎眞さきに進んで、天くづれ地塌の勢ひ、直ちに大勢の中を蒐とほりけるに、魏の勢あらけて散々に亂れしかば、黄忠刀を舞して夏侯淵が頸より肩を掛て眞二つに斬て落す。

侯淵に告ければ、夏侯淵いそぎ黄忠が陣へ人を遣し、陳式いまだ生て此ところにあり、願くは夏侯尚と換んとぞ云送りける。黄忠乃ち明日陣の前にて互に快く換んと答へ、次の日兩軍みな山際の濶き所に出て陣を張、黄忠と夏侯淵と自ら馬を出して問答し、兩方の生取を引てみな甲を被せず、一度に聲を合せて各走り囘りけるに、夏侯尚すでに本陣に入んとする所を、黄忠弓を挽て兵と射るに、其矢夏侯尚が脊に中て地の上に倒れければ、夏侯淵大に怒り、馬を飛して黄忠に討てかゝり、二十餘合戰ふ所に、忽ち魏の陣に金を鳴して兵を收めければ、夏侯淵心驚き、急に退て囘らんとするに、黄忠勢ひに乘て追かけしかば、魏の勢討るゝ者その數を知ず。夏侯淵本陣に囘り、何とて金を鳴したると問ければ、四方の山の間に多く蜀の兵の旗あり、恐らくは伏勢ならん、此ゆゑに軍を收めたりと答ふ。夏侯淵げにもと同じて固く守て出あはず。黄忠は定軍山に迫りよせ、法正と計を議しければ、法正手を以て教て曰、定軍山の西に巍然として高き一つの山あり、四方みな險阻にして容易は上り難し、若いかにもしてこの山を攻とらば、定軍山の敵陣を思ふ樣に窺ひ見ん、然る時は定軍山を取こと又掌の中にあり。黄忠これを仰ぎ見るに、其山甚だ高うして頂やゝ平に、纔の敵こゝを固めたりと見えければ、其夜の二更に黄忠兵を引て金を鳴し鼓をうち、喊を造て攻のぼる。元來この山には魏の副將杜襲と云

敵に當り玉ふべき、某ねがはくは千餘騎を引て後の細路より山に上り、兩方より挾んで之を討ん。黃忠しかるべしと許しければ、陳式山の後より喊を咄と造て攻のぼり、夏侯尙と鋒を交へて戰ひけるが、夏侯尙いつはり負て逃わしる。陳式勝に乘て追蒐ければ、黃忠その計を悟り、急に跡より進みけるに、山の上より大木を投落し鐵砲を打出しければ、さらに進むこと能ず。陳式も半途より引回さんとするに、夏侯淵勢に乘て追かけ、了に陳式を生取ければ、手下の勢こと〴〵く魏に降る。黃忠この由を聞て大に驚き、法正と議しければ、法正が曰、夏侯淵は性甚だ躁うして、只一勇の力を賴む、今御方の兵を激し、次第々々に陣屋を造り、山の麓に近づきなば、夏侯淵必ず山を下て寄きたるべし、是反ㇾ客爲ㇾ主の計なり、凡そ坐ら敵を防ぐは、逸を以て勞を討なり、寄手は弱して防ぐ方は强し、夏侯淵もし來らば我必ず生取ん。黃忠これに從ひ、諸軍に恩賞を與へてその志を激し、自ら進んで陣屋を造り、數日住て又すゝんで陣屋を造り、一營々々相續て次第に山に近付ければ、夏侯淵これを望み、自ら出て戰んとす。張郃が曰、これは反ㇾ客爲ㇾ主の計なり、必ずかる〴〵しく出玉ふな、戰ふ時は失あらん。夏侯淵さらに用ひず、夏侯尙に命じて出て戰はしめ、數千の兵を率して暮方に黃忠が陣に推よせければ、黃忠刀を提て出むかへ、夏侯尙と馬を交へて只一合に生どりけり。魏の勢にげ回りて夏

爲レ本、行レ之以二智計一、若但任レ勇、卽是一愚夫之敵耳。吾今屯二大軍於南鄭一、欲レ觀二卿之妙才一、勿レ辱二二字一可也。(妙才淵之字也)

夏侯淵見了て大に喜び、重く使を持なして卽時に兵を調て張郃に申けるは、今魏王の大軍南鄭に屯し、某に命じて敵を討しめ玉ふ、吾久しく此所を守て一度も墓々しき勝負をせず、明日自ら出て快く戰ひ、先黃忠を生取べし。張郃が曰、必ず輕々しく出玉ふこと勿れ、黃忠は智勇共に備りて、殊さら法正よく計を用ふ、この所幸に要害よければ、只固く守て出玉ふこと勿れ。夏侯淵が曰、われ久しく此所に在ながら、若他人に功を奪はれなば、何の面目ありて魏王に見んや、御邊はよくこの所を守り玉へ、我は山を下て戰はんとて、諸軍に向て問て曰、たれか先手に進んで敵の樣を窺はん。夏侯尙が曰、某ねがはくは行ん。夏侯淵が曰、汝先手に進まんと欲せば、黃忠と鋒を交へて詐りまけて引退け、われ深き計あり、必ず黃忠を擒にせん。夏侯尙その命に順ひ、三千餘騎を引て山を下る。この時黃忠は兵を引て法正と定軍山の麓に推よせ、數日戰ひを催すに、魏の勢固く守て出ざりければ、直ちに攻のぼらんとすれども、山路甚だ險阻にして敵の計も知がたければ、只麓に陣を取て居たる所に、斥候の士卒山の上より魏の勢きたると報じければ、黃忠自ら出んとするに、大將陳式すゝみ出て曰、老將軍なんぞ自らこの

みな首を低て答ふる者なし。其内一人すゝみ出、某すでに此意を知れりと云ものあり。諸人これを見れば主簿楊修字は徳祖なり。曹操が曰、汝しばらく言ことなかれ、吾工夫して曉るべしとて、馬に乘て出けるが、三里ばかり來て忽ち悟り、笑て楊修に問て曰、汝試に言候へ。楊修が曰、これは隱し詞にて候、黄絹は乃ち色の絲、これ絶の字なり、幼婦は乃ち少き女、これ妙の字なり、外孫は乃ち女の子、これ好の字なり、虀臼は乃ち辛きを受る器、これ辭の字なり、之を總て絶妙好辭の四字となる、此は邯鄲淳が文を贊して絶れて妙なる好辭なりと美たる意にて候。曹操大に驚き、我意も此の如しとて直ちに南鄭に到りければ、曹洪出むかへ、先張郃が度々打負たる事を語るに、曹操が曰、これ張郃が罪にあらず、勝負は武士の常の道なり。曹洪が曰、玄徳自ら大軍を起して黄忠に定軍山を攻させ候へども、夏侯淵大王の來り玉ふと聞て固く守て出あはず。曹操が曰、もし出て戰はざる時は臆せるに似たり、早く使節を馳て令を傳へ、快く出て戰はしむべし。劉曄諫めて曰、夏侯淵は性急にして甚だ剛なり、恐らくは敵の計に落入ん。曹操聽ず、手づから王命を寫して定軍山へ使を遣しければ、夏侯淵披き見に、其文に曰、

詔示二夏侯淵一知レ之。凡爲レ將者、當下以二剛柔一相濟上、不レ可二徒恃一其勇一耳。然爲レ將固當下以レ勇

すめ自ら近習の者共百騎ばかりを引て董紀が宅に到りければ、折ふし董紀は外に出て在あはず、妻の蔡琰ばかり居たりしが、曹操が來れると聞て急に自ら出迎ふ。曹操堂に上て坐し、壁の上に一つの碑の文を書たる畫軸あるを見て、此はいかなる物ぞと問ければ、蔡琰答て曰、これは曹娥と云し者が碑の文にて候、昔し和帝の朝に、會稽の上虞と云所に一人の師巫あり、名を曹盱と云てよく婆娑の神樂をなす、五月五日醉て舟の中に舞けるが、愰て江に落、水に溺れて死して候、その女年十四歳なりけるが、江を遶て哭き悲むこと七日七夜なり、了に身を投て淵に沈みけるが、後五日を歴て自ら父が屍を負て江に浮べり、里の者共これを恷で岸の邊に葬りしを、程經て上虞の令度尙と云人帝に奏して孝女なりとし、邯鄲淳に文章を作らせ、石に刻で其事を記す時に、邯鄲淳は年わづかに十三歳なりしが、筆を揮て此文を作り、再び一字をも改ためずとかや、我父の蔡邕この由を聞て、墓に行て其文を見んとするに、日已に暮て黑かりしかば、手を以て石を摸、その刻める筆畫を探て之を讀、筆を求めて八字をその後に書付しを、後の人つひに石に刻めり、此は父が書たる筆の跡にて候と語りければ、曹操後に書たる八字を見るに、黃絹幼婦外孫齏臼とあり。仍ち蔡琰に向て、汝この意を知たるかと問に、答て曰、父が書たる字にて候へども、妾いまだ其意を知候はず。曹操もろ〳〵の大將に汝等知たるかと問に、

議するに、長史劉曄が曰、漢中は土肥民殷にして眞に國の藩屏なり、若一たび破るゝ時は都の中震動せん、大王勞を憚らず、御駕自ら征伐し玉へ。曹操が曰、われ當年汝が言を用ひず、今これを後悔すとて、卽時に四十萬の大軍を起し、七月に都を起て九月に長安に到り、兵を三手に分て自ら中軍に備へ、夏侯惇を先手とし曹休を後陣とす。曹操は白き馬にのり、黃金の鞍を備て玉の轡をとり、錦の袍を著たる武士手に紅羅の傘蓋を捧て、左右に金瓜銀鉞戈矛を指あげ、天子の鑾駕を備へて龍鳳日月の旗を立、龍虎の官軍二萬五千、五手に分れてみな五色の旗を按し、その勢ひあたりを拂て已に潼關まで打出、遙に樹木の茂りたるを見てあれは何くぞと問ければ、近侍の者答て曰、これは藍田と申す所にて、林の內は乃ち蔡邕が山庄にて候。曹操むかし蔡邕と交り深かりしが、其女蔡琰と云しもの衞道玠に嫁しけるが、北虜韃靼に生取れて胡の爲に妻とせられ、後に二人の子を產り、されども住なれし故里を離れて沙漠不毛の國に捉れたれば、涙の乾く隙もなく、常に胡の弄ぶ笳と云吹物を聞て鄕思の悲に堪ず、自ら十八曲を作りけり。此曲相傳へて中國に流布しければ、曹操これを聞て深く憐に思ひ、韃靼國へ人を遣し、千兩の金を以て蔡琰を買けるに、胡の左賢王元より曹操が勢ひを畏れて了に蔡琰を回しける。曹操乃ち董紀と云ものに與へて妻と成たりけるが、この日蔡邕が事を思ひ出し、大軍を先にす

ず、況や某いまだ七十に及ず、何ゆゑに老たりとて輕んじ玉ふぞ、某只一人三千餘騎を引て必ず夏侯淵が首を取ん。孔明さらに許さゞりしかば、黄忠再三行んことを求む。孔明が曰、御邊强て行玉はば、法正を監軍として伴ひ行、萬づ相議して輕々しくすること勿れ、我又兵を以て援べし。黄忠大に喜び、兵を引て出ければ、孔明密に玄德に向て申けるは、この老將は詞を以て激さざれば行ても功をなすこと能ず、今すでに打起て候、又兵を分て援くべし。玄德しかるべしと同じ玉へば、孔明乃ち趙雲に申けるは、御邊は一手の勢を引て、小路より奇兵を出して黄忠に力を添玉へ、黄忠もし打勝ば必ず出玉ふこと勿れ、彼がまけ色に成たるを見玉はば、速に出て救ひ玉へ、又劉封、孟達は共に三千餘騎を引て、山中の險阻なる所に多く旗を立て御方の勢ひを壯にし、敵の心を疑はしむべし、又嚴顏は巴西、閬中に行て難所を守り、張飛、魏延に替て能々固め、張飛、魏延には還て漢中を取しむべし、又下辨へ人を遣して馬超にわが計を傳しむべしとて手分すでに定りければ、思々に打起けり。去ほどに張郃、夏侯尚は天蕩山を追落され、定軍山に來て夏侯淵に見え、御方大將を討れ軍士を損じたるに、玄德自ら蜀の大軍を起して漢中を取んとす、早く魏王に救の勢を乞玉へと云ければ、夏侯淵大に驚き、先この由を曹洪に報ず。曹洪早馬を飛して都へ訴ければ、曹操これを聞ていそぎ文武の大將を集めて相

○黄忠馘夏侯淵

時に建安二十三年秋七月の吉日に、玄德十萬の勢を起し、趙雲を先手として葭萌關に出て陣をとり、使を馳て黄忠、嚴顔を呼よせ、重く恩賞を賜ひ、人みな汝二人を老武者とて侮りしが、孔明ひとり其能を知て敵軍に向はしむるに、果して世に罕なる功を立たり、漢中の定軍山は乃ち南鄭の要害、敵の兵粮を聚たる會源なり、若この山を取ば陽平の一道は心にかゝること有べからず、汝これを取べきかと問玉ふに、黄忠欣然として領承し、兵を引て出んとしければ、孔明が曰、御邊まことに勇なりと云ども、夏侯淵が對手にあらず、夏侯淵は深く韜略に通じて善兵を用ふる機を曉る、曹操この故に西涼の鎭守とす、今漢中に出て陣を取ものは、曹操よく夏侯淵が大將の才あることを知れるゆゑなり、御邊すでに張郃に勝玉へども、夏侯淵には及ぶまじ、早く荊州へ代の大將を遣し、關羽を招て夏侯淵と戰はしめん。黄忠奮然として答て曰、むかし廉頗は年八十に及んでなほ米一斗肉十斤を食ふ、天下の諸侯これを畏れて敢て趙の境を犯

に火焰山谷に滿て黄忠、嚴顏前後より攻ければ、張郃、夏侯尙ふせぐこと能ず。殊に夏侯德、韓浩が討れたるを見て諸軍力を失ひ我先にと逃わしりければ、天蕩山を打すて定軍山に落あつまり夏侯淵と一手になる。黄忠、嚴顏十分に打かち、成都へ早馬を馳て右の趣を報じければ、玄德限なく喜び、諸大將を集めて喜を述玉ふ。時に法正すゝみ出て曰、むかし曹操が一鼓に張魯を破りて漢中を平げし時、その勢ひに乘て蜀を攻ることを成ず、夏侯淵、張郃二人を留て漢中を守しめ自ら都に囘りしものは、其志の及ばざるに有ず、力の足ざるに依てなり、今曹操都の中に內變ありて自ら外に出ること能ず、況や夏侯淵と張郃とが才略まことに國の將帥とするに勝ず、若蜀の大軍を起して君自らせめかゝり玉はば、漢中を取んこと掌を反すよりも易し、事治りて後兵粮を貯へ士卒を養ひ、王室を尊で固く險阻を守り、曹操を圖の久計を成ん、これ天の與る時節失ふべからずと勸ければ、玄德げにもと同じて卽時に十萬の勢を起し日を擇で打起玉ふ。

すて此所まで來れりと云ければ、夏侯德が曰、この山に十萬の兵あり、汝これを分て再び推よせ、原の陣屋を取返せ。張郃が曰、只固く守て出ることなく敵の樣を窺ひ玉へ。その詞いまだ終ざるに、忽然として鼓の聲響き喊の聲地を震ひ、追々人走り來て黃忠攻かゝると騷ければ、夏侯德笑て曰、黃忠さらに兵法を知ず、只一勇の力のみ。張郃が曰、必ず侮玉ふな、黃忠は智勇共に備れり。夏侯德が曰、蜀の勢遠路を越て終夜疲れたり、然るに輕々しく重地に入、これ計を知ざるなり。張郃が曰、必ず大なる計あらん、只よく守て出べからず。韓浩が曰、某ねがはくは三千餘騎を借て老將が首を取ん。夏侯德しかるべしと同じければ、韓浩兵を引て山を下る。この時日すでに西山に落けれども黃忠なほ兵を進めければ、劉封諫て曰、日も已に暮ぬ、軍勢も疲たり、長追は無用なり。黃忠あざ笑て曰、昔し哲人は時に順て動き知者は機を見て發す、今天われを助て不思議の功を與へ玉ふ、取ざるは是天に逆ふなりとて驀地暗に上り鼓を打て喊を造りければ、韓浩三千餘騎を率して坂中に防ぎ、自ら馬を出しければ、黃忠刀を舞して打て蒐り、只一合にして韓浩を斬て落す。夏侯尙この由を聞て急に兵を引きて來りければ、俄に山の後より喊の聲天地を碎き、陣々に火を掛て一手の勢討て出たり。夏侯德大に驚き、自ら出て火を救んとするに、嚴顏刀を舞して討てかゝり、夏侯德を馬より下に斬て落す。去ほど

とく睡り居たる所に、思ひも寄ず黄忠が五千餘騎鬨を咄と造て太山の崩る如く散々に蒐たりければ、上を下へと騒動して或は弦もなき弓に矢をはげ縛げる馬にのりて我よ人のよと爭ひ、人馬ふみ殺さるゝ者その數を知ず。夏侯尙と韓浩とは步立に成て辛き命を扶かりけるが、一夜の合戰に三箇所の陣屋を攻とられ、討れたる者麻の如し。黄忠は敵の貯たる兵粮武具を取て孟達に運び入させ、息をも繼ず兵を進めければ、劉封が曰、手下の勢みな疲れたり、暫く此にて休べし。黄忠が曰、古より不㆑入㆓虎穴㆒焉得㆓虎子㆒と云り、身を捨てこそ手柄をも高名をもせめ、續や兵とて自ら眞先に進めば、五千の精兵飛が如くに追かけ、其勢ひ甚だ鋭なれば、魏の勢大に亂れて一支も支ず互に自ら衝動して死する者數を知ず。數箇所の陣を打すて漢水の邊まで落のび、張郃屹と心付て夏侯尙、韓浩を尋ねて申けるは、天蕩山は御方の兵粮を貯へたる所にて、米倉山に打つゞき皆これ漢中の軍士一命を寄る所なり、若この所に失あらば漢中自ら破るべし。夏侯尙が曰、米倉山には吾叔の夏侯淵大軍にて陣をとり、定軍山に續きたれば少しも憂ること無るべし、天蕩山にはわが兄の夏侯德兼てより陣を取、われ等も行て一手になるべしとて、張郃、韓浩と共に天蕩山に到り夏侯德に見えて、黄忠驕兵の計を用ひて吾等を關の前に帶き寄、勢ひに乘て打て出しゆゑ其鋒あたるべからず、終夜追れて許多の兵粮武具を打

せければ、張郃諫て曰、黄忠二日打まけたるは必ず詭の計ならん、輕々しく追玉ふな。夏侯尚叱て曰、汝が如き臆病ものが敵を怕れて宕渠山の陣屋を破られ、多くの人馬を失ひて見苦しき羞を被る、只口を閉て我功を成を見物せよと云ければ、張郃顔を赧して退きける。次の日魏の勢推よせければ、黄忠又やぶれて二十里あまり退き、毎日打まけて散々に走り、葭萌關に入て敢て出ざりしかば、夏侯尚兵を引て關前に陣を取。孟達この體を見て密に早馬を飛し、黄忠が累に打まけて五箇所の陣を敵に奪はれたりと報じければ、玄德大に驚き孔明を召て問玉ふ。孔明が曰、これは黄忠が驕兵の計なり、少しも驚き玉ふこと勿れ。趙雲等敢て信なりとせざりしかば玄德も心の中安からず。劉封に一手の勢を付、行て黄忠を援させらる。劉封すでに葭萌關に到りければ、黄忠問て曰、なに故に來り玉へる。劉封が曰、わが父將軍の打まけ玉ふ由を聞て某に命じて援しめ玉ふ。黄忠笑て曰、これは老夫が驕兵の計なり、今夜一戰に悉く敵を破るを見玉へ、陣々を皆とり返し敵の棄たる兵粮物の具を奪ひ取ん、我數日いつはりて負たりしは、五箇所の陣屋を敵に借て飽まで兵粮の類を籠させ、一夜の内に取んためなり、霍峻は關門を守り孟達は奪ひとる兵粮を運び玉へ、劉封は我自ら敵を破るを見玉へとて、其夜の二更に自ら五千餘騎を率して直ちに門を開て討て下る。魏の勢は數日敵の出ざるに油斷してことご

相扶て敵を防しめ事の變を免れ玉へ。曹洪これに從ひ夏侯惇が姪の夏侯尚に韓玄が弟の韓浩を副て五千餘騎を與へ、行て張郃を扶けしむ。張郃新手の加りたるを喜び諸將を集て相議し、黄忠年老たりと云ども甚だ以て英雄なるに、又嚴顏力を助て輕々しくは戰ひがたしと云ひければ、韓浩が曰、われ長沙に在し時よく黄忠が擧動を知れり、魏延と共に心を合してわが兄を殺せし奴なり、今幸に此所にて出合たり、必ず仇を報ずべしとて、夏侯尚と新手の勢を率し陣を張て敵を待つ。黄忠は毎日その邊の地理を見廻りけるに、ある時嚴顏申けるは、此所に天蕩山と云る山あり、乃ち曹操が兵粮を貯て長久の計をなす所なり、若この山を攻取ば魏の勢みな漢中に留ること能じ。黄忠喜でこの計わが心に合へり、箇樣々々にし玉へと低語ければ、嚴顏よく計を約し、自ら一軍を引て打向ふ。黄忠は夏侯尚が寄ると聞て兵を揃て待ければ、魏の陣中より韓浩眞先に進み出大音あげて、黄忠無義の逆賊いづくにか在と罵り、槍を撚て蒐りければ、黄忠刀を舞して向ふ所に夏侯尚又討て出挾んで攻ければ、黄忠しばらく支てふせぎ戰ひ詐り負て逃わしる。夏侯尚兵を驅て二十里あまり追かけ、黄忠が陣屋を奪ひ取ければ、黄忠又假に陣屋を造て兵を屯す。次の日魏の勢大に進みければ、黄忠打て出て暫く戰ひ又打まけて逃わしる。夏侯尚、韓浩二十里あまり追かけ、又黄忠が陣屋を奪ひ取、張郃を呼で跡の陣を守ら

を攻、なにゆゑに此老人を用ひて小兒の戲を爲玉ふぞ、若葭萌關に失ある時は蜀中危し、若又張郃を破らば勢に乘て漢中を取べし、軍師よく之を察し玉へ。孔明が曰、汝等みなこの二人の年老たるを以て輕んずることなかれ、我料るに漢中を取ことは只この二人が手の中にあり。趙雲等これを聞て冷笑て退散す。黄忠、嚴顏二人兵を引て葭萌關に著ければ、孟達、霍峻等その年老たるを見て大に笑ひ、孔明は人を用ふることを知玉はず、浩る老人は戰はずとも死すべきに、豈軍をして活ることあらんやと嘲て關守の印を渡しければ、黄忠、嚴顏二人の旗を前なる山の上に立、敵に其名を望み知しむ。黄忠密に嚴顏に向て申けるは、御邊諸人の氣色を見玉ひけるか、皆われ等二人が年老たるを笑ふなり、不思議の功を立て諸人の目を驚すべしとて兵を引て出ければ、張郃も馬を出して大音あげ、汝は其年まで世に在て猶羞をも知ず陣前に出て戰はんとするかと呼はりければ、黄忠大に怒り、汝わが年老たるを欺か、我手の中の刀はいまだ年は寄ぬぞ、試て廣言吐と罵り、馬を打て蒐りければ、張郃槍を撚て馳より、二人戰ひ二十餘合に及びける時忽然として張郃が勢後より亂れ、喊の聲地を震て嚴顏が勢小路より廻り挾んで攻ければ、張郃大に敗れ八九十里引退く。曹洪又張郃が敗れたる由を聞ていそぎ罪を正さんと怒りければ、郭淮申けるは、今もし罪を問んとせば張郃必ず蜀に降らん、不如別に大將を遣し、

に關を開て出けるが、孟達自ら張郃と戰ひ大に破れて逃かへる。霍峻急ぎ成都に早馬打て救を求ければ、玄德これを聞て孔明と議し玉ふ。孔明もろ〳〵の大將を集めて曰、いま葭萠關より急を告、早く閬中へ人を遣し張飛を召回して張郃を防しめん。法正が曰、張飛いま瓦口關に兵を屯して閬中を總守る、これ又第一の所なり、若張飛を召回し玉はば必ず事の變あらん、自餘の大將一人を擇で張郃を防ぎ玉へ。孔明笑て曰、張郃は魏の名將よの常の輩にあらず、張飛より外には及ぶ者あらじ。時に一人聲を勵して曰、軍師いかなれば人を芥の如くに輕んじ玉ふぞ、我等不才なりと申せども願くは張郃が首を斬て獻らん。諸人これを見れば乃ち老將黃忠なり。孔明が曰、御邊まことに勇なりとは云ながら、年すでに老たれば張郃が對手に不足なり。黃忠是を聞て白髮みな倒に立怒て申けるは、某年老たりとは申せども、臂に三石の弓を開き身に千斤の力あり、何ぞ老たりとて用ひ玉はぬ。孔明が曰、御邊すでに七十に近ければ誰か老たりと云ざるべき。黃忠急に走て堂を下り、長き刀を取て水車に舞し、掄動して飛が如く、壁に掛たる硬弓を二張取て一度に之を挽折ければ、孔明が曰、御邊必ず行玉はば一人の副將を伴ひ玉へ。黃忠が曰、嚴顏は某と共に年老たり、伴ひ行て敵を破り、萬一失あらば白髮の首を獻らん。玄德大に喜び然るべしと許し玉ひければ、趙雲等みな諫て曰、いま張郃兵を引て葭萠關

張郃前後に度を失ひ小路より走らんとすれば、岩石多く聳て馬の蹄堪がたきに、張飛すき間もなく追きたる。この故に馬を乗すて木の根岩の稜に攫み付て命を扶るもの十餘人這々南鄭に回りければ、曹洪大に怒り、われ再三出ること勿れと云しを、汝軍令狀を書て無用なる軍をして三萬の兵を失へり、尚よくも生ては回りたると云て引出して首を刎んとしければ、行軍司馬の官に太原陽興の郭淮字は伯濟と云る者あり。曹洪を諫て曰、三軍は易レ得一將は難レ求と古人も詞を傳たり、張郃いま罪ありとは申せども元より魏王の愛し玉ふ大將なり、暫く一命を扶け、再び五千餘騎を授けて葭萌關を攻させ玉はば、蜀の軍勢この關を固ん爲に悉く引回して漢中自ら平安ならん、若又功を成ずんば二つの罪を倶に誅し玉へ。曹洪げにもと同じて張郃が一命を扶て又五千の兵を分あたへ、蜀の葭萌關へ攻かゝらしむ。

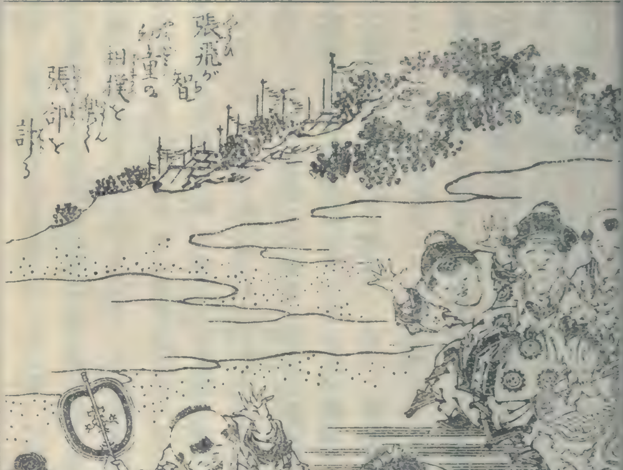
○黄忠嚴顔破二魏兵一

去ほどに張郃五千餘騎を率して葭萌關に推よせければ、關を守る蜀の大將孟達、霍峻二人いかがせんと議しけるに、霍峻は只よく守て出ること無るべしと云。孟達は早く打て出んと云て了

ことぐく燒て黑烟地に蓋ひ、魏の勢一人もなく燒殺さる。張飛勝に乘て勇み進ければ、張郃のこり少に討なされ、瓦口關に攀のぼり門を鎖して緊しく守る。張飛、魏延兵を引きて推よせ、數日せむれども要害險阻にして近づくべき樣なかりしかば、張飛二十里退て陣を取、自ら數十騎を引て山路を巡り見るに、ある日男女打まじはりたる百姓共脊に物を負て藤を攀葛に取つき山に上て去ければ、張飛馬上にて鞭をあけ魏延に向て申けるは、瓦口關をやぶること只この百姓の身の上にあり、汝等兵共百姓を驚すことなく此所へ呼きたれと云ければ、須臾にして招き來る。張飛問て曰、汝等いかなれば此山路を超んとする。百姓答て曰、某等はみな漢中の者なるが、今故鄕へ回らんとしてこの所へきたり本道には合戰ありと承はり、此ゆゑに蒼溪をすぎて梓潼山の檜釿川より漢中へ回り候。張飛が曰、この路瓦口關とは隔りけるか。百姓答て曰、梓潼山の小路は瓦口關の後に通ぜり。張飛限なく喜び本陣に回て酒をのませ引出物をとらせ、魏延に申けるは、御邊は兵を引て瓦口關に攻かゝり玉へ、我は百姓を案内者とし精兵五百餘騎を引て小路より後に廻らんとて共に兵を揃て出向ふ。この時張郃は救の勢の來らざるを見て心の中安からざる所に、魏延關を攻ると告ければ急に山を下て戰はんとするに、忽ち關の後より十方に火を掛、いづくの敵とも知ず寄來れりと云て上を下へと騷ぎければ、張郃こは如何にと驚き

出敵の後を遮れと云ふくめ、自ら一陣に進みければ、蜀の大將雷同馬を飛して討て蒐り、戰二三合にして張郃いつはりて走ければ、雷同のがさじと追きたるに、魏の伏勢一度に起りて其後を遮りしかば、雷同驚て退かんとする時張郃馬を引かへして雷同を斬て落す。張飛これを見て眼を怒し、直ちに馬を交へて五六合戰ひければ、張郃又いつはりて逃わしる。張飛計なりと知て追ざりしかば張郃又討てかゝる。此の如くなる事三度に及びければ、張飛敵の伏勢あることを知て本陣へ回り、魏延を呼で申けるは、張郃伏勢を以て雷同を欺き殺して又われを欺かんとす、敵の計に就て我反て計を成ん。魏延が曰、いかなる計ぞ。張飛が曰、われ明日一軍を引て戰ひを初ん、御邊は精兵を引て山の際に伏、敵の伏勢わが後を遮らんとするを見ば急に兵を二手に分て之を防ぎ、一手は車に乾きたる柴を積小路を塞で火を付よ、我必ず張郃を擒にして雷同が仇を報ずべし。魏延計を受て兵を揃ければ、次の日張飛まづ一軍を引て魏の陣へ推よするに、張郃自ら馬を出し、戰十合あまりにして又いつはりて逃わしる。張飛兵を驅て追蒐ければ、張郃心のまゝに欺きよせ、山の腰を過る時一度に取て回して又戰ふ。時に魏の伏の勢左右より出て張飛が後を遮らんとするに、思ひも寄ず魏延が勢殺到し、散々に打やぶりて谷の中に追こめ、柴の車を以て其細き路を塞ぎ一齊に火を付たれば、火焰天を焦し山中の草木

蒙頭、蕩石二箇所の勢を悉く出して左右に備へ、月の明なるに乘て直に山を下り、張飛が陣に打向て遙に望めば、張飛なほ中軍に在て酒を飲。張郃喊を咄と造り鼓を打鑼を鳴してかけ入けるに、張飛なほ端然として動ことなし。張郃馬を躍せ前に向て一槍につき通ければ、人にはあらで草にて作れる人形なり。大に驚き急に退んとする時忽然として鐵砲響き、一人の大將眞先に進んで路を塞ぎ、虎鬚倒に擧て眼は百練の鏡に朱を洒たるが如く、叫ぶ聲雷の如くにして一丈八尺の矛を舞し、燕人張飛こゝに在と云まゝに張郃に討て蒐り、二人火の光の内にて四五十合ぞ戰ひける。左右に備たる蒙頭、蕩石二手の勢も、魏延、雷同に討やぶられて皆散々に逃わしる。張郃は張飛と又百餘合戰ひけるが、山の上に火掛て蜀の勢みな後へ廻りければ、馬を打て走るを張飛すき間もなく追かけ、了に三箇所に構たる張郃が陣を攻取、早馬を以て成都に報じければ、玄德限なく喜玉ふ。張郃は殘り少に成て這々瓦口關まで落延、討れたるものを數ふれば三萬餘騎の勢すでに二萬餘人は討れにけり。斯ては叶ふまじとて曹洪に救を求ければ、曹洪大に怒り、汝わが命を用ひず、慾なる軍をして敵に要害を奪はれたり、今われ汝を救ふ兵なし、汝いそぎ敵を破て本の陣屋を取囘せと責ければ、張郃驚き怕れ、計を定めて兵を二手に分、瓦口關の前に埋伏して、我いつはり負て引退かば張飛必ず追きたるべし、那時急に打て


張飛が智
幼童の相撲と欺く
張郃と詐る

張飛

と戰ふ由を聞て使を馳て軍の様を問玉ふに、使回り張飛たゞ毎日酒を飲で敵を欺くと告ければ、玄德驚き孔明を召てこの事を議し玉ふ。孔明笑て曰、かの地に恐らくは美酒あるまじ、成都の名酒五十樽を調へ車三輛に載て早々に送り遣はし、張飛に之を飲しめ玉へ。玄德の曰、張飛元より酒をこのんで動れば事を失る、然るに美酒を送れとは何ゆゑぞ、醉中必す張郃に害せらるべし。孔明笑て申けるは、君は張飛と年久しく兄弟の交を成玉へども其心を知玉はず、張飛いつぞや蜀に入時嚴顏を釋して御方とせし如は、これ勇夫の及ぶ所にあらず、今又宕渠の山前に在て張郃と對陣すること五十餘日、近ごろ酒を飲で張郃を罵り辱しめ、傍若無人の體をなすものは酒を貪るにあらず、乃ち張郃を欺の計なり。玄德の曰、もし左様なる事も有べきなれどもわが心さらに安からず、魏延を遣して援しめん。孔明乃ち魏延に命じて成都の名酒を車にのせ、黄なる旗をさして軍前公用美酒と書つけ、送りて宕渠の陣に到らしむ。魏延直ちに行て酒を賜ふ由を語りければ、張飛拜して之を受、乃ち魏延と雷同とを左右の羽翼となし、只軍中に紅の旗を動すを見ばこと〴〵く討て出よとて、陣中に酒肴を取ちらし相集て笑ひ樂む。張郃この由を聞て山の上より遙に望めば、張飛中軍に平坐して酒を飲、二人の童子に相撲を取せて戲れ居たり。張郃勃然として怒り、張飛あまりに我を欺く、今夜山を下りて討やぶるべしとて、

に授け、自ら一萬餘騎を引て閬中を三十里ばかり出ければ、端なく張郃が勢と行合、兩軍相對して張飛馬を出しければ、張郃槍を撚て突て蒐り、戰ひ二十餘合に及びける時張郃が勢みな後より亂る。元來雷同五千餘騎を引て谷の內に埋伏しけるが、山々峯々に旗を指揚て敵の心を疑はしめけるゆゑ、張郃後を遮られんことを怕れ急に退かんとするに、蜀の勢前後より攻めたりしかば、魏の兵討るゝ者その數を知ず。張飛終夜追て直に宕渠山に迫りければ、張郃陣中に遁げ入、堅く守て出合ず。張飛宕渠の陣を十里へだてて陣を取ければ、張郃高き山の頂に上り、鼓をうち笛を吹酒を飲で更に下らず。張飛兵に命じて散々に罵り辱しめけれども張郃敢て出ざりければ、張飛次の日雷同を遣して罵らしむるに、張郃山の頂に在ていよ〳〵下らず。雷同腹を立兵を引て山に上らんとすれば、大木大石雨の降が如に抛落し、蜀の勢矢庭に死するもの十餘人、雷同急に退かんとする時、蕩石、蒙頭の兩陣より魏の勢一度に討て出散々に蒐やぶる。雷同大に亂れて囘りければ、次の日張飛自ら推よせ樣々に罵れども張郃さらに出ず、只山の頂に在て張飛を笑ひ辱しめければ、張飛すべき樣なく相拒で五十餘日に及び、安からぬ事に思ひければ、屹と計を案じ出して山の前に陣屋を構へ、毎日酒を飲で大に醉、山の麓に平坐して樣樣に罵り辱しむれども張郃敢出ざりけり。この時玄德は成都に居玉ひ、張飛、馬超が魏の勢

超に見えければ、馬超怒て曰、汝わが下知もなきに敵を輕んじて何とて斯は破られたる。呉蘭が曰、任夔某が命を用ひず、此ゆゑに破れたり。馬超が曰、只固く險阻を守り、出て戰ふことあるべからず、本國へ人を遣し、その消息を聞て後に敵を破らんとて一人も出て戰はず。曹洪も馬超が出ざるを見て計あらん事を怕れ、退いて南鄭に回りければ、張郃申しけるは、將軍すでに蜀の大將を討取ながら、反て退き玉ふは何事ぞ。曹洪が曰、我久しく馬超が出ざるを見るに、恐らくは深き計あらん、都にて管輅が卜に、此處にて必ず一人の大將を失んと云り、我この故に退たり。張郃大に笑て曰、將軍すでに五十に近き歳をして卜を以て心を迷し玉ふか、某ねがはくは兵を引てまづ巴西の敵を破らん。曹洪が曰、巴西には蜀の大將張飛あり、等閑の敵にあらず。張郃が曰、人みな張飛を怕るれども、某は小兒の如に存ずるなり、必ず生取て持きたらん。曹洪が曰、もし失あらば如何ん。張郃が曰、明かに軍法を正し玉へと云て、了に三萬餘騎を引て打て出三箇所に陣を張、一つは宕渠寨と號し、一つは蒙頭寨と號し、一つは蕩石寨と號し、兵を分て守らしめ、自ら一萬五千餘騎を率して巴西に推よせければ、張飛これを聞て先手の大將雷同と計を議するに、雷同が曰、閬中は山嶮く地僻て伏勢を用ふべし、將軍自ら出て戰ひ玉へ、某奇兵を出して張郃を手捉にせん。張飛これに從ひ精兵五千餘騎を雷同

紅の旗の下なる官人を搦め捉ければ、諸人みな罪なしと叫ぶ。曹操が曰、汝等が心は火を救はん爲に有ず、實は敵を助て我を殺んとせし者なりとて、漳河の邊に引出して三百餘人が首を刎、白き旗の下に立たる者は初の如く都に回らしめ、鍾繇を相國とし華歆を御史大夫とし、曹休を御林の軍の總督とし、侯爵を六等十八級に定め、關西侯の爵十七級、是みな金印紫綬なり。又關内外の侯十六級を置、是みな銀印龜紐黑綬なり。五大夫十五級を定めて、是みな銅印鐶紐青綬なり。官爵の次第を悉くさだめて朝廷の官人をみな新に改め換、萬づ意のまゝに行ひ、管輅が卜よく其驗あるを以て重く恩賞を與へしかども、管輅敢て之を受ず。

○瓦口關張飛戰張郃

この時曹洪は五萬の勢を率して漢中に到り、夏侯淵、張郃と共に要害を守り、兵を進めて下辨に向ふ。兼てより張飛は巴西を守り馬超は下辨に向ひ、吳蘭を先手として進む所に、曹洪兵を引て進み來りければ、吳蘭退んとするに手下の大將任夔が曰、今魏の勢遠く來る、先その鋭氣を挫がずんば何の面目ありて馬超に見んとて、馬を飛して突て蒐りければ、曹洪刀を舞して二人戰ひ三合ならざるに任夔馬より斬て落さる。魏の勢勝に乘て攻ければ、吳蘭大に敗れ回て馬

ども、入かはる勢なくして殘少に討なされ、金禕も吉邈兄弟も早討れぬと告ければ、事の諧ざるを見て城門より出走らんとするに、夏侯惇が大軍四方を圍でその密きこと水漏せども通せず。兎角する間に後より大勢追きたり、了に一人も殘さず生どり、城中の火を打滅て囘忠の者共の妻子一族を捉へ、鄴郡へ早馬を立て曹操に訴ければ、曹操大に怒り、下知を傳て囘忠の者共を悉く市に出して首を討しめ、漢の舊き百官を一人も都に留めず鄴郡へ召とりける。夏侯惇生捕を引て大路を渡しければ、耿紀聲をあげて罵り、逆賊曹操われ生て汝を殺すこと能ず、死して鬼となり必ず賊を撃べきぞと呼はりければ、武士共を以て其首を討けるに罵る聲なほ絶ず、吾輩兒に誤られたりと云て失にける。韋晃は頭を以て地を叩き、牙を咬で齒牙こと〱く碎け、恨べし〱と叫で了に首を斬れけり。夏侯惇五人の者共の三族を市に斬て囘りければ、王必は肩を射られたる矢瘡重して了に叫び死に亡ける。漢の舊き官人すでに鄴郡に下りければ、曹操紅の旗を左に立白き旗を右に立、昨夜耿紀、韋晃等都の中に火を掛ひとへに我を殺さんとす、汝等もろ〱の官人定て門を閉て出ざる者あらん、又出て火を救んとせし者もあらん、火を救たる者は紅の旗の下に立、若火を救ざる者は白き旗の下に立と觸をなしければ、百官みな早く出て火を救たりと云ば罪科あるまじと思ひ、大半は紅の旗の下に集りけり。曹操悉く

笑ひ樂む所に、忽ち陣中に喊を造て二箇所より火を掛たり。王必あわて𦁤き走り出て何事ぞと問に、上下さわぎ亂れて右往左往に騷動す。扨は敵この内に在と思うて馬に打のり南の門より出ければ、耿紀この所より攻來り、王必なりとは更に知ず、只敵の逃るぞと心得て、弓を取て矢を放ちけるに、王必肩を射ぬかれ、已に馬より落んとしけるが、又西の門より出て走るに、後より敵の追こと急なりければ、馬上には怺ず歩立に成て金禕が家に到り、こゝを開けと呼はりければ、内には男は一人もなく只女ばかり有けるが、門を叩を聞て、金禕が回りたると思ひ、女房自ら出むかへ、如何に王必を早討とり玉へるかと云ければ、王必大に驚き、扨は今夜の騷動は耿紀のみにあらず、金禕が所爲にて内より陣屋に火をかけたる者なりと悟り、急ぎ曹休が宅に行てその趣を語りければ、曹休驚き甲取て打かけ、千餘騎を引て馳來りけるに、城中ことごとく火起て五鳳樓に燒付しかば、帝は深宮の中へ逃かくれさせ玉ひ、曹氏の一族宮中を固く守て命を惜ず防ぎ戰ふ。今夜たゞ敵の呼はるを聞ば、曹賊を殺して漢室を扶くと聲々に叫び、人馬東西に馳ちがふ。元來夏侯惇は曹操が命を受、三萬餘騎を率して城外五里ばかりに陣を取けるが、遙に城中の火を見付、大軍を下知して許都の四方を取かこみ一人も人を出さず、自ら一手の勢を引て城中に入、曹休に力を添て曉まで戰ひければ、耿紀、韋晃等心ばかりは勇め

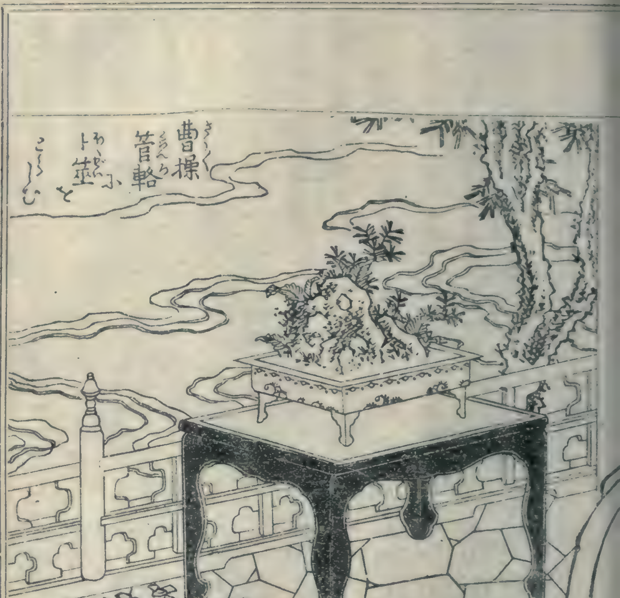
今これを以て羽翼と成ん。耿紀、韋晃しかるべしと喜びければ、金禕乃ち吉平が子を招きよせ、右の趣を告て語らひけるに、二人みな感激して涙を流し、恨氣天を突、誓て國賊を殺し、君を扶て父の恨を雪んと申す。さらば計を運せとて、五人志を合せて、相議するに、金禕が曰、正月十五日の夜は上元の佳例にて都の中みな燈火を張て遊び樂む、耿紀と韋晃とは共に家內の僮を引具し、直に東華門の外に行て王必が陣を窺ひ、內に火の起を相圖に伐て入、內外より攻て王必を討取玉へ、其後は我とみな一手になり、禁裏に入て天子を五鳳樓に出御なし奉り、百官を召て民の心を安んぜしむべし、吉邈兄弟は城外に火を放て聲々に、國の賊を誅して漢室を扶くと呼はらせ、城內の救の勢を遮り、天子の勅命ありて民を安んじ玉ふを待、兵を進めて鄴郡に推よせ曹操を生捕玉へ、然らば綸旨を以て蜀の玄德を召のぼせ、再び漢を起すべし、期に至ては初更を限に打起べしとて、天に誓て血を歃り、計を定めて各みな家に囘る。去ほどに正月十五日に至りければ、耿紀、韋晃は家內の僮四百餘人を集め、吉邈兄弟は三百餘人を集め、こと〴〵く武具を揃て兼ては獵に出ると沙汰しける。金禕は暮より王必が陣に行、いま魏王の威勢天下に震て海宇やゝ平安なり、例の如く今夕は燈火を張て太平の氣象を顯すべしと云ければ、王必げにもとて多く陣々に燈火を連ね、天上の月に光を爭てみな營中にて酒をのみ

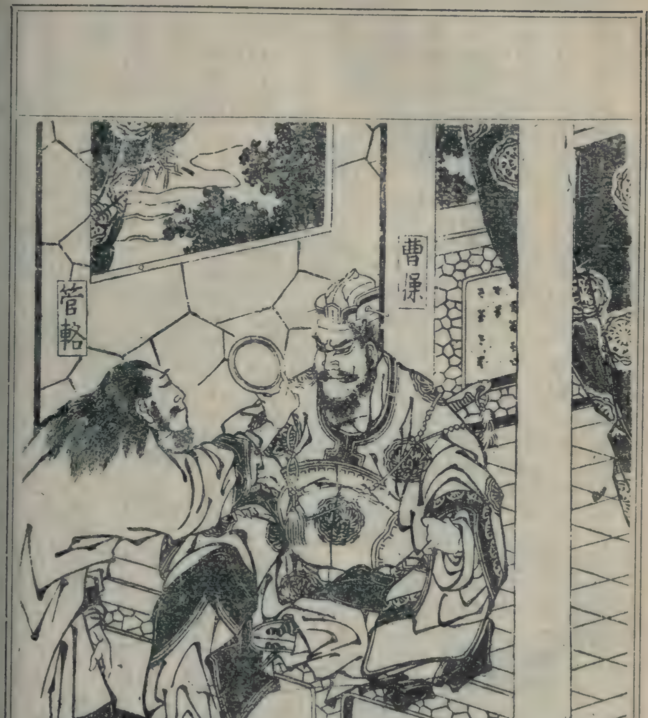
み玉ふは何ごとぞ。韋晃が曰、われ聞、魏王曹操近き内に漢の天下を紹玉ふと、若しからば御邊高く官に進み玉はん、ねがはくは日來の好を忘ず、曲て我等を捨玉はずんば、平生徳を感ずること深からん。金禕これを聞て大にいかり、袖を拂て座を起、從者の茶を持きたれるを奪ひ取て地の上に抛たりしかば、韋晃申けるは、日比の好なにとて斯は情なき。金禕が曰、われ御邊とあつく交る者は、御邊は漢朝の舊臣なるを以て也、今その本に報ずることを思はず、却て逆賊を輔んと云は何ごとぞ、我なにの面目ありて御邊と共に友たらん。韋晃が曰、これ天數なり、順はずんば叶ふまじ。金禕これを聞、牙を咬でいよ〳〵怒りければ、耿紀その忠義の心を見定て、わが計の樣を告るに、金禕が曰、我等はこれ數代漢の厚恩を受たり、安んぞ逆賊に從はん、御邊二人漢を救ふ心あらば、如何なる計を用ふべき。韋晃が曰、われ等みな國に報ずるの心あれども、いまだ宜き計なし。金禕が曰、われ內外より相圖を合せて先王必を殺してその兵權を奪ひ、天子を扶て蜀の玄德を外の援と賴ば、曹操を伐んこと掌にあり。二人これを聞て共に頓首して申けるは、もし此の如んば事必ずとゝのはん。金禕が曰、こゝに兄弟二人あり、元より曹操と大なる仇ありて城外に逃る、乃ち太醫吉平が子にて、兄を吉邈と云、弟を吉穆と云、昔し父の吉平は董承と共に曹操を殺んとして事あらはれ、却て曹操に斬れたり、我

曹操漢中へ大勢を指むけ、管輅が都の内に火の災あらんと云を聞て心の中安からず。夏侯惇に精兵三萬餘騎を付、都の中に往來して不虞の災を防しめ、又長史王必を大將として御林の軍馬を總攝らせければ、主簿司馬仲達諫て曰、王必は酒を好で性ゆるし、恐らくは軍中の大事を誤らん。曹操が曰、王必は久しく我に從て多く艱難を涉り、忠にしてよく勤め、その心鐵石よりも固し、眞に國の良臣なりとて、了に王必を大將として東華門の外に陣を取しむ。時に耿紀字は季行と云ものあり。元丞相府の掾たりしが、後に侍中少府に遷り、司直韋晃と云ものと交ること深し。曹操が自ら魏王に昇り、出入みな天子の車服を用ふるを見て心の中安からず。建安二十三年春正月、耿紀、韋晃と共に酒を飲けるが、密に議して申けるは、曹操天下を奪はんとすること久し、我等はみな漢朝の舊臣、豈同く惡をなすべけんや。韋晃が曰、わが友に金禕と云ものあり、乃ち漢の金日磾が後にして、常に曹操が逆心あるを恨み、之を殺さんとする心あり、此人又王必と深く交はる、若共に計をなさば大事必ず諧はん。耿紀が曰、王必は無二の曹操方なり、金禕もし此人と交らば、安んぞ我に與せん。韋晃が曰、然りと云ども其意ひとへに漢を扶るの忠を存す、われ等行て其志を試んとて、二人共に金禕が宅に行、禮了て坐定り、韋晃申けるは、御邊は王必と厚く交り玉ふ、吾等この故に來り賴む。金禕が曰、賴

脚に天根なく、腹に三壬なく、背に三甲なし、只泰山に在て鬼を治すべし、生る人を治することと能ず。曹操問て曰、わが相は如何なる相ぞ。管輅が曰、位すでに人臣を窮玉ふ、何ぞ相の善惡を論ぜん。曹操再三問けれども、管輅笑て答ず。曹操又手下の大將を問に、管輅が曰、みな世を治むるの名臣なりとて、吉凶を問ども敢て答へず。曹操又吳と蜀とを卜しむるに、管輅卦を設て曰、吳の國に一人の大將を失ふべし、蜀の國より兵を起して界を犯すべし。曹操いまだ信とせざる所に、忽ち合淝の城より早馬きたり、吳の陸口を守る大將魯肅病を受て死したりと報ず。此に驚き卽時に人を漢中へ遣して消息を聞しむるに、數日ありて早馬きたり、蜀の玄德よく國中を平定し、張飛、馬超を大將として大勢を下辨に指むけ、漢中へ攻かゝると告ければ、曹操大に怒り、兵を起して蜀を伐んと議しければ、管輅これを卜て曰、大王いまだ輕々しく都を離れ玉ふこと勿れ、來春都の內に必ず火の災あらん。曹操これを聞より、管輅が詞こと〴〵く驗あるを以て蜀に向ふことを閣き、其身は鄴郡に留り居て曹洪に五萬の勢を授、早く漢中に行て夏侯淵、張郃に力をそへ、要害を守て蜀の敵を防しむ。

○耿紀韋晃討㆓曹操㆒


曹操管輅に卜筮をこゝろむ


管輅
曹操

時は風到る、此乃ち陰陽の感化にて、龍虎の致せる所にあらず。管輅が曰、それ事を論ずるには、宜くその本を審にして、然して後にその理を求むべし、理違ふ時は機を謬る、機あやまる時は、榮辱これを主る、若參星を以て虎とする時は、谷風更に寒霜の風にして、東風の名はなかるべし、此ゆゑに龍は陽の精にして、潛を以て陰とす、幽靈上に通じ、和氣神に感じて、二物相扶く、故によく雲を起すことを得、それ虎は陰の精にして陽に居、木に依て長く嘯き、巽林に動く、二氣相感じて此ゆゑに能風を生ず、磁石を以て鐵を取が如き、其神を見ずして金自ら來る、これ相感ずるの徵なり、況や龍に潛飛の化あり、虎に文明の變あり、雲を招き風を招くこと、豈少しも疑ふことあらんや。曹操が曰、それ龍の淵にある一井の底に過ず、虎の山に嘯く百歩の中を出ず、形氣淺弱にして通ずる所の者ちかし、何ぞ能雲を起し風を生ずることを得ん。管輅が曰、大王見玉はずや、陰陽は掌握の中に在ても、上は太陽の火を引、下は太陰の水を引、噓吹の間烟景以て集り、苟も精氣相感ずる時は、懸象二燧に應じ、苟も相感ぜざる時は、二女同居せるが如くにして、志を相得ず、自然の道豈遠近あらんや。曹操大に喜び、用ひて太史の官にせんと云ければ、管輅が曰、某が人相は官を得べき相にあらず、此ゆゑに命を受ず。曹操問て曰、いかなる故ぞ。管輅が曰、某は額に徑骨なく、眼に守睛なく、鼻に梁柱なく、

必ず大なる罪あらんと申せと云て、紅の衣を著たる人筆を取て簿に九の字を添けるが、俄に異香風に飄へり、二つの白き鶴と化して、天に上り失にけり、趙顔家に回りて右の趣を告ければ、管輅が曰、紅の衣を著たるは南斗なり、白き衣を著たるは北斗なり、趙顔問て曰、われ北斗の星はその數九つありと聞しが、何ゆゑに一人なる、管輅が曰、散じては九つとなり、合しては一つとなる、北斗は人間の死せるを註し、南斗は生るを註す、今簿に九の字を添たり、汝なにの憂か有んと云ければ、父子喜て再拜す、管輅これより天の機を泄さんことを恐れて、其後は人の爲に卜ず、箇樣の不思議なる者にて候、今平原郡にあり、大王これを召て問玉へと語りければ、曹操大に喜び、急ぎ使を馳て招きよせ、左慈が事を語りて卜せければ、管輅答へて曰、これは皆幻術とて奇妙とするに足ず、何の患ふることか候はん。曹操これを聞て、即時に濛氣の開くる心地しければ、又天下の事を卜しむるに、管輅が曰、二八縱横、黃猪遇虎、定軍之南、傷折一股。又算數を卜うて曰、獅子宮中、以安神位、王道鼎新、子孫極貴。曹操が曰、ねがはくは又詳に聞ん。管輅が曰、茫々たる天數預め知べからず、後に應驗あらば方に悟り玉ふべし。曹操又雲は龍に從ひ、風は虎に從ふの意を論じて曰、龍動く時は景雲起り、虎嘯く時は谷風生ず、是火星は龍參星は虎なる所以にして、火出る時は雲應じ、參出る

管輅が曰、これ天命なり、我いかゞして救ことを得ん、其父大に哭て曰、老夫只この一子あり、若死せば如何すべき、願くは憐を垂玉へ、管輅も心の内あはれに思ひ、汝もし子の命を救んと思はゞ、浄き酒一樽と鹿の脯とを持せて、明日南山の中へ遣せ、大なる樹の下に碁盤ありて、二人對して碁を打もの有ん、一人は南に向て坐し、白き衣を着て、その貌きはめて醜し、一人は北に向て坐し、紅の衣を著て其貌甚だ美し、乃ち二人に酒と肉とを勸め、その盡るに及んで哭て命の短を告ば、必ず壽を増べきぞ、相かまへて我教たると申こと勿れと云ければ、其父喜で管輅を家に留め置、次の日趙顏に酒と肉とを持せ、南山の中へ赴かしむ。已に山に入こと五六里にして、果して茂りたる樹の下に石の盤あり、二人南北に對して碁を圍み、全く傍を顧ること無りしかば、趙顏さては此なりと思ひ、跪て酒と肉とを進むるに、二人共に碁を圍む心ばかりにて、覺ず酒を飲盡せり。趙顏哭て地に拜し、ねがはくは某が命を救ひ玉へと云ければ、二人初て大に驚く、紅の衣を著たる人申けるは、これは必ず管輅が所爲にて候はん、我二人すでに私の施を受、これを憐ずんば叶まじ、白き衣を著たる人懷の中より簿を取出し、考見て申けるは、汝今年十九歳なり、われ今十の字の上に又一つの九の字を添ん、汝必ず九十九年の壽を保べし、汝囘りて管輅に見えば、再び天機を泄すこと勿れ、

レ毒、得レ秋乃化、これ蜂の窠なり、其三つには觳觫長レ足、吐レ絲成レ羅、尋レ網求レ食、利在二昏夜一、これ蜘蛛なり、滿座これを見てこと〴〵く驚く、その後管輅が鄕に牛を失うたる女あり、來りて卜を賴ければ、管輅申けるは、北溪の西に七人して此牛を殺せる者あり、速に行て尋ば、皮と肉とは猶あらん、其女ゆいて見れば、果して茅の舍に七人の男あつまり、牛を煮て食けるが、皮と肉となほ殘れるあり、其女いそぎ郡の太守劉邠に訴ければ、卽時に七人の男を捉て罪を糾し、その女に何とて之を知たると問に、管輅が卜たる由を語る、太守心に信なりとせず、乃ち召よせ之を試ん爲に、印の囊と山雞の毛とを盒の中に藏して卜せければ、管輅が曰、一つは內方外圓、五色成レ文、含レ寶守レ信、出則有レ章、これ印の囊なり、又一つは巖々有レ鳥、錦體朱衣、羽翼玄黃、鳴不レ失レ晨、これ山雞の毛なり、太守大に驚き、以ての外に尊び敬ふ、ある時春の暮に野邊に出て逍遙しければ、一人の美少年田の畔にあり、管輅道の傍に立て良久しく見けるが、汝はいかなる人ぞと問ば、少年答て曰、趙顏と云ものにて、年は十九歲なり、管輅が曰、汝が眉の間に死氣あり、三日の內に必ず死せん、吾は乃ち管輅なり、汝が美く姸を見て早く死せんことを惜なり、趙顏こは如何にと驚き、家に囘りて父に告ければ、その父急に走り來り、淚を流して地に拜哭し、願くは我子を救て給へと云、

に、郭恩家に使ふ僕に命じ、雉を射死して客を持成と云ければ、僕矢を取て籬の上なる雉を射るに、悞て鄰の家の女に中り、左の肩より血ながれたり、此の如き不思議の驗ありけるゆゑ、安平の太守王基これを聞、その家の妻つねに頭風を病、その子つねに心痛を苦み、一家の人時ならず驚き魘れければ、乃ち管輅を請て卜しむるに、管輅申けるは、この堂の西に死人の屍二つあり、一人は矛を持一人は弓矢を持、その頭は壁の内にありて脚は壁より外にあり、矛を持たるは頭を刺ことを主る、この故に頭風痛で擧ること能ず、弓矢を持たるは胸を刺ことを主どる、此ゆゑに心腹痛で飲食すること能ず、晝は外に浮れ遊で、夜は又家に回る、此に依て人を驚しむるなり、太守甚だ怪みながら堂の西を掘せければ、地の下八尺ばかりにして果して二つの棺あり、一つの棺は中に矛あり、又一つには角の弓と木の矢とあり、皆朽爛たりけるを、骸骨と共に城外十里あまり去て、地中に埋めければ、家内これより平安なり、又館陶の令諸葛原と云もの、新に新興の太守に遷る、管輅これを送りければ、座客みな曰、御邊は卜の名を得たり、願くは物を藏して之を問ん、太守乃ち燕の卵と蜂の窠と蜘蛛とを各三の盒に入、よくよく藏して卜はせければ、管輅卦を考へ、盒の上に書付て曰、その一つは含レ氣須レ變、依ニ于堂宇一、雌雄以レ形、羽翼舒張、これ燕の卵なり、其二つは家室倒懸、門戸衆多、藏レ精育

調ず、酒を好で疎狂なり、八九歳の時より天文を視ことを好で、人に遇ては其名を問、夜は睡ずして星辰を考ふ、父母これを止むれども更に休ず、常に申けるは、家雞野鵠も自ら能時を知、いかに況や人の世にあるをや、豈天文を知ざるべきやとて、里の小兒と戲れ遊ぶにも沙の上に天文を畫き、日月星辰を分ち布て指點して之を見る、年長ずるに及で、深く周易を明め、仰で風角を觀、眼よく神に通ず、其父曾て瑯琊即丘の長たりし時、管輅年十五歳、書を讀で日に數千言を記す、四方の學者みな及ぶこと能ず、天下號して神童と稱す、後に居民郭恩と云もの、兄弟二人みな躄の疾ありければ、管輅を招て卜せけるに、管輅が曰、いまト て卦を考るに、御邊が家に本女の墓あり、必ず御邊が叔母の魂ならん、是むかし饑饉の年、わづかに數升の米を貪て、叔母を井の底へ推落しけるに、嘖々として聲あり、大なる石に當て其頭を碎き、水の底にて痛く苦で死したりし恨に依て、御邊兄弟天の責を受て此疾あり、郭恩これを聞て涙を流して地に伏し、我むかし果して浩ることを爲りと懺悔して、數日の間管輅を家に留め置けるに、ある時梁の上に鳩一つ飛來て、鳴聲甚だ哀かりしかば、管輅これをト て曰、今日午の刻に家主の親き人、東の方より猪の肉と濁酒とを攜へ來り、賓主共に醉て笑ひ樂中に、必ず少しき驚くこと有ん、この日果して姨婿酒肉を攜へ來り、郭恩兄弟と共に飲で笑ひ懽ぶ所

ろ〳〵の大將に命じて、羊猪の血を灑せ、城の南なる軍兵を調練する馬場に引出して、自ら大軍を以て十重二十重に取かこみ、一人も殘さず首を刎けるに、皆一道の青き氣となり、空中に立のぼりて忽然として一處に聚り、化して左慈と成けるが、自ら手を以て招き、白き鶴に打のりて雲の上に飛揚し、掌を拍て大に笑ひ、玉鼠隨ニ金虎ニ、奸雄一旦休と呼はりければ、曹操諸將を下知して、弓鐵砲を打かけしに、忽然として狂風吹起り、沙を飛し石を走らしめ、適に斬たりし死人の屍こと〴〵く跳り動き、手に其首を提げて演武堂に走り上り、曹操に打向ひければ、文武の諸將震ひ怕れて、皆魂を失ひ膽を冷して逃わしるに、何くとも知ず哭き嚎く聲耳に聞えて、須臾の間に風定りぬ。諸人曹操を扶て宮中に入ければ、之より病を受て、如何に治すれどもその驗なし。

○曹操試ニ神卜管輅一

曹操重病を受て、太史丞許芝を許昌より呼よせ、病を卜しめんと云ければ、許芝申けるは、大王世に管輅と云る卜の名人あることを聞玉へるか。曹操が曰、われ仄に其名を聞り、願くは其才の詳なるを語れ。許芝が曰、管輅字は公明、平原の人なり、貌甚だ醜して外威儀を

かば、滿座これに驚き、仰で見る間に、左慈は行方なく失にけり。曹操近侍の者を召て、其行衛を尋ねさせければ、只今宮門を出たりと申す。曹操いよ〳〵怒り、許褚を呼で屈強の精兵五百餘騎を授け、急ぎ追蒐て捉へ來れと下知すれば、許褚すなはち馬に打のり、城門を出て向を見れば、左慈高き木履を穿ていと徐に步み去。許褚馬を飛して電光の如くに趕けれども、左慈は只目の前にのみ有て追付こと能ず。已に追かけて山の麓に到りければ、一簇の羊ありて、左慈その內に立たり。許褚弓を取て矢を放ちければ、左慈忽ち羊と成て、何を其とも見わけねば、許褚つひに數百の羊を悉く擊死して、兵を引て回りけるに、途中に一人の童子あり、我牧ひ置し羊を何ゆゑに斯は殺したると云て大に哭く。時に傍の地上に人の頭一つあり。童子を呼で申けるは、汝羊の死だるが哀くんば、羊の首をことごとく輳て皆死だる羊の腔の上に載おけ、我本の如く生せてとらせん。童子これに從ひ、向に許褚が殺して棄たりし首を輳めて、羊の腔に載ければ、左慈忽然として躍り出、これに從て數百の羊ことごとく活返れり。童子家に歸て其由を語りければ、家主の夫あまりに怪く思ひ、曹操に見えて詳に訴ふ。曹操心に安からず思ひ、繪圖に形を寫して遍く左慈を尋ねさせければ、三日を過ざるに、片目は眇にて一方の足なへ、白き藤の冠に青き色の衣を著たる老人、總て少も違ざるを四五百人とらへ來る。曹操も

り、安んぞ鱸を求ることを得ん。左慈が曰、易きことなり、我取てまゐらせんとて、釣竿を取て堂を下りければ、庭上にはかに池水湧出たり。即ち釣竿を持て須臾の間に大なる鱸を得ること数十疋に及び、之を取て進めければ、曹操申けるは、わが池の中原より此魚を放し置り。左慈が曰、大王なに故に詐を宣ふぞ、天下の鱸はみな腮二つあり、只松江の鱸は腮四つあり、之を以て證據とす。諸人怪で之を見るに、果して腮四つありければ、愕然たらずと云ものなし。左慈が曰、古より松江の鱸を膾にしては、必ず紫芽の薑を用ふ。曹操が曰、汝いま薑を取得んや。左慈が曰、甚だ易しとて、金の盆をとりよせ、袖の中より紫芽の薑を出して曹操に獻りければ、曹操自ら取て之を見時、忽ち盆の中に一巻の書あり、孟徳新書と記したれば、開て之を見るに、我軍機の祕密を錄して曾て人に知せざる書なりしに、初より終に至るまで、更に一字の差もなかりしかば、心の中大に怒り、屹と打見て左慈を殺んとするの心あり。左慈その色を見て卓の上なる玉の盃を取、酒を十分に受て、曹操に進め、大王この酒を飲玉はば、千歳の壽を得玉はんと云ければ、曹操が曰、汝まづ之を飲候へ。左慈乃ち冠の上なる玉の簪を取て盃の眞中を横ぎり、先その半を飲で又曹操に獻つる。曹操これを飲に水の如くなりしかば叱んとする時、左慈盃を取て空中に擲たりしに、忽ち一つの白鳩と變じて殿中を飛めぐりし

曹操問て曰、汝いかなれば此の如くなる。左慈が曰、われ數十年もの食ずとても餓ることなく、一日に千疋の羊を食ても飽と云ことなし。曹操これを聞て、爲べき樣なく、了に責を閣けり。次の日諸の官人みな魏王宮に集り、國々の名物を揃へ、山海の珍味を調て酒宴する所に、左慈高き木履を踏で席上に立ければ、諸官こと〳〵く驚き怪む。左慈が曰、今日の酒宴羣臣を請じて四方の珍味を盡し玉ふ、何にてもあれ御望の物あらば、我ねがはくは取出して獻らん。曹操が曰、われ龍の肝を羹にして食んと欲す、汝これを取べきか。左慈が曰、此に過たる易きことやあるとて、筆を執て粉壁の上に一つの龍を畫き、袖を以てこれを拂へば、龍の腹自ら開たり。乃ち手を腹の中に入、龍の肝を摸り出すに、紅の血流れて休ず。軈て之を獻りければ、曹操驚て申けるは、汝元來袖の中に龍を藏して來れるならん。左慈が曰、いま天氣甚だ寒して草木みな枯たり、大王いかなる花をか求玉へる、望みの儘に花を出さん。曹操が曰、われ只牡丹の花を求む。左慈が曰、いと易きことなりとて、大なる花瓶を席上に出し、水を以て噀ければ、須臾の間に嬋娟たる雙頭の牡丹忽ち生じて、匂ひ春風に飜へるかと怪まる。諸官奇異の思をなし、相迎へて坐を同し、共に酒を飲ければ、庖人又魚の膾を進め來る。左慈が曰、これほど成酒宴に何ぞ松江の鱸を取て膾にし玉はざる。曹操が曰、松江は此より千里の遠を隔た

りて、纍に我名を呼けるゆゑ、我これを顧れども更に物ありとも見えず、此の如なること數日なりしが、忽ち雷震てその石壁ことごとく碎け、中に天書三卷あり、之を遁甲天書と名づく、上卷を天遁と云て、雲に騰り風に跨り、大虛に飛揚して自在をなす、中卷を地遁と名づけ、能山を穿ち石に入、下卷を人遁と名づけ、四海に雲遊して形を藏し身を變じ、劍を飛して能人の首を取、いま大王人臣の位を身に極め玉ふ、功成て退くは古人の好とする所なり、早く官を退いて、某に跟ひ、共に峩眉山に入て修行し玉へ、願くは三卷の天書を授ん。曹操が曰、急流は勇退す、我身を安んじて閑なるを樂んと思へども、朝廷いまだ我に替て政を治むる人なし。左慈が曰、蜀の劉玄德は漢の天子の宗親なり、汝なんぞ此人に位を讓りて身を安く保ざる、若これに順ずんば、我いま劍を飛して必ず汝が首を取ん。曹操怒て曰、奴は是玄德が方の間者なるぞ、急で拷問せよと下知すれば、左慈手を撫て大に笑ふ。數十人の獄卒共來り集まり、左慈を搦て皮肉の微塵に成ほど擊たりけるに、左慈敢て痛める色なし。怪で能々見れば熟く睡入て鼾の音雷の如し。曹操あまりに興を醒して鐵の枷を首に入、鎖を以てよくよくとざし、送て牢に入けるに、忽ち枷も鎖も紛々として悉く落、左慈地上に臥たりければ、曹操大に怒り、晝夜七日が間飲食を與へず、樣々に責けれども、左慈地上に端坐して顏色つねよりも猶壯なり。

の老人奉行に向て申けるは、我は乃ち魏王曹操と同鄕の友にて、左慈字は元放とて、道號を烏角先生と云ものなり、御邊都に上て曹操に見えば、某が申せしことを悉く語り玉へと云て、袖を拂て去にけり。斯て程なく鄴都に上り、孫權溫州の柑子を送れりと云ければ、曹操喜び、げにも大なる柑子かなとて、自ら取て之を剖に、只空き殼ばかりにて、內に實あるは一つもなし。こは如何にと驚き怪で其ゆゑを問に、奉行乃ち途にて左慈に逢たる由を有の儘に語る。曹操甚だ疑ひをなす所に、外より報じて曰、只今一人の先生自ら左慈と申て出來り、大王に見えんと願ひ候。曹操乃ち呼入ければ、吳の國の奉行之を見て、途中にて出合たる人に扮こと無候と申す。曹操叱て申けるは、汝何ものなれば怪き妖術をなして、我愛する柑子の實を取たる。左慈笑て曰、これは如何なることを仰せ候ぞ、某曾て左樣のことをせず、試に剖て見んとて、柑子を取て自ら剖に、悉く實ありて、其味きはめて甜し。曹操大に怪み、又自ら之を剖に、皆空き殼ばかりなりければ、心驚て安からず。左慈に坐を賜て其ゆゑを問に、左慈ねがはくは酒肉を與へ玉へと云。これに因て左右に命じて酒五斗を飲しむれども、更に醉たる色なく、大なる羊を殘さず食しむれども、曾て飽たる體もなし。曹操驚て問て曰、汝何の術を以て此の如なる。左慈答て曰、某は西川嘉陵の峩眉山に在て、道を學ぶこと三十年、ある時俄に石壁の中に聲あ

侍る者共を睦び懐け、時々に己が徳ある由を云せしかば、曹操すでに魏王の位に昇り、世子を立んとして心さらに一決せず、乃ち賈詡に問て、我世子を定めんと欲す、何れの子を立べきぞと云ければ、賈詡嘿然として物いはず。曹操その故を問に、賈詡が曰、某は深く心に存する旨ありて答へ候はず。曹操が曰、いかなる所存かある。賈詡が曰、袁紹、劉表父子を思ふのみなり。曹操大に笑ひ、了に心を決して五官中郎を立、嫡子曹丕を將て王世子と定む。冬十月に魏王宮すでに成就しければ、四方の國々へ人を遣して、土産の名物菓木珍奇の物を求めさせ、呉の國の福建は茘枝、龍眼の最上なり、溫州は柑子の名物なりとて、使を以て呉の孫權に柑子を取て上せよとて、魏王の令旨を傳へければ、この時孫權すでに年々貢物を獻らんと約せしゆゑ、その令に背こと能ず、溫州の大なる柑子を選び集て人夫に擔はせ、四十荷あまりを都に送る。呉の國の人夫中途に至て皆疲れしかば、山の傍に荷を下して暫く休みける所に、一人の老人片目は眇にて一方の足跛たるが、白き藤の冠に青き色の衣を著して忽然として出來り、禮を作て申けるは、汝等みな重荷を負て疲れたるか、我助てとらせんとて、一人の擔うたるを取て自ら肩にのせ、すは我に續て來れと云ければ、數百の人夫みな一度に擔ひ連て五里ばかり來りけるに、肩の上その輕きこと物なきが如くなりければ、疑ひ怪ずと云ものなし。時にか

不徳焉。今君重違朕命、固辭懇切、非所以朕心而訓後世也、其抑志撙節
勿復固辭。

曹操これより王位を受て十二旒の冕を戴き、金銀の車に乘て萬づ天子の儀を用ひ、出るに警し入に蹕して、鄴郡に魏王宮を造り、世子を立んと議しけるが、元來大妻丁夫人は了に子なくして、妾の腹に出來たる子數多あり。劉氏初め曹昂を生しが、宛城の軍に討死す。卞氏四人の男子を生めり。曹丕、曹彰、曹植、曹熊なり。此ゆゑに丁夫人を黜て卞氏を正宮と定む。第三の子曹植字は子建、幼より極て聰明に、筆を揮て能文章を作りしかば、曹操これを愛して世嗣とするの心あり。嫡子曹丕この企を知て、心の中安からず。中大夫賈詡を召て密にこの事を問けるに、賈詡耳を附て低語き、君世を嗣の望あらば、我教に任せて箇樣々々にし玉へと云ければ、曹丕げにもと喜ぶ。ある時曹操自ら征伐に出る時、諸の子弟こと〴〵く出て城外に送る。曹子建は詩を作て功德を述、文を造て別を惜みければ、左右の諸臣その巧を稱し、曹操も心の内に喜ぶ。只曹丕は別に臨で涙を流して拜送しければ、左右の諸臣も共に哀を催して、別を傷の情を起せり。是に依て曹操疑の心を生じ、曹子建只詩文の内に巧を衒ひ、文字の間に心を托て、父を慕ふの誠は曹丕に及ばずと思ひけり。曹丕又ひそかに金銀を以て父の傍に

高義、須侯勳蹟。韓遂、宋建南結巴蜀、羣逆合從、圖危社稷、君復命將龍驤虎奮、梟其元首、屠其窟栖。暨至西征、陽平之役親擐甲冑、深入阻險、芟夷蝥賊、殄其兇醜、蕩定西陲、懸旌萬里、聲教遠振、寧我區夏。蓋唐虞之盛、三后樹功、文武之興、旦奭作輔、二祖成業、英豪佐命。夫以聖哲之君、事爲己任、猶錫土、班瑞以報功臣、豈有如朕寡德仗君以濟、而賞典不豐、將何以答神祇慰萬民哉。今進君爲魏王、使使持節、行御史大夫宗正劉艾、奉策璽玄土之禮、苴以白茅、金虎符第一至第五、竹使符第一至十。君其正王位、以丞相領冀州牧如故、其上魏公璽綬符册、敬服朕命、簡恤爾衆、克綏庶績、以揚我祖之休命、勿復固辭。

曹操詔を拜見し、假に上書して固く王位を辭し申ければ、帝又手づから詔を下し玉ふ。其詔に曰、

大聖以功德爲高美、以忠和爲典訓。故創業垂名、使百世可希、行道制義、使力行可效。是以勳烈無窮、休光茂著。稷契載元首之聰明、周召因文武之智用。雖經營庶官、仰嘆俯思其對、豈有若君者哉。朕惟古人之功、美之如彼、思君忠勤之績、茂之如此。是以每將鏤符折瑞。陳禮命册、寤寐慨然、自思守文之

或人この由を曹操に告ければ、曹操大に怒り、崔琰を捉て獄に下す。崔琰少しも怕れず、目を怒らし牙を咬、聲を揚て、曹操は漢の天下を奪ふ逆賊なりと罵りければ、曹操乃ち廷尉に命じて獄中にて撃殺さしむ。夏五月もろ〳〵の官吏帝に奏して申けるは、魏公曹操功高く德隆にして、天を極め地を際る、伊尹周公も及ぶこと能ず、宜く王位に進むべし。これに因て、帝已ことを得ず、鍾繇に命じて詔書を草せしめ、曹操を册き立て魏王に封じ玉ふ。其詔に曰、

自古帝王雖號稱相變、爵等不同、至於褒崇元勳、建立功德、光啓氏姓、延于子孫、庶姓之與親、豈有殊焉。昔我聖祖受命、剏業肇基、造我區夏、鑒古今之制、通爵等之差、盡封山川、以立藩屛、使異姓親戚並列土地、據國而王、所以保乂天命、安固萬嗣、歷世承平、臣主無事。世祖中興、而時有難易、是以曠年數百、無異姓諸侯王之位。朕以不德、繼序弘業、遭率土分崩、羣兇縱毒、自西徂東、辛苦卑約。當此之時、惟恐溺入于難、以羞先帝之聖德。賴皇天之靈、俾君秉義奮身、震迅神武、捍朕於艱難、獲保宗廟。華夏遺民、含氣之倫、莫不蒙焉。君勤過禹稷、忠侔伊周、而掩之以謙讓、守之以彌恭。是以往者初開魏國、錫君土宇、懼君之違命、慮君之固辭、故且懷志屈意、封君爲上公、欲以欽順

○魏王宮左慈擲盃

建安二十一年、曹操合淝の城より都に回り入ければ、諸人相議し尊んで魏王とせんとす。侍中王粲詩を獻りて、其德を稱しける。其詩に曰、

從軍有苦樂　但聞所從誰　所從神且武　安得久勞師
相國征關右　赫怒震天威　一擧滅獯虜　再擧服羌夷
西收邊地賊　忽若俯拾遺　陳賞越山岳　酒肉踰川坻
軍中多饒沃　人馬皆溢肥　徒行兼乘遠　空出有餘資
拓土三千里　往返速如飛　歌舞入鄴城　所願復無違

曹操これを見て限なく喜び、了に王位に昇んと議しければ、尚書崔琰すゝみ出、此事決して無用なりと云。諸官みな怒て申けるは、御邊なにゆゑに強て諫玉へる、荀彧、程昱を見玉はずや。崔琰聲を勵て曰、汝等が如き者共、利を貪て道を忘る、われ何ぞ其穢らはしきに從はん。

宴を設け、自ら盃を把て周泰が前に寄、その背を撫涙を流して申けるは、汝は是わが兄弟なり、戰ふこと熊虎の如にして生命を惜ず、数箇所の瘡を被りて膚は一寸も續る所なし、我なんぞ實の骨肉を以て相親み、軍中の大事を任せざるべきや、汝は乃ち我功臣なり、我汝と榮辱を共にし、休戚を同うせんとて、衣を脫せて諸大將と遍身の瘡を見るに、皮肉こと〴〵く刻み畫けるが如にして、あき處も無りければ、孫權手を以て其瘡痕を指て尋ね問に、周泰一々これを答へ、この瘡はいつの合戰に誰に切れし所なりと盡く語りければ、孫權大に稱嘆し、瘡の數に應じて一觥の酒を賜ひけり。周泰甚だ醉て恩を謝して退ければ、孫權靑き羅の蓋を張せてその功を耀かし、相親こと骨肉に過たり。その餘の諸將みな恩賞を賜はりて共に濡須の要害を守り、兩軍相拒で一月あまりに及びければ、張昭、顧雍申けるは、いま曹操勢ひ大にして力を以ては爭ひ難し、若久しく戰はば多く兵を損ずべし、不如和睦を求めて民の苦を救ふべし。孫權これに從ひ、歩隲を使として曹操に和睦を求め、每年貢物を獻らんと願ひければ、曹操も急に破り難を見て了に許容し、孫權まづ兵を引て國に回れ、我も都に上らんとぞ答へける。孫權これに依て蔣欽、周泰を留めて濡須の口を守らせ、大軍を引て自ら秣陵に回りければ、曹操も曹仁、張遼を合淝の城に留め置て都へぞ上りける。

人を救ひ回る。呉の大將陳武は初め魏の大將龐德が一萬餘騎と火を散して揉合けるが、續御方無して、其勢のこり少に討れ、山際に逃入けるを、龐德勝に乘て追レ之こと甚だ急なり。陳武動れば取て回して戰ひけるが、樹木の茂りたる所にて急に追付られ、引回して戰はんとする時、運命の盡にや、鎧の袖木の枝に纏て快く働き得ざるを、龐德得たり賢と薙刀の柄を取のべ、腰より二つに斬て落す。曹操は孫權が逃るを見て、自ら馬を飛して江の邊に追かけ、數萬の射手を出して矢を射掛させければ、呉の船にも呂蒙兵を下知して散々に射る。呉の勢は今朝よりの戰に矢種みな射盡して之を防べき樣なく、船の内大に亂れて事已に急なる所に、忽ち沖中に數百艘の兵船一度に喊の聲を擧て飛が如くに馳きたり、眞先なる大將は乃ち呉の孫策が婿に陸遜字は伯言と云もの也。自ら十萬の勢を率して矢を放つこと雨の如くなりしかば、曹操射立られて引退く。陸遜勝に乘て盡く岸に上り、曹操を追かけて時うつる迄戰しかば、曹操が勢躁ぎ亂れて、討るゝ者その數を知ず。甲を棄盔を落して散々に走りけり。陸遜大に打勝て、敵の馬を奪ふこと數千疋、死人の中を尋ねて陳武が屍を求め出し、又船中に回りて孫權に見えければ、孫權陳武が敵に討れ、董襲が水に溺たる由を聞て聲を揚て哭き、水練を入てその屍を求め、共に厚く葬らしめ、敗軍を集て濡須の本陣に回り、周泰が我を救ひし功を思うて營中に酒

ひかへたる中を蒐通り、うらへ抜出て波打ぎはに馬を止め、後を顧るに、主人孫權なほ圍を出ること能ず、右ては叶ふまじとて、又取て回して大勢の中へ蒐入、御方の兵に逢て、君の行衛や知たると問ば、あれなる馬烟を立て戰ふ處に、君は定めて圍れ玉ふらんと申す。周泰これを聞て直ちに馬を拍て馳入、縱横に蒐通りて尋ぬれば、案の如く孫權わづかなる兵を率して自ら散々に攻戰ふ。周泰大音あげ、某が跡に付て出玉へと呼はり、眞先に進んで圍を開き、江の邊につと蒐出て、後を見るに、孫權又魏の勢に圍れければ取て返して尋ね逢、周泰こゝにあり早く出玉へと云ければ、孫權申けるは、敵弩を放て矢の來ること雨の如し、是に依て出ること能ず。周泰が曰、君しからば前に進み玉へ、某後を防べしとて、勇を振ひ力を盡して敵を拂ひ、其身も朱に成て血の流るゝこと泉の如く、孫權を守護して漸く江の邊に出ければ、呂蒙一軍を引て舟よりあがり、追かくる敵を遮りて、孫權を扶て舟に乘しむ。孫權が曰、いま周泰が三度まで蒐入て扶くるにあらずんば、我いかでか虎口を脱るゝことを得ん、徐盛敵に圍れて今に出ること能ず、いかゞして之を救ん。周泰が曰、某再び行て救ひ來らんとて、槍を提げて敵の羣たる中に喚て蒐入、徐盛を救て共に圍を出けるが、二人共に深手數箇所被り、岸近く成て追かくる敵と又戰ひければ、呂蒙急に舟を推よせ、射手を揃て散々に射させ、敵を拂て了に二

すでに君の命を受てこの處に出て敵を防ぐ、怎ぞ敢て此を去て命を扶かるの理あらんや、再び云ものは必ず斬んとて、忽ち十餘人を砍ころす。されども風いよ〳〵烈して、江に浮んだる大船ども、荒磯に當て微塵になり、大浪に捲れて沈むもあり、了に一人も殘らず溺れ死して扶かる者は無りけり。徐盛は李典が一萬餘騎と黒烟を立て戰ひけるが、さしも烈き浦風に、沙を飛し石を走らしめて、面を向べき樣も無りしかば、吳の勢みな馬武者に蒐立られ、討るゝ者その數を知ず。吳の大將陳武は濱の手の合戰に、魏の勢勝にのりて徐盛散々に成ぬと聞て、自ら救んとて來りける時、半途にて龐德が勢と出合、兩軍入みだれ、火を散して攻戰ふ。孫權は初めより濡須塢の中に陣をとり、御方の負色に成たるを聞て、自ら兵を引て馳きたりけるが、徐盛が李典に圍れたるを見て之を救んとする所に、忽然として張遼、徐晃が二手の勢前後より討て出、孫權を引包んで四方より攻たりけり。曹操は高き阜の上より之を望み、誰か吳の大將を討取て、孫權を擒にせんと云ければ、傍に在ける許褚刀を舞し馬を飛せて吳の勢の眞中に蒐いり、あたるを幸に切て廻りければ、吳の勢その勇に敵する者なく、あらけて二手に分れ、又一處には集り得ず。魏の大軍緊く圍で、喊の聲大に響ければ、吳の大將周泰大音あげ、斯ては次第に力疲れて一人も扶る者あらじ、一方を打やぶりて早く圍を出よと云まゝに、槍を撚て敵の大勢

孫權が曰、樂進を射て汝を救ひし者は甘寧なり。凌統乃ち甘寧に向て、頓首して申けるは、われ想ざりき足下の浩る恩を施し玉はんとは。甘寧が曰、われ主公の命に依て敵の大將を射て落し、今將軍の爲に萬分の一つを報ず。凌統大に喜び、足下むかし我父を殺し玉へる讐なれども今共に君につかへて、殊更今日一命を援玉へる恩あり、何ぞ舊き恨を存せんやとて、此より二人生死の交を結びける。曹操は樂進を援て本陣に回り、鏃を抜て治療を加へ、諸軍に下知を傳へて兵を五手に分ち、自ら中軍を領して、左の一路は張遼、右の一路は徐晃、左の二路は李典、右の二路は龐德、みな一萬餘騎を揃て直に濡須を指て推よする。吳の陣には董襲、徐盛二人舟手の大將として兵船を浮て待掛しが、魏の勢雲霞の如に來るを見て、諸軍みな怕るゝ色ありければ、徐盛怒て曰、君の祿を食て命を君に獻る上は、何ぞ敵を怕るゝこと有んやとて、馬を牽て小舟に打のり、飛が如くに岸にのぼり、馬に乘て數百人を從へ、左右を顧ず驀地暗に李典がひかへたる一萬餘騎が中へ討て入、四方八面を蒐やぶる。江に浮だる董襲が船數百艘、一度に鼓を打、喊を造て徐盛が勢ひを助けるが、俄に大風吹起り、白浪天を拍て船共こと〴〵く覆らんとしければ、吳の勢みなあわて騒ぎ、小舟を引下して逃れ去もの數を知ず、聲々に呼はり、船すでに沈んとす、將軍速に小舟に乘て陸に上り玉へと云ければ、董襲劍を抜て大に怒り、大將

に、曹操は敵の伏勢あらんことを怕れ、兵を制して追しめず。甘寧百騎を引て本陣に回り、皆鼓を打笛を吹て萬歳を唱へ、歡の聲地に震ひければ、孫權自ら出迎へ、甘寧が手を執て曰、將軍今夜のはたらき曹操が魂を挫に足れり、我ねがはくは汝が膽を觀ことを欲すとて、絹千匹刀百口を賜ければ、甘寧拜して之を受、百人の士卒に分與ける。孫權乃ち甘寧を平虜將軍に封じて、諸の大將に申けるは、曹操が手下に張遼あり、我手下に甘寧あり、共に相敵するに足れりとて、彌く重く用ひける。次の日張遼兵を引て推よせければ、凌統心の內甘寧が功名せしを憎み、孫權に見えて、某ねがはくは五千餘騎を引て此敵を破んと云。孫權乃ち自ら兵を引て打出、甘寧を左に備へ、凌統を右に備へ、陣を張て向ひければ、張遼も眞先に馬を出し、左に李典あり右に樂進あり、吳の陣より凌統刀を提て出ければ、魏の陣に樂進槍を撚て蒐出、二人戰ひ五十餘合にして勝負を分たず。曹操これを聞て、自ら陣前に出て見物しけるが、ひそかに曹休を呼で、あれ射とれと云ければ、曹休近々と張遼が後に進み、能挽て兵と射る。その矢凌統が乘たる馬の胸を射洞し、馬は屛風を倒が如くにて凌統地上に落たりしかば、樂進槍を延て突んとする時、矢一つ來て眉間の直中を射る。急所の痛手なれば槍を打すて、馬より倒に落けるを、御方討すな援よとて、兩方の軍勢ひとしく出、相救て引退く。凌統回て孫權に見えければ、

諸大将
諸大将
小性
甘寧百人の兵卒酒肉を与ふ

甘寧
諸大將
雜兵
雜兵

斤を賜ひければ、甘寧これを受て我陣中に回り、百人の兵を一列に坐せしめ、先銀の碗を以て自ら酒を飲、諸人に向て、我君の命を受、今夜汝等を引て酒を飲、みな〳〵力を盡して努よやと云ければ、百人の兵たがひに面を見合せて其意を曉ず。甘寧諸人の從はざるを見て大に怒り、手に劍を執て、我は此國の大將軍たれども、猶命を惜ことなし、汝等いかなれば身を惜で大將の下知に從はぬぞと、色を變じて云ければ、諸人みな怕れ驚き、坐を起て再拜して曰、ねがはくは命を棄て將軍に跟はん。甘寧限なく喜び、酒肉を與て持なし、已に二更の比に至りければ、白き鵞の翎を人々の盔の眞甲に挾で之を驗とし、忍で曹操が陣に到り、鹿垣を打破て鑼を鳴し、鼓を撃、喊を造て蒐入、直ちに中軍に打て入。元來曹操が本陣には、人馬車仗すき間も無、鐵桶の如く集りたれば、喊の聲に驚て、上を下へと騷動す。甘寧往來鑼鼓を打鳴して此に馳ち彼に集り、縱横に馳まはりければ、曹操が勢あわて躁で、暗さは暗し、何れを敵いづれを御方とも見わけねば、同士討をすること數刻なり。暫くありて、陣々に火の手を擧て、其光星の如く、喊の聲夥く震ければ、甘寧南の門より討て出に、これを遮ものさらに無、たまたま打向ふ者も、甘寧が鋒に當ること能ず。是に依て百騎の兵、一人薄手をだにも被らず、靜靜と引て回る。孫權又周泰に一手の勢を付、半途に出て迎へければ、共に濡須を指て退きける

○甘寧百騎襲曹操

呉主孫權この時濡須に在て、兵を調る所に、早馬來り、曹操自ら四十萬の勢を率して漢中より此所へ攻のぼると告ければ、急ぎ諸大將を集めて計を相議し、先董襲、徐盛に大船五十艘を列て濡須の口を守らしめ、陳武に騎馬の勢を付て、江邊に往來して、敵の來るを巡哨せしむ。張昭が曰、いま曹操が大軍遠く來る、一人よき大將に命じて先その鋭氣を挫がしめん。孫權諸將に問て曰、曹操こゝに來て人馬こと〴〵く遠路に疲る、誰か之を討て其鋭氣を挫ぐ者あらん。凌統すゝみ出て曰、某ねがはくは三千餘騎を引て敵を破らん。甘寧が曰、某ねがはくは只百餘騎を率して敵を破らん。凌統心の内怒て共に爭ふ色に見えければ、孫權乃ち凌統に三千餘騎を付て先手とし、甘寧を第二の備とし、濡須の口に出て敵を窺しむ。凌統兵を引て出ければ、向より馬烟を擧て曹操が勢よせ來り、張遼眞先に進んで、凌統と五十餘合戰ひ、勝負さらに決せざりければ、孫權これを見て凌統が失あらんことを怕れ、呂蒙に命じて救援しむ。甘寧すすみ出、孫權に告て曰、某ねがはくは只百騎の兵を引て、今夜曹操が陣を劫し、若一人にても討れなば大なる羞ならん。孫權その願に應じ、百人の精兵を擇び出して酒五十樽、羊の肉五十

取。この日の合戰あまりに烈して吳の勢夥しく討れしゆゑ、人みな張遼が名を聞ことを怕れ、遼來〳〵と申せば、江南の小兒は敢て夜啼をせずと云傳たり。孫權陣中に回りて討れたる者を點檢するに、其數あげて知難かりければ、心驚て更に定ず。諸將こと〴〵く來り見え、至尊は乃ち萬民の主なり、當に身を保て重んじ玉ふべし、今日の事驚き怖れずと云ものなし、若天地神明の擁護にあらずんば、爭か今日の危を免れ玉はん、君よく〳〵心に記して一生の戒とし玉へと申ければ、孫權淚を流して曰、われも心の內に慙、謹で肺腑に銘じ敢て忘ること無んとて、重く凌統に恩賞を與へ、兵を收て濡須に回り、兵船を揃て水陸共に攻上んとて、吳の國へ使を遣し、新手の勢を催促す。張遼は合淝城に回て諸將と相議し、今日逍遙津の戰に勝と云ども、孫權なほ濡須に在て、水陸より攻上んと謀る、この城勢不足にして始終叶まじ、丞相に報じて早く援の勢を乞んとて、乃ち薛悌を使とし、夜を日に繼で漢中へ到らしむ。曹操この由を聞て、諸將に問て申けるは、われ今蜀を攻ば如何ん。劉曄が曰、いま蜀中すでに定て輕々しくは攻がたし、不如まづ都にかへり、合淝の急を救て吳の國を破り玉へ。曹操げにもと同じて、夏侯淵を留て定軍山を守らせ、張郃を蒙頭岩に留めて、渠山の要害を守らせ、この二人に漢中を總攝しめ、自ら四十萬の大軍を率して、夜を日に繼で路を急ぎ、直ちに濡須を指て攻のぼる。

孫權大に驚き、手足を張て怖れ戰き、急に呂蒙、甘寧を呼回す時、張遼兵を引て驀地暗に討て蒐る。孫權が手下に只三百騎ばかりありけるが、敵の勢ひ山の崩るが如くなるに氣を奪はれて、戰べき樣も無りしかば、凌統音を擧、君速に小師橋を渡りて逃れ玉へと呼はる所に、張遼まつ先に進み、二千餘騎を引て矢を放つこと雨の如くなり。凌統これを防ぎ、命を棄て戰ひければ、孫權この間に馬を飛して小師橋を渡らんとするに、橋の南すでに一丈あまり砍落したり。孫權怕れ驚て、いかゞせんと身を揉ところに、大將谷利と云もの跡に續き、君まづ馬を引戻し、鞭を加へて再び馬をのり放ち、一跳に飛超玉へと呼はりければ、孫權馬を三丈あまり引回し、再び鞭を加て急に乘放ちたるに、那馬勢に乘て易々と飛超ければ、徐盛、董襲御方を救はんとて舟を浮て迎へける。孫權が橋を跳る時、張遼が勢急に追掛しゆゑ、凌統と谷利とは又取て回し、大勢の中へ蒐入、火出る程に戰たり。甘寧兵を引て後より蒐りければ、李典が勢喊を造りて討て蒐る。呂蒙一軍を引て其後を遮らんとすれば、又樂進が勢氣に乘て蒐立る。此に依て吳の勢大半討れて、凌統が三百餘騎は一人も殘ず討殺され、凌統槍にて數箇處を撞れ、朱に成て只一騎橋を渡んとするに、橋こと〴〵く落て而も馬疲れたれば、河に傍て逃けるを、孫權舟の中より望み見て、急に董襲に命じて、小舟を棹て迎へ、共に敗軍を收て河より南に陣を

に居玉ふゆゑ、呉の勢みな此城の空虚なるを侮りて攻破んこと掌の内にありと思ふべし、我いま城を出て快く戰ひ、奴原に膽をつぶさせて其鋭を折き、諸人の心を安んじて、其のちに固く守て出ること無るべし。李典元より張遼と不和なりければ、之を聞ながら默然としてもの云ず。樂進が曰、敵は多勢にて御方は寡し、出ては中々敵對し難からん、不如固く守て出ること無ん。張遼が曰、汝等みな私の意を以て君の事を廢す、よし人は兎も角もあれ、我は城を出て華やかなる一軍をし、其後に固く守らんとて、左右に命じて馬を引せければ、李典、慨然として座より起、これは國家の大事なり、豈私の恨を以て君の事を忘んや、某ねがはくは將軍の下知に從はんと云ければ、張遼限なく喜て曰、御邊もし我を佐るの心あらば、我明日一軍を引て逍遙津より北に伏、呉の勢の來り過るを待て先小師橋を砍落し、勢を分て之を討んとて、計を定めて退散す。此時呉主孫權は大軍を引て合淝の城に近付、諸軍に下知を傳へて曰、兵は貴神速と云り、早々に攻破れとて、呂蒙、甘寧を先手とし、自ら凌統を引て後に備、馬を進めて攻かゝりければ、城中より樂進兵を引て討て出、甘寧と五六合戰ひ、詐負て退けば、甘寧、呂蒙、勝に乘て追かくる。孫權先陣の勝たるを聞て、凌統と後陣に續て追かけたるに、已に逍遙津に到りける時、忽然として連珠砲を響し、左より張遼、右より李典、二手の勢渦まき出たり。

恨すでに骨髓に徹り、又甘寧が今日の軍にひとり高名して、傍若無人なるを見て心怒り、良久く睨みけるが、劍を拔て席上に立、座中あまりに興なく候に、我等劍を舞して樂を成んと云。甘寧これを聞て其意を曉り、前なる卓を推のけ、兩枝の戟を取て臂に挾み、進み出て、我も戟を使て興を添んと云ければ、呂蒙大に驚き、左の手に楯を持、右の手に刀を提て二人の間に立隔り、御邊達實に能舞玉ふと云ども、我等が巧なるには及ぶまじと云て、乃ち刀を舞し楯をついて二人が間を推わけたり。早くこの由を孫權に告る者ありければ、孫權驚き、慌しく馳きたり、席上に立て二人を和げ、我つねに汝二人必ず舊き讐を念こと勿と云しに、今日なにとて又此の如くなるぞと叱りければ、凌統劍を捨て地に拜す。孫權よく二人を諭し和げ、次の日大軍を進めて合淝の城に攻かゝる。去ほどに張遼は皖城の破れたるを見て心の內安からざる所に、忽ち曹操が方より薛悌と云ものを使とし、一つの匣を送て、上に曹操自ら封ずと書て、又傍に敵來らば乃ち發けとありければ、張遼いまだ發かざる所に、早馬急を告て吳の孫權十萬餘騎にて攻きたると報ず。薛悌が曰、早く匣を發き見玉へ。張遼乃ち發き見るに、若孫權せめ來らば張遼と李典とは城を出て戰へ、樂進は城を守て出ること勿と有ければ、張遼これを李典、樂進に示す。樂進申けるは、將軍の本意いかゞせんと思ひ玉ふぞ。張遼が曰、丞相遠く出て漢中

かけ、斬ども射ども顧ず、のりこえ〳〵攻のぼらば、暁より兵を進めて午未の刻には城を取ん。孫權喜び、誠に涼き計なりとて、五更に兵粮を使ひ、大軍一度に喊を造る程こそあれ、我先にと攻のぼる。されば城の中にも力を盡して之を防ぎ、大石を抛かけ、矢を射ること雨よりも繁ければ、時の程に死人手負數千人に及べり。中にも呉の甘寧は手に鐵の棒を提げ、矢石を冒して上りけるに、城の大將朱光、射手を揃て弩をつるべ放つ。甘寧これを事ともせず、雨の降如くなる矢の中を打開き、城の截崖に上りければ、内に入じとて大將朱光立ふさがりて攻戰ふ。甘寧鐵の棒を揮て先朱光を撃倒しければ、呂蒙これを見て自ら攻鼓を打けるに、呉の勢氣に乘て皆一同に攻のぼり、朱光を寸々に砍殺しければ、降人に出るもの數萬人、皖城すでに落る時、漸く辰の刻に及べり。この時張遼は合淝の城より兵を分て、後攻の爲に來りけるが、皖城すでに破れて朱光も討れぬと告ければ、半途より引回し、緊く守て戰んとす。孫權は諸軍を收め城に入て民を安んじける所に、大將凌統召に應じて餘杭より來り、先見えて勝軍の賀を述。孫權諸將に恩賞を施し、酒宴を設て持なしければ、甘寧恩賜の錦の袍を被て席上に坐す。呂蒙しきりに其手柄を稱嘆し、向に朱光を討て、一番に城に登り玉ひしは、世に雙びなき手柄なりと云ひて、酒半酣に至りける時、凌統にはかに、此甘寧は父を殺せる讐なりと思ひ出して、

口に屯して、呂蒙、甘寧を呼かへし、餘杭へ使を馳て、凌統を招きよせ、三軍こと〴〵く都を指て攻のぼる。呂蒙が曰、曹操いま盧江の太守朱光を大將として、皖城を守らせ、田疇を開き、稻を種て合淝の城へ兵粮を運ぶ、今まづ皖城を取て、其後に合淝を取ん。孫權しかるべしと同じて呂蒙、甘寧を先手とし、蔣欽、潘璋を後備とし、孫權自ら周泰、陳武、董襲、徐盛を引て中軍を守り、大江を渡して、和州より皖城へ推よする。那時程普、黃蓋、韓當は各處の要害を守りてこの陣には向はざりけり。去ほどに、皖城には吳の大勢よすると聞て、太守朱光いそぎ合淝の城に人を遣し、救の勢を求て自ら固く守りけるが、吳の大軍一度に截崖の下に攻よせ、一息に揉破らんとしければ、城の上より雨のふる如く射下す矢に、手負死人その數を知ず。孫權が盔に矢一つ中て已に裏かく程なりければ、孫權急に退き、諸將と計を議するに、董襲が曰、人夫を加へて城の四方に土を築あげ、勢に乘て攻やぶるべし。徐盛が曰、雲の梯を竪て虹橋を造り、城を直下して之を攻ん。呂蒙が曰、いや〳〵御邊達の計は皆早速の用に立がたし、徒に月日を費さん、この城のび〳〵に攻ば、合淝の城より後攻の勢かゝるべし、然る時は何の時にか攻やぶるべき、某明日城を破るの計あり。孫權問て曰、ねがはくは聞ん。呂蒙が曰、いま御方の勢初て來りて、其勢方に盛なり、此時に乘て三軍の鋭氣を勵し、四方より息をも繼ず攻

り。玄德しかるべしとて書簡を渡し、先荊州に立寄て、江夏、長沙、桂陽の三郡を呉に返し渡すべき由を關羽に告よと宣ふ。伊籍いそぎ打立て荊州に到り、關羽に逢て玄德の命を傳へ、それより呉の國に下向して直ちに秣陵に到りければ、呉主孫權よび入て、問て曰、汝いかゞして此に來れる。伊籍申けるは、向に諸葛瑾の來り玉ひし時、荊州の三郡を返し奉らんと約せしかども、孔明折節遠く出たる故に事今まで延引せり、この故に某を以て荊州の三郡、長沙、桂陽、江夏を分て返さしむ、元來こと〴〵く返し申すべけれども、如何がせん曹操に漢中を取れて、關羽身を容の地なし、今曹操遠く出て合淝の城空虚なり、望らくは呉の國の勢を起して急ぎ合淝の城に攻かゝり玉へ、曹操必ず兵を引て都に囘ん、我君もし漢中を取ば、關羽を召て之を守らせ、其時荊州を寸地も殘さず返し奉らん、今もし疑の心を抱て兵を起し玉はずんば、曹操必ず大軍を引て南に下らん、其時いかゞして防ぎ玉ふべき。孫權が曰、汝しばらく客屋に歸れ、我評議して事を定めん。伊籍すでに退きければ、孫權諸〳〵の大將を呼てこの事いかゞと議しけるに、張昭が曰、これは玄德が曹操を怖て若蜀を攻ることも有んかとて、此計を行ものなり、然れども曹操が漢中に在に乘て速に合淝を攻取ば、是又最上の計なり、顧雍が意見も某に同じと云ければ、孫權これに從ひ、先伊籍を囘らしめ、魯肅に命じて荊州の三郡を請とらせ、兵を陸

ず瓦の如に碎けん、聖人も不レ可レ違レ時、又不レ可レ失レ時と云り、早く兵を進め玉へ。曹操嘆じて申けるは、人みな足ことを知ず、既に隴を得て復蜀を望まんや。劉曄が曰、仲達が意見某に同じ、玄德は度ありて遲重なり、蜀を取て日いまだ久しからず、人民なほ心歸せず、今丞相漢中を取玉ひて、蜀中震ひ恐る、其勢ひ自ら傾かん、丞相の神武を以て其傾んとするを壓ば、豈勝ずと云こと有んや、若緩々の沙汰に及びなば、文に孔明あり、よく國を治む、武には關羽、張飛、趙雲、黃忠、馬超なんど云三軍に秀たる勇將あり、之を號して五虎とす、蜀の民すでに定り、諸々の關隘を固く守りなば、後には大なる患を成ん、今速かに攻玉へ。曹操が曰、然りと云ども、わが勢遠く來て盡く疲苦む、暫く人馬を休息せしむべしとて、兵を按住して更に動ず。此時蜀の國には曹操すでに漢中を取たりと聞て人民みな恐れ、必ず勢に乘て攻きたるべしと云沙汰して、日夜みな心を安んぜず。風吹草の動を聞ても膽を冷して懼れ戰きしかば、玄德これを憂て孔明に計を問玉ふ。孔明が曰、某一つの計あり、曹操原より張遼等を大將として、合淝の城を守らせ、吳の孫權を防しむ、今辯舌の人を吳の國に遣して先荊州の三郡を吳に返し、利害を說て孫權に合淝の城を攻させなば、曹操必ず南方に回らん。玄德大に喜で曰、たれを以てか此使とせん。一人すゝみ出て曰、某ねがはくは行ん。諸人これを見れば、伊籍な

楊松が曰、いまもし戰はずんば、必ず大なる禍に遭ん、某よく此城を守らん、君自ら出て快く一勝負決し玉へ。閻圃申けるは、君必ず城を出玉ふな、恐くは不虞の憂あらん。張魯が曰、楊松が意見わが心に合へりとて、了に閻圃が諫を用ひず、自ら城を出て戰はんとする時、手下の勢後より亂る。此に因て急に退かんとすれば、曹操が大軍すき間も無追かくる。張魯城下に到て門を開けと呼はりけれども、楊松あへて開ざりしかば、力なく馬を囘さんとするに、曹操大音あげ、早く降參せよと呼はる。張魯すべき樣なく、馬より下て地に拜伏しければ、曹操大に喜び、倉廩を封じたる志を感じて慇懃に持なし、鎭南將軍に封じて閻圃等五人を列侯とし、漢中こと〴〵く定りければ、州郡に地頭を居て士卒を賞し、惟楊松は君を賣て富貴を貪る曲者なり、諸人の戒にせんとて、市に出して殺しければ、人民みな快しとぞ申あひける。

○張遼大戰二逍遙津一

曹操すでに漢中を攻取ければ、主簿司馬懿字は仲達すゝみ出て曰、玄德いつはりの計を以て蜀の劉璋を虜にし、其國を奪ひ取たるゆゑ人民いまだ心を安んぜず、今丞相すでに漢中を取玉ひぬれば、蜀中震動して人民こと〴〵く怖れ戰かん、此時に乘て速に攻かゝり玉はば、勢必

を雙べて本陣に囘りければ、漢中の兵、櫓の上より之を望み、張魯に報じて、只いま龐德と曹操と馬を雙て通りたりと告ければ、張魯大に怒り、さればこそ楊松が言に違ずとて、これより楊松を彌重んず。次の日曹操が大軍三方より推よせ、雲の梯を造り擧て、鐵砲火矢を雨の如に放ちければ、張魯これを防ぎ兼て、弟張衞と計を議す。張衞が曰、不如火を付て城郭倉廩を燒盡し、巴中に走て要害を守るべし。楊松が曰、只門を開て速に降り玉へ。張魯猶豫して心いまだ決せざりければ、張衞が曰、事すでに急なり、早く火を掛て巴中に去ん。張魯が曰、われ本命を國家に歸せんとして意いまだ達することを得ず、今鋒鋭を避て此を去と云ども、何ぞ惡意を存すべき、城郭倉廩は本これ國家の物にして、私に廢べき理なしとて、財寶の倉廩には盡く鎖を閉てよく〳〵封じ、其夜の二更に一家の老少を盡く引具し、南の門を出て走りけり。曹操大軍を引て城中に入ければ、張魯が倉廩を封じたることを告る者あり。曹操これを聞て甚だ憐み、兵を制して追しめず、人を巴中に遣して、もし降參せば重く用ひんと云に、張魯は降らんと欲すれども、弟の張衞敢て從はず。楊松ひそかに曹操に書簡を送て、速に攻かゝり玉へと告しかば、曹操大軍を引て自ら巴中に推寄る。張衞これを聞て、城を出て戰ひけるが、許褚と出あひ、一刀に斬れけり。敗軍走り囘て、此よしを告ければ、張魯かたく守て防んと云。

揚松

曹操計
揚松に賂を寄す

龐德が一萬餘騎こと〴〵く城中に入、きびしく守て防ぎ戰ふ。この躁に曹操が細作城中に紛入、楊松が宅を尋て密に黃金の心當を贈り、曹丞相久しく足下の盛德を聞て、某を以て好を結ばしむ、乃ち書簡ありとて出しければ、楊松ひらき見て乃ち使に問て曰、いま丞相は何ごとをか願ひ玉へる。使答て曰、もし龐德を遠ざけ玉はゞ、丞相喜び玉はん。楊松が曰、この事何より以て易し、汝まづ回れとて、直ちに張魯に見え、龐德ひそかに曹操に內應して今日の軍に負たりと讒しければ、張魯大に怒り、卽時に龐德を呼出して、散々に罵り、首を刎んと云けるを、閻圃諫て之を止む。張魯なほ怒やまず、汝明日の戰ひに勝ずんば、必ず首を斬んと云ければ、龐德恨を含で退出す。次の日曹操が大勢せめ蒐りければ、龐德兵を引て城を出。時に許褚自ら馬を出し、暫く戰うて逃はしりければ、龐德急に追かくる。曹操馬に乘て山の上に立、大音あげて、龐德なんぞ早く降らざると呼はりければ、龐德屹と見て、曹操を生取んと思ひ、千餘騎を引て驀地暗に上りけるが、忽然として喊の聲響き、人馬共に陷穴の中に落入、上を下へと蠢ところを、四方より熊手に引かけ、了に龐德を生取て曹操が前に推出す。曹操馬より飛下、軍士を追拂て自ら其繩を解、平に我に事へよと云ければ、龐德その志を感じて張魯が情なかりしことを恨み、了に再拜して降人となる。曹操限なく喜び、扶て馬にのせ、態と城の邊を打通、欝

番に許褚馬を出し、五十餘合戰うて退きけるに、龐德すこしも怕るゝ氣色なし。諸大將みな曹操に見えて、龐德が武藝よの常ならずと稱嘆しければ、曹操心の中に喜び、諸將と計を議するに、賈詡が曰、張魯が手下に楊松と云る謀士あり、この人慾心あくことを知ずして極て賂を貪る、今ひそかに金帛を送りて彼が心を結び、張魯に龐德を疎ぜしめん。曹操が曰、いかゞして人を南鄭の城に入ん。賈詡が曰、明日鋒を交へて詐負て引退き、陣屋を敵に取せて、夜に入、大軍を以て四方より襲はば、龐德必ず退て城に入ん、其時辯舌の人を擇び歩軍に紛て城中に入、ひそかに楊松を尋ねて此計を行はしめん。曹操大に喜び、一人の士卒に能々此事を云ふくめ、黄金の心當を膚に披せ、表は漢中の兵の出立にて、半途に出て相待せ、次の日夏侯淵、張郃二手の勢を遠く出て埋伏せしめ、徐晃に一軍を付て敵の陣に攻かゝらしむ。龐德兵を驅て進みければ、徐晃戰ひ二三合にして詐て逃はしる。龐德勢にのりて追かけ、遂に曹操が先手の陣屋を奪ひ取。この陣中には兵粮多く在けるゆゑ、勝軍の樣を張魯に報じければ、張魯大に喜びけり。其夜二更の比に至て、にはかに三方より火を掛て、徐晃、許褚中央より推よせ、左に張郃、右に夏侯淵、喊の聲天地を動しければ、龐德馬に乘て陣屋を出ける時、早敵の大勢みだれ入。これに依て一支も支ず、南鄭を指て逃はしるに、後より曹操が大軍追かけしかば、

淵に五千餘騎を分與へ、南鄭の路を窺しむるに、端なく楊任が勢と出合、たがひに陣を開き張て、楊任が陣より大將昌奇と云もの馬を出して夏侯淵と鋒を交へけるが、戰三合にして馬より下に切て落さる。楊任これを見て自ら槍を撚て突て蒐り、戰三十餘合にして勝負を分たず。夏侯淵いつはり負て走りければ、楊任急に追かくる所を、夏侯淵引返して、楊任を一刀に斫て落す。敗軍大將を討れて四角八方へ逃たりければ、曹操大軍を驅て大に進み、南鄭關に陣を取。張魯この由を聞て怕れ驚き、文武の大將を集めて計を問ければ、大將閻圃が曰、某一人を薦て敵を防しめん。張魯が曰、なん人ぞ。閻圃が曰、南安狟道の人に龐德字は令明と云もの也、初め馬超に從てこの處へ來りしが、馬超が蜀に向ふ時は、病に臥て此に留れり、久しく君の恩養を被る、何ぞこの人を用ひ玉はざる。張魯げにもと喜び、卽時に龐德を召て自ら持なし、一萬餘騎を分與へければ、龐德十里あまり出て陣を取。曹操兼て龐德が名を知、渭橋の戰に、其手雙の程を見たりしかば、手下の大將に申けるは、龐德は本西涼の勇將にして原め馬超に從ひ、今張魯に依と雖も、其心さらに喜びず、吾この者を得て御方に用ひんとす、汝等みな緩く鬪て彼が氣力を疲かし、何とぞ欺て擒にせよと云ければ、張郃一番に馬を出し、二三合戰て引退く。二番に夏侯淵馬を出し、暫く戰て走りければ、三番に徐晃入かはりて五六合戰、詐て引退く。四

ば、敵の伏勢にてや有んとて急に兵を退けたるに、方角に迷て、誤りて楊昂が陣の前に出たり。陣中には纔なる士卒を殘して守らせけるが、大勢の來るを聞て御方の兵囘りぬと云もの有ければ、楊昂が囘りたるはとて、急に門を開きけり。夏侯淵が三千餘騎こと〴〵く込入けるに、敵更に出合ざりしかば、四方に散て一度に火を掛、喊の聲を揚たりけるに、五寨の軍勢大に亂れて、四角八方へ逃はしる。霧晴て後、楊任兵を引て馳來り、まづ火を撲滅んとする所に、夏侯淵が勢前より蒐り、張郃が勢後より蒐りしかば、楊任戰ふべき力なく、漢寧、包州を指て逃はしる。楊昂は曹操を追んとて已に半途まで出けるが、後に火の付たるを見て急に取て囘しける時、夏侯淵、張郃すでに陽平關を攻とり、曹操大軍を驅て後より追かくる。楊昂前後を裹れて逃べき路なく、一方を打破て落んとすれば、張郃槍を撚て突て蒐り、楊昂を馬より下に突落し、首を取て指あげたり。大將張衞は楊昂が討れたるを見て夜半に南鄭を望で逃去ければ、張魯大に怒り、楊任を斬て弃んとしけるに、楊任申けるは、某再三楊昂を諫しかども、彼從はずして此敗を取れり、再び一軍を乞て戰を決し、如打負なば必ず軍法を蒙らん。張魯これに從ひ、又二萬餘騎を分與て、南鄭關に陣を取しむ。此時夏侯淵は勝軍を收て曹操に見え、早く兵を進め玉へと申ければ、曹操が曰、まづ一軍を以て行先を窺しめ、大軍跡より進むべしとて、夏侯

褚と只三騎にて大勢の中を斬やぶりける時、一手の勢馳來る。曹操これを見れば、敵には有で夏侯淵、張郃が救の勢なり。敵の追かくるを取て囘して散々に戰ひ、曹操を守護して本陣に囘りければ、曹操萬死を逃れたる心地して四人の大將を重く恩賞し、互に相拒で五十餘日に及び、墓々しき軍も無りしかば、曹操下知を傳て陣屋を收め都に囘んとす。賈詡が曰、敵の勢ひ猶いまだ強弱を見ず、君なにゆゑに退き玉ふ。曹操が曰、われ思ふに、敵の兵日夜要害を守りて、急には中々やぶり難し、吾いつはりて引退くと沙汰せば、敵必ず心怠りて油斷すべし、其時反て騎馬の勢を輕々とすぐり、潛に敵の後を襲はば、敵必ず破るべし。賈詡が曰、丞相の神機たれか能測り知ん。曹操乃ち、夏侯淵、張郃に各三千餘騎を付て二手に備へ、小路を廻りて陽平關の後を攻させ、先大軍を收て引退く體を成ければ、楊昂これを聞つけ楊任に申けるは、いま曹操退いて都に囘る、勢に乘て之を討べし。楊任が曰、いや〳〵、曹操は詭の計極めて多し、いまだ眞實を知ず、輕々しく追べからず。楊昂が曰、この時を失ふべからず、御邊は此に住れ、我自ら追かけん。楊任再三諫めけれども楊昂つひに從はず、盡く五寨の軍馬を起して勢に乘て追かけしが、俄に夕霧立掩て面を對すとも見わけ難かりければ、半途に出て陣を取、霧の晴を相待けり。搦手に廻たる夏侯淵が一軍は、潛に山を越て進みけるが、霧の内に人馬の音しけれ

に、夜更て、陣の後より火を付、楊昂、楊任二手に分て推よせたり。夏侯淵、張郃、寢耳に聞て打驚き、馬よ物の具よと躁間に、寄手の大勢こと〴〵く斬て入、散々に蒐たりしかば、魏の勢若干伐れて後陣の勢に逃加はる。曹操先手の破れたるを見て大に怒り、夏侯淵、張郃を呼出し、汝二人久しく兵を用て、兵若遠行疲困、可㆑防㆑刧㆑寨と云ことを知ずや、何ゆゑに油斷して此の如く討れたるぞとて、軍法を正さんと罵けるを、諸將强て諫しゆゑ、漸に免けり。次の日曹操自ら兵を引て先手に進み、先地理を望み見るに、山の勢險阻にして樹木叢く雜ければ、敵の伏勢あらんことを怖れて再び退き回り、許褚、徐晃二人に向て、我この處の如㆑此に難所なるを兼てより知たらば、必ず來るまじき者をと云ければ、許褚が曰、すでに此處に行迫れり、君少しも懼り玉ふな。次の日曹操自ら馬に乘て許褚と徐晃と只二人を從へ、潛に來て山の坡に上り、張衞が陣を望み窺ひ、遙に鞭を揚て、敵の陣かくの如に堅固なれば、急には破り難からんと云ける所に、忽然として後に喊の聲を擧、矢を放こと雨の如し。曹操驚て急に顧れば、楊昂、楊任二手の勢殺し來る。許褚大音あげ、我は敵を防ぐべし、徐晃は君を守護して出玉へと呼はる所に、敵の大勢四方より簇り蒐りけるを、許褚刀を舞して勇を振ひ戰ひければ、楊昂、楊任が大勢その怪力に怕て一人も近付こと能ず、馬を回して引退く。徐晃この間に曹操を扶て許

重臣にして曹氏の一門に連る身なり、汝いかなる者なれば此の如に無禮なる。許褚答て曰、將軍は誠に曹氏の御一族にして、甚だ親とは申ながら、已に外に出て敵を征するの官なり、某は疎にして身賤士卒なれども、内侍の仰を承はりて君の傍を離ること無、いま君酒に醉て堂上に臥玉ふ、此ゆゑに人を入ずと云ければ、曹操これを聞て、急に走り出、虎侯が云ところ甚だ明なり、誠に忠烈の大將なり、曹仁あやしむこと勿れとぞ申ける。數日ありて夏侯惇來りければ、共に計を商議するに、夏侯惇が曰、吳蜀いまだ急には攻べからず、先漢中を攻て張魯を滅し、勝に乘て蜀を伐ば、一鼓して破るべし。曹操喜び、これ正に我心に合へりとて、西征の大軍を三手に分、夏侯淵、張郃を先陣とし、曹仁、夏侯惇を後陣として兵粮を司らしめ、曹操自ら諸將と中軍に備へ、漢中を指て推よする。この由先達て漢中に聞えければ、張魯大に驚き、諸將と計を議するに、弟の張衛すゝみ出て申けるは、漢中第一の要害は陽平關に如べからず、左右山に依、林に傍て十餘箇所に柵を下し、險阻を守て防べし、兄は漢寧に陣を取て兵粮を送り玉へ。張魯これに從ひ、張衛を大將として楊昂、楊任二人を副將とし、陽平關に出て防しむ。去ほどに曹操が先陣の勢すでに陽平關に近付けるが、敵大勢にて要害に支たりと告ければ、關を離ること十五里にして陣を取、その勢みな長途に疲て盡く前後も知ず寐入たる所

謀るか、われ汝を殺ざるに、汝必ず我を殺んとするやと云て、武士に命じて亂棒に打殺させ、又宮中に入て伏皇后の生玉へる二人の皇子を酖毒にて殺し奉り、伏完、穆順が一門二百餘人を捕て盡く市に斬ければ、朝野の人みな驚き怖れざるは無。時に建安十九年十一月なり。帝は伏后の御嘆きに曹操又いかなる荒き沙汰をか致さんとて、宸襟を安んじ玉はず。連日供御をも聞し食れざる所に、曹操來り見えて申けるは、陛下少しも憂ひ玉ふな、臣いかでか情なき行ないを成ん、臣が女すでに陛下の貴人たり、大賢大孝にして宜く皇后に備べしと勸ければ、帝已ことを得ずして之に從はせ玉ひ、建安二十年正月朔日に、曹操が女曹貴人を冊き立て皇后とし、ければ、群臣敢て言を出す者も無りけり。

○曹操破二漢中張魯一

曹操手下の大將を集め、吳蜀を滅の事を議しければ、賈詡申けるは、宜く夏侯惇、曹仁を召て此ことを議玉へ。曹操これに從ひ、急に羽檄を飛して二人を召。時に夏侯惇はいまだ來ず。曹仁まづ來りければ、直ちに府中へ入て曹操に見んとするに、折節曹操酒に醉て睡り居たり。許褚劍を執て堂の門に立、曹仁を推止めて内に入しめざりければ、曹仁怒て曰、我は乃ち征南の

是時帝は外殿に出て御座ありけるが、郄慮鎧たる兵三百人を引て來りければ、帝驚て何事か有と問玉ふ。郄慮答て曰、魏公の命を受、皇后の璽綬を收め候。帝事の泄たるを知て膽を落し、魂を失て怖れ慄き玉ふ。郄慮直ちに後宮に入ければ、伏皇后寐所より出玉ひ、事の泄たるを聞て急に椒房の門内に走り、壁の際に藏玉へり。少刻ありて尙書令華歆又五百の精兵を牽して後宮に入、伏皇后は何くに居玉ふと問へども、宮女みな相推て房中に藏玉へりと答ふ。華歆兵を下知して朱戸を打開き、遍く尋れども更に見えず、餘に求かね、刀を持て壁を劈開ければ、伏皇后わつと喚て走り出玉ふを、華歆自ら后の髻を掫で拖出す。皇后痛く哭き、願くは我命を扶よと叫玉へば、華歆大に叱、汝自ら魏公に見て哭けとて、武士共引立て、髮を亂し跣足にして外殿に出ければ、帝は之を見玉ひ、殿上より走り下、后を抱て哭玉ふ。華歆聲を怒し、魏公の命なり速に行と下知すれば、皇后聲を放て哭き、復活ること能ざるかとて地に倒れ玉ふ。帝も御袖を推あて朕命も料がたしと云て、御淚に咽び玉へば、武士共前後を打かこみ、后を追立て出にけり。帝これを望み見て、胷を槌て哀み哭き、郄慮が傍に在しに向て、如何に郄公、天下に寧ろ箇樣の事有んやと宣ひ、地の上に昏絕し玉ひければ、郄慮扶て宮中に入奉る。華歆后を挈て曹操に見えければ、曹操大に怒り、吾誠の心を以て天下を治む、汝等反て我を害せんと

都を攻させなば、曹操自ら出て防べし、其隙に朝廷忠義の舊臣を語ひ、一同に事を起さん。穆順が曰、しからば返簡を封じて此事を帝と后とに告て御心を安んじ玉へ。伏完げにもとて、返簡を封じて穆順に渡しければ、穆順又よく〳〵髻の中に藏し、別て内裏へ回りけるに、曹操向に穆順が外へ出たる由を聞、自ら宮門に立て、其回るを待。穆順走りて前に來りければ、曹操問て曰、汝いづくへか行たる。穆順答て曰、皇后にはかに腹の疼あり、某に命じて醫者を尋しむ。曹操が曰、醫者は何にかある。穆順が曰、事急にしていまだ見えず。曹操怒て武士に命じて遍く捜させけるに、更に一物も無りしかば、其儘にて放しけり。穆順虎の口を逃れたる心地して、歩み回らんとする時、忽ち風吹て頭に被たる帽子を落す。曹操これに心付て、呼回して自ら帽子を見るに、怪きことも無りしかば、乃ち返し與へけるを、穆順兩の手に受取、頭に戴て去んとしければ、曹操推とゞめ、髻の中に必ず仔細あらんとて自ら捜しけるに、果して伏完が后に答る文あり。披て之を見るに、玄徳孫權を語ひ、早く曹賊を殺んと書たりければ、曹操大に怒り、穆順を縛て拷問するに、更に落ざりしかば、其夜三千の精兵を率して伏完が宅を取圍み、内に入て遍く捜しけるに、伏皇后の文を取出せり。曹操いよ〳〵怒り、伏完が三族を捕て獄に下し、夜あけて御林將軍郄慮に節を持て内裏に入、まづ皇后の璽綬を奪て平人と成しむ。

皇后
帝王

曹操朝廷に武威を恣にす
曹操

怒て、武士を引具し、禁裏に打入、趙儼を生捕て市に斬。帝これを聞て驚き哭かせ玉ひければ、伏皇后の曰、わが父の伏完は常に曹操を殺んとする心あり、われ文を以て父にこの事を訴へ、早く計を成しめん。帝の宣はく、昔し董承事を成こと密ならずして、反て大なる禍に遭り、恐くは又事漏て、朕も后も憂目を見ん。伏皇后の曰、しかりと雖ども朝夕針の氈に坐するが如く、片時も心を安んずること無、命存へて何にかはせん、早く死んには如じ、われ常に心を付て内官を見るに、只一人忠義を正して曹操を殺んとする者あり、この人を頼でひそかに父の方へ文を送らん。帝の宣はく、如何なる人ぞ。伏皇后の曰、穆順にあらずんば叶まじとて、即時に召よせ、傍の人を退けて帝も后も共に哀み哭き、曹操自ら魏王と成て天下を奪んとする心あり、宮中の人こと〴〵く彼が耳目なり、朕夫婦すべき様なく、誰に語るべき人もなし、汝ひそかに此文を伏完に送り、共に計を運してこの難を救へと宣ひければ、穆順涙を流して曰、臣久しく陛下の大恩を蒙り、命を捨るとも何ぞ惜ん、願くは伏完と共に計を成ん。帝限なく喜び、后の文を渡し玉へば、穆順これを髻の中に藏し、密に内裏を出て直ちに伏完が宅に到り、后の文を出しければ、伏完ひらき見るに、紛なきわが女の文なり。乃ち穆順と議して申けるは、われ朝廷の衆官を見るに、敢て曹操に近付べき者なし、呉の孫權蜀の玄徳を語ひ、兵を起して

曹操見了て遂に吳の國に向ことを罷、多く學校を造り設て、學者に道を教へ、政を治て民を懷しかば、王粲、杜襲、衛凱、和洽など云四人の侍中共に相議し、曹操を尊で魏王の位に卽しめんとす。時に中書令荀攸申けるは、この事決して然るべからず、今丞相官魏公に至り、榮九錫を加へ、爵を諸侯に進めて已に金璽を受玉ひぬれば、人臣の望み身に餘れり、今又王位に卽玉はんは理に於て然るべからず、必ずこの事を止させ玉へと諫ければ、曹操大に怒り、此人も又荀彧に效んと欲するかと云しかば、荀攸その意を知て、十月に病に臥、數日の內に亡けり、時に年五十八歲。曹操この由を聞て後悔し、厚く葬りの儀を執行ひ、遂に魏王の事を閣ける。

或日曹操劍を帶て內裏に入ければ、帝伏皇后と共に坐して御座ありしが、曹操が來るを見て急に起て迎へさせ玉ひ、大に怖れ戰玉ふ。曹操申けるは、玄德と孫權と共に一方に覇として朝廷を尊ず、之を如何して服せしめん。帝の宣く、此みな魏公の裁斷にあり。曹操怒て曰、陛下左樣の言を出し玉ふ、文武の臣これを聽ながら、偏に某が君を欺と沙汰し候。帝の宣く、君もし朕を輔ること厚時は、安んぞ其恩を忘べき。曹操座を起て作り眼をなし、帝を威してつと出たり。時に諫議郎趙儼と云もの帝に見て、近ごろ曹操自ら魏王と成んとす、久しからずして必ず天下を奪べしと奏しければ、帝伏皇后と哭き悲玉ふ。早この由を曹操に告る者あり。曹操

通俗三國志　卷之二十八

○曹操擊殺伏皇后

建安十九年の冬、曹操大軍を起して吳を滅んとて、已に手分を定る所に、參軍傅幹字は彥材と云者、上書して諫て曰、

幹伏聞、治天下之大具有二、文與武也。用武則先威、用文則先德、威德以相濟、而後王道備矣。往者天下大亂、上下失序、明公用武攘之、十平其九。今未承王命者、吳與蜀也。吳有長江之險、蜀有崇山之固、難以威勝、易以德懷。愚以爲、且按甲寢兵、息軍養士、分土定封、論功行賞、若此則內外之心固有功者勸、而天下知制矣。然後漸興學校、以導其善性、而長其節義、公神武威震於四海。若修文以濟之、則普天下無思不服矣。今擧數十萬之衆、頓長江之濱、若賊負固深藏、則士馬不能逞其能、奇變無所用其權、則天威有屈、而敵心未能服矣。惟明公思虞舜舞干羽之義、全威養德、以道制勝則國之幸也。願鈞察焉。

魯肅を摑で出たるを見て、若討て出ば魯肅が殺されんことを怕れ、兵を制して更に出ず。關羽は船の上に到て初めて魯肅を放し、共に別を成ければ、魯肅茫然として酒に醉たるが如し。關羽が船すでに順風に乘じて飛が如に去しかば、呂蒙、甘寧等魯肅と共に本陣に回り、この計又成ず、如何すべきと議しけるに、呂蒙が曰、早く君に申して大軍を起し、勝負を決して荆州を取ん。魯肅これに從ひ、孫權に右の趣を報じければ、孫權これを聞て大に怒り、傾國の軍兵を出して荆州を攻んと議する所に、忽ち早馬急を告て、曹操又三十萬の勢を卒して、吳の國へ推よすると報じければ、孫權膽を冷して申けるは、斯ては荆州を攻ること叶まじ、急ぎ合淝、濡須の邊に出て曹操を防とて、大軍を揃て進發す。

ふ、是凡夫だも行に忍ざる所なり、況んや人物の主たるをや、古より貪て義に背は必ず禍の階なりと云へり、願くは君よく之を裁斷し玉へ。關羽が曰、これ皆わが兄劉皇叔の事なり、某が預り知ところに有ず。魯肅が曰、某承はる、昔し桃園に義を結で、共に生死の交を誓ひ玉ふと、然る時は劉皇叔は卽ち足下なり、何ゆゑぞ知所に有ずと宣へる。關羽答ふべき詞なく、默然として居たりければ、傍に在ける周倉聲を勵して曰、天上地下惟德ある者これを保つ、豈御邊が主の孫權のみ荊州を保の理あらんや。時に關羽俄に色を變じ、周倉が持たる青龍刀を提て亭中につと立て申けるは、これは國家の大事なり、汝なんぞ敢て舌を搖とて、屹と目合せすれば、周倉その意を曉て、岸の邊に走り出、紅の旗を把て遙に招ば、江を隔て控たる關平が勢五百餘人、すはや相圖をするは、急げとて十艘の快舟矢の如く東の岸に馳きたる。

關羽は右の手に青龍刀を提げ、左の手に魯肅が臂を摑み、佯て醉たる體をなし、御邊いま我を請じて酒宴し玉ふ、是非を論ずるに及ず、大に醉て答ふること能ず、恐らくは故舊の情を傷るべし、他日又御邊を荊州に請じて一會を成ん、我まづ別て囘らんとす、舟まで送り玉へと云て、小兒を提たるが如にして岸の邊まで出ければ、魯肅怕れ慄き、魂も天に去心地して江邊に提られ出たり。兼てより呂蒙、甘寧は兵を伏て關羽を漏さじと待ける所に、關羽大なる刀を提げ

能ず畏れ入て居たりしが、酒半酣に至て申けるは、某一言あり、願くは君に語らん、幸に聽て察し玉へ、昔劉皇叔偏に某を以て往來の使たらしめ、主人孫權に荊州を借玉ひ、今に至るまで返し玉はず、此約を背て信を失ふにあらずや。關羽が曰、これは國家の大事なり、酒宴の席にて論ずべからず。魯肅が曰、わが國本荊州を劉皇叔に借たるは、當時曹操に攻やぶられ、遠路を逃て疲れ玉ひしを憐み、假に力を合せてその難を救しもの也、今すでに蜀の四十一州を取て、猶荊州を返し玉はず、纔に三郡を分て返さんと宣ふをも、君これを止めて皇叔の命を背き、信義を天下に失はしめ玉ふ、君は幼より儒書を讀玉ひ、五常の道を正して仁義禮智みな全しと申せども、惟信を欠玉ふ計なり。關羽が曰、烏林の戰ひに我劉皇叔自ら矢石を冒して敵を破り、身を捨て功を成玉へり、斯る功勞を建て、豈徒に荊州を棄て取ざるべきか、御邊必定來て之を取返し玉はんや。魯肅が曰、然らず、君初め劉皇叔と共に、當陽の長坂に敗られ、手下の勢こと〴〵く討れて計窮り、勢盡、いかんとも爲べき樣なくして遠く竄て身を保んとすれども及ばず、我主人これを愍み、皇叔の一身を容に處なきを見て、國の費を惜ず、民の勞を顧ず、曹操を赤壁に破て其患を濟玉へり、是豈容易の事ならんや、然るに劉皇叔私に情を飾て、今すでに蜀の州郡を取玉ひながら、猶荊州を返し玉はず、枉て併せ領せんとし玉

関平

関羽周倉を將て呉の會に威を示す
関羽
周倉

睨して物なきが如にせり、何に況や吾會て萬人の敵を學ぶ、已に行んと云て今又ゆかずんば、是信に背なり。馬良が曰、たとひ將軍ゆき玉ふとも宜く用心し玉ふべし。關羽が曰、われ只關平に舟手の精兵五百人を付、快舟十艘を揃て此方の岸の邊に待せ置、われ只一人江を渡て會に赴かん、若旗を以て招くを見ば、早く舟を飛して馳きたれ。關平父の命に從ひ、兵を揃て北の岸に出ければ、關羽八十二斤の青龍刀を周倉に持せ、小舟に乘て江を渡る。去ほどに、使回て關羽が明日來る由を告ければ、魯肅密に呂蒙を呼で計を議す。呂蒙が曰、關羽必定大勢を引て來るべし、若兵を率ゐ來らば、某甘寧と各一軍を引て岸の側に伏、鐵砲を鳴を相圖とし、一度に出て盡く討止ん、若又兵を率ゐ來らずんば、庭の後に屈強の武者五十人を伏おき、席上にて之を殺べしとて、計すでに定まり、次の日人を出して窺しむるに、辰の刻に及んで向うより一艘の舟きたり、紅の旗に關の字を大文字に書たるありと申す。その舟すでに岸に著ければ、關羽綠の袍を披て舟より上り、周倉とて面は蛟の如く、臂に千斤を揚る大力、かの青龍の大薙刀を執て相從ひ、劣らぬ兵八九人みな腰に刀を横たへ、相續て踊り上りしかば、魯肅出迎へて震ひ驚き、前に向て禮を施し、引て臨江亭の中に入ければ、關羽相從ふ者を遠く外に住めおき、周倉一人を具して内に入。魯肅拜伏して自ら盃を捧げ、仰で關羽を視ること

ければ、關羽ひらき見るに、其書に曰、

辱友魯肅頓首、致書於漢壽亭侯麾下。奉別久矣、瞻仰無由。今暫屯兵陸口、欲邀車騎于臨江亭一會、以訴渇仰之懷。雖然各事其主、卽無異外之心、專望來臨。幸勿見阻、感々。

關羽見了て其使を呼、魯肅われを招て會宴せんと欲す、明日必ず行ん、汝まづ回れと云ければ、使拜謝して吳に回る。關平諫て曰、魯肅が會宴は必ず惡心あらん、父なに故に輕々しく行んと宣ふぞ。關羽笑て曰、われ之を知まじきか、此は諸葛瑾吳に回て、吾三郡を返さぬを告たるゆゑ、孫權又魯肅を責、この故に魯肅謀て兵を陸口に移し、吾を招て荊州を求ん爲なり、吾もし行ずんば、是臆せるに似たり、明日小舟に乘て只十餘人を從へ、單刀にして會に赴んに、魯肅いかんぞ我に近付ことを得ん。關平又諫て曰、父千金の重き御身を、輕々しく虎狼の穴に陥入玉ふな。關羽が曰、われ千槍萬刀矢石交攻るの際に在て、匹馬縱横人なき處を行が如し、豈吳の國の鼠を怕れんや。馬良これを聞て諫て曰、魯肅は長者の風ありと云ども、心の中事を急にす、恐くは狼心なきこと能はじ、將軍かる〴〵しく行玉ふべからず。關羽が曰、むかし春秋の時に趙の國に藺相如と云し人は、雞を縛ばかりの力も無して澠池の會に秦の國の君臣を傲

召て申けるは、いま玄徳わが荊州を借て年久しく返さず、已に三郡を分て先返さんと約を成り、試に官人共を長沙、零陵、桂陽の三郡に遣して其體を窺ひ見よとて、諸葛瑾が一族を皆獄より出しけり。去ほどに三郡を受取んとて荊州に赴きたる官人共こと〴〵く追返され、遅く逃る者は多く關羽に殺されたりと告ければ、孫權いよ〳〵怒て急に魯肅を呼よせ、汝當初使を成て、玄徳もし蜀を取ば必ず荊州を返さんと云り、今すでに蜀を取て之を返さざるは如何なる道理ぞと責ければ、魯肅が曰、いま一つの計あり、兵を陸口に屯して、酒宴を設て關羽を招き、若來らば言を和げて荊州を求め、猶從はずんば、帷幕の陰に精兵を伏おき、忽ちに之を殺ん、若招けども來らずんば、大軍を起して勝負を決し、是非なく荊州を奪ひ取ん、諸人の評議すでに定れり、君の命を受て行はん。孫權が曰、これ正に吾意に合へり、速に之を行へ。時に一人すすみ出、無用々々、關羽は乃ち世の虎將なり、等閑の及ぶべきに有ず、恐らくは此計諧ずして、反て其害を被らんと云ものあり。諸人これを見れば闞澤なり。孫權怒て申けるは、しかる時は何の年にか荊州を得ん、早々に之を行へ。魯肅命を受て兵を陸口に屯し、呂蒙、甘寧を召て計を定め、會宴を陸口の塞外臨江亭の上に設け、書簡を調て使を荊州へ遣しける。使江を渡て江口に著ければ、關平その故を問て共に荊州に入、引て關羽が前に出し、書簡を呈し

生死を同うす、是元漢室を再び興さんが爲なり、兄すでに荊州を我に與へて、今又三郡を分て呉に返せとは、是いかなる道理ぞ、這州郡は皆大漢の地なり、豈一寸の土をも妄に人に與んや。諸葛瑾が曰、主人孫權、某が妻子一族を獄に下して、荊州を返さざる時は盡く誅せんとす、將軍ねがはくは之を憐玉へ。關羽が曰、御邊が妻子一族を誅せんと云は、此みな詐の計なり、如何んぞ吾を欺き得ん。諸葛瑾が曰、將軍もし返し玉はざる時は、是わが面目を失ふ所なり。關羽劍を拔て申けるは、再び詞を出すこと勿れ、此劍面目を失はじ。關平急に諫て申けるは、父怒を休玉へ、彼は孔明軍師の兄なり。關羽牙を嚙で申けるは、われ孔明を思はずんば、再び汝を生て回さじ者を。諸葛瑾羞怕れて爲べき樣なく、慌て又舟にのり、再び蜀に來て孔明を尋ぬれば、この時孔明は諸郡の巡檢に出て在合ず。是に依て玄德に見え、哀み哭て關羽が殺んとせしことを語りければ、玄德の曰、關羽は性甚だ急にして假初には說がたし、御邊且く回り玉へ、我漢中を攻取て張魯を平げ、關羽を召て之を守らせ、其時荊州を呉に返さん。諸葛瑾せん方なく玄德の書簡を求めて呉に回り、關羽が荊州を返さざる由を告ければ、孫權大に怒て曰、玄德は返さんと云ども、關羽が從はざるは、皆これ孔明が計にては無か。諸葛瑾が曰、しからず、孔明は哭て玄德に告、まづ三郡を返さんと申したり。孫權もろ〳〵の大將を

荊州を返し與へん。諸葛瑾ひそかに喜び、入て玄徳に見て孫權が書簡を獻りければ、玄德ひらき見て大に怒り、我本荊州を吳に返さんと思ふ所に、汝潜に孫夫人を欺て呼囘す、何とて斯の如くに情うすき、是わが面目を失ふ所なり、一度この恥を雪んと思ふ、恨骨髓に入れり、昔し荊州に在し時だも汝を以て屑とせず、今蜀の四十一州を倂せて精兵數十萬、糧艸二十年の貯あり、我兵を起して吳を踏やぶらんと思ふこと已に久し、汝いかでか荊州を取ことを得んと、聲を勵て宣ひければ、孔明哀み哭き、地に拜して申けるは、吳主孫權某が兄の妻子一族を獄に下し、若荊州を返さずんば盡く誅せんとす、兄もし誅せられば、其いかどして生のこらん、君ねがはくは兄弟の情を憐玉へ。玄德なほ怒て再三從ひ玉はず、良久うして宣ひけるは、軍師の患も默止がたければ、荊州の內長沙、零陵、桂陽の三郡を吳に返さん。孔明が曰、しからば、書簡を關羽に送り、此趣を告て三郡を吳に返さしめ玉へ。玄德の曰、諸葛瑾自ら荊州に行て、何とぞして三郡を求め玉へ、我弟の關羽は性急にして烈火の如し、我なほ之を懼る、宜く仔細にし玉へとて、乃ち書簡を渡し玉へば、諸葛瑾相別て直ちに荊州に赴く。關羽迎へて中堂に請じ、禮了て座に著ければ、諸葛瑾乃ち玄德の書簡を渡して曰、將軍速に三郡を返し玉へ。關羽俄に色を變じ、大に怒て申けるは、われ兄と桃園に義を結で、誓て

張昭が曰、わが國初て安寧なり、いまだ兵を動べからず、某一つの計あり、手を袖にして荊州を取返さん。孫權喜て曰、ねがはくは聞ん。張昭が曰、玄德が頼とする者は諸葛孔明一人なり、其兄諸葛瑾久しく吳に在て君に事ふ、今諸葛瑾が妻子一族を盡く搦め捕て獄に下し、諸葛瑾を蜀の國へ遣し、孔明に遇て此事を說しめ、若荊州を返さずんば、其妻子一族に至るまで盡く殺んと云しめん、彼二人は骨肉の兄弟なり、兄の難に遇ことを知ば、孔明必ず玄德に告て荊州を返さん。孫權が曰、この計好と云ども、諸葛瑾は久しく我に事て誠實の君子なり、安んぞ彼が妻子を獄に下に忍びんや。張昭が曰、明に此計を告知せ、假に捕へて獄に下し玉へ、然る時は何の碍かあらん。孫權これに從ひ、諸葛瑾を召て其事を語り、假に其妻子一族を收め捕ければ、諸葛瑾速に成都に到る。玄德これを聞て孔明に問て曰、先生の兄こゝに來るは如何なる爲ならん。孔明が曰、これ荊州を取の計なり。玄德の曰、しかる時は如何答ん。孔明耳を附て箇樣々〱と低語き、その後自ら出て之を迎へ、私の宅には到らず、直に客屋に入て參拜了ければ、諸葛瑾聲を放て大に哭く。孔明驚て曰、兄なにを哭玉ふぞ、早く其故を告玉へ。諸葛瑾が曰、わが妻子一族盡く誅せらる。孔明が曰、荊州を返さゞるに依て此の如なるか、某が故を以て兄の妻子一族を失んこと豈坐ら見るに忍んや、御心を安んじ玉へ、某君に申て

曰、向きにも云し如く、我いま蜀に入て馬超と武藝を比べんと欲す、汝兄に見て此事を語らざりしか。關平が曰、軍師の書簡こゝにあり。關羽乃ち披き見るに、其書に曰、

亮聞、將軍欲與孟起分別高下。以亮度之、孟起兼資文武、雄烈過人、一世之傑士、黥布彭越之徒、當與翼德並驅爭先、猶未及美髯公之絶倫超群也。今公受任據守荊州、不爲不重、倘一入川、若荊州有失、罪莫大焉。言雖狂簡、以冀明照。

建安十九年秋七月　亮頓首拜知

關羽見了て其髯を握り、笑て申けるは、孔明よく我心を知れりとて、書簡を遍く諸大將に示し、遂に蜀に入の心を止りけり。

○關羽單刀赴吳會

この時吳の孫權は、玄德すでに蜀の國を取て劉璋を公安へ移したりと聞て、諸大將を集めて申けるは、當初玄德われに荊州を借て、蜀の國を取ば必ず返さんと約せり、今巳蜀の四十一州を取て猶いまだ荊州を返さず、早く使を遣して此事を促し、若返さずんば大軍を起して攻取ん。

怨む、此ゆゑに匹夫大に呼で天下土の如に崩る、高祖これに依て寛仁を用ひ、法を寛かにして天下を治め玉へり、今、劉璋が闇弱なる、父子相傳て累世の恩あり、法度こと〴〵く廢れて、德政擧ず、刑威肅ずして君臣の道みな亡ぶ、凡そ人これを寵するに位を以てして、位きはまる時は殘し、これを順るに恩を以てして、恩竭る時は慢す、國の滅亡實に此に由り、吾いま之を威に法を以てす、法行るゝ時は恩を知、之を限に爵を以てす、爵加る時は榮を知、恩榮共に著れ、上下心を同うする時は、國を治るの道斯に於て明なり、凡そ政を治る者は、時に宜務を識て其のちに行べしと云ければ、法正拜服して退きける。此より上下平安君民安堵して四十一州こと〴〵く治まり、兵を分て守らしめ玉ふ所に、忽ち荊州より關平きたり、向に賜ひし金銀等の恩を謝し、再拜して關羽が書簡を獻つる。玄德酒を賜て別に關羽が云しことは無かと問玉へは、關平申けるは、某が父、この比馬超が御方に降りて、其武藝人の及ぶ者なしと聞て自ら蜀に入て馬超と勝劣を定めんと申し候。玄德驚て、關羽もし此に來らば、馬超と力を爭て勢必ず兩立せじ、如何せんと宣へば、孔明が曰、少しも妨なし、某書簡を送らば、自ら無事ならん。玄德心の内に、關羽は性の急なる者なり、若速に來ることも有んと危み、孔明が書簡を求て關平を荊州へ回し玉ふ。關平夜を日に繼で、荊州に回りければ、關羽が

黄忠、揚武將軍魏延、平西將軍都亭侯馬超、これ等を始として、孫乾、簡雍、糜竺、糜芳、劉封、吳班、關平、周倉、廖化、馬良、馬謖、蔣琬、伊籍、汎々の輩は盡く記すべからず。重く恩賞を賜はりて使を荊州へ遣し、黄金五百斤、白銀一千斤、錢五千萬、錦一千匹、關羽に命じて諸軍に分ち與へさせ、牛を宰し馬を殺して大に士卒を勞ひ、倉廩を開て百姓を賑し玉ひしかば、蜀中ことごとく平定して、喜び謠ふ聲家々に滿々たり。玄德乃ち田宅を分て諸將に賜らんと宣ひければ、趙雲諫て曰、昔し霍去病は、匈奴のいまだ滅ざるを以て將士いづくんぞ家を爲ることを用んと云り、況や今國家の逆賊その暴虐をなすこと匈奴の類に有ず、豈田宅を求めて身を安んずることを望まんや、必ず天下盡く定るを待て、其のちに鄕里に還り、本土に耕して身を安ずべし、是乃ち其宜なり、況や蜀中の人民久く兵革の亂に遇て、田宅ことごとく空虛なり、今みな百姓に還し與て各業を安からしめ、法を定て賦稅を出さしめば、民の心自然に服せん、之を奪て私の愛を爲べからず。玄德げにもと喜び、孔明を召て國を治る政を定めさせ玉ふに、孔明條例を損益して刑法頗る重かりければ、法正申けるは、昔し漢の高祖法を三章に約して民みなその德を感ず、願くは軍師刑法を省て民の望を慰玉へ。孔明申けるは、御邊その一つを知て、いまだ其二つを知ず、秦には商鞅を用て苛法暴逆、萬民ことごとく之を

百姓みな香花を捧て出迎ふ。玄德府堂に上て坐し玉へば、蜀中の大將官吏こと〴〵く階下に拜す。其内に黃權と劉巴とは門を閉て更に出ざりければ、諸大將にくしと怒り、行て殺んとひしめきたるを、玄德急に下知を傳へ、若この二人を害する者あらば、必ず其三族を滅さんと云玉ひければ、蜀の諸將こと〴〵く悅服す。其後玄德自ら門に到りて、黃權、劉巴を招き玉へば、二人その恩を感じ、了に出て降參す。孔明申けるは、今蜀中已に平定せり、一國に二りの君なし、速に劉璋を荊州へ送り玉へ。玄德の曰、われ始て此國を得たり、いまだ劉璋を遠く去しめじ。孔明が曰、劉璋が此國を失ひしは、皆その心の惰弱なるに依り、君もし婦人の仁を以て事に臨んで決し玉はずんば、恐くは此國久く保ち難からん。玄德げにもとて、酒宴を設て劉璋を振威將軍に封じ、妻子一族を引具し荊州に行て南郡公安の邊に居住せしめ、玄德自ら益州の牧を領し、降參の大將に恩賞を賜て、皆名爵を定め玉ふ。其人々には、前將軍嚴顏、蜀郡太守法正、掌軍中郎將董和、左將軍長史許靖、營中司馬龐義、左將軍劉巴、右將軍黃權、その外吳懿、費觀、彭義、卓膺、李嚴、吳蘭、雷同、張翼、李恢、秦宓、譙周、呂義、霍峻、鄧芝、孟達、楊洪、周群、費禕、費詩、降參の文武六十餘人、その餘の舊日荊州の大將にも盡く封爵あり。軍師將軍孔明、盪寇將軍壽亭侯關羽、征虜將軍新亭侯張飛、鎭遠將軍趙雲、征西將軍

る星あり、光煌々として皓月の如し、是乃ち帝王の象なり、況や一年以前に小兒の謠を聞ば、若要レ吃ニ新飯一、須レ待ニ先主來一と云り、此乃ち預め兆を告る也、必ず天道に逆べからず、速に降り玉へと勸ければ、黄權、劉巴大に怒り、惛き腐れ儒者、無用の舌を搖と云て、已に譙周を斬んとす。劉璋これを推住る所に、一人走り來り、只今蜀郡の太守許靖城を踰て降人に出たりと告ければ、劉璋哭て已ず。成都の人こと〴〵く傷悲む。次の日玄德の幕賓に簡雍と云もの、城下に來て門を開けと呼はると告ければ、劉璋門を開て迎へ入しむ。簡雍門に入て肯て車より下んともせず、四方を視廻して、其體無禮なりしかば、一人劍を拔てこれを叱り、汝鼠輩いかに志を得たればとて、何とて傍若無人の擧動を成、汝蜀の人物を輕んずるかと云ければ、簡雍驚き怖れ、慌て車より飛下たり。此人は廣漢綿竹の人に秦宓字は子勑と云もの也。簡雍急に禮を施し、我先生を知ずして誤て無禮を成、幸に責らるゝこと勿と云て、共に劉璋に見えければ、劉璋自ら上賓の禮を以てあつく敬ふ。簡雍乃ち玄德の寛弘にして賢を愛し士を好み、相害するの意なき由を語りければ、劉璋甚喜び、一夜簡雍を住めて次の日印綬文籍を引渡し、共に城を出て降參す。玄德自ら出迎へ、劉璋が手を執て涙を流し、われ仁義の心なきに有ずと申せども、勢自ら已ことを得ざる故なりと云て、馬を雙べて城中に入玉へば、成都の

ず。時に馬超が救の勢來れりと報じければ、劉璋喜び、自ら矢倉に上て望み見るに、馬超、馬岱壕の邊に馬を立、劉璋に逢て一言を申んと呼はりければ、劉璋城の上より何事ぞと問に、馬超鞭を以て指揮して申けるは、われ本張魯が兵を領し、來て君を救ところに、何ぞ期せん、張魯却て楊松が讒言を信じ、謀て我を害せんとす、我この故に劉皇叔に降れり、汝早く門を開て降參し、民の苦を免れしめよ、若迷を執て降らずんば、我まづ此城を踏破んと呼はりて、少し退て陣を取。劉璋大に驚き怖て、魂も天に飛、面は土の色の如く、昏絶して地に倒れけるを、諸人扶て内に入けり。劉璋人心地付て、我智惠の明ならざるは悔るとも何ぞ及ばん、不如門を開て降參し、多の民を救んと云ければ、董和申けるは、是はそも如何なることぞ、城中なほ三萬の精兵ありて金銀兵糧一年の貯あり、君少しも憂ひ玉ふな。劉璋申けるは、われ父子蜀を治ること已に二十餘年に及べども、恩德の民に施なく、攻戰ふこと三年にして骸を原野に曝せること幾許と云數を知ず、是みな我一人の罪に歸す、不如速に降參して民の塗炭を救んと云ければ、聞人淚を流ざるは無。時に一人すゝみ出、君の言よく天意に合へりと云。諸人これを見れば、巴西西充國の人に譙周字は允南とて、能天文を悟れる者なり。劉璋乃ち汝が意を聞んと云ければ、譙周が曰、某夜天文を考へ觀るに、群星みな蜀郡に聚て、其内大な

玉の節を立て、萬世の高名を彰し玉はざる。馬超げにもと喜び、楊柏を呼出して一刀に首を斬、李恢と共に關中に入て玄德に見えければ、玄德あつく敬ひ、上賓の禮を以て自ら持成玉ふ。馬超恩を感じ頓首して申けるは、某いま明主に遇、乃ち雲霧を撥て青天白日を見るが如なりとて其心大に喜ぶ。

○玄德平二定成都一

馬超すでに御方に降り、孫乾も漢中より回りければ、玄德又霍峻、孟達に命じて初の如く葭萌關を守らせ、兵を引て綿竹の城に回り玉へば、趙雲、黄忠等こと〴〵く出迎ふ。時に早馬きたり、只今蜀の大將劉晙、馬漢と云者二人兵を引て攻來ると報じければ、趙雲申けるは、某ねがはくは此敵を生取んとて馬に打のり、兵を引て出去れり。玄德は城中に酒宴を設て馬超を持なし玉ふ所に、趙雲忽ち二將の首を斬て馳回りければ、馬超心の内驚き、倍敬を成て玄德に申けるは、君の兵を動し玉ふにも及ばず、某自ら劉璋を呼出して來て君に降らしめん、萬一早く降らずんば、某弟の馬岱と成都を取て君に獻らん。玄德大に喜び、盡く醉て退散す。去ほどに蜀の敗軍逃回り、劉晙、馬漢共に討れぬと告ければ、劉璋怕れ驚き、門戸を閉て外に出

李恢昂然として内に入。馬超正面に端坐して少しも動ず、聲を勵して叱て曰、汝こゝに來るは何の爲ぞ。李恢が曰、われ今こゝに來て說客を作。馬超が曰、わが匣の中に新に磨たる寶劍あり、汝試に說、その詞もし通ぜずんば、乃ち汝を以て劍を試ん。李恢あざ笑て曰、御邊の禍遠からず、但恐らくは新に磨だる寶劍他人を試ること能はずして、却て自らの首を試玉はん。馬超申けるは、われ何の禍かある。李恢が曰、われ聞、越の西施はいかに毀る者も其美を掩こと能ず、齊の無鹽はいかに美る者も其醜を藏すこと能ずと、短を修る者は其長を用ること能ず、惡を造ものは其善を爲こと能ず、日中する時は昃、月滿る時は虧、これ天下の常理なり、今曹操御邊と父を殺せる讐あり、隴西みな齒を切るの恨を含む、前には劉璋を救て荊州の兵を退くること能ず、後には楊松を制して張魯が面を見ること能ず、今四海の内一身を容に處なし、若又渭橋の敗冀城の失あらば、何の面目ありて天下の人に見え玉はん。馬超これを聞て、頓首拜謝して申けるは、先生の詞大に善、われ唯いかんとも爲べき樣なし、幸に敎へ玉へ。李恢が曰、御邊すでに我詞を聽ば、何ゆゑに幕の内に兵を伏たる。馬超深く羞て盡く追退けしかば、李恢が曰、いま玄德は仁義四海に及で、賢を敬ひ士に下る、必ず能大業を成玉ふべし、吾この故に劉璋を棄て之に事ふ、御邊なんぞ暗に背て明なるに向ひ、上は父母の讐を報じ、下は金

李恢一言の下に
馬超と玄德にくだらしむ
馬超

李恢

し、自ら馬超が陣に行て御方に來り降らしめん。玄德の曰、軍師自ら行て、萬一不虞のこと有ば、我必ず亡ぶべし、假令いかなる良計ありとも、我肯て忍がたし。孔明再三行んとするを、玄德堅く住め玉ふ所に、忽ち綿竹の城より趙雲書簡を以て、建寧兪元の人に、李恢字は德昂と云者を薦め來る。玄德乃ち對面ありて、汝向に劉璋を諫たりと聞しが、今なに故に我に降れるぞと問玉へば、李恢が曰、古より良禽は相レ木棲、賢臣は擇レ主而事と云り、某向に劉璋を諫しは、是人臣の心を盡すもの也、すでに諫を用ひられず其必ず敗れんことを知、いま君仁德を蜀中に施し玉ふ、必ず大業を成玉はんことを知、この故に來り事ふ、是暗を棄て明なるを取なり、願くは能察し玉へ。玄德の曰、汝なにを以てか卽今われに功を成しめん。李恢が曰、某承はる、馬超この處に在て進退共に谷れりと、昔し隴西に在りし時、某と一面の交あり、願くは行て利害を說、來て君に降らしめん。孔明が曰、御邊われに替て行玉はば事必ず諧ん、願くは御邊の馬超に說玉ふべき詞を聞ん。李恢耳を附て箇樣々々と低語ければ、孔明喜で卽時に李恢を遣しけり。李恢直に馬超が陣に行、まづ名字を通じければ、馬超これを聞て申けるは、李恢は元より辯舌の士なり、今此に來れるは必ず我に說ん爲なるべしとて、屈强の精兵を帷幕の内に伏おき、我下知を成時一度に出て寸々に砍、醬にせよと云ふくめ、乃ち李恢を呼入れければ、

に此處まで出て、何の仕出したることも無、徒に退かば、萬人の物笑と成ん、一勝負快く決する迄は、必ず退くことを致まじ。楊松再三招けども馬超つひに回らざりければ、大に怒りて、此人素より信の心なし、今軍を收て回らざるは、逆心すでに披れたりとて、張魯に此事を讒言し張魯が弟張衛に向て、馬超が心根は自ら蜀を取て王と成、父の讐を報ぜん爲なり、豈肯て漢中に臣たらんやと云ければ、張衛この由を張魯に語る。張魯いよ〳〵疑をなし、楊松を召て如何せんと問ければ、楊松が曰、尋常にては叶まじ、早く馬超か陣へ使を遣し、汝すでに徒には退かじと云、一月の間を限りて三箇條の功を建よ、一つには蜀の國を取れ、二つには劉璋が首を刎、三つには荊州の勢を追退けよ、この三箇條もし成ずんば、必ず汝が首を斬んと云つかはし、張衛を大將として諸所の攻口を守せて、馬超が變を防ぎ玉へ。張魯これに從ひ、まづ馬超が陣へ使を遣しければ、馬超これを聞て大に驚き、何ゆゑに俄に此の如なるとて馬岱と相議し、不如軍を收て退んとて、已に打起ければ、楊松又流言して曰、馬超いま引て回るは必ず謀反の心ならん、國の內へ入しむべからずとて、張衛が兵を七路に分ち要害を固く守て、若回り來らば討殺せとて用心緊く相見えければ、馬超これに依て進退すでに谷まれり。孔明この由を窺ひ聞、玄德に見えて申けるは、馬超いま狐疑を懷て心さらに決せざるの時なり、某三寸の舌を動

よ、我勢に乘て之を追じと呼はり玉へば、馬超これを聞て自ら後陣を壓へ、靜々と本陣に囘る。次の日張飛又出んとする所に、孔明軍師きたり玉ふと報ず。玄德迎へ入て對面し玉へば、孔明申けるは、馬超は是世の虎將なり、若張飛と戰を決せば、必ず一方は討死せん、此ゆゑに趙雲、黃忠を留めて綿竹の城を守らせ、夜を日に繼で此に來れり、某一つの計を用て、馬超を御方の大將と成ん。玄德の曰、馬超が英勇われ甚だ之を羨む、如何して御方に用ん。孔明が曰、漢中の張魯久しく漢寧王と成んことを願ふ、手下の大將楊松と云もの、極て賂を貪り好む、小路より人を遣し、先金銀を以て楊松が意を結び、其後張魯に書簡を送て、吾いま蜀を攻るは劉璋を滅して汝が爲に讐を報ずる也、必ず吾を疑ふこと勿れ、事定て後に汝を天子に奏して、漢寧王に封ずべしと云遣さん。玄德しかるべしとて、卽時に書簡を調へ、孫乾を使として金銀珠玉を持せ、小路より漢中へ入て、先楊松に逢て此事を語り、禮物を與へさせらるゝに、案の如く楊松慾に引れて心喜び、張魯に見て利害を說ければ、張魯申けるは、玄德は左將軍の職なり、安ぞ吾を天子に奏して漢寧王とすることを得ん。楊松が曰、玄德いま官職高からずと申せども漢の天子の皇族なり、必ず君を薦べし。張魯喜て曰、しからば使を馳て速に馬超を喚囘さん。楊松乃ち孫乾を私の宅に留め置、使を以て馬超を呼に、馬超答て申けるは、われすで

帽子の上に鉢卷をし、關を出て進みければ、馬超も槍を撚て馬を踊せ、二人戰ひ百四五十合にして、互に勇を振ひ威を逞し、益精神を勵ければ、玄德心に失あらんことを恐れ、又金を鳴して軍を收め玉ふ。時に日すでに暮ければ、玄德の曰、馬超が英勇あたるべからず、今日すでに暮ぬ、且く關中に退て明日又戰ふべし。張飛殺氣なほ收らず、叫で申けるは、今吾馬超を殺さずんば、誓て再び退かじ。玄德の曰、日暮て又戰ふべからず。張飛が曰、多く火把を燒して夜軍をせんとて、兵を下知して肯て少しも退かず。馬超も馬を乘かへ、陣前に踊り出、大に笑て申けるは、やさしや張飛、汝も夜軍をする心ありや。張飛が曰、われ若汝を生取ずんば、誓て此を退かじ。馬超が曰、われ汝に勝得ずんば、再び本陣に回るまじとて、兩軍一度に喊の聲を擧、大火把を燒し列て、其光白日の如く、二人又二十餘合戰ひ、馬超心に計を定め、詐り負て逃はしる。張飛叫で、蓬し何くへか逃ると呼はり、馬を飛して近々と追かけける時、馬超八角に造たる銅の棒を把、引回して打居んとす。張飛追かくると云ども心中に油斷せざりければ、身を側めて之を避、馬を回して走りけるを、馬超急に追きたる。張飛尻目に顧みて引回して矢を放つに、馬超も兼て用心して身を側めて之を避、了に靜々と引退く。玄德これを見玉ひ自ら馬を蒐出して、我仁義を以て天下に施し、一毫ばかりも詐を成ず、馬超快く退て休息せ

始て此に來り、已に馬岱に勝たれば、先一夜馬の足を休めて明日又馬超と戰へとて、關門を固め玉ふ。次の日早天に鼓の聲響き、馬超兵を引て推よせければ、玄德矢倉に上て望み玉ふに、馬超獅子の盔に銀の甲を被て、槍を提げ馬を躍せ、勢あたりを拂て威風凛然たりしかば、玄德大に稱嘆し、世の人みな馬超が英勇人表を讃して錦馬超と云傳るも、げに謬ならずと宣へば、張飛牙を咬で討て出んとす。玄德急に推止め、輕々しく出ること勿れ、且く其鋭氣を避よと制し玉へども、張飛叫で、量に馬超なに程の事か有んと勇けるを、玄德門を閉て出し玉はず。時に馬超近々と推よせ、張飛は何くへ逃たる、昨日の詞にも似ずと訇ければ、張飛遙に望み見て、齒を嚼拳を握て出んとすること六七度に及びしかども、玄德更に許し玉はず、已に午の下に至て馬超が勢みな疲れければ、玄德五百餘騎を選で張飛に授け、門を開て戰はしめ玉ふ。馬超これを見て槍を把て兵を下知し、馬を勒て立ければ、張飛矛を横たへ、大音あげ、燕人張飛を見知たるかと呼はりけるに、馬超笑て申けるは、われは世々公侯の家なり、豈汝が如き村野の匹夫を見知んや。張飛大に怒り、馬を飛して討て蒐り、二人火を散して百合あまり戰ひければ、玄德望み見て心驚き、是眞の大丈夫なり、恐らくは張飛が失あらんとて、急に金を鳴して軍を收め玉へば、二人相わかれて張飛退て本陣に回り、片時が間息を休めて又馬に打のり、盔を脱で

に上て大音あげ、我頭は斷るゝともこの關を開くまじ、早々に退けと罵りければ、楊柏怒て息をも繼ず攻ける所に、魏延まづ五百餘騎にて著ければ、楊柏十里ばかり引退く。魏延續て追かけ、自ら十合あまり戰ひ、散々に蒐たりしかば、楊柏大に亂て逃わしる。魏延勝に乘て、我一人の功名に備んとて兵を下知して進ければ、一彪の軍馬討て出、眞先なるは西涼の馬岱なり。魏延これを見て馬超なりと思ひ、刀を舞して蒐りければ、馬岱も槍を撚て馬を交へ、十合あまり戰ひ、叶はずして走りけるに、魏延のがさじと追蒐しかば、馬岱引返し、弓を取て兵と射る。其矢魏延が左の臂に中り、馬を回して走りけるを馬岱急に追蒐る所に、關上より一人の大將馬を飛して討て出、叫ぶ聲は雷の如く、魏延を救て敵に當る、是乃ち張飛なり。一丈八尺の矛を横たへ、來る者は何者ぞ、先其名を名乘と呼はりければ、馬岱が曰、我は西涼の大將馬岱なり。張飛あざ笑て曰、や汝は馬超にては無か、早々に退け、我對手にあらず、汝回て燕人張飛とて世に雙なき名將ありと云て速に馬超を出せ。馬岱大に怒り、汝いかでか我を輕んずる、手柄の程を見せんとて、槍を撚て突て蒐る、二人戰ひ十合あまりにして、馬岱叶はずして逃わしる。張飛急に追んとする所に、關上より一人馬を馳出して且く追こと勿と呼はりければ、張飛後を見るに是乃ち玄德なり。張飛回て、何ゆゑに止め玉ふと問ふに、玄德の曰、汝が性甚だ躁し、

て、君は此こと知ぬ體にて御座候へ、某詞を以て張飛を激べし、然らずんば必ず失あらんと云ける所に、張飛外より走り來り、暇を乞て行て馬超と戰んよと云て内に入ければ、孔明これを聞ぬ體にて、玄德に向て申けるは、馬超いま葭萌關を犯す、之に敵すべき人なし、荊州へ使を遣し、關羽を呼取て戰はしめん。張飛これを聞て申けるは、軍師なにとて我を輕んじ玉ふぞ、吾曾て只一騎なりしかども、曹操が百萬の勢を退けたり、豈一人の馬超匹夫を愁んや。孔明が曰、御邊むかし當陽に橋を砍落し玉へるは、曹操さらに虚實を知ざれば也、もし虚實を知ば、御邊いづくんぞ無事なることを得ん、今馬超は韓信、黥布が勇あり、天下たれか知ざらん。渭橋の合戰に曹操を討破て、鬚を割、袍を棄て殆ど命を喪んとせり、御邊が兄の關羽も之に敵すること能まじ。張飛大に叫で曰、われ若馬超に勝ことを得ずんば、必ず軍法を被らん。孔明乃ち玄德に申けるは、張飛すでに軍令狀を書て向はんと願ふ、君自ら後陣に備て戒玉へ、某は綿竹の城を守り、趙雲が來るを待て別に計を商議すべし。魏延すゝみ出て申けるは、某も行て願くは馬超を破らん。孔明これに從ひ、魏延に五百餘騎を付て眞先に進ませ、張飛を第二とし、玄德後陣を壓て葭萌關を望んで進み玉ふ。この時馬超は兵を引て攻きたり、楊柏まづ馬を出して、早く門を開ずんば忽ち打やぶりて一人も殘さず首を刎んと呼はりければ、霍峻矢倉

を收ければ、黄忠回りて問て曰、某李嚴を生捉べかりしに、何ゆゑに軍を收め玉ひし。孔明が曰、われ李嚴が武藝を見るに、力を以て勝がたし、明日の戰に、汝いつはり負て山際に引入よ、我奇兵を出して生取ん。黄忠計を受て次の日又城に推よせ、李嚴と十合あまり戰ひ、詐負て走りければ、李嚴勝に乘て谷の中に趕て入。屹と心付て急に引回んとする時、魏延が一軍路を遮り、孔明自ら山の頂に上て大音あげ、汝もし降らずんば、兩旁に皆弩を伏たり、吾必ず龐統が爲に讐を報ぜんと呼はりければ、李嚴驚て馬より下、盔を脱で降人となる。玄德あつく敬ひ玉へば、李嚴德を感じて申けるは、城の大將費觀は劉璋の親族たりと申せども、某と交ること甚だ厚し、願くは行て伴來らん。玄德然るべしと喜び玉ひければ、李嚴乃ち綿竹の城に入、費觀に見て玄德の仁者なる由を語り、今もし降らずんば必ず大なる禍あらんと云ければ、費觀これに從ひ、門を開て盡く降參す。玄德城中に入て成都を取んと議し玉ふ所に、忽ち早馬急を告て、孟達、霍峻二人葭萌關を守る所に、漢中の張魯大軍を起し、馬超を大將として、之を攻ること甚だ急なり、救の勢遲時は忽ちに破るべしと報じければ、玄德いかゞせんと怕驚玉ふに、孔明申けるは、馬超は尋常の敵にあらず、張飛か趙雲かを用ふべし。或人この山を張飛に告ければ、張飛これを聞て、我ならでは馬超を防ものあらじとて勇み喜ぶ。孔明ひそかに玄德に告

を借玉はば、先葭萌關を攻取て玄德が後を襲ひ、忽ち生取て二十州を君に獻らん。張魯大に喜び、先黄權を囘らしめ、二萬餘騎を擇で馬超を大將とし、楊柏を軍奉行として、日を定て打立しむるに、斯時龐德病に臥て行こと能ず、漢中に留りければ、馬岱を伴て向ひけり。去ほどに玄德は雒城に在て、成都を攻るの計を議せられける所に、法正が使きたり、今蜀の大將鄭度しきりに劉璋を勸て、盡く巴西、梓橦の民を涪江の西に移し、倉廩野穀を燒掃て、壕を深し壘を高うして守らんと相計候と告ければ、玄德孔明色を失ひ、劉璋もしこの計を用ば、御方兵粮に事を缺ん、いかゞすべきと議する所に、法正回り來り、笑て申けるは、君これを憂玉ふな、この計大に毒なりと申せども、某量に劉璋必ず用ふること能じ。玄德これに依て密に人を出して尋ね聞しめ玉ふに、案の如く劉璋この計を用ひず、古より敵を拒で民を安んずることを聞、いまだ民を動して敵に備ることを聞ずと云りと報じければ、始て心を安んじ玉へり。孔明が曰、速に兵を進めて綿竹關を攻取べし、近ごろ劉璋の妻の弟費觀と云もの、李嚴と云る大將と新手の勢を引て來れりと承はる、若これを破る時は、成都を取こと掌にありとて、黄忠、魏延を先手とし、進んで綿竹を攻ければ、城を守る大將費觀早く李嚴に命じて防しむ。李嚴三千餘騎を引て討て出、黄忠、魏延と戰ひ四五十合にして勝負を分たず。孔明これを見て金を鳴して軍

此故に西土の人以て美談とす、子貢が賞を辭せしを仲尼これを止善と謂へり、御邊心を剖て國の命に順へとて彌あつく敬ける。

○葭萌關張飛戰馬超

馬超は隴西の軍に負て、附順ふ勢ことごく討れければ、龐德、馬岱と共に漢中に入て張魯を賴む。張魯大に喜び、馬超は世に雙なき大將なり、吾これを用て西の方益州を取、東の方曹操を拒ぎ、永く漢中の基業を保んとて、その女を以て馬超を壻とすべしと云けるを、大將楊柏と云ものこれを諫て、馬超は父母妻子をも顧ず、況や他人を愛せんやと云ければ、張魯これに依て壻とせず。或人この由を馬超に告ければ、馬超深く恨て楊柏を殺んとする心あり。楊柏これを知て、其兄楊松と相議し、身を全うして害を遠るの計を尋ぬる所に、蜀の劉璋使を以て張魯に救を求む。張魯肯て從はざりければ、劉璋重ねて黃權を使とす。黃權まづ楊松に逢て、蜀と漢中とは脣齒の國なり、蜀もし破れば漢中も亦やぶれん、今もし救の兵を起して玄德を退玉はば、蜀の二十州を分て其恩を報ぜんと云ければ、楊松これを喜び、張魯に見て此事を語る。張魯疑を成て心いまだ決せざりければ、馬超進出て申けるは、われ君の御恩を感ず、若一手の勢

城を守る者夜中の事なれば敵とは知ず、一人姜叙の兵回りぬと云ければ、急に門を開て迎ける。馬超南の門より馳入て、城中の軍民をこと〴〵く斬ころし、姜叙が宅を尋て其老母を捕ふ。老母年八十二歳、全く懼る氣色なく、馬超を散々に罵り、汝父に背き君に逆ふ、天地豈汝を容んや、久しからずして天の罰を被らんと呼はりければ、馬超いよ〳〵怒り、自ら劍を拔て斬死、尹奉、趙昂が家を圍で男女一人も殘さず首を刎けるに、趙昂が妻の王氏は如何して逃れたりけん其中には居ざりけり。次の日、夏侯淵が大軍寄來りしかば、馬超城を打棄、西を指て二十里ばかり走りけるに、一手の勢路を遮り、揚阜眞先に馬を出す。馬超齒を切て怒をなし、槍を撚て蒐りければ、揚阜が一族に名を得たる大將七人、一度に馬を雙べて討て出けるが、皆馬超に刺死さる。楊阜は槍にて五所つかれ、其身は朱に成けれども猶退かずして戰ひける所に、夏侯淵が大軍後より蒐りければ、馬超つひに叶ず、龐德、馬岱と五六騎を引て、行方知ず落失たり。夏侯淵下知を傳へて隴西の州郡を撫安んじ、姜叙等に命じて民を治め、揚阜を車に載て都に送りければ、曹操その忠義を稱して關内侯に封ず。揚阜申けるは、君存せる時に難を扞の功なく、君亡て節に死するの效なし、義に於て論ぜば、市曹に誅して罪を正すべし、況や馬超いまだ死せず、何の面目ありて此高官を受べきや。曹操が日、御邊諸將と共に莫大の功を建たり、

は冀城に在てこの由を聞、驚き怒て先趙月が首を刎、龐德、馬岱と兵を起して歷城へ向ふ所に、姜敘、揚阜半途まで出向ひ、皆白き袍に喪の服を被て馬を出し、逆賊馬超父に背き君を無する匹夫と呼はりければ、馬超大に怒り、兵を驅て散々に蒐たりけるに、姜敘、揚阜なじかは怺べき、我先にと逃はしる。馬超勝に乘て追かくる所に、忽然として後に喊の聲響き、尹奉、趙昂が勢討て蒐る。馬超急に取て回して戰と云ども、前後に度を失て防こと能はざる所に、又限なき大軍、潮の湧が如く横合に進む。是は夏侯淵長安に在て曹操が下知を受、兵を引て來れる也。馬超三方の敵に攻られて支ること能はず、騷ぎ亂れて終夜散々に走り、曉方に冀城に到り門を開と呼はりければ、城の上より鏃を揃て雨の降ごとく矢を放つ。馬超大に驚て之を見れば、城を守る大將梁寛、趙衢二人矢倉に登り、先馬超が妻の楊氏を捕て城の上にて一刀に砍死し、質を城外へ抛落して次に馬超の子供三人並に至親十餘人、一々に斬殺して皆城外へ抛出しければ、馬超これを見るに忍ず、胸塞て幾ど馬より落んとす。時に夏侯淵が大軍勢に乘て追來ければ、馬超戰ふべき力なく、龐德、馬岱と一方を打破て這々に走りける所に、又姜敘、揚阜が勢討て蒐る。馬超力を盡して戰ひ纔に逃て走りければ、又尹奉、趙昂が勢路を遮る。馬超又喚て蒐入、つと出て御方を見れば、零々落々として五六十騎に打のこされ、終夜走て四更の比歷城に到る。

と云ければ、揚阜申けるは、われ今馬超に從ふは生涯を留て主の讐を報ぜん爲なり。姜敍が曰、馬超は西涼州より出てその英雄あたる者なし、急には中々圖り難からん。揚阜が曰、馬超勇なりと云ども計なし、之を破んこと掌にあり、吾すでに梁寛、趙衢に計を約し、御邊もし兵を興して我を扶玉はば共に內應せんと云り。其母これを聞て姜敍に向て申けるは、汝早く兵を興さずして何の時をか待べき、古より人は一度死せずと云ことなし、忠義に死する者は是その宜を得たる也、汝必ず我を心にかくること勿れ、若早く揚阜を佐て君の讐を報ぜずんば、我先この所に死して汝が念を絕ん。姜敍これに從ひ、卽時に統兵校尉尹奉、趙昂二人を呼て計を相議し、軍兵をぞ揃ける。趙昂は其子趙月と云もの、馬超に從て裨將たりければ、家に囘りて密に女房王氏と此事を議し、我今日姜敍の命を受て揚阜、尹奉と共に故主の讐を報ぜんとす、想にわが子の趙月いま馬超が處にあり、若事を起さば必ず害を被らん、如何すべきと云ければ、王氏聲を勵して申けるは、君の大なる恥を雪るには、身を喪すとも何ぞ惜ん、況や一人の子を顧て浩る大義を捨んをや、若この讐を報じ玉はずんば、我いま此處に死を致ん。趙昂これに依て心決し、次の日一同に兵を興して姜敍、揚阜は歷城に屯し、尹奉、趙昂は祁山に出。王氏乃ち衣服を賣て酒肴を用意し、自ら祁山の陣に行、諸軍に分ち與へてその心を勵しけり。馬超

ば、馬超城中に入て、韋康が一類四十餘人を盡く搦取、いま事の急なるに至て降人と成ものは眞の心成まじとて、老少男女を擇ず、一人も殘さず斬死す。或人揚阜が韋康を諫て降ること勿れと云たる由を聞て、斬て棄んとしければ、馬超が曰、この人義を守て主を諫む、必ず殺すこと勿れとて、又揚阜を用て參軍とし、留めて冀城を守らしむ。城中に梁寬、趙衢とて二人の大將あり、本これ揚阜が手下に屬せる者共なりしかば、馬超初の如く用させけり。揚阜は心の内いかにもして馬超を滅さんと思ひければ、肯て色に表さず、或時馬超に向て申けるは、某が妻臨洮に死して已に二月に餘ると告來れり、願くは之を葬て早々に又回り來らん。馬超仔細なく許ければ、揚阜直ちに歷城に行。この城には撫夷將軍姜敍と云ものあり。其母は乃ち揚阜が姑なり。元より義を守て大賢の貞女なりければ、先この者に遇て地の上に拜哭し、城を守て完こと能ず、主亡びて死すること能ず、今姑に見るに面目なし、殊さら馬超は父に背き君に逆うて妄に郡守を殺す、豈某一人のみならんや、一州の士大夫こと〴〵くその恥を受、今姜敍は此城を坐ら保て、了に賊を討の心なし、此超盾が弑其君也と書たるに有ずやと云て涙を流しければ、其母これを聞きて、大に驚き、姜敍を呼で責て曰、刺史韋康箇樣に害せられ玉ひしは、是汝が罪なりとて、又揚阜に向て、汝すでに馬超に降る、如何してこの讐を報ずることを得ん

通俗三國志 巻之二十七

○揚阜借レ兵破二馬超一

建安十八年秋八月、馬超大に曹操に敗られて羌胡の部落に逃入けるが、今年すでに二年に餘り、次第に羌の勢に好を結で相親み、隴西の州郡を攻取て、今は漸强大に成ければ、いつまで斯てあるべき、早く曹操を滅して父の讐を報ぜんとて近邊の城を攻るに、向ふ所ことごとく降らずと云ことなし。其内に冀縣の城一つは數日攻れども、更に落ちず。城の大將韋康字は伯奕と云もの、緊く守て戰と云ども、小勢にして始終叶じと思ひければ、長安へ早馬を打て夏侯淵に救を求む。されども夏侯淵は曹操が下知を待て急にいまだ救ず。此に因て冀城すでに弱りければ、皆門を開て降人に出でんとす。時に城の參軍揚阜字は義山と云者、涙を流して諫て曰、馬超は君に叛く逆賊なり、今この城中に籠る勢は小勢なれども皆死を輕んじて二心なし、今却て逆賊に降るべきか、只討死と志て能々城を守り玉へ。韋康申けるは、いま救の勢來ず、事すでに窮れり、守るとも何までか怺ふべき。揚阜再三諫れども韋康つひに從ず、門を開て降人に出けれ

實無薄意。望三思裁劃、可圖變化以保尊門、不及進言、早賜回意示下。

法正百拜。

劉璋見了て大に怒り書簡を引裂、法正匹夫恩を忘れ義を背き主を賣て榮を求む、何の面目ありて再び見えんと罵り、其使を逐出して即時に妻の弟費觀を大將とし、兵を引て綿竹を守らしむ。費觀乃ち南陽の李嚴字は正方と云ものを伴ひ、三萬餘騎を引て打起ければ、南郡枝江の人に董和字は幼宰と云もの劉璋に見て申けるは、いま雒城やぶれて事すでに急なり、漢中に使を馳て張魯に救を求玉へ。劉璋が曰、張魯は深き讐あり、安んぞ吾を救ん。董和が曰、しかれども玄徳が勢すでに雒城に在て事甚だ危し、漢中は吾國と鄰て實に唇歯の助なり、唇亡る時は歯寒し、若利害を説ば必ず來て救べし。劉璋これに從ひ、書簡を馳て漢中の張魯に救を求む。

たゞ綿竹關ばかり第一の要害なり、君これを取ば成都掌にあり。法正が曰、いまだ輕々しく進べからず、恐くは成都の人民を驚さん、某一つの計あり、手を懐にして成都を取ん。玄德の曰、いかん。法正が曰、雒城すでに破れて蜀中危し、君よろしく仁義を以て四方に施し、恩德を以て諸人を懐け玉へ、今しばらく兵を按て進み玉ふな、某書簡を送て利害を說ば、劉璋自ら來り降らん。孔明が曰、この計善、すみやかに書簡を遣し玉へとて兵を按ていまだ進まず。さるほどに雒城すでに破れて劉循這々逃回りければ、劉璋大に驚き、諸將を集めて計を議す。時に從事廣漢の鄭度すゝみ出て申けるは、いま玄德遙々と荊州より來て其勢疲れ衰へ、この國の軍民いまだ心を服せず、此時を失はず巴西梓潼の民を驅て盡く涪水の西に移し、其米穀を燒盡して壕を深し城を堅して緊く守り、彼戰を催すとも敢て出ることなくんば、彼が勢百日より內に兵粮盡ん、其時虛に乘て急に討ば一鼓に玄德を生取べし。劉璋が曰、いやいやこの計しかるべからず、吾古より敵を拒で民を安んずることを聞、いまだ民を動して敵を拒ことを聞ず、汝が計よろしからずとて相議する所に、忽ち法正が使なりとて書簡を出す。

劉璋ひらき見れば其書に曰、

昨蒙二遣差一結二好荊州一、不レ意主公左右不レ得二其人一、以致レ如レ此。今左將軍舊心依々、

の曰、汝天の時を識ざる也、今より我に順へとて放し玉ひければ、張任申けるは、今日たとひ降るとも久うして又叛ん、願くは早く頸を刎玉へ。玄德その忠義を憐んで之を殺に忍び玉はざりければ、張任聲を勵して大に罵る。孔明が曰、不如これを殺してその名を全せしめ玉へとて引出して斬せしかば、玄德感嘆して已ず、屍を收て金鴈橋の側に厚く葬り、その忠義を表し玉ふ。次の日嚴顏、吳懿等その外降參の大將を以て先手とし、直に雒城に推よせて早く門を開て降參せよと呼はらせければ、劉璝櫓に上て、恩を知ぬ奴ばら羞を忘れて此に來れるかと罵る所に、後より一人力足を以て劉璝を踏たふし、門を開て降りければ、玄德の大勢こと〴〵く亂れ入。劉循城の破れたるを見て西の門より成都を指て落ゆきければ、玄德榜を出して民を安んじ、門を開きたるは誰人ぞと問玉へば、武陽の人に張翼字は伯恭と云もの劉璝を縛て來り見ゆ。玄德限なく喜び玉ひければ、孔明申けるは、いま雒城すでに破れたれば、成都を取こと掌にあり、只恐らくは外の州郡寧からざらんことを、今張翼、吳懿に趙雲を添て定江、犍爲の邊に遣し、嚴顏、卓膺に張飛を添て巴西、德陽の邊につかはし、其邊の州郡を治めさせ玉へ。玄德これに從ひ張飛、趙雲に命じて速に打起せ、早く成都に來て一手に成と云玉へば、皆兵を引て出にけり。孔明問て申けるは、これより成都の間に關所ありや。降參の人答て曰、

りを左右に備へ、遙に羽扇を持て張任を招き、曹操が百萬の勢も吾等が名を聞ては風を望んで逃わしる、今すでに此處に來れり、何ぞ速に降らざると呼はりければ、張任これを見るに、孔明が勢隊伍齊はずして多くは肥ふくれたる老武者なりければ馬上にて大に笑ひ、人みな孔明が兵を用ふること恰も神變を得たりと沙汰せしが、今これを見るに皆實なきこと也、只蹴ちして棄よとて槍を把て後を招けば、數千の精兵勢に乘て出きたる。孔明車を棄て馬にのり橋を渡りて逃ければ、張任急に追かくる所に、左より玄德右より嚴顏二手の勢討てかゝる。張任敵の計に中りぬと思ひ、急ぎ引回さんとすれば、橋すでに落て渡るべき樣なし。心驚き北を指て逃んとすれば、岸を隔てゝ趙雲が勢陣をとる。是ゆゑに河に沿て南の方に走りければ、蘆葭の叢りたる中より喊を咄と造て魏延が一軍討て出、みな槍を以て散々に突。張任が勢膽を冷す所に、又喊の聲起て黃忠が一軍みな薙刀を持て蒐出、馬の足を斬倒して盡く擒にす。張任は這々に逃れ十騎あまりを引て東の山路に走りければ、忽然として張飛が一軍討て出、四方より圍で了に一人も殘さず活捕けり。蜀の大將卓膺は張任が後陣に備へけるが、先に橋を落されし時趙雲が前に行て降人となれり。張飛乃ち張任を縛て帳下に引するゑければ、玄德の曰、蜀の諸將みな風を望で降る、汝なんぞ降らざる。張任目を怒して叫で曰、忠臣豈二君に事んや。玄德

孔明智をもつて張任を擒す
張任

孔明
馬岱

し。趙雲時に吳懿を縛て出しければ、玄德の曰、汝いまは我に降らんや。吳懿が曰、今すでに生取らる、如何んぞ降參せざるべき。玄德大に喜び上賓の禮を以て敬ひ玉へば、孔明問て曰、雒城の中には軍勢いか程かある。吳懿が曰、劉璋の嫡子劉循を佐て劉璝、張任等この內にあり、張任は蜀郡の人にて智謀衆に超たり、輕々しくは敵し難し。孔明が曰、われ先張任を生取て其後に雒城を取ん、城の東なる橋はいかなる名ぞ。吳懿が曰、これは彼金鴈橋なり。孔明乃ち馬に乘て橋の上下を委く見めぐり、陣中に回て黃忠、魏延を呼て曰、金鴈橋の南五六里は兩岸みな蘆葭しげりて兵を伏つべし、魏延は槍を使勢千餘騎を引て左に伏、敵きたらば討て出て馬上より突落せ、黃忠は薙刀を使ふ勢千餘騎を引て右に伏せ、敵きたらば單に馬の足を薙倒せ、張任必ず東なる山路に走らん、張飛は兼て東の山路に千餘騎を引て埋伏し張任を擒にせよ、趙雲は橋より北に伏て我張任を帶き出して橋を過了を窺ひ、早く橋を砍落して却て兵を橋の北に備へ、遙に勢を成て敵を欺ば、張任敢て北に回らず、南を望で退き、自ら我計に落入べしとて手分をぞ定めたる。此時雒城には成都より卓膺、張翼二人の大將新手を引て來り加はりければ、是に力を得て劉璝、張翼は留りて城を守り、張任は自ら卓膺と前後に備へ城を出て敵を防ぐ。時に孔明一手の勢を率し、金鴈橋を過て陣を張、四輪の車を眞先に推出して百騎あま

その勢を合せ雒城に近付て陣を取玉ふ。城中には吳蘭、雷同が敵に降れる由を聞、人みな力を失て如何せんと計を議しければ、吳懿、劉瓆申けるは、事すでに危し、不如城を出て快く勝負を決し、成都に急を告て又援の勢を乞ん。張任が曰、某一軍を引て明日城を出て戰を交へ、詐負て敵を誘き城の北に轉るべし、御邊二人の內一人兵を引て横合に討て出玉へ。吳懿が曰、劉瓆は公子劉循を守護して城中に留り玉へ、吾自ら出て敵を討んとて張任と手分を定む。次の日張任喊を造て出ければ、張飛馬を放て十合あまり戰ふ。張任いつはりて走りければ、張飛力を盡して追かくる所に、城中より見すまして吳懿が一軍討て出、引包で散々に戰ふ。張飛小勢にて圍を出ること能ず、進退すでに谷れる所に、玄德兵を引て救ひ玉ふ。時に一手の勢涪江の邊より馳來り、一人の大將槍を撚て眞先に進み、吳懿と戰ふこと只一合にして忽ち馬上に生捉けり。張飛これを見るに乃ち常山の趙雲なりければ、孔明はいかにと問に、趙雲が曰、まづ我に命じて此處を救しめ玉へり、想に今本陣に入玉はんとて張飛と打つれ本陣に回りければ、孔明は簡雍、蔣琬と玄德の前にあり。張飛入て見えければ、孔明驚て申けるは、御邊なにとて早く此に來れる。玄德乃ち巴郡にて嚴顏を釋したる事を語り玉ふに、孔明賀して申けるは、これ乃ち君の洪福なり、張飛告る計を用て此莫大の功を立たり、金石に勒して後世に傳ふべ

提げ、直ちに張任に討て蒐り、十餘合戰ふ所に、嚴顏大勢を引て進みければ、張任かなはじとや思ひけん、雒城を指て逃わしる。張飛、嚴顏急に追かけしかば、張任城中に入て已に壕の橋をぞ挽たりける。張飛退き回て玄德に見え、孔明軍師は舟手より江に泝て來り玉ふべきが、倘いまだ見え玉はず、我こそ第一の功を立たれと云ければ、玄德の曰、山路は甚だ險阻にして敵の守り多かるべきに、汝なにとて早く來れる。張飛が曰、この路に凡そ敵の要害四十五箇處ありしかども、皆老將嚴顏が功を以て易々と通り來れりとて、嚴顏を釋して御方に用ひしことを語り、路に於て矢の一つをも費さず酒を飲樂んで來れりと云ければ、玄德大に喜び、嚴顏を呼出して、若老將軍の功にあらずんば吾弟いづくんぞ此に來ることを得んとて、卽時自ら被玉へる金鎖の甲を脫で賜りければ、嚴顏恩を謝して再拜し、酒宴を成て居たる所に、忽ち早馬きたり、黃忠、魏延、蜀の大將吳蘭、雷同と戰ふ所に、又城中より吳懿、劉璝討て出て戰ひを助け、此ゆゑに黃忠、魏延まくり立られ、東を指て逃たりと告ければ、張飛が曰、これこそ望む所よ、我自ら行んとて玄德と左右に備へ、跡を慕て追かくる。吳懿、劉璝は後に賊を作て大勢の來るを見て急に城中へ逃入けるが、吳蘭、雷同は餘に長追して前を黃忠、魏延に遮られ、後を玄德、張飛に包まれて叶はじとや思ひけん、二人共に手勢を引て盡く降參しければ、玄德

ば、此二方を圍ず、已に四日まで攻て、其日の未の下に至り人馬みな疲ければ、暫く退て息を繼んとするに、城中より張任これを見すまして、敵の人馬飽まで已に疲たり、我自ら南より出て西の門に轉り、玄德を生取べし、吳蘭、雷同は兵を引て北より出、東の門に轉て黃忠、魏延を遮り玉へとて城中の兵數を盡して手分を定め、多の百姓を集て城を守らせ、喊を造り鼓を打て威を助しむ。去ほどに玄德人馬を休めんとて其日の暮方に退かんとし玉へば、俄に城中鑼を鳴し鼓を打て震動し、南の門より張任が一軍突出し、直ちに西に轉て玄德の備に討て入、その勢ひ電光の激するが如なりければ、玄德の勢みな疲て一支も支ず四角八方に散亂す。黃忠、魏延これを見て急に救んとすれば、又北の門より吳蘭、雷同大勢にて蒐出、途を遮て散々に戰ふ。これに依て前後相顧ること能ず、騷ぎ亂れて玄德唯一騎山路を望で走り玉へば、張任六七騎を引て之を追こと甚だ急なり。玄德魂も身に附ず鞭を加へて逃玉ふ所に、又向うより一手の勢出きたる。玄德これを見て大に嘆き、前に伏勢あり後に追手あり、天われを亡せりとて、近くなるまゝに之を見玉へば、敵には有で張飛なり。元來張飛は巴郡を經て此路條より來りけるが、遙に馬烟の揚を見て扨は合戰の最中なりとて、速かに馳來れるなり。此まことに玄德天子たるべき洪福あるを以て不思議の急を免れ玉へり。張飛自ら馬を飛して一丈八尺の矛を

○孔明定レ計擒二張任一

この時玄徳は涪城に在て龐統が討れて後敢て戰ひを交へ玉はず、偏に孔明が來るを待ておはしける所に、忽ち荊州より飛脚到來して、孔明が書簡を獻つる。玄徳ひらき見て諸將を集め、今孔明と張飛と水陸二手に分れてこの處に來る、已に七月二十日荊州を打起と告來れり、漸く日數も立ぬれば、今は早ちか付ぬらんと云玉へば、黃忠申けるは、蜀の大將張任每日來て戰を催し候へども、某等が出ざるを見て彼が陣みな怠て備なし、今夜ひそかに推よせ其不意に出ば、之を破んこと明なり。玄徳これに從ひ、自ら中軍を引きて黃忠を左にそなへ魏延を右に備へ、其夜の二更に齊く張任が陣に推よせ、四方より火を付て散々に蒐やぶりければ、案の如く張任が勢兼て怠て居たりしゆゑ、大に亂れて逃たりけるを、玄徳追掛て雒城まで來り玉へば、城中の勢討て出て張任を救ひ回る。玄徳半途に陣を取て次の日雒城に推よせ、息をも繼せず一晝一夜攻玉へども、城中には張任が計を用ひて一人も外に出ず。寄手の力疲て弱たる時急に出て之を擊ば、玄徳必ず擒となるべしとて皆引籠て態と出ず。玄徳は自ら西の門を攻玉ひ、黃忠、魏延は東を攻、南は山路二條通じて特に險阻に、北は涪水の大江に靠て逃るべき樣なかりけれ

等不義の鼠輩、なにとて我國の境を犯せる、我國には頭を斷るゝ大將あれども降參する大將なし。張飛いよ〳〵怒り、早く殺せと下知すれば、厳顔あざ笑て曰、汝賊匹夫、わが首を斬ば早く斬べし、何とてさほどに腹を立るぞ。張飛笑て急ぎ階を飛おり武士を追のけ、自ら其繩を解て引て上座にのぼせ、再拜して厚く敬ひ、適には妄に詞を出して無禮をなす、幸に恕し玉へ、われ素より將軍の忠義を知と云て酒を進め上賓の禮を以て持なしければ、厳顔その恩義を感じて了に降る。張飛大に喜び、蜀に入の計を問ふに、厳顔申けるは、敗軍の將あつく恩を蒙る、之を報ずべきこと難し、願くは犬馬の勞を盡し、弓を張刀の鞘をはづすことを用ず、直に成都を取て將軍に報ぜん。張飛謹んで謝して曰、ねがはくは敎へ玉へ。厳顔が曰、これより雒城までの間に城を構へ關を居たる所三十餘箇處成ば、力わざに通るべきこと思ひ寄ずと申せども、是みな某が下知に從ふ者共なれば、事すでに掌の中にあり、某自ら眞先に進でことごとく降參せさせ、干戈を動さずして雒城に到らん。張飛甚だ喜び、之より民を安んじ軍を賞して到る所ごとに降らずと云事なく、縱ひ降らざる者あれども厳顔自ら喚出し、我さへ已に此の如し、況や汝等をやと云て諭しければ、皆風を望んで歸順し、一人をも殺ことなくして雒城に馳てゆく。

張飛巴郡に智計を以て嚴顏を降す

張飛

の鳴をぞ相待ける。巖顔は自ら十騎あまりを引て鼓を持せ、林の中に藏て窺居たるに、漸く三更の了に至て果して敵の勢出きたり、張飛矛を横たへて眞先に馬を出し、靜々と通りて後陣には多の輜重を運び、陸續して進發す。巖顔心に喜び、すは打とて一度に相圖の鼓を打ければ、四方の伏勢こと〴〵く起りて散々に攻戰ひ、輜重を奪はんとする所に、忽然として後に喊を吶と造り、老匹夫快く降參せよと呼はりければ、巖顔驚て後を見るに、一人の大將頭は豹の如く、大の眼を怒し虎鬚さかさまに擧て一丈八尺の矛を提げ、我は是燕人張飛なり、汝にぐること勿れと罵り、馬を飛して討て蒐り、鼓の聲天地を崩す。巖顔膽を冷し手足を措に處なく、是非なく馬を交て十合あまり戰ひけるが、張飛勇を振て巖顔が甲の上帶を摑で四五丈ばかりぞ抛たりける。巖顔なげられたれども倒れず、漂ふ足を踏直さんとする時、張飛が兵群り來り推へて了に生取てけり。之を見て其勢こと〴〵く逃ちりけるを、張飛殺して巴郡の城下まで到りければ、後陣の勢すでに城を乘取、甲を棄矛を卸て降人に出る者その數を知ず。張飛城中に入て民を安じ、手下の勢に法を出して秋毫も犯ことなく盡く平定す。武士共巖顔を綁て引來りければ、張飛廳上に坐して之を見るに、巖顔敢て跪かず。張飛目を怒らし牙を咬、や大將此に至て猶降らずして無禮をするかと云ければ、巖顔少しも怕るゝ色なく、叫で申けるは、汝

心の内に怪み、密に十餘人の兵を出して張飛が草刈の内に扮れ入てその樣を窺ひ聞しむ。此日草を刈たる兵本陣に回りければ、張飛足を翹て大に訇り、嚴顏匹夫いかにすれども敢て城を出ず、氣を病せて殆ど我を殺んとす、如何すべきと云ければ、傍なる士卒告て曰、將軍御心を安んじ玉へ、此間草を刈て路を尋ね候に、山際に一つの路あり、巴郡を超て雒城へ通るべし。張飛詐り叱て申けるは、もし左樣の路あらば何ぞ早々に告知せざる。士卒みな曰、この間日を重て尋ね出せり。張飛が曰、事延引すべからず、此城を攻んとて徒に日を送らば、何の時にか雒城に到ることを得ん、只この城を打すて密に山路より通るべし、今夜の二更に兵粮を使て三更月の明なる時打起べし、人は枚を啣み馬は鈴を收て敵の知ざる樣にせよ、我自ら先に進んで路を開べし、汝等みな次第を守て來り候へとて用意をぞしたりける。初め草刈に扮たる嚴顏が手の者いそぎ城中に回りて、右の趣を告ければ、嚴顏大に喜て曰、さればこそ張飛わが出て戰はざるに氣を惱し、密に山を超て通らんとす、これ我のぞむ所なり、彼もし山を超ば兵粮輜重必ず皆後陣に在ん、我計を用て一人も通さず打破んとて、手下の勢に下知を傳へ、二更に兵粮を使て三更に城を出、樹木の繁りたる中に埋伏して張飛が勢の半すぎ通る時、我鼓を打て相圖を成ん、その時一度に出て敵の後陣を討、こと〴〵く輜重を奪べしとて皆城を出て鼓

に怒をなし、歯を切て馬にのり、數百騎を引て巴郡の城下に推よせけるに、敵一人も出あはず、皆矢倉の上より散々に悪口しければ、張飛元より性急にして壕を超んとすること數度に及びしかども、皆亂れ矢に射かへさる。已に日晩けれども敵一人も出ざりしかば、張飛怒の氣さらに休ず、本陣に囘りて次の日又早天に推よせければ、嚴顏櫓に上りて張飛が盔の眞甲を射る。張飛大に怒り、若汝を生取ば我自ら其肉を啖んものをと云て暮に及て空く囘る。此城元來山に沿て鳥も翔り難き要害なれば、第三の日張飛兵を引て又推よせ、自ら傍なる山の頂に上りて城を目の下に望に、城の中には多の軍勢緊く鎧て隊伍を亂さず竝居たり。張飛手下の者を下知して、若散々に悪口せば腹を立て出ることも有んとて、聲の大なる者共を擇び出し、樣々に罵らしむれども更に出ず、又兵を馬より下し、地の上に仰に臥せ、敵を欺く體に見せて今や出ると待けれども、暮に及ぶまで出る者なし。張飛空く我陣に囘り終夜思案して、次の日は一人も城に向ず、緊く鎧て敵の寄來る有ば勢に乘て攻入んと待居たれども、敢て其儀なかりしかば、又十騎廿騎づつを遣して散々に罵せ、敵もし出ば詐り負て逃來れ、我自ら討んとて腕を撫拳を握て待けれども、徒らに數日を送りければ、心鬱々として安からず。又一つの計を案じ出し、兵を四方に分て路を尋ね草を刈しむ。嚴顏城中に在り、數日張飛が來らざりければ

蜀に入玉ふ由を聞て痛く嘆き、此古よりの諺に、獨坐窮山放虎自衛と云もの也、必ず大なる禍を成んと云けるが、果して合戰に及びぬと聞て巴郡の城を堅固に構へ、兵を揃て相待ところに、張飛すでに推よせ城を離るゝこと十里ばかりにして陣を取、城中へ使を立て嚴顔老匹夫、なにとて早く降らざる、若遲き時は忽ちに城郭を踏やぶりて滿城を血にせんと云送りければ、嚴顔大に怒り、六千餘騎の兵を調へ張飛を生取にせんと牙を咬。その内に都より來れる兵あり。告て申けるは、張飛昔し當陽の長坂にて曹操が百萬の勢を追退け、天下みな震ひ怕る、今すでに此所に攻來れり、太守たゞ緊く城を守り出玉はずんば、彼が陣に兵粮盡て自ら退き去ん、殊に彼が性は甚だ急にして烈火の如く、常に士卒を痛く鞭うつ、今もし戰を休て日を送らば、心の内怒を起して必ず士卒を鞭うつべし、其兵粮につまり士卒怨を含時を窺ひ、勢に乘て討て出ば忽ちに手取とならん。嚴顔これに從ひ兵を分て緊く城を守る所に、一人の兵門を開けと呼はりければ、嚴顔よび入て何ものぞと問に、其人張飛が使にて、若早く降參せずんば滿城の内こと〴〵く殺されん、何とて心迷へるぞと云ければ、嚴顔いよ〳〵怒り、匹夫なんぞ無禮なる、吾久しく蜀の恩を受て今汝に降るべきかとて、武士に命じてその使の耳鼻を割、追立て出しければ、其人逃かへりて張飛に見え、哭て右の趣を語る。張飛以ての外

を分て之を防ん。孔明申けるは、然る時は荊州危し、われ八字を以て御邊に教ん、忘るゝこと無して荊州を守り玉へ。關羽が曰、ねがはくは教を聞ん。孔明が曰、北拒曹操東和孫權、この八字を忘るゝこと勿れ。關羽が曰、軍師の教われ肺腑に銘じて忘れ候はじ。孔明乃ち印綬を渡し、文官には馬良、伊籍、向朗、糜竺、武將には糜芳、廖化、關平、周倉等を留めて共に荊州を守らしめ、先精兵一萬餘騎を擇で張飛を大將とし、大路より進んで巴郡を通り、雒城の西に出よ、我は趙雲を先手として舟路より雒城に到らん、早く雒城に出たる者を第一の功とせん、我後陣より一萬五千の勢を率し、簡雍、蔣琬と共に進むべしとて手分すでに了ければ、同日に打起んとて酒宴を設て相別るゝ時、孔明乃ち張飛を警て曰、蜀の國には英雄甚だ多くしてかるがるしく敵すべからず、御邊よく路にて手下の勢を戒め匡し、猥に劫し掠て民の心を失ことなかれ、行ところ毎に憐を垂て人を懐よ、人の世にある只德を以て衆を伏すべし、殘暴を恣にして百姓を惱し、妄に士卒を鞭打べからす、速に雒城に出て第一の功を立玉へと云ければ、張飛よろこんで馬に打のり、一萬餘騎を率して漢川にかゝり、秋毫も犯ことなければ、軍民風を望んで降參す。爰に巴郡の太守嚴顏と云ものあり、乃ち蜀の名將にして年すでに老たりと云ども、精力さらに衰へず、能硬弓を挽大なる刀を使うて萬夫不當の勇力あり。曾て立德の

羽等みな一處に集り共に事を議する所に、關平蜀の國より來れりと報ず。諸人みな驚て對面すれば、乃ち玄德の書簡を出す。孔明ひらき見るに、七月七日の合戰に龐統軍師落鳳坡と云ところにて蜀の大將張任に射殺さる、早く來て我を援らるべしと書れければ、滿座聲を放て大に哭く。孔明が曰、君いま涪城に在て進退共に難きの時なり、我行ずんば叶ふまじ。關羽が曰、軍師もし行玉はば誰か能荊州を守るべき、荊州は守り難の地なり、係る所きはめて重し。孔明が曰、いま此書簡の中荊州の事は總て某に任すと書玉ふ、然る上は我その宜き人を擇で荊州を守らしむべけれども、今關平を以て使とし玉ふは、其御意の底に關羽を荊州の守りとし、關平をも留て父を佐させよとの義なり、御邊むかし桃園に義を結びたる情を想ひ、力を竭して之を守り、北は曹操を防ぎ東は孫權に當り玉へ、此事小しき可の任にあらず。關羽さらに辭せず、慨然として領承しければ、孔明酒宴を設て諸大將を集め、荊州總大將の印綬を渡さんとて左右の手に之を捧げ、關羽に向て此國の大事總て御邊の身に係れりと云ければ、關羽が曰、大丈夫すでに國の大事を司る、死すと云とも何ぞ惜まん。孔明これを聞、その死を輕んずるを見て心よろこばず、印綬を持ながら問て曰、もし曹操攻きたらば如何して防ぎ玉ふべき。關羽が曰、力を盡して之に當らん。孔明又曰、もし曹操、孫權ひとしく來らば如何ん。關羽答て曰、兵

暫く有て張任兵を引て攻來れりと騒ければ、黄忠、魏延打て出んとするを、玄德推止めて宣ひけるは、われ新に鋭氣を折かれて戰ふとも勝こと能じ、只宜く堅く守り、孔明が來るを待て計を成べしとて卽時に書簡を封じて關平を使とし、早く荊州に行て孔明を招かしめ、緊しく城を守りて一人も出て戰はず。

○張飛巴郡釋二嚴顏一

この時荊州には七夕の日に當り、孔明酒宴を設け夜に入て諸の大將を集め、蜀を收るの事なんど物がたりする所に、忽ち西の方に一つの星あり、其大さ斗の如くにして天より落、光流れて西に散ければ、孔明あつと驚き盃を地に棄て哀い哉と哭く。諸人怪んで其故を問へば、孔明申けるは、われ前に天文を考へ、今年は罡星西方に在て軍師に利あらず、天狗星わが軍を犯して太白星雒城の分に臨めり、是ゆゑに我書簡を獻てすでに君を警む、誰か料ん今宵西方に星落て龐統忽に亡んとは、是又わが君の一つの臂を失ふが如しとて大に哭きければ、滿座みな興を醒して更に信ぜず。あらけしからずの軍師の哭き哉と低語ければ、孔明申けるは、諸將みな遠く出玉ふな、數日の內に必ず消息あらんとて、今夜は無興氣にて退散す。二三日を經て關

げにもとて自ら先に進んで途を開き、已に雒城に近付ける所に、馬烟天を蔽うて蜀の大將吳蘭、雷同新手を以て攻かゝる。魏延是非なく只討死せよと呼はりて火出る程に戰ふ所に、後より張任又追きたり夾んで攻ければ、魏延力つかれて出ること能ず。已に危ところに、忽然として吳蘭、雷同が勢みな後より逃わしる。魏延これに力を得て勇を振て圍を出ければ、一人刀を舞して馬を躍せ、黃忠こゝに來て汝を救と呼はり、共に力を合せて吳蘭、雷同を追討に攻めやぶり、雒城の下に追つめければ、城の內より劉璝兵を引て討て出るを、玄德後より來て之を防ぎ、黃忠、魏延を救て引回し玉へば、張任又傍の小路より討てかゝり、劉璝、吳蘭、雷同等みな一手に成て追來る。玄德しばし支へて戰ひ玉へども、力つかれて防ぐこと能ず。二箇所の陣屋をも打すて涪城を指て走り玉ふに、敵大勢にて競ひ蒐る。張任殊に火急に追かけ玄德を生取んと進む所に、涪城の內より劉封、關平三萬餘騎を引て討て出、又蜀の勢を討やぶり二十里あまり追かけ、馬物の具數を知ず奪ひ來る。玄德城中に入て龐統が消息を尋ね玉へば、落鳳坡より逃れ來る者あり、軍師は人馬ともに坡の前にて射殺され玉へりと申す。玄德大に哭き、西を望んで淚を流し、遙に魂を招て祭を成玉へば、聞人みな哀み哭く。黃忠申けるは、いま龐統軍師すでに亡たり、蜀の勢必ず虛に乘て攻來ん、不如はやく荆州に使を馳せて、孔明軍師を招き玉へ。

だ堪がたきに、龐統兵を引て險阻を登り、行先の樣を見るに、兩旁の山高く聳えて樹木殊に枝を交へ、路筋いよ〳〵險かりければ、心の内深く疑ひ、馬を住て此處はいかなる地ぞと問に、新に降參の兵あり、答て申けるは、この處を落鳳坡と申し候。龐統大に驚き、吾道號を鳳雛と云、この處を落鳳坡と云は吾命の終るべきにや、後陣より早く退けと下知する所に、山の上に梆子を響す程こそあれ、四方より射下す矢雨よりも繁く、偏に白き馬を望んで射たりしかば、憐べし龐統亂箭の下に死して射立たる矢は柴の如し、時に年三十六歳なり。昔し南方の小兒の謠に、

一鳳竝二一龍一、相將到二蜀中一、纔到二半路裏一、鳳死落レ坡。東風送レ雨雨隨レ風、隆漢興時蜀道通、蜀道通時只有レ龍。

と謠ひしは能も今日に相應ぜり。此時張任すでに龐統を射ころし、勢に乘て切て蒐りければ、大將を討れてなじかは悚べき、亂れ騷で走りしが、たすかる者ぞ無りける。魏延は遙に先に進みけるが、跡に軍ありと聞て急に取て回さんとすれば、張任大勢にて路を塞ぎ、山の上に走り散て雨のふる如く矢を放つ。是ゆゑに前に進んとすれば岩そびえて上ること能ず、進退きはまりて如何がせんと騷ければ、降參の兵告て曰、たゞ雒城の前に出て大路より回り玉へ。魏延

諸軍に下知を傳へて五更に兵粮を使ひ、夜の明方に打起んとて黄忠、魏延はや先手に進みければ、玄德、龐統と左右に分れて打起玉ふ所に、龐統が乘たる馬俄に眼を見つめて跑あがり前足を折ければ、龐統倒に地上に落。玄德いそぎ扶け起して、軍師いかなれば箇樣の惡き馬に乘玉ふと問玉へば、龐統申けるは、この馬久しく乘候へども了に箇樣のこと候はず。玄德の曰、陣に臨んで此の如なる時は必ず人の命を悞らん、我のる所の白き馬はよく〱乘馴れて失有まじ、軍師これに乘かへ玉へ、吾自らその馬に乘ん。龐統拜謝し深く君の厚恩を感ず、萬死と云とも報じ難しとて了に左右に分れて進みければ、玄德遙に龐統を見送り、心の内怏々として喜ばず、大路の方に向て進み玉へり、雒城には吳懿、劉璝等冷苞が討れたる由を聞、いかゞせんと議しければ、張任申けるは、城の東なる山は南に一つの細路ありて第一の要害なり、某一軍を引て之を守らん、諸將みなこの城をよく固め玉へとて手分を定むる所に、斥候の兵走り來り、敵二手に備て推よすると申す。張任乃ち三千の射手を揃て彼細路の上なる山の頂に伏て、敵や來ると窺はしむるに、魏延先手の兵を引て通り過たる所に、後陣の勢には白き馬に乘たる大將あり、玄德はいつも白き馬に乘候と承はりしが、必ず是ならんと報ず。張任大に喜び、遙に諸軍に下知をなし、軍中白き馬に乘たる者を射とれとて皆勇み躍て之を待。時に夏の末にて暑氣甚

玉は早速に兵を進め玉へとて再三強て勸ければ、玄德これに從ひ自ら涪城を出て黃忠、魏延が陣に赴玉ふ。雒統乃ち法正を呼、これより雒城へ向ふには路いか程かあると問に、法正繪圖に寫して獻つる。玄德さきに張松が遺れる圖本を以て考玉ふに毫髮も差なし。法正申けるは、山の北に一つの大道あり、是は雒城の東門に通ず、山の南に一つの細き小徑あり、是は雒城の西門に通ず、之より兵を進め玉へ。龐統乃ち魏延を先手として南の細路を進ませ、我後陣に續かんとて玄德に向て申けるは、君は黃忠を先手として北なる大路より進み玉へ、共に雒城にて出合候はん。玄德の曰、われ幼より弓馬に熟して多く險難の路を經たり、先生大路より進玉へ、我小路より向ふべし。龐統が曰、大路には敵の大勢守るべし、君これに向ひ玉へ、山路の方は險を賴で敵も定めて油斷すべし、某これに依て自ら進んとす。玄德の曰、われ昨夜の夢に怪げなる神人來り、手に鐵の棒を持て吾右の臂を擊と見たりしが、夢覺て今に痛あり、今日の軍は墓々しからじ。龐統が曰、壯士臨レ陣、不レ死則帶レ傷と云へり、何ゆゑに由なき夢を以て御心を惑し玉ふぞ。玄德の曰、わが疑ふは孔明が書簡なり、先生回て只涪城を守り玉へ。龐統大に笑て曰、君いかなれば孔明に惑され玉ふぞ、是は某が功を立んことを妬んで君の御心を疑はしむる者なり、心疑ふ時は必ず夢となる、何の妨か候べき、某命を弃てて君の恩を報ぜんとて、

る所に、魏延が大勢前後より起て散々に攻やぶる。冷苞大に驚き路を奪て逃んとしけるが、魏延に遇て了に生取にぞせられける。蜀の大將吳蘭、雷同これを救んとて出ければ、又黃忠に出合、したゝか討れて逃かへる。魏延乃ち冷苞を縛て涪城に到りければ、玄德責て宣ひけるは、われ仁義を以て汝を放ところに、却て詐を成て我を欺く、今は放し難しとて了に冷苞を誅戮し、重く魏延を賞して酒宴を設け、彭義を厚く持なし玉ふ所に、忽ち荊州より馬良きたれりと申す。玄德呼入て對面し玉へば、馬良申けるは、荊州益平安なり、君御心を安んじ玉へとて孔明が書簡を呈す。玄德ひらき見玉ふに、初に荊州の無事なることを書て、某夜天文を考て太乙の數を見るに、今年歲癸の巳に次て罡星西方にあり、又乾の象を觀るに、太白星雒城の分に臨で君の大將の身の上凶多くして吉少し、宜く之を愼玉へとありければ、玄德見了て先馬良を荊州に回し、我直に孔明に遇てこの事を議せんと云玉ふ。龐統これを聞て心の內に思けるは、是は定めて孔明わが蜀を取て大なる功を立んことを妬み、此の如く企つるものならん、我命は天にあり、豈人に在んやとて了に玄德に見えて申けるは、君なんぞ孔明の書簡に御心を惑し玉ふぞ、某も亦天文を知れり、太乙の數を考るに、罡星西方に在は君の蜀を取玉ふに應ず、豈御方の凶ならんや、太白星が雒城に臨めるは蜀の大將冷苞を誅せるに應ず、君すこしも疑ひ

と云ものにて候はん、某行て見るべしとて堂に上て對面しければ、其人急に起あがり手を打て大に笑ふ。龐統問て曰、これ何人ぞ。法正が曰、この人は廣漢より出て、彭義字は永年とて蜀中の名士なり、劉璋を強く諫めしゆゑ劉璋怒て其髪を切、官を剝で奴とす。龐統謹んで敬ひければ、彭義申けるは、われ今こゝに來は汝數萬人の命を救ん爲なり、玄德に見えて直に之を云ん。法正急に玄德に報じければ、玄德對面して其事を問玉ふ。彭義が曰、雒城の前なる二箇所の陣に君の勢多くありや。玄德の曰、黃忠、魏延これを守る。彭義が曰、大將たるの道は地理を察せずんば有べからず、前なる陣屋は地形きはめて低く、其上に涪江の流あり、若この水をせき掛て前後より攻來らば一人も助る者あるべからず。玄德悟てげにもと驚き玉ひければ、彭義申けるは、罡星西方に在て太白星この地に臨めり、不吉の象天文に顯なり、用心し玉はずんば盡く亡ん。玄德大に喜び、乃ち彭義を拜して幕賓とし、密に人を遣して黃忠、魏延に此由を告知せ、水を防ぐの備を成しめ玉ふ。黃忠、魏延これを聞て二人一日ばかりに巡見し、敵もし來らば互に相通ぜんとて少しも怠ず用心す。或夜雨風烈しく起りければ、蜀の大將冷苞これぞ待ところの夜なりとて、自ら五千餘人の兵を率して鋤鍬を持せ、忍やかに涪江の岸に到り、水を決て流しかけんとするに、後より喊の聲聞えければ、扨は敵の用心ありとて急に退んとす

忽ち細作來て申けるは、この比吳の孫權使を以て漢中の張魯と好を結び、早く兵を起して葭萌關を攻よ、我又吳の勢を起して相援んと云に、張魯これに力を得て葭萌關に攻かゝり候。玄德大に驚き、若葭萌關を破らるゝ時は荊州の途絕ん、吾進退すでに谷まれりと云玉へば、龐統乃ち孟達を呼で申けるは、御邊は此國にそだちて能地理を知玉はん、行て葭萌關を守り玉はんや。孟達が曰、某ねがはくは一人を薦めて共に行ん、この人は本荊州に在て劉表が中郎將たり、南郡枝江の人に霍峻字は仲邈と云ものなり、此人を用ひ玉はば萬に一つも失候はじ。玄德喜び、卽時に霍峻を用ひて孟達と共に葭萌關を守らしめ玉へば、龐統退て我陣に囘りけるに、門を守る者走り來り、一人の客ありと申す。龐統出むかへて之を見るに、身の長八尺あまりにして形甚だ雄偉に、髮短して頸に垂、衣服をも齊へず怪しげなる體なりければ、先生は何人ぞと問に、其人ものをも云ず直ちに正面の大床に上て仰に臥。龐統甚だ疑ひ、何なる人ぞと尋ね問に、其人答て申けるは、汝よく客を敬の禮を盡せ、其後に天下の大事を說ん。龐統これを聞て急に酒食を進めければ、其人起あがりて飲食ひ、少しも辭する心なく大に飽て又睡る。龐統心怪んで安からず、若は敵の計ならんかとて急ぎ法正を呼につかはす。法正急に走り來りければ、龐統申けるは、いま一人此の如なる者あり、是いかなる人ぞ。法正が曰、これ定めて永年

しひて論ずること勿れとて了に冷苞を放し玉ふ。冷苞雒城に入て劉璝、張任に見え、我すでに敵に生取れしかども、番の者共十人あまりを伐ころし馬を奪て逃れ來れりと云ければ、劉璝、張任いそぎ成都へ早馬を立て救を求む。劉璋この早馬に仰天し、文武の大將を集めていかゞせんと議しければ、一人すゝみ出て曰、某ねがはくは行て雒城を守らん。諸人これを見るに劉璋が嫡子劉循なり。劉璋喜て曰、わが子行んと欲せば舅の吳懿を伴ひ、別に副將を從へ行べし。吳懿が曰、某ねがはくは劉循を扶て吳蘭、雷同二人を副將とせん。劉璋これに從ひ二萬餘騎を與へければ、了に進んで雒城に到る。劉璝、張任相迎へて合戰の樣を語りければ、吳懿が曰、敵の勢すでに城下に臨めり、汝等いかなる計かある。冷苞が曰、雒城の前に敵の構へたる陣屋あり、涪江に靠て地形きはめて低し、今幸に江水甚だ盛なれば、密に五千の兵を以て夜中に涪江の水を決り、敵の陣を水攻にせん。吳懿が曰、この計甚だ好、敵に推せられざる已前に早く之を用ふべしとて兵の手分を定め、鋤鍬を用意して其日の暮を相待けり。

○落鳳坡亂箭射龐統

玄德は敵の二箇所に構へたる陣屋を奪て黃忠、魏延に之を守らせ、自ら涪城に回り玉ひければ、

倒に引落し、推へて繩をぞ掛たりける。是元來魏延拔がけして軍法を犯のみならず、多く兵を損ひければ、其罪を補ん爲に蜀の兵を案内者として早くこの處に待たるなり。玄德勝軍ををさめて本陣に囘り玉へば、降人に出る者その數を知ず。皆あつく恩賞を賜ひければ、蜀の兵よろこんで地に拜す。玄德又生取を放して、汝等みな父母妻子の悲めるあらん、降らんと願ふ者は御方に用て軍數に充ん、囘らんと願ふ者は放して囘さんと云玉ひければ、軍民みな恩を感じて歡ぶ聲地を動す。時に黃忠すゝみ出、魏延軍法を犯せり、速に首を刎玉へと云ければ、玄德乃ち魏延を呼出し玉ふに、冷苞を縛て引來る。玄德の曰、汝すでに軍法を破ると云ども冷苞を生捉し功あり、之を以て罪を補ふべし、黃忠矢を放て鄧賢を射殺し、汝が危を救うたれば、其恩を謝せよと宣ふ。魏延頓首して罪に伏し地の上に再拜しければ、玄德あつく黃忠を賞し、成都を取て後この功を報ずべしとて、次に冷苞を引出して其繩を放し、酒を飮せて問て曰、汝いま我に降らんか。冷苞申けるは、すでに活命の恩を蒙る、爭か降參せざるべき、雒城を守る劉璝、張任と申ものは某と生死の交をなす、若御ゆるし有ば某ゆいて降參させさせ、城を開て獻らん。玄德大に喜び、衣服鞍馬を賜ひしかば、魏延諫て曰、これ必ず詐ならん、放し玉ふこと勿れ。玄德の曰、われ常に仁義を以て人に對す、彼もし囘らずんば是かれが心の實あらざる也、

速に本陣に報ず。冷苞これに依て兵を備て相待ところに、魏延すでに寄來りしかば、一聲鐵砲を響ほどこそあれ、蜀の兵勢に乘て討て出たり。魏延刀を舞して冷苞と三十餘合戰ふ所に、後より蜀の伏勢又かゝりければ、魏延前後に度を失て散々に逃わしる。蜀の勢勝に乘て追かけ五六里ばかり來りける所に、山際に鼓の聲地を震して又蜀の大將鄧賢兵を引て馳きたり、魏延快く降參せよと呼はり、喊を造て蒐たりしかば、魏延大に驚き周章さわいで走りけるが、乘たる馬前足を折て地の上に倒れければ、急に起あがらんとするに、鄧賢槍を撚て走り蒐る。すはや討れぬと見えける所に、矢一つ來て鄧賢を馬より下に射て落す。冷苞これを見て又魏延を伐んと透まもなく蒐る所に、一員の大將山の坡より馬を飛して馳きたり、老將黄忠こゝに在と呼はりて冷苞に討て蒐る。冷苞驚で散々に走りければ、黄忠まづ鄧賢が首を取、又勢に乘て追かくる。冷苞あまりに追れて引回し、十合あまり戰ひけれども、敵の大勢かゝりければ本陣へも入ことあたはず、這々のがれて鄧賢が構へたる陣中に入んとすれば、見なれぬ旗風に飜へりて、一人の大將錦の袍を被て金の盔を戴き眞先に進み來る。冷苞驚て屹と見れば、是乃ち劉玄德なり。左に劉封右に關平、すでに此陣を奪ひ取て勢に乘て討て蒐る。冷苞前後に路なく山中に逃入て雒城へ入んとするに、兩旁の谷より伏の勢ひとしく起り、熊手を以て冷苞を馬より

人は傷を得ん、必ず爭を成ことなかれ。龐統申けるは、いま冷苞、鄧賢左右に分れて陣をとる、汝二人も二手に分て之を攻よ、早く敵を破る者を第一の功とせん。黄忠、魏延領承して出ければ、龐統又玄德に申けるは、この二人必ず途中にて爭を仕らん、君自ら兵を引て後陣に備へ玉へ。玄德げにもとて龐統を留めて涪城を守らせ、自ら劉封、關平と五千餘騎を引て打起玉ふ。黄忠は我陣に囘りて手下の勢に下知を傳へ、今夜の四更に兵粮を使て五更に打起、夜の曉方に攻かゝらん、左の山路より進むべしとて時刻を待。魏延は心の内に今日の合戰には人より先を蒐て我一人が功名にせんと思ひければ、密に忍を入て黄忠が打起時刻を窺ひ聞しむるに、今夜の四更に兵粮を使て五更に打起候と申す。魏延大に喜び、手下の勢に下知を成て二更に兵粮をつかひ三更に打起んとす。元來黄忠と魏延と玄德の前にて約を定め、黄忠は冷苞が陣に向ひ、魏延は鄧賢が陣に向ふべし、共に涪城の前にて勢を揃へて打起んと云けるが、其夜の三更に魏延さらに人に知せず、馬は鈴を收め人は枚を啣で旗を捲武具を藏して忍やかに打出、半途に出て思ひけるは、我いま鄧賢が陣一つを破りたればとてさまで功とするに足ず、先冷苞が陣を破りて次に鄧賢が陣に向ひ、二箇處の陣を攻取て黄忠に辱を與へんとて、俄に下知を成て左の山路より進み、夜の明方に冷苞が陣に近づき、旗を擧武具を揃へければ、蜀の伏勢これを見付て

を城へ寄しむべからず。冷苞、鄧賢申けるは、某二人行て守らん。劉璝大に喜び酒宴を設て持なし、二萬餘騎を分て與へければ、二人城を五十里はなれ山に沿て陣を取、劉璝、張任は雒城を固く守る。玄德は已に涪城を取玉ひて龐統と雒城を取の計を議し玉へば、忽ち斥候の兵走り來り、今成都より冷苞、鄧賢二萬餘騎にて進み來り、城を阻つること五十里ばかりにして大なる陣屋を構へ候と報ず。玄德の曰、誰か行て冷苞、鄧賢が陣を攻ん。老將黃忠が曰、某ねがはくは行ん。玄德の曰、老將軍自ら行てもし冷苞、鄧賢が陣を破らば、是第一の功ならん。黃忠大に喜び、兵を引て出んとするに、一人すゝみ出て曰、老將軍は年すでに高て此を破り玉ふこと能まじ、某ねがはくは行て破らん。玄德これを見玉へば大將魏延なり。黃忠が曰、われ已に君の命を受たりしに、御邊なんぞ之を望める。魏延が曰、老たる者は血氣衰て筋骨よわし、吾きく冷苞、鄧賢は蜀の名將にして力つよしと、恐らくは老將軍これに敵すること叶まじ、然る時は君の大事を悞る也、われ是ゆゑに換らんと云。黃忠怒て申けるは、汝わが年老たるを欺く、今この處にて分明に武藝を較べんか。魏延が曰、ねがはくは君の御前にて勝負を決せん。黃忠走りて堂を下り、兵の持たる刀を取て來りければ、玄德急に推止めて曰、これ如何なることをかする、吾いま大軍を起して蜀を取は全く汝二人が力を賴む、今もし兩虎共に闘はば必ず一

聖人も、禍福將至、善必先知之、不善必先知之と宣へり、我等いま高明の人に問て凶を避吉に移るべしとて四人共に五六十騎を從へ、彼山に行て樵に逢て尋ね問に、あれなる山の絕頂なりと敎ゆ。四人ひとしく山に上て一つの菴に到りければ、內より童子一人出て姓名を通じ引て上人に見えしむ。上人蒲團の上に坐しければ、四人の大將再拜して行末の事を問ふ。紫虛上人申けるは、われは是山中の老人、なんぞ人の吉凶を知ん。劉璝再三求め問ふに、上人童子を呼で紙筆を取よせ、八句の語を書て劉璝に授け、早々に囘り玉へと云ふ。其文に曰、

左龍右鳳　飛入西川　雛鳳墜地　臥龍升天
一得一失　天數如然　宜歸正道　勿喪九泉

劉璝又問て曰、われ等四人の氣數は如何ん。上人答て曰、定業は逃れ難し、必ず再び問ことなかれ。劉璝なほ之を問に、上人目を塞で已に息たえ、死人の坐せるが如なりければ、四人つひに山を下りぬ。劉璝申けるは、上人の言謹まずんばあるべからず。張任笑て曰、これ狂人なり、何ぞ用るに足んとて馬を早めて雒縣に到り、勢を分て諸所の要害を守らしむるに、劉璝申けるは、この雒城は吾國第一の要害にて、若この處を破らるゝ時は成都も又共に破れん、吾等四人公道を以て計を議せば、二人はこの城を固く守り、二人は前なる山に沿て難所に支へ、敵

冷苞
張任
鄧賢

紫虚上人
劉璝

ば、向に龐統を逐立玉へりと云ふに玄徳驚て後悔し、急に衣を改めて堂上に出、龐統を呼で、我さきに酒に醉て覺ず先生を逐出せりと云玉へば、龐統笑ひ談て耳きかざるが如し。玄徳重て、向には我覺えず酒に醉て言を失る、幸に心に掛玉ふなと云玉ひければ、龐統申けるは、君臣共に醉て言を失る、何ぞ君ひとりならんとて二人手を打て大に笑ふ。

○黄忠魏延大爭功

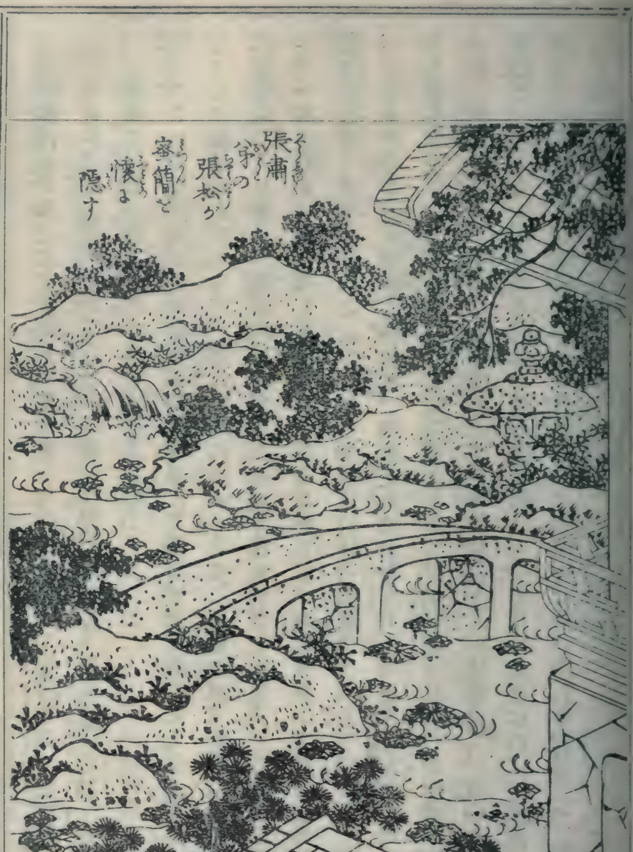
去ほどに玄徳計を設て楊懐、高沛を殺し、涪城すでに降りぬと聞えければ、成都の中、上を下へと周章す。劉璋大に驚き、料らざりき今日果して此の如なる事有んとはと云て、文武の大將と計を議す。諸將みな曰、某等ねがはくは夜を日に繼で馳向ひ、雒縣の要害を固めて咽喉の殺所を塞ぎ、玄徳いかに攻るとも容易には通し候はじ。劉璋これに從ひ、劉璝、冷苞、張任、鄧賢四人に五萬餘騎を指そへ、進んで雒縣を守らしむ。四將すでに打起んとする時、劉璝申けるは、吾きく錦屛山の中に一人の道士あり、名を紫虛上人と號す、預め能人の生死貴賤を知ると、吾等いま軍を出す、軍勢を先に進めて吾自ら山中に入、この人に逢て吉凶を問ん。張任が曰、大丈夫の士兵を𢌞して敵に向ふ、豈山野の人に吉凶を問べけんや。劉璝が曰、さな云玉ひそ、

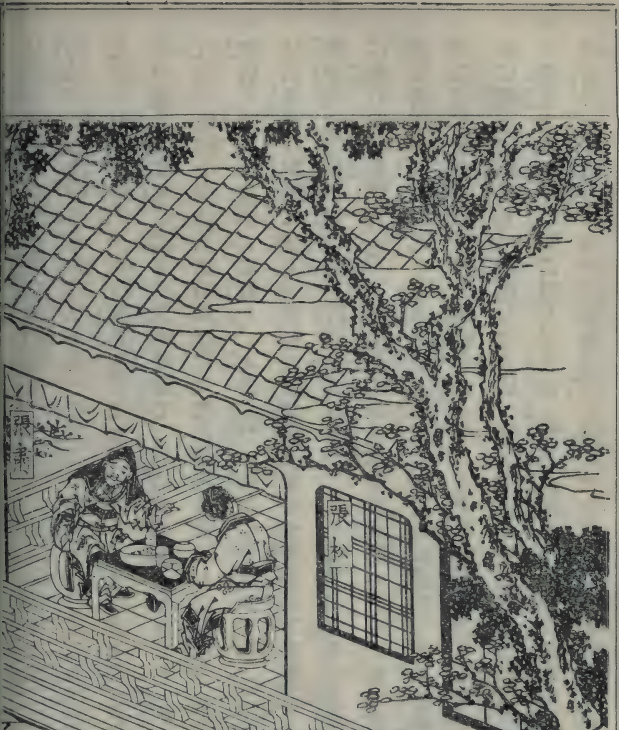
乃ち其懐を捜さしむるに、劉封二人が懐の内より短き劍を取出す。玄德猶豫して之を殺に忍玉はざりければ、龐統色を變じて曰、この二人すでに我君を殺んと計る、罪ゆるし難しとて引出して首を刎させけり。黄忠、魏延その手勢二百人を盡く縛て出しければ、玄德自ら縄を解て酒を賜ひ、楊懐、高沛わが兄弟の間を妨げ害し、今懐に劍を藏して吾を殺さんと計る、是に依て首を刎て罪を正す、本より汝等が知れる事に非、この故に命を扶るぞと云玉へば、皆地に拜して踊り喜ぶ。龐統申けるは、われ今夜汝等を案内者として涪水關を乗取ん、功成ば必ず重く恩賞せん。諸人みな喜て同じければ、龐統その夜二百人の生取を先に打せ、關前に到て早く門を開けと呼はらせければ、城中の者共御方囘りぬと見て急に門を開くに、玄德の大勢一擁して亂れ入、刄に血ぬらずして涪城を乗とりければ、蜀の兵こと〴〵く降人となる。玄德重く恩賞を施し、前後に分て要害を守らせ、次の日酒宴を設て諸軍を持なし、半酣に至て玄德前後も知ず醉玉ひ、龐統を顧て今日の會は樂しからずやと問玉へば、龐統答て曰、人の國を取て樂とするは仁者の兵にあらず。玄德これを聞て心怒り、昔し武王は紂を伐て前に歌ひ後に舞玉へり、是仁者の兵にあらずや、汝が言みな道理に合はず、早々に退けとて追立玉へば、龐統全く怕るゝ色なく大に笑て退出す。左右の者共玄德を扶て後堂に入、漸く四更の比に至て醉すでに醒けれ

妙なり、物なれたる精兵二百人を從へ行、その餘は盡く此關を守らしめんとて、次の日酒肴を用意して出向ふ。此時玄德は大軍を引て涪水の邊に出玉へば、龐統馬上にて低語て曰、楊懷、高沛が快く來て君を送らんと云は心の底料り難し、宜く用心し玉ふべし、若又來らずんば早く推よせて打破らんとて相待ところに、忽ち一陣の風吹來て馬の前に立たる師の字の旗を倒しければ、玄德問て曰、これ何なる警ぞ。龐統が曰、これ楊懷、高沛が君を刺殺んとする心あるを天より警め玉ふ也、兵を揃て防ぎ玉へ。玄德これに從ひ身に鎧を重て寶劍を帶玉ふ所に、忽ち楊懷、高沛酒肴を舁せて來れりと申す。龐統まづ黃忠、魏延を呼、いま楊懷、高沛等が率來れる勢を一人も逃すこと勿れ、箇樣々々にせよとて計を云ふくめ、自ら遠く出て相迎ふ。楊懷、高沛は兼て計りし如く懷に劍を藏して二人羊を引酒を舁せて內に入、その邊を窺ひ見るに用心ありとも見えざりければ、心の內しすましたりと喜び、玄德に見えて申けるは、いま皇叔の荊州に回り玉ふ由を聞些少の禮物を具て相送るとて酒肴を獻りければ、玄德伴て喜び半酣に至て、われ密に一大事を議せんと欲す、傍の人を退けよと云て二人が從へ來れる二百餘人の兵を皆外に追出し、寄や者共曲者を捉よと呼はり玉へば、幕の陰より關平、劉封二人躍り出推倒して之を縛る。玄德大に怒て曰、吾と劉璋とは兄弟の交なるを、汝等なにとて害せんと計るぞ。龐統

松頓首端拜主君皇叔麾下。昨常進言、並無虛謬、何遲太甚、逆取順守、古之人所貴。今大事已在掌握之中、何故欲棄此而回荊州乎。使松聞之如有所失。書呈到日、疾速進兵、以圖王業幸甚。松稽首再拜。

張肅これを見て大に驚き、吾弟野心を挾んで國を玄德に與へんとす、若外より泄なば一門ことごとく誅せらるべしとて、速に劉璋に見え有の儘に告ければ、劉璋以の外に怒り、われ平生仁義を以て人を用ふ、誰か料らん今日此の如くなるべしとはと云て、武士に命じて先張松を捕へ、一家の男女一人も殘らず市に出して首を刎させ、急に文武の大將を集め、玄德いま我國を奪はんとす、汝等いかなる計かあると問ければ、黃權すゝみ出て曰、事しばらくも延引あるべからず、早く諸所の守に勢を添、荊州往來の道を塞で一人をも關より內に入しむることなく用心緊くし玉ふべし。劉璋これに從ひ、兵を集めて俄に諸方に分つかはす。去ほどに玄德は兵を收て涪城に回り、先涪水關を固めたる楊懷、高沛が方へ使を遣し、我いま兵を收て荊州に退き回る、明日その關を通るべし、門を開き候へと云おくり玉ひければ、楊懷、高沛二人これを聞て、此事いかにと相議するに、高沛が曰、玄德自ら死を送れり、我等まづ懷の中に劍を藏し、明日彼が回るを送りて酒宴の席にて刺殺し、君の患を除くべし。楊懷が曰、この計きはめて


張肅弟の張松が密簡を懐に隠す


張肅
張松

只今速に精兵を擇で晝夜に路を急ぎ、直ちに成都を襲ば一擧に功を成就せん、此上の計なり、楊懐、高沛は蜀の名將、いま兵を引て涪水關を守る、君いま佯て荊州に囘ると告玉はば、彼二人必ず來て相送ん、其時席上にて之を殺し、先涪水の城を取て其後に成都に向ふ、此中の計なり、退て白帝城に囘り、荊州を保て心靜に進み取、これ下の計なり、君もし疑を抱て決せず、此三つの計を用ひ玉はずんば、大なる禍を得玉はんこと目前にあり。玄德の曰、上の計は太だ急にして下の計は太だ遲し、中の計は急ならず遲からず、我これに從はん。龐統が曰、さ候はば書簡を劉璋に送て、曹操いま大將樂進に大勢を付て靑泥鎭を攻ること甚だ急なり、吾弟の關羽荊州の兵を引て之を防げども敵することを得ず、吾自ら速に囘て之を救んと欲す、この故に告申す也と詐玉へ。玄德これに從ひ郎時に成都へ使を遣して劉璋に告玉ひける。張松成都に在て玄德の荊州に囘り玉ふと聞て本意なきことに思ひ、密に書簡を封じて玄德に送らんとする所に、其兄に廣漢の太守張肅と云ものあり。折節用事ありて來りければ、張松急に書簡を袖の中に藏し、相對して物語りするに、何とやらんその氣色つねに易りければ、張肅わざと酒を索て酒宴を始め、半酣に至りて互に盃を取傳る時、張松悞て袖の中より彼書簡を落す。張肅急に拾て懷に入、わかれて家に囘り開て之を見るに、其書に曰、

從て成都に入りければ、劉璋問て曰、汝いかゞして此に來れる。楊懷が曰、專らこの使の爲に來り候、玄德すでに蜀に來てより廣く恩德を施して民の心を懷く、これ腹心の病なり、今又兵を求め粮を借る、君必ず從ひ玉ふな、若これに從ひ玉ふ時は乾ける柴を以て烈火の上に加るが如し、急には中々滅し難からん。劉璋申けるは、われと玄德とは兄弟の交なり、從はずんばあるべからず。時に一人すゝみ出て曰、玄德は世の梟雄、もし久しく留め置ば是虎を放て山に入る也、いま更に兵を與へ粮を借ば、是虎に翼を添るなり、君必ず從ひ玉ふな。諸人これを見れば零陵烝陽の人に劉巴字は子初と云もの也。黃權も進み出、又再三諫めければ、劉璋つひに諫に從ひ、年老て疲れ弱りたる兵四千人、兵粮一萬石絹五千匹、その外すこし許の武具を調へ使者を發して玄德に送りければ、劉巴すみやかに下知を傳へて楊懷、高沛に緊く涪水關を守らしむ。劉璋が使者葭萌關に行て玄德に返簡を呈しければ、玄德ひらき見て大に怒り、我はるばると此處に來り、力を費し心を苦めて汝が爲に敵を防ぐ、今わづかなる兵粮を吝で吾求めに從はずんば、何を以てか士卒を激して敵を討んやと云て散々に罵、使の前にて其返簡を引裂玉へば、使恐れ驚いそぎ成都に逃かへりける。龐統が曰、君は只仁義を以て重とし玉ふ、今御心いかん。玄德の曰、先生宜く料ひ玉へ。龐統が曰、某三條の計あり、君これを擇で用ひ玉へ、

○玄德斬楊懷高沛

この時玄德は葭萌關に在て張魯を防ぎ玉ひけるが、曹操呉を攻て濡須塢にて戰ふ由を聞玉ひ、龐統を呼で商議し、曹操もし勝ば直ちに荊州を取ん、孫權もし勝とも又進んで荊州を攻ん、我これを如何すべきと問玉へば、龐統申けるは、君すこしも憂ひ玉ふな、孔明すでに荊州を守る上は、曹操、孫權いかに攻るとも何の怕か候はん、君いま劉璋に書簡を送り、曹操大軍を起して呉を攻るゆゑ孫權救を荊州に求む、吾と孫權とは唇歯の國なり、救ずんば有べからず、今張魯すでに蜀を攻るの沙汰あれども、彼は自ら守るの賊なり、敢て輕々しくは來り候はじ、吾まづ荊州に回て孫權と力を合せ、共に曹操を破んと欲すれども、兵少く粮足ずして其事を成がたし、願くは同宗の好を思ひ、精兵三四萬兵粮十萬斛を合力し玉へと望み玉へ、若このこと叶ずば某別に計を成ん。玄德これに從ひ使を成都に遣し玉ふ。使途を急で涪水關を通りければ、關を守る蜀の大將楊懷、高沛二人これを聞つけ、高沛を留めて關を守らせ、楊懷は使者に

に玄德を疑せ、内外より之を討ん、又漢中の張魯にも書簡を送り、早く兵を進て玄德を攻よと云遣し、間諜の計を用て玄德が前後に度を失ふ時を窺ひ、その虚に乘て兵を起ば、荊州を取んこと掌にあり。孫權大に喜び、二通の書簡を封じて其計を行しむ。

月に至り、大雨日夜に止ずして洪水甚しく、諸軍みな泥水の中にありて心の中に怨を含む。曹操これを聞て憂ひ苦み、諸大將を集ていかゞせんと議するに、早く都に回り玉へと勸るもあり、又今春の暖なるに及べり、天の助る幸なり、此時に吳を滅し玉へと勸るもありて、衆評更に決せざる所に、忽ち吳の使なりとて書簡を送る。曹操披き見に其書に曰、

吳侯孫權再拜、致二書於漢丞相一。切謂、彼此皆漢朝臣宰、不レ思下報レ國安レ民爲上レ本、妄施二殺伐一、非二仁者之心一也。即日春水方生、公當下速去各圖中安逸上。如其不レ然、復有二赤壁之禍一矣。公宜二自思一焉。

建安十八年春正月　吳侯孫權書

その書簡の背に、足下不レ死孤不レ得レ安と云八字ありければ、曹操見了て大に笑ひ、孫權吾を欺ずとて遂に其使を重く持成、恩賞を與て回しめ、廬江の太守朱光を留て皖城を守らせ、悉く大軍を收て都に回りけり。吳主孫權もこの由を聞て秣陵に回り、諸將を集て、今曹操北に去と云ども玄德なほ葭萌關に在て張魯と戰ふ、此間に襲て荊州を取んは如何にと云ければ、張昭が曰、いや〳〵妄に兵を動し玉ふな、若いま荊州を攻玉はば、曹操必ず再び來ん、某一つの計あり、蜀の劉璋に書簡を送り、玄德吳の國と心を合せ蜀を取んとし候程に用心し玉へと云て劉璋

刻を問ば、軍士報じて午の時なりと申す。曹操餘に怪く思ひ、馬に打のり五六十騎を引て外に出ければ、夢に見たりしに少も違ず夕陽西山の頂を照す。暫く望み居たる所に、山の間より一簇の軍馬かけ出、一人眞先に金の盔を耀し馬を躍せて進み來る。曹操これを見に吳主孫權なり。鞭を以て指招き、曹丞相坐ら中國を鎭て富貴すでに身に餘れり、何故に足ことを知ずして我國を犯し玉ふと呼はりければ、曹操答て曰、汝臣として王室に順ず、吾天子の勅詔を受、此に來て汝が罪を伐。孫權笑て曰、汝自ら心に恥ずや、汝もと反逆の心を挾み、天子の詔を矯て諸侯に令す、吾漢朝を尊ざるにあらず、實は汝を討て國家を正ん爲なり。曹操大に怒り、兵を下知して山へ上んとするに、忽然として鼓の聲天地を崩し、山の後より二手の勢かけ出、右には吳の大將韓當、周泰二人、左には陳武、潘璋二人、各三千の射手を引具して雨の降如く矢を放つ。曹操大に亂て散々に走りければ、吳の勢これを追こと甚だ急にして已に危き所に、許褚虎衛の軍を引て馳來り、曹操を救て囘りしかば、吳の勢思ふ儘に打勝、みな凱歌を唱て濡須の中に囘りけり。曹操陣中に囘て心の中に思けるは、孫權は等閑の輩にあらず、紅日の應後必ず帝王たらん、不レ如戰を止て都に囘んと定けるが、敵の笑んも口惜くて進退更に決せず、相拒で一月餘りに及び、日夜戰ふと云ども墓々しき勝負もなし。斯て建安十八年春正

付ず震ひ怕て逃る所に、又呉の大將韓當、周泰二人馬を飛して討て蒐る。曹操すはや討れぬと見えける所に、後より許褚刀を舞して蒐塞り、曹操を助て三十餘合戰ひ、靜々と回りければ、呉の勢これに畏て追ざりけり。曹操は辛き命を助り、本陣に回て諸大將を呼、汝等一戰にも及ず、敵を見て散々に走り、吾勢の鋭氣を失へり、再び此の如ならば必ず首を刎て罪を正ん、吾幸に許褚が力を以て不思議の命を助りたりと云て夜の二更の比に至りける時、俄に四方八面火を掛て喊の聲地を動し、呉の勢鋒を揃て切て入、縱横に蒐破り殺して曉に至りしかば、曹操が兵數を盡して討れ、五十里退て陣を取。曹操心の中悶苦み、閑に軍書を看て居たる所に、程昱來り見て曰、丞相よく兵法の玄妙を知玉ふ、何ぞ兵貴二神速一と云ことを覺玉はぬぞ、丞相いまだ都の中に居玉ひて、呉を攻んとて兵を催し、延遷として日を過し玉ひしゆゑ、孫權已に濡須の水口に堤を築き、要害を構て手痛く戰ふ、不レ如まづ都に御歸ありて、重て良計をなし玉へと云ければ、曹操默然として答ず、几に伏て睡けるに、忽ち潮の洶あがる聲して萬馬の爭ひ走る狀の如なりしかば、怪で之を見に、大江の中に一輪の紅日ありて、其光目に耀き、天上の日に相映じて煌々たりけるが、忽然として空中に飛揚し、前なる山の中に落て其響雷の如く暫は靜まらざりければ、打驚て起けるに、是乃ちうたゝ寐の夢なりけり。人を呼で時

心を覺り、虛病して壽春に在ければ、曹操これを召こと數度に及べり。荀彧大に嘆息し、吾九泉の下に死して何の面目ありてか漢の君に見べきと云ける所に、曹操使を以て食物一器を送り、上に曹操親封と書たりければ、開て之を見に曾て一物もなし。荀彧その意を悟り、此に止るのみと云て了に毒を服して亡けり、時に年五十歲。その子荀惲喪を發して此由を告ければ、曹操も甚だ後悔し柩を具て厚く葬しめ、敬侯と謚す。去程に曹操大軍を率して濡須の前に推よせ、三萬の精兵を擇で曹洪を大將とし、進で敵陣の樣を窺しむるに、軈て馳囘り、江の邊に夥く旗を立て、吳の勢の集たること其數を知ずと告ければ、曹操心の內更に安からず、自ら備を推て陣勢を開き張、百餘人を引て山の頂に上り、遙に吳の陣を見やれば、數百艘の兵船次第を守て漕連ね、色々の旗共風に飜て中央に大船を浮べ、青羅の傘蓋の下に吳主孫權花やかに出立て、文武の大將その兩邊に排列せり。曹操この體を見て大に驚き、鞭を擧て嘆稱し、生レ子當レ如ニ孫仲謀一、若ニ劉景升兒子一犬豕耳と云ける所に、忽然として一聲の鐵砲を鳴程こそあれ、吳の船悉く濡須の堤に推寄けるが、早一手の勢飛が如に討て蒐る。曹操が纔の兵其勢に畏て散々に亂れ、一支も支ずみな跡より逃崩ければ、曹操山を下て走る所に、吳の勢の中より碧眼紫髯なる大將大勢を引て追蒐る。曹操これを孫權なりと見てければ、魂も身に

六佾。
四に朱戸　居以二朱戸紅門一也。
五に納陛　納陛以登二陛階一也。
六に虎賁　虎賁三百人、守レ門之軍也。
七に鈇鉞　鈇鉞各一、鈇即斧也、鉞斧屬。
八に弓矢　彤弓一、彤矢百、彤赤色也、玈弓十、玈矢千、玈黑色也。
九に秬鬯圭瓚　秬鬯一卣、圭瓚副レ焉、秬黑黍也、鬯香酒、灌レ地以求二神于陰一、卣中樽也、
　圭瓚宗廟祭器、以祀二先王一也。
この時曹操すでに魏公の位を受て九錫を加へければ、侍中荀彧諫て曰、丞相本義兵を起して漢室を扶け忠貞の誠を秉て退謙の意を存し玉ふべきに、必ず此事止り玉へ。曹操これを聞て大に怒り勃然として色を變じければ、董昭申けるは、豈一人の心を以て萬人の望を阻んやとて、了に曹操を尊んで魏公と仰ければ、荀彧涙を含で外に出、われ想ざりき今日此の如ならんとはと云けるを、曹操心の中深く恨み、扨は今より吾を助まじき爲なりとて、之を殺さんと思ふ心あり。時に建安十七年冬十月、大軍を引て都を出る時、荀彧をも伴んと云。荀彧すでに其

孫權見了て涙を流し、張紘吾に勸て居所を遷さしむ、如何ぞ之に從ざらんとて、即時に建業に遷て石頭城を築きければ、呂蒙申けるは、曹操已に都を起て直に此處へ寄來る、濡須の水口に堤を高く築あげ、夾で之を拒べし。諸將みな曰、岸に上て敵を擊、又退て船にのる、何ぞ堤を築城を構ることを用ん。呂蒙が曰、兵は利鈍あり、戰うて萬一勝ことを得ずんば、敵必ず勢に乘て短兵急に攻かゝるべし、其時騎馬の大勢に追つめられては、御方船に乘ことは扨おき水邊までも逃こと能じ。孫權喜で申けるは、人無ニ遠慮一必有ニ近憂一と云り、呂蒙が意見極て深しとて、數萬の人夫を差遣し、濡須の水口に堤を築せて敵や來ると待蒐たり。此時曹操は大軍を集て吳を破らんと打起所に、長史董昭申けるは、古より以來人の臣として丞相の如き大功なる者を更に見ず、周公、呂望も爭か及ん、風に櫛り雨に沐し玉ふこと三十餘年、世の羣盜を掃ひ平げて萬民の爲に害を除き、再び漢室を扶け興す、豈諸の臣と同列に居玉ふべきや、宜く魏公の位に登て九錫を加へ、其功德を天下に彰玉ふべし、凡九錫と云は、

一に車馬　大輅戎輅各一、大輅金車也、戎輅兵車也、玄牡二、驅者黃馬八匹。

二に衣服　袞冕之服、赤舃副レ焉、袞冕王者之服、赤舃朱履也。

三に樂縣　軒縣之樂、堂下之樂也、升降必動レ樂也、佾舞者之行列也、天子八佾、王侯

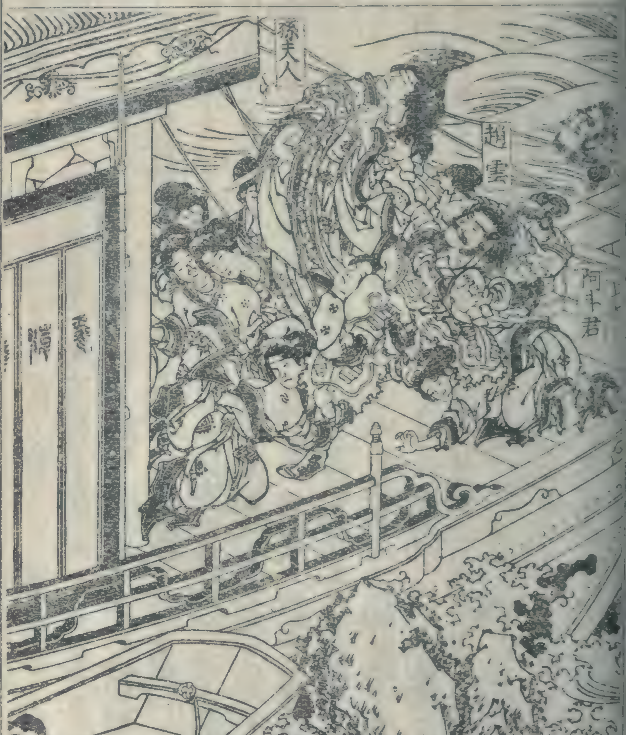
吳王孫權大に怒り、今吾妹すでに囘りぬれば、大軍を起して荊州を攻とり、日比の恨を散ぜんとて文武の大將を悉く集め、船筏を用意して已に打起んとする所に、忽ち早馬來り、曹操自ら四十萬の兵を起し、赤壁の讐を報ぜんとて此處へ寄來り候と告ければ、孫權驚て如何せんと議するに、一人又走り來り、長史張紘病に臥て只今すでに相果たり、遺書これに候とて獻りければ、孫權哀で披き見に、其書に曰、

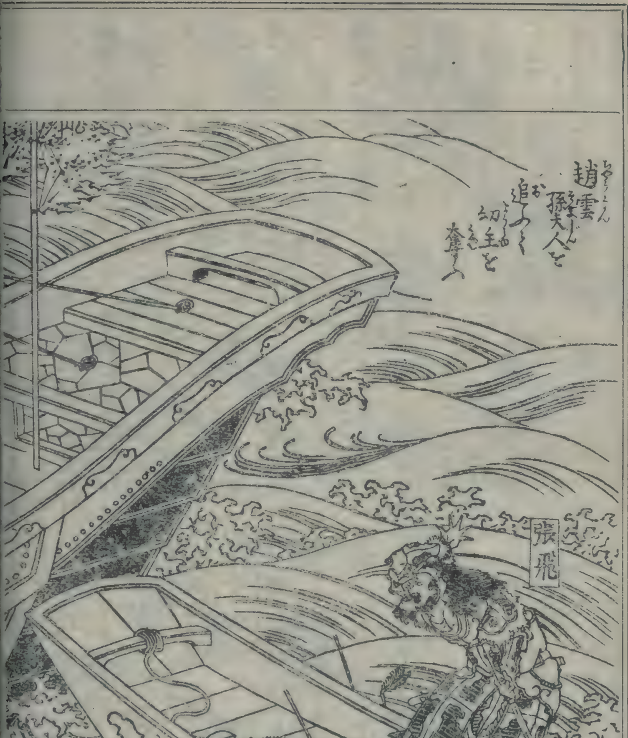
長史張紘臨終、書拜於主公吳侯麾下。自古有國家者、咸欲修德政以比隆盛世、至于其治多不馨香、非無忠臣賢佐諳於治體也、由主不勝其情弗能用耳。夫人情憚難而趨易、好同而惡異、故與治道相反。傳曰、從善如登、從惡如崩、言善之難也。人君承奕世之基、據將然之勢、操八柄之威、甘易同之歡、無假取于人、而忠臣挾難進之術、吐逆耳之言、其不合也不亦宜乎。雖卽有釁巧辯緣間、眩於小忠、戀於恩愛、賢愚雜錯、長幼失序、其所由來、情亂之也。故明君悟之、求賢如饑渴、受諫而不厭、抑情損欲、以義割恩。上無偏謬之授、下無希冀之望、宜加三思含垢、藏疾以成仁覆之大。秣陵山川有帝王之氣、可速遷居之、爲萬世之業。紘不勝泣血哀感眷望之至。

所に、張飛劍を拔て飛のりければ、周善戈を取て出向ふに、張飛事ともせず一刀に斬殺し、首を提て屋形の內へ投入、孫夫人をはたと睨み、怒れる鬼鬚倒にあがる。孫夫人驚て申けるは、是皆いかなる無禮をし玉ふぞ。張飛雷の如なる聲にて叱て曰、汝いま夫を重ぜずして私に出るは是何の道理ぞ、吾引擱で回るべし。孫夫人申けるは、老母の病すでに危し、片時も早く回りて今一度對面せんとす、汝われを放ずんば只今水に沈で此處に亡べし。張飛乃ち趙雲と議して申けるは、若此人水に沈ば吾等臣たるの道に背ん、不如阿斗を取返しぬれば夫人は强て留に及ずとて、又孫夫人に向て、汝が夫は大漢の皇叔なり、此に依て吾等君臣の義を守り敢て汝を辱ず、今日已に相別ると云ども、夫の義を忘ずば早々に又回り來れと云散して、阿斗を抱て趙雲と小舟に乘二三里ばかり出ければ、孔明自ら早舟百餘艘を漕つれ飛が如に馳來る。張飛、趙雲急に見て阿斗を取返しぬと告ければ、孔明大に喜び、皆荊州に回て葭萌關へ使を遣し此趣を報じける。

○曹操興兵下江東

孫夫人已に吳の國に回り、張飛、趙雲半途に出て周善を斬死し、阿斗を奪て回りぬと告ければ、


孫夫人
趙雲
阿斗君


趙雲孫夫人を追つく幼主を奪ふ
張飛
周善

伴て行玉ふぞ。孫夫人が曰、この子は是吾子なり、荆州に遺し置ば誰か能育ん。趙雲申けるは、夫人大に差り、皇叔一生の間に子とては此より別になし、某曾て當陽の長坂百萬の敵軍の中より救ひ出せり、今密に抱き回んとは是いかなる道理ぞ。孫夫人怒て曰、汝は是陣中の武士、安ぞ吾家の事に預ん。趙雲が曰、夫人は假令回り玉ふとも、阿斗を留て某に渡し玉へ。孫夫人いよ／＼怒て曰、汝半途に追かけて是非なく船に乘うつる、此の如の無禮必ず反心ならん。趙雲が曰、吾縱ひ微塵に成とも豈この子を失んや。孫夫人侍女を下知して悉く前に向せ、趙雲を推出さんとて摑付て拽立ければ、趙雲倒れながら孫夫人が抱ける阿斗を引奪ひ、船の頭に立出て岸に上んとすれども、すべき樣なく進退極り身を揉でいかゞせんと嘆息す。孫夫人は阿斗を奪んとて侍女共多く羣り來る。趙雲左の手に阿斗を拘へ右の手に劍を持目を怒して立ければ、敢て近は進み得ず。周善自ら舵を取て船を早め、流に乘じて沖中に出しければ、趙雲只一人にてすべき樣なく、事已に危き所に、行先の港より快舟十餘艘馳來り、鼓を打て喊の聲を擧たり。趙雲大に驚き、必ず敵の計ならんとて色を失て之を見に、一人の大將眞先に出て一丈八尺の矛を提げ、阿斗を奪て何へか行と呼はる者あり、是乃ち燕人張飛なり。元來是も巡見に出て此由を聞付、油江口より早く此所に出たるなり。吳の船みな之を見て慌て騷ぐ

き車に乘て出ければ、相從ふ者三十餘人みな劒を帶刀を執て途を急ぎ直に江邊に馳て行。府中の人これを見て急に番所へ報ずる時、孫夫人已に沙頭鎭に到り、船に乘て出んとする所に、忽ち岸の上より五六人追來り、其船まてとぞ呼はりける。孫夫人これを見ば乃ち常山の趙雲なり。元來江邊の巡見しけるが、此由を聽て早々に馳來りしなり。周善追手の蒐るを見て手に長き戈を持、兵を下知して舟を開かせ、五百餘人の精兵を舟の上に排列し、流に乘して飛が如に下りけり。趙雲岸の上より聲を揚、われ夫人を止んとにあらず、暫く囘り玉へ、申べきことありと云ければ、周善船の上より申けるは、汝何者なれば夫人を止んとて追來れる、早々に囘れとて彌〻船を早めける。趙雲江に沿て十里餘り來る所に、前なる灘に漁父の釣する小舟あり、是こそ我物よと喜び、馬を棄て跳り移り、已に近く馳付ければ、周善兵を下知して只射殺せとて散散に矢を放つ。趙雲槍を以て其矢を撥ふに、紛々として悉く水に落。已に吳の舟を去こと一丈ばかりに成ければ、吳の勢戈を指延槍を撚て群り撞に、趙雲小舟の上に在て槍を打すて、青虹の劒を持て切はらひ、吳の船に飛乘ければ、其勢悉く驚き倒て逃かくる。趙雲屋形の內に入ければ、孫夫人叱て曰、是いかなる無禮ぞ。趙雲が曰、夫人何とて孔明にも知さで出玉へる。孫夫人申けるは、我母の病已に急なり、軍師に報ぜば事遲からん。趙雲が曰、何故に又阿斗を

に呼回し、玄德が一子を連來り玉へとて流に順て下る時は、事已に掌の中にあり、其後玄德に使を遣して約束の如く荆州を返せと云んに、若なほ返さざる時は彼が一子を留て質とし、兵を起して攻取べし。孫權大に喜で曰、この計極て妙なり、我大將周善は其力よく鼎を擧、膽量人に超て忠烈雙なく、殊更幼より我兄に從て房中に出入す、この人を大將とすべし。張昭が曰、此事必ず外に泄し玉ふな、早々に遣し玉へ。孫權卽時に密書を封じ、周善に能々計を敎て五百の勢を悉く商人に出立せ、舟底に武具を藏して直に荆州へ赴しむ。周善已に荆州に到り、密に緣を求て彼密書を孫夫人に傳ければ、孫夫人老母の病危しと云を聞より頻に淚を流し、周善を呼で事の由を問。周善申けるは、吳夫人久く病に臥玉ひて危きこと旦夕にあり、今一度對面して後の事を云おき、又玄德の一子ありと聞玉ひて一日見んことを願玉ふ、夫人片時も早く回り玉へ、遲き時は御對面叶まじ。孫夫人申けるは、孔明この比は南郡へ行たり、早く告知せて回るべし。周善が曰、もし孔明に告て使の往來日を過す時は、事延引して今生の御對面は叶はせ玉ふまじ、我等が舟に召れ流に順て下り玉へ。孫夫人申けるは、若孔明に告ずして出る時は、處々に番ありて容易く通さず。周善が曰、江の中には某その用意を仕り候、只早く御出候へ。孫夫人母の病と聞より心の中悶え苦み、取物も取あへず七歲の阿斗を懷に抱

將を集て議して曰、昔日われ玄德と兵を起して一同に蜀を取んと約せしに、今日我に知せず自ら行て之を取、汝等いかなる計をか用べき。顧雍進み出て曰、今玄德兵を分て荆州を守せ、自ら遙々と險阻に入て張魯と戰ふ最中なれば、進退甚だ難の時なり、今君一手の勢を以て玄德が歸る路を塞ぎ、大軍を以て荆州を攻玉はば、一鼓して悉く取ん。孫權大に喜び、此計甚だ妙なり、速に兵を起んと云所に、一人屛風の後より出て申けるは、此計を進るは何者ぞ、引出して首を刎よ、我女を害せんと欲るか。諸人これを見ば吳夫人なり。顧雍驚き怕れて居たりければ、吳夫人怒て申けるは、吾一生の內に惟この女ありて玄德を壻とす、汝等いま荆州を攻んと云は我女を殺ん爲かとて孫權を叱て申けるは、汝父兄の業を受て坐ら江東の八十一州を領し、是にも猶心足ずして小利を見て骨肉の妹を殺さんとするかと散々に恨み訇ければ、孫權愼で答て曰、老母の命某何ぞ背べきとて了に其計を用ざりしかども、吳夫人深く顧雍を恨む。孫權は只一人窻の下に立、心の中に若此時を失ば荆州長く取得じと思ひ、沈吟して決せざる所に、覺ず張昭前に來て問て申けるは、君今何をか憂玉ふ。孫權が曰、只適に云し計を思ふなり。張昭が曰、その事にて候はば何より以て易からん、一人の大將に只五百ばかりの兵を屬て商人の體に出立せ、潛に荆州に遣して孫夫人の方へ密書を送り、老母の病已に危しと云て早々

諸將みな頓首して之を謝す。劉璋涙を流し、御恩の深き我身を沒るまで忘れ候はじと云て、辭を盡して相別る。玄德わが陣に回りて龐統を呼よせ、吾仁義を天下に行んとす、今日の事いか成不義ぞと云て責玉へば、龐統、法正嘆嗟して休ず。劉璋又本陣に回りければ、大將劉璝申けるは、君今日の氣色を見玉はずや、早く成都に回て御身の禍を免れ玉へ。劉璋が曰、玄德は吾宗兄なり、豈二心あらんや。諸大將みな曰、玄德は二心あらねども、手下の者共この蜀の地を取て富貴を得んと思ふ心あり。劉璋が曰、汝等さのみ疑ふこと勿れ、吾兄弟の間を妨ん爲かとて少も疑ふ心なく、日夜玄德と往來して百日ばかり過ける所に、漢中の張魯大勢を以て葭萌關を攻ると告ければ、劉璋乃ち玄德を賴で防んと望む。玄德少も辭せず、兵を引て向ひ玉ひしかば、諸將みな劉璋を勸め、諸所の要害に守の兵を備て玄德を拒ぐ用心をし玉へ、若不意の禍あらば如何し玉ふべきとて再三强て諫ければ、劉璋初の間は從はざりしかども、後に蜀の名將白水都督楊懷、高沛と云もの二人に涪水關を守せて自ら成都に回りける。

○趙雲截レ江奪ニ幼主一

玄德蜀に入て張魯と葭萌關にて戰ひ玉ふ由相傳て吳の國に沙汰ありければ、吳主孫權文武の諸

人歸するの際を失ず、其不意に出て早く基業を立玉へ。玄德之を聞て其理に伏し、少し相從の心に見え玉ひければ、時に建安十七年壬辰春正月、涪城の中に酒宴を設て劉璋を招き、半酣に至ける時、龐統密に法正と相議し、事已に掌の中にあり、君に知せ申に及ず、たゞ席上にて斬死せとて魏延に計を低語、劍を拔て舞入しめ、手下の勢を分て一人も殘さず討んとす。魏延劍を拔て進み出、かゝる面白き酒もりに音樂なく候程に、某願は劍を舞して一笑に供ふべしとて中央に舞て入。これを見て劉璋が手下の大將直事ならずと思ひければ、從事官張任劍を拔て曰、古より劍を舞には必ず對手あり、某願は伴んとて又中央に舞て入。その志魏延もし劉璋を討ば我又玄德を討んとなり。龐統之を見て劉封に屹と目合すれば、劉封又劍を拔て舞て入。劉璋が手下に冷苞、劉璝、鄧賢なんど云大將みな手毎に劍を拔、吾等も羣舞て座興を添んとて悉く起て舞。玄德大に驚き、劍を拔て席上に立、われ兄弟は乃ち漢室の宗親、今この所に會して喜をなし、互に疑ふ心更に無、鴻門の會にはあらず、何故に劍を舞して亂を爲、早く劍を棄ざる者は我必ず手討にせんと怒り玉ふ。劉璋も甚だ怒り、憎き己等、何故に渚る無禮をなすと云ければ、諸將みな紛々として堂を下る。玄德又堂上に呼上せ一々酒を賜て、吾兄弟は同宗の骨肉なり、今共に大事を議す、豈二心あるべきや、汝等疑ふこと勿れと云玉へば、

玄德陣中に回り玉ひければ、龐統來て問て曰、今日席上君よく劉璋の氣色を見玉ひしか。玄德の曰、劉璋は眞實の人なり。龐統が曰、劉璋は愚誠の人なれども其手下に劉瓚、張任など云る大將共みな疑の心ありて、君を尻目に窺ひ見る、始終いまだ吉凶を知がたし、某願は明日酒宴に事託て劉璋を此處へ招き、幃幕の中に百餘人の兵を藏し置て、君の盃を抛て相圖をし玉ふ時席上にて之を殺し、勢に乘て成都に入ん、然る時は刀の鞘を迯ず弓の弦を張ずして坐ら蜀を定べし。玄德の曰、劉璋は是骨肉の至親、誠の心を以て吾を愛す、況や吾初て此國に來り恩義いまだ立ざるに、若左樣の行を成ば上天容ず下民怨ん、先生の計は覇者と云ども之をせず。龐統が曰、某が申す所は法正いま成都より張松が內應を得て料ふことなり、君必ず遲なはり玉ふこと勿れ。法正も來り見て申けるは、某等が申す所は己が私に有ず、是天の命に順なり。玄德の曰、劉璋は是我弟なり、豈國を奪に忍んや。法正が曰、君の言大に差れり、今若之を取玉はずんば、漢中の張魯元より深き恨あり、必ず來て之を取ん、君今久く此所に住り玉ふべからず、速に圖り玉へ、切に思ふに君はる〴〵と山川の險を經て此國に入玉ふ、進時は功ありて退時は益なし、若狐疑の心を挾で事延引に及なば禍を招の道にして、外に聞て計漏る時は他人必ず之を取ん、那時君いかゞして身を立玉ふべき、不レ如この天より賜ふ時に乘て

け幼を抱て路の岐に袖を列ね香を焚て禮拜す。時に張松が使なりとて密に法正を尋て書簡を呈す。法正披き見て龐統に申けるは、今張松が方より密に書簡を送り、劉璋自ら涪城まで出て迎へ見ゆ、早く之を圖て事を定よと內應す、此時を失玉ふな。龐統が曰、是誠に得がたきの時なり、必ず外に泄し玉ふな、期に臨で計を成ん、早く君に申さば必ず事の變あらん。法正げにもと同じて祕して更に人に語ず。涪城は成都を離ること三百六十里、劉璋これまで出て陣を取、人を出して迎しむれば、玄德手下の勢を涪江の邊に住め、自ら城中に入て劉璋に對面し、共に兄弟の情を敍、禮了て淚を流し、漢朝宗族の義を訴て暫く陣中に回り玉ふ。劉璋諸の大將を顧て申けるは、可笑や黃權、王累等が玄德の心を知ずして妄に疑をなし吾を諫む、吾今玄德を見に眞に仁義の人なり、浩る援を得たる上は何ぞ曹操、張魯を怕るべき、若張松が勸にあらずんば我この援を失んとて、自ら著たる所の綠の袍を脫、黃金五百兩を添て成都へ使を馳て張松に賜ひ、我いま玄德と好を結ぶ上は、枕を高して夜も心安く寐べきなりと云ければ、蜀中文武の大將劉璝、冷苞、張任、鄧賢等申けるは、君さのみな喜玉ひそ、玄德は心根の畏しき者にて、外柔にして內剛し、等閑に度り難し、萬一變あらば後悔すとも及ぶまじ。劉璋笑て曰、汝等も疑ひ多き者共なり、吾と玄德との心を知べからずとて了に內へぞ入にける。

氏内に亂れなば、君いかゞして治玉はん。劉璋喜で曰、御邊が云ところ悉く我心に合へり、早く玄德を迎んとて次の日馬を早めて楡橋門まで出ければ、一人走り來て曰、廣陵の王累自ら繩を用て倒に首を縛て城門の上より下り、一つの手に文を持一つの手に劍を持、もし諫に從ひ玉はずんば自ら其繩を斷て地に落て死んと申候。劉璋その諫文を取よせ披き見に、其文に曰、

益州從事臣廣陵王累、泣血懇告而曰、昔古者堯立二敢諫之鼓一、舜置二誹謗之木一、食レ苦レ口之味一、納二逆レ耳之言一。楚懷王會二盟於武關一、不レ聽二屈原之言一、囚二於秦邦一、吳夫差約二會於黃池一、不レ納二子胥之諫一、誘二於越國一。今主公輕離二大郡一、與二劉備一相二見涪城一、恐有二去路一而無レ囘矣。倘沐レ囘レ心、斬二張松於市曹一、絕二劉備之盟約一、則蜀中老幼萬幸矣、主公之基業萬幸也。惟垂レ察焉。

劉璋見了て大に怒り、吾いま仁義の人と會せんとす、恰も芝蘭に親が如し、汝何ぞ强て諫ると云ければ、王累之を聞て惜かなと叫び、自ら繩を斷て地上に落碎てぞ失にける。劉璋了に三萬の精兵を率して涪城まで出ければ、跡より金銀兵粮を車千餘輛に積で陸續して出來る。此時玄德は先陣已に擊沮と云所に著、路すがら地頭守護人悉く出て持成ければ、手下の勢をいよいよ戒め、號令甚だ嚴にして秋毫も犯ことなければ、行所の百姓その德を慕ひ、老たるを扶

是寇を長ずるの道なり、君之を聽玉ふな。劉璋乃ち黄權を叱て曰、我心すでに決せり、汝いかなれば命に逆ぞ。黄權頭を以て地を叩き、面に血を流して劉璋が衣の裾を口に咬へ、再三爭て諫ければ、劉璋いよ〳〵怒り衣を拂て起けれども、黄權なほ衣を放ず、向ふ齒二つ拽拔てけり。劉璋以の外に怒をなし、武士に命じて門外へ推出さしむれば、黄權大に哭き聲を放て囘りけり。劉璋已に打出んとする時、又一人聲を擧て申けるは、君もし黄權が諫を用玉はずんば忽に害せられ玉ふべし。劉璋これを見ば建寧愈元の人に李恢と云る者なり。心怒て起んとしければ、李恢前に進み頭を叩て申けるは、古より天子に爭ひ諫る臣七人ある時は、無道なりと云ども其天下を失ず、諸侯に爭諫る臣五人ある時は、無道なりと云ども其國を失はず、大夫に爭諫る臣三人ある時は、無道なりと云ども其家を失ず、士に爭諫る友ある時は、無道なりと云ども其身令名を失ず、父に爭諫る子ある時は、無道なりと云ども其身不義に陷ずと云り、今黄權が忠義の諫を用ずして玄德を國の内に引入玉はば、是誠に虎を山林に放なり、何を以てか之を制せん。劉璋が曰、玄德は吾宗兄なり、安ぞ親を棄て疎に向ん、再び諫る者は必ず首を刎んとて門外へ引出さしむ。張松が曰、いま國中の大將みな己が妻子を顧て君の爲に忠を致ことをせず、妄に其功を負て外に向ふの心あり、若玄德を招ずして敵外より攻來り

孔明を呼で共に蜀に赴の計を議し玉へば、孔明申けるは、君蜀に入玉はば荆州又緊要なり、大將を留て諸所の攻口を守しめ玉へ。玄德の曰、われ龐統と黄忠、魏延とを伴ひ行ん、先生は關羽、張飛、趙雲と共に荆州を守り玉へ。孔明これに從ひ、次の日關羽に襄陽を守、靑泥の要害を司らしめ、張飛に四郡を領して江邊を巡らしめ、趙雲に江陵を守て公安を保しめ、孔明荆州の總大將として手分已に定りければ、玄德五萬の精兵を率して黄忠を先陣とし魏延を後備とし、自ら劉封、關平等と中軍を守て已に打起玉ふ所に、襄陽の廖化字は元儉と云もの一軍を引て來り降る。是は先年關羽が千里獨行の時山賊を成て居たりしが、其時深く情ありし故を以て玄德厚く恩賞を施し、關羽に從て共に荆州を守しめ玉ふ。是年の十二月に玄德兵を引て蜀を望で進み玉へば、孟達四千餘騎を率して遙々と出迎へ、某主人の命を受敬で來り迎と云て道の傍に再拜す。玄德まづ使を馳て已に途中まで出たりと劉璋が方へ告玉へば、劉璋大に喜び路々の地頭守護人に觸を廻し、玄德の通玉ふ所は金銀兵粮を備て獻しめ、自ら涪城まで出て玄德を迎んとて、車馬を備へ幔幕武具等に及ぶまで爰を晴と出立ければ、黄權急ぎ見て又諫て申けるは、君もし自ら迎へ玉はば必ず玄德が爲に害せられ玉はん、某久く君の祿を食、此故に坐ら見に忍ず、願は能慮り玉へ。張松が曰、黄權漫に玄德を疑て君の宗族を間んとす、

客屋に入て休息し玉へ、重て此事を商議せんとて、孔明自ら法正を送て客屋に到る。玄德は沈吟して心いまだ決せざりければ、龐統大に笑て曰、事を決せずして其心を惑者は愚人なり、君は仁智高明にして是程の事に何とて御心を惑し玉ふぞ。玄德の曰、御邊の心を以ては此事いかが決し玉はん。龐統申けるは、荊州は人民久く兵亂に逢て悉く零落し、東に孫權あり、北に曹操あり、常に併せ呑んと欲す、今益州は戸口百萬、民榮え土豐にして大業の基を建べし、幸に張松、法正内通の助あり、是天の賜なり、何故に御心を惑し玉ふぞ、吾此故に笑ひ候。玄德の曰、今吾と水火相敵する者は曹操なり、曹操急を以てすれば吾は寬を以てし、曹操暴を行ば吾は仁を行ひ、曹操譎を爲ば吾は誠をなす、萬づ彼と吾と相反す、今小利を以て大義を天下に失んことは吾これを行に忍ず。龐統笑て曰、君の言實に天理と合と申ども、亂國の時を如何がせん、夫兵を用て强を爭は一道にあらず、若禮法に拘る時は寸步も行こと能まじ、宜く權變を用て兵を用べし、且弱を兼昧を攻るは五霸の事なり、逆に取て順に守り、事定て後報ふるに義を以てし、別に大國に封ずる時は何ぞ信に負とせん、今日若取玉はずんば了に他人の物と成ん、權變を以て天下を得、仁義を以て之を守るは古より少しとせず、君よく之を慮り玉へ。玄德謝して曰、先生の言誠に金玉の教なり、吾肺腑に銘じて忘ること無んとて、

璋聞、吉凶相救、患難相扶、朋友尚然、況宗族乎。今張魯在レ北、旦夕興レ兵、侵ニ犯璋界一、甚不ニ自安一、專人謹奉ニ尺書一、上乞ニ鈞聽一。倘賜レ念ニ同宗族之親一、全ニ手足之義一、卽日興レ師勦ニ滅狂寇一、永爲ニ唇齒一、自有ニ重酬一。書不レ盡レ言、專俟ニ車騎一。

建安十六年冬十二月　宗弟劉璋再拜

玄德見了て大に喜び、酒宴を設て法正を持成、左右の人を退て、我久く先生の英名を仰ぐ、向に張別駕多く先生の德を稱す、今幸に逢ことを得たりと云玉へば、法正申けるは、某は蜀中の小吏、豈道に足んや、然ども馬は伯樂に逢て嘶え、人は知己に遇て死すと云り、昔時張松が申し言君果して御心を決し玉ふか。玄德の曰、我一身寄客として假に荊州を保るなれば、心の中常に感傷して、鷦鷯の一枝に巣ひ狡兎の三窟に藏る風情を思ふ、蜀は是富饒の地、われ之を得んことを願ひ思ざるにあらず、如何せん太守劉璋は共に漢室の同宗なるを以て之を奪に忍ず。法正が曰、益州は天府の國にして治亂の主に非んば居べからず、今劉璋賢人を用て事を立ること能ず、剛にして勇なく柔にして甚だ弱し、此國久からずして了に他人の物と成ん、是に依て君に獻る、此時を失ひ玉ふこと勿れ、古の逐レ兎先得の語を聞玉はずや、早々に思ひ立玉へ、某願は命を棄て忠を致ん。玄德謝して曰、若天の助を得ば實に先生の賜なり、暫く

て重ずる時は一國に二人の主なし、君若某が諫を用玉はば國中安して泰山の如ならん、若用玉はずんば累卵よりも危からん、昨日張松荊州より回る、必ず玄德と内通の心あるべし、先張松が首を刎て玄德と交を絶玉はば自ら太平ならん。劉璋が曰、曹操、張魯攻來ば汝之を如何せん。黃權答て曰、不レ如國の境を守り、要害に支て時の淸るを待ん。劉璋申けるは、今張魯界を犯して眉を燒が如きの急あり、若時の淸るを待ば是慢計なり。時に又一人進み出て曰、無用無用、必ず張松が詞を聽玉ふな。劉璋これを見ば從事官に王累と云者なり。前に進み頓首して申けるは、君若玄德を招玉はば自ら其禍を取玉はん。劉璋が曰、我玄德と好を結で張魯が仇を防んと欲す。王累が曰、張魯が仇を爲は是疥癬の疾、玄德を引入るは是心腹の患なり、況や玄德は世に雙なき梟雄にして、始め曹操に事て之を害せんと謀り、後に孫權に從て了に荊州を奪へり、心根の正からざること此の如し、安ぞ國中に招き入べけん、今若之を召ば自滅を取の道なり。劉璋大に叱り、汝等再び舌を搖こと勿れ、玄德は是我宗親、安ぞ國を奪の心あらんとて、了に法正を使として荊州に赴しむ。法正路を急で荊州に到り、玄德に見えて劉璋が書簡を呈す。玄德披き見玉ふに、其書に曰、

族弟劉璋再拜、致ニ書於宗兄將軍麾下一。久伏ニ電譽一、蜀道崎嶇、未レ及レ賫レ貢、甚切惶愧。

孟達
張松法正が
快笑するを見て
深意を識る
法正

孟達
張松

心あり、此故に某いまだ詞を出さず、彼元より蜀を取んとする企あり。劉璋大に驚て曰、若曹操蜀を取の心あらば我之をいかゞせん。張松が曰、某一つの計あり、張魯、曹操を防ぐべし。劉璋問て曰、汝が計いかん。張松が曰、荆州の劉玄德は君と共に漢室同宗の至親にして仁慈寛厚長者の風あり、赤壁の合戰より後曹操も此人を怕る、何に況や張魯をや、君もし書簡を送て好を結び、外の援とし玉はば、蜀中自ら安して曹操も張魯も手ざすこと候じ。劉璋喜で申けるは、我本より此心あり、誰を以て使とせん。張松が曰、法正、孟達にあらずんば此使たること叶まじ。劉璋乃ち二人を呼で書簡を封じ、先法正を使として荆州に行しめ、次に孟達を遣し精兵四千餘騎を引て玄德を迎へしむ。時に一人外より走り來り面に汗を流して大に叫び、君もし張松が詞を聽玉はば此國四十一州悉く他人の物となるべしと呼る。張松驚て之を見ば、西閬中巴の人に黄權字は公衡なり。劉璋問て曰、我玄德と一家の好を結んとす、汝何故に之を止る。黄權が曰、某よく玄德が心を知、この人寛にして人を懐け、柔にして能剛に、英雄天下に敵なく曹操だも猶怕る、其餘は何ぞ論ずるに足ん、殊更此人遠く民の心を得て、孔明が智謀、關羽、張飛が英勇、その外趙雲、魏延、黄忠なんど云る大將は世に怕しき者にて候、今若此所に招き寄て諸大將の列に用る時は、彼安ぞ身を屈して君の下に付ん、若客の禮を以

ぞ報を望んやとて相別れければ、孔明、龐統は皆長亭の下に再拜し、關羽、趙雲等は遠く數十里の外に送る。

○龐統獻レ計取二西蜀一

去程に張松は益州に回て友人法正に出合、われ都に上て朝廷の體を見に、曹操漫に逆威を專にし、賢を侮り士を輕ず、只憂を同うして樂を同し難し、此故に荊州に到り劉皇叔に見て蜀を取玉へと勸たり、專ら御邊とこの事を計べしと云ければ、法正が曰、我元より玄德に仕んことを願ふ、二人の心此の如し、早く孟達を招て此事を語べし。孟達字は子慶、右扶風郿の人にて法正と同鄉の朋友なり。暫く有て出來り、張松と法正とが大に笑ふを見て申けるは、我已に二公の意を知り、此國を他人に獻ん爲か。張松が曰、げにさることありと申ども、御邊試に云玉へ、此國を誰にか獻ん。孟達が曰、荊州の劉玄德にあらずんば叶まじ。張松手を撫て好も一同せりと笑ひければ、法正申けるは、御邊明日劉璋に見て此事をいかゞ云ん。張松が曰、我必ず御邊二人を薦て使とし、荊州に行しむべしとて共に計を定め、次の日張松堂に上て劉璋に見ゆ。劉璋問て曰、汝都に上て事いかゞ定たる。張松が曰、曹操は漢の逆賊、天下を奪の

るに曹操漫に逆威を振ひ、姦雄にして君を欺く、久からずして漢朝の大なる禍を成ん、君まづ蜀を取て基とし、次に漢中を攻とり、其後に中國を取て再び漢室を興して天朝を正し玉ふ時は、名青史に記して萬代に及ぶべし、君果して蜀を取んとの心あらば、某願は犬馬の勞を施し、内應して助べし。玄德の曰、深く先生の恩を感ず、我今國を貪りて同宗と戰を成ば、天下の人必ず笑ひ罵らん。張松が曰、君天の時と人の事とを知玉はずや、若人の事を以て天の時に背ば、恐は日月空く暮ん、大丈夫の世に處、まさに努力て功業を立人より先に鞭を著べし、今若時に乘て取玉はずんば、必ず他人に取れて後悔すとも及ぶまじ。玄德の曰、われ聞蜀の道は千山高水峨々として車は軌を方こと能ず、馬は轡を聯ることを得ずと、若之を取んには如何なる計をか用ふべき。張松箱の中より一巻の繪圖を出して申けるは、某深く君の恩德を荷ふ、此故に之を獻る、若この圖を御覽候はば自ら蜀道の地理を知玉ふべし。玄德披き見玉へば詳に地理を寫して行程の遠近、地形の廣狹、山川の險要、府庫錢粮戶數に至るまで一々に明白なり。張松又曰、君速に思し召立玉へ、某深く交る心友二人あり、法正字は孝直と、孟達字は子慶と也、若此二人こゝに來ば萬づ某が如くに事を議玉へ。玄德手を拱して謝して曰、青山老ず綠水長存す、他日必ず先生の恩を報ぜん。張松が曰、某今仁義の主に遇て情を盡して申ずんば有ず、安

て曰、先生の詞われ安ぞ之に當んとて、張松を留て三日が間酒宴し、了に蜀のことを問玉はず。張松別れて出ければ、玄德自ら十里亭まで送り、盃を擧て張松に與へ、我甚だ大夫の棄玉はざる恩を蒙る、已に三日交を結で早々に相別る、又何の時にか教を聽ことを得んと云て潸然として涙を流し玉ふ。張松心の中に思けるは、玄德は堯舜の風あり、今これを捨に忍ず、不如此人に蜀の國を獻んとて、乃ち告て申けるは、某も朝暮に近侍して犬馬の勞を致ざることを恨む、某荊州を見に東に孫權あり、常に鯨呑の志をなし、北に曹操あり每に虎踞の威を示す、久く戀の地にあらず。玄德の曰、我本より之を知ども身を安ずべき所未だ得ず。張松が曰、西蜀の地は四方みな險阻にして沃野千里、民殷に國富、帶甲十萬にして天府の國なり、智能の士みな皇叔の德を慕こと久し、若今荊州の兵を引て此國を取玉はば、漢室を興さんこと日前にあり。玄德の曰、我爭か然ることを得ん、太守劉璋も亦これ漢室の宗親にして久く蜀の國を保ち、恩澤を百姓に布施す、他人安ぞ之を動ことを得べけんや。張松が曰、某は主を賣て富貴を求ん爲にあらず、今君の德を感じて肝膽を披き瀝、主人劉璋久く蜀を保と申ども、天性暗弱にして賢人を用て國を治ること能ず、加之張魯北の方漢中に在て文武を知ず賞罰を正ず、人の心悉く離て有德の君を得んことを願ふ、某この度都に上りしは專ら曹操に蜀を獻んとの心なり、料ざ

趙雲孔明が謀を承て恭しく張松を迎ふ
張松

趙雲

を見て盡く馬より下ければ、張松驚き前に進で禮を施す。玄德の曰、我久く大夫の高名を聞て雷の耳に灌が如し、恨らくは雲山路遙にして未教を聴こと能ず、今都より國に回り玉ふと聞て專ら此に相迎ふ、幸に若棄玉はずんば荊州に伴ひ行て、片時渇仰の情を敍ん。張松大に喜び馬を雙て荊州に入ければ、玄德席を設て厚く持成、只尋常の物語して態と蜀中のことを問ず、又劉璋が安否をも云ず、酒宴數刻に及けり。張松も玄德蜀の事を問玉はば從て答んと思ひけれども始終その問なかりしかば、怺かねて張松まづ問て申けるは、今皇叔荊州を守り玉ふ、州郡の數いか程か候ぞ。孔明答て曰、荊州は吳の孫權より暫く借たる地にて候、玆に因て累に取返さんと申せども、我主人いま孫權の壻たるを以て權に暫く身を寄るなり。張松が曰、吳の孫權は江南八十一州を橫領して民強く國富り、しかるに猶其心足りとせず、荊州をも吞んとするか。龐統が曰、我主人は漢朝の皇叔なれども、却て國を保こと能ず、其餘は皆漢の逆賊漫に力を以て州郡を押領するなり。玄德の曰、無用の事な宣そ、我何の德ありて妄に高位を望み州郡を領せんや。張松が曰、天下は一人の天下にあらず、乃ち天下の人の天下なり、惟德ある者よく天下を保つ、何に況や君は是漢室の宗親にして仁義已に四海に及ぶ、高位に登り州郡を領じ玉ふことは申に及ず、正統を繼で帝位に即玉ふとも誰か之を不可なりとせん。玄德手を拱し惶恐し

漢室の皇叔にして、仁義久しく四海に聞ふ、今我直に荊州に到り、此人を試て別に思案を運さんとて馬に打のり、從者と路を急で荊州の界を望み前で郢州に近付ければ、向より一隊の軍馬四五百騎が程出來り、眞先なる大將馬上より問て曰、此に來るは蜀の張別駕にては無か。張松答て曰、我は是蜀の張松なり、御邊は如何なる人ぞ。彼大將これを聞て急ぎ馬より飛で下、趙雲久しく此所に待て候と申す。張松問て曰、荊州の趙子龍にて候か。趙雲が曰、某主人玄德の命を承、大夫の遠く險阻を馳て若此路をも御通あらば、酒食を奉て旅程の勞を慰め、國の境まで送り申せとて某をして迎しむとて、士卒に命じて酒肴を捧出し、自ら地に跪て謹で之を進めければ、張松心の中に思けるは、人皆玄德は寛仁にして客を愛し玉ふと云しが、今果して此の如し、さるにても曹操は謾に人を輕じて禮義を知ぬ奸賊なりとて、遂に趙雲と數杯を傾け共に馬を雙べて荊州の界に到り、日已に暮に及で驛館の前に著ければ、門外に百餘人二行に分れて侍立し、鼓を撃て相迎へ、一人馬の前に進み禮を施して申けるは、某は荊州の大將關羽なり、主人玄德の命を受驛館を掃て大夫を迎しむ。張松馬より下て館中に入ければ、關羽酒宴を設て終夜持なす。次の日驛館を出て關羽、趙雲を伴ひ、馬を進て五六里ばかり行ければ、向より一簇の人馬出來り、眞先なるは漢の劉皇叔、左に伏龍あり右に鳳雛あり。遙に張松が來る

松猶少も怕ず。時に曹操申けるは、我天下鼠の輩を見こと芥の如し、大軍の向ふ所戰に勝ずと云ことなく、攻るに取ずと云ことなし、我に順者は生我に逆ふ者は死す、たゞ能人を用て富貴ならしむるのみにあらず、又能人の九族を滅す、汝之を知たるか。張松が曰、げにも丞相の兵を率して向ふ所、戰へば必ず勝攻れば必ず取玉ふこと我元より之を知り。曹操が曰、汝已に之を知ば何ぞ我に服せざる。張松が曰、丞相昔濮陽に呂布を攻、宛城に張繡と戰ひ、赤壁に周瑜を怕れ、華容に關羽に逢、潼關にて鬚を割袍を棄玉ひしこと、是皆天下に無敵成べし。曹操大に怒り、憎き腐れ儒者、何とてわが舊き失を云て恥を與る、早く引出して首を斬と云て武士に命じければ、楊修急に諫て曰、いま張松が罪斬て棄べしとは申ども、蜀道の難所を經て遙遙と御貢を捧來れり、今これを殺し玉はば、恐は蠻夷の心を傷ん、知者は此人不遜の詞を出して斬れたりと申し、知ざる者は丞相彼が禮物の少を以て殺し玉へりと沙汰すべし、願は命を助て回し玉へ。曹操なほ怒りの氣休ざりしかども、荀彧又強て諫し故、纔に命ばかりを恕して亂棒に打出す。張松門外に打出され、空しく國に回んとしけるが、心の中に思けるは、我本曹操に蜀の國を獻んとて來しに、何ぞ料ん人を輕じて此の如く無禮なるべしとは、我已に國を出る時諸人の前にて大言を出せり、今もし徒に回りなば諸人の物笑たるべし、荆州の劉玄德は

忍で用玉へり、今何ぞ張松を棄玉ふ。曹操が曰、禰衡は其文章世に播す、我この故に殺に忍ず、張松は又いかなる能かある。楊修が曰、此人海を倒にし江を飜の辯、風を嘲り月を弄の才あり、適に丞相の撰し玉ひし孟德新書を一度見て卽ち能暗じ誦、一字の差なくして水を瀉が如し、浩る博聞强記の才は世に罕なることにて候、彼此書は昔戰國の時に無名氏の作る所にして蜀の國には三尺の小兒も能暗じ誦と申候。曹操が曰、我此書を撰す、自ら古人と暗に合たるもの成んとて、扯裂て其書を燒しむ。楊修が曰、彼再び丞相に見んと願ふ、丞相願は對面ありて大國の氣象を知しめ玉へ。曹操が曰、此人遠く來て我兵を用ることを知ず、是に依て大言を出す、明日われ西教場に出て勢揃を成ん、汝まづ張松を伴ひ來て、我大將士卒の壯なるを見せしめよ、我まづ吳を平て次に蜀を滅ん。楊修命を受て次の日張松を引て西教場に出ければ、曹操自ら虎衞の雄兵五萬餘騎を率して四方八面に隊伍を亂さず備を立、甲袍燦爛として戈戟の光霜を凝し、旌旗風に飜りて人壯に馬强し。張松目を斜にして良久く之を見に、曹操前に召て問て曰、汝が蜀の國に浩る英雄の士卒ありや。張松答て曰、我蜀の國には丁に此の如き兵革を見ず、但仁義を以て天下を治んと欲す。曹操これを聞て心の中大に怒り、俄に色を變じけれども、張松昂然として全く怕るゝの意なく、目を斜にして相凌の氣あり。楊修頻に目合すれども、張

卷の書を出して張松に觀しむ。張松これを見ば外に孟德新書と題せり。首より尾に至るまで遍く觀に、共に十三篇にして、皆これ兵法の要道なり。張松看了て問て曰、この書を如何なる物と思ひ玉ふぞ。楊修が曰、是は曹丞相の古を酌で今に準へ、孫子十三篇に擬して作玉ふ書なり、是に依て孟德新書と號す、御邊いま丞相を不才なりと云、この書を以て其大才を知、豈後代の模範ならずや。張松笑て曰、この書は吾蜀の國三尺の童子も能之を暗誦、何ぞ此を新書と云ん、是は昔戰國の時に作り出せる書にして、作者の名を知者なし、曹丞相密に盜で己が能とし、好も御邊を欺き玉ふなり。楊修が曰、丞相この書を秘藏していまだ曾て他人に見玉はず、然るに御邊の國に三尺の童子も暗誦とは何とて詐を云玉ふぞ。張松が曰、われ何ぞ詐ん、御邊もし疑の心あらば我試に暗誦ん。楊修が曰、願は一返を聞ん。張松乃ち孟德新書を誦に、首より尾に至るまで一字も差ふこと無りければ、楊修大に驚き、席を下て再拜し、御邊一覽して一字も殘さず諳じ玉ふかと云て、二人手を拚ちて笑ふ。楊修心の中に張松が大才を奇なりとし、御邊暫くこの所に居玉へ、某丞相に申して再び對面せさせんとて、相府に行て曹操に見え、適に丞相何とて蜀の使張松を慢玉ふぞと問ければ、曹操が曰、その容醜して詞の內我を譏意あり、我此故に喜ず。楊修が曰、若貌を以て人を取ば恐は天下の士を失ん、丞相昔禰衡をさへ

て歳に水旱の憂なく、國富民榮て時に管絃の樂あり、土産の阜なる、山の如に積で天下何れか是に及ん。楊修又問て曰、蜀中の人物願は其詳なるを聞ん。張松が曰、文に相如が賦あり武に管樂が才あり、醫に仲景が能ありトに君平が隱あり、九流三教その數に出て、其萃を抜もの勝て數を記し難し。楊修又問て曰、いま御邊の國大將たる人幾かある。張松が曰、文武兼そなはり智勇共に全く、忠義慷慨の士百を以て數ふべし、某が如き不才の輩は車に載斗にて量るとも其數を知べからず。楊修又問て曰、御邊いま如何なる職ぞ。張松答て曰、濫に別駕の職を務む、不才にして身に稱ず、抑又御邊は今いか成職ぞ。楊修答て曰、われ丞相府の主簿なり。張松が曰、われ久く御邊の大名をきく、數代簪纓の家にして父祖悉く輔相の位に登り玉へり、何ぞ御邊は廟堂の上に立て天子を佐け四海の政を專にせずして、纔に賤き丞相門下の主簿にて居玉ふぞ。楊修これを聞て心の中に慚愧し、顏を赤して答て曰、われ卑き官に居と云ども丞相常に軍中兵粮の重任を委せ玉ふ、殊に日夜傍を離ずして丞相の教を蒙る、是に依て此職を務む。張松あざ笑て曰、われ聞曹丞相は文以て孔孟の道を明ず、武以て孫呉が機に達せず、專ら威を以て強霸の道を務玉ふと、安ぞ御邊に教玉ふこと有ん。楊修が曰、御邊は邊隅の蜀に居して安ぞ丞相の大才を知ん、我今御邊に知しむべしとて、左右の人を呼で箱の中より一

魯あり、中に立德あり、其外十萬二十萬の勢を集て盜賊をなす者その數を知ず、安ぞ太平と申べき。曹操これを聞て心の中怒を發し、まづ張松が人物惡して容甚だ賤を見、又その詞の內我を衝意ありと思ければ、急に座を起袖を拂て後堂へ入にけり。左右近侍の者共興を醒し、汝いま外國の使として此に來り、詞を以て丞相の御心を怒らしむ、幸に丞相の寬仁なるを以て遠方の人を面のあたり責玉はず、汝早々に回れと云ければ、張松あざ笑うて、我蜀の國には媚諂ふ佞人は無と云。時に階下より一人進み出て、汝が國に諂佞の人なくんば我都の中に諂佞の人あるべきかと云者あり。張松これを見ば神貌淸白にして眉薄く眼細き、乃ち弘農の人にて大尉楊彪が子、司空楊震が孫、一門に六相三公を出す楊修字は德祖とて曹操が門下の郞中にして、內外倉庫の主簿たり。時に年二十五歲、元より博學にして辯舌を巧にし、智識敏捷にして天下の人を屑とせず。今張松が詞の內に譏を含む意あるを聞て自ら迎て書院に出、賓主を分て坐定り問て申けるは、蜀道は險阻にして御邊遠く苦勞を經玉はん。張松答て曰、君の命を受ては豈萬里の遠きを辭すべけんや、湯に入火を蹈と云とも我何ぞ之を厭ん。楊修問て曰、御邊の國我願は地理を聞ん。張松答て曰、それ蜀は西郡たり、古の益州にして路に錦江の險あり、地は劍閣の雄に連り、廻り二百八程、縱橫三萬餘里、雞鳴狗吠相聞て市井閭閻少も斷ず、土肥地茂

に翼を添るなり、その時いかゞして戰ひ玉ふべき、不如馬超が彼に從ず、漢中の備なきに乘て速に攻玉はば、一鼓して破りつべしとて此等の利害を説、機に隨て變に應ぜば、曹操必ず許容すべし、今もし延引して張魯すでに攻來る時は、蘇秦、張儀が辯ありと云とも曹操又從じ、之を悔るとも遲からん。劉璋大に喜び、金珠錦綺を調て禮物を備へ、乃ち張松を使として都に赴しむ。張松心の中に兼て深き所存ありければ、密に西蜀四十一州の地理を繪圖に寫し、從者十騎ばかりを引て都に上る。路にて此由を聞ものあり、早く荊州へ報じて孔明に告知せければ、孔明兼て蜀を取んとの心あり。今張松が魏に行と聞て、密に人を遣し都の消息を尋ね聞しむ。去程に張松は直に都へ上て驛館の中に留り、毎日相府に伺候して曹操に見んことを求む。此時曹操は鄴都より回て彌逆威を擅にし、物表に傲睨して天下の政務を心とせず、日夜酒宴して外に出ることなく、只聲色にのみ溺れ居たり。此故に第三の日張松姓名を通ずることを得て左右近侍の者先賂を貪り、日を經て曹操に見しむ。曹操堂上に坐して張松再拜して前に立ければ、乃ち問て曰、汝が主劉璋は何とて數年御貢を獻ざる。張松答て曰、蜀道天下の險阻にして容易く越がたく候に、盜賊多く害をなす、是に依て御貢を怠り。曹操叱て申けるは、我中國を掃ひ清めて坐ら四方を治む、何故に盜賊の害あらん。張松答て曰、南に孫權あり北に張

を勧して張魯が兵を退くべし。諸人これを見ば益州成都の人に張松字は永年なり。此人身の長五尺に滿ず、鼻塾て齒露れ、頭尖て額は鑵の如く、聲大にして鐘に似たり。今蜀の別駕に任ぜらる。劉璋問て曰、汝いかなる計かある。張松が曰、某承る、魏の曹操は已に中原を掃ひ淸めて呂布二袁を滅し、南は江漢を平げ北は幽燕に抵る、近比馬超を破て天下に敵する者なし、君いま禮物を進めて曹操を賴玉はば、某願は都に行て曹操に見え、大軍を以て張魯を伐しめん、然る時は張魯爭か蜀を望ことを得ん。劉璋が曰、汝已に去ぬる建安十三年の冬荊州に行て曹操に見え、彼が人を輕んずることを恨む、今又行んと云は何ゆゑぞ。張松が曰、曹操荊州に在し時は手下に百萬の勢あり、事の多きこと蝟の集が如し、安ぞ人を持成に暇あらん、今都の內に在て文武の群臣おの〳〵事を執行ふ、某利害を以て說ならば、曹操必ず大軍を引て張魯を伐ん。劉璋が曰、われ今試に汝が曹操に說べき利害を聞ん。張松が曰、某が曹操に說べきは、馬超は英雄人に勝て韓信、黥布が勇あり、丞相は父を殺せる讐、いま暫く戰ひ敗ると申ども後必ず讐を報ぜん、今漢中の張魯兵精く粮足り、百姓これを尊で漢寧王とす、久からずして必ず又帝位を僭すべし、若帝位に卽ば必ず中原を犯ん、然れども其手下に好大將を欠、馬超若急に讐を報ずるの心あらば、必ず隴西の兵を集て張魯に從ん、張魯もし馬超を用る時は、是虎

施す。是に依て三十餘年すでに巴蜀の地に雄據すと云ども、天下亂て國遠ければ征伐すること難して、却て張魯を鎭南中郎將に封じて漢寧の太守を領せしめ、毎年御貢を獻らしめ玉ふ。此時漢中の百姓地を掘て一つの玉璽を得たりしかば、卽ち張魯に進めて曰、近ごろ西涼州の馬超破て曹操いよ〱逆威を專にし、劍を帶履を踏で朝廷に出、必ず又この所へ攻來べし、師君願は漢寧王の位に卽、これを防の備をし玉へ。時に閻圃と云もの進み出て申けるは、漢川の民戸數十萬に餘りて、財豐に糧足り、況や四方みな險阻にして、一夫之を守る時は萬卒も通ることを得ず、もし上天子を匡時は桓文となり、次は竇融に及ぶべし、今馬超破て西涼州の百姓奔て、子午谷より漢中に移る者數萬家に及べり、蜀の劉璋は才なく智昏して國を守ること能ず、まづ兵を起して蜀の四十一州を取て本とし、其後に王位に卽玉へ。張魯大に喜び、弟張衛を大將として蜀を攻んと企をなす。蜀の劉璋と申は字は季玉、元これ漢の魯恭王の後胤にして劉焉字は君朗が子なり。曾て張魯が母竝に弟を殺しければ、是より互に仇を結び、大將龐義と云ものを巴西の太守として常に張魯を防しむ。此時龐義急を告て、張魯兵を興して攻來んと企ると報じければ、劉璋平生懦弱にして大臆病なる故、この注進を聞て心の內大に怕れ、急ぎ諸大將を集て評議をなす。時に一人進み出て曰、君御心を安じ玉へ、某不才なりと云ども、三寸の舌

○張松入魏難楊修

この比漢中に張魯字は公棋と云者あり。其祖父張陵と云し者蜀の鵠鳴山に在て道書を作り、世の人を惑しければ、人甚だこれを敬ふ。張陵已に死して其子張衡この道を行ひ、若道を學ぶ者あれば米五斗を出さしむ。是に依て世の人みな米賊とぞ號しける。張衡すでに死して張魯又この道を行ひ、漢中に在て自ら師君と號し、來て學ぶ者を皆號して鬼卒と云。其首たる者を祭酒と號し、大勢の衆を領する者を治頭大祭酒と號す。其務は誠の心を以て詐なきを本とす。若病る人あれば行て壇の前なる靜室に入、自ら己が過を思て當面に之を懺悔せしむ。禱を求るの法は病人の名字を書て罪に服するの意を說、三通の文を造て一通は山の頂に擧て之を天に奏し、一通は土に埋で地に奏し、一通は水底に沈て水官に申し、これを三官と名て手づから書時は其病全く痊ることを得たり。米五斗の賂を以て義舍を蓋ひ、舍内に米柴肉を貯へ置、往來の人これを食するに、若多時は天の罰を受。法を犯せる者を先三度恕して改ざれば、其後に刑を

と云ども人の心一ならず、兵多く大將累しければ、陣中治らずして一戰に滅べし、我この故に喜びたり。諸將拜謝して曰、丞相の機謀尋常の及ぶ所にあらず。曹操が曰、われ諸將の力を頼で幸に勝ことを得たりとて、重く恩賞を施し、夏侯淵を長安に留て境を守らせければ、夏侯淵が曰、某命を受て此所を守る、馮翊高陵の人に張旣字は德容と云人あり、之を用て京兆の尹とし、共に長安を守るべし。曹操然るべしとて卽時に張旣を召出して京兆の尹とし、兵を收て都に回りければ、獻帝自ら鑾輿に召れ、廓を出て迎へ玉ひ、曹操を貴んで贊拜に名を云ず、朝に入て趨ず、劍を帶履を踏で殿に上り、漢の相國蕭何が如せよと許し玉ひしかば、曹操が威勢いよく振て內外みな怕れずと云ことなし。

守らば、馬超自ら亡ぶべし。曹操しかるべしと許しければ、揚阜が曰、丞相いま都に回り玉ふとも、大勢を長安に殘し留めて後日の援とし玉ふべし。曹操が曰、われ已に其備あり、汝心を安んぜよと云ければ、揚阜わかれて出にけり。諸の大將問て曰、初め馬超が勢潼關に據て渭水の北は路絶たり、丞相河の東より馮翊を擊玉はず、反て潼關を守りて徒に日を送り、後に河より北に渡て陣屋を造り、固く守りて動き玉はざるは何ゆゑぞ、願くは敎へ玉へ。曹操が曰、馬超はじめ潼關を守る、我もし直に河より東に向ひなば、馬超が勢よく諸處の渡を守らん、然る時は河西へ渡ること能じ、われ是ゆゑに盡く兵を引て偏に潼關を攻る體をなし、馬超に力を盡して南を守らしむ、此に因て河より西には敵思ひも寄ず、守る兵をも置ざりしゆゑ、徐晃、朱靈たやすく渡て敵の後を遮ることを得たり、我その後北に渡り車を連て陣を構へ、岸に沿て堤を築せ、氷の城を築て敵に我弱を知せ、其心を驕しめて其備なきを窺ひ、間諜の計を用てよく兵の力を養ひ、一旦これを討て敵に膽を冷さしむ、是疾雷不レ及レ掩レ耳と云の計なり、兵を用ふるの變化一道を以て論じ難し。諸將又問て曰、丞相初め敵の大勢加はるを聞て喜び玉ひしは如何なるゆゑぞ。曹操が曰、涼州は國遙に隔て地險阻なれば、動すれば王化に背く、この故に征伐せんとするに、要害堅固にして一二年には平げ難し、今こと〴〵く來り聚る

を分たず急に追掛て討とれ、若その首を取きたらば千金を賞し萬戶侯に封ぜん、生取きたらば大將軍の次とせん、怠こと勿れと下知しければ、諸の大將われ先にと追かけ、喊の聲天地を碎く。馬超は身も疲れ馬弱て拒ぐべき力なく、相從ふ兵も次第に減じて步立なる者共は盡く活どらる。曹操が大勢跡を慕ひ急に追かけしかば、又取て囘して大に戰ひ、蒐出て御方を見れば、只三十騎に討なさる。龐德、馬岱は散々に揉立られ、隴西臨洮を望んで逃去ければ、曹操自ら安定まで追かけ、馬超が遠く落のびたるを見て兵を收て引囘し、已に長安まで來りければ、都より荀彧が早馬到來し、早く兵を收て囘り玉へと催促す。是に依て曹操もろ〳〵の大將を呼集めけるに、韓遂は左の手を斬落されて殘疾の人となる。曹操乃ち西涼侯の職を授て長安に留めおき、楊秋、侯選等を列侯に封じて渭水の口を守らせける。時に涼州の參軍揚阜字は義山と云ものあり、本天水郡の人なり。長安に來て曹操に見えて曰、馬超は韓信、英布が勇ありて深く羌胡の心を得たり、今葉を芟て根を絕玉はずんば、他日氣力を養ひ成て又大に蔓らん、ねがはくは丞相よく思ひ玉へ。曹操が曰、われ久しく此所に在て都の中心元なく、南方に事多し、久しく此に留るべからず、御邊よく我ために西涼州を守れ。揚阜が曰、尊命いかでか背ことを得ん、此に韋康と申す人あり、若これを以て涼州の刺史とし、某と共に兵を領して冀城を

り。時に夜も若々と明て西涼の大將李堪一軍を引て馬超を討んと追きたる。馬超これを見て馬を取て回し、槍を撚て蒐りければ、李堪怕れて逃わしる。時に曹操が大將于禁背より攻きたり、弓を挽て馬超を射たりしが、馬超早く弦音を聞、身を側めて避ければ、其矢馬超をつと射越て前なる李堪が背に中り、馬より倒に落て死にける。馬超これを見て急に馬を回し、又于禁に突て蒐れば、于禁怕れて逃わしる。馬超橋の上に陣を取、おくれ馳の御方を待合せんとすれば、曹操が大軍前後より取まき、許褚自ら虎衛の軍を引て眞先に進み、雨のふる如く矢を放つに、馬超槍を以て打落して恰も蝗の飛が如し。馬超兵を引て半は河に漬り、勇を振ひ力を盡して討破らんとすること六七度に及びしかども、敵の圍厚ければ叶ずして又橋の上に引回す。曹操が大軍次第に近付、弩をつるべ放て、漸く危く見えければ、馬超をつと喚て大勢の中に突て入。相從ふ西涼の勢みな諸處に隔られて盡く討れしかば、馬超とても逃れぬ所と思ひ、只一騎大勢を蒐やぶり路を尋て出んとするに、弩に射られて馬より落、已に討れぬべく見えたる所に、忽ち西北の方より一手の勢殺到し、眞先に進は龐德、馬岱なり。馬超を救て馬にのせ、一方を打破て西を指て落ゆきければ、曹操この由を聞て問て曰、馬超が兵いか程かありし。一人答へて曰、千騎には過候はじ。曹操が曰、しからば何ほどのことか有ん、汝等もろ〳〵の大將日夜

將と曹操に降參し、將軍を殺んと計り候と告ければ、馬超いよ〳〵怒り、自ら五六騎を從へ龐德、馬岱を後ぞなへとして韓遂が陣に行、馬より飛下油幕の內を見れば、韓遂五人の大將と計を相議して、楊秋申けるは、事延引すべからず、速に行べし。馬超こらへず劍を拔て躍り蒐り、賊等なにゆゑに我を害せんとは料るぞと云て韓遂が眞甲を破んとするに、韓遂大に驚き、左の手を以て拒んとすれば、其手肩より斬落されたり。五人の大將みな刀を提て討て蒐りければ、馬超退て油幕の外に出、火を散して攻戰ふ。五人の大將馬超を圍で喚き叫で戰ひけるが、馬玩すでに馬超に斬れて死にける。四人の大將なほ退かず戰ひければ、馬超勇を振て又梁興を砍倒す。殘る三人の大將これに怕れて逃去ければ、馬超又油幕の中に內、韓遂が首を取んとするに、諸軍救て已に外に出たり。此に因て油幕の外へ飛出ければ、忽ち二箇所に火の手を揚て喊の聲大に振ふ。馬超すでに馬に乘て四方を見れば、限なき大軍四角八方より渦まき出、龐德、馬岱と散々に戰ふ。時に四方より火を掛鐵砲地に響て曹操が勢みだれ入。馬超膽を冷し兵を引て蒐出んとすれば、許褚眞先より討て蒐り、後より徐晃、左より夏侯淵、右より曹洪潮の湧が如に攻來り、おつ取こめて餘さじと揉だりしかば、西涼の勢大に亂て討るゝ者數を知ず。馬超は大勢に蒐隔られ、龐德、馬岱も見えざりければ、自ら百騎ばかりを引て渭水の橋に蒐出た

意を以て思ふに、不レ如曹操に降參して長く身の安きことを量り玉へ。韓遂が曰、われ馬超が父と兄弟の好あり、安んぞ曹操に降るべき。楊秋が曰、馬騰都にて謀反を起し、已に曹操に討れたり、今將軍なにゆゑに逆臣の子を助玉ふぞ。韓遂が曰、しからば汝が意見に從ふべし、誰か曹操に此由を報ずる者あらん。楊秋が曰、某ねがはくは行んとて、卽時に書簡を取て曹操が陣に行降參の由を告ければ、曹操ひそかに喜び韓遂を西涼侯に封じ、楊秋を太守に封じて、其外の大將こと〴〵く恩賞ありければ、楊秋恩を謝して本陣に回り、韓遂に逢て曹操が厚く敬よしを語り、今夜火を付て馬超を內外より攻、曹操が兵を引入て共に馬超を生取んと云ければ、韓遂大に喜び、潛に曹操と合圖を定め、乾ける柴を用意して兵の手分を備へ、五人の大將も劍を帶て側に侍立し、酒宴を設て馬超を招き、席上にて殺すべしとて計を定めけるが、馬超元より心に疑をなせば、招とも輕々しく來らじ、如何よき計やあるとて相共に評定す。曹操は火の手を揚るを合圖に盡く蒐れとて、騎馬の精兵を處々のつまり〳〵に伏おき、今や今やと待蒐たり。馬超は心の內に深く韓遂を疑ひ、兼て間者を付て窺はせけるに、今日の氣色直事ならずとて急に告きたりたり。馬超これを聞て心怒り、卽時に龐德、馬岱を呼、汝等軍馬を備て用心せよ、必ず事の急なること有んと云ところに、一人走り來り、只今韓遂五人の大

に曹操あやまりて草藁を封じて送るならん。馬超が曰、わが心更に解ず、曹操は容易に事を成ず、世に雙びなき姦雄なり、何ぞ錯て草藁を送るべき、我本誓て汝と力を併せ、共に曹賊を討んと約せり、今なにとて心を變じたる。韓遂が曰、御邊さほどに我を疑はば、明日われ陣を出て曹操を呼で對面せんと詐り、二人先日の如く馬を雙べて語るべし、御邊は傍に藏居て只一槍に曹操を突殺し玉へ、然る時は吾心の信を露すならん。馬超が曰、もし然らば我心の疑を晴すべし。次の日韓遂自ら李堪、梁興、馬玩、楊秋、侯選なんどを從へ、馬超を傍に伏て、人を曹操が陣に遣し、韓遂將軍ねがはくは曹丞相に對面せん、自ら馬を出し玉へと云ければ、曹操これを聞て曹洪を呼よせ、密に計を低語けるに、曹洪計を受自ら數十騎を引て陣を出、近近と韓遂が前により、馬上より禮を施して曰、曹丞相昨夜將軍の送り玉へる書簡の意を見て甚だ喜をなし玉ふ、必ず悞玉ふなと云すて、馬を回して城中に入ければ、馬超この體を見ていよ〳〵怒り、槍を提て躍り出、汝曹操と心を合せ我を欺て殺さんとするかと云て韓遂に突て蒐るを、五人の大將遮り止めて陣中に伴ひかへる。韓遂再三詐なき由を云ども馬超さらに信とせず、大に怒て去ければ、すべき樣なく五人の大將と此事を議するに、楊秋が曰、馬超つねに己が武勇に傲て將軍を凌心あり、若曹操に勝ことを得ば却て將軍を輕んずべし、某愚

其内の文字を朦朧にして肝要と思しき處は或は刓て書改め、又は雌黄なんどを塗て衒ひ飾り、能封じて韓遂が陣に遣し玉はゞ、韓遂これを見て心驚き怪まん、然る時は馬超その氣色を疑ひ、必ず書簡を求て之を見るべし、若肝要なる處を書改めたるを見ば必ず深く韓遂を疑ひ、吾に知せじが爲に斯改めたりと思ふべし、然る時は向に馬を雙て物語し玉ひし計に能應じて、馬超が心の内疑ひ怪むべし、疑ふ時は陣中必ず亂を生ず、其亂に乘て密に間諜の計を行ひ、韓遂が手下の大將を御方に懐て、必ず馬超を活捕べし。曹操手を拍て喜び、卽時に自ら書簡を調へ、事の有べしと思しき處を書改め、能々封じて態と怪げなる使を仕立、韓遂が陣に遣して馬超が聞知樣にぞしたりける。案の如く此ことを馬超に告る者あり。只今あやしげなる人よく封じたる書簡を持て、韓將軍の陣に來れりと云ければ、馬超甚だ猜ひ、逕に韓遂が陣に行て問て曰、いま書簡の來りしは如何なる故ぞ。韓遂が曰、只曹操が音信を通ずる書簡なり。馬超その書簡を求て開き見るに、諸所を刓て書改め、故あらんと思ふところ朦朧にしてさだかならざりければ、怪て問て曰、なに故に斯文字を改め玉ひし。韓遂が曰、われ其ゆゑを知ず、原より此の如にして送り來れり。馬超が曰、なんぞ草藁を以て人に送ると云こと有ん、是は必ず我等が來て見んことを怕て、早く書改めて置玉ふならん。韓遂が曰、御邊なに故に疑ひ玉ふぞ、推量する

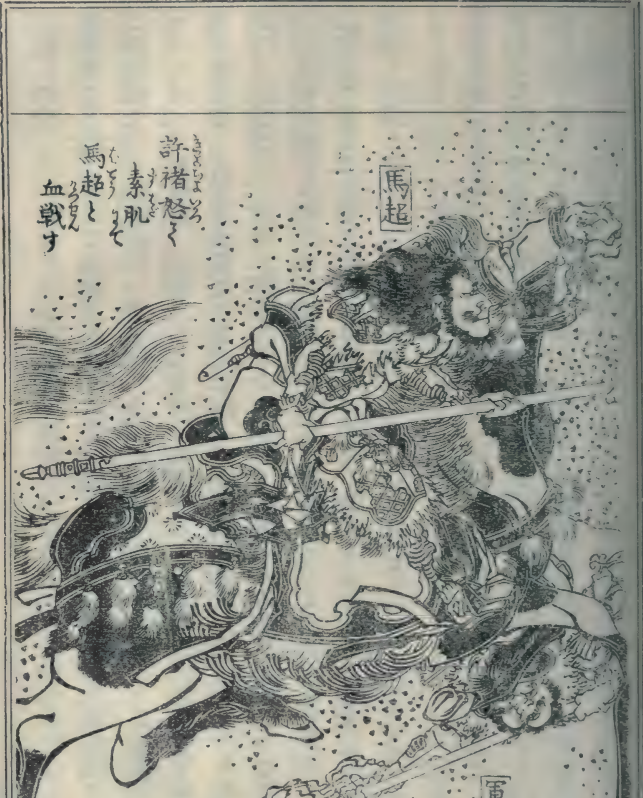
願くは只一人これへ御出候へ、我も甲を棄刀を解て一人陣を出て對面せんと云つかはしければ、韓遂自ら甲をも被ず曹操が陣の前に出たり。曹操近々と馬をよせ、疎遠の情を述て申けるは、吾將軍の父と共に孝廉に擧られ、吾叔父の禮を以て之に事たり、吾又將軍と共に官に進み、不覺年月を送りたりしが、將軍いまは歲幾ぞ。韓遂答て曰、某すでに四十歲なり。曹操が曰、むかし都にて共に青春の少年たりし時、風景を尋て興ある遊を成けるが、早中老に成けるか、いつか天下の太平を得て共に心安く樂べきとて、昔今の物がたりに一時あまり馬を雙べ、大に笑て別ければ、或人この由を馬超に報ず。馬超は此日徐晃が方を守て河より西に居たりしが、この事を聞て早々に馳かへり、韓遂に問て曰、今日曹操と馬を雙て何ごとをか語り玉ひし。韓遂が曰、只むかし都にて共に遊しことを語りし耳なり。馬超が曰、定て合戰の事を申さぬことは候まじ。韓遂が曰、曹操只昔の事を語て合戰のことを云ず、我も又之を云ずして退きたり。馬超心の內大に疑ひながら默然として出にけり。曹操は城中に回て賈詡を呼で曰、汝今日の計を知たるか。賈詡が曰、われ今日の計を見るに、尤も奇妙なりと申しながら、猶いまだ足ず、某一つの計あり、馬超と韓遂とが心を疑せて互に自ら害せしめん。曹操喜て曰、ねがはくは聞ん。賈詡が曰、馬超は血氣の勇にして計の大事を識ず、丞相自ら書簡を封じて韓遂に送り、

操が大將徐晃、朱靈二人渭水の河西に在て陣を取、これも用心せでは叶まじ、某と將軍と一日づゝ代て、今日曹操が方を守ては次の日は徐晃が方を守り、兵を分て前後に備へ、彼が詐を防べしとて用心少しも怠ず。

○馬超步ニ戰ニ五將一

馬超、韓遂二人二手に分れて前後を守り、和睦の詐ならんことを用心する由曹操が陣に聞えければ、曹操笑て賈詡に申けるは、わが計成就せりとて、間者を以て窺しむるに、明日は韓遂此方を守り、馬超自ら徐晃が方を守ると告ければ、次の日曹操諸の大將を引て陣を出、夥しく武具を揃て早一騎進み出たり。西涼の軍勢いまだ曹操を目に見ざる者ありければ、我も我もと出て之を見るに、曹操錦の袍を被て駿馬に跨り、大音擧て、汝等西涼の勢曹丞相を見んと思ふか、吾も是つねの人なり、目四つあるに有ず、口兩あるに有ず、世の人に易たるは只智謀の深き而已なりと呼はりければ、西涼の勢みな怕れ驚く。曹操人を韓遂が陣に遣し、我韓將軍と元より少しも恨なく共に古の故人たりしが、一旦事の變に依て心ならず合戰に及べり、今戰を止和睦する上は向後の遺恨少しも候はず、已に兵を收て共に本國へ囘らんとす、

韓遂と相議し、今曹操が勢忍で吾後へ廻れり、前後敵を受て拒べき便なしと云ければ、大將李湛が曰、不レ如これまで攻取たる地を曹操に返し與へ、和睦を請て戰を休、春の暖なるを待て別に計を成玉へ。韓遂が曰、この計甚だ好、早く使を遣し玉へ。馬超猶豫して心いまだ決せざりければ、大將楊秋、侯選二人しきりに和睦をし玉へと勸む。此に依て遂に楊秋を使として曹操が陣に遣し、韓遂、馬超地を割て和睦し、再び境を犯こと無らんとて書簡を送りければ、曹操が曰、汝先囘れ、吾明日使を以て答ふべし。楊秋すでに囘りければ、賈詡來て曹操に見て曰、いま馬超和睦を求む、丞相の御心いかん。曹操が曰、まづ汝が意見を聞ん。賈詡が曰、兵は不レ厭詐とこそ申せ、僞て和睦を許し、後に間諜の計を用て韓遂と馬超とが心を疑はせば、一鼓して破りつべし。曹操足を翹て笑て申けるは、天下の高見は必ず多く相合、いま御邊が計は乃ち吾心腹の機密なり、外に泄すこと勿れとて即時に使を遣し、和睦を求る上は別事なし、我も心靜に兵を收て都に囘るべし、早く汝が取たる河より西の地を囘せとて返簡を送り、乃ち手下の兵に下知を傳て南の岸へ浮橋を掛させ、軍を退くるの氣色をなす。馬超この由を聞て韓遂に向て曰、いま曹操和睦せんと約を成、浮橋を掛て都に囘るの體を見すると云ども、彼本より姦雄にして詐の計きはめて多し、倘眞の和睦なりとて油斷せば、反て大なる敗を取ん、曹



許褚怒て素肌馬超と血戦す
馬超
軍卒

許褚
軍卒

けるｏ曹操は馬超を破るべき計なく、兼て徐晃、朱靈に四千餘騎を付て忍で渭水の河より西に伏おきたれば、密に使を遣して早く敵の後より攻かゝれ、我大軍を以て前より蒐り、夾んで討んと下知をなす。時に馬超數百騎を引て推よせ、往來馬を飛せて勇を奮ひ威を耀かしければ、曹操矢倉の上よりこれを見て盔を地に抛て申けるは、馬超は尋常の敵にあらず、奴が世に在ん限は吾いかゞして心を安んずることを得ん、死して身を葬るの地も無るべし。夏侯淵これを聞て、安からぬこと哉、御方の大將數を知ざる中に、馬超に敵する者なくして丞相の心を不レ安しむ、某誓て命を此處に棄、馬超と共に討死せんと呼はり、遂に手下の兵千餘騎を率して門を開て出ければ、曹操急に止れども耳にも聞入ず、一陣に備を建て驀地暗に蒐りしかば、曹操も其失あらんことを畏れ自ら馬に乘て盡く討て出たり。馬超は敵の出るを見て急に引回して、後ぞなへを先手とし、陣勢を開き張。夏侯淵馬を飛して來りければ、馬超槍を撚て突て出、大勢の中へ蒐入て散々に戰ひけるが、忽ち曹操を見付て馬を飛して蒐りければ、曹操膽を冷し馬を回して城中へ逃わしる。馬超精兵を驅て追討に攻たりしかば、曹操大半討れて散々に成にけり。馬超は馬を飛して曹操を追かくる所に、跡より兵共走り付、曹操忍で一手の勢を蒲阪津より渡し、渭水の西に陣屋を構て吾回る道を塞げりと告ければ、馬超大に驚き、急に本陣に歸て

備とし、韓遂に中軍を領せしめ、自ら槍を提て馬を躍せ、虎侯は何とて出ぬぞ、快く出て勝負せよと呼はりければ、曹操これを見て諸の大將を顧み、馬超は呂布が勇に減ず、誰か能敵せんと云ければ、許褚きゝも敢ず馬を躍せ刀を舞して蒐出、馬超と只二人大に百餘合戰ひ、馬疲れければ共に軍中に入て馬を乘かへ、又討て出て百合あまり戰ひしかども、勝負の色見えざりしかば、許褚腹を立て軍中に馳かへり、甲盔を脱棄袍を解て赤裸になり、馬に打乘て蒐出、馬超と火を散して戰ひければ、兩方の軍勢震ひ駭く。又二人三十餘合戰ひ、許褚威を振ひ勇を逞うして刀を擧てはたと砍ば、馬超身を側めて之を避、槍を取のべ許褚が心板を突んとするに、許褚これを避てその槍を脇に挾み、刀を地に棄槍を奪はんとすれば、馬超奪はれじと曳合ほどに、許褚喚く聲雷の如く、了に中より拽折て手本わづかに馬超が方にのこり、散々に撃合たり。曹操此を見て許褚が失あらんことを怕れ、夏侯淵、曹洪に兵を引て出よと下知すれば、龐德、馬岱その氣色を見て左右の備を一手に合せ、面も振ず討て入、その勢ひ電光の如なれば、曹操が勢大に亂て許褚も臂に矢二筋射付られ、皆城中へ逃入ければ、馬超追討に壕の邊まで攻付、戰ひ勝て退きける。曹操は夥しく兵を討れ、緊く守て出ざりければ、馬超も本陣に回て韓遂に申けるは、われ惡戰する者を多く見たれども、了に許褚が如き者を見ず、是眞に虎侯なりと感じ

曹操が曰、汝この間御方の城の成ざるを欺しが、一夜の内に天より之を築玉へり、何ぞ早々に降参せざる。馬超大に怒り牙を咬で深く恨み、走り掛て曹操を突死さんと思へども、曹操が後に眼眞圓にして光百練の鏡に朱をさしたるが如きの大將、手に刀を提げ馬に白沫かませて立ければ、是は聞ゆる大力虎侯と呼るゝ許褚なるらんと思て、敢て輕々しくは進み得ず。乃ち鞭を揚て、汝が軍中に虎侯と呼るゝ者ありと聞しが、今いづくへか逃去たると問ば、曹操が曰、われ虎癡許褚と云大將あり、何ぞ天下の鼠を憚らん。馬超きゝもあへず突て蒐らんとする氣色に見えければ、曹操が後より一人馬をのり出し、我は乃ち譙郡の許褚なりと呼はる。威風あたりを拂て眼の光星の如なれば、馬超も心にや怕たりけん敢て前へ進まんともせず、了に馬を返して退きければ、曹操も又引て回る。兩方の軍勢これを見て駭然たらずと云ものなく、身の毛よ立て怕れあへり。曹操諸の大將に向て、敵も御方に許褚あることを知、まことに我虎侯なりと云ければ、許褚が曰、某明日必ず馬超を生捕ん。曹操が曰、馬超が勇力かる〴〵しく敵することと勿れ。許褚が曰、某誓て勝負を決せんとて使を以て戰書を送り、虎侯明日馬超と戰を決せんと云つかはしければ、馬超これを聞て大に怒り、何とて斯われを欺く、我必ず虎侯を殺んとて即時に批回し、次の日兩方の軍勢こと〴〵く出て陣勢を張。馬超は龐德を左備とし、馬岱を右

する婁子伯、道號は夢梅居士と云もの也と答ふ。曹操客の禮を以て敬ければ、老翁が曰、丞相久しく渭水の北に城を築んとし玉ふを聞、なんぞ時に乘て用ひ玉はざる。曹操が曰、小石まじりの砂なるゆゑいかに築どもいまだ成ず、老翁いかなる計かある、願くは敎へ玉へ。老翁が曰、丞相の兵を用玉ふこと神に通ぜるが如し、何ぞ天の時を知玉はざるや、箇樣に久しく陰雲蓋て雪の降こと烈しければ、若朔風吹起ば必ず大に凍るべし、その風の起るを待て急に土を運び水を潑ぎ玉はゞ、一夜の內に築地堅固に備らん。曹操是を聞て心悟り、大に喜び拜謝して老翁を留め置、重く恩賞せんと云ければ、老翁一つも受ず、袖を拂て去にけり。其夜案に違ず北風俄に吹起り、凜々として烈かりければ、曹操これぞ待ところの夜なりとて大軍を以て土を運せ、縑の囊に水を盛て其上に澆たれば、築に隨て盡く凍り固まり、夜の明方には水と沙と一面に成て、究竟の城すでに成就せり。西涼の敵軍はるかに城を望み見て皆あやしみ驚き、神の助ならんと膽を冷す。されどもこの儘にて閣ば始終よかるまじ、只蒐て見よとて、馬超西涼の大軍を率し鼓を打喚き叫で進ける。曹操は老翁の敎に因て城すでに成就しければ、心の內深く喜び、自ら馬を乘出して許褚一人後に從ふ。曹操鞭を揚て呼はりけるは、曹丞相たゞ一騎自ら馬を出して此にあり、馬超出來れ、一言を云ん。馬超これを聞て槍を橫へて馬を出しければ、

先兵糧の車を以て四方を圍み、諸軍その中に陣を取て心靜に城を築んとす。西涼の兵これを見て馬超に此由を告ければ、馬超兵に命じて手ごとに乾ける柴を持せ、硫黄焔硝の類を帯て馬超が旗を韓遂に指せ、韓遂が旗を馬超に指せ、二人南北に分れて毎日曹操が陣に推よせ、草を積柴を集て火を付、散々に攻ければ、曹操防ことを得ず、陣を棄て走けるに、三箇所に構へたる浮橋竝に兵粮の車こと〳〵く燒て、西涼の軍勢大に打勝、南の岸に陣を取て渭水の流を截住す。曹操陣屋を造ると云ども箇様に皆打やぶられければ、心の内憂ひ怕れ、諸將を集て計を議す。荀攸が曰、渭水の邊の土を以て築地を構へ、堅く守て戰ふべし。曹操しかるべしとて人夫三萬人を遣し、土を擔ひ運で築地を四方に構んとすれば、馬超これを聞つけて龐德、馬岱に各五百騎づつを付、往來飛が如に蒐たりければ、曹操これを防ぎ兼、殊に大河の畔の土を以て築き擧んとする築地なれば、小石まじりの漠沙にて盡く崩れ倒る。是に依て計極り、如何せんと心を苦め、時に九月も末に至て、北國の習なれば天氣甚だ冷く、彤雲四方に布て數日いまだ開けざりしゆゑ、兩軍しばらく戰を休て雪の晴を相待ける。曹操は諸將を集て計を議する所に、忽ち一人の老翁來て對面せんことを求む。乃ち呼入て之を見るに、人と爲つねに替て上長して下短く、鶴骨松姿その形凡ならず。何なる人ぞと名を問ば、本京兆の人にて終南山に隱居

れば、必ず我陣屋の立ざるを欺き、今夜來て野陣を劫すべし、四方に兵を伏て中軍には虚く旗ばかりを立おき、鐵砲を鳴を聞て盡く出ば、一鼓して擒にすべしと云ければ、諸將兵を伏て今や來ると待ところに、案の如く馬超六里の路を離れて大將成宜に三十騎を付、敵の體を窺しむ。成宜忍び入て其邊を見るに、更に人ありとも見えざりければ、直に中軍へ打入けるに、曹操見すまして合圖の鐵砲を鳴す。之を聞て四方の伏勢一度に起り引包んで攻たりければ、成宜すでに夏侯淵に討れ、三十騎の兵もこと〴〵く討死す。時に馬超が先陣喊を造て推よせ、龐德、馬岱大軍を引て三方より攻かゝり、喚き叫で火を散し、入みだれて戰ひけるが、互に若干討れて曉方に軍を收め、馬超は渭水に傍て陣を取、日夜に兵を出して攻戰ひ、墓々しき勝負もなし。

○許褚赤裸戰馬超

曹操は渭水の北に在て陣屋を造んとするに、馬超西涼の精兵を引て日夜を分たず推よせ、その勢雷電の如くなれば、曹操の勢日を重れども陣屋の要害いまだ成ず。野陣を取て防ぎ戰ひしかば、右ては始終あしかるべしとて、俄に船筏を以て渭水の流に浮橋を掛、南の岸へ相通じて三箇處に構へ、曹仁兵を下知して河を中に夾み、南北の岸に陣屋を建んとて夥しく材木を運び、

ば、曹操兼て計し如くわづかなる兵を出して敵を誘く。龐德は西涼の若武者千餘騎を引きて少しもためらはず、先手に進み喊を造て蒐たりけるが、想ひも寄ず人馬こど〳〵く陷坑に落入て、上を下へと蠢き、龐德只一人は跳り出て地の上に立。曹操が大軍これを見て一同に競ひ蒐りければ、龐德すこしも怕れず近付敵十騎あまりを斬て落し、圍を打破てしづ〳〵と歩み出るに、追掛んとする者更になし。大將韓遂敵の大勢に圍まれて出ること能ざりければ、龐德又取て返して救んとするに、曹仁が手下の大將曹永と云ものに出合、一刀に斬殺して其馬を奪ひ、大勢の中へ蒐入て了に韓遂を救ひ出し、東南の方に向て走りける。曹操勝に乘て追掛ければ、馬超兵を引て討て出、御方を救て曹操を防ぎ、又入亂れて攻戰ひ、暮に及で曹操退て回りけり。馬超は敗軍を收て手負討死を計るに、八組の大將程銀、張橫二人陷穴にて討れ、其外手下の兵二百餘人亡びたり。馬超が曰、もし箇樣の體にて日を送り、渭水の北に曹操が陣屋成就せば、急には中々やぶり難からん、不如今夜輕々と騎馬の兵を率し、曹操が野陣を討て蒐ちらすべし。韓遂が曰、よろしく手分を定めて前後を救ひ、他人に任せ玉ふこと勿れ。馬超げにもとて自ら先手に進で馬岱、龐德を後備とし、夜討の用意をぞしたりける。曹操は今日たま〳〵戰勝て、兵を收て渭水の北に回り、諸の大將を呼よせ、敵打負て逃たりと云ども、討れたる勢多からざ

わづかなる兵を出して態と敵を引よせ、塹に陥入て蠢ところを、一度に出て討べしとて、夜中に用意して待掛たり。去ほどに馬超は曹操を討もらし、本陣に回て韓遂に見え、今日の軍に已に曹操を生捕べかりしを、一人勇力の大將曹操を負て船にのり、遂に助て北なる岸に登れり、其はたらき凡夫のわざに有ずと語りければ、韓遂申けるは、曹操が旗下に虎衛の軍とて一手の勢あるを聞り、これは國々の兵の中より殊更すぐれて強く壯なる者を選び出して、大將二人に命じて之を領せしむ、その大將は一人陳留巴吾の人に典韋と云ものよく鐵の戟を使ひ、重さ八十斤にしていつも左右の手に提げ、直ちに敵の中へ切て入けるが、この人は已に亡て、今譙國の人に許褚と云ものあり、其力よく走る牛を尾を持て引戻す、世の人これを號して虎癡と云、又は虎侯とも呼、今日曹操を救へる者は必ずこの許褚ならん、若この者に出合玉はば、必ず輕輕しく戰ひ玉ふな。馬超が曰、某も久しく許褚が名を聞及べり。韓遂が曰、いま曹操河を渡て我後を攻んとす、速に之を擊やぶるべし、若延引して要害に陣屋を造らば、其時急には退け難からん。馬超が曰、われ只よく北岸を拒で兵に河を渡らしむべからず、これ最上の計なり。韓遂が曰、御邊は跡に殘て本陣を守り玉へ、吾自ら打向て曹操を破るべし。馬超が曰、しからば龐德を先手として速に推よせ玉へ。韓遂乃ち龐德と五萬の精兵を率し、直に渭南に向ひければ

手繁く曹操を趕かくるを見て、必ず曹操が討れんことを畏れ、我陣中に貯へたる牛馬を盡く驅出して野にも山にも放ちければ、西涼の軍勢これを見て爭て牛馬を取、にはかに德付たる心地して急に曹操を追んともせず。是ゆゑに曹操危き命を助かり、漸に難を逃れて北なる岸へ上りけり。先陣に渡したる者共、跡に軍ありて丞相難に遇玉ふと告るを聞て、急に舟筏を回して救んとすれば、曹操すでに岸に登れり。許褚痛手を負て鎧に立たる矢蓑の毛の如なりければ、諸人たすけて陣屋の中に入しむ。諸將こと〴〵く來り集り、驚き怕れて地に拜伏し、貴體恙なきやと問ければ、曹操笑て曰、われ今日敵の爲に困められたりとて、少しも怕れたる氣色見えざりしかば、諸人みな大に驚く。曹操が曰、わが危を見て夥しく牛馬を放ものあり、若この計を成して敵を誘にあらずんば、敵必ず力を盡して河を渡て追掛べし、抑牛馬を放ちたる者は何人ぞ。一人答て曰、渭南の縣令領兵官丁斐なり。曹操乃ち丁斐を呼よせ、若御邊の計に有ずんば、我必ず擒にせられんと云て典軍校尉に封ず。丁斐が曰、敵すでに引退くと申せども、明日は又來るべし、宜く計を設て拒玉へ。曹操が曰、われ已に敵を防の計ありとて、諸の大將を招き手分を定めて河の遶に堤を築せ、假に陣屋を掛雙べて、敵もし來らば御方の勢を堤の外に伏て、内には虛しく旗幟を建て疑兵をなし、別に岸の邊に塹を深く掘、上に棚を蓋て土を布、

はせ回り、敵すでに近付て候に、丞相なにとて船に召れ候はぬと申す。曹操是を見れば乃ち許褚なり。敵きたるとも何ほどのことか有んと云て後を顧るに、馬超、龐德すでに百步ばかりに成ければ、許褚是非なく曹操を拖立船に乘んとするに、船すでに一丈あまり岸を離れたり。許褚事の急なるを見て曹操を背に負、一躍に輕々と飛のり、すでに船を出しければ、跡に後れたる者共こと〴〵く河中に飛つかり、泳ぎ付て纔なる船に込のりければ、其船すでに飜らんとす。許褚刀を提て近付ものを切拂ひければ、手足を薙れて溺れ死する者幾千萬と云ことを知ず。許褚は自ら棒を以て船を篙さし、北を指て渡んとすれども、水の流急にして一所にのみ淘れければ、曹操膽を冷して許褚が脚下にすくみ居たり。馬超すでに岸に近付、曹操が船の河中まで出たるを見て、强弓の精兵に命じ河を遶て散々に射させたれば、其矢雨よりも猶しげし。許褚は曹操に矢の中らんことを畏れ、左の手に馬の鞍を持て矢を防ぎ、右の手に篙を使ひ、臂を張て我に中る矢を鎧の袖に受とめければ、舟の上なる者共馬超が射る矢に一つも迯れず、四五十人水中に射倒さる。水は急なり、横ぎり渡る舟なれば、岸に著こと成がたく見えけるに、許褚一人勇力を振ひ、兩の胯に舵を夾んで之を使ひ、左の手に馬の鞍を持右の手に舟を棹して、兎角して難をのがる。時に渭南の縣令丁斐と云ものあり。南山の上に陣を取けるが、西涼の軍勢

馬超が曰、皆船筏を用意仕り候と申す。馬超が曰、曹操必ず渡らば、曹操は襲を渡り、北より攻て吾後を襲んと欲すなり。

馬超が曰、曹操かたく陣屋を守て出て戦ひをせざるは、船筏を備て渭水の河を渡り、北より攻て吾後を襲ん爲なり、われ今その計を知れり、一手の勢を以て河に傍て北の岸に陣を取ば、曹操必ず渡ることを得ずして、二十日より内に河東ことごとく兵粮盡て自ら亂るべし、其時河南より攻かゝらば、曹操忽ち手取となるべし。韓遂が曰、この計よしと云ども、兵法に兵半渡可レ撃と云り、不レ如兵を引て南の岸より攻かゝらば、曹操が勢ことごとく河中に亡べし。馬超大に喜び、此計甚だ好とて急ぎ兵を揃へ、間者を以て曹操が河を渡る時刻を窺はしむ。この時曹操は大軍を三手にわけ、備を推て渭水の岸に臨みければ、夜も若々と曉て日の光漸く出たり。先陣まづ河を渡て北の岸にのぼり、速に陣屋を作れば、曹操なほ南の岸に殘りて、諸軍勢の渡し果んまでとて護衛の兵わづかに百餘人を從へ、胡床に腰を掛手に劍を執て相待ところに、忽ち一人走り來り、後より白き袍を被たる大將この所へ攻きたると呼はる。諸人みな馬超ならんことを畏れ、俄に上を下へと躁動し、われ先に船に乘んと喚き叫で休ざりけれども、曹操は少しも躁がず猶床の上に坐して御方を制し、驚こと勿れと下知する所に、後より馬烟天を掩ひ喊の聲地を動して、西涼の軍勢潮の湧が如く、すでに間近せめ來れり。時に船の上より一人の大將

こと勿れ、自ら槍の畏もあるまじきぞと云ければ、諸大將退き出て皆曹操が意を曉ず、共にあざ笑て、丞相いくらの戰に遇玉へども、遂に畏るゝ色を露し玉はず、今馬超と一戰に敗れて何とて斯は弱り玉ふぞと私語ける。次の日斥候の兵はせ回り、潼關には馬超又生手の勢二萬餘騎を添たり、皆北方羌の兵にて屈強の者共なりと告ければ、曹操これを聞て大に笑ふ。諸大將問て曰、敵に新手の大勢加はりたるを聞て何ゆゑに笑ひ玉ふぞ。曹操が曰、わが敵を破るを見よ、今詞を以て述がたし。三日過て後、又あら手の勢馬超が陣に加はりたりと告ければ、曹操酒宴を成て慶をのぶ。諸大將みな密に笑ひければ、曹操が曰、諸將みな我に馬超を破る計なきを笑ふか、願くは諸將の良計を聞ん。徐晃すゝみ出て曰、今御方の大軍此處を守て、敵も大勢にて潼關に屯す、急に勝負を決し難し、これより渭水の河の西には敵さだめて用心あらじ、若一手の勢を忍て蒲阪津と云所より渡し、密に敵の後に出て先歸る路を塞ぎ、丞相は渭水の河北より大軍にて攻かゝり玉はば、敵前後を顧ること能ずして自ら亂るべし。曹操が曰、この計大に好、いま汝四千餘騎を率し、大將朱靈と直ちに河の西を襲て谷の内に埋伏し、わが河の北へ渡るを待て一度に前後を攻よと下知しければ、徐晃、朱靈ひそかに渭水を渡て河より西に埋伏す。去ほどに馬超は毎日戰を催せども曹操さらに出ざりければ、韓遂と計を評議するに、

馬超山林に曹操を追ふ

馬超

ば、曹操驚て馬の鞭を地に落し、跡をも見ずして逃けるに、馬超すでに追つけ、曹操が林の中を通る時槍を取のべ後より突に、突迯して槍の鋒を樹の中へ突洞し、抜ん〳〵とする間に曹操すでに逃のびたり。馬超牙を咬で大に怒り、跡を慕て追ければ、山の傍より年若き大將一騎をどり出、馬超 快く駐れ、曹洪こゝにありと呼はり、刀を輪して蒐りしかば、馬超も曹操を打すて曹洪と火を散して四五十合戰ひ、曹洪すでに力疲れて逃んとする時、夏侯淵十騎あまりを引て救ひければ、馬超御方の續ざるを見て遂に靜々と引回す。曹洪、夏侯淵は手負を助け本陣に回て曹操に見えければ、曹操うれしげに打見て、我幾度か戰場に臨めども、今日の如く烈きを見ず、已に馬超が手に掛べかりしを曹洪に助られたり、今は先日の罪を免す、いよ〳〵忠を致せと云て重く恩賞を施し、敗軍を收て陣屋を守り、要害に逆茂木を引て一人も出あはず、時に建安十六年秋八月下旬なり。西涼の軍勢毎日來て戰を催し樣々に惡口しけれども、曹操固く守て出あはず、妄に動ものは首を斬んと云ければ、諸大將みな曰、西涼の勢は甚だ力强してよく長き槍を使ふ、若弓を以て射ば御方叉勝ことあらん、中々力を以ては爭がたし。曹操が曰、戰ふと戰はざるとは皆吾一人の心にあり、敵の心に在にあらず、西涼の勢よく長き槍を使ふとも、この所へ入來てあながちに諸將を突ことは候まじ、只わが下知を背ず固く守て外に出る

誅を容がたき所に、剩へ我父を害す、是共に天を戴ざるの讐なり、吾必ず汝を生どり、活ながら其肉を喰んことを思ふ也と云て、馬を飛し槍を撚て直ちに曹操に突て蒐る。曹操が後より大將于禁馬を出し、戰八九合にして叶ずして逃ければ、張郃入替て戰ひ三合ならざるに、是も叶はず引退く。三番に大將李通馬を出して五六合戰ひけるが、馬超勇を奮て李通を馬より突落し、後の御方を一度まねけば、西涼州の大軍その勢ひ雷電の如く面も振ず競ひ蒐る。曹操大に敗れて散々に走りければ、馬超百餘騎を引て馬岱、龐德と中軍に蒐入、曹操を生取にせんと尋るに、曹操みだれたる勢の中に在て逃たりけるが、西涼の軍勢みな聲々に紅の袍を被たるが曹操なりと呼はるを聞て、馬上にて急に袍を卸捐て走りければ、西涼の勢又聲々に、髯の長きが曹操なり、餘すな泄すなと呼はりければ、俄に劍を拔て其髯を切棄這々に逃わしる。或人髯を切たる由を馬超に告ければ、馬超兵を下知して、聲々に髯の短が曹操なり、生取て恩賞に預かれと呼はらしむ。曹操これを聞て魂も身に付ず、旗を引裂て頸を包み馬を打て逃わしる。見苦しかりける形勢なり。馬超は勝に乘て急に追かけ、落ゆく勢を四角八方へ打ちらし、頸を包だる大將一騎東を指て走る者は必ず曹操ならんと見てければ、君の仇を亡し父の敵を討こと今日にありと喜び、交ひ近く成ける時、曹操にぐること勿れ、馬より下て快く頸を渡せと呼はりけれ

洪更に用ひ玉はず、某が兵粮を點檢する隙に早門を開て出玉ひしゆゑ、其失あらんことを畏て跡に續て討て出たり。曹操いよ〳〵怒り、曹洪が首を刎て軍法を正さんと云ければ、諸の大將みな地に伏して命を乞、しばらく罪を赦して後に功を以て補ひ玉へと望みしゆゑ、曹操わづかに宥しけり。

○馬超大戰渭水橋

次の日曹操自ら兵を引て潼關に推寄んとしければ、曹仁申けるは、まづ陣屋を構へて寨柵を定め、其後に攻かゝり玉へ。曹操これに從ひ、人夫を分て三箇所に陣屋を造らせ、自ら中央に在て左は曹仁右は夏侯淵なり。西涼の大軍備を立て潼關より出ければ、曹操も兵を引て出向ひ、敵の勢を望み見るに、西涼の軍勢人強く馬壯に、一人長き槍を提げて駿馬にのり、素き袍に銀の甲を披て細腰寬髆なる大將一陣に蒐出たり。これ乃ち西涼の大將軍馬超字は孟起なり。龐德、馬岱華やかに鎧て其左右に從へば、八人の大將馬を雙べて跡に備へ、凛々たる威風あたりを拂て見えたりける。曹操心の內大に驚き自ら大音あげて、汝は乃ち名將の子孫なるに、何とて漢に背て謀逆を成と呼はりければ、馬超牙を咬口を怒して、逆賊曹操、汝君を欺き上を犯の罪

り喊を吶と作て西涼の馬岱兵を引て斬て蒐る。曹洪、徐晃あわて驚き急に退て關に入んとすれば、忽ち鼓の聲天地を碎て、山の後より左に馬超右に龐德二手の勢打て出、路を横截て散々に戰ひければ、曹洪大に亂れ大半討れて漸に圍を出、關內へ逃入んとするに、西涼の大軍息をも繼せず攻つけたりければ、曹洪、徐晃のこり少に討れ、關を棄て這々に逋はしる。龐德直に潼關を乘とり、日夜を分たず落ゆく勢を追かけければ、都より曹操が大軍すでに半途まで出、先手の大將曹仁端なく路にて行合、曹洪を救て時うつるまで攻戰ひしかば、追手の勢そなへ亂れて防ことあたはず。又引返して走りければ、曹仁兵を驅て追かけ、潼關を取かへさんと進む所に、馬超自ら大軍を引て討て出、龐德を救て散々に戰ふ。曹仁、曹洪人馬つかれて防こと能ず、又亂れ散て逃ければ、馬超兵を收て潼關に陣を取。曹仁は敗軍を引て曹操に見え、曹洪、徐晃戰を仕損じて、潼關すでに破れぬと告ければ、曹操大に怒り、急ぎ曹洪を召て申けるは、汝さきに十日より內に關所を破られば、必ず首を刎んと云しを聞ずや、何ゆゑに今一日を守ること能ず、九日にして破れたる。曹洪が曰、西涼州の軍勢あまりに我を辱しめ、傲り怠て傍若無人の體なりしゆゑ、勢に乘て討て出ければ、想ざるに敵の計に落されたり。曹操が曰、曹洪は年若き大將なり、徐晃なんぞ之を諫めざる。徐晃が曰、某しきりに諫と申せども曹

騎を引て潼關に發向す。曹仁これを聞て曹操を諫め、曹洪年壯んにして性甚だ躁しく候へば、恐らくは事を仕損ずべし、某まかり向て丞相の來り玉ふまで能關所を守るべしと云ければ、曹操が曰、汝は我に從て兵粮を運送し、大軍を調よとて俄に軍馬をぞ揃ける。去程に曹洪、徐晃一萬餘騎にて潼關に馳つき、鍾繇に代て要害を守り、密く固めて出ざりければ、馬超毎日來て戰を催し、大音なる者を擇で樣々に惡口せさせ罵り辱しめたりければ、曹洪こらへ兼斬て出んとするを、徐晃深く諫め、今敵の詈り辱かしむるは、我等が討て出るを願ふ故なり、必ずかる〱しく出玉ふな、丞相の來り玉ふを待て大軍一度に蒐らば、奴原を破らんこと掌の中にありと云ところに、馬超が軍勢かはる〱來て罵りければ、曹洪は齒咬をして出んとするを、徐晃大に諫て引とゞむ。已に八九日をも過ければ、西涼の軍勢切崖の邊まで近付、みな馬より下て草の上に坐し、多くは地に臥て睡りなんどし、或は罵しり或は笑ひ、傍若無人の體をなしければ、曹洪は氣早なる若武者、矢倉の上より之を見て、憎き奴原が所爲かなと怒て、自ら三千騎を率し、門を推開て驀地暗に討て出ければ、徐晃もその失あらんことを畏れ、兵を引て跡につゞく。西涼の軍勢これに驚き、馬を棄戈を落して散々に逃たりければ、曹洪勝に乘て追蒐る。徐晃あとより大音あげ、早く回り玉へ、長追は無用なりと呼はる所に、思ひも寄ぬ後よ

より人を出して敵の樣を窺はしむるに、果して遠く退きたりと申しければ、少し心を安んじ、この隙に水を汲薪を取と云て城中の軍民われ先にと出て搬びとり、敵の又來らんことを畏れて往來紛々と亂れて其人數をも計へず。此の如なること已に三日になりければ、いよ〳〵憚らず城門をこと〴〵く開て心の儘に出入し、五日を過てすはや敵こそ寄たれと躁ぎければ、軍民俄に周章ひしめき城中に走り入、鍾繇自ら攻口を廻て諸將を警め、固く守りて防ぎ戰ふ。西の門をば鍾繇が弟の鍾進と云もの守りけるに、馬超直ちに塹の傍まで推よせ、若早く門を開ずんば一人も殘さず殺すべしと大音あげて呼はりければ、鍾進も矢倉の上より樣々に惡口す。已にその夜の三更の比城門の上俄に火もえ出ければ、鍾進急に打滅んとするに、思ひもよらず一人の大將馬を飛して蒐出、大音あげて西涼の龐德こゝに在と呼はり、鍾進を一刀に切て落し、千餘騎の精兵を引て四方八面を蒐やぶり、門を打破て寄手の勢を引入ければ、馬超、韓遂大軍を驅て亂れ入、卽時に長安を乘とりければ、鍾繇は辛き命を助り、東の門を開て逃のび、潼關を守て曹操に救を求む。曹操この早馬に驚てまづ吳の國に向ふことを閣き、急に曹洪、徐晃二人を呼、汝まづ潼關に行て鍾繇を救へ、若十日より內に關所を破られなば、必ず汝等が首を刎ん、能々力を盡して十日の間こらへよ、我大軍を揃て到るべしと云ければ、二人命を受精兵一萬餘

喜び、先曹操が使の首を刎、共に大軍を興して潼關に向て攻かゝる。長安を守る大將鍾繇これを聞てあわて驚き、早馬打て都へ急を告、自ら二萬餘騎を引て先長安の京兆府を離れ、野外に出て陣を張ければ、西涼州の先陣馬岱一萬五千の精兵を率し、野に滿山に漫て浩々として攻きたる。鍾繇自ら馬を出して、逆賊なんぞ我境を犯と呼はりければ、馬岱大に怒り刀を舞して討てかゝり、二人戰ひ一合ならざるに鍾繇怕れて逃たりければ、馬岱のがさじと追かけ、散々に蒐破りて勢に乘て揉だりしかば、鍾繇が二萬餘騎しどろに成て叩へたるを見て、馬超、韓遂大軍を引て哦と蒐り、その烈きこと雷の如くなれば、鍾繇が勢のこり少に滅て長安城に逃こもる。この長安城と申は、昔し漢の高祖都を建玉ひし城郭なれば、要害甚だ堅固にして塹ふかく路險ければ、馬超、韓遂日夜せむれども更に落ず。已に十日あまりに及びければ、龐德ひそかに馬超に申けるは、この長安城は昔より土硬く水鹹して飲こと能ず、又柴薪に事を欠、いま已に十日あまり圍れて、城中の人民こと〴〵く水に渴し柴薪を盡す、不如しばらく圍を解て引退き、箇樣々々に計を成ば忽ちに攻落すべし。馬超計を聞て大に喜び、卽時に令の字の旗を差して下知を傳へ、四方の寄手圍を解て次第々々に退かしむ。次の日城の大將鍾繇矢倉に上て望み見るに、寄手の大勢こと〴〵く退きければ、計あらんことを畏れて敢て追ず。西の門

書簡を送ると報ず。馬超封を開てこれを見るに、其書に曰、

備頓首、百拜征西將軍麾下。伏念、漢室不幸而遭遇操賊專權、黎庶凋殘、致使姦臣秉政欺君罔上結黨成羣、天下之人無不欲食其肉也。令尊翁、忠義聞于四海、今被操之所害、此本不共天地同日月之讐也。爲子之道、安忍坐視。若能率西涼之兵、以敵操之勢、備當舉荊襄之衆、以遏操之威。則逆操可擒、姦黨可滅、讐辱可報、漢室可興。誠能如是、幸莫大焉。書不盡言、立待回報。

建安十六年七月上旬日

馬超見了り涙を推へて回簡を調へ、卽時に西涼州の兵を催して進發せんとする所に、忽ち父の馬騰が日ごろ兄弟の如く交りし鎭西將軍韓遂と云もの、使を以て馬超を招く。馬超ゆいて對面しければ、韓遂申けるは、是見玉へ、只今曹操が方より書簡を送れり。馬超乃ち披き見るに、若馬超を生取て都に上せば、必ず汝を封じて西涼侯にせんとありければ、涙を流して地に拜伏し、將軍ねがはくは某を縛て都に送り、干戈の苦を免玉へと云けるを、韓遂たすけ起して曰、われ御邊の父と兄弟の交をなす、安ぞ浩ることをせん、この故に御邊を招てこの書簡を見せしむ、若兵を起して父の讐を報ずる心あらば、吾も力を盡して助べし。馬超拜謝して

は曹操いかでか呉に向ふの暇あらん。玄德限なく喜で卽時に孔明に書簡を作せ、使者をしたて西涼州へ下し玉ふ。この時馬超は西涼州にありて、或夜の夢に、深き雪の中に臥ければ、多の虎はしり來りて我を咬と見て打驚き、心の内大に疑をなし、夜あけて諸の大將を集めて夢あはせを問。元來馬超が旗下に八人の大將あり、乃ち侯選、程銀、李堪、張橫、梁興、成宜、馬玩、楊秋なり。八組の軍勢共に二十萬騎、馬超が自ら領する精兵六萬餘騎あり。この日ことごとく來て夢あはせを成ければ、一人身の長八尺ばかりなる男の、眼さかさまに裂聲雷の如くなるが、一番に進み出たり。諸人これを見るに馬超が帳前の校尉八部の首將、南安桓道の人に龐德字は令明と云ふもの也。乃ち馬超に向て、雪の中に虎に遇は是不祥の兆なり、父君將軍都にて事あるにては候はずや、甚以て心元なく存じ候と云。その詞いまだ了ざるに一人走り來て地に拜哭し、叔父竝に一門の老少ことゞく殺されたりと叫ぶ。諸人これを見れば馬岱なり。馬超驚てその故を問に、馬岱答て曰、叔父都に上り玉ひて侍郎黃奎と計を合せ、曹操を殺んとし玉ひしが、不幸にして事露れ、兩家の一族ことゞく市に斬れたり、某一人からき命を扶り、墻を跳て逃のび、乞丐人に扮れて關所を通り、千辛萬苦を受てこれまで回りぬと告ければ、馬超大に哭き昏絕して倒れけるを、諸人たすけ起ところに、忽ち荊州の劉皇叔使を馳て

時は蜀も又御方に屬せん。曹操けにもと喜び、即時に大軍三十萬を起し、合淝城へ羽檄を飛せて大將張遼にこの趣を報じ、先手に進で吳の國に向はしむ。吳の境を守る者この由を聞て、急ぎ早馬打て吳主孫權に報じければ、孫權大に驚き、諸將を集て計を議す。時に張昭すゝみ出て曰、魯肅元より玄德と好あり、殊にわが國の婿なれば、魯肅に命じ書簡を以て荊州に救を求玉へ、若玄德と力を併せて防時は、曹操いかでか輕々しく攻來ることを得ん。孫權しかるべしとて魯肅に命じて救を乞せければ、魯肅使を馳て荊州に到らしむ。玄德その書を開き見て使者を客屋に留め置、この時孔明は南郡に居たりけるを早々に召よせ、魯肅が書簡を見せ玉へば、孔明見了て曰、吳の國の兵をも動さず、荊州の救をも用ず、曹操を吳の國に向こと無らしめんとて、即時に回簡を調へ、吳の國の人々は只枕を高して心安く思ひ玉へ、曹操もし攻よするの沙汰あらば、我よく之を退るの計ありと書て吳の使を返しければ、玄德問て曰、曹操いま三十萬の大軍を起し、合淝城の勢を併せて南方へ攻下る、其威恰も泰山の如し、先生いかなる計ありて容易く退けんと云玉ふぞ。孔明が曰、曹操が常に畏るゝ者は西涼州の勢なり、今太守馬騰が一門こと〴〵く曹操に殺され、其子馬超本國に在て自ら大軍を司る、必ず深く曹操を恨むべし、君書簡を以て馬超を語ひ玉はば、馬超必ず兵を起して都へ攻上るべし、然る時

通俗三國志　卷之二十四

○馬超起レ兵取ニ潼關一

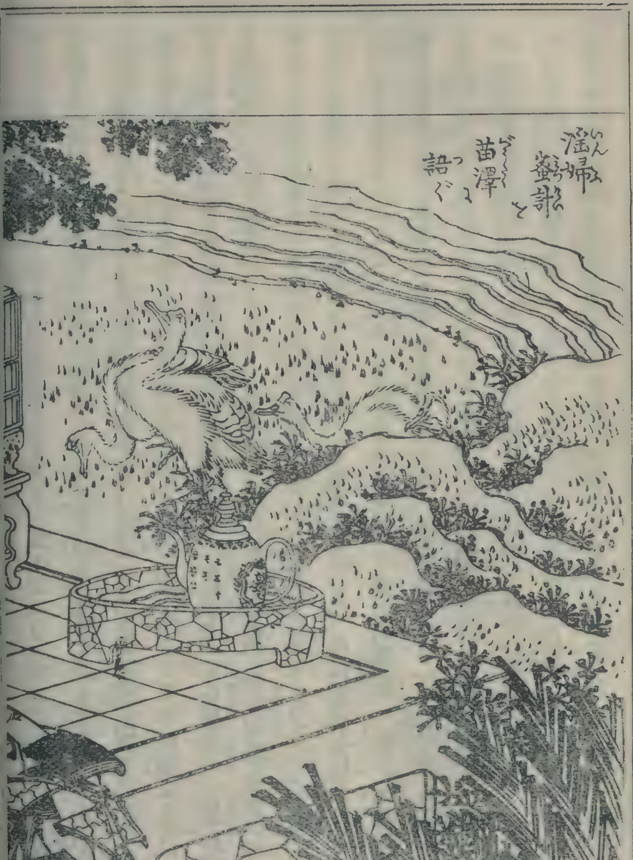
曹操は馬騰、黄奎を滅して心の内喜ぶ所に、早馬急を告て、今荊州の玄徳四方の勢を雲霞の如に集め、蜀の國を攻んと企候、早く征伐し玉はずんば、由々布大事ならんと報じければ、曹操大に驚き、玄徳もし蜀の國を取ば、吾いかゞして戰ふことを得ん、諸將の計を聞んと云ければ、一人すゝみ出て曰、某一つの計あり、玄徳、孫權に自滅を取せ、呉蜀を呑の計を成ん。曹操喜でこれを見るに、乃ち治書侍御史參丞相軍事、潁州許昌の人に陳羣字は長文とて、陳寔が孫陳紀が子なりければ、汝いかなる妙計か有と問ふに、陳羣が曰、いま玄徳と孫權と好を結んで唇歯の助をなす、玄徳もし蜀を取んとせば丞相大軍を起し、合淝城に楯籠る勢を一手に併して、直ちに呉の國へ攻かゝり玉へ、然る時は孫權必ず救を玄徳に求べし、玄徳蜀を取の心ある時は、必ず呉を救こと能はじ、若救なき時は、孫權力足ずして防こと能ず、呉の國忽ちに破るべし、若呉を破る時は一鼓に荊州を攻とり、後より玄徳を襲て進退門なからしめん、然る

笑ひ、汝一人の女に心を寄て姉の一門を盡く滅しけるか、浩る不義の人を生て置ば、天下の費

これに過べからずと云て、卽時に首をぞ刎たりける。

るに、黄奎醉に乘じて申けるは、汝は婦人なれども倚禮を知、いかに況んや我譜代漢朝の祿を食ふをや、我恨るは曹操を殺んことを計る故なり。李春香されはこそと思ひ、夜明て苗澤に告ければ、苗澤究竟のことよと喜び、急ぎ曹操に見て明に訴ふ。去程に馬騰が檄文を見て關西の兵夥しく上洛しければ、馬騰、黄奎と相府に行、曹操に見て、勢揃を仕り候はん、願くは御見物あるべしと云けるに、曹操武士に命じて忽ちに二人を縛る。馬騰問て曰、われ何の罪かある。曹操が曰、我汝を薦て大將とする所に、却て我を害せんとするは何ごとぞ。馬騰、黄奎、再三伏せざりければ、曹操乃ち苗澤を出して證據とするに、黄奎答ふべき詞なし。馬騰大に怒り、黄奎の腐れ儒者、なにとて浩る大事を漏しけるぞ、我兩度まで逆臣を伐んとして、不幸にして事を成ず、是天逆賊を助て漢室を棄玉ふ也、運命すでに此の如し、嘆とも何の益か有んと呼はりければ、曹操下知を傳て二人の家を取かこみ、老少男女一人ものこさず擒にし、市に出して首を切しむ。馬騰が二人の子面を對して誅せられければ、關西の軍士これを見るに忍ず、みな涙を流して哀い哉と叫ぶ。曹操怒て追ちらし、二人の一族三百餘人をこと〴〵く誅しけるに、馬騰が姪の馬岱はいかゞして逃れたりけん、只一人本國へぞ逋下りける。苗澤は曹操に見て、某外に願ふこと無、この度の恩賞には只李春香を求て妻とせんと望みければ、曹操あざ

苗澤
李春香


淫婦蛩詠を
苗澤語ぐ

るならんと思ひ、急に止て曰、輕々しく事を云玉ふな、外に漏なば御身の大事と成ん。黄奎叱て申けるは、汝は漢の名將の子孫にして今却て逆臣に膝を屈て劉皇叔を討んとす、何の面目ありて天下の人に見べき。馬騰良ありて申けるは、さては御邊信實の心にて宣ふか。黄奎指を嚙で血を流し、誓を成て申けるは、われ何ぞ詐らん、正しく天の照覽にあり。馬騰これに依て帝の勅命を語りければ、黄奎が曰、われ假令命を舍とも其宜を得たり、浩る上は君の爲に三族を顧ず、偏國に報ずべしとて、二人よく〱計を合せ、檄文を馳て關西の兵を召のぼせ、曹操に勢揃を見せんと云て、彼が見物の場にて討殺べしとて計すでに定りければ、黄奎別て家に囘り、顏色も常ならず、恨氣いまだ收らずして、偏に曹操を伐んとする氣色に見えければ、其妻あやしんで再三問へども黄奎さらに語ず。其ころ黄奎が妾に李春香と云へる女あり。曾て黄奎が妻の弟苗澤と私しに通じければ、苗澤なにとぞして己が妻とせんことを思ひ、日ごろ計を運すと云ども今にその志を遂ず。この時李春香ひそかに苗澤に語て、黄奎は今日軍の評議に出玉ひしが、囘り玉ひて怒の氣さらに已ず、誰をか恨み玉ふやらんと云ければ、苗澤が曰、汝試に詞を以て探り、人みな玄德は仁者にて曹操は奸雄なりと申すなどと云て黄奎が答を聞、必ずその實を露すべし。案の如く黄奎その夜李春香が房に入れば、李春香詞を以て之を探

受、早く荊州に向て逆賊玄德を誅すべし。帝の玉はく、玄德は是漢室の宗親なり、安んぞ逆臣たらん、逆臣は曹操なり、近き内に必ず朕が位を奪べし、降ところの勅命みな朕が意に非、汝よく先祖を思て朕が爲に之を圖れ。馬騰涙を含で曰、臣むかし衣帶の密詔を受、國舅董承と曹操を伐んと計る所に、不幸にして事露れたり、其後も此心なきには有ねども、力及ばざる故に默止候。帝宣く、朕つねに曹操を畏て一日も一年を過が如し、今汝に大軍を司らしむ、この時を失ことなく、よく〳〵計を運して漏すこと勿れ。馬騰謹で領承し、臣ねがはくは三族を捨て國に報ぜんと云て退出しければ、帝頼しく思しめし、心の內大に喜び玉ふ。馬騰は家に囘て三人の子供を呼、密に右の趣を語りて、偏に曹操を討んことを料る所に、忽ち曹操使を以て南方征伐のこと延引あるべからずと催促し、門下侍郎黃奎を行軍參謀として伴ひ行べしと下知しければ、馬騰乃ち黃奎を召で荊州に向ふ計を議論し、酒宴を設て持成ければ、半酣に及で黃奎俄に牙を咬で長嘆し、我父黃琬は昔し李傕、郭汜が亂に逢て、國の爲に命を捨たり、我つねに齒を切て逆臣を誅せんと思ふ所に、不幸にして今又逆臣の命に從ふ、我まことに忍び難しと申ければ、馬騰問て曰、御邊いま誰を逆臣と云玉ふぞ。黃奎が曰、君を欺き上を犯し、正しきを以て却て邪とする者は曹操なり。馬騰心の內に是は定て曹操が我を探ん爲に斯云す

に屬して、天下の諸侯ことぐく御方に屬して、玄德、孫權忽ちに滅べし。曹操これに從ひ、卽時に使を西涼州へ下して馬騰が勢を催促す。この馬騰は字は壽成、身の長八尺、面鼻雄異、天性溫良、漢の伏波將軍馬援が後胤なり。父馬肅は桓帝の御時に官を退て隴西に流浪し、羌の女を娶てこの馬騰を產り。度々の功名朝廷に忠あるを以て、靈帝の御時に征西將軍に封ぜらる。常に鎭西將軍韓遂と兄弟の如く交り、數十萬の兵を集めて其威北方を靡けたり。この時勅使詔を傳て急ぎ都に上るべしと催促しければ、嫡子馬超を留めて國を守らせ、次の子馬休、馬鐵、兄の子馬岱を伴て、一族老少のこらず引具し、直ちに都に上りて先曹操に對面し、次の日漢の天子に見えければ、曹操乃ち馬騰を偏將軍に封じ、馬休を奉車都尉に封じ、馬鐵、馬岱を騎都尉に封じ、關西の勢を引て日を擇で軍を出し、南方を征伐せよと下知しければ、馬騰恩を謝して退き、吉日を擇で荊州に打向ひ、玄德を生取にせんとて用意する所に、獻帝ひそかに馬騰を內裏に召され、麒麟閣に登て共に古の功臣を論じ玉ひ、左右の人を屛け、近く馬騰が前に寄て、いかに汝が先祖を知たるかと問せ玉へば、馬騰答て曰、臣が先祖は伏波將軍馬援にて候、功名靑史に遺て、深く聖朝の大恩を蒙れり。帝宣はく、汝よく先祖の忠烈に效て、漢室を補ひ扶け逆臣を誅伐せよ。馬騰が曰、臣すでに勅命を

有ず、胸中の謀略某に勝れること十倍せり、某さきに呉の國へ行し時、書簡を封じて龐統に渡し、これを以て荊州に行ば、我たとひ在あはずとも必ず重く用ひ玉ふべしと云ひて相わかれ、其より四郡を巡撿仕つりしゆゑ只今こゝに囘り來れり、某が薦る書簡を見玉はずや。玄德の曰、今日却て魯肅が薦る書簡を得たり、先生の書はいまだ達せず。孔明が曰、浩る大賢人を小しきなることに用ふる時は、事に退屈して只酒を飲で放逸なるべし。玄德の曰、もし張飛が薦にあらずんば、必ず大賢人を失ふべしとて、乃ち張飛を耒陽縣に遣し、敬で龐統を迎へさせ、玄德自ら無禮の罪を謝し玉へば、龐統乃ち孔明が薦る書簡を出す。玄德開き見玉ふに、鳳雛もし到らば宜く重く用ひ玉ふべしとありければ、玄德始て悟り、昔司馬徽、徐庶が詞に、伏龍、鳳雛二人の内を若一人を得ば、天下は忽ち安からんと云り、今われ二人共に得たり、漢の天下再び興るべしとて、其よろこび玉ふこと限なく、軈て龐統を副軍師中郎將に封じ、孔明と共に軍馬の事を摠司て、陣法を調練せしめ玉ふ、時に建安十六年夏五月なり。魏の細作この由を聞都へ早馬を打て、玄德いま孔明、龐統を用ひて軍師とし、軍馬を集め兵粮を貯ふ、必ず呉の孫權と計を合て近き内に都へ攻のぼるべし、御用心あるべしと告たりければ、曹操大に驚き、諸大將を集て計を問。時に荀攸すゝみ出て曰、必ず都の勢を動すべからず、西涼州へ使を馳て太守

張飛
孫乾

龐統百日の公務を
一時に裁断す
龐統
下司

内に決しければ、吏民みな地に拜して其明なるを喜ぶ。龐統乃ち張飛に向て曰、この百里の小縣を治むるに何ほどのことか候はん、曹操、孫權をも我屑ともせず。張飛大に驚き、席を下て拜謝し、先生の大才われ安んぞ能知ん、われ回らば必ず先生を薦べしと云ければ、龐統乃ち魯肅が薦る所の書簡を出す。張飛が曰、先生向に我兄に見え玉ふ時、何とてこの書を出し玉はざる。龐統が曰、出したりとも信なりとし玉ふまじきを恐て也。張飛乃ち孫乾に向て曰、もし御邊の諫に有ずんば必ず浩る賢人を失んとて、相わかれて荊州に回り、玄德に見て右の事を語るに、玄德大に驚き、われ眼明ならずして大賢人を失んとせり、急ぎ呼回すべしと云玉へば、張飛乃ち魯肅が薦る書簡を出す。玄德封を開て見玉ふに、其書に曰、

龐士元非二百里之才一也。使レ處二於治中別駕之任一、始當レ展二其驥足一耳。如以レ貌取レ之、恐負レ所レ學、亦終爲二他人之所用一、實可レ惜乎哉。

建安十五年十二月　東吳魯肅拜書

玄德これを見て彌後悔し玉ふ所に、忽ち孔明四郡を巡て回り來れりと報ず。玄德呼入て對面し玉へば、孔明まづ問て曰、龐統先生は恙なきか。玄德の曰、近ごろ來陽縣を治めさせたれば大に法度を亂りしゆゑ、今その罪を正さんと欲す。孔明笑て曰、龐統は百里の小縣を治る才に

孫乾と來陽縣に行て巡撿し、若不法なること有ば緊く正し來れと云玉へば、張飛承り孫乾と數十騎を引て來陽縣にぞ赴ける。縣中の吏民この由を聞て盡く出て迎へけれども、龐統は獨り出ず。張飛吏民に問て曰、縣令は何とて迎に出ぬぞ。答て曰、縣令龐統この所に來り玉ひて後すでに百日にあまり候へども曾て政を治めず、只明暮酒を飲で民訴をも聽玉はず、今日も宿酒いまだ醒ず、この故に出ることを得ず。張飛これを聞て大に怒り、走り入て縛らんとひしめきければ、孫乾諫て曰、龐統は高明の士なり、輕々しくすべからず、只縣中に入て明かに尋ね、若罪あらば正し玉へ。張飛げにもと同じて廳上に坐し、縣令に逢んと云ければ、龐統衣冠をも整へず、醉を扶てよろめき出たり。張飛怒て曰、わが兄汝を以て人物としてこの所の縣令たらしむるに、汝いかなれば法度を亂る。龐統あざ笑て曰、御邊われを責て法度を亂ると云ふはいかなる故ぞ。張飛が曰、汝この所に來りて已に百日にあまると云ども、民の訴をも聞ず、縣中の政をも治ざるは何ごとぞ。龐統が曰、われ量るに百里ばかりの小縣、わづかなる訴ありとも何ぞ決斷するに難きこと有ん、暫く其に御待候へ、われこの間の訴を片時の内に決斷すべしとて、卽時に下吏を呼よせ、百日あまりの公務を聞て一々に斷り定め、諸の訴狀眞僞曲直紛紛として緒の亂れたるが如くなるを分明に裁斷して分毫も錯なく、百日あまりの事を半日が

○來陽縣張飛薦龐統

この時荊州には孔明自ら四郡の巡撿に出て、玄德城を守ておはしける所に、忽ち江南の名士龐統と云人特に來て用られんことを求むと報じければ、玄德曾て其名を聞玉ひしゆゑ、急に呼入て對面し玉ふ。龐統内に入長揖して拜せざりければ、玄德その貌の陋く男つき惡きを見て心の内に喜び玉はず、御邊遠く此に來る、如何なる故ぞと問玉へば、龐統わざと孔明、魯肅が書簡を出さず、答て申けるは、某久しく皇叔の賢人を求め玉ふと承りて、この故に此に來れりと。玄德の曰、いま荊州すでに定まりて官人の缺たるも無れば、御邊を用ふべき職なし、此より東北の方に當て百三十里を隔て來陽縣と云ところあり、今この所に縣令なし、御邊しばらく行て治め玉へ、後に缺たる官あらば必ず重く用ふべし。龐統心の内に、玄德われを甚だ輕んず、今孔明もこの所に在合ねば、才智を以て驚かすべしと思ひ、領承して直に來陽縣に到り、日夜只酒を飲で樂を成、了に縣中の政をも治ず、民の訴をも聽ず、日を歴て事の滯りのみ出來ると云ども、更に之を決斷せんともせず。人民ことごとく恨を懷きければ、此由かくれ無荊州に聞えてけり。玄德大に怒り、惛き腐れ儒者、なんぞ吾法度を亂るやと云て、遂に張飛を呼よせ、汝

り、用て何の益かあらん。魯肅が曰、赤壁にて曹操を打やぶりし時、この人連環の計を以て第一の功を立たり、君よく之を思ひ玉へ。孫權が曰、これ何ぞ龐統が功ならん、曹操手下の兵の大浪に淘るゝことを憂て、本より船を縛ぎ合せんとする意あるに因て也、われ誓てこの人を用ふまじ。魯肅いかに勸れども孫權了に用ひざりければ、力なく外に出、龐統を呼で、われ御邊を薦と云ども、如何んがせん吳侯さらに人を用ふること能ず、暫く忍んで時節を待玉へと云ければ、龐統只長嘆して首を低てものいはず。魯肅問て曰、御邊この國を去んと思ふ心ありや。龐統答ず。魯肅又曰、御邊匡濟の才を懷く、何ぞ功名の成ざるを憂んや、若この所に留り玉はば、恐らくは徒に埋もれ玉ふべし、意に思ふこと有ば明に語り玉へ。龐統が曰、われ都に行て曹操に事んと欲す。魯肅が曰、もし曹操に事へ玉ふ時は、明珠を暗に投ずるが如し、速に荊州へ行て劉玄德に事へ玉へ、必ず重く用ふべし。龐統笑て曰、われ元より此意あり、曹操に事んと云は詐て戯るゝ也。魯肅が曰、われ書簡を以て御邊を玄德に薦べし、御邊もし荊州に事へ玉はば、常によく吾國と好を結び、萬づ睦くして共に曹操を破る時は、是兩家の幸なり、相かまへて是ことを忘玉ふな。龐統が曰、これ我平生の願なりとて、乃ち書簡を求め直に荊州へぞ赴ける。

て故郷に厚く葬りければ、孫權は南徐に回り、諸將と周瑜が才を稱して日夜淚を流し、今すでに吾股肱を失へり、安んぞ又大業を起さんと哭きければ、魯肅が曰、某は碌々として道に足ざる庸才なるに、周瑜が薦に依て大都督の任を受と申せども、甚だ以て其職に稱ず、ねがはくは一人を薦て君を助しめん、この人は上天文に通じ、下地理を曉り、謀略は管仲、樂毅に減ず、樞機は孫子、吳子に並ぶべし、周瑜曾て其言を用ひ、孔明も深く其智に服す、幸に今この所にあり、君なんぞ重く用ひ玉はざる。孫權大に喜て曰、ねがはくはその名を聞ん。魯肅が曰、この人は襄陽の世家龐統字は士元、道號を鳳雛先生と申す者なり。孫權が曰、われも久しく其名を聞けり、今いづくにか在、早々に呼きたれ。魯肅乃ち龐統を伴ひきたりて内に入て禮を施す。孫權その人を見るに、面黑く鼻塾げ、眉厚して髯短く、形容古怪にして男つき惡かりければ心の内よろこばず。乃ち御邊の學ぶところ如何なる藝かあると問ければ、龐統答て曰、必ず物に拘らず、機に臨んで變に應じ候。孫權また問て曰、御邊の才智周瑜に比せば如何ん。龐統が曰、某が學ぶところは周瑜と相違せり。孫權つねに周瑜を愛して及ぶ者あらじと思ひけるに、龐統今之を輕んじければ、心の内怒を含で、御邊まづ退け、重ねて用ふる時節あるべしと云ければ、龐統長嘆して外に出けり。魯肅問て曰、君なんぞ龐統を用ひ玉はざる。孫權が曰、これ狂人な

骨肉の如しと低語けり。魯肅も孔明が痛く哭を見て、心の內に哀を催し、孔明更に周瑜を害するの心なかりしに、周瑜が氣量窄して自ら死亡を取たりと思ひければ、謹んで敬ひけり。孔明わかれて岸の邊に出、すでに舟に乘んとしける所に、一人道服を被て竹の冠を戴きたる者、臂をのべて孔明を引摑み、聲を勵して曰、汝すでに周郎を氣を病せて亡し、却て喪を弔と號して此に來り、吳の國の人を明に欺て土にて作れる人形の如くす、爭か我を欺くべきとて、劍を拔て殺さんとす。魯肅後より來り、無禮するなと呼はり、誰ぞと見れば乃ち襄陽の龐統字は士元、道號は鳳雛先生なり。魯肅推とゞめ、孔明いま禮を以て此に來れり、必ず害すること勿れと云ければ、龐統劍を棄て打笑ひ、是戲なり、怪玉ふなと云けるゆゑ、魯肅わかれて囘りけり。龐統獨り孔明を送て船中に來り、共に心中の事を物語するに、孔明申けるは、われ量るに吳主孫權必ず御邊を用ひ玉はじ、若こゝに在て心に協ざることあらば、荆州に來て共に玄德を助け玉へ、玄德は寬仁の君なり、御邊きたらば必ず日比の志を遂ん、我書簡を封じて留おくべし、御邊これを以て荆州にゆけ、我たとひ居合ずとも玄德必ず用玉ふべしとて相別れ、其より孔明は四郡の巡見に出たり。吳主孫權は蕪湖と云ところまで出て周瑜が柩を迎へ、自ら祭を成て悲み哭き、周瑜が子供三人ありて一人は女なり。嫡子周循、二男周胤、共に父が柩を送

維大漢建安十五年、南陽諸葛亮、謹以清酌庶羞之儀、致祭於大都督公瑾周府君靈前曰、嗚呼公瑾不幸夭亡、修短故天、人非不傷。我君寔愛酹酒一觴、君其有靈享我蒸嘗。弔君幼學、以交伯符、仗義疎財、讓舍以居。弔君弱冠、濟會風雲、定建覇業、割據江南。弔君壯力、遠鎭巴丘、景升懷慮、討虜無憂。弔君手度、佳配小喬、漢相之埒不愧當朝。弔君氣槩、主不納質、始不垂翅、終能奮翼。弔君鄱陽、蔣幹來說、府君納舌、事主終濟。弔君弘才、文武籌略、邇々小子、心寒膽落。昭君凛凛、公獨諤々、火攻破敵、挽強爲弱。想君當年、雄資英發、哭君早逝、俯地流血。忠義之心、英靈之氣、命終三紀、名垂百世。哀君情切、愁傷千結、惟我肝膽悲無斷絕。旻天昏蕩、三軍愴然、主已哀泣、更皆淚漣。亮也不才、問計求謀、助吳拒曹、輔漢安劉、犄角之援、首尾相儔、若存若亡、何慮何憂。嗚呼公瑾生死永別、朴守其眞、冥々滅々、魂如有靈、以鑑我心。從此天下再無知音、嗚呼痛哉。伏惟、

尙饗。

孔明祭り了て大に哭き、地に伏して淚泉の如く哀慟して已ざりしかば、吳の國の將士も共に哀を催し、人皆周瑜と孔明と互に睦じからずと申けるが、今この祭の體を見るに、哭き親むこと

○孔明大哭周瑜

この時孔明はいまだ周瑜が巴丘にて死したることを知ざりけるが、夜天文を見るに、將星すでに地に落ければ乃ち大に笑ひ、周瑜今死せりとて、次の日玄德に見てその事を語る。玄德人を出して聞しめ玉へば、周瑜果して死したりと申す。玄德の曰、いま周瑜死せり、却ていかゞ計を成ん。孔明が曰、周瑜が職に代て吳の大都督となる者は必ず魯肅にて候はん、某夜天文を見るに、將星多く東方に聚る、某いま周瑜が喪を弔と號して吳の國に到り、賢人を尋て伴ひ來り、君の助と致べし。玄德の曰、先生もし吳に行ば、彼國の大將必ず害を成べし。孔明が曰、周瑜が在し時にも某なほ怕るゝ事なし、今日又何をか怕れんとて趙雲を伴ひ、五百餘騎を引て祭の具を整へ、船に乘て出けるが、途にて聞ば吳主孫權すでに魯肅を大都督とし、周瑜が柩を送て柴桑まで回りぬと申す。此に仍て直に柴桑に到りければ、番の兵いそぎ魯肅に報じ、劉皇叔いま孔明を使として周都督の喪を弔と云ければ、魯肅迎へ入て對面す。周瑜が手下の大將これを聞て、皆孔明を殺して日比の恨を雪んとしけれども、趙雲が劍を帶て立たるを見て、敢かる〳〵しく手を下さず。孔明靈前に祭を設、自ら酒を備て地に跪き、祭文を讀で曰、

三十六歳、時に建安十五年冬十二月初三日なり。諸將哀み哭き、柩を巴丘に留て周瑜が遺書を早馬打て呉主孫權に獻りければ、孫權この由を聞て涙を流して地に倒けるを、魯肅たすけ起し、遺書を開て見れば、乃ち魯肅を大都督として周瑜が職に代らしめよと也。その書に曰、

瑜伏楮、泣血頓首百拜、致書於主君明公麾下。切以凡才、昔受討逆殊特之遇、委以腹心、遂荷榮任、統御兵馬、志執鞭弭、自效戎行、先定巴蜀、次取襄陽、憑賴威靈、事在掌握。至以不謹忽有暴疾。昨自醫療日加無益。人生有死、修短命矣、誠不足惜。但恨微志未展、不復奉教命耳。方今曹操在北、疆場未靜、劉備寄寓有似養虎、天下之事、尙未知終始。此朝士旰食之秋、至尊垂慮之日也。魯肅忠烈、臨事不苟、可以代瑜之任。人之將死、其言也善、倘或言有可採、瑜死不朽矣。臨楮不勝痛切之至。

建安十五年冬十二月朔日上書

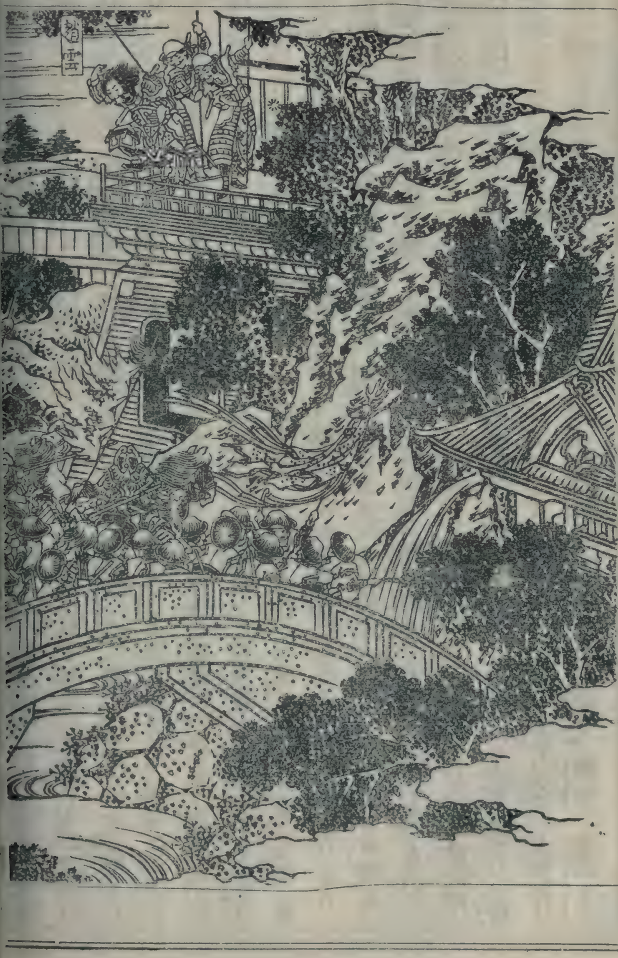
孫權見了て大に哭き、周瑜王佐の才あり、今不幸にして亡びたり、吾いまより如何せん、終に臨で魯肅を薦む、我豈從ざらんやとて、卽時に魯肅を大都督として國中の兵馬を惣領せしめ、周瑜が柩を巴丘より送り來りければ、孫權自ら半途に出て之を迎へ、涙を流して悲み哭く。

切塞だりと申す。周瑜彌怒をなし牙を咬で恨る所に、孔明使を以て書簡を送ると申す。周瑜封を開て之を見るに、其書に曰、

漢軍師中郎將諸葛亮、致書於大都督公瑾先生麾下。亮自柴桑一別至今戀々不忘。聞足下欲取西川、亮以爲必不可也。益州民強地險、劉璋暗弱足以自守。今欲擧師遠征、轉運萬里欲收全功、雖呉起不能定其規、孫武不能善其後也。操雖有無君之心、而有奉主之名、或有愚人、見操失利於赤壁、無復興遠伐之志矣。今操三分天下有其二、欲飲馬於滄海觀兵於呉會、安肯坐守中原、而老王師乎。今孫將軍興兵遠征非長計也、倘操兵一至、江南爲虀粉矣。不忍坐視、特此告知、幸垂照鑒。

周瑜見了て恨氣胸に塞り、長嘆一聲急に左右の人を呼で紙筆を求め、手づから遺書を封じて呉主孫權に獻らしめ、諸の大將を集て曰、われ忠を盡して國に報ずることを思はざるに有ず、如何んがせん天命すでに盡たり、諸將よく力を盡して君に事へ、共に大業を成たまへと云訖り、昏絶して目を塞ぎけるが、忽ち又苦しげに息を繼、天を仰で長嘆し、天すでに周瑜をこの世に生じ玉ふ、何ゆゑに又孔明を生じ玉へると云て、聲を放て大に叫び、忽然として命終れり。壽

孔明が智周瑜の計を挫く
玄徳
孔明
張飛
周瑜


趙雲

明軍師すでに御邊の假途滅虢の計を推量して、我を此城に留め置玉へり、我君は是漢室の宗親、いづくんぞ義に背て蜀の國を取ん、御邊端的もし蜀の國を取ば、吾髮をさばきて山中に身を藏し、天下に信を失ふまじ。周瑜これを聞て計の顯れたるに驚き、急に馬を引回さんとすれば、一人令の字の旗を指たる者はせ來り、今巡警の勢をして窺しむるに、關羽は江陵より攻來り、張飛は秭歸より攻來り、黃忠は公安より攻來り、魏延は孱陵の小路より攻來り、四方の軍馬その多少は知ず、喊の聲遠近に響て四方百餘里を震動し、皆周瑜を生取にせよと呼はり候と告ければ、周瑜これを聞て馬上にて大に叫び、金瘡こと〴〵く破て馬より倒に落、血を吐て絕入しかば、諸將急に救て船中に回り、わづかに人心地付ける所に忽ち一人走り來り、玄德、孔明前なる山の頂に在て酒を飲樂を成と告ければ、周瑜彌怒て牙を咬齒を切り、己等われを輕んじて蜀の國を取こと能まじと云、われ必ず誓て取べしとて拳を握て恨る所に、吳主孫權弟孫瑜を大將として助の勢を指向たり。周瑜よび入て對面し、右の事共を語りければ、孫瑜申けるは、われ兄の命を受こゝに來て御邊の力を助んとす、この儘にては叶ふまじ、暫く引退き玉へとて、先手の勢を下知して已に巴丘まで來りけるに、斥候の士卒、向に大勢の見ゆるは敵の勢にあらずやと呼はる。孫瑜よく〳〵是を聞ば、荊州の大將關平、劉封二人江上を

れば、糜竺が曰、主人すでに金銀兵糧を用意して諸軍勢の勞を慰せん爲に續てこの所へ運び來り候。周瑜が曰、皇叔は今いづくに居玉ふぞ。糜竺が曰、すでに荊州の城を出、足下の來り玉ふを待て酒を進んと欲す。周瑜が曰、いまわが國の大軍を起すは皇叔の爲に蜀を取て進せん爲なり、諸軍みな遠路に疲る、必ず重く持成て輕々しくし玉ふこと勿れ。糜竺わかれて回りければ、周瑜陸に上て兵船を江上に備へ、諸軍次第を守て已に公安まで來り、其邊を窺はせけるに、一艘の舟も見えず、又出て迎る人も無りければ、徐々と進で早荊州の城までは十里あまりに成ぬとて遙に向を見渡すに、靜々として人ひとりも見えず。先手に進んだる斥候の兵馳かへり、荊州の城を見候へば白旗二流立て人ありとも見えず候と申す。周瑜心あやしみ、岸の邊に船を留て甘寧、徐盛、丁奉等を從へ、精兵千餘騎にて直に荊州の城下に到りけるに、出合人も無りしかば、周瑜馬を勸め兵に命じて門を開けと呼はらせければ、內より問て曰、こゝに來るは何ものぞ。吳の兵答て曰、これは吳の國の大都督周瑜なり。その詞いまだ了らざるに、一聲の梆子を鳴して城の上なる白旗を推たふし、紅の旗を二流指あげ槍を揃へ戈を雙べて、大將趙雲高櫓にあがり、大音にて問て曰、周都督いかなる故ありて來り玉へる。周瑜答て曰、われ皇叔の爲に蜀を取て進せんと約せり、此故に此に來れり、御邊怪で問は何ゆゑぞ。趙雲が曰、孔

計を以て安んぞ能小兒をも欺き得ん。玄德の曰、その故を聞ん。孔明が曰、これ古の假レ途滅レ虢の計なり、周瑜いま蜀を攻るを名として實は荊州を取ん爲なり、君もし城を出て吳の軍勢を持成玉はゞ、勢に乘て生取奉り、備なきを攻て不意に荊州を取んとす。玄德の曰、しかる時は如何んせん。孔明が曰、御心を安んじ玉へ、われ必ず收二拾窩弓一、以擒二猛虎一、安二排香餌一、以釣二鰲魚一、周瑜もし此に來らば、假令死せずとも九分は魂を失ふべしとて、趙雲を呼でひそかに計を授け、自ら備を成て相待ければ、玄德深く喜び玉ふ。魯肅は舟を飛せて柴桑に回り周瑜に見て、玄德、孔明大に喜び、吳の國の軍勢荊州を通ば、必ず自ら出て持成んと申し候と語りければ、周瑜手を打て笑ひ、この度又孔明を欺き得たり、御邊は南徐に行てこの趣を吳侯に訴へ、諸方の城に用心の勢を籠て、又程普を大將として大軍を備へ、我を助て後陣とし玉へと云ければ、魯肅別て出にけり。この時周瑜が矢瘡大半平癒して、已に白痂を揭げ膿水も止りて一身無事なりしかば、甘寧を先手とし自ら徐盛、丁奉を引て中軍に備へ、淩統、呂蒙を後陣として水陸の勢五萬餘騎、二手に分れて荊州に進發し、周瑜二萬五千の兵を引て船手より向ひ、心の内しすましたりと歡び、笑ひ樂んで已に夏口まで來り、この邊に迎に出たる人やあると尋させければ、忽ち劉皇叔より糜竺と云もの使たりと報ず。周瑜よび入て對面しけ

の長者なり、我安んぞ輕々しく蜀を攻取ことを得ん、只蜀を取を名として實は荊州を取ん爲なり、われ蜀を攻ると云て大軍荊州の道を通ば、玄德必ず出むかへて持成べし、其時兵粮武具なんどを乞求め、直に城下に推よせ、其備なきを攻ば荊州を取んこと掌にあり、然る時は我平生の恨を雪ぎ御邊の難をも救べし。魯肅大に喜び拜謝して又荊州に行ければ、玄德あやしんで孔明に問玉ふ。孔明が曰、これは魯肅いまだ吳侯孫權に見ず、只柴桑に回りて周瑜と計を定め、今又こゝに來れる者なり、君たゞ某がうなづくを見て領承し玉へとて、共に出て迎へければ、魯肅内に入て禮了、某國に回りて皇叔の哭き玉ふ由を語りければ、主人孫權甚だ盛德を感じ、諸大將と評議を成て兵を起し、蜀を取て皇叔に引出物せんと欲す、若蜀の國を取て進せば、早々に荊州を返し玉へ、我國の大軍この道を通ば願くは些の兵粮武具を接應して遠路の疲を勞ひ玉へ。孔明急に點頭て申けるは、古より非レ親不レ解二其禍一と云り、是まことに吳侯と一家の好を結ぶ故なり。玄德謝して宣ひけるは、是皆魯肅の御恩なり、詞を以て安んぞ謝することを得ん。孔明が曰、もし吳の國の軍勢蜀に向ば必ずこの地を通らん、我自ら遠く出て持成べし。魯肅心の内ひそかに喜び、別て柴桑に回りければ、玄德乃ち孔明に問て曰、今蜀を取て我に與んと云は如何なる故ぞ。孔明大に笑て曰、周瑜が死ぎは近付たり、これ等の

はくは國に囘て吳侯に見え、一言の勞を辭せず皇叔の痛く哭玉ふ由を語り玉へ、然る時は吳侯定めて怒り玉はじ。魯肅が曰、吳侯もし從はずんば如何ん。孔明が曰、吳侯すでに妹を以て皇叔に妻あはせ玉へり、安んぞ從ひ玉はざるの理あらんや、願くは御身よく此事を料ひ玉へ。魯肅は本より寛仁の長者なれば、玄德の痛く哭き玉ふを見て兎角の議論にも及ばず、酒宴已で歸りければ、玄德、孔明拜謝して送り玉ふ。魯肅は船を解て直に柴桑に到り、周瑜に逢て右の趣を告ければ、周瑜大に驚て曰、御邊又孔明が計に出拔れ玉へり、昔し玄德が劉表に身を寄て在し時、常に國を奪はんとするの意あり、何に況んや蜀の劉璋をや、何ぞ漢室の宗親なるを思うて取ずと云の理あらんや、只なにとぞして事を託、了に荊州を返さじとするもの也、もし荊州を返さずんば御邊必ず君の怒に遭玉はん、吾一つの計あり、孔明を賺し得べし、御邊再び荊州に行玉へ。魯肅が曰、ねがはくは計を聞ん。周瑜が曰、御邊又荊州に行て、已に妹を以て壻とする上は是便ち一家の好なり、若蜀の劉璋は漢室の同宗なるを以て國を奪に忍玉はずんば、我吳國の勢を起し蜀を攻取て婿引出物に進すべし、其後必ず荊州を返さるべしと云玉へ。魯肅が曰、それ蜀の國は天下無雙の難所にして、殊に遙々人の國を經て向ふことなれば、安んぞ容易に攻とることを得ん、この計無用にあらずや。周瑜あざ笑て曰、御邊は眞に篤實

荆州の事を申し出さば、君兎角の對を云ず、大に聲を放て哭き玉へ、君の悲んで深く哭き玉ふ時、某自ら出て計を成ん。玄德乃ち出むかへ、魯肅を堂上に請じて坐を讓り玉ひければ、魯肅が曰、皇叔は吾國の壻なれば、某が爲にも主君なり、安んぞ坐に就べき。玄德の曰、なにゆゑに謙退し玉ふ、舊交を思ふゆゑなり。魯肅了に側に坐し、茶禮畢て申けるは、某いま吳侯の命を受、專ら荆州の事を申さん爲に來りたり、已に久しく借玉ひて今に至るまで還されず、今日一家の好を結びしことなれば、早々に快く返し玉へ。玄德聞もあへず面を掩て大に哭き玉へば、魯肅驚て問て曰、皇叔なにごとをか哭玉ふ。玄德聲を放ていよ／＼悲み玉ふ所に、孔明屏風の後より出て曰、われ先より能聞り、魯肅わが君の哭き玉ふ仔細を知玉ふか。魯肅が曰、某いまだ知ず。孔明が曰、われ願くは其仔細を述ん、我君さきに荆州を借玉ふ時、蜀の國を取て後に返さんと約せり、然れどもよく思ふに蜀の劉璋は漢朝の骨肉、わが君と兄弟の如し、若兵を起してその國を奪ひ取ば、天下の人唾を吐て罵るべし、若又荆州を返し蜀の國をも取ずんば、何の所にか身を處ん、若荆州を返さざれば吳侯の怒玉はんことを思ふ、是ゆゑに事二つながら難し、此に依て淚を流して哭き玉ふと云ければ、玄德又胸を搥て大に悲み、聲を放て哭玉ふ。魯肅坐を起て曰、皇叔さのみ哭き玉ひそ、某孔明と宜く事を議せん。孔明が曰、御身ねが

元わが國たるべきを玄德に奪ひ取れ、今天子詔を下してわれを南郡の太守に封じ玉ふと云ども、一寸の地をも得こと能ず、早く荊州を取返して日比の恨を散ぜんとて、其身は瘡を養て柴桑に在ながら、書簡を以て吳主孫權にこのことを報ず。孫權は南徐に在て其書簡を披き見、いそぎ魯肅を呼で曰、汝向に荊州を取返さんと云て、玄德孔明に出ぬかれたり、今玄德わが妹の壻となりて、彌荊州を返ことなし、汝これを如何んとかせん。魯肅が曰、某向に玄德、孔明と約を堅して證文を取きたれり、蜀の國を取て後に荊州を返さんと云り。孫權大に叱て曰、もし蜀を取て後に返さんと云ば、何れの年にか返すべき、徒に日月を送ばわが一生の中に荊州を取こと能じ。魯肅が曰、某ねがはくは再び荊州に渡り早く之を取返さんとて、了に船に乘て出にけり。この時玄德は荊州に在て夥しく兵粮を貯へ、軍馬を調練して博く賢人を求玉ひければ、四方遠近これを聞傳てわれも〳〵と馳まゐる。浩る所に吳の國より魯肅來れりと告ければ、玄德乃ち孔明に問て曰、いま彼が來るは何ゆゑぞ。孔明が曰、孫權さきに君を荊州の太守に薦む、是曹操が隙を窺んことを畏れて也、曹操いま周瑜を南郡の太守とす、是又荊州を爭はせて中にて計を成ん爲なり、魯肅が來れるは周瑜すでに南郡の太守に封ぜられて、又荊州を奪ひ取んとするの意を起せり。玄德の曰、然る時は我いかゞ對べきぞ。孔明が曰、魯肅もし

曹操が曰、しかる時は如何なる計をか用ふべき。程昱が曰、某一つの計あり、玄德と孫權とに合戰させて、御方中より攻る時は、二人を滅さんこと一擧にあり。曹操大に喜て曰、われ南方を討んと思へども、玄德、孫權が力を合せて防んことを畏る、汝いかなる計かある。程昱が曰、吳の孫權が賴ものは周瑜なり、丞相いま天子の勅命なりとて周瑜を南郡の太守に封じ、程普を江夏の太守に封じ、華歆を朝廷に留めて重く用ひ玉ひなば、周瑜、程普わが封ぜられたる城を取んとて又玄德と荊州を爭ひ、必ず合戰に及ぶべし、其時虛に乘て別に良圖を成ば忽ちに打滅さん。曹操甚だ喜び、この計わが心に合へりとて、卽時に華歆を臺上に呼のぼせ、重く恩賞を與て大理寺少卿に封じ、詔を申し下して周瑜を總領南郡の太守に封じ、程普を江夏の太守に封じ、勅命を傳て吳の國へ使を馳、酒宴數刻に及て諸大將を引具し、皆許昌へぞ囘りける。

○孔明三氣死周瑜

去ほどに勅使詔を傳て吳に下り、周瑜を南郡の太守に封じ、程普を江夏の太守に封じ玉ふと云ければ、二人謹で詔を受、恩を謝して勅使を囘しけるが、周瑜心に思ひけるは、荊州は

て、我封ぜられたる武平侯の國に囘んと願へども、若手下の兵を棄ば人に害せられんことを畏るゆゑに、又子孫の爲を計り、萬一人に害せられば漢の天下も隨て滅なん、是ゆゑに已ことを得ずして兵を司る、汝等文武の諸將必ず我この心を知まじと云ければ、諸將みな拜伏し、伊尹、周公と云とも丞相の德に及び候はじとぞ申ける。曹操又數杯を傾け覺ず大に醉ければ、左右に命じて筆硯を取よせ、我も自ら銅雀臺の賦を作らんとて雲箋を推のべ、「吾獨ニ歩於高臺ニ兮、俯ニ觀萬里之山河ニ」と云二句を書ける所に、忽ち人あり、吳の孫權いま華歆と云ものを使とし、天子に表を上て玄德を荊州の太守とし、妹孫夫人を以て妻あはせ、荊州九郡大半すでに玄德に屬せりと告ければ、曹操手脚を張て大に驚き、覺ず筆を落したりしかば、程昱が曰、丞相敵軍の中に在て矢に中り石に打れ玉ふ時も嘗て心を動し玉はず、いま玄德が荊州を得たるを聞て何ゆゑに斯以ての外に驚き玉ふぞ。曹操が曰、玄德は人中の龍なり、平生いまだ水を得ず、今荊州を得て龍の大海に入たるが如し、我なんぞ驚ざらん。程昱が曰、丞相いま華歆が來りたる本意を知玉ふか。曹操が曰、われ其ゆゑを知ず。程昱が曰、吳の孫權元より玄德を憎む、若兵を起して之を攻ば、丞相の虛に乘て擊玉はんことを畏る、孫權いま華歆を使として玄德を太守に封ぜんと奏するものは、一つには玄德が心を安んじ、二つには丞相の望を塞ん爲なり。

萬餘人が首を切、後に袁術を討て其四人の大將を擒にし、袁紹を破てその二人の子を誅し、劉表を定て荆州を摧き、位すでに宰相に登りたれば、人臣の富貴身に極まり、意の願已に過たり、天下もし我なくんば、國々に謀反して帝王と稱する者豈かぞふるに暇あらんや、或は人あり、我權重く位高きを見て天下を簒の心ありと云、これ大亂の道なり、齊の桓公、晉の文公よく後代に名を傳るものは、其身勢大にして猶周室に事るゆゑなり、孔子の曰、周文王三分天下有其二、以服事殷、周之德其可謂至德也已矣、それ能大なるを以て小なるに事る、此を耿々在心と云、又樂毅が傳を讀に、昔日樂毅趙に皈る、趙王兵を起して共に燕を伐んとす、樂毅地に拜伏し涙を流して申けるは、臣昔日燕王に事る猶大王に事るが如し、寧死すとも不義の事をせじと云へり、又蒙恬が傳を讀に、胡亥昔日蒙恬を殺んとす、蒙恬が曰、わが父祖及び子孫に至るまで德を秦に積こと三世なり、吾いま手下に精兵三十萬を集たり、之を以て謀反せば胡亥われを如何んとかし玉はん、然れども必ず死して義を全するものは、敢て父祖の教を辱しめず、又先君の恩を忘ざる也と云へり、我此二人の書を讀で感嘆して涙を流ずと云ことなし、我いづくんぞ簒逆の心あらんや、今日の言は皆これ肝膽を吐の誠なり、右ねんごろに語る仔細は、昔し周公金縢の書を遺して自ら明め、人の信ぜざらんことを恐れ玉ふ、我いま集る所の兵を棄

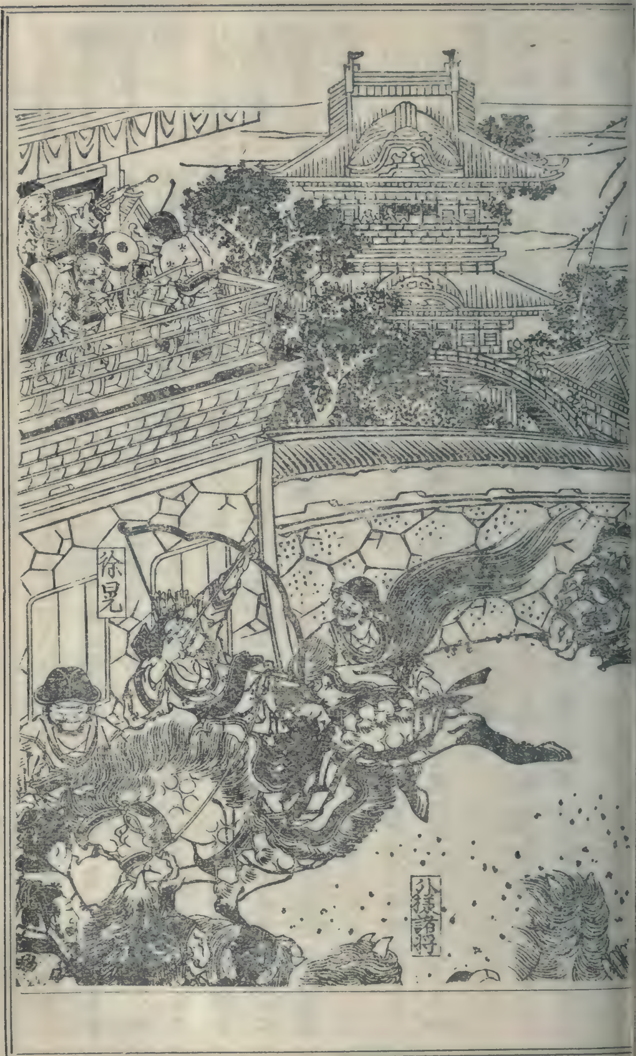
曹操大に喜び、玉爵を以て酒を賜ひ、乃ち其玉爵を恩賞に與へければ、王朗拜謝して退ところに、又一人すゝみ出て曰、老臣も願くは俚語を獻ん。曹操これを見れば東武亭侯侍中尚書左僕射、潁州長社の人に鍾繇字は元常とて、善隷書の妙を得たる者なり。乃ち七言八句を書して曰、

銅雀臺高接上天　凝眸覽遍舊山川
欄干屈曲留明月　窓戸玲瓏壓紫烟
漢祖歌風空擊筑　定王戲馬謾加鞭
主人盛德齊堯舜　願樂昇平萬々年

曹操これを見て限なく喜び、御邊の佳作われを過譽すること太しと云て重く恩賞を與へ、又諸大將に申けるは、われ本愚庸にして才淺ければ始め孝廉に擧られ、微名を世に立る時は望足りと思ひしに、後に天下の大亂に逢て病を養ん爲に故鄕に回り、譙東の五十里に精舍を築き、夏秋は書を讀、春冬は獵を成、二十年の計を爲て身の難を遁れ、天下の治るを待て又仕官せんと思ひしに、了に某が心に任せず、朝廷徵て點軍校尉となし玉ふ、是ゆゑに專ら國家の爲に逆賊を誅し、功名を世に傳て、死して後にも墓を封じて漢故征西將軍曹侯の墓と呼れば先祖をも辱しめじ、平生の願も是まで成んと思しに、又董卓が難に遭て義兵を舉、黃巾の亂を平げて一

手に其弓を握り、右の手に徐晃を摑で已に引落さんとしければ、徐晃弓を棄て馬より飛おりて逃んとするに、許褚もつゞいて馬より下、二人引組で錦を挽合散々に打擲す。曹操臺の上より之を望み、人を出して兩方へ引のけしむる時、彼錦は已に微塵に成けり。曹操二人を臺上へ呼上せけるに、徐晃は目を怒して拳を握り、許褚は牙を咬眉を竪て共に爭んとする氣色に見えければ、曹操大に笑ひ、我今日汝等が藝を試んと欲す、何ぞ錦の袍を惜んやと云て文武の大將を盡く臺上へ招き上せ、蜀江の錦一疋づつを分與へ、位階に依て列坐し、水陸の珍味を羅て、音樂天に響き、酒宴數刻に及びければ、曹操申しけるは、武將は已に弓馬を以て能を顯せり、文官の者共は皆博學の名士なるに、此臺上に登て何ぞ佳章を賦して一時の勝事を記せざると云ければ、諸の文官坐を起て之を謝し、願くは鈞命に從はんと云て互に相讓りける時、一人すゝみ出て曰、某不才に候へども願くは銅雀臺の詩を獻らん。曹操これを見れば、乃ち諫議大夫參司空軍事、東海郯の人に王朗字は景興なり。雲箋を拂て七言を綴る。

銅雀臺高壯帝畿　水明山秀競光輝　三千劍佩趨黃道
百萬貔貅現紫微　風動繡簾金鳳舞　雲生碧瓦玉龍飛
君臣慶會休辭醉　携得天香滿袖皈


徐晃

許褚
曹氏一族

我手柄の程を見よやと叫ぶ。諸人これを見れば河間の張郃なり。馬を飛して往來し、後ざまに成て射たりければ、其矢あやまたず心當にあたりて、四度放に一つも迯ざりしかば、張郃大音あげ、誰か我に及ぶ者あらん、錦を渡せと呼はる所に、又紅の袍を被たる中より一人馬を馳出し、御邊後ざまに四筋の矢を射中たりと云ども、いかでか我に及ぶべきと呼はる。諸人これを見れば夏侯淵なり。馬を飛して往來し、彀よく成ける時首を回して後ざまに射る。其矢あやまたず向に張郃が射たる四筋の矢の眞中に立ければ、馬を躍せ大音あげ、いかに錦の主は我にあらずやと云ける時、諸人感稱して金鼓を鳴しければ、又緑の袍を被たる中より一將をめいて馬を出し、御邊錦を取こと勿れ、留て我に還せと呼はる。諸人これを見れば大將徐晃なり。鳴を靜めて見居たれば、徐晃大音聲をあげ、汝等心あてに射中たればとて安ぞ錦を取ん、我よく錦を取を見よやと云て、引つめて丁ど放つ。其矢はるかに柳の條を射切て錦の袍地に落ければ、走り寄て背に打かけ、馬を飛して馳まはり、臺上を望み見て丞相の賜を謝し奉ると呼はりければ、諸人みな驚ところに、忽ち臺の下より一人馬を躍せ聲をあげ、汝錦を取ていづくへかゆく、早々に我に與へよと叫ぶ。諸人これを見れば譙郡の許褚なり。直に馬を飛して錦を奪はんとすれば、徐晃奪はれずと逋まはり、相近に成ければ弓を以て散々に許褚を打。許褚左の

て曰、もし楊に掛たる袍の赤き心あてを射たる者あらば、金を鳴し鼓を撃て聲を合せ、乃ち其袍を恩賞とすべし、若射損じたる者には水を飲せて罰すべし、よく射る者は之を射よ、射ること能ざる者は罰盃を飲。その言いまだ了ざるに紅の袍を被たる中より一人弓を取て馬を出す。諸人これを見れば乃ち曹操が姪に曹休字は文烈なり。往來馬を飛せて走ること三遭にして、能挽て丁ど射る。その矢直中に當ければ、堂上堂下あ射たり〳〵と感じて金鼓を鳴す。曹操も大に喜て、これ我家千里の駒なりと云ければ、近侍の人楊に掛たる錦を取て曹休に與んとするに、忽ち綠の袍を被たる中より一將馬を馳出し、これは丞相の錦なり、一族の中よりは取玉ふこと勿れ、某に渡し玉へと呼はりて馬を飛して馳まはる。諸人これを見れば、乃ち荊州の大將に文聘字は仲業なり。一矢見んと望みければ、文聘馬をかけすゑ、兵と射る。其矢たゞ中に當りければ、金鼓を鳴して感稱す。文聘大音あげ、快く楊に掛たる錦を我に渡し玉へと呼はりければ、又紅の袍を被たる中より一人馬を飛して蒐出、小將軍すでに射あて玉へり、汝奪はんと云は何ごとぞ、我手なみの程を見よやと云て、引つめてはたと射る。諸人聲を揃て感嘆し、誰ぞと見れば曹操が從弟の曹洪なり。走り寄て楊に掛たる錦を奪はんとすれば、又綠の袍を被たる中より一人の大將馬を出し、汝三人心當に射中たりと云ども、何ぞ奇妙とするに足んや、

○曹操大宴銅雀臺

赤壁の合戰に曹操が百萬の勢のこりなく討れければ、纔に命を逃れて都に回り、常にこの恨を雪んと思へども、軍勢いまだ整ず。又は玄德、孫權力を併せて防んことを怕れ、時を待て居たりけるが、建安十五年の春銅雀臺の造營事了ければ、文武の大將を鄴城にあつめ、酒宴を設て慶をなす。抑この臺と申は、曹操往年袁紹を滅して後、銅の雀を地中より掘出し、漳河の邊に高き臺を建て之を銅雀臺と號し、左に玉龍臺を建、右に金鳳臺を建、みな高さ十餘丈にして、空中にそり橋を掛て往來を通じ、千門萬戶金碧目に耀き、直欄横檻珠玉日に映ず。此日曹操七寶の金冠を戴き、綠錦の袍を被て腰に玉帶を繫、足に珠履を踏で高臺に上りければ、文武の大將こと〴〵く臺下に侍立す。曹操まづ諸將の弓を試んとて赤地の錦の袍を高き楊の枝に掛、あはひ百步を隔て二行に諸大將を備へ、曹氏の一族はみな紅の袍を著し、外様の諸將はみな綠の袍を著す。盡く馬に騎て雕弓に長き箭を取そへ、一齊に備ければ、曹操下知を傳へ

るべき人を擇で都に上せ、間諜の計を用て玄德と曹操と常に不和なるの方便を成しめ、緩々と計を用ひば後必ず荊州を奪べし。孫權が曰、汝が計わが心に合へり、誰人をか用ふべき。顧雍が曰、平原高堂の人に華歆字は子魚と云ものは、元より曹操が爲に愛せらる、この人を用ひ玉へ。孫權大に喜び、華歆を召て密に間諜の計を命じければ、華歆即時に打起て直に都へぞ上りける。

兵と呼はらせ、一同に笑ひければ、周瑜これを見て心怒り、やすからぬこと哉、再び舟を岸に著よ、陸に上て一軍せんと云けるを、黄蓋、韓當、推留め次第々々に隔たりければ、周瑜諸將に向て曰、われ今なんの面目ありて再び呉侯に見んやとて一聲大に叫けるが、金瘡ことごとく破れて船の上に倒れ、血を吐て絶入ければ、諸將扶け起して柴桑まで回りけり。孔明は呉の勢の逃回るを見て玄德を守護して荊州に回り、諸軍に恩賞を施して慶こと限なし。蔣欽、周泰等は周瑜を救て柴桑まで回り、南徐に來て呉主孫權に右の事共を告ければ、孫權大に怒り、程普を大將軍とし國中の勢を盡く起して荊州を攻んと議しける所に、周瑜又書簡を獻り、早く兵を起してこの恨を雪玉へと勸む。張昭これを聞て深諫、いま曹操つねに赤壁の恥を雪んとて兵を集と申せども、君又玄德と力を合して共に之を防玉はんことを畏て、いまだ輕々しく寄來ず、今もし一旦の怒に因て玄德と戰を成玉はば、曹操必ず虛に乘て攻來ん、君いかゞして防玉ふべきと云ければ、孫權が曰、しかる時は如何すべき。顧雍が曰、この國の內必ず曹操が細作あらん、若君の玄德と不和なるを聞ば、曹操必ず玄德と好を結ん、玄德又呉を怕れて必ず曹操に從べし、然る時は吾國甚危し、不如使を以て都に表を上せ、玄德を荊州の太守に封じて曹操に知しむる時は、曹操必ず攻來ことなく、玄德これを聞ば喜で吾國を恨ること無るべし、只しか

さして曰、われ已に計を定て國に回る、汝等速に去て周瑜に此由を申せ、再び美人を以て人を釣の計を行こと勿とて同音に咄と笑ひければ、岸の上より雨のふる如く箭を放と云ども、已に順風に帆を揚たれば、舟の快きこと飛が如し。吳の大將すべき樣なく、岸に傍て馬を早むる所に、忽ち大波逆捲あがりて喊の聲響ければ、孔明これを見るに同じ追風に帆を揚たる兵船數百艘、中央に帥の字の旗を建て周瑜自ら眞先に進み、左に黃蓋右に韓當、其勢飛馬の如く、速なること流星に似たり。揉に揉て追かけしかば、孔明御方を下知して盡く岸に登り、舟を棄て陸路より走る。周瑜も是を見て速に岸に上り、馬に打のりて追掛ければ、黃蓋、韓當、徐盛丁奉飛が如くに馬を早め、諸の軍勢は過半步立にて相つゞく。周瑜馬上にて問て曰、この所はいかなる所ぞ。軍士答て曰、前は乃ち黃州の界なり。周瑜いよ〳〵馬を早め已に追付んとする所に、忽然として鼓の聲天地を碎き、一彪の軍馬山の陰より討て出、眞先に進は玄德の弟關羽なり。周瑜大に驚て急に退かんとすれば、關羽八十二斤の青龍刀を舞して勢に乘て斬てかゝる。周瑜手足を張て怕れ慄き散々に走る所に、又左より黃忠右より魏延二手の勢討て出、勢に乘て四角八方へ蒐ちらしければ、吳の勢のこり少に討れ、周瑜も身に矢を射立られて這々舟に取のりければ、孔明御方の勢を下知してこと〴〵く大音あげ、周郎妙計高二天下一、陪二了夫人一、又折

ば、徐盛、丁奉は柴桑に囘り、蔣欽、周泰、陳武、潘璋は大軍を引て飛が如に追かけたり。玄德は夫人と共に路を急ぎ、已に柴桑を打過て劉郎浦と云ところに出、岸に傍て渡を求玉ふに渺渺たる江水大波天を拍て舟一艘も見えざりしかば、如何すべきと仰天し玉ふ。趙雲つゞいて馳來り、君虎口の危を逃れて此ところまで來り玉へり、某量に孔明軍師必ず宜き計あらん、少しも憂玉ふなと慰しかども、玄德默然として心の内に吳に在し時の繁華を思ひ、覺ず涙を流して趙雲先に進んで渡の舟を尋よと云玉ふ所に、後より馬烟を立て追手の勢きたれりと躁ぐ。玄德山に上て望玉へば、騎馬の大勢飛が如に出きたる。玄德大に哭き、此間の疲に因て人馬共に物の用に立がたし、追手の大勢又きたれり、如何せんとて身を揉玉ふ所に、早喊の聲耳根に響ければ、諸軍皆逋散んとするに、忽ち江の内より二十餘艘の快舟帆を引て岸に近付たり。趙雲が曰、これこそ天の助なれ、早くこの舟にのらせ玉へとて皆われ先にと乘ければ、忽ち頭に綸巾を戴き身に道服を被たる人舟底よりはひ出、手を撫て大に笑ひ、皆々心を安んじ玉へ、某ここに在て久しく相待と云ければ、玄德これを見玉ふに乃ち諸葛孔明なり。其外荆州の舟手の勢商人に身を出立、夥しく舟底より出たりしかば、玄德再び生たる心地して已に舟を推出せば、時を遷さず追手の勢岸に臨み、その舟かへせと聲々に呼はりける。孔明あざ笑て岸上の人を指

潘璋等こと〲く地に跪て、心の内に思ひけるは、夫人は是呉侯と骨肉の兄弟にして、母の許を受て荆州に赴き玉ふ、況や呉侯は大孝行の人なり、假令その心に如何思ひ玉ふとも、母の命とあらんには背き玉ふこと有べからず、吾等かる〲しく生取て萬一呉夫人の怒に遇ば、いかゞして身を全せん、況や玄德はこの中に見えず、又趙雲が目を怒したる氣色怕ろしければ、四人の大將たがひに面を見合て徐々と引退く。孫夫人車を推せて通ければ、四人の大將兵を收め、これより柴桑も程近ければ、先馳ゆいて周瑜にこの由を告んと議して、猶々豫々せる所に、忽ち一手の軍馬その勢恰も旋風の如く馬を飛せて馳來れり。諸人これを見れば乃ち蔣欽、周泰二人なり。馬上より問て曰、いかに玄德が行方を知玉はずや。四人の大將答て曰、今朝すでに此所を逃去れり、今は遙に落のびぬらん。蔣欽驚て曰、諸大將なにゆゑに生取玉はざる。四人の大將答て曰、孫夫人母の許を受たりと宣へり、この故に生取ことを得ず。蔣欽が曰、呉侯すでに此の如ならんことを料て某二人に御劍を賜はり、先妹を斬て次に玄德を殺せと命じ玉ふ。四人の大將驚て曰、すでに遠く落のびたり、如何して追付ことを得ん。蔣欽が曰、玄德が勢は大半步武者なり、吾等馬を飛せて卽時に追付べし、徐盛、丁奉二人は早く柴桑へ回て周瑜にこの事を告、快舟を馳て向より廻り玉へ、我等四人は馬を早めて後より追かけんと云けれ

して飛が如に通ければ、徐盛、丁奉再び馬に打のり、我等は臣下の身なり、爭か夫人を生取んや、殊に趙雲が眼ざし偏になで切にせんとするの氣色あり、去來や囘んと云て五六里ばかりも來りければ、陳武、潘璋二人兵を驅て飛が如に馳來る。徐盛、丁奉右の趣を審に語りければ、陳武、潘璋が曰、なにゆゑに取にがし玉へる、我等二人は吳侯の命を受て追きたれり、早く追つめて生取んとて四人兵を一手に合せ、鞭を加へて追かくる。玄德は已に難をのがれ車に傍て馳玉ふ所に、又後に喊の聲して大軍間近く追きたる。玄德怕れ驚き孫夫人に向て曰、追手の勢馳來れり、如何してのがるべき。孫夫人申けるは、君早く兵を引て落玉へ、われ趙雲と追手を防ん。玄德乃ち五百の兵を引て江に傍て馳玉ひしかば、趙雲馬を躍せ車を留て追手を待。追手の勢すでに近付ければ、四人の大將はるかに孫夫人を見て皆馬より飛おり叉手して立。孫夫人問て曰、汝等こゝに來るは如何なる故ぞ。陳武、潘璋答て曰、某二人吳侯の命を受、夫人と玄德とを請て囘ん爲なり。孫夫人大に怒て曰、汝等逆賊、やゝもすれば我骨肉の間を阻妨ぐ、我すでに玄德に事て今日國に囘らんとす、是私に走るにあらず、母の命を受て夫婦共に荊州に去、だれか能阻て止ん、假令吳侯孫權自ら出來り玉ふとも宜く禮を將て對面あるべきに、汝等四人みだりに兵權を放にし、無禮を成て主從の法を亂る、必ず謀反を巧ならんと罵ければ、陳武、

に別れんことを哀み、共に國に囘て素の志を遂ん爲なり、今又孫權跡より追かけ、周瑜又行先を塞で討止んとす、夫人にあらずんば如何して此禍を逃れん、若許容し玉はずんば、吾いま車の前に自害して志を顯さんと云玉へば、孫夫人怒て曰、わが兄すでに我を實の妹とせず、我なんの面目あつて再び國に囘んや、今日の危は我自ら救べしとて、急に車を推せて進出、簾を捲あげて徐盛、丁奉を散々に罸、汝等なんぞ無禮なる、謀反せんとの心かと云ければ、二人あわてゝ馬より下、武具を地に棄て申けるは、某等いかでか謀反を企べき、周瑜の命に因て玄德を生取ん爲なり。孫夫人大に怒て曰、周瑜賊匹夫反逆を企てんとするか、何とて國の恩を忘たる、玄德は大漢の皇叔にして、今すでに我夫たり、われ母に見て許を受、共に荊州に囘んとす、是私に走るにあらず、汝等二人山際に勢を揃てこの路を塞んとするは、吾夫婦を擒にして財寶を奪はんとの巧なるかと聲を揚て罸ければ、徐盛、丁奉頭を地に附て曰、ねがはくは夫人怒を休玉へ、素り某等が知ことにあらず、周瑜の下知を受て已ことを得ずして此の如し。孫夫人いよ〳〵叱て曰、汝等は偏に周瑜を怕れて、何とて我を怕れざる、周瑜もし汝等を殺さば、我豈周瑜を殺さゞるべけんや、早々に囘てこの由を申せ、吾いま夫婦荊州に囘る、汝等が知ことにあらず、わが兄孫權も常に甚だ我を怕る、何に況や周瑜匹夫をや、急ぎ車を早めよと下知

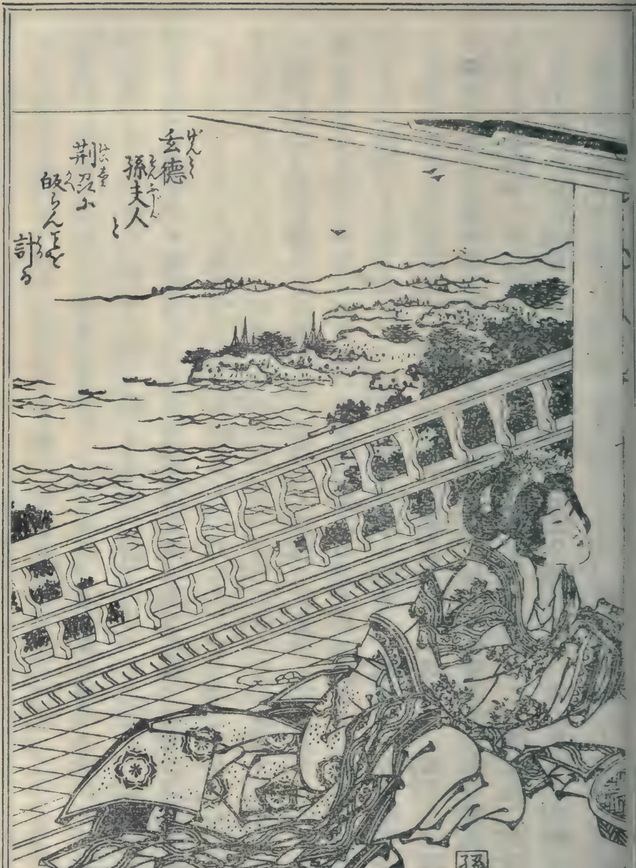
瑜が計にて玄德を取逃さんことを畏れ、兼て孫權に告て諸所の舟手に番を付て、割符あらざれば一艘も舟を出さず。又陸路より逃んことを畏て徐盛、丁奉二人に三千餘騎を付、要害に陣をとり山の頂に斥候を置て、玄德もし陸路より走らば必ずこの路を通らんと申けるゆゑ、徐盛、丁奉怠ず用心する所に、忽ち斥候の兵はせ來り、只今大勢の道を早めて通るは必ず玄德にて候はんと申す。二人大に笑ひ、さればこそ周瑜の計に出でず、忽ちに生取んとて馬に飛のり、兵を引て道を塞ぐ。玄德色を失ひ、前後敵ありて進退すでに谷まれり、如何すべきと問玉へば、趙雲が曰、君少も患玉ふな、孔明軍師先に三條の妙計を授け玉ふ、已に二つを開き見るに、其宜に合ずと云事なし、第三の錦囊は、事危に臨で進退なき所にて開き見よと云玉へり、今これを觀るべしとて開て玄德に獻れば、玄德これを見て急ぎ車の前に行て大に哭き、孫夫人に宣ひけるは、われ心に思ふことあり、願くは夫人に告ん。孫夫人問て曰、いかなることぞ、早早に語玉へ。玄德の曰、吳侯孫權もとより周瑜と計を合せ、夫人を餌として吾を釣よせ、荊州を取んと巧み玉へり、吾もし亡なば夫人いづくにか歸することを得んや、吾萬死を怕れずして來りしものは、夫人元より男子の胸襟あることを知て必ず能われを恰玉はんと思ふ故也、いま孫權ひそかに吾を殺さんとす、是ゆゑに荆州事ありと詐て、早く出て走るものは、實に夫人

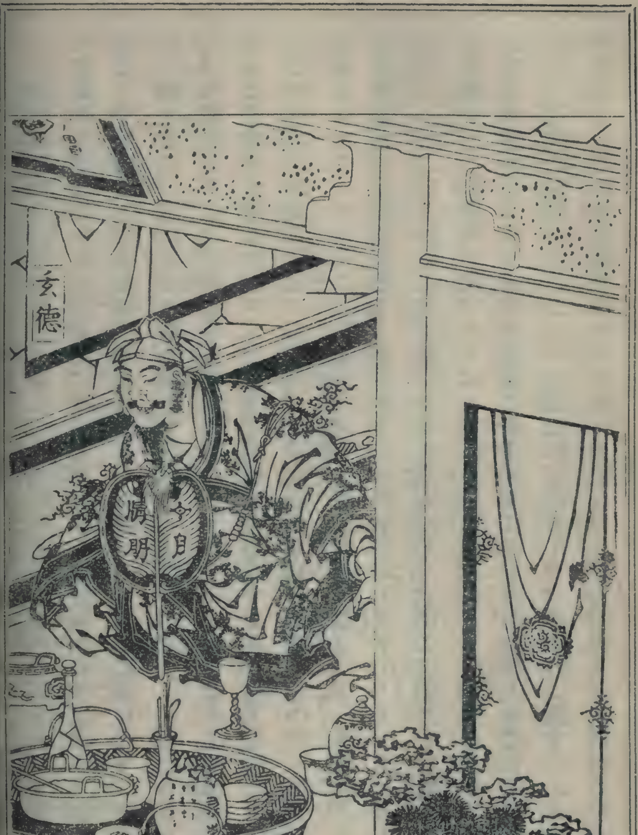
二人を捕へ來れと下知しければ、二人命を受て馳出る。孫權は心の內深く玄德を恨み、怒て案の上なる玉石の硯を覺えず微塵に握碎きければ、程普が曰、君空沖天の怒を成玉へども、某おそらくは陳武、潘璋が分としては玄德を捕來ること叶まじ。孫權が曰、いかなる故ぞ、焉んぞ吾命に背ん。程普が曰、孫夫人は幼より武藝を好玉ふ、御志の剛なること尋常の人の及ところに有ず、此に因て諸の大將みな怕る、今又玄德と共に出玉ふ、陳武、潘璋いづくんぞ手を下すことを得ん。孫權いよ〳〵怒り、自ら帶たる劍を取て蔣欽、周泰二人に授け、汝二人この劍を以て早く追かけ、先わが妹の首を斬て次に玄德が首を取きたれ、命に背ば罪に行はんと云ければ、二人千餘騎を引て飛が如に馳向ふ。

○孔明二氣死周瑜

去ほどに玄德は馬に鞭うち、車を早めて夜中に路を急ぎ、漸く柴桑の界に近付玉ふ所に、後より馬烟を立て騎馬の勢五六百騎が程とぶが如に追きたる。玄德驚ていかゞせんと云玉へば、趙雲が曰、君まづ先へ落のびさせ玉へ、某跡に殘て一軍せんと云ける所に、又向の山より二手の勢打て出、大音あげて、玄德早く馬より下て繩を掛れと呼はり、一文字に路を遮る。是元來周

待べしと云玉へば、趙雲が曰、君よく舊日のことを思て孔明の計を違へ玉ふなとて退きける。已に今年も暮て建安十五年春正月朔日に成ぬれば、國中みな新年の慶を賀して、吳主孫權文武の大將を堂上に集め、酒宴を設て壽を祝す。玄德は孫夫人と宮中に入て吳夫人を拜し玉へば、孫夫人母に告て曰、玄德つねに父母を慕ひ、先祖の墓ことぐく涿郡に在を以て、日夜に感傷せずと云ことなし、今日又年の元なれば、江の畔に出て北を望で祭を成んとす、この故に告申すなり。吳夫人が曰、これ眞に孝行の道なり、汝曾て夫の父母を識ずとは申しながら、共に行て祭を成ば、是又妻たるの道ならん。孫夫人拜謝して玄德と共に直ちに江邊に出けるに、之を知もの更になし。孫夫人は車にのり玄德は馬にのり、數十騎を引て城外に出玉へば、兼てより趙雲五百の勢を率して待うけ、南徐を離れて態と陸路より逃たりける。此日の酒宴に吳主孫權大に醉ければ、扶て後堂に入しめ、文武の諸將ことぐく退出し、始て玄德は今朝夫人を伴て逃たりと云沙汰を聞、暮に及て孫權に告んとすれば、孫權前後も知ず醉臥たり。漸五更の比に至て少し醉さめければ、左右の人急に右の由を告たりけるに、孫權驚て惆翔き、夜いまだ明ざるに諸の大將を招ていかゞせんと議しければ、張昭が曰、今日玄德を捕ざる時は後必ず大なる害を成ん、早々に追かけ玉へ。孫權これに從ひ、陳武、潘璋二人に精兵五百餘騎を授て急ぎ


玄徳孫夫人と荊州に皈らんことを計る
孫夫人


玄德

り、趙雲が荊州の危を告たりしゆゑ、故郷に回んことを思ひ玉ふか。玄徳驚て宣けるは、夫人すでに知玉はば我なんぞ許らん、今もし回らざる時は荊州必ず破れん、然る時は是天下の笑を引ん、今又回んとすれば夫人に別れんことを憂ふ、この故に哀むなり。孫夫人が曰、われ已に君の妻となる、君の行玉ふ所われ必ず従はん。玄徳の曰、夫人の心はさも有べけれども、呉夫人、孫權許し玉はじ、只我を憐と思ひ玉へ、一度こゝを別ては何くの沙場に討死せんも知がたければ、再會又期なかるべし、夫人もし貞女の志を守て再び佗人に嫁し玉はずんば、我九泉の下に於て其恩の深を知ん。孫夫人が曰、君いかなれば浩る不吉の言を出し玉ふぞ。玄徳の曰、夫人聞玉はずや、世の諺に公子登ㇾ筵、不ㇾ醉則飽。壯士臨ㇾ陣、不ㇾ死卽傷と云へり、敵に赴の人は命を失んこと料がたし、是に因て預め申す也とて涙を流し玉へば、孫夫人が曰、必ず心を苦玉ふな、我よく母に告て共に荊州に回るべし。玄徳の曰、たとひ呉夫人は許し玉ふとも孫權又從まじ。孫夫人が曰、われに一つの計あり、君よく從ひ玉はんや。玄徳の曰、ねがはくは聞ん。孫夫人が曰、元日の拜賀に夫婦江邊に行て先祖を祭と母に告、ひそかに出て荊州に歸るべし。玄徳の曰、若しかる時は我なにをか憂んや、必ず外に漏すべからずとて、密に趙雲を呼よせ、元日の朝賀に吾江の畔に出て先祖を祭と號し、夫人と共に走るべし、汝は路に出て相

ね、城外に出て馬を奔しめ弓を射たりなんどして日を過し、今年もすでに暮に逼ければ、屹と心付て思ひける樣は、孔明三つの嚢を吾に授け、第一は南徐に行て早く開け、第二は年の終に及で開き見よ、第三は事甚だ危して進退路なき所にて開き見よ、內に神變不思議の計あらんと云玉へり、いま年の終に及べり、第二の嚢を開き見んとてひそかに開き見て計を心に領し、宮中に入て玄德に見んことを求ければ、侍女この由を玄德に報ず。玄德よび入て何事ぞと問玉へば、趙雲大に驚たる體をなして申けるは、君は深宮の內に樂を成て荊州に回ることを思ひ玉はぬか。玄德の曰、いかなることか出來て以ての外に驚きたる。趙雲が曰、今孔明早舟を飛せて曹操赤壁の恨を雪ん爲に、精兵五十萬騎にて荊州へ攻きたる、君を守護して片時も早く回り來れと注進す。玄德の曰、しからば孫夫人と之を議せん。趙雲が曰、もし夫人に知らせ玉はば、君必ず回り玉ふこと叶まじ、今夜ひそかに舟を飛して回るべし、遲時は荊州やぶれん。玄德の曰、汝しばらく退け、我別に仔細あり。趙雲再三に及で退きければ、玄德內に入て孫夫人に對面し、涙を含で哀玉へば、孫夫人問て曰、丈夫なにゆゑに哀玉ふぞ。玄德の曰、われ思ふに一身他國に飄泊し、生ては父母に事ること能ず、死しては祭祀を致こと能ず、是大逆無道なり、今年もすでに暮て歲旦も近にあり、これに因て吾心甚だ悼む。孫夫人笑て曰、われ已に聞知れ

在人之下者。愚謂大計、軟困備于呉中、盛爲築宮室、以喪其心志、多其美色玩好、以娯其耳目、使分開關張之情、隔遠諸葛之契、各置一方、然後以兵攻之、大事可定矣。今若縱之使人俱在疆場、恐蛟龍得雲雨、終非池中之物也。願明公熟思之。書不盡言、幸垂照察。

孫權看了て大に喜び、張昭と議しければ、張昭が曰、この計よく某が心に合へり、劉玄德幼より貧賤の家にそだち、四海に流浪して一日も富貴榮耀を身に受ず、今もし大廈高堂を築て美女を集め金銀衣服の奇麗を盡さば、彼必ず心溺て荊州に回ることをも忘るべし、然る時は萬づ疎遠にして孔明も關羽、張飛も深く怨を含て散亂せん、然らば荊州争はずして自ら御方に屬すべし、今もし玄德を荊州に回さば後大なる害を成ん、早く周瑜が計に從玉へと勸ければ、孫權甚だ喜び急ぎ東府の宮室をしつらひ、多く花木を植諸の器物その奇麗を極て、玄德、孫夫人を移し入しめ、女樂數十人を增て綺羅錦繡金玉珍寶を山の如に集ければ、呉夫人はこの由をきゝ、孫權實の心を以て我壻を愛敬するとて其喜ぶこと限なし。案の如く周瑜が計に違ず、玄德は色に溺れ聲に迷て荊州のことを打わすれ、孔明が戒し言をも思ひ出さず、晝夜遊樂して居玉ひけり。この時趙雲は五百人の兵と東府の前に居たりけるが、終日無事にして徒然に堪か

孫夫人幼より武藝を好み、常に侍女を集て劒を使ことを樂とす、この故に此の如し。玄德の曰、これ夫人の行ふことにあらず、我甚だ心を寒す、暫く武具を収め候へ。管家婆この由を告ければ、孫夫人大に笑ひ、多の戰場を經たる人なほ武具を恐るゝかと云て盡く取収めければ、玄德房に入て枕席を共にし、詞を巧にして誘玉へば孫夫人深く喜ぶ。玄德金帛を與て左右の侍女の心を結び、先孫乾を荆州に回し、書簡を以て孔明にこの由を報じ、連日酒宴して相親玉ひしかば、呉夫人喜で愛敬す。

○錦嚢計趙雲救レ主

呉主孫權は呉夫人が怒に因て了に玄德を實の壻とし、兼ての計こと〴〵く相違しければ、柴桑郡へ人を遣し、書簡を以てこの趣を周瑜に報じ、別に計を求けるに、周瑜は金瘡いまだ痊ず、病を養て居たりしが、これを聞て大に驚き、茫然としてあきれ果、いかゞせんと心を苦、又一つの計を案じ出し、密書を封じて孫權に獻らしむ。孫權開き見るに、其書に曰、

周瑜百拜頓首、書上二於主君明公座下一。昨嘗爲レ謀二大事一不レ想反覆如レ此、既已弄レ假成レ眞、必須二以レ凶爲一レ吉。劉備以二梟雄之姿一、有二關羽張飛熊虎之將一、更兼二諸葛一用レ謀、必非二久屈

坡を駐馬坡と名付たり。その後玄徳と孫權と馬を雙て囘りければ、南徐の人民これを見て稱賀せずと云ものなし。玄徳は客屋に囘て孫乾と事を議し玉へば、孫乾が曰、君只喬國老に告て早早に婚禮をなし玉へ。玄徳これに從ひ、次の日行て喬國老に見え、この國の人われを害せんとする者多し、我久しく留ること能じと云玉へば、喬國老が曰、心やすく思ひ玉へ、我吳夫人に告て危こと無らしめん。玄徳拜謝して囘り玉ひければ、喬國老宮中に入て吳夫人に見え、玄徳人の害せんことを畏ると云ければ、吳夫人大に怒り、我壻を誰か敢て害せんとする、急ぎこの書院に呼よせ、日を擇で婚禮を成しめんとて卽時に玄徳を招きければ、玄徳宮中に入て告て曰、もし趙雲外に在ては内外の事通ぜずして從へ來れる五百の軍士みだりに散て狼藉せん、ねがはくは共にこの所へ移しめ玉へ。吳夫人これに過たる易きことやあるとて乃ちこと〴〵く府中に移置ければ、玄徳少し心を安じながら、恐懼の内に數日を送り玉ひけるに、此日吉日なりと云沙汰して大に酒宴を設け、玄徳を後堂に招て孫夫人と配偶の禮あり。夜に入て酒宴やみければ、玄徳房に入玉ふに、兩傍に燈火を連ねて槍薙刀をひしと集め、相從諸の侍女みな劍を帶て出ければ、玄徳胸打さわいで魂も身に附ず、色を失て怕れ玉ふ。時に房中の事を揔司どる年長たる女あり、之を管家婆と號す。玄徳の怕れ玉ふを見て申けるは、貴人心を安じ玉へ、

ず詐を以て我を欺くもの成んと思ひければ、乃ち又劍を拔て申けるは、われも天に祈て占をなし、若曹操を滅ことを得べくんばこの岩砍て兩段とならんとて、心の內には密に祈念し、若再び荊州を取ことを得べくんば、この岩を砍て二つと成んとて祝し了てはたと砍ば、其岩又二つと成こそ不思議なれ。さればこの岩後の世までも遺て、十字紋の恨の石とて今に在とぞ承はる。玄德、孫權又內に入て酒をのみ、時すでに移ければ、孫乾と目合せするに、玄德その意を諭り、乃ち孫權に向て、某大に醉て座に堪がたしと云玉へば、孫權自ら引きて門外に立出、山水の風景を望みければ、玄德大に稱嘆してこれ乃ち天下第一の江山なりと云玉ふ。是よりして甘露寺の門に天下第一江山と云額を掛て、のちの世までも傳れりとかや。玄德しばらく門に立玉ふ所に、江水大に漲り、白波風に激して雪の飛が如くなるに、遙の澳より小舟一艘はせ來り、恰も平地を行が如なりしかば、覺ず嘆じて、南方の人はよく舟にのり、北國の人はよく馬にのると世の諺に申すも實にて候と云玉へば、孫權心の內に、玄德の言の端南方の人は舟ばかり得て馬に乘得じと我を嘲るならんと思ひ、左右の者を呼で馬を引よせ、鞍の上に飛のり鞭を加へて、山を走り嶺を超往來馳騖して、いかに南方の人馬にのることを知まじきかと云ければ、玄德も又馬に飛のり、二人轡を雙べて坡の下に立、鞭を揚て快く笑ひければ、後の人この

玄德を以て壻とす、何ゆゑに兵を伏て害せんとする。孫權答て曰、某曾て此ことを知ず。吳夫人いよ〳〵怒り、呂範を召て問ければ、呂範が曰、某なんぞ浩ることをせん、定めて大將賈華が所爲ならん。吳夫人急に賈華を呼、いかなる故に兵を伏たると問へば、賈華默然としてもの云ず。吳夫人大に怒り斬て棄よと云ければ、玄德の曰、もし今大將を殺し玉ふ時は大慶の妨となりて、某久しく此に留ることを得じ。喬國老乃ち賈華を追出しければ、廻廊に隱れたる兵共みな頭を抱て鼠の逃るが如に走り散、見苦しかりける形勢なり。斯て酒宴數刻に及びければ、玄德殿前に立出、庭に大なる岩ありければ、從者の帶たる劍を拔天を仰で祈念し、我もし再び荊州に回て霸王の業を成ことを得ば、今この岩を砍んに忽ちに兩段とならん、若この所にて死べくんば、岩少しも砍まじと祝してはたと砍玉へば、火の光迸しり出て其岩二つとなる。孫權は後に起て此體を窺けるが、岩の砍たるを見て玄德なに故に此岩を恨玉ふと問ければ、玄德驚き後を顧て曰、われ年すでに五十に及びたれども、國家の爲に反逆の輩を誅して民の苦を救ざるを恨とす、今この國に來て壻となり、一家の好を結なれば、共に力を合せて曹操を滅さんことを喜び、天に祈て占をなし、若曹操を誅して漢の天下再び興るべくば、この岩二つに砍んと云て砍たれば、今果して此の如しと答たまふ。孫權これを聞て玄德の言必

行て玄德を招きければ、趙雲五百人の兵を率ゐ、玄德を守護して甘露寺に來り、門前にて馬より下玉へば、吳主孫權は兼て法堂の前まで出むかへ、玄德を初て見るに儀表俗を出て堂々たる威風あたりを拂て見えければ、心の內怕れ謹み、前に近付て禮を施し、引て方丈に入ければ、吳夫人出て對面し玄德を見て大に喜び、乃ち喬國老に向て申けるは、これ眞に吾壻なり。喬國老が曰、玄德は龍鳳の姿天日の表あり、殊に仁德を天下に布て世の人これを仰ずと云ものなし、夫人幸に浩る壻を得玉へり、是に過たる大慶あらんや。玄德拜謝して共に酒宴を成ける所に、暫く有て趙雲劍を帶て出來り、玄德の側に立ければ、吳夫人問て曰、これ如何なる人ぞ。玄德の曰、常山の趙雲と申す者なり。吳夫人が曰、昔當陽の長坂にて阿斗を救し趙子龍なるか。玄德の曰、これ也。吳夫人が曰、まことに絕れたる名將なり、酒を賜へと云ければ、趙雲拜謝して酒を飲、ひそかに玄德に低語て、某今この邊を見まはれば、廻廊の陰に兵を大勢かくし置たり、是直事にては候まじ、早く此由を吳夫人に告玉へと云ければ、玄德乃ち吳夫人が前に跪き、哀で告て曰、もし某を殺さんとの御心にて候はば、明に今この所にて殺し玉へ。吳夫人驚て曰、なにとて浩ることを云玉ふぞ、誰人かわが壻を害すべき。玄德の曰、廻廊の陰に兵を隱し置たるは、某を殺すの計にあらずして何ぞ。吳夫人怒て孫權を責て申けるは、われ今日

すでに五十に及べり、爭か我妹に配偶せん。喬國老が曰、劉皇叔は當世の英雄、もし壻とせば何ぞ年を數て嫌ことをせん。吳夫人が曰、われ久しく劉皇叔の名を聞ていまだ其人を見ず、明日甘露寺にて對面し、我一目これを見て、若心に合なば實に我女の夫となし、もし心に合はずんば汝等が望の儘に任すべし、早々に其用意をせよ。孫權は元より大孝行の人なるゆゑ、老母の此の如なるを見て已ことを得ずして領承し、退出して呂範を呼右の趣を語て、明日甘露寺の方丈に酒宴を設、玄德を招て母に對面せさせよと云ければ、呂範申けるは、其義にて候はば大將賈華に仰せ付られ、廻廊の陰に屈強の者共三百人を隱し置、吳夫人もし玄德を見て心に合はずと宣はば、卽時に殺して微塵にし玉へ。孫權然るべしと喜び、賈華を呼で其計を命ず。喬國老は我屋に回り、使を以て玄德に報じ、明日孫權が母吳夫人甘露寺にて對面あるべしと云つかはしければ、玄德乃ち孫乾、趙雲とこのことを議し玉ふ。趙雲が曰、明日の會は凶多して吉少し、某自ら五百の勢を引て從ひ行ん。夜に入て媒の呂範來り、明日甘露寺に出玉へと約し、吳夫人並に孫權對面あるべしと申ければ、玄德乃ち領諾し、夜すでに明ければ身に細なる鎧を被て、表に錦の袍を著し、時刻今やと待玉ふ。吳夫人、喬國老すでに甘露等の方丈に出ければ、孫權も數十人の大將を引て來り坐し、呂範に命じて玄德を招しむ。呂範客屋に

きに、初より我に知せず玄德を招て壻とせんとす、女は是わが女なり、汝なんぞ妄に事を行はん。孫權驚て申けるは、この事いづ方より聞玉ひし。喬國老が曰、愚のことを云玉ふ、一國の人民たれか之を知ざる者あるや、我數日已前に已に知れり、この故に今慶をなす。孫權が曰、これは周瑜が計にて、荊州を取んとすれども、もし兵を起して爭時は、多の民塗炭の苦を受、此故に僞て婚禮と號し、玄德を出拔てこの所へ招きよせ、獄中に囚て荊州を取かへし、若かへさゞる時は玄德を殺さんと料し者なり、これは虛き計にて、更に實なきことにて候。吳夫人いよ〳〵怒て曰、周瑜匹夫、にくき己は吳の國八十一州の大都督として君の祿を費しながら、荊州を取ほどの計を知ず、却てわが女を餌として、玄德を釣よせて殺んとす、もし然る時はわが女を悞るのみならず、一生寡婦たらしむべきか、我老の命の絕ざらん間は、汝等いかにもして此計を成候へ。喬國老が曰、もし箇樣の計にて荊州を取ば天下の人に笑れん、必ず此事を止玉へ。孫權默然として言を出さゞりしかば、吳夫人いよ〳〵怒り、早く周瑜を斬て棄、この恥を雪べしと躍擧て罵けり。喬國老申けるは、是ほどに隱なき事を今更可止にも有ず、幸に玄德は漢の天子の皇叔、仁義四海に及ぶ、乃ち實の壻として長く一家の好を結、浩る見ぐる布周瑜が計の外に聞えて人に笑れぬ樣にし玉ふべし。孫權が曰、玄德は年

主孫權兼てより客屋を構へ、媒の呂範を出して持なさしむ。喬國老は今日玄德に對面して初て婚禮あることを知、いそぎ宮中に入て孫權が母吳夫人に見え、浩る目出度ことやある、御喜を申すと云ければ、吳夫人問て曰、われ年老たる寡なれば、露の命も料がたし、何事か有て喜玉ふぞ。喬國老が曰、孫夫人を以て玄德を壻とし玉ふこと、是に過たる慶は候はじ、玄德すでに此國に來れり、何とて某に知せ玉はぬ。吳夫人驚て曰、われ曾て此ことを知ず、孫權を呼で尋ね問べしとて、人を出して其體を見せしむるに、暫ありて其人回り、今城中の體を見候に、玄德は江の畔なる客屋に在て、その邊車馬路を爭ふ、從ひ來れる五百餘人の軍士は處々に走り散て、猪を買酒肴を求め、皆好を結の事を語る、荆州より孫乾と云もの從ひ來り、媒呂範と事を調て客屋にて持なし候、果してこのこと實にて候と告ければ、吳夫人以の外に驚、心怪で居たる所に、良ありて孫權きたり見えければ、吳夫人胸を槌て大に哭く。孫權問て曰、いかなる故に哭き玉ふぞ。吳夫人が曰、われ年老たりとは云ながら、まがふべくもなき汝が母なり、何とて我を斯は蔑にする。孫權大に驚て曰、是いかなる故にて候ぞ、明に語り玉へ、何とてさ程に哭玉へる。吳夫人が曰、男子長なれば婚をなし、女子長なれば嫁しむ、是古今の定れる理なり、我は是汝が母なり、汝もし親と思ふの心あらば、必ず先われに問て其後に致すべ

早く來り玉ふ時は此に過たる大慶あらじ。孫乾わかれて荊州に囘り、孫權ねんごろに相待よしを語りければ、玄德なほ心疑て更に決せず。孔明が曰、われ三箇條の計を定め、書寫して錦の嚢に入おけり、御方の大將の內趙雲ならでは此を行べき人なしとて卽時に趙雲を呼よせ、御邊いま君の御供申して吳の國に行、この三つの錦の嚢を受てよく次第に因て開き見玉へ、自然に宜に合ふ計あらん、若すこしにてもこの計に背ば、是君に忠なき也。趙雲が曰、某よく軍師の命に從て少しも背こと候はじ。孔明乃ち錦の嚢を與へ、一切の禮物を調て盡く備りければ、建安十四年冬十月の初、玄德快船十艘あまりを揃へ趙雲を大將として五百餘人の精兵を率ゐ、孔明を留て荊州を守らせ、吳の國へ下向し玉ひけるが、心の內怏々として安からず。船すでに南徐の岸に著ければ、趙雲が曰、さきに荊州を出る時孔明錦の嚢を授け、次第に因て開き見るべしと云玉へり、今すでに此に來れり、第一の嚢を開んとて看了て大に喜び、五百人の軍士に計を低語ければ、皆ことごとく領承す。元より吳の國に喬國老とて平生至て正直なる人あり。乃ち二喬が父にして、孫策、周瑜が爲には舅なれば、吳主孫權を初として諸人ことごとく仰ぎ尊ぶ。趙雲岸に上ると倖う、玄德を勸めて羊を牽酒を擔ひ多くの禮物を持せて、先喬國老が家に行て對面して婚姻の趣を告、次に城中に人を遣して著船の由を報じければ、吳

天下の英雄に有ずんば夫とせまじと云玉ふ、今皇叔は名四海に聞えて德華夷に播す、是所謂淑女以配二君子一と云るもの也、なんぞ年を數て嫌んや。玄德の曰、御邊しばらく客屋に入て休み玉へ、明日事を定むべしとて酒宴を設て持成玉へば、呂範は客屋に入にけり。玄德その夜諸大將を集めてこの事を議し玉へば、孔明が曰、某屛風の後にて詳に承はり、適に易を以て占を成候に、大吉の兆を得たり、君心を安んじてこの事を許容し、先孫乾を呂範と共に吳の國に行しめ、日を擇で婚禮を成玉へ。玄德の曰、周瑜計を設け我を引よせて害せんとす、安んぞ虎口の危に行べけんや。孔明笑て曰、これ誠に周瑜が計とは申しながら、爭かこの孔明が計に出ん、某一つの質を以て周瑜に計を用ふること能ざらしめん、孫權が妹を娶る時は荊州いよ〳〵危ことなし、萬づ某に任せ玉へとて、玄德の心決せざりしかども孫乾を呼で計を授け、呂範と共に吳に行しむ。

○玄德入レ吳娶二孫夫人一

去ほどに孫乾は孔明が計を受、呂範と吳に行て吳主孫權に見え、玄德の意を述て禮を施しければ、孫權が曰、われ妹を以て玄德を招き、一家の好を結んとす、何ぞ少しも詐あらん、若

が曰、君の尊命某なんぞ背べき、速に行候はんとて一艘の快舟に打のり、直ちに荊州へぞ趣きける。この時玄德は甘夫人病に臥て亡びしゆゑ、日夜哀み哭き玉ひけるが、數日ありて吳の孫權より呂範と云もの使たりと報じければ、孔明笑て曰、これ又周瑜が計にて荊州の故ならん、某は屛風の後に在て密に聞べし、君は彼に對面して何ごとを申とも先答を成ず、客屋に留め置玉へ、別に評議して其後に回すべしと私語ければ、玄德乃ち呂範を呼入、禮了て坐定まりける時、玄德問て曰、御邊いかなる故有て來り玉へる。呂範が曰、某近ごろ皇叔の夫人世を辭し玉ふと聞て、共に好を結の緣あるに因て媒を成ん爲に此に來れり。玄德の曰、われ近ごろ妻を失て肉なほいまだ寒ならざるに、安んぞ又媒を望まん。呂範が曰、人もし妻なければ屋に梁なきに似たり、豈中道にして人倫の禮を廢せんや、我君吳侯一人の妹あり、容色世に勝れて而も大に賢德あり、皇叔の夫人に具て共に秦晉の歡を結ぶ時は、曹操自ら滅て兩家共に和合せん、必ず御心に疑を成ず、速に吳の國に來り玉へ。玄德の曰、この事は周瑜一人の料ひなるか、又孫將軍の意より出たるか。呂範が曰、もし吳侯の命に非んば某なんぞ此に來らん。玄德の曰、われ已に五十に及んで鬢髮やゝ白し、孫將軍の妹は靑春の妙齡、いづくんぞ配偶することを得ん。呂範が曰、吳侯の妹身は女に生れたれども、志は男子に勝れり、常に

安く思し玉へとて數日過ける所に、忽ち細作回り來り、今荊州の城に白き旛を揚て軍士みな喪の服を掛、城外に新しき墓を築けりと告ければ、周瑜驚て曰、たれ人が死たる、其名を聞ずや。答て曰、玄德の夫人甘氏病に伏して亡びたり。周瑜大に喜び、いそぎ魯肅を呼で申けるは、わが計成就せり、玄德を手取にして荊州を忽に取回さん。魯肅が曰、いかなる故ぞ。周瑜が曰、玄德が夫人近比亡たり、幸に我君の妹孫夫人は生附心剛にして武勇を好み、近侍の官女も盡く刀を帶す、男子と云とも及ぶべからず、我書簡を以て吳侯に申し、物なれたる人を遣して媒せさせ、玄德と婚緣を結で吳の國に賺呼、忽ち擒にして獄中に囚置、其上にて荊州を取回さん事掌の中にあり、然る時は魯肅の身の上自然に禍なかるべしと云ければ、魯肅心喜び遂に書簡を受て南徐に行、吳主孫權に見えければ、孫權問て曰、汝荊州の事いかゞ致せる。魯肅が曰、暫く荊州を借んとて玄德、孔明が證文あり。孫權開見て申けるは、此の如ならば何の時にか荊州を返べき。魯肅が曰、周瑜別に計あり、此書簡の如くにし玉はば荊州を取こと手を反よりも易からん。孫權開見て大に喜び、誰を使として此媒をせさせんと思、急に呂範を呼で曰、近比玄德が夫人病死せり、我妹を以て玄德を婿とし、永く一家の好を結で、共に曹操を破んと欲す、汝に非んば此媒をする者有じ、ねがはくは荊州に行てこの事を調候へ。呂範

皇叔は我等が主人なり、一家の證文は用がたし、魯叔も名字を書のせ玉へと云て渡しければ、魯肅が曰、某もとより玄德公は仁義の人なるを知、よも詐は宣はじとて自ら名字を寫し、酒宴休で別れければ、孔明自ら船の邊まで送り、御身よく吳侯に見て然るべく荊州の事を云ひ玉へ、吳侯もし許容し玉はずんば、われ力なく兵を起して卽時に吳の國をも奪ひ取ん、只共に好を結で曹操を滅さんことを願ふ、偏に御身の一言を賴む、必ず曹操に笑はれ玉ふなと云ければ、魯肅つひに船を出し、柴桑に回て周瑜に見えければ、周瑜が曰、いかに荊州を請取玉へるか。魯肅が曰、玄德、孔明が證文あり。周瑜開き見て足をそばだてゝ曰、御邊又孔明に出し拔れ玉へり、若荊州を借て蜀を取て後に返さんと云ば、彼十年蜀を取ずんば十年返さじ、然る時はいつか荊州を吾手に入ん、殊に此證文を書せ、剩へ御邊請人として已に名字を書玉へり、如何して取返し玉はんや、主人もし怒り玉ふ時は、御邊の禍必ず九族に及ぶべしと責ければ、魯肅茫然としてあきれ果、顏土の色の如くわなゝゝと震ひ、証文を弃て申けるは、玄德は心に誠ある人なり、よも詐は申すまじ。周瑜が曰、御邊は是眞實の人、玄德は梟雄の輩、孔明は姦猾の徒なり、恐らくは御邊の心の如くならじ。魯肅が曰、しかる時は如何がせん。周瑜が曰、われ昔御邊の恩を蒙り、三千斛を借しこと安んぞ忘るべき、必ずこの度の禍を救ふべし、心

魯肅

孔明計て證書を呉主に贈る
玄德
孔明

浩る詞を出し玉ふぞと憚ところなく云ければ、魯肅道理に責られ暫く閉口して居けるが、良久して曰、孔明の言怕くは理に當らじ、某が身の上便ならざることあり、先生人を損うて己が爲を思ひ玉ふか。孔明が曰、御邊の身の上いかなる便の惡きことか有や。魯肅が曰、昔劉皇叔當陽にて曹操に破られ玉ひし時、某孔明を伴て吳の國に入、主人孫權に兵を起させ、其後周瑜兵を起して荊州を取んと云しを、某樣々に諫て之を止め、適に劉琦世を辭し玉はば必ず荊州を回さんと約せしも又某が使なり、箇樣に某使を承はりて今日又始の約に背時は、主人の前に出て如何が口を開くべき、若いま約を違へ玉ふ時は禍忽ちに起て、荊州の民塗炭の苦を受、玄德公も千載の笑ひを得玉ふべし、願は能此ことを思ひ玉へ。孔明が曰、曹操百萬の勢を引て虎狼の威を震と云ども、われこれを以て螘の聚たるが如とす、何ぞ周瑜が如き小兒を怕れんや、若先生の身の上に便りならざること有ば、我いま劉皇叔を勸て暫く荊州を借預り、別に宜き國を攻取て其後に返さんと云の證文を書せて進すべし。魯肅が曰、いづれの國を取て後われに荊州を返し玉はん。孔明が曰、中國は急に圖がたし、今蜀の國は太守劉璋闇弱なり、われ之を取んと欲す、若蜀を取ば其時に荊州を返べし、卽ち証文を渡し申さんとて紙筆を取よせ、玄德自ら筆を染て名字を寫し、請人は諸葛孔明なりとて書了り玉ひければ、孔明が曰、劉

心を靜めて聞玉へ、我よろしくその本を說ん、昔三皇五帝天を開き極を立てより以來、天下は一人の天下にあらず、乃ち天下の人の天下なり、漢の高祖皇帝三尺の劍を提げ、白蛇を斬て義兵を起し玉ひてより、四百年の基を建て今日まで傳はれる所に、不幸にして逆臣きそひ起り四海瓜の如に分れ、各一方に據て心の儘に賦稅を收む、然りと云ども天道もし正を照さば豈又つひに正統に皈せざらんや、我君劉皇叔は乃ち中山靖王の後にして漢の景帝の玄孫今上の皇叔なり、況んや劉表は我君の兄たり、弟として兄の業を承る誰か此を不可なりと云ん、汝が君とする孫權は本これ錢塘の小吏の子にして朝廷に功德なし、今暴惡を放にして江東の六郡八十一州を奪ひ取、なほ慾心を息ずして剩へ荊州を呑んと云は何事ぞ、若君臣の道を論ずる時は大漢劉氏の天下、わが君の姓は劉、汝が君の姓は孫、たゞ宜く百畝の田地を請て農夫と成べし、況んや赤壁に曹操が大軍をやぶりしは我君多く勤勞し玉ひ、手下の諸將よく命を用ひしに因て也、なんぞ吳の國ばかりの力と云ん、若わが東南の風を祈にあらずんば周瑜いかんぞ一寸の功をも展ることを得ん、江東もし一度やぶれば二喬を銅雀臺に取るゝのみならず、汝等が妻子と云ども保つこと能じ、適より我君のこの事を答へ玉はざりしは、御邊の高明なる才德あるを以て必ず能察し玉はんと思ひ玉ふ故なり、御邊は元より古今の道理に通じ玉ふ、何ゆゑに

ぬと告ければ、玄德聲を放て哭き玉ふ。孔明が曰、人の生死は定まれる數あり、君必ず憂玉ふな、只よろしく御身を保ち人を遣して葬りを成しめ、代て襄陽城を守らしめ玉ふべし。玄德の曰、たれを以てか代しめん。孔明が曰、關羽に非んば惡かるべしとて即時に關羽を襄陽城につかはしけり。玄德の曰、劉琦が死したる由沙汰あらば、吳の孫權又荊州を返せと云ん、我いかゞ答ふべきぞ。孔明が曰、先に魯肅が來りし時、劉琦もし世を辭せば必ず荊州を返さんと約束したることとなれば、此こと聞えば定めて來らん、某よろしく答を致すべし、少も御心を苦め玉ふなとて二十日ばかりを過ければ、果して吳の孫權より魯肅を使として劉琦の喪を弔と報ず。孔明乃ち出迎へ、城中に入て賓主の坐定まりければ、魯肅乃ち禮を成玄德に向て、わが國この比劉琦の世を辭し玉ふと聞て主人孫權愼で禮物を具へ、某を以て祭を致さしむ、周瑜も再三の禮意ありと云ければ、玄德坐を起て之を謝し、酒宴を設て持なし玉ふ。時に魯肅申けるは、劉皇叔さきには劉琦の世に在ん限は是荊州の主なりと宣へり、今劉琦すでに世を棄玉ふ、早く荊州を我國に返し玉へ、某專この事を申ん爲に來りたり。玄德の曰、この事別に議論すべし、先酒を飲玉へ。魯肅又いつか返し玉ふべき、必ず約を違へ玉ふなと云ければ、孔明傍に在て色を變じて曰、魯肅は何とて義理に通じ玉はぬぞ、我主人ねんごろに持なし玉ふなれば、

の上より見すまして一聲の鐵砲を鳴す程こそあれ、矢倉の上壁の陰より矢を射ること雨の如く、大木大石を投かけしかば、太史慈急に退きけるに、全身に射たてられたる矢は簑の毛よりも繁し。跡より李典、樂進切て出ければ、呉の勢のこり少に討れて散々に走りけるが、呉の陣に近く成て陸孫、董襲兵を引て馳來り、城中の勢を追かへす。呉主孫權大に後悔し太史慈が痛手負たるを見て甚だ哭き哀みければ、張昭まづ軍を收て回り玉へと勸む。孫權これに從ひ陣屋を收て船に取のり、南徐の潤州まで回りければ、太史慈が病甚だあやふし。乃ち張昭を遣して安否を問しめけるに、太史慈大に叫び、大丈夫の士みだれたる世に生れては、三尺の劍を帶て天子の階に昇るべきに、今志すところ了に遂ず、何ぞ空く死するやと云訖り忽然として亡びたり、時に年四十一歳なり。孫權深く哭き厚く南徐の北固山の下に葬り、其子太史亨を憐で養ひける。

○周瑜定レ計取ニ荊州一

玄德は荊州に在て兵を調へ、呉の孫權が合淝の合戰に負て國に回りたるなど物がたりし玉ふ所に、孔明きたり見えて曰、某昨夜天文を見るに、一つの星西北の方に落たり、必ず皇族の内に死する人あらん。玄德大に驚き玉ふところに、暫く有て人走り來り、劉琦病重うして亡び玉ひ

るを待居たり。張遼はこの日の合戰に打勝て、城に入て諸軍に恩賞を施し、今夜は皆甲を卸で睡ること勿れ、密く用心して怠たること有べからずと觸たりければ、諸將問て、今日吳の勢大に敗れて遠く逋たりしに、何ゆゑに用心常よりも密くし玉ふぞと云て怪みけるを、張遼答て曰、御邊達の知ことにあらず、凡そ大將たるの道は勝たればとて喜ず、負たればとて憂ず、今夜もし油斷して吳の勢に虛に乘て備無を攻られなば、我なにを以てか防ことを得ん、今夜は別して夜廻等を密くせよと下知して皆物の具をも解ざる所に、忽ち後の陣屋に火を掛て一人の音にて謀反人よと呼はりければ、城の內もの躁く成て告來る者麻の如し。張遼ちつとも驚かず馬に乘て打出けるに、左右の人走亂れて、喊の聲甚しく候に行て見玉へと勸めしかば、張遼が曰、よも城の內盡くは謀反せじ、是は如何さま一兩人の謀反人ありて、火を付喊を造て城中を驚しむるものならん、若みだりに躁ぐものは立所に斬て棄んと下知しければ、暫く有て大將李典かの戈定と馬飼とを縛り來り。張遼その故を問て立どころに斬て棄ければ、忽ち又城外に鼓を打鑼を鳴して喊の聲俄に響く。張遼が曰、これは吳の勢兼て相圖を定め、內外より攻んと計しもの也、敵の計に就て却て計を用ひよとて、城の內に火の手を揚て聲々に謀反人よと呼はり門を開て橋を渡しければ、太史慈すはやと喜び自ら眞先に進み兵を引て入けるを、城

敵を輕んじ玉ふ故に因り、今より能慎玉へと云ければ、孫權理に服して、是まことに我過なり、今より改めんとぞ申ける。暫ありて大將太史慈出きたり、今日御方討負て候へども某が手下に戈定と云る兵あり、幸に張遼が馬飼と兄弟なり、これに因て今晩城中に火の手を擧て相圖を知せ、密に張遼が首を取んと云、願は某に五千餘騎を借玉へ、時刻を見合せ城中に攻入て宋謙が仇を報ぜんと云ければ、孫權が曰、その戈定は今いづくにかある。太史慈が曰、已に合淝城へ忍入たり。諸葛瑾が曰、張遼は一勇の男にあらず、智深く計多し、必ず用心密からん、輕々しくは無用なり。太史慈が曰、城中の勢は今日の軍に勝傲て必ず皆油斷せん、若內外より揉破ば忽に城を乘取んと再三强て望ければ、孫權も心の內に今日大將を討れたることを口惜く思ひ、この恨を報ぜんとて遂に五千餘騎を分て太史慈に授たり。この時戈定は本より太史慈と同鄕の好みありければ、張遼が勢に雜て城中へ忍び入、馬飼に兄弟ありしゆゑ了に尋て二人一所に寄合、われ太史慈將軍と相圖を定めたり、今夜必ず攻來り玉ふべし、いかゞして計を成んと云ければ、馬飼申けるは、この所は本陣と程遠きゆゑ夜中には急に進み難し、只草を積で諸所に火を掛、走り散て謀反人よと呼はらば、城の內さわぎ亂れて上を下へと震動せん、その時張遼を刺ころし門を開て走るべし。戈定大に喜び、この計甚だ妙なりと、日の暮

李典大音あげ、あれに金の盔を被たるは呉の孫權と見るぞ、若この首を取時は赤壁にて討れし八十三萬人の仇を報ずるなりと呼はり、刀を舞して眞横様に蒐たりけるが、其勢散然として電光の激するに似たりければ、孫權が左右より宋謙、賈華戟を舞して齊く出、つゞけ打に打ければ、樂進馬を回しけるを、宋謙兵の持たる槍を取、のがさじと追掛しかば、李典やごろ近くなつて引回して兵と射る。其矢宋謙が胸板をかけず射透し、馬より倒に落て死だりけり。太史慈は猶張遼と戰けるが、後に人の馬より落を見て心おどろき、急に馬を回して走りければ、張遼大勢を引て攻かゝる。呉の勢散々に亂れ四角八方へ走りけるが、張遼は孫權に目をかけ馬を飛して追打に蒐り、すでに危く見えける所に、一彪の軍馬側より討て出威を震て救ひければ、張遼兵を收て城中に回りけり。この時孫權を救ひしは程普なり。新手を以て張遼を城中へ追こめ、敗軍を引て本陣に回りければ、孫權討れたる兵を數へ、大將宋謙が射ころされたるを見て涙を流して哭哀む。長史張紘諫て曰、君いま御年壯なる故を以て強暴の勇を恃み、偏に血氣の戰を好玉ふ、これに因て諸人心を寒さずと云ことなし、夫陣に臨で敵の大將を討とり、分取高名して威を逞するは、此乃ち偏將軍の爲ところにして君の自ら仕玉ふことに有ず、願は血氣の勇を抑て王覇の計を懷ひ玉へ、今日宋謙が敵の鏃に命を失ひしは、皆これ君の

とせん。諸人これを聞て又大に驚く。孫權問て曰、若いかゞせば汝を顯と云ん。魯肅申けるは、ねがはくは君仁徳を四海に布いて九州を盡く治め、帝業を創め建て其時安車蒲輪を以て某を召玉はば、是まことに某が功を顯と云ん。孫權馬上にて手を撫て笑ひ、陣中に入て酒宴を設け、共に赤壁の勝軍を喜び、合淝城を攻るの計を議しける所に、忽ち張遼が方より戰書を下し、明日一勝負せんと云送ければ、孫權怒て申けるは、憎き奴が所爲かな、今日御方に程普が大勢を引て馳加はりたるを聞て、明日一勝負せんと云送れるは、甚だ我を恥しめて今までの合戰を嘲弄もの也、その義ならば明日の合戰には程普が新手を一人も用ひず、我麾下の勢ばかりを引て快く手柄を顯さんとて、其夜の五更に兵粮を使ひ、程普が新手に陣屋を守らせ、自ら合淝の城に攻かゝる。城の内にも敵いまは寄來らん、打て出て戰へとて盡く出けるに、已に辰の時に至て兩軍ひとしく出合、互に陣を取向て孫權は金の盔を朝日に映かし、宋謙、賈華と云る大將を左右にそなへ、三通の鼓を打て矢合の鏑を射かけしかば、魏の陣中に門旗を開て張遼中央に馬を躍せ、左に李典右に樂進きびしく甲て靜々と進み、張遼まづ孫權に討てかゝれば、孫權が後より一人の大將槍を提て飛で出たり。諸人これを見れば吳の大將太史慈なり。張遼と馬を交へ二人火を散して戰ひ、七八十合にして勝負を分たざる所に、又魏の陣より樂進、

○孫權大戰合淝城

周瑜は柴桑に回て病を養ひ、金瘡いまだ痊ざりしかば、甘寧に巴陵城を守らせ、凌統に漢陽城を守らせ、呂蒙に江夏城を守らせ、皆兵船を揃て備を成しめ、程普に諸軍勢を授け、合淝に行て呉主孫權が戰を助しむ。この時孫權は赤壁に曹操を破てより合淝の城に攻かゝりけれども、この城は究竟の要害なる上、曹操も一大事と思ひけるにや、都に回る時張遼、李典、樂進三人の大將を籠置たれば、已に數十度戰ふと云ども墓々しき勝負もなく、只遠攻にしたるばかりにて、孫權は城を離るゝこと五十餘里にして陣を取けり。かゝる所に程普大勢を引て來りければ、孫權心喜び自ら門に出て望み見るに、魯肅まづ入ければ孫權馬より下て之を迎ふ。魯肅も馬より飛で下　謹で禮を成ければ、諸の大將打つゞいて馳きたり、孫權が魯肅を　敬を見て皆大に驚きけり。孫權自ら馬を雙て魯肅と共に陣門に入、われ今馬より下て卿を迎へ、赤壁に曹操を破りし功を　顯　に足んかと云ければ、魯肅答て申けるは、君の馬より下玉ふとて何ぞ某を　顯

て功ある由を申す。玄德重く敬ひ玉ふ所に、孔明勃然として怒て申けるは、魏延元より韓玄と仇なく、久く身を寄て一日も主君と賴みたる人を忽に殺して降參す、是大なる不義也、諸人の戒に早く首を斬とて武士を呼で引出しければ、玄德急に止めて命を乞、降れる人を殺さんこと大なる不仁なり、今魏延は功ありて罪なきの人なるに、何故に殺し玉ふと問玉へば、孔明が曰、その祿を食て其主を殺は是不忠なり、その國に居て其地を獻るは是不義なり、我よく魏延が相を見に、腦の後に謀反の骨あり、今御方に降るとも後必ず叛べし、不如早く誅して禍の根を斷ん。玄德の曰、もし此人を殺時は荊州を定るの計にあらず、必ず命を助べし。孔明乃ち魏延に向て、我いま汝が命を放す、能忠を盡して恩を報じ、野心を挿ことあるべからず、若野心を起時は早ければ早く晩ければ晩く卽時に汝が首を討んと云て放しければ、魏延拜して恩を謝す。黃忠又劉表の姪に劉磐と申人攸縣に閑居して居玉ふ由を告ければ、玄德使を以て招よせ乃ち長沙の太守とし、四郡すでに定ければ師を收て荊州の城に囘り、漢上の九郡已に過半を得玉ひしかば心の中大に喜玉ふ。時に江夏、巴陵、漢陽は吳の國より守り、夏侯惇は襄陽を落れて後樊城に籠る。この外悉く玄德に屬しかば、油江口を公安と改て城を築き、此より兵粮金銀の貯澤山にして四方の賢士爭て來り仕ければ、諸所の要害に勢を分て用心密く守り玉ふ。

黄忠関羽が盔の纓を射斬る
関羽

黃忠

に、面は重棗の如く目は朗なる星に似たり、義陽の人にて魏延字は文長とて元は劉表が大將たり、昔年玄德襄陽に來り玉ひし時、城を出て從んとせしかども、其行衛を知ざりしかば此ところに身を寄て折を待て居たりしに、韓玄その能を忌で常に重くは用ひざりけり。自ら刀を舞して黃忠を助け、大膚ぬぎに成て同志の者共を語ひ、數百人を引て城門に切て入ければ、黃忠再三留れどもさらに聽ず、自ら眞先に進んで一刀に太守韓玄を斬死し、首を取て馬にのり、城を出て關羽に降りければ、關羽大に喜び自ら城中に入て民を安じ、使を以て黃忠を招きけるに、黃忠病に托して出來ず。關羽乃ち早馬を飛せ、勝軍の樣を玄德に注進す。この時玄德は孔明と馬を雙べ、關羽が軍心元なしとて跡を追て來り玉ふ所に、前に指あげたる青き旗己と捲て一つの鴉北より南を指て飛わたり、三聲啼て過ければ、玄德の曰、これ如何なる吉凶ぞ。孔明馬上にて占て申けるは、長沙已に御方に屬して又よき大將を得玉はん、午の剋に喜を報ずべしとて共に路を早めて行けるが、已に午の剋に至て一人馬に鞭を加へ、飛が如に馳きたり、關羽すでに長沙の城を取て黃忠、魏延等悉く降人に出たりと告ければ、玄德かぎり無よろこび、已に長沙郡に入て合戰の樣を問、自ら黃忠が宅に行て謹で禮を成玉ひしかば、黃忠つひに降參し、太守韓玄が屍を求て城の東に厚く葬る。玄德法を出して民を治め玉ひければ、關羽又魏延を伴ひ來

張けれども、昨日われを殺さゞりし情を感じて絃ばかりを響しければ、關羽身を側めて避けるが箭も來らざりしかば、又急に追かくる。黄忠又絃を鳴しければ關羽急にこれを避、矢の來らざるを見て已に塹の邊まで追かけたれば、黄忠引回して兵と射る。その矢關羽が盔の纓に中り、前なる勢一度に喊を作りければ、關羽舌をふるひ箭を帶て逃かへり、扨は黄忠が弓百歩に楊の葉を穿、むかし養由が名を得たるの巧あり、今盔を射て我を驚したるは、昨日の情を思ふ故ならんとて兵を引て退きたり。黄忠は敵の退くを見て城中に回りければ、韓玄以の外に怒り、武士を呼で縛らしむ。黄忠大に叫でわれ罪なしと云ければ、韓玄申けるは、われ櫓に上て三日が間合戰の體を見に、汝兩日戰を決せず、今日關羽が追かくる時二度絃ばかりを鳴して第三の矢に盔の纓を射たりしは、昨日關羽が殺さゞりし情を思て内通の心を挿む、若早く汝を斬ずんば必ず後の禍を成んとて、武士に命じて城外へ引出さしむ。諸人これを諫んとしければ、韓玄いよいよ怒り、若諫る者あらば同罪に行はんと云けるに因て、詞を出す者一人もなし。武士共黄忠を挈り出して已に首を斬んとする所に、忽ち一人の大將刀を提て武士共を切散し、黄忠を助出して大音あげ、黄將軍は是長沙の名將、いま韓玄大逆無道にして賢人を輕じ色を重ず、若黄忠を殺す時は長沙の百姓を滅すなり、志同じき人は我に從へと呼はりければ、諸人これを見

も疎なることなしと思ひ、次の日早天に兵粮を使て城ちかく推よせければ、太守韓玄高櫓にのぼり黄忠出よと下知すれば、黄忠數百騎を引て橋を渡り、喊を咄と造て又關羽と馬を交へ、戰ひ五六十合にして勝負の色見ず、兩軍悉く入みだれ喊を作鼓を打ければ、關羽馬を飛して逃わしる。黄忠のがさじと追かけ、刀を擧て後より砍んとするに、關羽ものゝ響聲をきゝ引かへして見ば、黄忠が馬前足を折て主は地上に下立たり。關羽刀を振あげ已に斬んとしけるが、是ほどの大將を無代に伐んも情なしと思ひ、急に馬を留、われ今汝が一命を助く、快く馬をのり替て再び來れと云ければ、黄忠急ぎ馬に乘て城中へ走り入けり。韓玄は汗を流しいかなる故ぞと尋るに、黄忠が曰、この馬久く陣に臨まざる故に失あり。韓玄が曰、汝が弓を射、百たび放せば百たび中る、明日必ず橋の邊まで誘きよせ、只一矢に關羽を射よとて青き名馬を與ける。黄忠心の中に思ひけるは、われ今日すでに討るべかりしを關羽情ありて幸に放したり、我爭か明日これを射ころすべき、若射ざる時は君の命に違なり、如何すべきとて心さらに決せず、一夜案じ煩ひけるに、夜も已に明方に及で關羽はや寄來りしかば、太守韓玄いそぎ黄忠を呼、敵を誘き寄て一矢に射殺せと低語ければ、黄忠乃ち兵を引て城を出、互に威風を抖擻し又三十餘合戰ひ、黄忠いつはり負て走りけるを、關羽急に追來る。黄忠彀近く成たるを顧て已に弓を推

ること能ず、常に諸人のために悪まれけるが、此日關羽が攻來る由を聞、いそぎ老將黃忠を呼て、某例の大刀と大弓とを持て討て出、もし敵千人來らば千の首を取ん、萬人來らば萬の首を取ん。時に一人すゝみ出て曰、この度の戰は老將軍出玉ふまでもなし、某まかり出て關羽を生捕來るべし。諸人これを見れば管軍校尉楊齡なり。韓玄大に喜び重く恩賞を與へければ、楊齡欣然として馬にのり、急に兵を引て城外に突出し、遙に馬烟のあがるを見て陣を取て相まち、大音あげて罵ければ、關羽打よすると齊く刀を舞して切てかゝる。楊齡槍を撚て馬を交へ、只一合にして關羽に斬て落され、二つに成て死ければ、殘る勢四角八方へ散亂す。韓玄これを聞てあわて驚き、急ぎ黃忠を呼で大將とし城を出て戰はしめ、自ら高櫓に上て望み見る。關羽は勝に乘て城近く推よせけるが、年老たる大將門を開て出るを見てこれ必ず黃忠ならんと思ひ、五百餘騎を後に備へ刀を提げて馬を躍せ、來る者は黃忠にあらずやと問ければ、黃忠答て曰、汝すでにこの黃忠が名を知ながら何とて此に來れる。關羽あざ笑て曰、われ今こゝに來りて汝が首を取。黃忠大に怒り刀を舞して打てかゝり、共に戰ひ百餘合にして勝負を分ず。太守韓玄櫓より望で黃忠が悞あらんことを畏れ、金を鳴して軍を收めければ、黃忠退て城に入けり。關羽も十里ばかり陣を退け、黃忠年老たりと云ども武藝まことに尋常ならず、今日百餘合の戰に一つ

羽回書を調へ、三郡已に治りて趙雲、張飛大なる功を立たり、君もし兄弟の情を想ひ玉はば、某に長沙郡を攻させ、共に功名を取しめ玉へと望みしかば、玄德喜で即時に張飛を荊州へ遣し、關羽と替て城を守らしめ玉ふ。關羽これを聞て心の中勇み喜び、速に來て玄德に見ければ、孔明が曰、趙雲桂陽城をとり、張飛武陵城を取る、みな是わづかに三千の勢なり、今長沙郡の太守韓玄は大臆病の大將にて云に足ずと申せども、手下に一人の名將あり、南陽の人にて黃忠字は漢升と云、本は劉表に事て中郎將たりしが、今韓玄が手に屬し、年すでに六十に近して髮鬚悉く白しと申せども、力よく大なる刀を使ひ萬夫不當の勇あり、乃ち湘南の領袖なり、輕輕しくは敵しがたし、關羽もし向ひ玉ふならば宜く大勢にて打起玉へ。關羽が曰、軍師なに故に他人の能を稱して自己の威を落し玉ふぞ、量に一人の老武者、何ぞさのみ云に足んや、某三千餘騎を借ず、只手勢五百餘騎を引て必ず黃忠、韓玄が首を取來ん。玄德の曰、無用々々、汝必ず敵を輕んずること勿れ。關羽が曰、某もし三千餘騎を借ば假令かちても甲斐なしとて、手勢五百騎を引て遂に長沙に推よする。孔明乃ち玄德に申けるは、關羽は平生上たる人に傲て下たる人を憐む、もし黃忠を輕んぜば恐らくは悞あらん、君自ら行て關羽に力を添玉へと勸しかば、玄德げにもとて跡に繼て打起玉ふ。長沙の太守韓玄は素より生れ付躁うして賢人を用ゆ

城を出て戰んと云。時に從事鞏志と云もの進み出て之を諫め、玄德は大漢の皇叔にして仁義すでに天下にあらはる、張飛は乃ち世の虎將たれか能あたるべき、不如甲を卸で降參し玉へと云ければ、金旋甚だ怒り、汝は敵に內通の心あるか、先汝が首を刎んとて武士に命じて討せんと云を、諸人哀で一命を乞うけ、未だ戰はざる先に大將を切玉はんは、御方の爲に不吉なりと云ければ、金旋つひに鞏志を追退け、自ら城外二十里出て陣をとり、張飛が勢と出合たり。張飛は元來性さわがしうして少も怺ぬ大將なれば、敵の來るを見て兎角の問答にも及ばず、矛を舞して斬てかゝる。金旋大音あげて兵共出て戰へやと云けれども、手下の大將みな畏れて一人も出る者なければ、是非なく馬を出して戰はんとするに、張飛が喚き叫ぶ聲雷の如なるに膽を冷し色を失て逃けるを、張飛兵を引て追かくる。金旋已に城中へ入んとすれば、櫓の上より雨のふる如く矢を射掛、鞏志城上に立あらはれて、汝天の時を知ず自らこの敗を取り、われ民を引て悉く玄德に降れりと云も果ず、よく拽て兵ど射る。金旋面を射られ馬より倒に落けるを、軍士首を取て張飛に獻る。鞏志門を開て悉く降參しければ、張飛乃ち城に入て民を安じ、鞏志を使として桂陽城に遣し、玄德に此由を報ず。玄德乃ち武陵に來り、鞏志を以て太守とし三郡すでに治りければ、心の中深く喜び、書簡を荆州の城へ遣して關羽にこの喜を告玉ふ。關

今もし其妻を以て某が妻とせば、是世の人に唾を吐れん、一つ也、その婦人もし再び嫁ぐ時は、貞女の節を失ん、二つ也、趙範すでに降ると申せども、いまだ其心の眞僞を知ず、三つ也、我君あらたに荊州を取玉ひて人の心未だ安からず、某何ぞ一人の美女に溺て君の政を廢せんや、四つ也、この四を以て某何ぞ娶ことをせん。玄德の曰、いま事すでに定れり、汝この婦人を娶んは如何に。趙雲が曰、天下の美女これ一人に限り候はじ、某は只功名の天下に立ざるを恐る、何ぞ妻子なきを以て患とせん。玄德大に嘆じ、趙雲は眞に大丈夫なりとて、遂に趙範を免して初の如く桂陽の太守とし、重く趙雲を賞せられければ、張飛大に叫で、趙雲すでに桂陽城を取て大なる功を立玉へり、我一人は是無益の人となる、只三千の勢を引て武陵郡を乘とり、太守金旋を引擱で持來らんと呼はる。孔明心喜び、向に趙雲打起時、もし桂陽城を取ずんば必ず軍法を被んとて軍令狀を書おけり、御邊も又此の如く仕玉へと云ければ、張飛乃ち軍令狀を書、三千餘を引て武陵城へ發向す。

○黃忠魏延獻長沙

張飛三千餘騎を引て武陵城に攻來る由早馬急を告ければ、太守金旋大に驚き、即時に兵を揃へ

鮑龍が曰、たゞ五百騎を從へ行んとて、其夜二人趙雲が陣にゆき降參の由を云ければ、趙雲心の中にその詐なることを知、呼入て對面しけるに、二人地に拜して、趙範美女を以て將軍の心を惑し、醉後首を取て曹操に送らんと計る、某二人將軍の德を慕ひ、手勢を引て降參すと云ければ、趙雲詐て喜をなし、酒を强て前後も知ず二人を醉しめ、忽ちに縛て帳下に引するゑ、その手勢を捕て拷問するに、果して詐の降參なりと申す。趙雲乃ち陳應、鮑龍が首を刎、手勢五百人には酒を飮せ引出物を與て、罪の本はこの二人にあり、汝等が知ことにあらず、若わが計に從はば後必ず重く賞せんと云ければ、諸軍悉く再拜す。趙雲乃ち五百人を先手とし、自ら千餘騎を引て夜中に桂陽の城にゆき、陳應、鮑龍二人趙雲を殺して回り來れり、早く門を開玉へと呼はりければ、城の上より火炬を擧て之を見に、果して夕に出たる御方の者共なりしかば、趙範喜で門を開きけるを、趙雲つと馳入忽ちに生取て百姓を安んじ、早馬打て玄德に注進す。玄德、孔明すでに桂陽に來り玉ひければ、趙雲城を出てこれを迎へ、太守趙範を縛て階の下に引するゑたり。趙範哀で孔明に申けるは、某嫂を以て趙雲に與へ本心に降參せんと思ひけるに、趙雲却て怒をなして此の如に生捕たり。孔明乃ち趙雲に問て曰、美人は天下の人愛せずと云者なし、御邊なにゆゑに怒り玉ひし。趙雲が曰、趙範が兄昔し故鄕にて某と一面の交あり、

樊氏

趙雲
趙範
趙雲が清廉
趙範が義かくことを
怒て打倒す

曰、是は某が嫂にて樊氏の女なり。趙雲驚て容を改め愼で敬ければ、趙範乃ち彼女に坐せよと云。趙雲無用なりとて停しかば、女は已に內へ入けり。趙雲が曰、御邊如何なれば輕々しく嫂を出し玉へる。趙範笑て曰、かゝる不思議の緣あれば將軍必ず怪み玉ふな、某が兄世を辭して已に三年に及べり、嫂年少して寡となる、某常に然るべき婿を撰び、改めて嫁しめんと云へば、嫂三の望あり、一つには世に高名を取、二つには亡し夫と姓同く、三つには文武の才雙び全く、この三つのもの備れる人あらば必ず再び嫁んと云、今將軍を見るに儀表堂々として其名四海に振ひ、兄と同姓なれば是に過たること有じ、願くは嫂を將軍の妻となし累世の好を結ん。趙雲眼を怒し坐を起て聲を厲し、汝が嫂は卽ち我嫂にあらずや、何ぞ人倫の道を亂るべきと以ての外に怒りければ、趙範深く羞て面を赤め、われ慇懃に持なす所に何ゆゑに無禮なると云て、左右に目をつけ生捕んとする氣色に見ければ、趙雲心にこれを覺り、強く拳を固めて趙範を打倒し、遂に馬を飛して城外へ出去り。趙範頭を抱へて急に陳應、鮑龍を呼いかゞせんと議しければ、陳應が曰、この人大に怒て出たり、今は只快く一軍し玉へ。趙範が曰、我畏らくは彼に勝こと能じ。鮑龍が曰、我等二人詐て趙雲に降り、彼が陣中に相待べし、太守兵を引て推よせ玉はば、其二人陣上にて擒にせん。陳應が曰、この計極めてよし、態と小勢を引て降參せよ。

趙雲が馬つと馳來り、長き臂を伸て陳應をかい摑み地の上にどうど擲ければ、殘る兵は四角八方に散亂す。趙雲乃ち陳應を縛て本陣に囘り、汝何者なれば我に敵せんとする、今首を斬べけれども刀を汚して其益なし、この故に暫く発す、急ぎ城中に囘て太守趙範に降參を勸めよと云て放しければ、陳應罪を謝して鼠の竄が如く頭を抱へて城に入、趙範に見て右の由を告ければ、趙範が曰、我本より降參せんと云しに、汝强て戰をなし今却て此の如しとて陳應を追出し、遂に十騎あまりを引て城を出降參の由を云ければ、趙雲自ら迎へ入、上賓の禮を以て重く敬ひ、酒を進て持なしける。酒數巡に至て趙範申けるは、今將軍は某と同く趙姓なり、昔は定て一家の好もあるらん、已に此の如き上は共に兄弟の義を結び永く一家の交を成んとて互に年を尋ぬるに、二人同年にして趙雲四月早く生れたりければ、趙範再拜して兄と仰ぎ、同じ鄕に生れて同年同姓なれば心の中甚だ喜び、晩に及で相わかれ、城中に囘りて次の日趙雲を招きしかば、趙雲たゞ五十餘騎を率して城に入。郡中の百姓香を燒て悉く道の傍に出迎へければ、趙雲四門に榜をかけて民を安じ、趙範が府中に入ければ、酒宴を設て持なし、半酣に及で請じて後堂に入しむ。趙雲その慇懃なるを以て痛く飮醉ける時、趙範一人の美女を呼で盞を取しむ。趙雲これを見るに、身に素き羅を被て傾國の色あてやかなりしかば、如何なる人ぞと問に、趙範答て

は心喜び三千餘騎を引て已に桂陽に馳向ふ。この山先達て沙汰ありければ、桂陽の太守趙範あわて驚き、急ぎ諸將を集て計を議す。元來手下に陳應、鮑龍と云二人の大將あり。共に力よの常に超て、陳應はよく飛叉を使ひ、鮑龍は虎を搏にす。二人ひとしく出て曰、玄德は漢に反く逆賊なり、殊に曹操と敵をなす、某願くは先手に進んで生捕ん。太守趙範が曰、われ聞劉玄德は漢の天子の皇叔にして、殊に孔明計深く、關羽、張飛勇あたる者なし、況や今寄來る趙雲と云者は、曾て當陽の長坂にて曹操が百萬の勢を蒐やぶりて、人なき所を行が如し、我等爭か防ことを得ん、不レ如早く降參すべし。陳應が曰、甲斐なきことを宣ふものかな、某打向てもし趙雲を生取來らずんば、其時に降り玉へ。趙範やむことを得ず陳應を大將とし、三千の勢を引て城外に陣を取せければ、趙雲これを見て陣勢を開き布。陳應飛叉を撚て一陣に馬を出しければ、趙雲大音あげて曰、わが君劉皇叔は乃ち荊王の弟にて、公子劉琦を扶て國中の民を安じ玉ふ、汝等なんぞ降らざる。陳應之を聞てあざ笑ひ、何玄德とも劉琦ともいへ、我は已に曹丞相に從りと呼はりければ、趙雲大に怒り槍を撚て突てかゝる。陳應飛叉を持て馬を交へ、戰ひ五六合にして叶ずして走ければ、趙雲急に趕來るを、陳應引かへして飛叉をなげ付たり。趙雲兼て用心しければ、左の手にて受とめ、却て陳應に投打けるを、陳應急に身を避んとすれば、

引組で縛來る。劉延地に跪き、これ某が本心にあらず、邢道榮が所爲なりと云ければ、孔明乃ち解ゆるし酒を進て城中に送り回し、急ぎ城を開て降らずんば、忽ちに打破んとて、零陵城へ入しめければ、劉延父に見て孔明が德を稱し、遂に城を出て父子共に降參す。孔明乃ち劉度を始の如く郡守として兵粮を軍中に出さしめ、劉延を旗下の大將として郡縣の民悉く治りしかば、又桂陽城を取んとて計を評商す。

○趙雲計取桂陽城

零陵郡すでに治りければ、玄德諸將に問て曰、われ又桂陽城を取んと欲す、誰人かまづ行ん。趙雲が曰、某願くは行ん。張飛をどり出て曰、某も願くは行ん。孔明が曰、二人爭をし玉ふな、已に早く對たれば只趙雲を用ふべし。張飛が曰、某も行んことを願ふ、何ゆゑに用ひ玉はざる。孔明が曰、しからば鬮を拈て行玉へ。趙雲、張飛さらばとて鬮を取けるに、趙雲先と云字を拈ければ、張飛大に腹を立て曰、某他人の助を頼ず、只三千餘騎を引て忽に桂陽城を取ん。趙雲が曰、某も只一人三千の勢にて城を攻、もし打まけば軍法を被らん。孔明喜で軍令狀を書せ、精兵三千餘騎を選で趙雲に授しかば、張飛怒て服せざりけるを、玄德大に叱て退け玉ふ。趙雲

孔明が曰、いかなる計を以てか生取べき。邢道榮が曰、もし某を放し玉はば能計を成ん、夜に入て劉延が陣へ攻來り玉へ、某必ず內應せん、劉延もし擒と成ば、城中の劉度自ら降參せん。玄德の曰、奴が申こと皆謬ならん、早く首を刎よ。孔明が曰、邢道榮は謬を申大將に有ず、彼が計に從て今夜若劉延を生捕なば、必ず重く用ひ玉へとて卽時に放して回しければ、邢道榮わが陣に回り、劉延に見て右の趣を語る。劉延が曰、いかゞして敵を待べき。邢道榮が曰、敵の計に就て計を行ひ、今夜陣の外に兵を伏おき、陣中には虛く旗なんど插み、孔明夜討に來らば引包で生捕ん。劉延大に喜び兵を伏て相待ければ、案の如く其夜の二更に一手の敵軍悉く火炬を提げ、寄來て陣屋に火をぞ掛たりける。劉延これを見て一度に咄と喊を造り、邢道榮と二手に分れて討て出ければ、寄手の勢散々に逃はしる。劉延勝に乘て十里あまり追かけ、敵も行方なく逃ければ、我陣に火の掛りたるを滅んとて早々に引回しけるに、忽ち陣屋の中より一人の大將その聲雷の如く、我は燕人張飛なりと名乘て火の光の內より切てかゝる。劉延おそれ驚き急に邢道榮を呼、わが陣はとても火かゝりぬれば打棄て却て孔明が陣に攻かゝらば、敵の備なきを劫かす也とて共に又取て回し、十里ばかり來りければ、趙雲一軍を引て路を遮り只一槍に邢道榮を突ころす。劉延あわて蝌き馬を打て逃んとすれば張飛うしろより喚て蒐り、

に鶴氅を被て手に羽扇を持、はるかに邢道榮をさし招、我は是南陽の諸葛孔明なり、曹操百萬の勢を率ゐ來りしかども、我少しの計を用ひしかば一人も生て回るもの無、汝等なんぞ速に降參せざると呼はりければ、邢道榮大に笑て曰、赤壁に曹操を破りしは是呉の周瑜が計なり、汝何とて詐を申ぞ、人に依りて左樣の口を動せとて、大なる斧を打ふり馬を飛して討てかゝる。孔明車を回して内に入陣門を閉ぢけるが、邢道榮すでに近づきければ、陣勢又左右に開け、二手に分れて逃はしる。邢道榮はるかに中央を望むに、一簇の黄なる旗續擁して走りければ、是必ず孔明ならんとて馬を飛して趕掛、山の腰を廻る所に、黄なる旗を引回して忽ち陣勢を開き張、孔明が車は見ずして一人の大將矛を横へ馬を躍せ、われは燕人張飛なりと名のりてその聲雷の如く直に邢道榮に打て蒐る。邢道榮怒りのまゝしりて斧を舞して二三合戰ひけるが、叶はずして走ければ、張飛急に追きたる。邢道榮馬を打て走る所に、兩旁より伏の勢一度に起り引包で攻たりしかば、命を棄て戰ひ這々に逃れ出たる所に、一人の大將ゆく先を横ぎり、我は常山の趙雲なり、快く降參せよと呼はりければ、邢道榮のがるべき樣なく、馬より降て地に跪く。趙雲縛て陣中に回りければ、玄德甚だ怒て斬て棄よと宣へば、孔明急に之を止め、邢道榮に問て曰、汝もし劉延を生取きたらば、我必ず汝を重く用ん。邢道榮が曰、卽時に行て生取來らん。

は劉度なり、若この四郡を得玉はば、魚米の便を通じて自ら長久ならん。玄德限なく喜で、四郡まづ何よりか攻べきと問玉へば、馬良が曰、相江の西零陵尤も近し、まづ零陵を取て次に武陵を取、その後に湘江の東桂陽を取て、次に長沙を取玉へ。玄德これに從ひ遂に馬良を用て從事官とし、伊籍を副官とし、孔明と商議して劉琦を襄陽城に入しめ、關羽を呼回して、兵の手配を定め、まづ零陵郡を攻取んとて張飛を先陣とし趙雲を後陣とし、玄德、孔明中軍にそなへて、都合その勢一萬五千餘騎、建安十四年春正月に打起、關羽を留て荊州の城を守らせ、劉封、糜竺に江陵城を守らしむ。この時零陵の城には太守劉度すでに玄德の勢の向ふ由をきゝ、嫡子劉延を呼で計を議しければ、劉延が曰、これ等の敵なんぞ畏ることあらんや、某が内に邢道榮とて萬夫不當の大將あり、重さ六十斤の大鉞をつかふ、これを用て戰を成ば、孔明とも云、關羽張飛ともいへ、悉く首を取ん。劉度喜で邢道榮を召出しけるに、邢道榮自ら己が能に傲て、胸中の武藝古の廉頗、李牧にも劣ずと勇みければ、劉度を初めて皆たのもしき思をなし、劉延に精兵一萬餘騎を付、邢道榮を先手として城外三十里はなれ、山に靠水に傍て陣を張。去程に孔明兵を引て推よせ、互に陣を取向ひければ、邢道榮馬を出し大音あげて、反國の賊なんぞ我境を侵と呼はりしかば、孔明中軍より一輛の四輪車を推出させ、頭に綸巾を戴き身

○孔明定計略四郡

玄徳は孔明が計を以て事故なく荊州、南郡、襄陽三箇所の城を乗とり、心の内甚だ喜び共に長久の計を議し玉へば、忽ち一人すゝみ出、荊州長久の計を思ひ玉はば、宜く賢人を求て問玉へと云。諸人これを見れば山陽の人に伊籍字は機伯なり。玄徳昔の恩を思ひ、厚く敬うて宣ひけるは、ねがはくは然るべき賢人を薦玉へ。伊籍が曰、荊襄の世家兄第五人その内一人ことに絶れたる大賢人にて、眉の毛多く白し、乃ち襄陽宜城の人にて、馬良字は季常、兄弟五人皆才名あり、世の諺に馬氏の五常白眉最良と云り、其弟馬謖字は幼常、これ又ふかく軍書を明めたり、何ぞ召て用ひ玉はざる。玄徳使を馳て招玉へば、馬良忽ちに來り、禮了て高坐に著。玄徳長久の計を問玉へば、馬良申けるは、いま襄陽城は敵を受るの地にして久しくは守りがたし、幸に劉琦いま病に臥玉ふ、劉琦を此城の主とし、舊き大將を尋ね集めて共に固く守らしめ、都へ表を奏して劉琦を荊州の刺史とし、民の心を懐てその後に南の四郡を攻とり、金銀をあつめ兵粮を貯へてよく根本を固せば、これ長久の計ならん。玄徳問て曰、いま四郡を守るは如何なる人ぞ。馬良が曰、武陵の太守は金旋、長沙の太守は韓玄、桂陽の太守は趙範、零陽の太守

良久しを施こと能ず、幸に免し玉へとて坐に著ければ、魯肅色を失ひ默然としてもの云ず。良久して申けるは、若劉琦の世を辭し玉ふ時は如何ん。孔明が曰、劉琦一日この世に居玉ふ時は、一日荊州の主なり、若世を辭し玉はば、其時別に議論あらん。魯肅が曰、劉琦もし世を辭し玉はば、荊州必ず呉に還し玉へ。孔明が曰、この言まことに公論なりとて、大に酒宴を設て持なしければ、魯肅わかれて本陣に回り、周瑜に見て右の趣をかたる。周瑜怒て申けるは、劉琦は年わかき壯士なり、いつか死して荊州を返すべきぞ。魯肅が曰、都督心を安んじ玉へ、某久からずして必ず荊州を取かへさん。周瑜が曰、いかなる故ぞ。魯肅が曰、われよく劉琦が體を窺に、甚だ酒色を過してその病四肢に透れり、今面の色やせ衰て、氣喘ぎ血を吐、半年を過ずして必ず死せん、その時荊州を取んに、玄德いかゞ詐ことを得ん。周瑜いまだ怒を休ず、いかゞせんと議する所に、呉主孫權早馬を飛し、自ら麾下の勢を引て合淝の城を攻ると云ども、敵強して寄手やゝもすれば敗北す、先荊州を打すてゝ盡く回り來れと下知しければ、周瑜已ことを得ずして兵を收め、且く柴桑に回て病を養ひ、程普を大將軍として兵船をそろへ、合淝に馳向て呉主孫權が戰を助しむ。

申べき事あり。趙雲が曰、主人は孔明と荊州の城にあり。魯肅直に荊州に到り、城の上を望み見るに、色々の旗を建雙べ整々として備ありければ、心の中に孔明は常の人にあらずと思ひ、門に入て魯肅來れりと云ければ、孔明これを聞て大に城門を開き、迎入て禮を施し、賓主の坐定まりければ魯肅が曰、主人孫權いま某を以て使たらしむるは、曹操前に百萬の勢を引て江南に下ると申しは、實は玄德を擒にせん爲なり、然るにわが國多くの錢粮を費し、許多の人馬を損ひ、力を盡して幸に曹操を打やぶりたれば、荊州は自ら我國に屬ふべきに、今却て玄德詐の計を用て荊州を奪ひ玉ふは是いかなる理ぞや、願くは其ゆゑを聞ん。孔明答て申けるは、魯肅は本より高明の士なり、何ゆゑにかゝることを云玉ふぞ、昔しより荊州は吳主孫權の國にあらず、乃ち劉表の基業なり、吾君劉皇叔はこれ乃ち劉表の弟なり、劉表すでに亡玉ふと云ども、嫡子劉琦なほ在す、劉皇叔これを扶け叔姪共に荊州を治めて、父兄の基を繼玉ふ、誰かこれを不可なりと云ん、古より物見ゝ主と云の諺を聞玉はずや。魯肅が曰、若劉琦この國を保玉ふ時は、是道の當然なり、わが國いかんぞ綺申べき、只恐らくは劉琦江夏城に在てこの所に居玉はじ。孔明が曰、御邊もし疑の心あらば直に對面し玉へとて、左右に命じて迎へしむれば、劉琦屛風の後より立出、從者二人に左右の手を引れ、魯肅に向て曰、われ病に臥て禮

ずして玄德に取れたりと告ければ、周瑜が曰、孔明なにとて曹操が符を縦に取得たる。程普が曰、孔明すでに南郡を取て長史陳矯を生取たり、兵符はことごとく此人の許にあり。周瑜これを聞てあつと叫び、金瘡忽ちに破れて地の上に死ければ、諸將急に扶け起し、半時ばかりして生出たり。周瑜牙を嚙で申けるは、もし孔明を殺さずんば我心いつか安からん、程普よく吾力を助玉へ、早く南郡を取てその後に國に回るべしとて、共に計を議する所に、魯肅外より内に入。周瑜問て曰、われ今兵を引て玄德、孔明と戰ひて決して南郡を奪はんとす、御邊の意いかん。魯肅が曰、これ必ず無用なり、今曹操と戰を決して成敗いまだ分れず、吳侯又合淝を攻玉ひて勝負の色料りがたし、然るに今玄德と國を爭はば、曹操必ず虛に乘て攻來らん、況や玄德は昔曹操と交を深す、今又共に力を合せて一同に吳へ攻來らばいかゞして防ぎ玉はん。周瑜が曰、われ等計を用て曹操が大軍を赤壁にて打破り、多の金銀兵粮を費し人馬を損ひしに、荊州を玄德に取れしことを恨むる也。魯肅が曰、都督しばらく怒を休玉へ、某自ら行て玄德に對面し、道理を責て荊州を取かへさん、若これをも聽ずんば其時に兵を起し玉へ。諸將みな之を聞て尤然るべしと同じければ、周瑜乃ちこれに順ふ。魯肅直に南郡の城に行、門を開けと呼はりければ、趙雲櫓より問て曰、いかなる故ありて來り玉へる。魯肅が曰、われ玄德に見て

入易る勢なかりしかば、已に南郡の城も近くなりて急に退て入んとするに、一聲の鐵砲耳根に響て凌統が一軍路を遮り、戰ひ疲れたる曹仁が勢を引包で攻ければ、曹仁のこり少に討れ横さまに逃んとするに、又甘寧が一軍路を遮り四角八方より攻たりければ、曹仁からき命を扶り、南郡の城に入こと能ず、直に襄陽の路にかゝり、馬を飛して逃のびたり。周瑜、程普は十分に打勝、南郡の城を取んとて直に堀の邊に到りければ、城の上には夥しく旗を建、一人の大將高櫓に上りて、周都督恠玉ふな、吾孔明の下知を受て已にこの城を乘とりたり、吾は乃ち常山の趙雲なりと大音あげて呼はりければ、周瑜大に怒り、急ぎ甘寧を呼で荊州の城へ向はしめ、凌統を呼で襄陽の城へ向はしめ、この二つの城を取てその後南郡を取んと云て兵の手分をする所に、忽ち早馬はせ來り、孔明すでに南郡の城を取て後、兵符を以て荊州の城に人を遣し、今南郡すでに危し、早く來て救ふべしと云ければ、荊州を守る大將符を見て誠なりと思ひ、急に勢を揃て出けるに、孔明兼てより張飛を遣し、卽時に城を奪ひ取て却て曹仁を攻やぶりぬと注進しければ、周瑜大に驚く所に、又襄陽より早馬來り、孔明符を以て襄陽の城に人を遣し、曹仁いま吳の勢に圍れたり、早く來て救ひ玉へと云ければ、城を守る大將夏侯惇まことなりと思ひ、兵を揃て打出けるを、孔明又關羽を遣して忽ちに城を奪ひ取、二箇所の城みな力を費さ

なんと云けるが、暮に及て呉の陣より軍士十餘人走り來り、一大事を申んと云ければ、呼入て之を問に、その內二人は初め曹仁が手に生どられて免されたる呉の兵なり。乃ち曹仁に見え、今日周瑜金瘡やぶれ、陣中に回て忽ちに亡たり、諸將ひそかに喪を發して呉の國に回らんとす、某等は程普に恨ありて今こゝに降參すと云ければ、曹仁大に喜び、重く恩賞を與て急に諸將を集め、今夜呉の陣を劫して周瑜が首をとり、都に上せて丞相の御感に預らんと相議しければ、陳矯が曰、此計速に行ずんば、呉の勢必ず國に回らん。曹仁急ぎ手分を定め、牛金を先手として自ら中軍に備へ、曹洪、曹純を後陣とし、初更の比こと〴〵く城を出直に呉の陣に推よせ、中門に突て入けるに、敵一人も見ざりしかば、心疑てその邊を窺に、虚く旗ばかり挿みたれば、扨は敵の計に落されたり、早く出よと云程こそあれ、翊き躁で我先にと逃たりけるに、忽ち四方に鐵砲を響して東の門より韓當、蔣欽、西の門より周泰、潘璋、南の門より徐盛、丁奉、北の門より陳武、呂蒙、喊を造て討て蒐り、おつ取こめて餘さじと揉だりしかば、一支も支へずして討るゝもの數を知ず、我先にと南郡の城に逃かへる。曹仁が大勢こと〴〵くさわぎ立て、前後に度を失ひ散々になりしかば、自ら數十騎を引て圍を切ぬけ曹洪と一手になる。曹洪、曹純は後陣に備て居たりけるが、兵は大半討れぬ、五更の比まで戰うて

曹仁匹夫いかに子この間の矢に弱りたるかと大音あげて呼はる。時に周瑜自ら馬を馳出して、曹仁左右を顧周郎を見ずやと云ければ、曹仁が兵共周瑜が生てあるを見て皆怕れ驚きけり。曹仁左右を顧て、凡そ金瘡は怒を發して氣を激する時は必ず重ると云ことを聞り、汝等さまぐ\に惡口して周瑜が心を怒しめよと云ければ、諸軍大音あげて詈辱しむ。周瑜これを聞て大に怒り、誰か出て敵を破んと云ければ、潘璋馬を出さんとする時、周瑜如何したりけん俄に夥しく血を吐て馬より倒に落たりしかば、曹仁これを見て一同に斬てかゝり入亂れて攻戰ふ。諸大將命を棄て周瑜が前に立ふさがり、這々に救囘りければ、程普敗軍を收め周瑜に見て病の樣を問に、周瑜ひそかに告て申けるは、これ我計を成ん爲なり。程普が曰、いかなる計ぞ。周瑜が曰、われ矢瘡を患と云どもさまでは心に苦ず、曹仁に我病の重を知しめん爲に詐て馬より落たり、是敵を欺の計なり、密に物馴たる兵を擇び、南郡の城に行て周瑜こそ金瘡やぶれて死したりと云せなば、曹仁必ず夜討に來るべし、御方四方に伏勢を置、取卷て之を攻ば必ず曹仁を擒にせん。程普大に喜び、この計甚だ妙なりとて、卽時に喪を發して哀み哭き、周都督矢瘡起て已に亡び玉ふと沙汰して、陣々に喪の服を被たりける。この時曹仁は城中に在て諸大將をあつめ、今日周瑜怒を發して金瘡やぶれ、口より血を吐て倒に落たり、久しからずして必ず死

國に囘て周瑜が瘡を養ひ、吳侯に見て事を議せんと云て衆評いまだ定らず。此時周瑜は瘡の痛重しと云ども、心の內に計を工夫し、すでに敵の勢の每日戰を催を知と云ども、諸將の來り尋ぬるを待ていまだ詞に出さざる所に、ある日曹仁大軍を引て推よせ、鼓を打喊を造りければ、程普は固く守て更に出ず。周瑜諸の大將を呼、何くの喊の聲ぞ、鼓の響も甚しきと問ければ、諸將答て曰、御方の陣に士卒を調練して蒐引を敎る鼓なり。周瑜怒て申けるは、何ゆゑに汝等甚だ我を欺く、われ已に敵の每日來て樣々に罵るを知と云ども、程普に諸軍を任せ置たれば、定めて討て出て戰ふらんと思ひしに、何とて徒に日を送れる、急ぎ程普を召と云ければ、程普來て申けるは、某よく醫者の申を聞に、都督の矢瘡重ければ、必ず怒を起しむべからずと云り、この間每日敵の勢攻きたり樣々に詈ると云ども、某了に都督に報ぜず。周瑜が曰、汝等が討て出て戰ざるはいかなる故ぞ。程普が曰、諸將みな暫く國に引退き、都督の瘡を養て再び又出んと云、このゆゑに戰はず。周瑜きゝも敢ず床の上より驅起て申けるは、大丈夫の士すでに君の祿を受ては、戰場に討死して馬の革を以て屍を裹み、故鄉に囘るを本意とす、何ぞ我一人の故を以て國家の大事を廢べけんやとて、甲とつて馬にのりければ、諸將みな駭ずと云ものなし。周瑜自ら數百騎を率し、討て出て陣を取ければ、曹仁馬を旗の下に躍せ、周瑜孺

兵を引て討て出、首を取んと集りければ、徐盛、丁奉取て返し、近付敵の馬の諸膝薙では駁落させ、二人命を棄て防ぎし間に、周瑜は兵共に扶られて漸に逃のびたり。城中の勢勝に乘て追かけ餘さじと攻たりしかば、吳の勢自ら踐踏し、塹に落て死する者數を知ず。大將程普後陣を壓て軍を收めんとすれば、曹仁、曹洪二手に分て斬てかゝり內外より攻たりければ、吳の勢いよ〱慞騷で程普も危見えける所に、吳の大將凌統一軍を引て側より截て出、勇を震うて戰ひしゆゑ、曹仁も兵を引て盡く城中に引こもる。程普敗軍を收めけるに、手負討死その數を知ず。徐盛、丁奉二人周瑜を扶て回りしかば、中軍の醫者を召て鉗を以て鏃を掘出し、藥を以て瘡の口を塞ぎけるに、痛手なれば其苦堪がたく、飮食共に廢れけり。醫者申けるは、これ矢に毒を傳て射たりしゆゑ、急には中々痊がたし、若怒の意起て氣を激する時は、この瘡久して又おこる。程普これを聞ていよ〱事を愼み、諸軍に下知を傳て敢て輕々しくは出ざりけり。二三日を過て牛金一手の勢を率し、直に來て戰を催す。されども程普は固く守て出ざりければ、牛金樣々に惡口して暮に及で城に回り、次の日又來て罵り、已に三日に及びしかども、程普心の中に周瑜が怒んことを恐て敢てこの事を知せず。次の日又牛金推よせ、喊を造り鼓を擊て周瑜を生取んと訇ければ、程普ひそかに諸大將を集め、不レ若しばらく兵を收め、

して斬てかゝる。周瑜鞭を擧て指まねき、誰か出て戰はんと云ければ、呉の陣より韓當馬を馳出し、二人戰ひ三十餘合にして曹洪叶はで引退く。次に大將曹仁馬を出し、大音聲を揚て、周瑜は何くにかある、快く出よ、勝負を決せんと呼はりければ、呉の陣より周泰馬を馳出し、二人戰ひ十餘合にして曹仁打負て走りければ、陣中大に亂れて後陣より逃くづれ、曹仁、曹洪且戰ひ且わしる。周瑜これを見てすは蒐れとて馬を出せば、左右の精兵勢にのりて殺出し、亂れたる敵の勢を四角八方へ斬ちらす。曹仁一支も支ず城中へ逃入んとするに、周瑜すき間もなく追かけしかば、城へ入ることも叶ず、皆西北の方を望んで散々に逃たりけるを、韓當、周泰先陣の勢を引て息をも繼ず追かくる。周瑜は南郡の城を見るに、四門みな開けて内に人ありとも見えざりければ、自ら數十騎を引て眞先に進み、鞭を加へて門の内まで入けるを、長史陳矯櫓の上より密に窺ひ、丞相の計あだかも神に通ぜりと獨言して、相圖の鐵砲を響しければ、兩旁より數千の伏勢一度に起り、弩を放つこと雨よりも繁く、透間もなく斬て蒐りしかば、周瑜大に驚き、急に退て出んとするに、手下の勢互に推あひ、こと〴〵く陷坑に陷て上を下へと蠢き討るゝ者數を知ず。されども周瑜は辛き命を扶かり、馬を飛して走りけるが、流矢一つ左の脇に篦ぶかに射こむ。急所の痛手なれば馬より倒に落けるを、城の中より見すまして大將牛金

四、十分に打勝しかば、周泰息をも續せず趕掛、南郡の城外にて又入みだれて攻戰ひ、日も昏に逼りければ共に軍を收ける。

○孔明一氣死周瑜

去ほどに曹仁が勢大に敗れ、盡く南郡の城に入て共に計を議しければ、曹洪が曰、今夷陵の城敵に取れて事すでに危急なり、丞相の遺し玉へる計を開てこの難を救ふべし。曹仁が曰、汝が言わが心に合へりとて、共に披き見て甚だ喜び、卽時に下知を傳て五更に兵粮を使ひ、明方に城中の勢ことぐ〵く打て出、矢倉の上には幟旗を挾で人ある體に見せ、虛く勢を張て敵の來るを待居たり。周瑜は甘寧を救ひ出して夷陵の城を乘とりて後、いまだ六日を過ざるに直に南郡の城に推よせ、自ら將臺の高に上て望み見れば、城中の勢三手に分れて盡く出、櫓上墻の陰には虛く旗なんど挿んで人ありとも見えず、又兵の城を出るを見れば皆腰に兵粮を付たり。扨は曹仁この城を守ること能ず、密に逃路の用意するならんと思ひ、卽時に諸大將を集め、二手の勢を左右に備へ、先陣もし勝にのりて敵を追ば、貝金を鳴を聞までは何く迄も追かけよと下知して、程普を後陣とし周瑜自ら先手に進で、鼓を打喊を作りければ、曹洪馬を飛

甘寧

甘寧曹洪と二十四合戦ふ
曹洪

を守せ、即時に兵を引て夷陵の城に向ふ。呂蒙申けるは、夷陵の南にけはしく細き路あり、南郡を攻るに甚だ便あり、只五百の勢を谷の内に伏て、柴薪を積で路を遮り玉へ、敵もし敗れて走る時は、こと〴〵く其馬を奪べし、直に勝に乗て兵を進むる時は、南郡を取こと卵を壓が如ならん。周瑜これに従ひ、誰か圍を突て甘寧を救出さんと問ければ、周泰すゝみ出て曰、某ねがはくは行んとて、馬に飛のり刀を舞して、少もためらはず喚て曹仁が勢に打て入、直に突て夷陵の城下に到りければ、甘寧矢倉より之を望み城を出て迎入、周瑜が自ら救ふよしを聞て心の中勇み喜び、次の日諸軍に兵粮をつかはせ、打て出て揉合せんと議す。曹洪は曹純、牛金を招き、共に甘寧がことを相議し、若周瑜が救の勢きたらば、如何して防べきと云ければ、牛金申けるは、まづ南郡に人を遣し、其のち某を先手として防ぎ玉へ。曹洪げにもとて南郡の城へ人を遣して曹仁に計を合せ、兵を分て相待けるに、次の日呉の勢攻きたり、鼓の聲大に震ふ。曹洪急に討て出、火を散して戰ふところに、甘寧、周泰、夷陵の城を推ひらき、二手に分れて殺出しければ、曹洪みだれ立て散々に逃わしるを、呉の勢あまさじと揉だりしかば、曹洪、曹純一支も支へず、さしも險き細路を我先にと走りけるに、案の如く路に積だる柴薪に支へられ、馬を棄物の具を棄て這々に辛き命を扶かり、南郡の城へ逃入ければ、呉の勢馬を得こと三百餘

れば、細作これを聞て曹仁にこの由を告。曹仁大に驚き、陳矯を召て計を議するに、陳矯申けるは、將軍もし夷陵を救ひ玉はずんば、南郡とても守り難からん。曹仁これに從ひ、弟曹純を大將とし、牛金を副將として夷陵の城を救はしむれば、曹純ひそかに人を遣し曹洪に計を授け、敵を誘て戰んと約す。この時吳の大將甘寧は兵を引て夷陵の城を攻けるに、曹洪城外に討て出、二人戰ひ二十餘合にして曹洪叶ずして引退く。甘寧勝に乘て忽ち城を攻とり、已に暮方に及びける時、曹純牛金が後攻の勢思ひもよらず馳來り、兩方より挿んで攻たりしかば、甘寧戰利を失ひ、城中に圍まれて出ること能ず。この由周瑜が陣に聞えければ、周瑜驚て如何せんと評議するに、程普申けるは、早く兵を分て救ひ玉へ。周瑜が曰、この處は第一の本陣なるに、若兵を分て夷陵に向はば、曹仁必ず大勢を引て攻きたらん、若兩旁より挿んで攻る時は、是由々しき大事なり。呂蒙すゝみ出て曰、甘寧はわが國股肱の忠臣なり、若これを救ずんば何を以てか人を用ひん。周瑜が曰、われ自ら行て之を救ふべし、誰か能この本陣を守らん。呂蒙が曰、凌統を留てこの處を守らしめ、某を先手として都督後陣を守り、直に夷陵に向ひ玉はば、十日を出ずして功を成ん。周瑜が曰、凌統いかに此大事を勤べきか。凌統が曰、若十日の間ならば某命を棄て守るべし、十日の外は某が力に稱ず。周瑜大に喜び一萬餘騎を留て凌統に本陣

叶ふまじ、我自ら出て救ふべしとて甲取て投掛馬に打のり、屈強の勢數百騎を引て城外へ渦まき出れば、陳矯は櫓にのぼり大鼓を鳴して威を助く。曹仁兵を引て呉の勢と濠一つを隔て、已に百歩ばかりに逼りければ、同音に喊を咄と造り、馬を飛して壕を超、直に呉の勢の眞中へ突て入けるに、徐盛迎へ戰うて當ること能ず、馬を回して走りければ、曹仁氣に乘て中軍に切て入、呉の勢を四角八方へ蒐散して牛金を救ひ出す。されども猶のこりたる勢四五十騎大勢に圍れて出ること能ざりければ、曹仁又蒐入、敵の大勢を十方に打ちらし、御方を引て出でけるに、呉の大將蔣欽路を攔て討とめんとす。曹仁事ともせず蹴ちらして通りければ、牛金も力を合せて戰を助く。曹仁が弟曹純も又城を出て蒐たりしかば、兩方の勢入亂て散々に戰ひけるに、呉の勢大に破れて退ければ、曹仁勝軍を收て徐々と城に回る。陳矯等出迎へ盃を揚て喜をなし、今日の戰を見るに將軍は眞の天神なりとて、共に城をぞ守りける。徐盛、蔣欽打負て回りければ、周瑜腹を立て斬て棄んと云けるを、諸將やう／＼に命を乞扶く。周瑜再び兵を揃へ急に南郡を攻んと議しければ、甘寧諫て曰、かる／＼しく向ひ玉ふな、今曹仁夷陵に城を築き、曹洪を籠て犄角の勢をなす、某ねがはくは三千餘騎を率して、夷陵の城を攻やぶるべし、將軍は南郡を攻玉へ。周瑜しかるべしとて先甘寧に三千餘騎を付、直ちに江を渡て夷陵の城に向はしむ

て曰、某ねがはくは行ん。周瑜が曰、汝先手に進まば徐盛、丁奉を副將とし、五千の精兵を率して直に南郡に攻かゝれ、吾自ら跡に續んと云ければ、蔣欽命を受て去にけり。この時曹仁は南郡の城に在て曹洪を夷陵の城に籠て、共に犄角の勢をなし、壕を深し壘を高して要害を密く守り、出て戰ふこと無りけるに、吳の勢すでに江を渡りぬとて遠近急を告ければ、曹仁が曰、いよいよ堅く守りて出て戰ふこと有べからず。大將牛金すゝみ出て曰、吳の勢すでに城に臨めり、出て戰はざるは是怯きなり、況や御方新に敗軍の後なれば、若鋭氣を扶ずんば諸軍いよ〳〵氣を失ん、某ねがはくは五百餘騎を借、城を出て快く戰を決せん。曹仁しかるべしとて許しければ、牛金よろこんで打て出、吳の勢と鋒を交へて、大將丁奉と五六合戰ひけるが、丁奉叶ずして逃わしれば、牛金五百餘騎を引て勝に乘て追かくる。丁奉思ふ儘に敵の足を疲かし、俄に颯と取て回し、五千の勢を以て牛金が五百餘騎を四方より取圍み餘さじと攻ければ、牛金勇を奮ひ、左に衝右に突ても出ること能ず、曹仁櫓の上よりこれを見て急に出て救んとすれば、長史陳矯諫て曰、曹丞相都に回り玉ふ時將軍にこの城を托し、必ず出て戰ふこと勿れと宣ひしに、牛金これを用ず輕々しく出て敵に圍る、假令この五百餘騎を目の前にて失ふとも、將軍必ずこの城を出玉ふこと勿れ。曹仁が曰、いや〳〵牛金もし亡る時は、南郡の城を守らんこと一日も

じ。周瑜が曰、われ若取こと能ずんば將軍心の儘に取玉へ。玄德の曰、魯肅、孔明こゝに在、將軍後に悔玉ふな。周瑜が曰、大丈夫一言已に出ては駟馬も追こと能ず、安ぞ悔ることあらん。孔明が曰、周都督の言きはめて好、これ甚だ公論なり、古も天下者非二一人之天下一乃天下之天下也と云り、先吳の國より攻玉ひて、若取玉ふこと能ざる時は御方又之を取ん、何の宜からずと云こと有ん。周瑜酒を辭して別て已に囘りければ、玄德嗟て孔明に宣ひけるは、今先生の敎に因て此の如く答を成と云ども、却て能思ふ時は、我等は孤窮の一身足を容の地なし、若南郡を取ば權に暫く身を置ん、今まづ周瑜に取れなば我いづくにか身を容べき。孔明笑て申けるは、往年われ荊州を取玉へと勸しかども君さらに聽玉はず、今日却て悔玉ふか。玄德の曰、事すでに此に至れり、いかなる計をか用ふべき。孔明が曰、御心を安んじ玉へ、周瑜に力を盡して攻させ、近き內に君を南郡の城に入て安坐せしめん。玄德の曰、いかなる計かある。孔明が曰、只箇樣々々に計を用ひば、南郡自ら御方に屬せん。玄德大に喜び江邊に陣を張て、共に南郡の體を窺ひ玉ふ。周瑜は馬を早めて本陣に囘りければ、魯肅問て曰、都督なに故に南郡を玄德に取とは宣ひしぞ。周瑜が曰、われ南郡をとること手を反すよりも易し、我もし取ずんばその時玄德取玉へと云しは、是虛く人情を殘すもの也、誰か先手に進んで南郡を攻ん。蔣欽をどり出

われ自ら行て彼と此事を論じ、もし從ずんば先玄德を滅して其後に南郡を取ん。魯肅が曰、某も共に行ん、早く用意をせよとて勝れたる精兵三千餘騎にて油江口へぞ赴きける。孫乾油江口に回りて周瑜が自ら來る由を告ければ、玄德乃ち孔明と議し玉ふ。孔明申けるは、これ程の贈物に爭か自ら來るの禮あらんや、今周瑜が來るは必ず南郡の爲ならん。玄德の曰、もし兵を引來らばいかん。孔明笑て、周瑜もし來らば乃ち此の如く〳〵に料ひ箇樣々々に答へ玉へと云ふくめ、兵船を油江口に推雙べ岸の上に軍馬を備へ、整々として相待ければ、周瑜三千餘騎を引て魯肅と共に出來れり。孔明これを聞て趙雲に五六騎を添て出迎へさせければ、周瑜この邊を見に軍勢の備整々たりしかば、心の中安からず。已に轅門の邊に到りければ玄德、孔明出むかへ、共に禮を述て坐定りける時、玄德盃を擧て頻に周瑜が功を稱し、酒數巡に至りければ周瑜が曰、玄德公今油江口に陣を移し玉ふは、南郡を攻るの心にあらずや。玄德の曰、われ將軍の南郡を攻玉ふと聞て、此に來て戰を扶く、將軍取玉はずんば我必ず取ん。周瑜笑て曰、わが國久く荊州を吞んとす、今南郡を取こと掌の内にあり。玄德の曰、戰の勝負は預め定がたし、古より欺レ敵者亡と云、又世の諺にも事無二必取一と云り、曹操已に都に回り、曹仁を留て南郡を守らしむ、必ず大なる計あらん、殊に曹仁は萬夫不當の勇あり、將軍恐くはとること能

通俗三國志　卷之二十一

○周瑜南郡戰曹仁

去ほどに周瑜は曹操が大勢を赤壁にて打破り、諸人の手柄を記録して呉主孫權に報じ、數萬の降人を引具して悉く江北に渡り、直ちに兵を進めて南郡の城を攻んとす。南郡は今の江陵これ也。先陣すでに江の畔に陣を張、五箇所に寨を下して周瑜は中軍に備へ、魯肅、程普と共に玄德のことを議する所に、忽ち玄德より孫乾を使として勝軍の賀を述と云ければ、周瑜迎へ入て對面す。孫乾禮を施し玄德の意を述て贈物を獻りければ、周瑜問て曰、玄德は今いづくに居玉ふぞ。孫乾答て曰、いま陣を移して油江口にあり。周瑜驚て申けるは、孔明も一處にありや。孫乾が曰、しかり。周瑜が曰、御邊先回り玉へ、某自ら行て玄德の重禮を謝せん。孫乾別れて出ければ、魯肅が曰、都督さきに何事をか驚玉ひし。周瑜が曰、玄德が油江口に陣を移したるは南郡を攻取ん爲なり、我國曹操を破て許多の軍馬錢粮を費せり、今南郡を取こと手の内にあり、玄德先達て取んとす、我この故に驚たり。魯肅が曰、然らば如何が計を成ん。周瑜が曰、

羽が曰、某こゝに來て罪を請ふ。孔明が曰、曹操華容の道條へ來らざるか。關羽が曰、曹操すでに華容の道へ來ると云ども、某無能にして取にがせり。孔明が曰、しからば手下の大將いかほどか打とり玉ひし。關羽が曰、一人をも捉得ず。孔明が曰、これは御邊むかし曹操が恩を受しことを思うて態と放し玉へり、漢の高祖速に丁公を斬て先雍齒を封じ玉ひしは、軍法を正さんが爲なり、王法は國家の典刑、人情を以て私することを得んや、御邊已に軍令狀を書玉へり、罪ゆるし難とて武士に命じて斬しめんとす。玄德急に推とゞめ、我むかし桃園に義を結で誓て生死を同うせんと約す、今かれが罪ゆるしがたしと云ども、昔の誓に背んことを畏る、願は權に罪を免して後日に功を以て此罪を補しめんと云玉ひしかば、孔明わづかに免しけり。

事の急なるあらば此に一卷の計を遺し置、密に開て此の如に行へ、事の十分に逼るに有ずんば必ず之を開くことあるべからず、この計に隨はば千に一つも違ふことあらじ、敵大勢なりとも南郡に近付こと能ふまじ、この所の軍馬こと〴〵く汝に屬す、荊州より降參の大將はわれ皆都に伴ひ行ん。曹仁が曰、合淝、襄陽の三城は誰人にか守らしめん。曹操が曰、荊州は汝これを領せよ、襄陽は夏侯惇を留て守らしめん、合淝は第一緊要の處なれば、張遼を大將とし樂進、李典を副將として守らしめ、もし事の急なること有ば早く都に注進せよとて手わけ已に了りければ、自ら七百餘騎を率して都に囘る。曹仁は曹洪を夷陵へ遣し、城を構て南郡の勢を扶け、共に周瑜を防んとす。この時關羽は曹操をゆるして後五百餘騎にて囘りけるが、玄德の軍勢みな敵の馬物の具を奪ひ、首を提生捕を引て我先にと夏口に囘り、互に勇み進でその功に傲りけるに、關羽は一人一騎をもうち得ず空く城中へ囘りける。折節孔明廳上に在て勝軍の賀を述て居たりしが、關羽が囘りたる由を聞、急に盃を執て立むかへ、將軍いま世を蓋ふ功を建て、四海の爲に害を除き、漢の逆賊を討玉ふを賀して自ら出て迎へ候と云ければ、關羽默然として物いはず。孔明が曰、將軍何ゆゑに無興氣に見え玉ふぞ、某が遠く出て迎へざるを怒り玉ふかとて、又左右の人を顧て、汝等なんぞ早く關將軍の囘り玉ふを知せざると云ければ、關

曹操
曹兵
関羽舊情に曹操と放す

関羽

りければ、残る勢わづかに二十七騎なり。日も已に暮に及て南郡も程近しとて行先を望み見れば、一簇の軍勢火の手を揚て一文字に路を遮る。曹操大に驚き、この所に敵あらば我いかゞして生ることを得んとて、人を出して見せしむれば、敵には有ずして曹仁が勢なりと申す。曹操再び生たる心地して馬を進て到りければ、曹仁出見え、某すでに赤壁の敗軍を承ると申せども、遠く出ては南郡の城を心元なく存じ、この所まで來り候と云ければ、曹操心を安じ、已に汝に逢ことも叶ふまじきと思ひしに、幸に遁れ來れりと云て共に南郡の城に入ければ、張遼おくれ馳に來て關羽が德を稱し、一人も討れずとて人馬の息を休め、曹操自ら生のこりたる勢を點撿するに、矢にあたり瘡を被る者多かりしかば、すでに夜半の比に至て俄に天を仰で悲み哭く。諸將問て曰、丞相虎窟龍潭の危に在ても畏れ玉ふ氣色を見ず、今すでに城中に入て人馬共に備れり、何ごとをか哭き玉ふ。曹操が曰、われ郭嘉を哭く。諸將みな曰、郭嘉すでに死して年久し、今なにゆゑに哭玉へる。曹操が曰、郭嘉もし生てあらば我に今日の敗を取しめじとて胷を打て大に哭き、哀哉奉孝、痛かな奉孝、惜かな奉孝と云ければ、諸將默然として詞を出す者もなし。夜すでに明ければ曹操密に曹仁に申けるは、われ今しばらく都に回り、再び兵を起してこの恨を報ずべし、汝よく此城を守り、敵せむるとも輕々しく出て戰ふこと勿れ、若

はる、丞相むかし深き恩を施し玉へり、關羽必ず心に忘れ候はじ、自ら行てこの事を告玉へ、この難を脱るべしと云ければ、曹操これに從ひ馬を進めて前に向ひ、馬上に身を欠で曰、將軍別てより恙なきや。關羽も馬上に禮を成て申けるは、某君の命を受て久しく此に丞相を待。曹操が曰、われ戰やぶれ身危してこの處まで落のびたり、願くは將軍昔の一言を重しとし玉へ。關羽が曰、むかし丞相の恩を被ると云ども、白馬の危を解て之を報ず、今日君の命に因てこの處を固たり、安ぞ私に放ことをせん。曹操が曰、將軍五關に大將を斬玉ひし時、必ずこの恩を報ぜんと云玉へり、古の大丈夫は信義を以て重しとす、將軍は深く春秋を明玉ふ、庾公之斯が子濯孺子を追しことを知玉はん。關羽これを聞て首を低てもの云ず。元來義を守ること鐵石の如くなれば、昔しの恩を忘ず、五關に大將を斬たる時、彼が我を殺さゞりし情を思ひ、殊に曹操が兵の惶れ戰て涙を流さんとするを見てこれを伐に忍ず。馬を把て引回し、手下の勢を下知して路を開かせ、分明に放んとする氣色に見えければ、曹操乃ち諸將と一同に馳通りけるに、關羽又馬を回して喚て蒐んとすれば、諸軍みな馬より下涙を流して地に拜す。關羽これを殺に忍ず、猶豫して心決せざる所に、張遼馬を早めて通りければ、關羽これを見て又朋友の情を起し、長嘆一聲ことく〲く皆放けり。曹操虎口の難を遁れ、華容道を出て谷の邊に到

て、息をも繼ず進みけるが、兵を三手に分て一手は後陣に備て追手を防ぎ、一手は先に進んで路を造り、一手は曹操を守護して、兎角して第一の難所を過越、殘りたる兵を數ふれば三百騎には足ず、殊に甲刀等も齊ずして、人馬こと〴〵く疲れ果たりしかば、諸大將立とゞまり、今人馬飢疲て一足も進み得ず、暫くこの所にて息を休めんと云ければ、曹操が曰、多くの敵を切拂ひ、第一の難所を超て已に是まで落のびたり、早く荊州に行て息べしとて、又五六里ばかり行けるが、曹操馬に鞭を加へ天を仰で大に笑ふ。諸將問て曰、丞相又なにを笑ひ玉ふぞ。曹操が曰、人みな周瑜、孔明は智深く計多き者なりと云ども、我その能爲ること無を笑ふ也、いま我赤壁の敗軍は、敵を欺きしに因てなり、彼もし此所に一手の勢を伏置ば、我等みな手を束て縛を受ん。その言いまだ畢ざるに一聲の鐵砲耳根にひゞき、敵の勢五百騎あまり三手に分れて討て出、眞先に進むは關羽、青龍の偃月刀を提げ赤兎馬を躍せて同音に喊を咄と造る。曹操が勢これを見て魂を失ひ膽を冷し、互に面を合せてあきれたる體なりければ、曹操が曰、すでにこの所に行かゝれり、只快く討死すべし。諸人みな申けるは、士卒の志は臆せずとも、馬疲て戰ふこと能じ。程昱が曰、われ素より關羽が心を知、上たる人に傲て下たる人を憐み、強き者を欺て弱ものを凌ず、人の難あれば身を棄て之を救ひ、仁義すでに天下に顯

○關羽義釋曹操

この時曹操に從ふ勢ことごとく創を被り矢に中り、頭を焦し額を爛したる者共なるに、甲袍は雨にぬれ、馬もの〻具は夷陵の道にて張飛に攻られし時大半打棄て走りければ、紛々として整はず。殊に寒氣の甚しきに逢て、人馬共に飢つかれければ、さしも險き華容道を經て十里ばかりは來りしかども、先陣さらに進み得ず。曹操いかなるゆゑぞと尋ぬれば、前は山際の細路なるに、昨夜の大雨に土くづれて積水通ぜず、塹溝の如にして泥深ければ馬の蹄立がたしと答ふ。曹操大に怒り、凡そ士卒は山に逢ては路を開き、水に遇ては橋を疊む、何ぞや泥深うして進み難きと云の理あらんやとて卽時に下知を傳へ、或は年老創をやむ者を後陣として、屈強の壯士を先に進め、土を荷ひ草を搬んで道を造せ、怠る者は切て棄んと云ければ、兵共大半馬より下て竹木を伐とり路を造て進みけるに、跡より敵の追かくることも有んとて、張遼、許褚、徐晃三人百餘騎の精兵を率し、手に刀を提げて馳回り、道を開に怠る者あらば今切て棄んぞ、命惜くば急げと云て責たりければ、この時諸軍飢寒えて倒れ死する者數を知ず、喚き叫ぶ聲やまざりしかば、曹操怒て曰、死生命あり、何の哀ことあらん、再び哭ものは立所に斬んと云

をかゝれと呼はる聲雷の如くなれば、曹操が大將も張飛が名を聞て盡く膽を冷す。許褚是非なく鞍も無馬に飛のり、張飛をさゝへて戰ひければ、この間に張遼、徐晃鎧をかため馬を雙べて張飛を防ぎ、兩軍入亂れて散々に戰ひしかば、曹操這々に逃のび、諸大將も且戰ひ且走る。曹操暫く馬を駐て後れたるを待そろへ、兵を數ふれば手を負ぬ者は一人もなし。前に兩條の路あり、共に南郡に通じ候と云ければ、何れの路か近きと問に、大路は平かには候へども、五十里あまり遠く候と答ふ。曹操山の上に人を上せ路の樣を望ましむれば、其人はせ回り、山路の方には數箇所に火を擧て敵ありげに見え候、大路の方には曾て人ありとも見え候はずと申す。曹操しからば山路を經て落ゆかんとて、前手の勢を下知すれば、諸將問て曰、この山路は華容道とて隱なき難所にて候、殊に火の手を揚て敵もありげに見え候に、何ぞ大道より出玉はざる。曹操答て曰、汝等兵書に虛則實レ之、實則虛レ之と云の論を知ずや、孔明は計多き者なり、今わづかなる士卒に命じて山路に烟を擧させ、人ある體を見せて吾を大路の條に出し、却て伏勢を以て討留んとす、山路に敵ありげに見ゆるは彼が詐の計なり、今人なしとて輕々しく大路より進ば、彼が計に落入て一人も殘らず討るべしと云ければ、諸大將みな拜伏し、丞相の妙計等閑の及ぶ所にあらずと云て、悉く華容の山路に蒐りて荊州へと志す。

ほどこそあれ、驚騒でとる物も取あへず馬に乘つて逃けるに、敵にはあらで御方の大將李典、許褚を初として百騎ばかり馳來れりと告ければ、曹操限なく喜び、共に馬を打て路を急ぎ、行先は何ぞと問ふに、答て曰、一方は南夷陵の大路、一方は北夷陵の山路なり。曹操問て曰、南郡江陵へ出んずるには何の路か尤も近き。答て曰、南夷陵の大路は葫蘆谷を經て便あり。曹操兵を下知して南夷陵に進み、已に葫蘆谷に到りければ、諸軍みな饑に倦れて進こと能ず、馬もこと〴〵く弱りければ、先陣の勢を暫く留め、山に傍て陣をとり、先に掠とりたる少の粮を一所にあつめ、兵の持たる鑼を鍋として之を炊ぎ、馬を殺し草を掘て饑を助け、濕たる鎧袍を卸で我も〳〵と乾ければ、曹操林の下に坐し天を仰で大に笑ふ。諸將問て曰、丞相さきに周瑜孔明を笑ひ玉ひて趙雲を引出し、若干の人馬を討れたり、今又なにを笑ひ玉ふぞ。曹操が曰、われ孔明、周瑜が大將の才あれども智惠の足ざるを笑ふなり、われ若兵を用ひばこの所に一手の勢を伏おかん、然る時は以逸待勞なり、我等いかゞして命を遁れん、この故に笑ふ也。その詞いまだ絕ざるに、四方八面喊の聲地を動し、火の光天に漲る。諸軍大に驚き甲を被るにも及ず赤はだかにて散亂し、曹操は傍なる馬に打のり、跡をも見ずして逃けるが、早敵の勢四方を圍て一人の大將一丈八尺の矛を舞し馬を飛して、我は燕人張飛なり、逆賊曹操馬より下て繩

と喚て又張顗を斬て落し、散々に攻やぶりしかば、曹操ふるひ戰き、南夷陵へは進み得ず、西を指て逃わしるところに、張郃路にて馳加はりければ、乃ち後陣に打せ、鞭を加へて走りけるが、夜も早五更の比に到り、火の光も遠くなりければ、少し心を定め、こゝは何くぞと問に、荊州の者答て曰、これは烏林の西宜都の北なり。曹操馬上にて山川嶮く樹木しげりたるを望み、天を仰で大に笑ふ。諸大將問て曰、丞相なにをか笑ひ玉ふ。曹操が曰、われ別人を笑ふにあらず、單に周瑜が計なく孔明が才淺きを笑ふ也、我若兵を用ば先この所に勢を伏て、落ゆく敵をのこさず討ん。その言いまだ了ざるに、兩旁より大鼓を打て火の光天を焦し、一彪の軍馬かけ出、常山の趙雲こゝに在て相待と呼はりければ、曹操驚て已に馬より落んとす。張遼、徐晃力を盡して防ぎしかば、曹操からき命を扶り、火を冒し烟を突て落のびたり。趙雲は十分に打かち、敵の旗物の具を奪ひ、古より歸師勿掩と云り、長追なせそとて兵を收て引かへる。時に夜も曉方に及で黑雲地を裹み、東南の風いまだ休ず、俄に大雨車軸のごとくにふり來て、衣を濕し甲に透て寒氣堪がたきに、兎角して二時ばかりを過ゆきければ、辰の刻に至て雨風一度に定り、諸軍勢こと〴〵く饑疲て、身の上一寸も乾く所なければ、曹操馬より下てその邊の在家に兵を打入、食物を掠め取んとする所に、忽ち山の後に火の手を揚ければ、すはや敵よと云

りけるに、陸の陣も火の掛らぬ所なければ、鞭を加へて逃る所に、毛玠十騎あまりを從へ、文聘が手負たるを扶て馳加はる。曹操兵に命じて道條を尋させければ、張遼が曰、たゞ烏林の地面路濶して走るに便あり。曹操急に馬を馳て行ところに、後より一手の勢追かけ、曹賊にぐること勿れと呼はりて、火の光の中より呂蒙が旗を指出す。曹操大に驚き、張遼に跡を防せ急ぎ逃んとすれば、又向より山際に火をかけ、一簇の勢渦まき出て、凌統こゝにあり、馬より降て降參せよと呼はり、前後を圍で攻たりしかば、曹操膽を冷して横ざまに走る所に、忽ち一手の軍馬はせ來り、丞相怕れ玉ふことなかれ、徐晃こゝに在と名のりて曹操を救ひ出し、兩軍入みだれて戰ひ、路を尋ねて走りければ、呂蒙、凌統思ふ程打勝て、長追をもせざりけり。曹操南を望んで走る所に、一彪の軍馬山に傍て陣を取。敵かと見れば左はなくて、本は袁紹が大將にて曹操に降りし馬延、張顗二人なり。北國の勢三千餘騎を引て此ところに陣を取けるが、今夜俄に火の起るを見て少も散ず相待たり。曹操甚だ喜び、その勢を合せて馬延、張顗に千餘騎を與へて道を開かせ、自ら後陣に備て落ゆきければ、この時心少し安くなり、十里ばかりを經て一手の勢道を塞ぐ。馬延すゝみ出てなに者ぞと尋ぬれば、一人の大將大音あげ、我は吳の甘寧なり、快く刀を受よと云も果ず一刀に馬延を斬。張顗此を見て槍を撚て蒐りければ、甘寧をつ

東より推出し、中央よりは周瑜、程普、徐盛、丁奉數萬の船をこぎ連ね、度を失へる北國の勢をあまさじと攻たりければ、水に溺れ火に焼れ、槍に突れ矢に中りたる者その數あげて計がたし。此を名づけて世の人の口ずさみに、三江の水戰赤壁の鏖兵とは申なり。

○曹操敗走華容道

呉の大將韓當は勢に乘て水寨を攻る所に、跡より士卒報じて、誰とは知ず舵の上に人あり、將軍の字を呼候と告ければ、「韓當怪で能々聞に、高義われを救へと云ものあり。これ必ず黃蓋ならんとて急に引あげ見れば、果して黃蓋なり。肩に中りたる矢を拔ければ、鏃陷入て肉の中にあり。乃ち濕たる袍を卸せ、刀を以て鏃を掘出し、旗を裂て瘡を束ね、自ら袍を卸で之を披せ、小舟に乘て國に回らしむ。」此も黃蓋が水練を得たるゆゑ、痛手を負て寒氣甚しきに鎧きながら江に落と云ども、其身に恙なかりけり。陸の陣には甘寧先蔡仲を案內者として曹操が陣屋に到り、一刀に蔡仲を斬殺し、火を付て喊の聲を揚ければ、呂蒙これを見て又數十箇所に火を掛、勢に乘て斬て入。潘璋、董襲、太史慈、凌統も四方に散て火をかけ、鼓を打喊を造りければ、天地も崩やすらんと膽を冷す形勢なり。曹操は張遼に扶られて岸に上り、百騎ばかりを引て走

我先にと逃かへる。黄蓋すでに曹操が水寨を二里ばかり隔て、刀を以て一度招けば、前なる船ことごとく火を放つ。風は急なり、火の勢を趁てその早きこと矢の如く、焔大に漲り、二十艘の火船水寨に撞て入、舟の頭に大釘を打たれば、當る所つひに離れず、忽ち江を隔て相圖の鐵砲ひゞきければ、四方の火船一度に來り、三江の水面火に成て紅天に通じ、車輪の如なる焔空中に飛あがる。曹操は膽を冷して陸の陣を望み見るに、一同に火かゝりければ、援け舟を求て逃んとす。黄蓋は小舟に飛のり、烟の中火の中とも云ず、曹操を生取んと尋ぬるに、四五人あとに續て力を添ければ、彌走り散て尋ける。曹操は事の急なるを見て如何して岸に上らんと身を揉ところに、張遼小舟を推來り、大船より扶け下して漸に逃わしる。黄蓋は曹操をのがさじとてこゝ彼こを尋る所に、絳き袍を被たるもの大船より下ければ、是ならんと思ひ、急に舟を飛して手に刀を提げ、曹操にぐること勿れ、黄蓋こゝにありと呼はりければ、曹操のがれ難くや思ひけん、苦しげに叫びけり。黄蓋すでに近付ければ、曹操が舟より張遼弓を取て兵と射る。黄蓋火の光の中に在て絃音の響をきゝ、急に避んとしけるが、其矢肩先に中りしかば、急所の痛手に弱て水中に落入けり。水寨ことごとく火に成て、百萬の軍勢上を下へと譟ところに、喊の聲天を碎くが如く、左より韓當右より蔣欽、赤壁の西より討て出、右に周泰左に陳武赤壁の

剪り紙を燒て一刀に首を切、血を滴て旗を祭り、すはや船を出せと下知すれば、黄蓋自ら第三の火船にのり、大旗を立て先鋒黄蓋と書し、東南の順風に帆を張て赤壁を望で馳て行。この時風いよ〳〵甚だしうして大波天に漲りければ、曹操は中軍の大船に坐し、月の光もほのめき出て三江の水面を照し、萬條の金蛇を躍すが如しと打詠じて風に向て喜び笑ひ、南を望んで居たる所に、張番の者共南に當て一簇の舟帆を揚て幽に見え候と報じければ、曹操高き所に上て見るに、諸大將みな青龍の牙旗を立て先鋒黄蓋と云文字ありと沙汰しければ、曹操限なく喜び、黄蓋が御方に來るは是天の助なりと云所に、船漸く近付ければ、程昱やゝ久しく望み見て驚て申けるは、この船必ず詐ならん、この處へ寄べからず。曹操が曰、いかなる故ぞ。程昱が曰、兵粮を積だる船ならば必ず重して穩なるべきに、あの舟甚だ輕うして脚入ざるは詐の驗なり、殊に今夜は東南の風急なり、若敵の計あらば如何して防べき。曹操大に驚て曰、たれか行て此舟を止ん。文聘が曰、某は水を得て候に、願は行て止候はんとて前なる小舟に跳り下、手を揚て御方を招きければ、續く舟十餘艘。文聘船の頭に立あがり大音あげて、曹丞相の命なり、來る船しばらく住れと呼はりければ、諸軍聲を揃て早く帆を下せと叫所に、弓の絃音風に響て矢一つ來り、文聘が左の臂に中ければ、眞倒に舟底に射ふせられ、船小にして大浪に堪がたく、

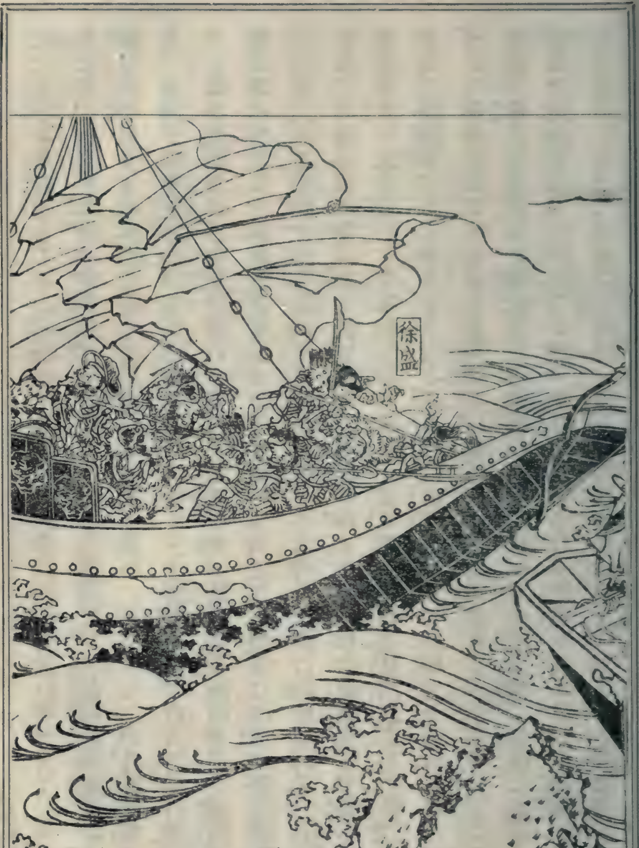
道に走るべし、去來や樊口に行て周瑜が計を用るを見物せんとて、孫乾、簡雍を留めて城を守らせ、共に山に登て望み見る。この時曹操は陣中に在て諸將と共に計を論じ、黄蓋が降參を待ところに、東南の風しきりに吹ければ、程昱申けるは、今日にはかに東南の風の出たるは御方の爲に不吉なり、丞相よく察し玉へ。曹操が曰、冬至に一陽生じて來復の時に至れり、東南の風吹もその時に當れり、何ぞ又怪まんと云ける所に、忽ち江南より小舟きたり、黄蓋が使なりとて密書を出しければ、曹操急ぎ開き見るに、周瑜が法令緊うして輕々しく出がたく候に、今鄱陽湖より新に運ぶ兵粮あり、某を以奉行とす、これ天の助なり、某よろしく方策を用て江南の名將を斬ころし、首を取て馳參るべし、必ず今夜の二更に到ん、船の上に青龍の牙旗を立たるは、乃ち兵粮の船にて候と有ければ、曹操大に喜び、諸大將と水寨に來り、中央の大船に出て黄蓋が來るを待居たり。去ほどに日も已に暮ければ、周瑜まづ蔡和を呼出し、武士に命じて縛らせけるに、蔡和驚て叫けるは、某いかなる罪かある。周瑜叱て曰、憎き己はよくも詐て我に降れる、我いま汝が首を借て軍神を祭るべし。蔡和事の叶ざるを知て、汝が手下に甘寧、闞澤も皆われに與する者なりと云ければ、周瑜笑て曰、これ皆わが爲しむる計なり。蔡和後悔すれども及ず、あきれ果たる體なりしかば、周瑜乃ち江の邊に引出し、皁纛の旗の下にて酒を

關羽が曰、少しも心を勞し玉ふな、我むかし曹操が恩を受たりしかば顏良、文醜を斬、白馬の圍を解て報じ了れり、今日いかんぞ私に放べき。孔明が曰、御邊もし放なば如何ん。關羽が曰、ねがはくは軍法を被らん。孔明が曰、しからば軍令狀を書玉へ。關羽卽ち書了て、曹操もし此路に出ずんば如何せんと云ければ、孔明が曰、われも軍令狀を致すべし、曹操もし華容道に出ずんば、必ず罪を被らんとて筆を取て書ければ、玄德大に喜び玉ふ。孔明が曰、御邊華容の小路に行て山の頂に柴を積、火を付烟を揚玉はば、必ず曹操をこの道に引ん。關羽が曰、曹操もし火を付烟を揚たるを見ば、敵あることを知て來るまじ、必ず他の路より進べし。孔明笑ひて、兵法に虛々實々の論あるを聞玉はずや、曹操よく兵を用ふと云ども、此の如せば必ず欺くことを得ん、山路に烟を揚るを見ては、是空く勢を張て人ある體を見せたる計なりと思ひ、必ずその路に來るべし、御邊必ず放玉ふなと云ければ、關羽命を受て關平、周倉を伴ひ、五百餘騎を率して華容道に馳向ふ。玄德の曰、關羽元より義氣盛なれば、若曹操に出合とも期に臨んでは必ず放さん。孔明申けるは、某よく天文を觀に、曹操が運命いまだ此ところにては滅まじ、兎角關羽が心に昔し曹操が恩を受たることを思ふなれば、此人に宥させて人情を成さしむべし。玄德の曰、先生の神算世に雙ぶ者あるべからず。孔明が曰、明日大雨ふりて後、曹操必ず華容

蘆谷に勢を伏せて相待たば、曹操南夷陵へは進まず、必ず北夷陵を望で走らん、明日雨晴て後曹操が勢必ずこの處にて兵粮を使ふべし、只烟の起るを見ば山に火を掛て攻かゝれ、曹操を取にがすとも必ず大なる功あらんと云ければ、張飛計を受て馳向ふ。次に糜竺、糜芳、劉封を呼、御邊三人は舟に乘て江を遶り、落人を生取て物の具を剝來れと云ければ、三人計を受て舟を出す。次に劉琦に向て、武昌は第一緊要の所にて候、君早く行て岸の邊に陣を取、落人あらば生取玉へ、必ず城を離て輕々しく出玉ふなと云ければ、劉琦わかれて打起けり。孔明又玄德に向て、君は樊口に御陣を召れ、高に登て今夜周瑜が大なる功を成を見玉ふべしと云て、共に打起て出んとす。時に關羽一人傍に在けるが、孔明定て一方の討手にも用んと思ひ居たりしに、了に何の沙汰も無りしかば、怺かねて進み出、某義を結で兄に從てより、數年戰場に臨と云どもつひに先を蒐ずと云ことなし、今大敵に逢て某一人を用ひ玉はぬは如何なる故ぞと云ければ、孔明笑て曰、御邊必ず怪み玉ふな、我御邊を以て第一の處を守しめんと思へども、一つの碍あるを畏るゝ也。關羽問て曰、いかなる碍か候ぞ、明に語り玉へ。孔明が曰、曹操むかし御邊を用ふること厚かりしかば、御邊必ず誓て恩を報ぜんと云玉へり、今曹操やぶれて必ず華容道に走るべし、我御邊を以て討しめんと思へども、必ず曹操が昔の恩を思て放玉はんことを畏る。

でに蘄州、黄州の地に發向すと云おくりければ、周瑜人を遣して西山に相圖の鐵砲を構へ、南屏山に大旗を指あげ、萬方一齊に備り、惟日の暮を相待ばかりなれば、程普は周瑜が兵の用ひ様悉く法あるを見て、欽服して感嘆す。又夏口の城には、玄德專ら孔明の歸るを待玉ひけるに、忽ち一艘の小舟はせ來る。是江夏の劉琦なりしかば、迎へて共に樓上に坐し、已に東南の風も起り、趙雲行てより程久しと云ども孔明いまだ見えず、我心安からずと語り玉ふ所に、番の者共馳來り、樊口の港より小舟一艘帆を揚て來り候と申す。玄德大に喜び、劉琦と樓を下て迎玉へば、間もなく舟岸に著、孔明、趙雲陸にあがる。玄德心喜で先合戰の樣を問玉へば、孔明が曰、事すでに急なり、御方の用意は調ひ候か。玄德の曰、われ軍兵を調へ兵船を揃へて軍師の歸り玉ふを待こと久し。孔明乃ち趙雲を呼、汝は三千の勢を引て江を渡て直に烏林の小路に行き、樹木茂りたる所に深く隱、今夜の四更に曹操必ずこの路より走るべし、敵の勢を遣過し、其半を討て火を付て攻破り、殘さず討とめんとする事勿れ、逃る者を追事勿れと云ければ、趙雲が曰、烏林には二條の路あり、一條は南郡に通じ一條は荊州へ通ず、曹操いづれの路より走るべきぞ。孔明が曰、南郡の勢甚だ迫り、曹操必ず荊州を馳て直に許昌に回るべし。趙雲命を受兵を引て出ければ、次に張飛を呼、御邊は三千餘騎を率し、江を渡て夷陵の路を切塞ぎ、葫

受、蔡仲を案内者として烏林を指て出にけり。第二に太史慈を呼、汝は三千餘騎を引て黄州の界に出、曹操が合淝の勢を遮て、火を付て曹操が本陣を攻よ、紅の旗を揚るを見ば、これ呉侯の旗下の勢なりと知べし、第三に呂蒙を呼、汝は三千の兵を率して、烏林に行て甘寧と一手になり、曹操が陣を燒拂へ、第四に凌統を呼、汝は三千の勢を引て直に夷陵の界に到り、烏林に火の掛るを見ば急に進で攻やぶれ、第五に董襲を呼、汝は三千餘騎を引て漢陽より漢川に出、曹操が陣に斬て入、白旗を見ば救の御方と知て一つになれ、第六に潘璋を呼、汝は三千の兵を引てみな白き旗を指、漢陽に向て董襲を救ひ、共に曹操が陣に攻かゝれとて手わけすでに定りしかば、六隊の軍馬路を分て打立けり。陸路の御方かくの如に進を見て、舟手の先陣黄蓋は密に曹操が方へ人を遣し、今夜の二更に兵粮を盗で馳參べし、青龍の牙旗を挿たる舟を見玉はば、是黄蓋が降參の舟なりと知玉へと誠しげに注進をなし、火船二十艘に兵船四艘を跡に繋、打つづいて第一の備には領兵軍官韓當、第二の備には領兵軍官周泰、第三の備には領兵軍官蔣欽、第四の備には領兵軍官陳武、三百餘艘の兵船を揃へ、火船に傍て先陣に進み、周瑜、程普は艨艟の大船を發して後陣につゞき、徐盛を左にそなへ丁奉を右に備へ、魯肅、闞澤、龐統を留て本陣を守らしむ。この時呉主孫權は使を馳て兵符を持せ、陸遜を先手の大將として、旗下の勢す


徐盛

趙雲
孔明

て兵と射る。其矢乃ち徐盛が舟の帆索に當りしかば、索の截るゝと倶く帆は水中に落て、その舟すでに覆んとす。趙雲やがて其帆を引奪ひ、我物として十分に推はり、飛が如に去ければ、徐盛追ども了に叶ず。丁奉岸の上より此を見て急に徐盛を呼かへし、孔明が神機人の及ぶ所にあらず、殊更趙雲は萬夫不當の勇將なり、彼が長坂坡の擧動を知玉はずや、等閑の及ぶ所にあらず、只引回してこの由を申んとて、共に空く歸て其趣を告ければ、周瑜大に驚き、この人此の如なれば我をして晝夜心を安からざらしむ、曹操と和睦をなし、先玄德、孔明を平げて後の患を除んと怒りけるを、魯肅爭ひ諫め、小事を以て大事を棄の理あらんや、曹操は玄德より十倍せり、これ程に計を成て今いかでか空く廢せん、先曹操を破て再び事を議せんと云ければ、周瑜理に伏して卽時に手分を定めける。

○周瑜赤壁鏖二魏兵一

周瑜怒を休て魯肅が諫に從ひ、まづ甘寧を呼よせ、汝は蔡仲を伴ひ、今曹操に降參すと云て南の岸より直に烏林の道に出、わざと蔡仲が旗ばかりを指て曹操が兵粮を貯へ置たる所に行、火を掛て攻かゝれ、蔡和をば軍中に留め置べし、われ別に用ふることありと云ければ、甘寧計を

殺せや兵共とて、四方に散て捜しけるが、岸の邊にて一人の男に逢ふ。怪しき人や通りつると問ば、昨日の暮方より早舟一艘前なる灘に在けるが、孔明向に髪をさばきて彼舟にのり、北を指て出玉へりと答ふ。扨は幾ほども隔らじ、急に追付よとて丁奉は馬を飛して陸路を進み、徐盛は舟を早めて揉にもんで急ぎしが、向に當て一艘の小舟あり。徐盛これを見て孔明ならんと思ひ、いよ〳〵帆を張て追かけ、交ひ近く成しかば船の頭に立出、孔明しばらく留まり玉へ、周都督一大事の使ありと呼はりければ、孔明舟に立あがり、大に笑て申けるは、御邊はよくも此まで來りたり、早く囘りて周瑜に報じ、東南の風も出たるに早々に攻かゝり玉へと申さるべし、われは今暫く夏口に囘る、他日再び相見せんとて、彌舟を早めければ、徐盛又曰、しばらく舟を留め玉へ、事の急なる議論あり。孔明が曰、われ已に周瑜が害せんとする心を量り、大將趙雲を召よせて共に夏口に囘らんとす、近付て誤するなと呼はりければ、徐盛は孔明が舟に帆なきを見て、只追付んとする所に漸く程なく成て忽ち孔明が舟より一人の大將弓に矢を挿で立あらはれ、大音聲を擧て曰、われは常山の趙雲なり、劉皇叔の命を受て軍師を迎へ囘る所に、何ぞや汝等かる〳〵しく追きたる、我もと一矢に汝を射殺して弓勢の程を顯さんと思へども、兩方の好を失んことを畏る、妄に近付て二つなき命を落すなと云も果ざるに、拽つめ

注進を待て出んと相待候と告ければ、周瑜乃ち魯肅を以て陣々に相ふれ、兵船武具を調へ我下知を聞て一同に出よと命じければ、諸大將も拳を握りて今や〳〵と待かけたり。日すでに暮に及で天氣いよ〳〵快く晴、微風そよともせざりければ、周瑜怪で申けるは、孔明が云しこと畏らくは謬ならん、浩る冬の末に至て爭か東南の風あらんや。魯肅が曰、われ料に孔明必ず詐らじ、暫く待て見玉へとて、漸三更の比に至て忽ち風の聲颯と響ければ、すはやと云ほどこそあれ座中のめき立て、周瑜外に立出て見れば建雙べたる旗の脚こと〴〵く西北に飜へる。周瑜大に驚て曰、孔明は天地造化の功を奪ひ、鬼神不測の術をなす、若これを生て置ば我國の禍を成のみならず、周瑜が心を安からざらしむ、今これを殺して後日の禍を免かれんとて、急に左右の校尉丁奉、徐盛二人を呼、二百人の精兵を擇で徐盛は舟手より百人を從へ、丁奉は陸路より百騎を從へ、兩方より南屏山に馳ゆき、孔明を微塵になし首を取て來れと下知しければ、二人卽時に打起、直ちに南屏山に馳向ふ。丁奉陸路より一番に到りければ、壇の上に旗を持香爐を捧げたる者を見て、孔明は何くに在と問ふに、孔明は向より壇を下て油幕の内に休玉ふと答ふ。丁奉急に壇を下りければ、徐盛すでに舟手より馳來れり。共に油幕を引のけ孔明を尋れども更に行方を知ざりければ、是體の者こそ怪しけれ、遠くは定て落ゆかじ、尋ねて

一月二十日甲子の吉日に至りしかば、孔明齋戒沐浴して身を淸め、道服を披て髪をさばき、跣にして壇の前に來り、魯肅に申けるは、御邊は本陣に行て周瑜と兵を調へ、某いま祭をなす、若東南の風吹起ば、早々に攻かゝり玉ふべしとて已に壇にのぼりければ、魯肅は馬に乘て囘りけり。孔明は護衞の士卒を戒め、各々方位を離て頭を交へ物がたりすべからず、何なる怪き事ありとも驚き躁ことを有べからず、法に背ものは立どころに斬んと云て、緩歩して壇にのぼり、香を燒水を注で天を祭り、暫く祝して又壇を下り、油幕の中に入て休息し、士卒かはるがはる飯を喫せしめ、又壇に上て三度祈りしかども風いまだ起ず。この時周瑜は程普、魯肅等を本陣にあつめ、もし東南の風起ば早々に攻かゝらんとて、呉主孫權に其趣を報じ、黃蓋は二十艘の快舟を用意して舟の頭に大釘をひしと打、内には蘆葦乾ける柴を積で油を注ぎ、硫黃焰硝の類を籠て靑布の幕を四面に張、兵粮を積だる舟の如にして上に靑龍の牙旗を挿み、各々舳に走舸を繫て水を得たる精兵二百人をのせ、一々に用意そなはりければ、大將軍の下知を聞ば卽時に出んと時刻を待。甘寧、闞澤は蔡和、蔡仲を水寨の中に置て一人をも陸に上ず、每日酒を飮で誠しやかに曹操に降らん計をのみ議し居たり。周瑜は本陣に在て計を議する所に、巡警の士卒はせ來り、呉侯御旗下の勢は已に船を乘泛て、此を離ることと八十里なり、都督の

しめ、某壇に上て祀を成ば、三日三夜が間東南の大風を借ん。周瑜が曰、三日三夜のことは扨おき、一夜の大風を得ば計必ず成就せん、事すでに急なり、必ず延引あるべからず。孔明が曰、十一月二十日は甲子なり、この日祭を成ば二十二日丙寅に風乃ち息ん。周瑜大に喜び、精兵五百人を差て壇を築せ、別に百二十人の士卒を擇で孔明に與へ、風もし吹起ば早々にせめ蒐るべしと云ければ、孔明は魯肅と共に馬を早めて南屏山に到り、地形を見定め東南の方の赤土を取て、方圓二十四丈にして高さ三尺三重の壇を築て、下の一重には二十八宿の旗を建て、東の方には青き旗、角、亢、氐、房、心尾、箕、蒼龍の形を布、北の方には皁き旗、斗、牛、女、虚、危、室、壁、玄武の勢を作、西の方には白き旗、奎、婁、胃、昴、畢、觜、參、白虎の威を振ひ、南の方には紅の旗、井、鬼、柳、星、張、翼、軫、朱雀の狀を成、共に四七二十八面なり。二重には六十四面の黄なる旗を立て、六十四卦を書て八位に定め、上の三重には束髪の冠を戴て皁き羅の袍を著し、鳳衣、博帶、朱履、方裙なる者四人を立、左の一人は長き竿を持て雞の羽を挿み、風を招のしるしとす。右の一人は七星の帶を繋たる竿を持、風の色を試しむ。後の二人は寶劍を左に捧げ香爐を右に持。壇より下には旌旗、寶蓋、大戟、長槍、白旄、黄鉞、朱旛、皁纛を持たる者二十四人、四方を圍て護衞をなす。去ほどに七星壇つくり了て、已に十

此言を聞て色を失ひ、乃ち呻吟の聲をなしければ、孔明が曰、都督の心中甚だ煩しく思ひ玉ふか。周瑜が曰、然り。孔明が曰、涼劑の藥を用て治し玉へ。周瑜が曰、われ已に涼劑を用れども全くいまだ效を得ず。孔明が曰、先よく其氣を理て、氣もし順なる時は一呼一吸の間自然に治らん。周瑜心の内に孔明は智恵ふかき者なれば、必ず我病の根を知ことも有んと思ひ、乃ち詞を以て挑で曰、氣を順にすべき藥はいかなる方を用べき。孔明笑て曰、われに一つの方あり、若これを用ひば都督自ら平安ならん。周瑜容を正して問て曰、ねがはくは先生敎玉へ。孔明紙筆を求め、傍の人を退けて密に十六字を書し、欲レ破二曹公一、宜レ用二火攻一、萬事俱備、只欠二東風一、と寫し了て周瑜に與へ、此病の本源なりと云ければ、周瑜これを見て大に驚き、孔明は眞に神通を得たり、已に我心を量知れり、告ずんば惡かりなんと思ひければ、莞爾笑て申けるは、先生すでに某が病源を知玉ふ、今事急なり、いかゞして治すべきぞ、望らくは敎玉へ。孔明が曰、某不才に候へども、昔し異人に逢て八門遁甲の天書を傳授せり、上は風を呼雨を喚、鬼を使ひ神を役し、中は陣を布兵を用ひ、民を安んじ國を定つべく、下は吉に趨て凶を避、身を全して害を逃るべし、都督もし東南の風を望み玉はば、南屏山に壇を築て之を七星壇と號し、高さ九尺にして三重に構へ、百二十人の士卒を擇で、每レ手に旗を執て四面を遶

孔明周瑜が病源を察す
孔明

周瑜

○七星壇孔明祈ㇾ風

周瑜にはかに血を吐て人心地も無りければ、諸大將みな愕いて互に面を見合せ、向の岸には曹操が百萬の勢虎の如く威を振ふ、いま周都督此の如し、如何すべきと云て膽を冷し、早馬を馳て呉主孫權にこの由を報ず。魯肅は周瑜が俄に病臥たることを心に怪み、自ら孔明が舟に行て右の事を語りければ、孔明が曰、御邊の心いかゞ思ひ玉ふぞ。魯肅が曰、曹操が福にして我國の禍也。孔明笑て曰、周瑜の病重しと云共、我これを治せば立どころに安全ならん。魯肅が曰、若然る時は國家の大幸なり、去來や共に行て病を問んとて、二人打つれ陣中に來けるが、魯肅先入て床の前に到り見れば、周瑜衣を被て臥居たり。魯肅問て曰、都督病勢いかん。周瑜が曰、心腹つよく痛で時々に又昏亂す。魯肅が曰、藥を用ひ玉へるか。周瑜が曰、心の中嘔逆して藥も喉に下ること能ず。魯肅が曰、先に孔明に逢て都督の病を語りたれば、立どころに痊さんと申す、今こゝに伴ひ來れり、如何に對面し玉ふべきか。周瑜いそぎ人を出して迎へ入ければ、孔明申けるは、數日の間對顏を遂ず、貴體いかゞして不安なる。周瑜が曰、人は旦夕の禍福あり、安んぞ期すべけんや。孔明が曰、天に不測の風雲あり、況や人間に於てをや。周瑜

れば、半途にて文聘が救の船に出合、時うつるまで攻戰ふ。されども引立たる北國の勢大浪に氣を奪はれ、さわぎ亂れて退きければ、文聘了に叶ず北を指て馳かへる、討るゝ者かずを知ず。周瑜は山の上より望み見るに、江北の水面に曹操が兵船おびたゞ布推ならべ、旗の色雜ず、皆次第を守て一同に攻かゝる體なりければ、文聘が逃を見て長追あしかりなんとて、金を鳴し白き旗を以て招きしかば、韓當、周泰も軍を收て囘りけり。文聘は這々に命を扶り、囘て曹操に見え、焦觸、張南が討れたる由を告ければ、曹操悒怏として心よろこばず。周瑜は山の上より江北を望み、今日戰に打勝と云ども、曹操が船は蘆葭の繁が如し、如何して破るべきと云で良久しく北を望て居たるに、曹操が舟の中央に立たる黃なる旗、たちまち風に吹れて水中に倒しかば、周瑜大に打笑ひ、いまだ戰はざる先に天未漸に凶を示し玉ふとぞ申ける。曹操が船には焦觸、張南が討れたる上に中央の旗折たりければ、上下みな色を失ふ。曹操急に觸を廻し、若旗の折たることを取沙汰して人の心を迷すもの有ば、必ず首を刎んと下知しけるゆゑ、軍中自ら靜りにける。周瑜は猶山の頂に立て江北を望けるが、忽ち一陣の風さつと向より吹來り、白浪岸を拍て立たる旗周瑜が面に掛りしかば、周瑜にはかに一聲さけび、血を吐て地に倒る。諸人大に驚き、急に扶て山を下りけるに、早人心地も無なりにけり。

人欣で退出し、その夜の四更に皆兵粮を使ひ、五更に武具を揃て相待ければ、水寨に鼓を打金を鳴して數萬の兵船こと〴〵く推出し、色々の旗を指擧て一度に攻かゝる體をなせば、焦觸、張南二十艘の小舟を馳て眞先に進みかゝる。去ほどに吳の陣には昨夜曹操が方に鼓の聲喧しきを聞て、周瑜山に上て望み見るに、水軍を調練する鼓なりければ、心を安じて居たる所に、次の日又鼓の聲おびたゞしく聞えければ、人を山に上せて見せしむるに、江北より小舟二十艘あまり波を衝て馳きたると申す。周瑜これを聞て誰か先手に出てこの敵を破んと問ければ、韓當、周泰二人すゝみ出て曰、我等ねがはくは之を破ん。周瑜しかるべしとて兵船十艘を左右に分て進しめ、諸將の陣々に觸て輕々しく動こと勿らしむ。焦觸、張南は一勇の力を恃み、直に舟を飛して江南の岸に推よせければ、吳の大將韓當手に長き槍を持舟の頭に立出で、焦觸が船まづ近付ければ、兩方より雨のふる如く矢を射かけ、二人鋒を交て韓當楯を以て焦觸が矛を支へ、右の手に槍を撚てたちまちに刺ころし、勢に乘て攻ければ、周泰船を飛して横合にかゝり、張南と入みだれて戰ひ、弩を放ち石を飛すこと雹の如し。張南が舟すでに退んとするを見て、交七八尺ありけるを周泰ゆらりと飛うつり、只一刀に張南を水中に斬て落し、散々に薙で廻れば、曹操が勢二人の大將を討れて我先にと逃かへる。韓當、周泰勝に乘て追討に蒐りけ

以て焼んとせば、西北の風に吹れて却て自ら己が船を焼ん、われ何の怕か有んや、若又十月小春の時ならば其用心も有べき也と云ければ、諸將頓首して拜伏し、丞相の智略天地に彌る、等閑の及ぶことに有ずとぞ感じける。曹操が曰、われに從ふ青州、徐州、燕代の者共みな舟に乘ことを慣ざれば、鳳雛が教に有ずんば安ぞこの大江を渡るべき。時に列座の中より大將二人すゝみ出、某等は幽燕の國にそだつと申ども、舟の軍は能く知れり、今願くは二十艘の船をかり、直に吳の陣に攻かゝり、分取高名して御方の威を顯さんと云ければ、諸人これを見に、始め袁紹が大將たりし焦觸、張南二人なり。曹操が曰、汝等は北國の者共なり、舟に乘て自由を得じ、吳の國の者共は幼より長江の中にそだち、舟を以て平地の如す、汝等一大事の命を輕じて小兒の戯をなすこと勿れ。焦觸、張南大に叫で曰、もし打負て歸りなば必ず軍法に行ひ玉へ。曹操が曰、兵船は盡く鎖を以て縛ぎ連ねたり、惟わづかなる小舟ありと云ども、一艘に二十餘人を乘つべし、之を以ては便を得じ。焦觸が曰、もし大船を用て戰はば、假令打勝とも豈奇とするに足んや、小舟二十艘を借玉へ、張南と二手に分て吳の陣に攻入べし。曹操が曰、しからば小舟二十艘精兵五百人を借べし、明日水寨の船をことごとく推出し、大勢かゝる體を見せて吳の勢の氣を奪ひ、又文聘に三十艘の早舟を付て汝等が後備に遣すべしと云ければ、二

水寨に三通の鼓を打ければ、各隊門を分て兵船を棹出、渺々たる三江の面に次第を亂ず陣をはり、殊に西北の風烈く吹て白浪天に漲りしかども、五十六十鎖を以て縛ぎ合せたる船なれば、穩なること平地の如く、北國の軍勢も勇み躍て槍を使ひ戟を舞しければ、曹操これを見て心の内喜び、呉の國を滅さんこと掌にありとぞ思ひける。斯て調練すでに果て巡警使往來して下知を成、各々次第を守て水寨へ回しむるに旗の色雜ず、別に五十餘艘の小舟を以て左右前後その便を通じ、二十四座の門より盡く入ければ、曹操諸將に向て曰、もし鳳雛が計を得ずんば、我安ぞこの大なる江を渡ん、今天の助に依て浩る風波にも動ず、人馬平地を行くが如し、南方の岸に到りなば、一擁して攻上んに誰か能われを防ん。程昱すゝみ出て曰、兵船ことごとく鎖を以て連ねし故穩にして好と云ども、敵もし火を以て攻ば如何して急に避くべき。曹操笑て曰、汝が云ところ遠き慮ありと云ども、惜くは兵を用るの法を知ず。荀攸が曰、某が心も敵の火攻を畏る、何故に程昱は兵を用るの法を知ずと宣ぞ。曹操が曰、それ大將たる者は先天の時を明め、地の理を察して其のちに兵を用べし、算多きは勝算少きは負、況や於レ無レ算をや、時いま十一月の末に至て、西北の風は吹ども嘗て東南の風は吹事なし、吾いま北の岸に陣を取て呉の陣は南にあり、敵もし火攻を用ば、風の力に有ずんば叶まじ、今もし火を

遶樹三匝、無枝可依、これ不吉の言なり。曹操大に怒り、汝なんぞ吾遊興を妨ると云て、持たる槊を取直して劉馥を刺殺し、その夜の酒宴は止みにけり。次の日曹操後悔して止ず。劉馥が子の劉熙、父の屍を請て故郷に葬らんと望ければ、共に涙を流して、われ昨夜酒に酔て誤て汝が父を殺す、これを悔れども及ず、三公の禮を以て厚く葬るべしと云ければ、劉煕泣々父が柩を送て故郷へぞ歸ける。

○曹操三江調水軍

水軍の總大將毛玠、于禁二人曹操に來り見え、大小の兵船鐵の鎖を以て盡く排列し、武具兵粮の用意までも一齊に備れり、早く日を定て呉を攻玉へと云ければ、曹操自ら水寨に到り、中央の大船に坐して文武の大將を集め、先手分をぞ定ける。舟手には中央に黄なる旗を立て毛玠、于禁、前手には紅の旗を立て張郃、後備には皁き旗を立て呂虔、左備には青き旗を立て文聘、右備には白き旗を立て呂通なり。陸路の前手には紅の旗を指て徐晃、後備には皁き旗を指て李典、左備には青き旗を指て樂進、右備には白き旗を指て夏侯淵、水陸の救應使は夏侯惇、曹洪、護衛往來監戰使は許褚、張遼、これ等を宗徒の者として其外の驍將隊伍を守て排列し、

何ゆゑに夜中に鳴。答て曰、鴉は月の明なるを見て夜の曉たるかと誤るゆゑに、樹を離れて鳴候。曹操又大に笑ひ、この時酒宴酣にして槊を持て自ら船の頭に立出、酒を取て江を奠り、三杯のみ盡して槊を横へ、諸將に向て申けるは、われ此槊を持て黄巾の賊を破り、呂布を擒にし袁術を滅し、袁紹を平げ深く塞北に入て遼東を定め、天下の内に縱横す、これ眞に大丈夫の志なり、況や今此景に對して甚だ慷慨の心あり、吾自ら歌を造ん、汝等これを和せよ。其歌に曰、

對レ酒當レ歌　人生幾何　譬若二朝露一　去日無レ多　慨當二以慷一
憂思難レ忘　何以解レ憂　惟有二杜康一　青々子衿　悠々我心
呦々鹿鳴　食二野之苹一　我有二嘉賓一　鼓レ瑟吹レ笙　皎々如レ月
何時可レ輟　憂從レ中來　不レ可二斷絶一　越レ陌度レ阡　枉用二相存一
契濶談讌　心念二舊恩一　月明星稀　烏鵲南飛　遶レ樹三匝
無二枝可レ依　山不レ厭レ高　水不レ厭レ深　周公吐哺　天下歸レ心

歌罷で諸將共に和しければ、忽ち列坐の中より一人すゝみ出て、大軍相當るの時、將士命を致の日、丞相なにゆゑに浩る不吉の詞を出し玉ふぞと云。諸人これを見れば、乃ち楊州の刺史劉馥字は元穎なり。曹操問て曰、なにをか不吉の詞と云。劉馥が曰、月明星稀、烏鵲南飛、

我この江南富饒の國を保つことを得ば、國を富し兵を强すべし、我いま手下に百萬の勢あり、諸大將力を盡して忠を致す、豈功業の成ざるを患んや、吳を平ぐる時は天下われに敵する者なし、諸將と共に富貴を受て長く太平を樂べし、われ今夜の詞を違じ、諸大將もみな心に記して忘ること勿と云ければ、諸大將謝して曰、ねがはくは早吳を平て凱歌を唱へ、共に君の恩澤を被るべし。酒宴すでに夜半に及びければ、曹操遙に江南を指さして申けるは、周瑜、魯肅天の時を知ず、幸に我に心を寄る者あり、密に彼が心腹の患を成、これ天われを助る也。荀攸諫て曰、丞相かる〴〵しく宣こと勿れ、萬一外に洩る時は大事必ず破るべし。曹操笑て申けるは、われ今この座の人を見るに、皆股肱の近臣なり、何事か外に洩ること有んとて、又夏口の方を指さし、玄德孔明みな己が螻蟻の力を料ずして、我泰山の重を撼さんとすると云て打笑ひ、又諸將に向て申けるは、われ今年五十四歲、もし吳の國を平ば必ず大なる喜あるべし、昔喬公と云し人、われと交深かりしゆゑ、二人の女を我に與んと約せり、我その女を見るに、共に傾國の色世に絕れたり、料ざるに孫策と周瑜とに娶れ、常に口惜く思ふ也、われ新に銅雀臺を漳水の邊に造る、若吳の國を平げ二喬を迎て臺上に置、老後の娛を成時は、我願ひ已に足りとて、大に笑て休ざりけるに、忽ち鴉の聲南へ飛て聞えしかば、左右に向て曰、この鴉は

通俗三國志　卷之二十

○曹操横レ槊賦レ詩

徐庶命を受て已に兵を引て出ければ、曹操今は都の内心に掛る事なしとて大に喜び、自ら馬に乘て先陸の陣を見巡り、其後大船一艘を中央に浮べ、帥の字かきたる旗を建させ、左右みな水寨に傍て弩千張を伏おき、自ら將臺の上に坐す。時に建安十二年冬十一月十五日なり。殊さら天氣快く晴て風靜に浪平なりければ、船中に酒宴を設て諸の大將を集けるに、漸く暮に及て東の山の端に皎々たる月指上て、其光白日の如く、一帶の長江素練を引かと怪る。曹操が近侍の輩みな錦繡の袖を連て、戈を荷ひ槍を横て數百人排列し、文武の大將階級に依て悉く集りしかば、曹操心の內勇み喜び、四方の景を望み見るに、名高く聳たる南屛山月に映じて畫の如く、東は柴桑の境を望み、西は夏口の江を極め、南に樊山、北に烏林、四遠の風景寸眸に集りければ、共に杯を傳へて諸大將に向て申けるは、吾義兵を起してより以來、民の爲に凶惡を除き、誓て四海を淸んとするに、大半すでに平たれども未レ得ものは江南なり、

邊の才智を以て身を脱るの計は、眼前芥子粒ほどの計なり、何の難ことか候はん。徐庶再三問ければ、龐統耳を付て計を私語けるに、徐庶地上に拜し、吾平生玄德に薦て、伏龍鳳雛は其才天下に高しと申しけるが、今果して此の如し、幸に活命の恩を受ると云て別れしかば、龐統も舟を早めて回りけり。徐庶は我陣に回り、夜に入て身近き者共に計を教へ諸所に散て、西涼の馬超、韓遂大軍を起して謀反し、虛に乘て都を攻ると云せければ、次日この沙汰陣中に充滿て、五人三人頭を交て私語き、何とやらん躁しかりしかば、或人急に曹操に告げて曰、今何よりともなく西涼の馬超謀反を起し、韓遂と共に大軍を率して、虛に乘て都を攻ると申し沙汰仕り、御方の軍勢みな妻子を都に殘し置たる故、以の外に躁ぎ候。曹操大に驚き諸大將を集て申けるは、吾兵を引て都を出る時、只馬超が都を襲ん事を患ふ、今久く此に在て心の内片時も忘ず、陣中の雜說未だ虛實を知ず、用心せでは叶まじ、誰か我に代て都に行ん。時に徐庶進み出て曰、某久く御恩を受て遂に一も功を成ず、願くは三千餘騎を引て都に上り、散關を截塞で要害に敵を支へ、若急あらば再報ぜん。曹操喜て申けるは、徐庶もし行かば我何をか憂べき、散關の上に兼て兵を殘し來り、汝共に之を領せよとて卽時に三千餘騎の精兵を擇び、臧覇を先手として早々に打起せければ、徐庶命を受て都を指て馳て行。これ乃ち龐統が徐庶に敎し計なり。

で送る。龐統しすましたりと心よろこび、岸の邊に下て舟に乘んとしければ、忽ち竹の冠を戴て身に道服を被たる者一人、後より龐統を捕て働さず、憎き己は膽の太き黃蓋に苦肉の計を用させ、闞澤に詐て降る書簡を送らせ、今又來て連環の計をなし、一艘にても舟を燒のこさんことを畏る、たとひ一旦曹操を欺き得たりとも、爭か我を出拔んと云ければ、龐統大に驚て魂も天外に飛、汝は何ものぞと問に、答て申けるは、われは乃ち徐庶なり。龐統昔の友なりと思ひければ少し心を靜め、四方を見るに人も見えざりしかば、御邊わが計を知て妨を成ば、呉の國八十一州の百姓こと〴〵く御邊が爲に滅さるゝなり、豈あはれまざらんやと云ければ、徐庶が曰、もし汝が計成就する時は、御方八十三萬の人馬こと〴〵く燒死されん、是を憐と思ふまじきか。龐統が曰、われ元命を惜なれば、此に來らず、この上は汝が心の儘に我を殺せ、これ天運なり。徐庶が曰、われ新野にて劉皇叔の厚恩を被り、今に至るまで心に忘ず、曹操に老母を囚れて已ことを得ずして半途に別れ、一生の間他人の爲には一つも計を設候はじと固く誓をなせり、われこの間の計をこと〴〵く知と云ども了に色にもあらはさず、今安んぞ御邊の計を妨べき、只畏らくは我もこの舟の中に在て共に燒殺されんことを思ふ也、御邊ねがはくは我一身を脫るの計を教玉へ、然る時は口を緘て遠く避ん。龐統笑て申けるは、御

つその意の如く、大浪にも動ずして舟の中自ら安穩ならん。曹操大に喜び席を下て謝して曰、先生の良謀にあらずんば吾いづくんぞ吳を破ることを得ん。龐統が曰、某が淺見丞相よく裁判し玉へ。曹操卽時に下知を傳へ、中軍の鍛冶を集て夜を日に繼で大釘鎖を作せければ、諸軍これを聞て喜び勇ずと云ものなし。龐統申けるは、某いま明なる君に遇、まことを盡して忠を致ずんば有べからず、吳の國の諸將みな周瑜を怨で反忠の心あり、某三寸の舌を動し丞相の爲に之を說ば、こと〳〵く來り降らん、然る時は不日に周瑜を生どりて玄德を平ぐべし。曹操が曰、先生まことに其心あらば再び國に回て同志の者を語ひ玉へ、他日功を成ば三公に封ずべし。龐統が曰、某富貴の爲にするにあらず、只民の苦を濟ん爲なり、丞相もし吳の國に入玉ふとも必ず人を殺し玉ふな。曹操が曰、われ天に替て道を行ひ、四海の民を濟んとす、安ぞ妄に人を害すべき。龐統再拜して曰、某いま江南に回る、丞相もし攻入玉はば、大軍亂れ散て人を殺さん、ねがはくは驗の榜を賜て、某が一族を安んずべし。曹操が曰、先生の一族いづくにかある。龐統が曰、こと〳〵く江南の岸の邊にあり、もし榜を下し玉はば兵の狼藉を免れん。曹操乃ち當手の軍勢吳の國に入て、龐統が一家を濫妨すべからずと書て與ければ、龐統拜して恩を謝し、丞相少しも早く攻來り玉へ、必ず周郞に覺られ玉ふなとて別れければ、曹操ねんごろに門外ま

し周瑜みだりに己が才に傲て人を用ず、亡ること今日の前に有ん。曹操が曰、しかるべきこと有ば願くは教玉へ。龐統が曰、いま之を見て某心に着ることあり、某又何をか云ん。曹操大に喜び又酒宴を成て共に孫子、呉子が兵法を論じ、諸家の陣法を談じ、六韜三略の書を議するに、滔々として水の流るゝが如なりしかば彌あつく敬ひけり。酒宴すでに數刻に及ければ、龐統いつはりて醉たる體をなし、この陣中に良醫者ありやと問。曹操が曰、なんの用にかし玉ふべき。龐統が曰、われ舟手の勢を見るに病に臥もの多し、良醫を以て治せしめん。この時曹操が勢は皆北國より遙々と來り、水土に服せずして嘔吐の疾を煩ひ、死する者多かりしかば、曹操つねに之を患とす。今龐統が詞を聞て累に求め問ければ、龐統が曰、兵法陣法みな備ると云ども、只惜むらくは全からず。曹操問て曰、ねがはくは聞ん。龐統が曰、某一つの計あり、舟手の勢に一人も病なからしめ、安穩にして功を成しめん。曹操謹で申けるは、先生これを教玉はば、吾なにをか心に患ん。龐統が曰、いま大江の中に舟を浮る時は、潮の指引に隨て風ふき浪おこる、中國の人は舟に乘ことを閑ず、この故に病を生ず、もし大小の船を一處にあつめ、或は三十を一手に合せ、或は五十を一列とし、首尾に鐵の鎖を付環を以て連ね集め、上に走の板を鋪てその上を往來せば、人も馬も平地を行より安からん、若これに乘時は風に隨ひ潮に任せて上つ下

一命を棄ても宜く申べし。龐統が曰、御邊もしその心あらば我なんの患か有ん、事延引すべからず、此に一つの細路あり、今夜の内に山を出ん。蔣幹限なく喜び二人打連て濱の邊に忍び出、ひそかに舟を尋て直に江北に馳てゆく。舟すでに水寨に著ければ、蔣幹まづ入て曹操に右の趣を語る。曹操もとより龐統が名を聞ければ、急に出て對面し、賓主を分て坐定り、龐統禮了て、今周瑜は氣の盛なる若もの、己が才智を恃で諸人の計を用ず、賢人を妬害す、これに因て某一人に有ず諸の大將こと〴〵く遁れ去んとす、某いま此に來るは丞相よく士を敬玉ふを知ゆゑ也、ねがはくは疑玉ふなと云ければ、曹操甚だ喜び、吾つねに御邊を慕ひしに今幸に逢ことを得たりとて、少しも疑ず誠心に持なし、酒を進て其のち馬を引せ二人打乘て共に陸の陣に至り、高きに登て望みければ、龐統嘆じて曰、まことに大將の才に備り玉へり。曹操が曰、先生ねがはくは少も隱さず教へ玉へ。龐統が曰、この陣は山に傍林により前後相盻、出入門あり進退曲折、古の孫子、吳子が再び生れ、司馬穰苴が又出るとも爭か此に勝らんや、某いつはりて褒るに有ず。曹操心よろこび又水寨に行て望み見るに、南向に二十四座の門を構へ、艨艟戰艦を列て城郭とし、中に小舟を浮て便を通じ、往來巷ありて起伏序を守りければ、龐統笑て申けるは、某久しく丞相の兵を用ひ玉ふこと恰も神通ありと承はりしが、今果してその實を見る、憐むべ

のせ、送て西山の幽なる中に行、一つの庵を構て其中に棄おき、山の四方に番を付たりければ、蔣幹すご〳〵と庵の内に在て心の中憂ひ悶え寢食をも忘れ、ある夜星の光天に滿て零る露冷なりしかば、靜に庵を出て其邊を逍遙するに、遙に讀書の聲きこえければ、蔣幹心の内に、怪や浩る山中に學問する人あるかと思ひ、足に信て尋ね行ければ、山際の溪陰に柴の扉を掩たる屋四五軒つらなり、灯火を明に挑たるあり。蔣幹ひそかに窺ひ見れば、一人劍を傍に掛て孫子が兵書を讀居たり。蔣幹これは世を遁れたる異人ならんと思ひ、扉を叩て案内しければ、彼人起て出迎ふ。蔣幹問て曰、この山中に書を讀玉ふは如何なる人ぞ。答て曰、われは龐統字は士元と云もの也。蔣幹が曰、鳳雛先生か。答て曰、これなり。蔣幹が曰、なにゆゑにこの深山に居玉ふぞ。龐統が曰、周瑜自ら己が才智に傲て忠臣の諫を聽ず、剩徳ある人を妬み害す、我このゆゑに此に隱る、御邊は又いかなる人ぞ。蔣幹が曰、われは蔣幹字は子翼なり、先日群英の會に對面せしが何ゆゑに忘れ玉へる。龐統打驚て申けるは、われ慢て惑へり、先内へ御入あれとて草庵に入て共に心底を殘さず語りければ、蔣幹が曰、御邊の才智を以ては何事か心に信せざること有ん、何ぞ吳を去て曹操に事玉はざる、某ねがはくは伴ひ行ん。龐統が曰、われも其心つかざるにも有ず、只曹丞相の用ひ玉ふまじきを畏るゝ也。蔣幹が曰、その事は某に任せ玉へ、

一艘の船に火かゝらば自餘の船ことごとく四方に散ん、何とぞ方術を運し連環の計を以て曹操を欺き、彼が船を一所に集て殘らず燒盡さば如何ん。周瑜が曰、曹操は智惠深き者なり、爭か左樣の計に落入んとて共に議論する所に、江北より蔣幹又來れりと報じければ、周瑜大に喜で天地を頂禮し、我に功を遂しむるは必ずこの人の身にあり、諸將箇樣々々にし玉へとて計を私語き、中軍の帳上に坐して蔣幹を呼入ければ、蔣幹は周瑜が出て迎ざるを心の內に怪ながら、舟を岸の傍に繫ぎ置て舒々と內へ入けるに、周瑜屹と見て俄に色を變じ、蔣幹なにゆゑに斯われを欺ぞと云ければ、蔣幹笑し申けるは、われ御邊と舊き交あり、この故に再び來て一大事を告んとす、なに故に怒玉ふぞ。周瑜が曰、汝來て吾に降參を勸んとす、海の枯石の爛る時に至るとも吾心變ずることなし、前に汝を昔の友なりとて心を寬し、覺ず酒を過して同じ床に臥たれば、却て汝に書簡を盜れ、殊に夜中に逃回て吾に內應せし蔡瑁、張允を殺させ、一大事の妨をなす、近ごろ蔡和、蔡仲われに降る、汝又來てこれを妨んとするか、我昔の好を思はずんば一刀に切て兩段と成べけれども、一二日の內に曹操を破る、若こゝに汝を置ば必ず我計を泄すべし、誰かある蔣幹を送て西山の庵の中に入おけ、曹操を破て後に江北に回すべしとて坐を起ければ、蔣幹再び言を出さんとするに、周瑜はや內へ入けり。武士共馬を引て蔣幹をかき

明なる君に遇、まさに力を盡して助べしとて四人同坐して酒をのみ、共に心中のことを相議しければ、蔡和、蔡仲いつはりとは夢にも知ず、卽時に書簡を以て曹操に報じければ、闞澤も別に書簡を調へ、今甘寧も吳を背て共に丞相に降らんとす、黃蓋が兵粮を盜で馳參ことは容易に爲がたきゆゑ、日限いまだ定まらず、只いつにても青龍の牙旗を挿たる舟を見玉はば、これ黃蓋が降參の兵粮舟なりと知玉ふべしと書て曹操が方へ送りければ、曹操ひらき見て心の中疑て更に決せず、乃ち諸將を集て議して曰、いま吳の大將甘寧も周瑜に辱しめられて降參を願ひ、黃蓋も五十杖の責を受て密に闞澤を使として內應せんと欲す、今又書簡を送れりと云ども我なほ心の疑あり、誰か江を渡て吳の國に行、この虛實を窺來ん。時に蔣幹すゝみ出て曰、某前に行て功を成ず、心の內深く羞とす、今一命を棄て再び行、もし事を成ずんば必ず軍法を被らん。曹操喜で許ければ、蔣幹小舟に乘て又吳の國へ馳てゆく。

○龐統詐獻連環計

この時周瑜は中軍に出て計を議しけるに、龐統ひそかに來り、曹操を破るには只火攻を用ひ玉へと云ければ、周瑜が曰、われ已に計を定めたり。龐統が曰、この渺々たる大江の上なれば、

闞澤答て、今本陣にて散々に辱しめられ、無興して此に來れりと云ければ、甘寧笑てものいはず。時に蔡和、蔡仲來りしかば闞澤乃ちきと目合するに、甘寧その意を悟り、只己が才智を負で諸人を芥の如く輕んず、我等も大に辱しめられて國中の人に逢ことを羞と云て牙を咬齒を切り、怒れる髮倒に揚りければ、闞澤わざと耳の邊に依て私語なんどするに、甘寧首を低てものの云ず、大息ついて長嘆す。蔡和、蔡仲傍に在て、扨はこの二人の體深く周瑜を恨るもの也と見ければ、言を以て探て曰、二將軍いかなること有て悶玉ふぞ。闞澤が曰、吾等が腹中の事御邊なんぞ知ことを得ん。蔡和が曰、吳に背て曹操に降ん爲にては無か。闞澤大に驚きたる體を成ば、甘寧劍を地に投て曰、事すでに人に推せられたり、久く此に留りがたし、この間ひそかに計て工しこと若し周瑜が方へ聞えば、吾計必ず敗れん。蔡和、蔡仲が曰、この事少しも患玉ふな、左右の人を退玉へ、我ひそかに申すべきことあり。甘寧が曰、早々に云玉へ。蔡和が曰、われ等兄弟は本より曹丞相の計にて僞て吳に降れり、二將軍いま吳を背の心あらば、某よろしく曹丞相に告申さん。甘寧が曰、もし然る時は是天の助なり。闞澤乃ち黃蓋が降參のことを語りければ、蔡和申けるは、某すでに黃蓋の責られ玉ひしことを曹丞相に報じたり。闞澤が曰、われ曹丞相の所に在て御邊の書簡きたれるを見たり。甘寧が曰、大丈夫の士すでに

詐あらん。曹操大に喜び、若御邊よく忠義の心を存し玉ふ時は、呉を破ること手の内にあり、他日必ず恩賞あらんと云ければ、闞澤が曰、某等恩賞を望で降るに有ず、但天に應じ人に順んことを思ふゆゑ也。曹操心の内しきりに喜び酒宴を設て持成ける時、少刻ありて人きたり、曹操が耳に依て何やらん低語く。曹操問て申けるは、書簡ありや。其人書簡を與ければ、曹操開き見て喜びの色顏に出たり。闞澤心の内に是定て蔡和、蔡仲が方より黃蓋が責られしを内通するならんと思ひ居たれば、良ありて曹操申けるは、願くは御邊再び呉に回り、黃蓋と計を合して日限定らば內通し玉へ、我兵を出して迎べし。闞澤が曰、某すでに此に來れり、再びなんぞ呉に回らん、丞相ねがはくは別に宜しき人を用ひ玉へ。曹操が曰、もし他人を用ば事必ず洩ん。闞澤再三從ず、心の內只疑はれんことを畏れ、良久うして某もし呉に行とも又早く回り來んと云ければ、曹操喜て金銀を與へしかども、闞澤一つも受ず、小舟に乘て呉に回り、黃蓋に逢て右の趣を詳に語りければ、黃蓋喜で申けるは、もし御邊を使とせずんば我苦を受たること空く徒事と成ん。闞澤が曰、われ曹操が處に在し時、蔡和、蔡仲が方より內通の書簡來れりと思ひしが、曹操その書簡を見て彌われを信とせり、今甘寧が陣に行て其氣色を窺ん。黃蓋しかるべしと同じければ、闞澤直に甘寧が陣に行。甘寧問て曰、御邊なにゆゑに來り玉ふぞ。

兵書を讀で此程の計を知まじきか、汝別人は欺き得べけれども爭か我を欺べき。闞澤が曰、汝書簡を見て何ゆゑに詐なりと知れる。曹操が曰、われ汝が詐なる仔細を語り、死して恨ること無しめん、汝もし眞の降參ならば御方に來る日限を約せん、何の定めたることも無、降參とばかり書たるは是詐の證據なり。闞澤笑て申けるは、汝みだりに幼より兵書を讀とて人に傲る、若戰はば必ず周瑜が爲に擒とならん、惜かな我無學の者の爲に身を悞る。曹操が曰、なにゆゑに我を無學と云。闞澤が曰、汝書を讀と云ども機謀を知ず道理を明さず、この故に戰はば敗れんことを知。曹操が曰、しばらく汝を免べし、我必ず敗れんことを知は如何なる故ぞ、汝明に之を述よ、若理に當ことあらば議論せん。闞澤が曰、われ汝を見るに賢人を重ずるの禮なし、我なんぞ輕々しく云ん、只早く頸を刎よ。曹操が曰、ねがはくは高論を聞ん。闞澤が曰、古より背レ主作レ竊、安可レ期乎と云り、いま黄蓋吳を背て兵粮武具を舟に積、ひそかに來りて降らんとす、若日限を堅く約して急に來りがたきこと有ば、事の洩るのみならず丞相も又疑の心おこらん、此ゆゑに宜く時を待て來んとす、然るに之を以て詐とし玉ふか。曹操げにもと喜び、席を起て厚く敬ひ、我一時の不明誤て無禮をなす、願くは心に掛玉ふなと云ければ、闞澤申けるは、某黄蓋と心を傾て丞相に降る、小兒の父母を慕ふに異ならず、何ぞ少しも

き見るに、其書に曰、

東呉糧草官水軍先鋒使黄蓋、泣血百拜、謹獻書於大丞相麾下。蓋受孫氏厚恩、曾爲將帥、見遇不薄。然顧天下事有大勢、用江東六郡山越之人、以當中國百萬之衆、衆寡不敵、海内所共見也。東呉將吏無有賢愚、皆知其不可。惟周瑜、魯肅偏懷淺戇、意未解耳。加之行軍無次、自負其能、無罪受刑、有功不賞。蓋今應天順命、率衆歸降。瑜所督領自易摧破、交鋒之際、必爲前部。糧草軍儲、隨船獻納。因是投書、效命在近、乞無疑心。伏希聽納。

建安十二年冬十一月日　黄蓋泣血百拜奉書

曹操案の上に開て十反あまり讀けるが、忽ち案をはたと打目を張て大に怒り、黄蓋いま苦肉の計を用ひ、汝に詐て降る書簡を持せ、中にて計を用んとす、爭か我を欺得ん、引出して斬て棄よと云ければ、武士共群り來て引立んとするに、闞澤色をも變ぜず天を仰で大に笑ふ。曹操引戻させ、我すでに汝が計を見やぶりて今首を刎んとするに、何ゆゑに笑ひを成ぞと問ければ、闞澤が曰、われ汝を笑にあらず、黄蓋が人を知ざるを笑ふ也。曹操が曰、人を知ざるとは如何なることぞ。闞澤が曰、汝殺さば早く殺せ、何ぞさのみ尋問ん。曹操が曰、われ幼より

ば、闞澤が曰、事延引すべからず、早く書簡を渡し玉へとて漁翁の體に出立、夜に紛て只一人小舟にのり、三更の比曹操が水寨に到りければ、番の兵なに者ぞと問ふ。闞澤が曰、汝等早く丞相に報じて、吳の大將闞澤と云者一大事を申さん爲に來れりと云候へ。軍士乃ち陸の陣に行その趣を告ければ、曹操が曰、敵の計にて跡より大勢來るにては無か。軍士答て曰、只一人の漁翁と見えて候、別に怪きことは候はず。曹操乃ち燭を燃して闞澤を呼入ければ、闞澤謹で禮を施す。曹操が曰、汝は吳の國に事て參謀の官たりと聞しが、何ゆゑに此に來れる。闞澤申けるは、人みな曹丞相は賢を求玉ふこと大なる旱に雲霓を望が如なりと云しが、今これを見るに甚だ聞しに相違せり、黃蓋は人を知ず、浩る大事を心に掛て容易に事を行もの哉とつぶやきければ、曹操が曰、われ不日に吳を滅さんとす、汝いま私に來る、この故に子細を問なり。闞澤が曰、わが國の黃蓋字は公覆と云もの、已に三代が間吳に仕へて眞に故老の舊臣なり、然るに今周瑜に侮られて常に恨を含ところに、昨日諸人の前にて痛く責られ、彌氣を激して周瑜を恨む、某は日比兄弟の交を結を以て密に書簡を送て丞相に降參を求、何とぞこの恨を雪んとす、幸に黃蓋は吳の國の兵粮武具を司る、期に臨では此を盜取て馳走るべし、丞相いかゞ用ひ玉はんか。曹操が曰、その書簡は何くにかある。闞澤懷より出しければ、曹操案の上にて開

りにけり。

○闞澤詐獻降參書

黄蓋は痛く周瑜に責られて我陣に助入られ、帷帳の中に臥ければ、諸大將かはる〴〵來り尋れども、只長嘆して居たりけるが、忽ち參謀闞澤來り玉ふと報じければ、黄蓋人を出して迎へ入、傍なる人を追のけ相對して坐しければ、闞澤問て曰、將軍は周瑜と舊き恨ありや。黄蓋が曰、われ何の恨か有ん、今御方の中を見るに御邊ならでは我一大事を語るべき人なし。闞澤が曰、將軍今日責を受玉ふは苦肉の計にて候はずや。黄蓋が曰、いかゞして知玉へる。闞澤が曰、周瑜が氣色を見て某すでに九分は推したり。黄蓋が曰、われ呉に事て已に三代の厚恩を受、これを報ずべき道なし、この故に浩る計を以て曹操を破らんと欲す、いかなる苦を受るとも何ぞ少しも辭すべけん。闞澤が曰、將軍このことを某に告玉ふは、使として曹操に降參の書を送らん爲か。黄蓋が曰、われ眞にこの意あり、御邊ゆき玉はんか。闞澤が曰、大丈夫の士たる者世に出て君に事へ、功業を建ること能ずんば空く生て甲斐なし、何の用にか立べき、將軍すでに命を國の爲に捨玉ふ、某なんぞ蟻螻の如なる微生を惜まん。黄蓋大に喜び床を下て拜謝しけれ

て孔明に見え、今日周瑜大に怒りを爲て痛く黄蓋を鞭うつ、われ等は皆彼が手下に屬するゆゑ爭て諫ることを得ず、先生は他國の賓客、幸その座に在ながら何ゆゑに諫をも云ず、手を袖にして見物し玉へると恨ければ、孔明笑て曰、御邊なにゆゑに我を欺玉ふぞ。魯肅が曰、われ先生を伴て此國に來てより、曾て少しも欺こと無、如何なることを宣ふぞ。孔明が曰、御邊さては兵法に鬼神不測の機あることを知玉はぬか、周瑜が今日黄蓋を殺さんとせしは本より工たる計なり、我なんぞ諫べき。魯肅これを聞て初て悟り、大に驚たる體なりければ、孔明が曰、苦肉の計に有ずんば爭か曹操を欺き得ん、今詐て黄蓋を降參せさせ、却て蔡和、蔡仲に其ことを通ぜしめん爲なり、御邊もし周瑜に逢玉ふとも必ず某がこの計を知たると云玉ふな、又われを殺の心おこらん。魯肅了に別れて周瑜が陣に行、今日なに故に黄蓋を責玉ひしと問ければ、周瑜が曰、外にて諸將の沙汰は如何ん。魯肅が曰、心中安からず思ふ者多し。周瑜が曰、孔明は如何云へる。魯肅か曰、孔明も都督の情なきを恨む。周瑜笑て曰、この度初めて孔明を欺得たり。魯肅が曰、なんと曰ことぞ。周瑜が曰、今日黄蓋を責て痛く打たりしは、乃ちわが本よりの計なり、先苦肉の計を以て黄蓋を曹操が方へ詐て降らしめ、其のち火攻を以て破る時は御方勝たずと云ふこと無ん。魯肅心の内に孔明が才智を思ひ、敢て色には出さずして了に退き去

黄蓋

周瑜計く黄蓋を鞭つ
周瑜
孔明
魯肅
蔡和
蔡仲

は、われ破虜將軍に隨てより已に三代が間この國に縱横す、汝なに者なれば妄に大言を放ぞ。周瑜いよ〳〵腹を立早く斬と下知すれば、甘寧すゝみ出て曰、黄蓋は我國故老の臣なり、願は免し玉へ。周瑜叱て申けるは、汝は何者なれば無用の舌を動して我法度を亂んとする、寄や者共とて甘寧を亂棒にて打出しければ、諸の大將地に跪て、黄蓋が罪の深き眞に誅を免がたしと云ども、今戰ざる已前に故老の臣を殺し玉はんは御方の爲に不吉なり、暫く其命を助け軍はてて後に法を正し玉へと願ひしかど、周瑜いかり猶やまず。諸將哀で再三に及びければ、周瑜が曰、われ諸將の諫を思ずんば即時に頸を刎て法を正さん、已に軍法を犯せる者なればこの儘にて閣がたし、暫く命を助おき、今百杖打て諸軍に知しめんとて獄卒に命じければ、諸將又哀で已ず。周瑜大に怒り前なる案を取てなげのけ諸大將を追退け、獄卒を召て黄蓋が衣裳を剝とり、地の上にうつ臥に引伏、大なる棍を以て五十杖打せければ、諸大將又來て哀告す。周瑜座を起て躍あがり黄蓋を指さし、汝いま思ひ知たるか、今五十杖打ずんば我心あき足ず、若怠ば同罪に行ん、早く打と云て怒の聲なほ已ず、了に帳中へ入にける。諸大將いそぎ黄蓋を扶起したれば、皮肉こと〴〵く破れ血流て泉の如し。漸抱きかゝへて陣中に回りけるが、絶入こと數度に及しかば見る人涙を流さずと云ことなし。魯肅は浩る形勢を見て輿を醒し、船中に行

欲す、此ゆゑに蔡和、蔡仲が許て降れるを留おきたり、但恨らくは御方の内に又詐て曹操に降る人なし。黄蓋が曰、某ねがはくはこの計を用ん。周瑜が曰、痛く苦を受ずんば曹操を欺得じ。黄蓋が曰、われ破虜將軍より久しくこの國の重恩を受、たとひ肝腦地に塗とも怨ること更になし。周瑜拜して申けるは、御邊この心あらば眞に國の大幸なり。黄蓋が曰、われ命を失ふとも又なんの恨か有んとて、密に計を約して去にけり。次の日周瑜中軍に出鼓を鳴して諸人を集ければ、孔明も來て傍に坐す。周瑜令を下して曰、曹操百萬の勢を引て三百里が間に陣屋を造る、一旦に破らんとせば却て御方に利あるまじ、我この年月兵粮を用意して不足なること無と云ども、諸將まづ舟の上に三月が間の粮をのせ、皆合戰の支度をし玉へ。時に黄蓋すゝみ出て申けるは、都督今船中いか程の粮を用意せよと宣ぞ。周瑜が曰、只三月が間也。黄蓋が曰、たとひ三十箇月の粮を用意すとも、爭か曹操を破ることを得ん、若やぶること叶ずんば、初め張昭等が云し如く甲を卸戈を倒にして曹操に降參し玉へ。周瑜勃然として色を變じて申けるは、われ君の命を受て籌すでに定り、若再び降らんと云もの有ば立どころに斬んと約せり、今兩軍相對するの日に至て汝先手の大將を承ながら、何とて浩る詞を出して兵の心を惑す、早く汝が首を斬ずんば諸人の心を定めがたしとて、武士を呼で首を斬と云ければ、黄蓋怒て申ける

敵の計に就て計を行ひ、彼に内通させて却て曹操を破るべし、御邊よく〳〵心を用て毎日出る時は共に出、皈る時は共に皈て少しも油斷すること勿れ、期に臨て先この二人を殺して旗を祭り、軍神の首途に備んと云ければ、甘寧計を受て出にけり。時に魯肅來て申けるは、只いま蔡和、蔡仲が降參は詐にて候はずや。周瑜叱て申けるは、曹操かれが兄を罪なきに誅戮せり、この故に兄の仇を報ぜんとて御方に來て忠を盡す、何の詐と云ことか有ん、若さほどに事を疑はば爭か天下の名士を用ん。魯肅默然として退き、船中に行て孔明に見え、右の趣を告ければ、孔明笑てもの云ず。魯肅怪で申けるは、先生は何を笑ひ玉ふぞ。孔明が曰、われ御邊の周瑜が計を知玉はぬを笑ふ也、敵御方大なる江を隔て間者の往來もなり難ければ、曹操この二人を詐て降しめ、萬づ内通させんと工みし者なり、周瑜すでに詐なることを知と云ども、敵の計の上に我計を用て態と彼等に内通せさせ、却て曹操を破んとす、周瑜が計きはめて好と云ければ、魯肅心の内始て悟る。この夜は周瑜眠ること能ず、獨坐して居たりけるに、先手の大將黃蓋たゞ一人出來れり。周瑜が曰、夜深て來り玉ふは必ず良計あらん。黃蓋が曰、敵は大勢にして御方は小勢なり、火攻を以て破らんは如何に。周瑜が曰、たれか御邊に此計を教たる。黃蓋が曰、これ某が本心より出たり、他人の教たるに有ず。周瑜が曰、われ久しく此計を用んと

若事成ば必ず重く恩賞を與んと云ければ、蔡和、蔡仲喜て曰、丞相御心を安んじ玉へ、某等が妻子を荊州に留め置上は心を變ずることは候まじ、何とぞ好隙も有ば、必ず周瑜、孔明が首を取て馳回らん。曹操大に喜び酒を進て恩賞を施しければ、次の日兄弟二人五百人の兵を率し順風に帆を擧て吳の國へ馳て行。この時周瑜は終夜眠ず計を思案して居たりけるに、忽ち人きたり、江北より數十艘の舟帆を張て岸に著き、蔡瑁が弟蔡和、蔡仲二人降參仕ると報じければ、周瑜心の中密に喜び、急ぎ呼入て對面す。蔡和、蔡仲地に拜哭し、某が兄罪なきに曹操に誅せらる、某二人この仇を報ぜん爲に遙々と江を渡て降參す、少しも疑ことなくして用ひ玉へ、一命を棄て曹操を破んと云ければ、周瑜が曰、蔡瑁はさしもの忠臣なりしに罪無して殺されたり、汝二人いま御方に來る、我なんの疑か有ん、能國の爲に曹操を破の計を致せとて、金帛を與て上將とし、甘寧が手下に加ければ、二人拜して恩を謝し、心の内に仕濟たりと喜びける。周瑜は密に甘寧を召、この二人の降參は曹操が計を以て詐て降しむるなり、大なる江を隔て萬事の便を得ざれば、この二人に內通させんと工しもの也、われ一つの計あり、御邊必ず油斷すること勿れ、この故に御邊の手下に加たりと私語ければ、甘寧が曰、なにとて詐と知玉ふぞ。周瑜が曰、まづ二人が曹操を背てこの國に來る、妻子を率ゐ來らざるは是詐なる驗なり、我

玉へ。孔明が曰、暫くその計を語り玉ふな、我も一つの計あり、共に手の中に書て同きか同からざるかを見るべし。周瑜甚だ喜び硯を取よせ、二人手の中に書て周瑜まづ手の中の字を出す。孔明これを見れば火と云字あり。次に孔明手を出す。周瑜これを見れば又火と云字あり、二人大に笑て休ず。周瑜申けるは、計すでに契を合せたるが如し、必ず外に洩玉ふな。孔明が曰、互に君の爲のことなり、安んぞ人に洩さん、足下よろしく此計を行玉へとて數盃を飲で別けり。

○黃蓋獻計破曹操

呉には九萬にあまる矢を得て喜べば、曹操が方には十五六萬の矢を費し、上下氣を失て居たりけり。荀攸申けるは、呉には孔明、周瑜とて二人の名將よく計を用ゆ、殊更大なる江を隔たれば間者を以て敵の様を窺べき便もなし、今御方の内より二人を擇で詐て呉に降らしめ、密に敵の計を通ぜしめん、然る時は呉を破ること掌にあり。曹操が曰、これ能わが心に合へり、誰人をか用ゆべき。荀攸が曰、蔡瑁すでに丞相に誅せられ、其弟蔡和、蔡仲二人この陣中にあり、丞相よく恩を以て二人の心を結び、詐て呉に降しめば呉又これを疑ふまじ。曹操しかるべしとて夜に入て二人を呼、汝兄弟わづかの勢を引て詐て呉に降り、敵の計を密に我に內通せよ、

まことに神に通ぜり、何とて今夜の大霧を知玉へる。孔明笑て、凡そ大將たる者は天文に通ぜず地利を知ず、奇門を識ず陰陽を曉ず、陣圖を看ず兵勢を明ずんば、是乃ち庸愚の才なり、豈用ふるに足んや、我三日已前に今夜大霧起らんことを料知り、此ゆゑに日を定て造んと約せり、適に周瑜が十日の內と云しは矢を造るに用ふる物を滯らせ、日限相違せば我を罪に落さんと計し者也、我浩る風流を以て十萬の矢を得たり、命は天に繫れり、周瑜いかでか我を害することを得んと云ければ、魯肅拜服して舟すでに岸に著けり。兼てより人夫五百人岸の上に來て矢を請取んと云ければ、孔明二十艘の舟より矢を集たるに九萬にあまりければ、魯肅いそぎ周瑜に逢て此由を語る。周瑜大に驚き慨然として嘆じて曰、孔明が神機妙算わが及ぶ所に有ずとて自ら門外に出迎へ、師の禮を以て敬ひければ、孔明が曰、詭の小計なんぞ奇妙とするに足ん。周瑜が曰、古の孫子、吳子も安んぞ之に及ぶべき、此へ御入あれとて共に帳中に入て酒宴を設け、昨日吳王孫權より使を以て早く戰ひを催して曹操を破れと命じ玉ふ、われいまだ好計を得ず、先生ねがはくは教玉へと云ければ、孔明が曰、某は碌々たる庸才足下は江東の豪傑なるに、何とて某に問玉ふぞ。周瑜が曰、われ向に曹操が舟手の陣を窺ひ見るに、極めて能法度に叶ひ容易には近付がたし、先生も昨夜その體を窺ひ玉はん、某一つの計あり、先生ねがはくは論じ

喊の聲に驚て毛玠、于禁いそぎ本陣に報じければ、曹操この時舟手の勢のいまだ調ざるを見て自ら岸の邊に蒐出、兵を下知して曰、今夜は大霧四方に掩て咫尺の內をも見わけ難し、敵必ず諸所に伏を置べし、殊に吳の勢は水の上にて自由をなす、輕々しく出ば打負べし、只舟手の射手を揃て亂矢に射とれとて、又陸の陣へも人を遣して張遼、徐晃を召よせ、共に三千づつの射手を引て岸の邊に亂れ散て雨のふる如く射させけるが、後には一萬人の射手を揃へ、敵の水寨に攻入んことを畏て弩をつるべ放つ。夜すでに明方に及で孔明は思ふ儘に矢を受留、いよいよ近く寄てぞ居たりける。曹操が方には暗さはくらし只霧の中に鼓の聲喊の聲絶ざりしかば、徐晃精兵を擇で水寨に赴き力を盡して射たりしが、漸日のぼりて霧晴ければ孔明急に舟を収め、二十艘の束ねたる藁に箭の立たること簑の毛より繁かりしかば、高らかに聲を揚、曹丞相の矢を謝すと呼はらせて同音に咄と笑ひ飛が如に馳かへる。曹操これを聞て安からぬこと哉、急に追付よとて討て出けれども、水は急なり孔明が舟已に二十餘里を隔たれば、如何に追ども叶ずして徒に皆囘りければ、曹操大に後悔し諸將も牙を嚙で嘆息す。孔明は魯肅に向て、いま舟ごとに矢の立たること四五千に餘れり、吳の國の力を費さずして已に十萬に餘る矢を得たり、明日よりこの矢を以て却て曹操を射ならば何に不足か候はんと云ければ、魯肅申けるは、先生

時は我計を妨ん。魯肅その意を知ず、本陣に回て周瑜に見え、孔明竹羽膠漆の類を用ず、三日の内に必ず十萬の矢を造んと云、これ如何なることぞと云ければ、周瑜大に疑を成、われも其故を知ずとぞ申ける。魯肅は約を違ず、早舟二十艘を調て三十人づつ士卒をのせ、青き布の幕を張、上に旗を挿で束たる藁を四方に稠、みな孔明が船の邊に浮けるが、次の日空く暮て第二の日も過ぬ。第三の日に至て其夜の四更に孔明魯肅を召て舟に乘玉へと云ければ、魯肅が曰、これ如何なるゆゑぞ。孔明が曰、われ江北に行て矢を取んと欲す、御邊も共に來り玉へ。魯肅が曰、その矢いづくに候ぞ。孔明が曰、さのみ此にて問玉ふな、早く舟を出せと云ほどこそあれ、二十艘の舟を長き繩にて相連ね、北を指て推よせば、今宵は霧深く起掩て面を對すとも見え分ず。前後濛々として暗かりけるに、孔明は魯肅と酒を飮、五更の比に至て已に曹操が水寨に近付、二十艘の舟を西より東に引連ね、俄に鼓を拍て喊の聲を揚たりければ、魯肅色を失ひ手足を張て畏れ戰き、これは物に狂ひ玉ふか、曹操が大勢討て出ば如何せんと思玉ふぞと云ければ、孔明笑て曰、われ量に曹操は奸雄なりと云ども、この霧ふかきを見ば必ず輕々しくは出來らじ、吾等は心靜に酒を飮、霧晴て後回るべし、吾自ら此にあり、御邊必ず畏れ玉ふなとて笑ひ樂んで居たりしかども、魯肅は默然として安き心も無りけり。去ほどに曹操が方には

ん、願は軍令狀を書て、三日の約を背ば必ず罪を被ん。周瑜大に喜び軍政司を呼で諸人の前にて軍令狀を書せ、酒宴を設て持成ければ、孔明申けるは、今日は暮に及べり、明日より第三の日に至ば、五百人の士卒を我舟の邊に遣して十萬の矢を運しめ玉へとて、数杯を飲で別ければ、諸將も悉く出去り。魯肅ひそかに周瑜に問て曰、孔明が云しこと詐にて候はずや。周瑜が曰、彼自ら命を送れり、吾私に云しにも有ず、諸人の前にて自ら三日と約を成り、彼兩の脇に翅を生ぜんは知ず、飛でも皈ることを得じ、我すでに巧匠に命じて矢を作るに用る物を皆滯らせて日限を相違せしむ、第三の日に至らば彼いかゞして身を遁るべき、餘に不審なるに御邊船中に行て彼が氣色を窺玉へ。魯肅乃ち孔明が船に行向ひ、内に入て坐定りければ、孔明申けるは、われ再三御邊を頼で必ず周瑜に告玉ふなと云しを、語り玉ひて今果して浩ることを引出し玉へり、三日の内に十萬の矢を作ずんば必ず軍法に行れん、願くは之を救玉へ。魯肅が曰、先生なに故に吾を恨玉ふぞ、初め周瑜が十日と云しを先生自ら三日と定玉へり、是好で得たる禍也、われ何ぞ救ことを得ん。孔明申けるは、御邊ねがはくは暫く二十艘の小舟を借玉へ、船ごとに士卒三十人をのせ、皆青き布の幕を張藁を束て四方に稠、この岸の邊に浮玉へ、我別に計あり、第三の日に至らば必ず十萬の矢を造り出さん、この事必ず周瑜に知せ玉ふな、若知せ玉ふ

れば、孔明申けるは、願くは某この事を知たると必ず周瑜に告玉ふな、若告玉はば又われを害するの心起らん。魯肅諾して本陣に回り、周瑜に逢て詳に語ければ、周瑜大に怒り、若孔明を生て置ば必ず我計を顯さん、吾早く心を決して殺べし。魯肅が曰、いま孔明を殺ば必ず曹操に笑るべし。周瑜が曰、われ私に殺すに有ず、公道を以て彼が心に怨なからしめ其後に殺べし。魯肅が曰、ねがはくは聞ん。周瑜が曰、今聞玉ふこと勿れ、明日これを見玉へとて、次の日諸の大將を悉く集めて孔明を招ければ、孔明欣然として出來る。周瑜が曰、われ一日も早く敵を破らんと欲す、大江の上の合戰なにを以てか曹操に勝ことを得ん、先生願くは計を教玉へ。孔明が曰、舟軍をするには弩を放に如べからず。周瑜喜て申けるは、先生の詞よくも我心に合へり、昔し周の太公望は自ら許多の武具を造れり、今わが軍中に矢少し不足なり、先生ねがはくは巧匠に命じて十萬の矢を造り玉へ、互に皆君の爲なれば必ず辭退あるべからず。孔明が曰、われ殊に矢を造の法を習へり、十萬の矢を造ること何より以ていと易し、日限を定て作出さん。周瑜が曰、十日の内に造ることを得んや。孔明が曰、いま敵境に臨でいつ戰はんも知がたし、十日と定玉はば事延引して大事を誤らん。周瑜が曰、先生いつか造出さん。孔明が曰、われ必三日の内に十萬の矢を造べし。周瑜が曰、軍中には戲言なし。孔明が曰、われ何ぞ戲れ

通俗三國志　巻之十九

○孔明計伏周瑜

曹操すでに蔡瑁、張允を殺したる由呉の國に聞えければ、周瑜大に喜び、我曹操を破んと思ふに、彼二人が舟手の都督たることを患ふ、今計を以て滅せり、曹操を伐こと掌にありと云ければ、魯肅が曰、都督の計此の如くなる上は曹操とても畏るに足ず。周瑜が曰、われ量に諸大將の内に此計を知もの有じ、只孔明は知こと有ん、御邊行て其氣色を探り玉へ。魯肅乃ち船中に到り、孔明に逢て坐定り、此間は軍務に暇なくして來り見ず、然るべき計あらば教玉へと云ければ、孔明が曰、某も周都督に喜を申さんと思へどもいまだ相逢ことを得ず。魯肅が曰、喜とは何ぞ。孔明が曰、周瑜いま御邊を以て某が知か知ぬかを探玉ふことを喜と申なり。魯肅色を失ひ、先生なにとて知玉ふぞと問ければ、孔明が曰、これ程の計は蔣幹を欺得て曹操は後に悟らん、我これを喜ぶ也、曹操いま毛玠、于禁を以て舟手の都督とす、此二人は曾て舟軍の法を知ず、却て自ら害を成ん。魯肅あきれて口を開こと能ず、暫く他事を語りて別け

曹操その後令を下して、毛玠、于禁を用て水軍の都督たらしめ、日夜に舟軍を調練す。

ゑ、斬て棄たりと云ければ、諸將みな痛く吁て惜けり。

を尋ること有んと思ひ、巳に五更の比に到て周瑜を呼ども能寢入て鼻息頻なりしかば、潜に帳中を出て綸巾を著し、童子を呼で足早に轅門の邊まで出ければ、番の者共推とゞめ、夜ふけて何へ行玉ふと問。蔣幹が曰、われ周都督と親き友なれども、久しく此に在ては事に妨あり、近き日に又來んと云ければ、番の者共しからば苦からずとて通しけり。蔣幹岸を廻て舟を尋ね、飛が如に江北に回て曹操に見ければ、曹操いかに事は成就せるかと問。蔣幹答て、某累に勸申せども、周瑜が心鐵石の如にして說がたしと云ければ、曹操怒て申けるは、事の濟ぬは是非も無、反て敵に笑れんこそ口惜けれ。蔣幹が曰、某周瑜を說得ずと云ども却て一大事を聞來れり、傍の人を退て申すべし。曹操近侍の人を退け何ごとぞと問ば、蔣幹右の趣を語て彼書簡を出す。曹操大に驚き開き見ていよ〳〵怒り、奴原かゝる企を成ば忽ち大なる禍を成ん、早く斬て棄んとて卽時に蔡瑁、張允を呼、いま兵を進ば如何んと問ければ、蔡瑁答て曰、舟手の勢調練いまだ熟せず、輕々しくは進がたし。曹操はたと睨で、兵よく熟せば我首を周瑜に送んかと云ければ、蔡瑁、張允その故を知ず、驚き慌て答ること能ず。曹操それ討と云ければ、武士共引出して了に二人の首を斬。須臾有て諸大將みな集り、何ゆゑに斬玉ふと問ければ、曹操心の內に初て悟り、此は敵の計ならん者をと思ひけれども敢て色には出さず、此もの法を背て慢しゆ

蔣幹大に愕き、この二人は舟手の總大將を承て御方八十三萬の兵を司る、今もし浩る逆心ある時は大なる禍なりと思ひ、其書簡を懷に入て立ける時、周瑜寢反しければ急に燈火を打滅、本の寢所へ行けるに、周瑜口の内に糊を含み、蔣子翼われ近き内に曹操が首を見せ申さんと云ければ、蔣幹勉て答をなす。やゝ有て子翼公しばらく此に留り玉へ、必ず曹操を殺して首を見せんと云ければ、蔣幹その故を問んとする時、周瑜睡入てもの云ず、蔣幹床の上に伏て已に四更の終に到りける時、忽ち一人外より來り、周都督醉は醒ぬかと呼ければ、周瑜夢打驚きたる體にて起あがり、此に寐たる者は何人ぞと問。その人答て、昨日故人の蔣幹と同じ床に寢玉ひしが、何ゆゑに問玉ふと云ければ、周瑜後悔して申けるは、われ此大事を承てより一滴の酒をも飮ざりしが、昨日少し醉て前後を忘れたり、汝我を呼は何の用ぞ。その人答て曰、江北より人來れり。周瑜急に叱り、聲を低せよと云て乃ち蔣幹を呼ければ、蔣幹寢入たる體にてもの云ず。周瑜忍やかに帳外に出ければ、蔣幹ひそかに之を聞に、誰とは知ず江北より來れる由にて、張允、蔡瑁も隨分隙を窺ひ候へども、急には中々なり難しと云ばかり聞えて、其後は言低して詳ならず。良有て周瑜又帳中に囘り、蔣幹を呼けれども寢入たる體して答ざりしかば、周瑜又帶を解て臥たりけり。蔣幹心の内に、周瑜は智惠深き者なれば、夜明て若この書

刀や錐の如し。周瑜又帳上に回り、再び酒宴を成て諸大將を集め、これ等は皆わが國の英傑なり、今日は是羣英の會、謠へや飲と云て已に半酣に及び、日も晩に薄ければ、燭を燃して晝の如く、周瑜自ら起て劍を拔て舞を成ば、滿座手を打て是を和す。其歌に曰、

大丈夫處レ世兮立二功名一、功名既立兮王業成、王業成兮四海淸、四海淸兮天下太平、天下太平兮吾將レ醉、吾將レ醉兮舞二霜鋒一。

謠ひ止で慷慨し、滿座こと〴〵く醉を盡せば、蔣幹一人その心碎る樣に覺ける。夜も深更に及て蔣幹酒に勝ずと辭しければ、周瑜その臂を執て申けるは、久しく御邊と同じ床に臥ず、今夜は足を交て眠るべし、此方へ來り玉へとて共に帳中に入、本より工たることなれば周瑜佯て大に醉たる眞似をなし、衣帶をも解こと能ず、嘔吐狼藉床の上に平臥せり。蔣幹は心悶て眠ること能ず。軍中に四更の鼓を擊を聞てひそかに起て外を見れば、殘燈なほ明に照して周瑜が鼾雷の如し。ひそかに起て其傍を窺見れば、卓の上に多の書簡あり。開て是を見るに皆陣中往來の書にして、內に蔡瑁、張允謹で封ずと書たるあり。怪み驚て開き見れば、その書に曰、

某等降レ操、非レ圖二仕祿一、皆勢迫耳。今已賺二北軍一、困二於寨中一、但得二其使一、卽將二曹賊之首一獻二于麾下一。早晚人到、便有二回報一。謹此敬覆、希冀照察。

坐す。蔣幹は之を聞て針の席に坐するが如し。周瑜が曰、われ兵を起してより以來一滴も酒を飲ず、然れども今親き故人に逢て心少しも疑こと無、ねがはくは共に醉て此比の欝氣を晴さんとて座上に酒肴を取連ね、諸の大將一人づつかはる〴〵起て己が才を耀し、舞謡て興を添ければ、周瑜笑ひ樂み、蔣幹が手を執て帳外に出、諸軍勢の華かに鎧て堂下に立雙んだるを見て、いかに我勢は壯なるに有ずやと云ければ、蔣幹が曰、虎狼の如き雄勢なり。周瑜又多の兵粮山の如なる處に到て、いかに我兵粮は澤山なるに有ずやと云ければ、蔣幹が曰、兵精く粮足り、御名の高も詐ならず。周瑜大に打笑ひ、又營中に入て鞍馬武具の夥しきを見せ、僞て醉たる眞似をして笑て申けるは、われ御邊と同窓に書を學し時、今日の如くに立身せんとは思はざりしに、幸にして此國に重く用らる。蔣幹申けるは、御邊の高才を以ては今これを過たりとせず。周瑜又蔣幹が手を取、大丈夫の士すでに知己の主に遇て、外君臣の義を守て内骨肉の恩を結び、諫を成ば必ず用られ計を施せば必ず從れ、禍福共に受て生死を同せんとす、假令古の蘇秦、張儀、陸賈、酈生が如き者が來て、詞懸河の如く舌利刀の如くなるも、安んぞ能わが心を動ことを得ん、況や今時章を尋ね句を摘腐れ儒者なんどが、一面の詞を以て等閑に我に說をや、我心は金鐵よりも堅しと云て大に笑ひければ、蔣幹はものをも云ず、その顏恰も土の色の如く心は

衣冠を正して從者數百人を引ゐ、皆錦衣花帽を著てさわやかに出立、遠く出てむかへければ、蔣幹は童子を引て昂然として内に入。周瑜從者を兩旁に列て自ら地上に拜しければ、蔣幹が曰、足下別て後恙なきか。周瑜答て曰、後邊はる〳〵江を渡て來り玉ふ、曹操が說客にては無か。蔣幹色を失ひ良ありて申けるは、足下と別て程遠し、近ごろ威を吳の國に振ひ玉ふと聞て昔を語ん爲に來りたり、何とて我を說客と宣ぞ。周瑜が曰、われ古の師曠が耳にあらねども、絃歌を聞ては雅意を知。蔣幹が曰、足下さほどに能人を見玉はば吾乃ち囘り去ん。周瑜笑て其臂を撫、われ御邊を畏るは曹操が說客たらんと思ふ故なり、已に其心あらずんば何ぞ速に囘し申んと云て、禮を施して上坐を讓り、諸の大將を呼て一々に對面せさせ、金銀の器を列て其光目に輝き、錦綉の袖を重ね霜の如なる武具を備て、堂上堂下に集る將士みな兩旁に立雙ぶ。周瑜酒宴を設て半酣に至りける時、軍中得勝と云樂を奏して諸大將に申けるは、これはわが同窓に書を學たる舊き友なり、江北より來り玉ふと云ども曹操が方の說客にあらず、皆心を定て疑ふこと勿れとて太史慈を呼出し、汝は暫く吾劍を帶せよ、今日は適ふるき友に出合たれば昔の好に酒を飲んと思ふ也、誰にても曹操と吾國との合戰のことを云もの有ば、この劍を以て立どころに斬て棄よと云ければ、太史慈劍を取て席上に

人ぞ。左右答て曰、荊州より降參の大將蔡瑁、張允二人なり。周瑜が曰、われ久く呉の國に居住して舟軍を諳じたるに、何ぞ料ん斯る奇妙の者あらんとは、我まづこの二人を殺さずんば曹操を破ること叶ふまじとて、共に酒を飲で窺ひ居ければ、番手の兵これを見付て急に本陣へ注進す。曹操これを聞て、汝等さわぐこと勿れ、密に舟を出して周瑜を擒にせよとて快舟を備ければ、周瑜その氣色を見て急に矴石を引擧させ、二十餘人の士卒に櫓を推せ飛が如に去ければ、曹操が勢水寨の外へ出る時已に十里あまりを隔て、追かくれども叶ず。空く歸て曹操に告ければ、曹操大に嘆き、昨日一陣を負て鋭氣を失ひ、今又陣中を見すかされて我なにを以てか呉を平げんと云ける時、忽ち一人すゝみ出て曰、某幼より周瑜と一處に書を學で親きこと兄弟の如し、願くは三寸の舌を動し、周瑜に利害を說て御方に降らしめ、共に玄徳を擒にせん。曹操喜で之を見れば、九江の人に蔣幹字は子翼とて、乃ち帳下の幕賓なり。曹操問て曰、御邊周瑜と交深きか。蔣幹が曰、御心を安んじ玉へ、某もし行ば事必ず功を成ん。曹操が曰、御邊なにをか攜ゆかん。蔣幹が曰、只童子一人僕二人を從へ、小舟に乘て到るべし。曹操大に喜び酒宴を爲て送りければ、蔣幹乃ち綸巾を戴き布の道服を被て一艘の小舟にのり、直に周瑜が陣に行て故人蔣幹來れりと報ず。周瑜これを聞てあざ笑ひ、曹操が方より說客來れり、汝等箇樣々々

曹兵
曹兵
曹兵
曹兵
蔡瑁
蔡璑
曹兵

甘寧
曹兵
韓當

手の勢久しく調練に怠て、其外北國の兵曾て舟に乘たること無れば動くことを得ず、呉の國の者共は幼より水中にそだち、舟に乘て平地の如し、今まづ水中に寨柵を構へ、北國の勢を中に置て荊州の勢を外に置、毎日調練して蒐引を教なば後熟して用ふべし。曹操が曰、汝二人は舟手の勢の大都督なり、宜からん事あらば我に問ずして料べし。蔡瑁、張允命を受て先二十四座の水門を構へ、大船を外に置て城郭とし、小船を内に置て往來の便を通じ、晩に至れば燈火を燒てその夥しきこと一天の星斗に異ならず、陸の陣には烟火絶ず、三百里に絡繹として兵粮を運ぶ車の響雷霆の轟に相似たり。この時周瑜は手合の軍に討勝て、曹操が大軍畏るゝに足ずとて其趣を呉主孫權に報じ、甘寧を第一の功とし韓當、蔣欽を其次とし、盡く恩賞あつて、その夜高に登て遙に望ば、西に當て火の光天地を耀す。周瑜怪んで左右に問て曰、これ如何なる光ぞ。答て曰、これ曹操が陣の燈火なり。周瑜大に驚き急に早舟一艘を用意し、今夜自ら行て曹操が陣屋の體を窺んとて、魯肅、黃蓋なんど云大將八人を伴ひ、皆强き弓を持弩を張てことごとく舟に取のり、兩旁に青布を幕とし、士卒二十餘人に櫓を推せ、樓上に鼓樂を奏して徐に曹操が水寨に近付、すでに夜半の比に至りければ矴石を下して心靜に陣屋の體を窺ひ、周瑜驚て申けるは、あな夥し凡夫の態に有ず、これ深く水軍の妙を得たり、舟手の都督は如何なる

進め、喚き叫で馳ければ、甘寧弓を挽て一矢に蔡瑻を水中に射落し、敵の大將を討取たり、事始よきぞ蒐れとて、自ら舟を驅て一陣に進み、弩をつるべ放ちければ、曹操が勢あわて躁ところに、左より韓當右より蔣欽二手に分れて攻かゝり、鐵砲を飛し石を投ること雨の降が如く、甘寧は勢に乘て敵の舟に飛うつり、後陣の備に斬て入。曹操が後備は皆北國の兵なれば舟軍を習ず、殊に大江の上に出て大浪に淘れ、目くれ魂消て働得ず、皆起擧ことだに叶ずして散々に亂しかば、甘寧三方の御方を招て平地の上を走が如く喊を造て攻かゝる。周瑜も又後陣の舟を下知して甘寧に力を添ければ、巳の刻より未の刻に到るまで曹操が勢死する者數を知ず這々に逃たりしかば、周瑜心の内に寡は衆に敵せず、長追は無用なりと思ひ、金を鳴して皆御方をぞ收めける。

○羣英會周瑜瞞蔣幹

この日の合戰に北國の勢數を知ず討れければ、曹操陸の陣に上て兵を整へ、蔡瑁、張允を責て申けるは、今日の戰ひ敵は小勢にて御方は大勢なるに、却て負たるは如何なる故ぞ、汝二人が心を用ざるに因て也、この度は且く免す、重ねて負ば必ず軍法を正べし。蔡瑁が曰、荊州の舟

ると云ければ、周瑜が曰、關羽は世の虎將なり、常に玄德が後を離れず、我もし手を下さば關羽必ず我を殺さん。魯肅怕れて舌を卷ところに、曹操が方より使ありとて書簡を出す。周瑜これを見るに皮を以て書簡を封じて、漢大丞相付ニ周都督一との表書なりければ、周瑜大に怒り使者を引出して散々に惡口し、了に書簡を開ずして微塵に掣やぶり、武士に命じて使者を斬と云ければ、魯肅諫て曰、古より兩國相爭に、來る使を斬ざる法なり。周瑜が曰、なんの法と云こと有ん、敵の使を斬は御方の威を顯なりとて了に首を討落し、其從者に與て追囘し、曹操これを聞ば必ず怒て兵を起さん、皆その用意をせよとて甘寧を先手とし、韓當を左備とし蔣欽を右備とし、盡く手分を定て夜の四更に兵粮を使ひ五更に船を出し、鐵砲弩を用意し大石を集て待かけたり。曹操は周瑜使を斬て書簡を引裂たりと聞しかば、以の外に怒りて急に水軍の大都督蔡瑁、張允を呼よせ、明日推よせて先周瑜を破り、其のち吳を攻んとて荆州降參の大將を先手とし、自ら大軍を以て後陣に備へ、四更に兵粮を使ひ五更に舟を出して三江へ推よする。時に建安十三年十一月朔日、風靜に浪平なりければ、寄手の舟三江に攻よせ、大鼓を撃て喊を造る。時に吳の舟に大なる旗を建て、一人の大將船の頭に躍り出て大音あげ、我は是甘寧なり、近付て手柄の程を見よやとぞ呼はりたる。蔡瑁これを見て大に怒り、弟蔡壎を呼で眞先に

笑て曰、曹操が大將多く勢多きも我なんぞ怕るゝに足ん、我勢三萬人を以て敵の大軍を破ること、試に御覽候へ、朽木を摧が如ならん。玄德これを謝し玉ふ所に、魯肅つと來りけり。玄德の曰、ねがはくは孔明を呼玉へ。周瑜が曰、只曹操を破て後に孔明に對面し玉ふべし。玄德尤と謝し玉へば、關羽きと目合せす。玄德その意を省り周瑜に向て申されけるは、われ先今日は相別れ、敵を破り功を遂て後偏に御賀を申べしとて歸玉へば、周瑜も强て留ず轅門の邊まで送りけり。玄德岸の邊に出玉へば、孔明きたり見て今日の危かりしを知玉ふかと問ふに、玄德の曰、いかなることぞ、我さらに知ず。孔明が曰、今日もし關羽無んば必ず周瑜が難に遭玉ふべし。玄德始て心驚き、先生は如何し玉ふぞと問玉へば、孔明が曰、某いま虎口の危に處と云どもその安きこと泰山の如し、君早く御回有て兵を揃て待玉へ、來る十一月二十日は正しく甲子に當る、其日大將趙雲を小舟に駕て南の岸に來て某を待しめ玉へ、必ずこれを悞玉ふな。その意を問玉へば、孔明が曰、但東南の風吹起る時某必ず回るべし、君早く御歸あるべしとて別ければ、玄德急ぎ船を開て已に三里ばかり出玉ふ所に、向より五六十艘の早舟飛が如に馳きたる。玄德大に驚き、起擧て見玉へば張飛なり。若失あらんことを心元なく存じ、御迎に出たりと云て共に樊口へ回りけり。この時魯肅は密に周瑜に問て、今日なにとて玄德を殺し玉はざ

の者共周瑜が中軍に報じければ、周瑜問て曰、相從ふ舟いか程かある。答て曰、只一艘の小舟に從ふ者二十人ばかり也。周瑜笑て曰、事已に掌の中にありとて遠く出て迎ければ、玄德二十餘人を從へ直ちに中軍に入玉ふ。周瑜請じて帳中に入禮を施して上座を讓りければ、玄德の曰、將軍の名天下に傳て眞に世の俊傑なり、某は區々の不才、いかでか重禮を煩さんとて賓主を分て坐し玉へば、周瑜酒宴を設て之を持なす。この時しも孔明は偶江の邊に出て玄德來り玉ふと云沙汰を聞、大に驚て急に周瑜が陣に行て門前にて魯肅に逢、共に帳外に立てひそかに座中の氣色を窺へば、周瑜が面に殺氣ありて兩旁の壁に幕を引、中に曲者ありげに見えければ、扨は我君の大事この時に在と心驚て玄德の體を見れば、心なげに物がたりして背に關羽劍を執て侍立せり。孔明すこし心を安んじ、周瑜本より關羽を怕るゝなればよも敢て手を下さじと思ひ、遂に內へは入ずして又江邊にぞ出たりける。周瑜は酒宴半に至て屹と玄德を見るに、關羽劍を取て背に立ければ、問て申けるは、彼は如何なる人にて候ぞ。玄德の曰、關羽字は雲長とて某が弟なり。周瑜が曰、往日顏良、文醜を斬たる人か。玄德の曰、是なり。周瑜頻に汗を流して又數杯を飲ければ、玄德問て曰、將軍いま曹操を破るに兵の數いか程か集玉へる。周瑜答て曰、只三萬なり。玄德の曰、恨らくは寡し、安んぞ曹操が八十三萬の勢に敵すべき。周瑜

せんと願ども、これ程の大役を承はりては暫もこゝを離がたし、若玄德駕を枉て此に來り玉はば、我よろこび之に過たること有じ、共に計を定めて曹操を討んと云ければ、糜竺拜辭して回りけり。魯肅ひそかに周瑜に問て申けるは、いま玄德を招玉ふは如何なる故ぞ。周瑜が曰、玄德は世の梟雄なり、今もし殺さずんば後必ず大なる害を成ん、これ我私に殺すに有ず、偏に君の御爲を思ふゆゑ也。魯肅甚だ無用とて强て諫れども周瑜つひに聽ず。密に計を授て、玄德もし來りなば先力の强き兵五十人を幕の陰に伏おき、我杯を擲て叫時一度に出て殺せとて、今や來ると待かけたり。糜竺は已に樊口に回り、玄德に見て周瑜が招よしを語りければ、玄德一艘の快舟を備て卽時に出んとし玉ふを、關羽いさめて申けるは、周瑜は僞の計多き者なり、殊に孔明よりの書簡も來らず、必ず是周瑜が計ならん。玄德の曰、われ今呉と好を結で共に曹操を破らんとす、此に因て我を招て計を議せんとするに、吾疑て行ずんば同盟の意に背く、若互に疑はば如何んぞ能事を成ん。關羽が曰、もし必ず行玉はば某も從はん。張飛が曰、我等をも召つれ玉へ。玄德の曰、われ關羽を作ひ行ん、張飛は趙雲とこの陣をよく〳〵守れ、簡雍は鄂縣を堅よとて、關羽と共に從者二十餘人を引て小舟にのり、流に棹さして程なく周瑜が陣に到り、多の兵船を揃へ武具を調へて陣取の體十分に法あるを見て、玄德心の中大に喜ぶ。番

玄徳関羽を将て
周瑜が陣に赴く

せらるべし、只よろしく舟軍をして北國勢の鋭氣を挫ぎ、別に良計を以て攻やぶるべし、足下ねがはくは周瑜の怒を止させ、聚鐵山に向ことを諫玉へと云ければ、魯肅回て周瑜に語るに、周瑜足をそばだてゝ曰、孔明が才智われに勝れり、今日死さずんば後必ず害を成んとて計を案じ居たり。此時玄德は劉琦に江夏の城を守らせ、自ら手勢を引て夏口に出、遙に江南を望玉へば夥しく陣屋を連ね、色々の旗幟風に飜て見えたりければ、扨は吳の國にも兵を起すよと心の内大に喜び、樊口と云ところに陣を取、高き所へ人をのぼせて見せ玉ふに、其人回り來り、南の岸はこと〴〵く吳の國の陣なり、北の岸に夥しく烟の見え候は、皆これ曹操が北國の勢なりと申す。玄德もろ〳〵の大將を集め、孔明吳に行て杳に音信を聞ず、誰か行て虛實を窺はんと云玉へば、糜竺が曰、某ねがはくは行ん。玄德乃ち羊酒禮物を調へ、汝よく機を見て變に應ぜよと宣へば、糜竺乃ち小舟にのり、流に順て直に周瑜が陣に到りけり。番の者共其名を問て周瑜に報じ、玄德いま糜竺を使として禮物を送り來れりと告ければ、周瑜まねき入て對面す。糜竺再拜して禮物を捧げ玄德の意を述ければ、周瑜喜であつく持成。糜竺が曰、孔明こゝに來て共に好を結び、力を併せて曹操をやぶる、孔明いま何にか居候やらん、願くは對面せん。周瑜が曰、いま此の如に兵を揃て曹操を破らんと欲す、われ自ら行て玄德に對面し一大事を議

了に行てその氣色を見れば、孔明すこしも怕るゝ色なく用意して出んとす。魯肅怺かね詞を以て探て曰、先生この度の發向必ず功を成んと思玉ふか。孔明笑て曰、われ水上の戰ひ、馬上の戰ひ、車の戰ひ、歩卒の戰ひ、盡く其妙を極ずと云こと無、なんぞ功の成ざるを患とせん、吳の國に足下と周瑜と二人わづかに一つの能あるが比に有ず。魯肅が曰、われと周瑜と一つの能と宣は如何なることぞ。孔明笑て曰、われ聞、吳の國の小兒共が云はやらせ、陸の關を守は魯肅一人、水に浮で戰は周瑜なりと、御邊は陸の戰を知て其餘を知ず、周瑜は舟軍を知て其餘を知ず、安んぞ我に及ん、今われを聚鐵山に向はしむるは、周瑜陸路の戰を知ざるゆゑなり。魯肅回て周瑜に斯と告ければ、周瑜大に怒て曰、孔明なにとて我を欺く、我を陸路に進で戰ふことと能ずと云ば、われ今自ら一萬餘騎を引て聚鐵山に推よせ、曹操が兵粮を燒て、知か知ぬかを見すべしとて、已に用意をしたりければ、魯肅又行て孔明に語る。孔明笑て曰、周瑜われを聚鐵山に向はしめんとするは、曹操が手を借て我を殺ん計也、われ適に假初に戲を云しを、周瑜又いかりて自ら向んと云は何ごとぞ、只今孫將軍わが劉豫州と共に心を合せ玉はば、事必ず調ん、若互に害心あらば如何して曹操を滅さん、曹操は計きはめて多く、殊に人の兵粮を斷ことを得ものとせり、如何んぞ我兵粮に油斷あらん、周瑜みだりに馳向ひ玉はば必ずみな生取に

周瑜諸大將を中軍にあつめ、使を以て孔明を招く。孔明は岸の邊に小舟を繋で居たりしが、使と共に中軍に入、すでに座に直りければ、周瑜問て申けるは、昔曹操は勢少く袁紹は勢多し、二人白馬官渡に支て合戰のありし時、曹操いかなる計を以て袁紹を破りたる、先生は深く兵法を明め玉ふ、必ずその詳なるを知玉はん、願くは敎玉へ。孔明心の内に又これ我を害するの計なるべしと思ひければ、乃ち答て曰、某が聞しは曹操よく許攸が謀を用て、袁紹が烏巢の兵粮を燒盡したるに因て只一戰に功を成り。周瑜喜て申けるは、先生の詞きはめて好、曹操いま八十三萬の兵あり、我勢は纔に三萬なり、何を以てか敵することを得ん、必ず曹操が兵粮運送の路を塞ぎ、其後計を以て攻やぶらん、われ人を出して聞しむるに、曹操が兵粮は盡く聚鐵山にあり、先生もとより荆州に住玉ひて能その邊の地理を知玉はん、共に君の爲の事なれば先生ねがはくは關羽、張飛等を率て夜中に聚鐵山に忍び入、曹操が兵粮を燒玉へ、我も千餘騎の勢を以て援べし、必ず辭退し玉ふな。孔明心得たりとて欣然として回りければ、諸大將も盡退出す。魯肅ひそかに周瑜に問て曰、今なにゆゑに孔明を指向玉ふぞ。周瑜が曰、われ孔明を殺んと欲すれども、罪なき賢人を殺せりとて天下の人に笑はれんことを怕る、このゆゑに曹操が手を借て孔明を殺させ、後日の患を除ん爲なり。魯肅心の内に孔明が體を窺はんと思ひ、

ありヽ兄もし此を去て我と共に江北に歸り、朝夕拜掃して祭を成玉はば是孝を盡なり、この忠孝を全して某と共に孤弱なる劉豫州を助け、逆臣を誅して再び漢の天下を興玉はば、是又義を全うする也、いま兄呉に事て忠孝の二つを重しとせず、徒某に兄と一處に來て義を全せよと宣には、某えこそ從ふまじ、ねがはくは能察し玉へと答しかば、諸葛瑾心の內に、我弟を招き諭さんとて來りしが、我却て弟に說れたりと思ひ、了に一言の返答にも及ず、相別て周瑜が陣に行右の事を語りければ、周瑜申けるは、御邊孔明が言に從て江北に回るの心ありや。諸葛瑾が曰、われ君の厚恩を受て安んぞ之を忘ん。周瑜が曰、御邊すでに忠義の心あり、我なんの疑ふことか有ん、我別に孔明を伏するの計ありと云ければ、諸葛瑾相わかれて出にけり。

○周瑜三江戰曹操

周瑜は轉孔明を恨み、汝いか程辯舌を振とも、了には殺さんものをと思ひ、孫權に暇を乞て後程普、魯肅と孔明を迎ければ、孔明欣然として從ひ來り、一同に舟に乘帆を揚て夏口の方に進み、三江を離るゝこと五六十里にして、多の舟共次第を守て水寨を備へ、周瑜は中央に在て屯を張、陸は西山と云所に依て陣屋を連ること五十里に餘れり。手分陣取こと〴〵く定りければ、

ん、ねがはくは勞を倦ず早く行て諭し玉へ。諸葛瑾が曰、某この國に事て久しく君の恩を蒙り尺寸の功をも成ず、都督いま君に忠を盡さんとて此ことを命じ玉ふ、某なんぞ辭すべけんやとて、即時に馬に打のり客屋に行て對面せんと報じければ、孔明迎へ入て拜哭し、共に疎遠の情を訴へ、座すでに定りければ、諸葛瑾泣て申けるは、孔明は古の伯夷、叔齊がことを知たるか。孔明この一言を聞て怪く思ひ、これ必ず周瑜が計なるべしと曉りければ、乃ち答て曰、二人は古の賢人とこそ聞及んで候へ。諸葛瑾が曰、二人位を讓て共に國を逃れ、後周の武王を諫て從ざりしかば、首陽山に隱て周の粟を食ず、了に餓死して名を遺せり、活る時も兄弟一處ににあり、死する時も一處にあり、今思ふに御邊と我と同胞骨肉の兄弟にして二人別にその主に事へ、年を經れども逢こと能ず、伯夷、叔齊が志を視て恥ずんば有べからず。孔明が曰、兄の宣ふ所は義なり、義と忠と孝と三の内いづれをか重とし玉ふ。諸葛瑾が曰、人は君に忠を盡し親に孝を盡を以て本とす、義も亦之を缺べからず。孔明が曰、某ねがはくは兄の御身に忠を全うし孝を盡し義を守玉ふの道を教ん。諸葛瑾が曰、いかなることぞ。孔明が曰、某と兄とは皆これ漢朝の人也、いま我君劉豫州は中山靖王の後、漢の景帝の玄孫、天下みな之を知、兄もし吳を棄て我劉豫州に事玉ふ時は、此忠を全するならん、我等兄弟が父母の墓は皆江より北に

打立て江邊の陣屋に赴き、中軍に入て高座に就ければ、左右護衛の兵武具を擕て相集り、文武の大將こと〴〵く出て下知を聞。副都督程普は國中故老の大將なる上、年も又周瑜に超しかば、其下に立んことを心に恥て、此日は虚病して嫡子程咨を代に出しけり。周瑜令を傳て曰、王法に親なし、諸將よく其職を守玉へ、今曹操權を執て罪の甚しきこと董卓に超、天子を許昌に囚て暴兵を我國に馳、われ今君の命を受て民を訪ひ罪を討、功あるを賞し罪あるを罰して親疎の阻を云ず、先韓當、黄蓋を先鋒とす、大小の兵船五百艘をそろへ、只今三江の岸に行て陣屋を造るべし、蔣欽、周泰を第二の備とし、凌統、潘璋を第三とし、太史慈、呂蒙を第四とし、陸遜、董襲を第五とし、呂範、朱治を四方の巡警使とす、水陸共に進み期を定めて齊く出合べしと云ければ、諸の大將われ先にと出起、みな江邊へ出にけり。程咨は家に回て父程普に今日の手分など語りければ、程普驚て申けるは、われ素より周瑜は懦弱にして大將とするに足ずと思しが、今日の下知まことに大將軍の才に備はれり、我年長じたればとて何ぞ彼に服せざるべきとて、遂に自ら出て其罪を謝す。周瑜は密に諸葛瑾を呼で申けるは、御邊の弟孔明は眞に王佐の奇才なるが、惜らくは身を屈て玄德に事ふ、今幸にこの地に來れり、御邊自ら行て彼に諭し、今より玄德を棄て長く此國に住め、御邊と共に君を助て兄弟一處に居玉はば、是大なる慶なら

へる勢は、何百萬ありとも畏るに足ず、某五萬の精兵を率して立どころに打破らん、君必ず疑ひ玉ふこと勿れ。孫權大に喜び周瑜が臂を撫て申けるは、汝が云ところ盡く我心に合へり、張昭等計なく各妻子を顧て皆私の心を懷く、只汝と魯肅と忠誠を盡して戰はんと云、これ天汝二人を以て我を助玉ふ也、われ已に三萬の精兵を擇び、兵粮武具船筏等までこと〴〵く用意せり、汝魯肅、程普と先手に進め、われ自ら大軍を引て跡に續ん、若先陣に進で心に合はざること有ば、乃ちわが旗下の勢と一處に集れ、我自ら曹操と共に勝負を決すべし、事すでに此の如し、汝早く先手に進め、われ少しも疑ふこと無と云ければ、周瑜拜謝して退きけるが、心の内に驚て、扨も孔明はよくも君の心根を料り知れり、云しこと一つも違ず、又我より一等上の才智なり、後には却てこの國の禍とならん、不如いま孔明を殺して後日の患を免れんと思ひければ、急に使を馳て魯肅を招き、ひそかに孔明を殺んと云ければ、魯肅が曰、甚だ以て無用なり、今曹操いまだ破ざるに、先賢人を殺しなば萬人のもの笑と成ん、是大丈夫の爲ところに有ず。周瑜が曰、もし孔明を生て置ば、後必ず玄德を助て我國の禍を成ん。魯肅が曰、われ一つの計あり、孔明は諸葛瑾が弟なれば、彼に命じて孔明をこの國の者となし、共に御方に用ひなば是に過たる大慶あらじ。周瑜が曰、これ眞に究竟のことなり、我必ず從はんとて、次の日早天に

贊軍校尉とし、若下知を背もの有ばこの劒を以て誅せよと云ければ、周瑜劒を受取諸大將に向て申けるは、われ君の命を受、兵を起して曹操を破る、明日みな江の邊に出よ手分を定めん、早々に來て我下知を聞べし、もし違背ある輩は、七禁令五十四斬、必ず軍法を正すべしとて、孫權を辭して座を起ければ、諸の大將みな言なくして退出す。周瑜は家に回て孔明を招き寄、今日の評議合戰に事決れり、先生ねがはくは良計を示し玉へと云ければ、孔明が曰、われ量に孫將軍の御心なほいまだ穩ならじ、然る時は計を決しがたし。周瑜が曰、穩ならずとは如何なる故ぞ。孔明が曰、孫將軍もとより寡は不レ敵レ衆と云の意あり、足下再び行て軍數を說示し、孫將軍の心に疑ふこと無穩ならしめば、事必ず成就せん、周瑜げにもとて又府堂に入て孫權に見ければ、孫權問て曰、都督夜中に來るは必ず事の故あらん。周瑜が曰、明日は兵を調て已に合戰の色を露す、君の御心いよ〱決し候か。孫權が曰、只曹操が兵多ゆゑ、寡は不レ能レ敵レ衆、この外に疑ふこと無。周瑜笑て曰、某いま來りしは偏に其御疑を晴さん爲なり、君すでに曹操が送れる檄文を見玉ひ、大兵百萬と云を誠と思し召て、其虛實を料ず畏れ玉ふ、某いま其實を較に、彼が中國の勢十五六萬に過ず、皆こと〲く疲れ苦む、近ごろ袁紹を滅して其勢七八萬を聚と云ども、是みな已ことを得ずして心ならず彼に從ふ、夫疲れたる兵疑

君は神武雄才兼備て、父兄の業に仗東呉六郡の地を保ち、兵精く粮足り、英雄雲の如に集て忠を盡んことを思ふ、宜く天下に横行して民の害を除き、國の逆賊を平玉ふべし、況んや曹操自ら來て頭を斬れんことを願ふ、爭か身を屈めて降參すべき、今某よく籌るに、北國いまだ平ならず、馬超、韓遂虚に乘て曹操が後の患をなす一つ也、曹操が勢多しと云ども、北國そだちの者は馬の上にてこそ口をきけ、舟に乘ては動こと能ず、曹操いま馬上を止て兵船を揃へ、我國と爭はんとす二つ也、今冬の末に迫て寒氣甚しく、馬に飼べき草も無三也、中國の士卒を引て遠く海邊に陣を取、水土に服せず皆病を生ずべし四なり、この四の者は合戰の大なる忌なるに、曹操みな之を犯す、君曹操を生どり玉ふの計必ず今日の上にあり、某ねがはくは數萬の精兵を卒ゐ、進で夏口に出て君の爲に敵を破らん。孫權大に喜て曰、曹賊つねに漢の天下を奪はんとす、この故に袁紹、呂布、劉表と我とを怕る、今大半滅されて唯われ一人なほ殘れり、我誓て雌雄を決せんとす、汝幸に戰はんと云、此天の祐なり、甚だ我心に合へり。周瑜が曰、某君の爲に身を捨曹賊を破らんと欲す、只君の御心に疑有て決せざることを怕る。孫權佩たる劍を拔前なる案を砍て申けるは、汝等諸の大將及び官吏、かさねて曹操に降んと云ものは此案と同じからんとて、其劍を周瑜に授け、即時に封じて大都督とし、程普を副都督とし、魯肅を

成ければ、孫權申けるは、汝鄱陽湖に在て舟手の勢を調練し、久しく神思を勞すべし。周瑜が曰、君自ら國の政を掌玉ふ、某が如きは云に足ず。孫權乃ち座を賜ければ、周瑜問て曰、近ごろ曹操大軍を江漢に屯して檄文を送れりと承はりしが、君いかゞ議し玉へる。孫權乃ち曹操が檄文を見せければ、周瑜見了て一度は笑ひ、復怒申けるは、逆賊曹操この國に無人と思うて此の如く侮るか。孫權が曰、汝が意いかん。周瑜が曰、君すでに諸大將と議論し玉へるか。孫權が曰、われ累に此事を評定すれば、降參を勸むる者もあり合戰を勸る者もあり、紛々として一決せず、汝が來を待て定んとす。周瑜が曰、誰か降參を勸候ぞ。孫權が曰、張昭等みな降參せよと勸む。周瑜乃ち張昭に問て曰、御邊いかなる故に降參を好玉ふぞ、願くはその意を聞ん。張昭答て曰、曹操は猛き虎の如し、天子の勅命と號して四方を征伐す、近ごろ荊州を得てその威勢いよ〱大なり、我國の曹操を拒べきものは大江の險阻なり、曹操いま荊州の水軍を併て兵船の數勝て計へがたし、水陸二手に分れて攻きたる、何を以てか敵することを得ん、某が愚意を以て計に降參せんに如べからず。周瑜が曰、これ眞に御邊に應じたる迂儒の見なり、夫わが國の基は破虜將軍より創て今すでに三世を經たり、安んぞ一旦に廢べけん。孫權が曰、しかる時は汝いかゞ計を用ん。周瑜答て曰、曹操いま漢の丞相と云ども實は漢の逆賊なり、

瑜が曰、民間の女とは申ながら、大喬は是先君討虜將軍の夫人、小喬は乃ち某が今の妻なり。孔明大に愕て曰、惶恐々々われ曾て之を知ず、妄に悞て舌を動す、死罪々々。周瑜が曰、われ誓て曹操を打破らん。孔明が曰、古より事は三たびよく思ふと云へり、後に必ず悔み玉ふな。周瑜齒を切て曰、われ先君の遺言を受て、安んぞ身を屈て曹操に降らん、適に降參の事を云しは我本心を顯に云ず、諸人の所存を釣ん爲なり、吾鄱陽湖を出てより曹操を滅さんことを思ふ、刀頭に臨とも誓て心を改めじ、願くは孔明も一臂の力を助玉へ、共に曹賊を退治すべし。孔明が曰、足下棄玉はずんば某も犬馬の勞を致すべし。周瑜怒なほ休ず、明日府中に入て君を勸め、卽時に兵を起べしと云ければ、孔明は魯肅を伴ひ客屋へぞ囘りける。

○周瑜定レ計破ニ曹操一

次の日曉天に吳主孫權堂に出て事を評議す。左には文官張昭、顧雍、張紘、步騭、諸葛瑾、虞飜、龐統、陳武、丁奉等を先として三十餘人、右には武官程普、黃蓋、韓當、周泰、蔣欽、呂蒙、潘璋、陸遜等を初として三十餘人、衣冠を正し劍珮を整て兩邊に侍立せり。孫權乃ち周瑜を召と云ければ、少時有て魯肅内に入、周都督きたれりと報ず。時に周瑜すゝみ出謹んで禮を

これに命じて銅雀臺の賦を造らせけるが、其賦の中に單に帝王と爲ば必ず二喬を娶らんと云ことを記せり。周瑜が曰、先生その賦を忘玉はずや。孔明が曰、われ文章の華やかなるを愛して今に一字をも忘候はず。周瑜が曰、ねがはくは聞ん。孔明乃ち銅雀臺の賦を誦で曰、

從明后而嬉遊兮、登層臺以娛情。見太府之廣開兮、觀聖德之所營。建高門之嵯峨兮、浮雙闕乎太淸。立中天之華觀兮、連飛閣乎西城。臨漳水之長流兮、望園果之滋榮。列雙臺於左右兮、有玉龍與金鳳。挾二喬於東南兮、若長空之蝃蝀。俯皇都之宏麗兮、瞰雲霞之浮動。欣羣材之來萃兮、協飛熊之吉夢。仰春風之和穆兮、聽百鳥之悲鳴。雲天坦其既立兮、家願得乎雙逞。揚仁化於宇宙兮、盡肅恭於上京。惟桓文之爲盛兮、豈足方乎聖明。休矣美矣、惠澤遠揚。翼佐我皇家兮、寧彼四方同。天地之規量兮、齊日月之輝光。永貴尊而無窮兮、等君壽於東皇。御龍旗以遨遊兮、迴鸞駕而周彰。恩化及乎海宇兮、嘉物阜而民康。願斯臺之永固兮、樂終古而未央。

周瑜これを聞て座より起て躍り擧り、北を指て大に怒り、逆賊曹操われを欺こと甚過たりと罵ければ、孔明急に起て止て曰、昔し匈奴中國を犯しければ、漢の天子御女を以て胡に妻せ和親を成て戰を休玉ひ、元帝は王昭君を送り玉へり、今なにゆゑに民間の女を惜み玉ふぞ。周

降しめ、萬代の笑を取せん爲か。孔明が曰、われ一つの計あり、曹操に禮物を送り國を獻ることをも用ひず、只一艘の小舟を以て二人の者を送り玉はゞ、曹操喜で百萬の勢こと〴〵く北に囘ん、然る時は刀に血を塗こと無して國自ら安かるべし。周瑜問て曰、二人とは如何なることぞ。孔明が曰、この國より二人の者を出すことは、譬ば大木の枝より二葉を落し、百千の倉の内より二粒の米を減ずるが如し、浩る些少の物なれども曹操が願を塞ぐ。周瑜又問て曰、二人とは何ものぞ、早々に云玉へ。孔明が曰、われ隆中に居し時、北國の人來て曹操がことを物がたりしけるが、曹操ちかごろ漳河の邊に臺を築て、之を銅雀臺と名づけ、千日に造營を畢れり、常に酒を好み色に溺て甚だ美女を愛す、久しく吳の國に喬公と云人二人の女を持、姉を大喬と云妹を小喬と云、共に沈魚落雁の容、閉月羞花の貌ある由を聞て、曹操常に誓を成、われ一つの願は天下を得て帝王たらん、二つには吳の國の二喬を得てこの銅雀臺の上に置、老後の樂を成ならば死すと云とも恨なけんと云り、今百萬の勢を引て虎の如に威を張と云ども、實はこの二人の女を得ん爲なり、足下早く喬公を尋ね、千金を以て二人の女を買求て曹操が方に送り玉はゞ、百萬の勢戰はずして囘るべし、此乃ち范蠡が西施を送て夫差を滅せる計なり。周瑜が曰、いかに其は正き証據候か。孔明が曰、曹操が第二の子曹子建と云もの能文を作る、曹操

り剏て今すでに三世を經たり、安んぞ一旦に廢すべき、孫策世を辭し玉ひて足下に後の事を賴置、國家を保て失はしむること勿と云玉ひしに、今なにとて懦弱なる心を興して降參せんと宣ふぞ。周瑜が曰、この國の百姓もし兵亂の苦を受ば我一人を怨べし、この故に降んと欲す。魯肅が曰、しからず、夫足下の英雄を以て長江の險阻に防ば、曹操いかでか我國を侵べき。孔明は獨ものをも云ず、二人の爭を見て手を袖に入、あざ笑て坐したりければ、周瑜問て曰、先生なに故に笑玉ふぞ。孔明いと徐に答て申けるは、われ別に笑ことなし、只魯肅の時務を知玉はぬを笑ふなり。魯肅又驚て申けるは、先生なにを以て時務を知ずと宣ぞ。孔明が曰、周瑜の本心曹操に降んと云玉ふは、是正に理に當れり。周瑜が曰、孔明は時務を知人なり、よく我心を察し玉はん。魯肅色を變じて曰、孔明なにとて浩る事を云玉へる。孔明が曰、曹操が兵を用ること孫子吳子にも勝るべし、天下たれか敵することを得ん、能敵する者は眞に世の英雄なり、昔呂布、袁紹、劉表は共に曹操に敵すと云ども、今こと〴〵く滅されて天下又人なし、只わが君劉豫州は時の務を知ずして強て曹操と衡を爭ひ、今孤身にして江夏に籠る、存亡いまだ知べからず、今この國の大將降參を願ふ人は、皆是妻子を養ひ長く富貴を受んことをのみ心に掛て、國の滅るは天命に任す、何ぞさのみ惜に足ん。魯肅大に怒て曰、汝わが君に膝を屈めて逆賊に

周瑜

孔明

多の文官出來れり。周瑜迎て共に禮了りければ、諸葛瑾が曰、某が弟諸葛孔明江夏より此國に來り、立德の意を述て共に好を結び、曹操を破んと云、御方の諸將評議更に決せず、是某が弟の事なれば某は多言に事を商議せず、足下よろしく料ひ玉へ。周瑜が曰、御邊の孔明と兄弟たるは是家の私なり、今すでに吳に事玉ふ、公道を以てこれを論ぜば、君の御爲いかゞして好らんと思玉ふぞ。諸葛瑾が曰、某が意を以て論ぜば降參することは安く合戰は危し。周瑜笑て曰、われ宜く計を成ん、明日君に見て一決すべし。諸葛瑾等囘ければ、又報じて曰、呂蒙、甘寧等その外諸將多くきたり見ゆ。周瑜迎入て其志を問に、戰んと云もあり、降んと云ものもあり、互に爭て已ざりければ、周瑜が曰、いま此ところの議論は無用なり、明日君の御前にて議すべし、先御囘り有べしとて相わかれ、自ら冷笑て燭を燃させければ、忽ち魯肅來り、孔明いま門外に在と云ふ。周瑜中門に出迎へ請じて客位に就しめ、禮すでに了ければ、魯肅まづ問て曰、今曹操大軍を引て我國を侵んとす、君疑て心決せず、將軍を招て議せんとし玉ふ、將軍の心いかん。周瑜が曰、曹操いま兵を起し勅命と號して四方を伐、その鋒を爭もの一人として亡ざるはなし、されば我國も戰ふ時は破やすく降る時は保ちやすし、吾すでに心を決せり、明日君に見ば降參を勸べし。魯肅大に驚て曰、これは何ごとをば云玉ふぞ、吳の國の基は破虜將軍よ

事を怕れ、わが國の力を借て共に日ごろの恨を報ぜんとす、此ゆゑに詞を巧にして我君を激し已に合戰に事決り、魯肅一人心迷て一國の民を苦めんとす、此に因て御邊を招て彌事を決せんとし玉ふ、明日君に對面あらば一言を以て降參を勸め、萬人の苦を救玉へ。周瑜が曰、いま四人の心みな同きか。顧雍が曰、われ等が議する所みな同じ。周瑜が曰、われも常に曹操に降んとす、明日君に見て事を定めん。張昭等大に喜で回りければ、暫ありて程普、黄蓋、韓當等を初として武將多くきたり見ゆ。周瑜むかへ入て禮を施しければ、程普申けるは、足下この國の近き内に他人に屬するを知玉ふか。周瑜が曰、いまだ知ず。程普が曰、われ等破虜將軍に從てこの國を開てより、偏に一命を君に捧げ、禍亂を平定して數百度の戰を經、全體は續きたる所も無瘡を被て纔に六郡を保つ所に、今君諸の文官が言を聽納て曹操に降んとし玉ふ、此萬代の恥に有ずや、吾等たとひ身を寸々にせらるとも誓てこの恥を被らじ、偏に足下の決斷を待、われ等ねがはくは命を棄て曹操を破るべし。周瑜が曰、この座の人々みな合戰を願玉ふか。黄蓋すゝみ出手を以て其額を擧て申けるは、この首は落るとも誓て曹操に降るまじ。其餘の大將も降ず〳〵と答ければ、周瑜が曰、われ元より曹操を破んと欲す、安ぞ降參すべき、諸將まづ御回候へ、明日事を決すべし。程普等こと〴〵く回りければ、又諸葛瑾、闞澤、呂範、朱治數

通俗三國志　卷之十八

○孔明智說二周瑜一

この時周瑜は鄱陽湖に在て舟手の勢を調練しけるが、曹操大軍を引て江漢に陣を取たりと聞しかば、夜を日に繼で馳かへり、舟すでに岸の邊に著ける所に、孫權命ありとて使きたれり。周瑜使と共に柴桑に到りければ、魯肅兼て交厚かりしゆゑ、急に來て右の事共つまびらかに語る。周瑜が曰、御邊すこしも患ひ玉ふな、我胸中に計あり、急ぎ行て孔明をこの所へ伴ひ來り玉へ、相共に事を議せん。魯肅欣然として馬にのり客屋を指て出ければ、周瑜少し休まんとする所に、張昭、顧雍、張紘、步隲四人來れりと報ず。周瑜自ら出迎へ、互に禮了て坐定りければ、張昭が曰、御邊わが國の利害を知玉ふか。周瑜が曰、いまだ知ず。張昭が曰、曹操百萬の勢を引て漢水に陣を張、この北檄文を送てわが君と吳に獵せんと云、すでに國を呑んとするの意あれども、いまだ曾て其色を顯さず、吾等しきりに降參を勸て民の苦を免れんとすれば、魯肅江夏に行て玄德が軍師諸葛孔明を伴きたり、この事を評議するに、孔明は曹操に攻らるゝ

妻子を家の内にて安穏に養ひ、徒に富貴を得んと思ふゆゑなり、安んぞ刃を踏で君の爲に討死するの心あらんや。孫權が曰、汝しばらく退け、我自ら能工夫せん。魯肅が曰、君もし疑の御心あらば、必ず張昭等に惧られ玉ふべし、能々事を決玉へとて外に出ければ、諸の大將こゝ彼に寄合、武將は戰はんと云文官は降參せんと云て議論紛々として一決せず。孫權は後堂に在て寢食を忘て心の疑定らず、案じ煩て居たりしが、吳夫人この由を聞て對面し、いかなることか心に在て斯は煩ぞと問ければ、孫權申けるは、いま曹操兵を江漢に集めて吳を攻るの心あり、此に因て諸大將と議論すれば、降參を勸る者もあり合戰を勸る者もあり、某思に、若戰ふ時は勢の少きを恐れ、降る時は曹操が我を輕んぜんことを恐る、この故に心の內決し難し。吳夫人長嘆して申けるは、汝が兄孫策が遺言に、內事不レ決問二張昭一、外事不レ決問二周瑜一と云ずや、此の如き外の務は張昭等が知ことにあらず、何ぞ周瑜を召て問料らざる。孫權これを聞て醉の始て醒るが如く限なく喜で、急ぎ鄱陽湖へ使を馳て周瑜をぞ招きける。

孫權喜で申けるは、先生の詞忽ち我心の疑を散ず、我心すでに一決せり、再び議論あるべからず、卽日兵を起して曹操を滅べし、魯肅は此由を諸大將に觸知せよ、孔明は客屋に行てまづ休息し玉へとて、共に別て退散す。張昭は諸の大將と皆降參に心を決て居たりけるが、忽ち魯肅が觸來て合戰に事極りぬと云を聞て大に驚き、急に同志の大將を集め、君すでに孔明に出拔れて合戰に定れり、去來早く行て諫んとて共に出て孫權に見え、某等君の曹操を破んと宣を聞てこの故に來りたり、君自ら袁紹に比せば如何んと問ければ、孫權默然として答ず。張昭又曰、曹操はじめ勢少かりし時だにも只一擧に袁紹を滅せり、況や今百萬に餘る兵を率し荊州を攻取て、兵粮武具一として不足なく、威風大に遠近に振ふ、君なにを以て戰はんと思ひ玉ふぞ、必ず孔明が計に出拔れてみだりに兵を起し玉ふな、是まことに薪を負て火を消んとするが如し。顧雍申けるは、玄德度々曹操に攻やぶられ、之を遺恨として身の亡るをも顧ず仇を報ぜんとする心あり、此ゆゑに孔明を使として我國を語らふ、わが國は元より曹操と恨なし、曹操爭か害するの心あらん、必ず孔明が方便を信じて國家の禍を仕出し玉ふなと云ければ、孫權いよ〳〵答ず、急に起て後堂へ入にけり。魯肅は外にありて、又張昭等が兵を起すことを諫め止むると聞て、急ぎ孫權に見て申けるは、張昭、顧雍等が合戰を好ずして降參を勸るは、文官の者共みな己が

出て問んとて慌しく衣を整へ、再び出て孔明に向ひ、さきには一時の淺見悞て無禮をなす、悔れども及がたしと云ければ、孔明も謝して曰、某みだりに舌を動して嚴威を犯せり、多罪願は幸に免し玉へ。孫權伴て共に後堂に入、酒宴を設て申けるは、曹操がつねに惡ところは呂布、劉表、袁紹、劉豫州と我となり、今大畧すでに滅て劉豫州と我と猶のこれり、我いま東吳十萬の勢を持ながら、安んぞ膝を屈て人の下知に從んや、我心すでに決せり、劉豫州にあらずんば曹操に當ること能じ、然れども劉豫州新に敗軍の後なれば、如何して曹操を防ぎ玉はん。孔明答て曰、劉豫州近ごろ當陽に敗すと申せども、落失たる勢いま悉く回り來り、關羽精兵一萬餘騎を從へ、劉琦江夏の勢を集ること此も萬人に下ず、今曹操が大軍はみな遠路の疲れ武者、何の用にか立候べき、殊さら承る劉豫州を當陽に追かけし時一日一夜に三百里を馳たりと、是まさに強弩之末勢魯縞をも穿こと能ざるなり、此ゆゑに兵法に之を忌で、必蹶上將軍と云り、又北國にそだちたる者は素より舟軍を知ず、今荊州の軍民曹操に從ふ者はその心より出るにあらず、皆已ことを得ざる故なり、將軍よく吳の地を保ち、多く武將を用て精兵數萬、もし劉豫州と力を併せて防玉ふ時は、曹操を破らんこと掌にあり、曹操もし破れなば必ず北國に逃回ん、然る時は荊州念なく攻とるべし、吳の國少しも患なく鼎足の形成ん、成敗の機今日にあり。

操に降り玉はずんば、一國の百姓みな塗炭の苦を受べし。孫權が曰、先生の詞の如くんば劉豫州なんぞ曹操に降ざる。孔明が曰、むかし田横は齊の壯士なり、尙義を守て漢の高祖に降ず自害して死き、况やわが劉豫州は王室の宗親にして英才世を蓋ふ、萬人仰ぎ慕ふこと水の低に流るが如し、事の濟ぬは天命なり、安ぞ人の下に從はんやと答ければ、孫權以ての外に氣色を損じ、急に起て後堂へ入しかば、滿座の諸將同音に咄と笑ふ。魯肅は孫權が怒れるを見て深く孔明を責、先生なに故に浩る詞を云玉ひし、幸に我君の寛洪なるゆゑ面のあたり叱り玉はず、始終の言なにとてかく不遜なるぞと云ければ、孔明天を仰で大に笑て曰、これは何とて氣量の物を容ること能ざる、吾自ら曹操を破るの計あり、もし乞問ば申べし。魯肅が曰、先生別に好計あらば我主人に勸て問しめん。孔明が曰、われ曹操が百萬の勢を見ること群れる蟻の如し、我片手を動さば悉く粉に成ん。魯肅これを聞て急に後堂へ入ければ、孫權いかり尙やまず、魯肅を屹と見て申けるは、汝さきに江を渡て好人を伴きたれりと云しが、是まことに謬の人なり。魯肅が曰、某も今孔明を責候に、孔明は却て君の氣量の狹を笑て、彼が曹操を生捕の計は輕輕しく語らずと申候、君なんぞ求て之を聞玉はざる。孫權げにもとて忽ちに怒をやめ、さては孔明深き計あり、此ゆゑに詞を以て我を激す、我一旦智淺して已に大事を悞らんとせり、早く

車に積斗に量るが如し、その數勝て知べからず。孫權が曰、いま曹操荊州を平げて又遠を圖の志ありや。孔明が曰、曹操いま江に沿て陣を取、多の兵船を用意して立ならべたる旗は天を蔽ひ數百里に連絡す、是呉を攻るの心にあらずして何の處をか攻ん。孫權が曰、もし曹操この心あらば我戰ふべきか戰ふまじきか、先生ねがはくは一決し玉へ。孔明が曰、只恐らくは將軍用玉はじ。孫權が曰、ねがはくは金玉の妙論を聞ん。孔明が曰、方に今四海大に亂て將軍は兵を起して東呉に據、劉豫州又こゝに來て共に曹操と天下を爭ふ、今曹操四方を順へんと欲して大略すでにその手に屬し、了に荊州を破て威勢甚だ大なり、此ゆゑに縱ひいかなる英雄も計を用るに所なし、これに因て劉豫州身を逃て此に來り玉ふ、將軍父兄の業を受て久しく此國を保ち玉ひ、若能呉越の勢を起して天下を爭んと思ひ玉はゞ、不レ如早く曹操との交を絕玉へ、若又爭ふこと能じと思玉はゞ只一の計あり、國中を安穩ならしめん。孫權問て曰、いかなる計ぞ。孔明が曰、諸の大將の勸に任せ、甲を卸膝を屈て曹操に降參し玉へ。孫權首を低てもの云ざりければ、孔明又曰、將軍外には曹操に順の名を托て內には天下を爭の心を挾み、今事の急なるに臨で決斷し玉はずんば、必ず近き禍あらん。孫權默然としていよ〳〵答ざりければ、孔明又曰、古も寡固不レ可二以敵一レ衆、弱固不レ可二以敵一レ強と云り、是當然の理なり、將軍早く曹

權が人相を見れば、眼の中碧に紫の鬚堂々として一表の人才なりしかば、この人は少し心を激さずんば說がたからんと思ひ、彼が問を待て激さんとする所に、孫權茶を進よとて文武の大將を兩旁に排列す。魯肅は孔明が如何なる答をかせんとてかた津を飲で側に立。時に孫權申けるは、われ魯肅が御邊の德を語を聞て久しくその名を慕ふところに、今幸に對面す、ねがはくは敎を聞ん。孔明が曰、某不才にして無學なり、下問を辱しめん。孫權が曰、御邊ちかごろ新野にありて玄德を扶て曹操と戰ひ玉へりと聞しが、如何勝負を決し玉へる。孔明答て申けるは、劉豫州兵は千騎に足ず大將は只三四人、ことさら新野の城は分內狹して兵粮足ず、安んぞ曹操を防ことを得ん。孫權問て曰、曹操が兵は其數いか程かあるや。孔明が曰、曹操兵を起してより呂布を破り袁紹を滅し、北番を收め遼東を定め、近ごろ荊州を得て水陸の軍馬百萬に餘れり。孫權が曰、詐にてはなきか。孔明が曰、某何とて詐を申べき、曹操兗州に在し時すでに青州の勢四五十萬あり、袁紹を亡して又四五十萬を得たり、近ごろ中國にて集る兵二三十萬、今荊州を得て又二三十萬あり、此を以て量る時は百五六十萬に下ず、某たゞ百萬と申はこの國の人々の驚き恐れんことを思ふゆゑなり。孫權が曰、手下の大將いか程かあらん。孔明が曰、智深く計多き大將二三千人あり。孫權が曰、先生の如き者は如何ん。孔明が曰、某が比の如ものは

を敬の禮にあらず、今曹操百萬の勢を率し、虎の如に威をなして吳の國を呑んとす、之を退るの計を思はずして、何ぞや賓客に向て己が能を恃で脣を動す、國の法度を忘れたるか、主人久しく先生を待、早く入て見玉へとて孔明を請じける。この人は零陵泉陵の人に黃蓋字は公覆とて、今吳の兵糧奉行なり。乃ち孔明に向て曰、某承はる、多言獲レ利、不レ如ニ默而無一言と云り、先生なんぞ金玉の論を以て我君に說玉はざる。孔明が曰、諸の大將當世の務を知ず互に難問をし玉ふゆゑ、某已ことを得ずして答たり。

○孔明智激ニ孫權一

黃蓋、魯肅二人孔明を引て中門に入ければ、諸葛瑾出きたれり。孔明禮を爲ければ、諸葛瑾が曰、汝すでにこの國に來て何ぞ早く我に對面せざる。孔明が曰、某こゝに來るは劉豫州の使を承はりてなり、この故に君のことを先にして私のことを後にす、願くは察し玉へ。諸葛瑾が曰、汝入て吳侯に見よ、後に對面せんとて去ければ、魯肅ひそかに低語て、兼て申したること忘玉ふなと云ば、孔明點頭して堂に上る。吳主孫權身を欠で起迎へければ、孔明謹で再拜す。孫權半禮を答て孔明を坐に請じければ、孔明再三固辭して側に坐し、先立德の禮意を述て密に孫

し張良、陳平が流、鄧禹、耿弇が輩、みな是天地を斡旋し宇宙を匡扶するの才氣あり、然れども平生いかなる經典を能知たると云ことを聞ず、爭か書生の筆硯の間に、區々として白を論じ黒を數へ、文を舞し筆を弄し、舌を動し唇を開に效んやと云ければ、嚴峻面を赤して對ること能ず。時に一人すゝみ出て曰、御邊は文は邦を安んずること能ず、武は國を定ること能ずと云玉ふ、然らば何とて論語に四科の首に立たるぞ。諸人之を見れば乃ち汝南の程秉字は德樞なり。孔明答て曰、君子の儒あり小人の儒あり、夫君子の儒は心に仁義を存し德溫良に處、父母に孝あり君王を尊び、上は天文を曉り下は地理を察し、中は萬民を治て恩澤を四海に布、天下を磐石の如く安からしめ、功名を靑史に傳るは是乃ち君子の儒なり、それ小人の儒はつねに詩を吟ずることを好み、空しく翰墨を費して靑春に賦を作り、白首に經を窮め、筆下に千萬言ありと云ども胸中には一物もなし、漢の楊雄が文章を以て狀元たりと云ども、身を屈て王莽に事へ、了に閣より落て死したるが如き、是乃ち小人の儒なり、日に萬言を賦すと云とも、何ぞ道に足んやと答ければ、滿座の人々孔明が詞水の流るが如く、滔々然として江河を決が如なるを見て皆色を失て居たる所に、又吳郡の張溫、烏程の駱統二人すゝみ出て難問せんとしければ、忽ち一人外より來り聲を厲して申けるは、孔明は當世の奇才、汝等却て舌を動して相爭ふ、客

諸人之を見れば乃ち呉郡の陸績字は公紀なり。孔明大に笑て曰、御邊は往日袁術が席上にて、橘を懐に入れたる陸郎か、能く安坐してわが論を聴け、昔周の文王は天下を三分にして其二を有ち、なほ殷に事へ給ひしかば、孔子も周之徳其可レ謂ニ至徳一也而矣と宣へり、これ所レ謂臣としては君を伐ざるの道なり、其後殷の紂王悪虐をなすこと甚しかりしかば、武王已事を得ずして伐給ふ、時に伯夷、叔齊馬をひかへて之を諫め、臣として君を弑す仁といふべきやと云ければ、太公望これを稱して義士なりと感じ、孔子も之を讃して賢人なりと宣へり、臣として上を犯ざるはこれ萬古不易の理なり、曹操は累代漢の臣、いま天子過なきに常に弑して天下を奪んとす、逆臣に非ずして何ぞ、昔漢の高祖皇帝は身泗上の長たりしかども、寛仁大度にして文武の臣を用、大漢四百年の基業を開玉り、我君の如に至ては、たとひ劉氏の宗親にあらずとも仁慈忠孝天下おまねく之を知、なんぞ席を織履を販たればとて恥ることあるべけんやと云ければ、陸績胸塞て引退く。時に一人昂然として出て曰、わが國の英雄みな孔明が辯舌に掩はれ、正理を奪はれて引退く、御邊よく詞を振が、如何なる經典をか能知たる。諸人これを見れば乃ち彭城の厳畯字は曼才なり。孔明答て曰、章を尋ね句を摘は世の腐れ儒者の所爲なり、安んぞ邦を興し事を立ることを知ん、昔し有莘に耕せる伊尹、渭水に釣する太公望、漢の天下を創

乃ち漢の賊なり。薛綜が曰、先生の言大に差れり、我きく古人も、天下者非二一人之天下一、乃天下之天下也と云へり、この故を以て堯は天下を舜に禪り、舜は天下を禹に禪り玉へり、其のち成湯は桀を放ち、武王は紂を伐、列國相爭て漢つひに秦の業を受、相續て今に及ぶ、是天命の數こゝに盡たり、今曹操は天下を三分にしてその二を有、勢甚盛なれば天下盡く心を歸す、只劉豫州天の時を知玉はず、强て曹操と爭ひ玉ふ、是卵を以て石を撃、羊を驅て虎と鬪しむるが如し、安ぞ敗ざらん。孔明叱て申けるは、御邊の言ところは父もなく君もなきの人なり、夫人天地の間に生れては忠孝を以て身を立るの本とす、我思に累代久しく漢の土地に生れて君の祿を食ひ、國に奸賊の民を害する者あるを見ては共に力を盡し、誓て之を鎭るは臣たるの道なり、曹操は相國曹參が後胤にして四百餘年漢の祿を食へり、この恩を報ずることを思はずして久しく簒逆の心を懐く、天下たれか之を惡ざる、御邊妄に天數を以て曹操に歸するは、是まことに父もなく君もなきの人なり、共に事を論ずるに足ず、再び口を動かす事なかれと云ければ、薛綜慙愧して閉口す。時に又一人進み出て問て曰、曹操は天子を挾んで四方を伐と云共、本これ相國曹參が後胤なり、劉豫州は中山靖王の苗裔と云玉へども、考ふべき證據なし、たゞ人の眼前に見たるは、みづから蓆を織り履を販ひし傭夫なり、いかでか曹操と敵することを得ん。

烏合の衆を得たりと云ども、軍に紀律なく將に謀畧なし、何百萬ありとも怕るに足ず。虞飜大に笑て曰、先生當陽に敗られ度口に危く、すべき樣なくして人に救を求め、猶曹操を怕れずと云玉ふは、是眞に掩耳偸鈴の譬に同じ。孔明が曰、御邊聞玉はずや、兵法にも信兵實戰と云り、吾君劉豫州は數千仁義の兵あり、安ぞ能曹操が百萬殘暴の衆に敵せん、この故に退て夏口を守り、時の至を待ものなり、今御邊が吳の國は兵精く粮足り、殊に長江の險阻あり、然るに其君を勸め膝を屈て逆賊に降らしめんとす、何ゆゑに甚だ懦弱なる、若これを以て論ずる時は劉豫州實に曹操を怕れざるなりと云ければ、虞飜口を閉て引退く。忽ち又一人すゝみ出て問て曰、孔明は蘇秦、張儀が辯舌を學び、三寸不爛の舌を掉てこの國に遊說するか。諸人之を見れば乃ち淮陰の步隲字は子山なり。孔明答て曰、御邊は蘇秦、張儀は辯舌の人なりと知て、蘇秦、張儀は眞の英雄豪傑なるを知玉はず、それ蘇秦は六國の印を佩、張儀は兩度まで秦に相たり、共に社稷を匡扶するの機、天地を補完するの手段あり、株を守て兎を待、刀を畏れて劍を避る如の人にあらず、御邊曹操が詐て威す詞を眞と思ひ、怕れ戰て心決せず、安ぞ蘇秦、張儀がことを知んと云ければ、步隲首を低て閉口す。時に一人問て曰、孔明は曹操を如何なる人と思ひ玉ふぞ。諸人これを見れば、乃ち沛郡竹邑の人に薛綜字は敬文なり。孔明答て曰、曹操は

を驚しむ、是古の管仲、樂毅が再び生れ出ると云とも安ぞ及ぶべき、劉琮が曹操に降りしことは劉豫州曾て知玉はず、初劉表が國を禪んと云し時吾もしきりに勸しかども、劉豫州は人の亂に乘て國を奪ことをし玉はず、是大なる義なり、當陽の敗軍は十萬にあまる百姓、老たるを扶け幼を抱て皆わが君の德を慕ふ、之を棄るに忍ずして一日に十里ばかりの路を打て、速に江陵に行ことを思はず、百姓と苦を同す、これ又大なる義なり、兵書にも寡不レ敵レ衆、勝負乃常事也と云り、安ぞ戰ふ毎に必ず勝の理あらんや、昔し楚の項羽戰ふごとに勝しかども、垓下の一戰に打負て了に高祖に滅されたり、是は韓信がふかき計より出たり、韓信久しく高祖に事と云ども戰ふごとに勝と云ことなし、國家の大計社稷の安危は自ら主たる計あり、辯舌に誇り虛譽を好む人の知ところにあらず、坐議立談たれか機に臨で變に應ずることを得ん、云ところ百に一も取べきなし、誠に天下の笑草となるのみ、御邊必ずわが言の直なるをあやしみ玉ふなと憚ところなく答ける。孔明がこの詞張昭が心を拉ければ、默然として居たる所に、忽ち一人高聲に問て曰、いま曹操軍勢百萬、雄將千員、龍の如に驤り虎の如に躍て江夏を一呑にせんと欲す、先生これを如何とかする。諸人これを見れば乃ち會稽餘姚の人に、從事虞飜字は仲翔なり。孔明答て曰、曹操河北を滅して袁紹が蟻聚の兵を收め、荆州を劫して劉表が

琮を助て國を保たしむることも能ず、これ如何なる故ぞ、先生知て之を爲しむる時は不仁なり、知ずして爲しむる時は不智なり、近ごろ劉豫州新野城をすてゝ樊城に走り、當陽に敗て夏口に逃、一身を容るに地なく、其急なること眉に火の付たるが如し、是先生を得玉ひてより却て其初に及ばず、然る時は管仲、樂毅が百分が一にも及ばざるなり、先生幸に某が愚にして言の直なるを怪玉ふなと云ければ、孔明昻然として笑て曰、大鵬と云鳥あり、萬里の空に翺翔す、その志を雀なんどが知ところにあらず、古人も善人爲レ邦百年、亦可ニ以勝レ殘去ヲ殺と云り、吾いま世間の病人を以て諭べし、それ病の至て重には粥を食せ、和なる藥を飲せ、其臟腑のよく調を待て其のちに肉食を進め、猛き藥を以て之を治す、然る時は病根こと〴〵く拔てその人全く生ることを得、もし氣脉の調ざるに猛き藥を用ひ、硬き食を進て安穩ならんことを欲することは安ぞ及ぶべき、吾君劉豫州初め汝南に戰やぶれて劉表に身を寄、兵は千騎に足ず大將は關羽、張飛、趙雲のみなり、新野は山僻の小城にして民少く粮乏く、殊に要害よき所にもあらず、劉豫州こゝを借て身を容玉ふは、正に病の至て重が如し、それ甲兵完からず城郭堅からず、軍士調練せず粮草足ざるに、坐にして之を守るは自ら死を求るにあらずや、金玉を溝壑にすつるが如し、博望に屯を燒、白河に水を用ひ、夏侯惇、曹仁が輩に我名を聞ては膽を失ひ魂

でか能知ことを得ん。張昭が曰、もし然る時は先生言行相違せり、聖人も古者言之不レ出耻ニ躬之不レ逮也と宣はずや、先生自ら古の管仲、樂毅に身を比し玉ふ、某幼より春秋を讀で深く二人の人と爲を知れり、管仲は齊の桓公を相て諸侯に霸たらしめ、一に天下を糾たるは管仲が力なり、樂毅は微弱なる燕を扶て齊の七十餘城を降せり、この二人誠に古今の豪傑、世を濟の才なり、今曹操中國に横行して動に勝ずと云ことなし、若順ふものは恩を與へ、逆ふものは立所に伐、殊に天子の勅命と號して到る所その威を仰ずと云ものなく、四海震動して英雄ことごとく服す、先生草の廬にありて風月に閑を樂み、膝を抱て長吟し玉ひしが、今劉豫州に事て已に世間に出玉ひたることなれば、天下萬民の爲に害を除き利を興し玉ふべし、是古人の云し達則兼ニ善於天下一と云ものなり、殊更劉豫州いまだ先生を得玉はざる已前には、なほ天下に縱横して城の一つをも持玉へり、近ごろ先生を得玉ひて、天下の人も面を仰で之を望み、三尺の童子までも、定めて虎に翼を添たるが如にして、漢の世も再び起り曹操も滅んずると思ひ、朝廷の舊き大臣山林隱遁の者までも目を拭て相待、高天の雲を拂て日月の光を仰んと望み、民を水火の中に拯て世の太平を見んと足を翹て相待ける所に、結句先生の出玉ひて、曹操が勢向ひぬれば劉豫州は甲を棄戈を落して見苦しき體にて逃玉ひ、劉表の恩を報ずることも叶ず、劉

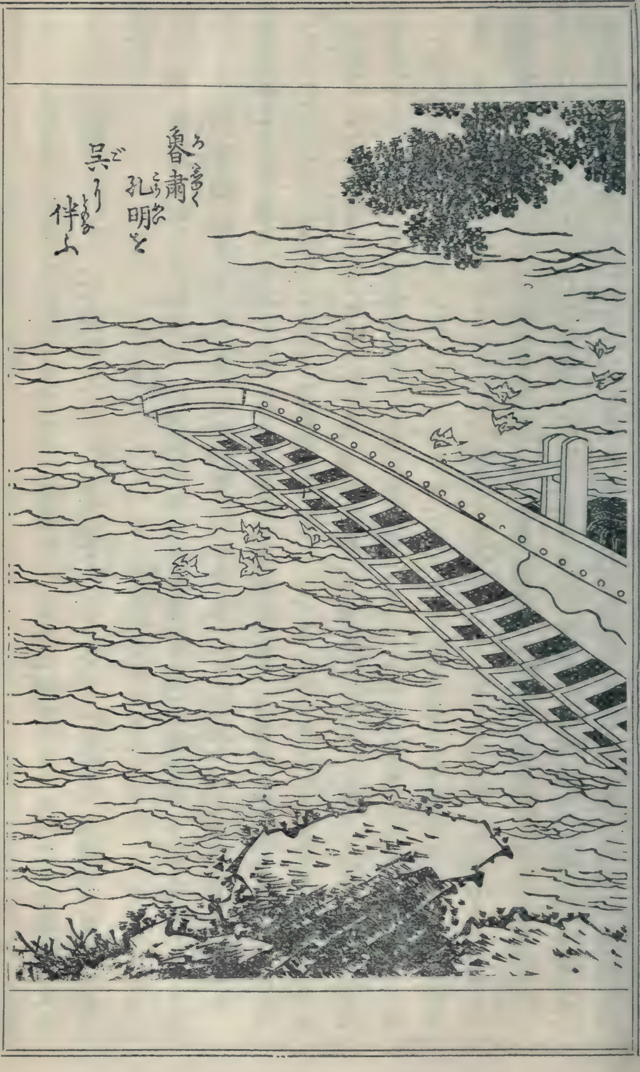
孔明が曰、われ機を見て變に應ず、御邊少も患ひ玉ふなとて、相伴て幃幕の内に入て見れば、張昭、顧雍を始として文武の大將二十餘人、峩き冠を戴き衣を整て端坐せり。孔明一々名を問て禮を施し、客位に就て坐しければ、呉の諸將孔明が飄々然として世を出の表、昂々乎として雲を凌の志あるを見て、張昭等心の中に、彼が此國に來りたるは言を巧にして軍を起させん爲なるべしと思ひければ、張昭まづ問て曰、某は江東の末將なるが、久しく先生の大名を聞、隆中に高臥して自ら田を耕し、天の時を樂で梁父の吟を好み、毎に自ら管仲、樂毅に身を比し玉ふと聞しが、このこと眞にて候か。孔明これを聞て心の中に、これは我を探らん爲の詞なりと思ひければ、乃ち答て曰、これ乃ち某が平生少可の譬なり。張昭が曰、近ごろ劉豫州三度先生を草廬の中に顧て、魚の水を得たるが如しと喜で、常に荊州を呑んと思ひ玉ひしが、今なにとて忽ち曹操が手に入たるぞ、願くはその故を聞ん。孔明心に思けるは、張昭は呉の國第一の大將なり、若これを云倒ずんば爭か孫權に說ことを得んとて、答て申けるは、我荊州を取こと掌を反よりも易し、我君劉豫州は身に仁義を行て、同宗の國を奪に忍玉はず、此ゆゑに劉表強て讓んと云しかども了に受玉はず、然るに劉琮懦弱にして惡人の言を用ひ、密に國を獻りて降人となり、曹操に逆威を振しむ、今劉豫州江夏城にありて別に深き圖あり、等閑の輩いか

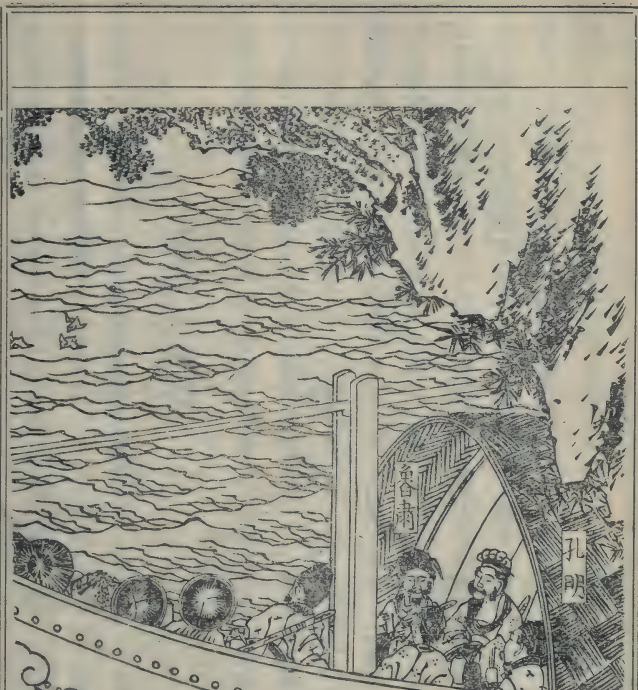
君を思はず。孫權が曰、その故いかん。魯肅が曰、某等が如き者が曹操に降る時は、先故郷に回してその名位を定め、了に從事官より下には居じ、牛車にのり吏卒を從へ、士林に交游して次第に官を累ば、後には州郡の太守に到ん、君もし曹操に降り玉ふ時は官は封侯に過ず、車一乘馬一匹、從者十人に過べからず、爭か南面して覇業を行ふことを得ん、諸大將の降參を勸るはみな己が身を安ぜん爲なり、君よろしく詳にし玉へ。孫權嘆じて申けるは、諸人の意見われ甚だ意に喜ず、汝一人大なる計を說、その心われに同じ、これ天汝を以て我を扶玉ふならん、國を保の計われ已に決すと云ども、曹操河北を亡して袁紹が勢を併せ、荊州を平て劉表が兵を集む、只恐はその勢大にして敵すること叶ふまじ。魯肅が曰、某江を渡て當陽に到り、玄德の敗軍を聞て直ちに江夏の城にゆき、玄德に對面して虛實を探り、深く事を知たる者を伴來れり、君ねがはくは此ものに對面ありて曹操が事を問玉へ。孫權が曰、それ如何なる人ぞ。魯肅が曰、諸葛瑾が弟の諸葛孔明なり。孫權が曰、彼臥龍先生か。魯肅が曰、これなり、いま客屋の内にあり。孫權が曰、今日は晩に及べり、明日此國の諸將を堂中に集め、先孔明に對面せさせてわが國に英俊多きを知せ、其のち直に事を計ん。魯肅命を受て退き、次の日の早天に孔明を伴て出けるが、又低語て申けるは、今孫權に見玉はば、必ず曹操が兵多きことを云玉ふな。

遙々と江を渡て知ずとは如何なるゆゑぞ。魯肅が曰、某別に議論あり。孫權乃ち曹操が檄文を出し、昨曹操が方より之を送れり、吾まづ使を回らしめたりと云ければ、魯肅披き見に、其文に曰、

操近承帝命、奉詞伐罪。旌麾南指、劉琮束手、荆襄之民望風歸順。今統大兵百萬上將千員、欲與將軍獵于江夏、共伐劉備、同分漢土、永結盟好。相見再期、宜早回報。

魯肅見了て申けるは、衆評いかんとか定まりし。孫權答て曰、今諸將を集て之を議するに、事さらに一決せず。張昭申けるは、曹操は虎の如し、今百萬の勢を率ゐ、天子の名を借て四方を征伐す、これを拒として亡ざるはなし、今わが國に曹操を拒べきものは大なる江の險阻なるばかりなり、然れども曹操荆州を取て兵船に事を缺ず、舟軍に馴たる兵多し、この故に水陸二手に分て攻きたる、其勢大山の如し、爭か之に向ふべき、某が意を以て計時は降參に如べからず、是萬全の計ならんと云ければ、滿座みな尤と同ず。されども孫權は沈吟して心決せず、默然として居たりければ、張昭等又曰、君必ず疑玉ふな、若曹操に降り玉ふ時は、我國民安うして六郡を保つべし。孫權衣を更んとて坐を起ければ、魯肅一人從ひ來る。孫權その心を喩り、魯肅が手を取て問て曰、卿が心いかん。魯肅答て曰、諸將の降參せんと勸るは皆己が爲にして


魯肅孔明を呉より伴ふ


魯粛
孔明

事すでに急なり、某命を承はりて呉に行ん。玄德の曰、御邊よろしく料ひ玉へ、若行玉ふならば我は夏口に回て關羽と一手にならん。孔明すでに打立て出ければ、魯肅大に喜で玄德に別をなし、孔明と舟に乘て柴桑郡を望で馳たりける。

○孔明舌ニ戰呉群儒一

魯肅は舟の中にて孔明と計を議しけるが、心の中に思ふ樣は、孔明元より辯舌の人なり、今共に國に行ば必ず孫權を勸めて曹操を討しむべし、然れども戰に勝時は別事なし、若負ることあらば其罪を我一人に歸すべし、如何すべきと暫く思案して、乃ち孔明に申けるは、先生もし孫權に見玉はば必ずありの儘に告玉ふな、曹操が兵多く大將の廣を問、呉を攻んとする工あるかと問候はば、先生必ず詳に知ずと答へ玉へ。孔明が曰、御邊の教を受るに及ず、某自ら思案あり。魯肅再三このことを云ければ、孔明只あざ笑て、船すでに岸に著ければ、魯肅まづ孔明を客屋に入て休息せさせ、自ら府堂に出て孫權に見ゆ。此時孫權は文武の大將をことごとく集めて計を議する所に、魯肅回り來れりと告ければ速に召出す。魯肅內に入て禮了りければ、孫權問て曰、汝荆州へ渡て事の體を窺ひ來れるか。魯肅答て曰、いまだ虛實を知ず。孫權が曰、汝

と語り候に何ゆゑに詐玉ふぞ。玄徳の曰、この事は孔明よく其詳なるを知ん。魯肅が曰、ねがはくは孔明に見ん。玄徳乃ち孔明を呼出し玉へば、魯肅が曰、某は先生の兄諸葛瑾と朋友なり、久しく先生の才名を聞て今幸に相見す、ねがはくは卽今安危の事を聞ん。孔明が曰、曹操が奸計われ能其詳なるを知れり、恨らくは力足ずして且く其勢を避。魯肅が曰、劉皇叔は久しくこの所に留り玉はんか。孔明が曰、蒼梧の太守吳臣と舊き好あれば行て之を賴んと欲す。魯肅が曰、吳臣は兵少く粮乏して其身とても保ちがたし、安んぞよく他人を救ん。孔明が曰、吳臣も久しく賴べきにあらず、我別に計あり、暫く先蒼梧に行んとす。魯肅が曰、わが討虜將軍孫權は仁惠聰明にして、賢を敬ひ士を重ず、江東の英雄これに事て恰も雲の屯が如く、已に六郡の地に據て兵精く粮足り、今われ劉皇叔の爲に計に、然るべき人を吳に使せしめ共に好を結び、力を合せて曹操を破り玉へ。孔明が曰、御方に此使を勸べき人もなく、殊に吳は舊き好とてもなし、爭か交を結び玉ふべき、只徒に舌を費さんのみ。魯肅が曰、孔明の兄諸葛瑾は吳に仕て參謀の官たり、願くは先生この使として來り玉へ、某不肖に候へども先生を引て孫權に見え、共に事を議べし。玄徳の曰、孔明は我師なり、暫くも離るべからず、安んぞ遙々と吳に遣すべき、このこと思も寄ず。魯肅再三勸れども玄徳かたく順ひ玉はざる時、孔明申けるは、

て呉を破らん、然る時は曹操、孫權が內に一方は亡ぶべし、是乃ち遠大の計なり。玄德の曰、この論甚だ妙なり、如何して呉の國より使の來るあらんとて互に事を議する所に、忽ち外より報じて曰、呉の孫權魯肅と云ものを使として劉表の喪を弔はしむ。孔明笑て申けるは、事すでに成就せり、昔日呉の孫策が死したる時に、荊州より喪を弔ひ玉ふか。劉琦答て曰、呉の國は吾と累代の仇なり、安ぞ喪を弔ふことをせん。孔明が曰、しかる時は是喪を弔ふの使にあらず、實は虛實を窺はん爲なり、今魯肅對面してもし曹操がことを問ば、君必ず知ずと答玉へ、再三强て問ば只孔明こそよく知りと答玉へとて、其のち人を出して招き入れ、劉琦自ら出迎ふ。魯肅禮物を捧て弔慰を述ければ、玄德出て對面し後堂にて酒宴を勸め玉ふ。魯肅申けるは、某久しく劉皇叔の德を慕て、今幸に見ることを得たり、ねがはくは教を聞ん、近ごろ曹操と度々戰ひ玉ひしと承る、其虛實を能知玉ふべし、彼が勢幾かあるや、天下を望の心ありや、手下の大將いかなる能者か計を用候ぞ、詳に教玉へ。玄德の曰、われ更に之を知ず。魯肅が曰、皇叔新野城にて曹操と鋒を交玉ふ、何とて知ずと宣ぞ。玄德の曰、われ大將足ず軍兵寡して、曹操が來ると聞ば戰はずして逃わしる、此ゆゑに其委を知ず。魯肅が曰、つねに人の申を聞ば、劉皇叔こそ孔明が計を用て二度まで敵の大勢を燒亡し玉ひ、曹操も魂を失ひ膽を冷しぬ

びて其子二人睦からず、手下の大將こと〴〵く心を別にす、玄德が梟雄なる曹操に攻られて荊州に身をよす、劉表その能を悪で用ること能ず、若よく用て共に力を併せば、曹操いかでか輕輕しく荊州を取得んや、某ねがはくは劉表が喪を弔と號して御使に罷渡り、玄德に對面して利害を說、古き荊州の大將と心を合して共に曹操を破んと云ば、玄德必ず喜で從はん、然る時は天下定めつべし、今もし行ずして曹操に先をせられなば悔るとも及ぶまじ。孫權大に喜び、然るべしと同じければ、魯肅禮物を用意して卽時に打たつ。玄德は江夏城に入玉ひて孔明、劉琦と計を議し玉へば、孔明申けるは、劉琮いま曹操に降て荊州の兵粮金帛軍馬武具等までことごとく曹操が手に屬す、其勢大にして中々急には動しがたし、不レ如吳の孫權と好を結び、共に心を合せて南北の勢を張せ、我等は中にて事を行はば宜からずと云ことなけん。玄德の曰、吳の國には賢才の人多して皆遠き計あり、安ぞ我に與せん。孔明笑て曰、いま曹操百萬の勢を引て江漢の間に陣を取、猛虎の勢を逞す、吳の孫權いかでか之を怕れざらん、然る時は其虛實を窺ん爲に必ず江を渡て來る者あらん、若きたる者あらば某一帆の風に任せ、直に吳の國に行て三寸不爛の舌を動し、利害を說示して曹操と孫權とに合戰させ、吾等は中にて計をなさん、若吳の勢勝時は共に力を合せて曹操を殺し、荊州を取回すべし、若曹操戰ひに勝ば必ず勢に乘

了に兵を引回しけるが、敵もし舟手より江陵城を奪ふこともやあらんとて、自ら江陵に赴けり。荊州には治中鄧義、別駕劉先二人在城しけるが、襄陽城すでに曹操に取れて、劉琮が一門こと〴〵く殺されたりと聞しかば、今は誰が爲にこゝを守らんとて、荊州の軍民を引具し、出て曹操に降りければ、曹操乃ち曹仁に城を守らせ、自ら内に入て韓嵩が囚たるを赦して大鴻臚に封じ、鄧義を郎中とし、劉先を尚書とし、其外の諸將に官を授て、今立德すでに江夏城に入、もし吳の孫權と交を結ぶ時は是由々しき大事なり、如何せんと問ければ、荀攸申けるは、檄文を作て孫權に送り、共に江夏に獵して立德を擒にし、荊州を分ち取て長く好を結ばんと云つかはす時は、此意雄壯なり、孫權必ず怕れ驚て降參すべし、然る時は天下すでに定るならん。曹操大に喜び、この計理ありとて卽時に檄文を作り、諸將に命じて兵を調へ、都合その勢八十三萬、詐て百萬騎と號し、水陸二手に備て西は荊陝に連り、東は蘄黃に接し、三百里が間に陣屋を作て烟火連々として絕ず、その勢遠近に振て夥し。この時吳の孫權は柴桑郡に居けるが、曹操百萬の勢を引て襄陽城を取、劉琮を殺して又江陵城に赴く由を聞、文武の大將を集て計を議しければ、魯肅すゝみ出て曰、荊州わが國に鄰て水流北に順ひ、外江漢を帶、內江陵を阻て金湯の固あり、沃野千里民殷に國富り、若之を取時は誠に帝王の資なり、今太守劉表すでに亡

共に荊州の事を語り、西を指て舟を出せば、又西南の方より一簇の舟共飛が如に馳きたり、玄德の舟を望み見て一文字に路を横ぎる。劉琦おそれ驚き、江夏の勢は某こと〴〵く率ゐ來れり、今兵船の來るは吳の國の敵か、然らずば曹操が勢ならん、如何すべきと云ければ、玄德よく〳〵見玉ふに、一人綸巾を戴き鶴氅を被て船の頭に立、これ乃ち孔明なり。その跡に孫乾も立居たりしかば、急に舟を一處によせ、相よろこんで悉く對面し、何とて此に來れるぞと問玉へば、孔明申けるは、某命を承てより先關羽を陸路より漢津へ遣し、君もし曹操に追れ玉ふ時は必ず敗軍し玉はん、然る時は江陵城へ落玉ふこと能はずして、必ず漢津へ來り玉はんと量て、劉琦を勸て迎に出し、某又夏口へ行て勢を集め來りたり。玄德限なく喜び、一所に會して曹操を破の計を議し玉へば、孔明申けるは、夏口の城は分內狹く候へども、要害殊に堅固にして兵粮の用意も澤山に候へば、先この城に楯ごもり、劉琦は江夏の城に御回ありて兵船武具を整へ、首尾の勢をなして曹操が百萬の勢を防ぎ玉へ、皆一所に在ては勢を得じ。劉琦が曰、この計好と云ども、吾玄德を伴て暫く江夏城に回り、共に軍馬を整て其のち夏口に入奉ん。玄德しかるべしとて、關羽に五千餘騎を付て夏口城を守らせ、其のち孔明、劉琦を相伴て江夏城に入玉ふ。この時曹操は玄德を討漏し、關羽が陸路より來れるを見て孔明が計あらん事を恐れ、

り、早く退て命を扶れとて皆散々に逃ければ、關羽十里あまり追て回りけり。

○劉玄德敗走夏口

去ほどに劉玄德は當陽の長坂にて散々に打まけ、漢江の渡まで追つめられて如何せんと躁ぐところに、思ひよらず關羽江夏の勢一萬餘騎を引て山の後より蒐出、曹操が大勢を四角八方へ追ちらし、玄德を守護して漢津へ到り、用意の舟に打のりて悉く岸を離れ、二夫人は何に居玉ふぞと問に、玄德當陽の事を語り、糜夫人痛手を負て了に古井に身を投たりと答へ玉へば、關羽これを聞て大に嘆き、先年許田の御狩に出し時、もし某が曹操を討んとせしを止玉はずんば、今日の患は候はじと云ければ、玄德の曰、その時は天下の爲に惜たり、若天道正を輔なば一度は志を達すべしとて、江上をさして出玉ふ所に、忽ち向に順風に帆をあげたる舟蟻の如くに集り、鼓を打て喊を作る。玄德色を失て關羽と之を見玉へば、一人白き袍に銀の甲を被たる者舟の頭に立出、叔父別てより恙なきか、小姪罪ありと大音あげて呼はりければ、近く成て能々見るに是乃ち江夏城の劉琦なり。玄德驚てその舟に乗うつり、手を取て大に哭玉ふ。劉琦が曰、某この比曹操大軍を引て叔父を追かけ奉ると聞て急に迎に來る所に、幸にして相見たりとて

と能じ、沔陽を望で横合に小路を馳漢津に出よとて、取ものも取あへず揉に揉で急ぎ玉ふ。曹操兵を整へ、張遼、許褚を遣はして再び長坂橋の樣を見せしむるに、回り來て橋すでに斷落して敵一人も見えずと申す。曹操後悔して申けるは、われ計を仕損じたり、彼すでに橋を落したるは、計なくして只われを畏る故なり、一萬の人夫を遣はし三所に橋を掛よと、下知して卽時に河を渡しければ、李典諫めて曰、これも又孔明が計にて吾等を引よせん爲なるべし、輕輕しくは進み玉ふな。曹操が曰、張飛は只血氣の勇なり、何ぞ深く怕れんやとて喊を作り鼓を打、百萬の軍勢漢津に向て飛が如くに追蒐たり。玄德は百騎ばかりにて漢津の渡に到り、前に大江あり後に追手かゝれり、如何せんとて身を揉玉へば、曹操自ら馬を出し大軍を下知して、玄德は釜の中の魚穽の中の虎なり、今生捕ずんば何の時を期せん、若とり逃す時は魚を大海に放ち虎を深山に歸すが如し、一齊に蒐れと呼はりければ、張遼、許褚を先として大力の覺取たる荒者共、われ一番に組留んとて大軍一度に競ひかゝり、已に危く見えける所に、忽ち山際に鼓を打て一彪の軍馬かけ出、われ此にありて久しく待と呼はり、曹操が勢に斬てかゝる。是乃ち關羽が江夏城に行て劉琦に一萬餘騎の勢を借、孔明が計を受てこの所にて相待たるなり。關羽一陣に馬を馳、青龍刀を提て新手を驅て進みければ、曹操大に驚き、又孔明が計に落された

張飛の匍匐ふ
曹操を初め大軍
一時に敗走す
曹操
夏侯惇
楽進

其二
許褚
李典
張遼
張郃
夏侯覇
曹仁

ありさま黄口の孺子雷の聲を聞、病體の樵夫虎の吼を怕るが如く、槍を棄戈を投て潮の退き山の崩が如く、推ころされ踏たふされ、頭を損じ手足を折ものその數勝て計へがたし。曹操は馬を飛し色を失て逃けるが、冠を落し簪を失ひ、髪をさばきて鞭を加へ、跡より御方の逃きたるを敵の追ぞと心得て魂も身に附ず。張遼、許褚やう〳〵に追付、轡を取て引止めければ、曹操敵ぞと思うて大に叫ぶ。張遼が曰、これはいかなる事にて候ぞ、追かくる敵もなし、量に張飛一人なんぞ怕るに足んや、早く兵を揃て追かけなば玄德を擒にせんと云ければ、曹操色を直して敗軍を集ける。張飛は曹操が大軍の一擁して退たるを見て獨笑して喜び、彼林の陰に置たる二十騎の兵を呼で長坂の大橋を切落し、今は心安しとて囘り來て玄德に見え、右の趣を語りければ、玄德の曰、汝勇なることは尤も勇なり、但惜らくは計を仕損じたり。張飛その故を問ば、玄德の曰、曹操は兵法に通じて計深し、汝もし橋を斷落ずんば彼疑て追きたらじ。張飛が曰、我等が叫ぶ聲に怕れ馬を飛して逃去り、爭か再び追きたらん。玄德の曰、汝もし橋を落さずんば伏勢あらんことを疑て彼敢て追來らじ、今橋を落せるを見ば、計なく力も盡て敵を畏るゆゑに此するぞと知べし、曹操百萬の勢あり、假令江漢を渉とも塡させて通るべし、今是ほどの橋を曳たればとて彼なんの畏かあらん、敵さだめて蒐りぬらん、今は江陵城に行こ

て進ず、跡に續て曹仁、李典、夏侯惇、夏侯淵、樂進、張遼、許褚、張郃ことゞく來り集り、この體を望み見て皆心に疑をなし、張飛が目を怒して只一騎立たるは必ず孔明が深き計ならん、暫く進むことなかれとて早馬打て曹操に注進す。曹操これを聞て火急に馳きたり、其體を伺ひ見るに、張飛敵の後陣に白旄、黃鉞を取ならべ、青羅の傘蓋を指あげたるを見て、是かならず曹操ならんと思ひければ、大の眼を怒して大音あげ、吾は乃ち燕人張飛、たれか來て勝負を決せんと呼はる。其聲雷の鳴が如くなりければ曹操が勢みな色を失ふ。曹操大に驚き、急に傘蓋を收て白旄黃鉞を取かくし、諸將を顧て曰、昔 關 羽が顏良を討とりたる時我甚だ稱嘆せしかば、關羽申けるは、某が如きは云に足ず、某が弟に燕人張飛と申もの、百萬の軍中に入て大將の首を取こと嚢を探て物を取よりも易しと云り、汝等も聞つらん、世に怕しき者ぞとて密に伺ひ居たりけるに、張飛敵の俄に旗幟を隱し傘蓋を收めたるを見て又眼を怒し大に叫で、吾はこれ燕人張飛、たれか出て快く戰はんと呼はりければ、曹操退んとする心ありて軍中みな躁けり。張飛又敵の後陣色めき立たるを見て面白きことに思ひ、大音聲をあげて、戰ふとも又戰はじ、退くとも又退けじと叫ぶ音いまだ絕ざるに、曹操が傍にありける夏侯霸震ひ怕て膽 魂を失ひ、馬より倒に落ければ、曹操馬を回して退けと云ほどこそあれ、數十萬の兵西を望で逃くづる。其

行玉へ、吾自ら敵に當らん。趙雲馳ぬけ二十里ばかり行ければ、玄德木陰に休み玉へり。趙雲が全體血に染れるを見て涙を流し、御邊が懐なるは何ものぞと問玉へば、趙雲息をも繼あへず、某が罪萬死も猶かるし、糜夫人重き傷を蒙り、馬に乘玉へと勸めけれども了に古井に落て死玉ひしゆゑ、人の屍を取んことを畏れ墻を倒して掩ひきたれり、懐に抱ける公子始のほどは啼玉ふ聲の聞え候ひしが、近ごろは音も仕り候はず、某限もなき敵の圍を打やぶり、大將を討こと五六十人、靑釭の寶劍を奪ひ、辛き命を扶りしものは、皆これ君の洪福に托てなりと云て甲を解て開き見れば、阿斗よく寢入ていまだ醒ず。趙雲兩手に抱て、幸に公子の無事なる事を得たりとて玄德に渡ければ、玄德これを取て地上に投すて、汝が如き小兒の爲に已にわが股肱の大將を失はんとせりと怒り玉ふ。趙雲涙を流して再拜し、某肝腦地に塗るとも、此恩を報じがたしと云て退きければ、諸將急に阿斗を抱き甘夫人と共に林中に憩しむ。去ほどに文聘は兵を引て趙雲を追かけ、長坂橋に近付て向を見れば、張飛只一騎橋の上に馬を立、丈八の矛を横たへ、盔を脱で鞍にかけ、頭の髮倒に上りて獅子の怒毛の如く、眼は逆に裂て光り百練の鏡に朱を洒ぎ、怒れる鬼鬚左右に分れて、惡鬼羅刹も是には爭か及ぶべき。又橋の東に一村しげりたる林あり、塵ほこりを蹴たて馬烟を起て、木陰の中に多くの兵往來す。文聘怪んで敢

天下を得ぬことを愁んやとて、早馬打て陣々に相觸、趙雲が到るところ矢を放つことなかれ、只一騎なれば生捕て來るべしと下知をなす。是偏に懐に抱げる小兒、天の助を得るにあらずや。されば此日三歳の子を抱きながら只一騎敵の圍を蒐やぶり、大旗を二本きり倒し、槊を奪ひとること三條、名ある大將五十餘人を打とり、一身に洒ぐ血は泉の湧が如く、馬を飛して走りければ、山際の細路より二手の勢打て出たり。指揚たる旗を見れば夏侯惇が手下の大將に兄弟二人、兄を鍾縉と云て大なる斧を使ひ、弟を鍾紳と云て方天戟を使ふ。二人左右に分れて趙雲早く降れと呼はり、後よりは張遼、許褚大軍を驅て喊の聲天地を崩す。趙雲大に驚き、毒蛇の喉を逃れて虎の口に逢が如し、後にも敵あり、迚ものがれぬ所と思ひ、向より群りかゝる敵の眞中へ喚て蒐入ければ、鍾縉大鉞を打ふり、戰三合にして只一槍に突ころさる。弟の鍾紳甚だ怒り、兄の仇を報ぜんとて戟を舞して追かけ背より砍んとするを、趙雲尻目に睨で馬を反し、左の手に槍を持て敵の戟を支へ、右の手に劍を拔て盔の眞甲より腦を連ねて切付しかば、鍾紳倒に落て死にけり。趙雲圍をのがれ長坂坡を走りけるが、又後より文聘兵を引て生捕んと追ちかづく。此時趙雲は馬つかれ人困じて戰ふべき力なく、橋の上を見るに張飛矛を横たへて立たりければ、遙に聲をあげて張飛われを救玉へと呼はりけるに、張飛申けるは、御邊早く

坑の深に陥入ければ、張郃上より槍を取のべ下突にせんとするに、俄に坑の中より紅の光たなびき紫の霧起て、趙雲が騎たる馬一躍に飛出ければ、張郃大に驚き續ても追ざりけり。是懐に抱ける小兒後には天子となるべき洪福あるに因てなり。趙雲不思議の難を免れ、馬を飛して走りければ、向より二手の勢切てかゝり、後よりも二手の勢喊を作て攻かゝる。前なるは馬延、張顗、後なるは焦觸、張南、共に袁紹より降參して曹操に從ふ大將なり。趙雲亂軍の中にて攻戰ひ、青釭の劍を拔て散々に斬て廻るに、其鋒に當るもの或は盔の眞甲より瓜を砍たるが如く、肩先より腰を掛て匏を割たるが如く、近付ものを切て落すに半毫も刄を損ぜず、誠に希代の寶劍なり。

○張飛據水斷橋

曹操初より景山の頂に上り、軍を見物して居たりけるが、一人の大將向ふ所敵なく大軍を蒐やぶるを見て、彼は何ものぞと問に、傍にありける曹洪馬を飛して山を下り、大音あげて、軍中の戰將願はくは名字を留めよと呼はりければ、趙雲聲に應じて曰、われは常山の趙子龍なり。曹洪はせ回りて此由を告ければ、曹操が曰、世の虎將なり、吾この大將を御方になさば、何ぞ

將軍この子を扶て再び父に對面せさせば、妾死すとも何をか恨んと云ければ、趙雲が曰、夫人かかる憂目を見玉ふは是某が罪なり、早く此馬に召れ候へ、某は步立にて送り奉らん。糜夫人の曰、將軍もし此馬に離ればこの子も亦危からん、妾すでに痛手を負ぬれば惜べき身にあらず、願は將軍この子を扶て早く立退、妾を以て心に掛ることなかれ。浩る所に喊の聲遠近に響きければ、早く馬に召れ候へと勸むるに、糜夫人小兒を趙雲が手に渡して申けるは、此子の天命將軍の上にあり、妾を心に掛て兩ながら悞ことなかれ。趙雲後に敵の蒐るを見て、何とて早く乘玉はぬぞ、敵はや是まで來れりと聲をあらげて叱ければ、糜夫人小兒を地に棄て傍なる古井に身を投たり。趙雲すべき樣なく、墻を引倒して井の上を掩ひ、被たる甲の縧を解て心當を曳放し、小兒を懷に抱き入、名を呼時に應玉へと云て槍を取て馬にのりければ、早敵の大將步立の勢を引て近々と取卷たり。趙雲墻外に突出しければ、曹洪が手下に晏明と云大將三尖兩刃の刀を舞して眞先に蒐りけるが、趙雲只一合に突死し馬を馳て通りけるに、戰はんとする者なく散々に亂れけり。又一手の勢旗を眞先に進め、喊を作て路を遮ぎる。趙雲これを見れば旗に河間の張郃と書たり、なじかは猶豫すべき、驀地暗に蒐て馬を交へ十餘合戰ひけるが、中々勝こと能じと思ひ、路を奪て走りければ、張郃のがさじと追きたる。趙雲馬を飛して忽然として土

趙雲

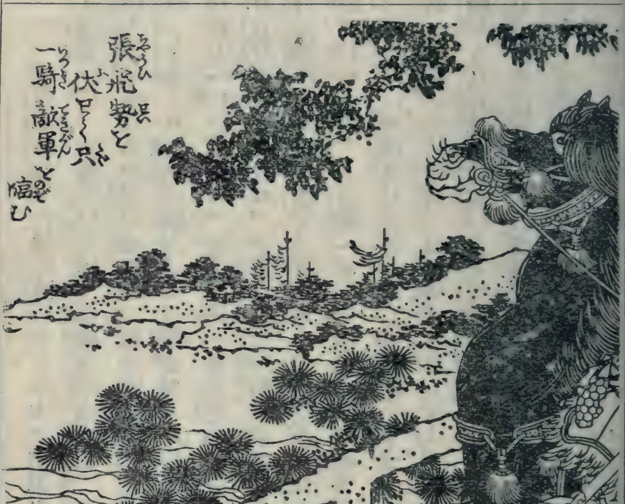
張郃
趙雲幼主を守護して土坑を出る

趙雲兎角の問答にも及ばず驀地暗に突てかゝり、只一槍に突て落しければ、殘る兵みな四方へぞ逃たりける。此大將は曹操が隨身にて、寶劍を預かる夏侯恩と云者なり。原來曹操青釭、倚天とて祕藏の寶劍二振あり、倚天の劍は常に自ら帶し、青釭の劍は夏侯恩に帶せける。倚天の劍は威を鎮め、青釭の劍は人を砍り鐵を切こと瓜を切が如し、夏侯恩これを帶て我に敵するものあらじと思ひけるが、只一槍に突死されたり。趙雲彼劍を見れば、靶の上に金を嵌て青釭の二字あり、さては寶劍ならんと思うて自ら之を帶ければ、後より敵の勢とり圍む。趙雲馬を回して屹と見れば、曹操が大軍野に滿山に漫て八面を密く包み、百姓を切ころし妻子を屠る。趙雲馬を打て大勢の中へ馳入縱橫に蒐やぶり、つと出て手下の兵を數るに次第に亡て痛手を負。又一陣を打やぶり蒐透て走ければ、悉く討れて只一騎になる。然れども退んとする心は半點もなく、夫人、阿斗を心にかけ往來して尋ね求め、百姓に遇て問けるに、一人教て、糜夫人は小兒を抱ながら左の腿を敵に突れ、あれなる壞家の墻の陰に倒れ伏て居玉ふと云ければ、急に馬を飛して行て見るに、纔なる家の半すぎ燒たるに、糜夫人三歲の小兒を抱て墻の陰に伏玉へり。趙雲馬より飛下ければ、糜夫人一目見て淚を流し、今將軍に出合ことこの子の天命賴みあり、願は之を憐め、父君世上を流浪し玉ひ、年すでに五十に及べり、子とては是より外に一人もなし、

あげ、其中に夫人ありやと呼はりければ、甘夫人趙雲を見て聲を放て泣さけぶ。趙雲馬より下て槍を脇に挿み、かゝる難義を見せ奉るは某が罪なり、糜夫人、阿斗は如何なり玉ふと問へば、甘夫人の曰、われ糜夫人と共に敵に追れ、車をすて百姓に交て逃けるが、又一手の敵に蒐ちらされ、糜夫人、阿斗共に行方を知ず、吾ひとり命を扶り來れりと語る所に、百姓共さわぎ起て一手の敵攻來る。趙雲打驚て之を見れば、眞先に生捕を馬の上に綁付たり。能々見れば生捕は糜竺なり。其跡に一人の大將手に刀を提げて千餘騎の兵あり、是すなはち曹仁が手下に淳于導と云猛將なり。糜竺を生どり手柄を顯さんとて來りけるを、趙雲槍を撚て突てかゝり一槍に突ころし、敗軍を打ちらして糜竺を扶け、敵の馬を奪て甘夫人をのせ、路を開て長坂坡に到りければ、張飛橋の上に馬を立矛を横たへ、大音あげて申けるは、趙雲なにとて曹操に降れる。趙雲が曰、われ夫人を尋ぬれども行方しらず、何ぞ敢て敵に降らん。張飛が曰、向に簡雍が來て我に知せずんば、我かならず誤て御邊を殺さん。趙雲が曰、君は何にましますぞ。張飛が曰、前面にあり、遠からず。趙雲が曰、糜竺は甘夫人を守護して先かへり玉へ、我は又取て回し糜夫人、阿斗の行末見きはめんとて、討のこされたる兵五六騎を引具し、又敵の陣に馳向ふ。ここに然るべき大將一人手に長き槍を持、背に劒を負て十騎あまりを從へ、馬を躍せて近付たり。

の合戰に行方を見失ひ、何の面目ありて再び君に見んや、不如命の有ん程は敵と戰ひ、平生知遇の恩に報ぜんとて三十餘騎ありける兵を從へ、取て回して敵の村雲立たる眞中に蒐入、四方八面を討やぶり馳廻て尋ぬるに、多の百姓共の泣號ぶ聲天に震ひ地を動す、矢に中り石に打れたる者共、子は親に離れ女は男を棄て、傷を蒙り血を帶て走り逃る者數を知ず、血は流れて溝の如く、屍は積で岳の如し。趙雲馬を打て走けるが、傍なる草の中に倒伏たる者あり、近付て是を見れば乃ち簡雍なり。急に助け起して、如何に夫人を見玉はずやと問ば、簡雍が曰、我さきに敵の來を見て一同に逃たりしが、二夫人は車を棄阿斗を抱て走玉へり、吾等は馬を飛して山の坡を過けるに、敵の大將追かけ、一槍に突落して馬を奪て回り去り、吾手を負て馬を取れしゆゑに此の如しと云ひければ、趙雲助て馬にのせ、手下の兵を二人付て送しめ、我は天に上り地に入て二夫人、阿斗の行衛を尋ね、若尋ね逢ずんば沙場に屍を晒べしと云すて、又長坂坡に進みければ、一手の兵聲をあげて趙將軍と呼。趙雲馬を駐め何者ぞと問に、答て曰、吾は皆車を推士卒たりしが、敵に射られて悉く創を蒙り、此に倒れて逃ること能ず。夫人の行衛や知たると問ば、答て曰、夫人は髪をさばき跣足にして百姓に交り、南に向て走り玉へり。趙雲乃ち馬を飛し南に向て馳ければ、案の如く一羣の百姓、男女數百人打雜て逃わしる。趙雲聲を

に跪て、趙雲心易して曹操に降れりと申す。玄德大に叱て、趙雲は我故人なり、安ぞ敵に降らんと云玉へば、張飛申けるは、彼御方の力盡勢迫たるを見て曹操に降り、富貴を得んと思なるべし、是みな人の常の心なり、何ゆゑに信じ玉はざる。玄德の曰、趙雲患難の中に相伴ひ、志の堅こと本より金鐵の如し、何ぞ富貴を心に掛て我に反ことあらん。糜芳が曰、誠は我趙雲が曹操が方へ行を見たり。玄德の曰、趙雲定めて故あらん、再び云者は斬て棄べし。張飛が曰、某自ら行て趙雲を尋ね、事實ならば一槍に刺殺さん。玄德の曰、汝錯て疑ことなかれ、昔し關羽が顏良、文醜を誅せしを見ずや、趙雲必ず我を棄じ、我彼が去に任す、相逼べからず、趙雲必ずわれを棄じと云玉へども、張飛つひに聽ず、自ら二十騎あまりを從へ長坂橋に行て見れば、橋の東に木深き林あり。是こそ究竟の事よと喜で一つの計を思案し、木の枝を切て二十人の騎たる馬の尾に結付、林の陰に往來して大勢なる體を見せ、張飛望み見て申けるは、この二十騎恰も五百餘騎に當べしとて、獨り笑して只一人橋の上に馬を立矛を横たへ、西を望で待居たり。趙雲は夜の四更に曹操が大軍攻きたり、大山の崩が如なりければ、命を棄て戰ひ、大勢を蒐破て玄德を尋ぬれども了に遇ず。殊更我預りし玄德の夫人老少を失て行方を知ざりければ、心の中に思けるは、君の眷屬二十餘人、別しては甘夫人、糜夫人、幼主阿斗三人なり、今夜


張飛勢と
伏日く只を
一騎敵軍と偵ひ

張飛

野より遥々と率ゐ來て、爭か棄るに忍んや。簡雍が曰、君憐んで棄玉はずば、禍必ず遠からじとて、前なる山は何なる所ぞと尋ねければ、一人答て曰、前面は當陽縣、山の名を景山と申す。玄德乃ち山の麓に陣を取玉へば、時秋の末にて涼風骨に徹り、日も已に昏ければ哭叫聲野に遍し。夜も四更の比に及で、俄に西北の方より喊の聲地を震して來ければ、玄德驚て急ぎ馬に打のり、二千餘騎を引て迎玉ふに、曹操精兵を驅て掩殺す。その勢あたるべからず。玄德命を棄て攻戰ひ、已に危く見えける所に、忽ち一彪の軍馬一條の血路を切開て玄德を救ひ出す。是すなはち張飛なり。一手に兵を合せ東を指て落玉へば、南の方に一簇の勢あり、長坂坡に殺到す。まづ先に進は荆州の大將文聘なり。玄德これを見て、主に背の賊大丈夫にあらずと呼はり玉へば、文聘辱しめられ、兵を引て去けるが、又跡より許褚兵を引て追きたる。張飛力を振て之を防ぎ、大敵を切ちらし東を望で走けり。喊の聲漸遠く成ければ、玄德息をも續あへず馬より下て休玉ひ、手下の者共を見玉ふに百餘騎に打成れ、妻子老少、糜竺、糜芳、趙雲、簡雍を始として其外の大將こと〴〵く行方知ずなりければ、玄德西を望で涙を流し、十萬に餘る百姓我を慕ふゆゑに浩る大難を被る、吾家の妻子從類一人もなく成果たり、假令土木を以て作る人なりとも、などか之を哀ざらんと云て聲をあげて泣玉ふ。暫ありて糜芳面に立たる矢をも拔ず、玄德の前

して云ければ、曹操愴み哀み、眞の忠臣なりとて江夏の太守關内侯に封じて、兵を付て案内者として又問て申けるは、玄德迯去て路何ほどか隔べき。知ものあり、答て曰、某承る、玄德は十萬に餘れる百姓を從へ、一日に纔に十里あまりの路を行と、然る時は三百里に過べからず。曹操乃ち大勢の中より精兵五千を擇出し、一日一夜の内に玄德に追付べし、大軍は跡に從て進み來れ、五千の兵は好馬を擇で實よき鎧を重よ、文聘は案内者なれば眞先に馬を飛して路を教よ、怠る者は首を刎んと云て自ら馬を出せば、五千の鐵騎その勢風火の如く、揉にもうで追かけたり。此時玄德は十萬に餘る百姓を引具して江陵城へと志し、纔に二千餘騎の兵を率して趙雲に妻子を守らせ、張飛を後備として落玉ふに、孔明が曰、關羽を江夏へ遣してより了に音信なきは如何なる故ぞ。玄德の曰、軍師ねがはくは自ら行て救を乞玉へ、劉琦向に軍師の教を受て繼母の難を逃たり、軍師ゆき玉はば必ず兵を發べし。孔明少しも辭せず、劉封と五百の勢を引具し、江夏を指て馳たりけり。この日玄德は簡雍、糜竺、糜芳を伴て馬を早め玉ふ所に、忽ち一陣の狂風馬の前より吹起、塵埃天を蒙ひ、日の光も見えず成て何ともなく喚き號聲遙に聞ければ、玄德大に驚玉ふ。簡雍本より陰陽に明なりければ、袖の中にて占て申けるは、これ大凶の兆なり、此應今夕にあり、君早く百姓を打すて、路を急で逃れ玉へ。玄德の曰、われ新

通俗三國志　巻之十七

○長坂坡趙雲救幼主

荊州事故なく曹操が手に入ければ、深く孔明を恨で隆中へ人を遣し、孔明が妻子を捉んとて遍く捜し尋させけれども、孔明元來三江の中に隱し置たれば、皆徒にぞ囘ける。曹操いよ〳〵憤を含み、玄德逃去て二十日餘りに及び、荊州を治て日を過しければ、荀攸諫て曰、逃る者は跡を畏れて路を急ぐ、江陵城は荊州第一の要害、金銀兵粮の用意澤山なり、玄德もし此城に籠りなば、急には中々落べからず、何とて早く追玉はぬぞ。曹操奮然として申けるは、汝なんぞ早く云ざる、我事多に因て忘居たり、いそぎ用意をせよとて諸の大將を集るに、文聘一人いまだ來らず。人を遣して召ければ、漸に出見ゆ。曹操問て曰、汝なにとて遲く來れる。文聘が曰、某向には劉表を輔て國家を安んずること能ず、劉表すでに逝去すと云ども、常に漢川を守り境を保て、生て孤弱に負ず、死して黄泉の下に愧ること無らんと思ひしに、計つひに遂ず、已ことを得ずして此の如し、眞に哀み愧べきなり、何の面目有て人より先に進み出べきと涙を流

に留て父母の故鄕を守たく候と哭ければ、曹操が曰、青州は都近き所なれば、汝を朝廷に勸て官人と成ん、もし此所に留なば人に害せらるゝこと有ん、速に行べしと促ければ、劉琮せん方なく蔡夫人と泣々住馴たる國を離れ、青州へとて出けるが、いつしか變果て相伴ふ人もなく、舊き大將に王威と云ものばかり只一人ぞ從ける。曹操密に于禁を呼、汝五百餘騎にて劉琮を追かけ、途にて一人も殘ず斬殺して、後の患を絕べしと云ければ、于禁承り、鎧取て投かけ馬を飛して追かけ、交近く成ければ、吾丞相の命を受汝等を殺と呼はり、兵を進て討て蒐り。蔡夫人、劉琮を抱て泣號ぶ。主の行衞を見屆んとて一人從ひ來れる王威、力を奮て向ふ敵に走り蒐り、火を散して戰けるが、了に大勢に圍れて討死しければ、劉琮が一類一人も殘ず亡されける運の末こそかなしけれ。

な一年の兵粮を用意せり。曹操又曰、軍舟いか程かある、何人か管領する。蔡瑁が曰、大小の兵船七千餘艘、本より某等二人これを管領す。曹操乃ち蔡瑁を平南侯水軍大都督とし、張允を助順侯水軍副都督としければ、二人拜して恩を謝す。曹操が曰、劉表存命の日、常に荊王たらんことを望しが了に其志を得ず、其子劉琮吾に降る、吾必ず天子に奏して王位に封ぜんと云ければ、二人拜謝して喜で去にけり。時に荀攸密に曹操に申けるは、君何とて人を知玉はざる、蔡瑁、張允は共に諂佞の小人なり、何故に高官を授て水軍の都督とはし玉ふぞ。曹操笑て、吾豈人を知ざらんや、吾手下の者共は悉く北國の兵なれば、一人も舟軍を知者なし、今假に此二人を用ひ、事了て後に誅すべしと云ければ、荀攸愕て退けり。蔡瑁、張允急ぎ回て劉琮に見え、曹操が王位に封ずる由を語ければ、劉琮大に喜び、次の日曹操襄陽城に入と觸たりしかば、自ら蔡夫人と印綬を齎兵符を執て、江を渡て相迎へ、道の傍に拜伏す。曹操扶け起して共に城中に入ければ、蔡瑁、張允襄陽の百姓を引具し、香華を具て出迎へ、文武の官人みな階下に再拜す。曹操先蒯越を呼寄、われ荊州を得ことを喜ず、汝を得たるを喜なりとて、江陵の太守樊城侯に封じ、丞相の掾より以下五人を薦て列侯とし、王粲、傅巽を關内侯に封じ、劉琮を青州の刺史に封じ、早く旅裝を促て青州へ行べしと云。劉琮大に驚き、某官爵の望なし、只願は此國

玉へ。玄德然べしとて書簡を調へ、關羽、孫乾に五百餘騎を指添、江夏に行て急を告、救の勢を引て江陵にて出合べしと云玉へば、關羽命を受て去にけり。其後張飛を後備として趙雲に妻子老少を護せ、十餘萬の百姓を引具し、一日二十里餘りを打て江陵を望で落玉ふ。去程に襄陽城には文聘、魏延が戰に死する者數萬人、屍は壘々として屠所の肉に殊ならず。此時曹操已に樊城に大軍を屯し、劉琮を召て對面せんとて使を遣ければ、劉琮怕て行ことを欲せず、蔡瑁、張允行んと望ければ、劉琮乃ち文聘を添て遣けり。時に王威と云者密に告て、曹操今將軍は降玉ひ玄德は遠く走玉ふに因て、心懈つて備なし、願は將軍數千の兵を整へ、險阻に設て討玉はば、曹操必ず破るべし、若曹操を破なば威天下に震ひ、中原を虎視して廣と云ども檄文を馳て定べし、是遇がたきの時、失べからずと云ければ、劉琮この由を蔡瑁に語る。蔡瑁大に怒り、王威天命逆順の理を知ず、何とて無用の舌を振と云ければ、王威聲をあげ、國を賣の賊、われ汝が肉を生ながら啖ざるを恨と罵ければ、蔡瑁いよ〳〵怒り、斬て棄んと云けるを、蒯越諫て之を宥。蔡瑁、張允と打つれ、樊城に行て曹操に見え、地に再拜して辭色甚だ諂佞なり。曹操問て曰、いま荊州の軍馬錢粮その數いか程かある、又誰人か管領する。蔡瑁が曰、騎兵五萬、步卒十五萬、水軍八萬、都合二十八萬人、金銀兵粮は大半江陵城に貯て、其外各處の城中み

へば、孔明が曰、江陵の城は荊州の要害、錢粮の備極て多し、若此城を取ば襄陽に勝べし。玄德然べしとて百姓を引つれ、江陵を指て落玉ふ。襄陽の百姓も日來玄德の恩に懷き、この騷動の扮に城を出てのがれ去者數を知ず。城の中には魏延と文聘と巳の刻より未の刻まで戰ひ、手下の兵悉く打死し、魏延只一騎に成ければ城を出て走けるを、蔡瑁、張允逃さじと追かけ、玄德の行衞も知がたければ、直に長沙郡へ落て太守韓玄を賴けり。玄德は多の百姓を引具して、大小の車數千輛肩に擔ひ背に負て陸續して來る者其數勝て計がたし。路の傍に劉表が墳ありければ、玄德自ら之を祭り、不才の辱弟德なく仁なくして寄託の重に背く、是止ことを得ざる故なり、兄若英魂あらば荊襄の民を救ひ、某に力を副て曹操を退玉へと淚に咽で云玉へば、三軍みな感動す。時に後陣より報じて、曹操已に樊城に入、舟を揃て江を渡す、早く道を急玉へと告ければ、孔明乃ち玄德に申けるは、江陵の城は究竟の要害なり、若これに入ことを得ば曹操を防べし、然ども十萬に餘る百姓を引て甲を被たる者は少く、一日二十餘里の路を行、此の如んば何の日か江陵に行著ことを得ん、倘敵に追付られなば如何して戰べき、暫く百姓を棄て道を急玉ふべし。玄德嘆じて苦濟二大事一、必以レ人爲レ本、今人歸レ吾、何以棄レ之と宣へば、聞人みな感淚を流しけり。孔明が曰、追手の兵遠からず、關羽を江夏の城へ遣はして、劉琦に救を乞

を早て襄陽城に到り玉へば、城の上には夥く旗を立、鹿垣密く結まはし橋を曳て人を入ず。玄德壕の傍に馬を駐め、賢姪劉琮、われ此所を借て暫百姓の命を助んと欲す、御邊に對して疑ことなし、快く門を開玉へと呼はり玉ふ。番の者共此由を報じければ、劉琮怖れ戰て起こと能ず。蔡瑁、張允之を聞て急ぎ矢倉に上り、射手を揃て散々に射。城外の百姓みな城を望で哭き哀所に、城中に一人の大將數百人を從て蔡瑁、張允に切て蒐る。此人は身の長九尺、面は重棗の如く目は朗星の如し、義陽の人に魏延字は文長なり。大音揚て申けるは、劉玄德は仁義の人なり、汝等何とて曹操に降れる、是勇士の爲ところに有ず、我今劉玄德を城中に招き此賊を誅せんとて、刀を舞して番の者共を切散し、門を開て橋を渡し、劉皇叔早く御入候へと呼りければ、張飛馬を打て入んとす。玄德急に推止め、百姓を驚しむるなと云玉へば、張飛敵の矢を射を見て心の中大に怒り、襄陽を踏破んとひしめけども、玄德許玉はねば齒咬をして忍たり。浩る所に城中に一人の大將馬を飛して魏延を叱り、汝は名もなき下將なるが、何とて妄に舌を搖して上を犯せるぞと呼はり、槍を撚て突て蒐る。此人は身の長八尺、面貌雄偉、南陽宛城の人に文聘字は仲業、荊州の大將なり。兩方の兵入亂て戰ひ、城中鼎の沸が如く矢叫の聲天地を動す。玄德この體を見て吾本民を安ぜんことを思うて却て民を害す、襄陽へ入べからずと云玉

今老母亡て事に益なし、一生の間人の爲に一も計を設候じ、君今臥龍あり、大業の成ざるを愁玉ふな、今曹操大軍を八手に分白河を塡で攻來る、君早く去玉ふべしとて相別て囘けり。玄德孔明に向て如何すべきと問玉へば、孔明が曰、速に樊城を打棄、襄陽に到て防べし、是より外に計なし。玄德の曰、多の百姓我を慕て此所まで來れり、爭か棄に忍んや。孔明が曰、人を以て百姓に此由を告て、從んと云者を引具して落玉へ、關羽に命じて舟を揃て江を渡しめん。玄德これに從ひ、糜竺、簡雍に命じ百姓に觸て、今曹操攻來る、此城を棄て襄陽へ走る、汝等從んと思ふ者は我と共に江を渡れと告させ玉へば、樊城、新野の百姓老幼共に聲を揃て、我等命を失とも使君に從ひ行んと云て皆號叫で來ける。此時徐庶囘て曹操に見え、玄德更に降參せずと云ければ、曹操大に怒り、卽時に五萬の兵を遣して白河を塡、大軍八手に分て推寄る。新野、樊城の百姓後より敵の蒐と聞て、老たるを扶け幼を抱て男女相交り江を渡けるが、泣叫聲夥し。玄德舟の上にて此有樣を見玉ひ、多の百姓みな吾を慕ふ故に浩る禍を蒙る、吾命生て詮なしとて、身を投んとし玉ひけるを左右の人々推止む。之を聞人淚を流ずと云ことなし。玄德南の岸に著玉ひけるが、百姓の後れ來れる者北の岸に立て哭ければ、又關羽を遣して渡し玉ふ。其後馬

大に怒り、諸葛匹夫何とて此の如なる、我大軍を以て一齊に新野へ推寄、野に滿山に漫て陣を取、兵を八手に分、一手は山路より進一手は白河を塡て樊城を踏破んとて悉く打起けり。時に劉曄申けるは、丞相始て此所へ來り玉ふ、先民の心を懷玉へ、民の心懷く時は小勢なりとも守つべし、今玄德新野の民を樊城に移し置、御方の大軍一度に蒐ば新野も樊城も悉く粉に成ん、多の百姓を殺んよりは丞相之を憐で、先人を遣し玄德を招て降參せしめ玉へ、玄德假令降ずとも、丞相の心百姓を恤玉ふことを人皆知て德を感ぜん、萬一玄德降なば荊州戰ずして御手に入べし、其後荊襄の兵を起して吳の孫權を破玉はば、是天下一統なり。曹操が曰、此計大によし、誰を以てか使とせん。劉曄が曰、徐庶本より玄德と交を厚す、此人に命じ玉へ。曹操が曰、徐庶を遣なば再び回じ。劉曄が曰、徐庶若回ずんば天下の人に笑れん、少も疑はず遣し玉へ。曹操げにもとて徐庶を召出し、吾本樊城を踏破んと欲す、然れども多の百姓を殺んことを憐む、汝行て玄德を勸め、甲を脫で降しめよ、然ば今までの罪を免て官爵を與べし、若又迷を執て順ずんば、軍民共に誅し玉石共に焚ん、我常に汝が忠誠なるを知、此故に疑ことなく遣なりと云ければ、徐庶命を受て樊城に行。玄德、孔明出迎て互に昔の情を物語して、徐庶申けるは、今某を此に來しむるは曹操が奸計、假に民の心を懷ん爲なり、某若回ずんば萬人の笑と成

かば、曹仁したゝか討れ這々に走に、又劉封が一軍傍より討て出散々に蒐立ければ、夜の四更に到て人も疲れ馬も弱て、纔に殘る勢も皆頭を焦し額を爛したる者なれば、漸く白河の邊に到り爭て水を飲、馬は水を見て亂行して頻に嘶き躁ぎけり。關羽は河上に居けるが、新野に火掛て後漸く時刻に成ぬと待所に、流の下に人馬夥く躁ければ、すは時分よと云程こそあれ、一度に塞止たる水を切流しければ、水勢天に滔て曹仁が人馬溺れ死する者數を知ず。その內水の淺を窺ひ、曹仁河を渡て博陵の渡口に近付ければ、忽ち喊を咄と造て一彪の敵軍路を取切、眞さきに進だる大將は張飛なり。雷の落かゝる如く曹仁が勢を追取こめ餘さじと揉だりければ、血流て泉の如く、橫れる屍は麻を散せるが如し。大將曹仁も已に危く見けるを、許褚一人取て反して張飛と槍を合せ、十合餘りにして路を奪て逃去ぬ。張飛兵を收て玄德、孔明と一手になり、江に沿て來ければ、劉封、糜芳舟を揃て待居たり。諸軍悉く渡し了て孔明その舟を燒盡し、直に樊城に入て休けり。

○玄德敗ニ走江陵一

曹仁、曹洪辛き命を逃て新野城の燒跡に陣を取、曹洪一人宛城へ行敗軍の樣を告ければ、曹操

奴原が體かなとて道を尋て上んとすれば、屏風を立たる如なる岸の上より大木大石を雨の降如に投落す。許褚兵を損て上べき樣なき所に、後より何ともなく喊の聲響ければ、路を求て打向んとするに、日已に暮て方角を知ず、曹仁も大軍を引て馳來り、只一揉に新野城を攻取、今夜暫く息を休め、落行敵を明日追んとて悉く四方の門より推入けれども防ぐ敵一人もなし。曹洪申けるは、是は如何樣計窮り、勢盡て百姓を引連夜中に逃たりと覺ぞ、今夜は此所に一宿して夜明なば急に追蒐べしとて内に入て休ければ、此時諸軍みな飢に臨み、城中に入て我先にと兵粮を使ふ。夜も早初更の比過ける時、大風俄に吹起て番の者共火燒出たりと告來る。曹仁少も驚ず、是定て諸軍勢飯を炊とて、風吹に油斷して手誤し出したるならん、躁べからずとて猶帷幕の内に休居ければ、追々人來り西北南悉く火起れりと報じて俄に城中鼎の沸が如くひしめきけり。曹仁、曹洪膽を失ひ、鎧よ刀よとて馬に乘ければ、早四方八面火に成て紅天を焦し、火の中烟の中とも云ず逃路は何ぞとて走り廻りけるに、一人東の門に火なしと呼はりければ、我劣じと十萬の大軍一の門より出んと互に推合程に、手足を踏折れ倒て其儘死する者幾千萬とも知がたし。されども曹仁等宗徒の者は恙なく逃出ちり〴〵に走ければ、忽ち喊を作て趙雲一軍を引て追討に攻。曹仁辛き命を逃延けるに、又鼓を打て糜芳が一軍路を遮り引包で揉だりし

て出て敵を破り、其後早く白河に來べしと云ければ、二人計を受て出にけり。孔明手分已に了ければ、玄德と共に高き山に上て軍の樣を望み見る。去程に曹操は宛城に在て曹仁、曹洪を大將とし、十萬の勢を先陣として新野城に向しむ。許褚は折衝將軍と成て三千餘騎の精兵を率し、鐵の甲を一樣に包み連て先陣より先に進み、晝の午の刻に鵲尾坡に到り、案內者を呼で此より新野まで路の程いか程か有と問ば、只三十里なりと答ふ。許褚乃ち數十騎を遣して行先を窺しむれば、其人回り來り、此所山に依嶺に傍て敵の兵陣を取、靑き旗紅の旗を打混て勢の多少は見分がたしと申す。許褚乃ち三千餘騎を引て一齊に打向へば、劉封、糜芳二色の旗を颯と兩方へ引わけ、隊伍を亂さず整々として備ければ、許褚馬を止め御方を制して進ざらしむ。諸將問て曰、何故に蒐り玉はぬぞ。許褚が曰、行先必ず伏勢有ん、汝等此に留て動こと勿れ、我一人引回して先手の大將に此由申んとて、馬を回して曹仁に見え敵の趣を告ければ、曹仁が曰、古より兵法に有ㇾ虛有ㇾ實の論を聞ずや、此は敵を疑しむる計なり、何の伏か有ん、早く兵を進よと云ければ、許褚又鵲尾坡に回り兵を下知して攻入に、敵一人も見ず成にけり。時に日も西に傾て左の頂に大擂を吹聲大に聞ければ、恠で之を望に、傍なる山の絕頂に一簇の旗を立、兩傍に蓋を傾て、左に玄德右に孔明二人相對して酒を飲悠々として居ければ、許褚腹を立、憎き

と知べし、其時急に塞止たる水を切て流し、水に順て攻蒐玉へと云ければ、皆計を受て出にけり。次に張飛を呼、御邊は千餘騎にて白河の渡口に埋伏し、曹操が勢破ば悉く淺き所より渡り去べし、其時一度に討て出關羽と一手に成玉へと云ければ、張飛兵を引て出にけり。次に趙雲を召、御邊は三千の兵を引て乾ける柴蘆茅を用意し、新野の城近き屋の上に積置て硫黄焔硝を灌ぎ、明日は乃ち昴日雞直日なれば晩方より大風吹ん、大風起ば曹操が勢必ず城中に入て休べし、其時御邊の三千餘騎を四手に分、西北南の三門に各五百騎づつを遣して火槍、鐵砲、火矢の類を投かけ、火盛に燒る時城外にて喊の聲を擧、東の門ばかりを殘して却て兵を伏なば、敵あわて亂て悉く東の門より出ん、其時後より追討に攻蒐ば、敵一度も回ことを得ず散々に走べし、是寡を以て衆に敵する計なり、必ず全く功あらん、夜の明方に關羽、張飛と出合、その時遲なはることなく早く樊城に入べしと云ければ、趙雲計を受て出にけり。次に糜芳、劉封二人を呼、御邊は二千餘騎を率して千騎は紅の旗を指せ、千騎には青き旗を指せ、新野を離こと三十里にして鵲尾坡と云所あり、此所に馳向ひ、先二色の旗を入雜て陣を取、もし敵の勢來りなば糜芳は紅の旗を指たる千餘騎を左に備へ、劉封は青き旗を指たる千餘騎を右に備へ、整々として磬なば敵の心疑て急には必ず進まじ、其時四方に分て谷際に伏、新野城に火の起を見ば討

叔父垂レ憐、盡起二麾下精兵一、約會同滅二惡黨一、共取二先君之基業一、實爲二萬幸一。泣血拜書、立待二批回一。時建安十三年

玄德見了て、御邊は劉琮が國の主と成たるを知て、九郡を獻じて曹操に降參したるを知まじと云玉ひければ、伊籍驚て申けるは、君何ぞ喪を弔と號して襄陽に到り、劉琮を欺て擒にし、悉く惡黨を討玉はざる。孔明が曰、伊籍の言某が心に同じ、君早く之に從玉へ。玄德涙を流して曰、劉表危に臨で孤子を我に托す、我今信に背て自ら國を奪ば、九泉の下に死して何の面目ありて劉表に見んや。孔明が曰、今取玉はずば卽今曹操が兵已に宛城に來れり、先手の勢は間近く寄る、如何して防玉はん。玄德の曰、不レ如樊城へ行て避べしとて相議する所に、早馬急を告て曹操已に博望坡まで攻來れりと躁ければ、先伊籍を回して軍馬を整へ、孔明に計を問玉ふ。孔明が曰、御心を安じ玉へ、某先日の軍に火を以て夏侯惇を破り若干の敵を亡せり、今曹操自ら來る、某一の計あり、必ず膽を剋させん、先四門に榜を出して此所の百姓老少男女みな我に從て難を避よ、曹操來ば必ず悉く殺べしとて急に催し、孫乾は西河の岸に舟を揃て百姓を渡し、麋竺は百姓を引て樊城に入しめ、關羽は千餘騎を引て白河の上に埋伏し、布の嚢に沙を盛てその流を塞止、明日夜の三更より後河下に人馬もの躁く語り噺を聞ば、これ乃ち曹操が敗軍

羽具に尋問に、宋忠隱すこと能ず、劉表已に逝去し玉ひ、劉琮を立て國の主とす、今曹操が向ふと聞て降參の書を獻ず、某その使なりと云ければ、關羽大に驚き宋忠を捉て新野に回り、其趣を語るに、玄德聞きあへず淚を流して昏絕し玉ふ。張飛進み出、事已に此の如し、先宋忠が首を刎、その後兵を起して荊州を攻取、劉琮を打殺し玉へとひしめきければ、玄德の曰、汝妄に言こと勿れ、我宜く相料んとて、劍を拔て宋忠に向ひ、諸人かゝる企あらば汝何ぞ早く知せざる、今汝が首を刎たりとも我怒を解がたし、汝早く回べしと云玉へば、宋忠が曰、恐は城外の人某を殺ん。玄德の曰、今汝を免して又殺は大丈夫のすることに有ず、誰か敢て我命に背んと云玉へば、宋忠頭を抱て鼠の逃が如に去にけり。玄德は只憂悶て居玉ふ所に、忽ち江夏の劉琦使あり、伊籍と云もの來れりと云ければ、玄德昔の好を思ひ、階を下て堂上に請じ、前日の恩を謝し玉ふ。伊籍が曰、頃日劉表已に世を辭し玉ふ、蔡夫人蔡瑁等と計を合せ、深隱して喪を報ぜず、此故に人を遣て實否を聞しむるに、果て劉琮を國主とす、若此處へ聞ざること有んかとて某を使とすと云て哀書を上りければ、玄德披き見に、其書に曰、

孤子劉琦謹獻哀書、上達于叔父大人座前。近聞、先君薨于荊州、繼母與蔡瑁張允二人商謀、不即報喪、矯立弟劉琮爲九郡之主、大亂綱常、實難容忍。伏望、

琮が曰、吾爭か及ん。王粲が曰、曹操は人傑なり、雄略智謀世に雙なく、袁紹を官渡に摧き、孫策を江外に驅、立徳を隴右に逐打、烏丸を白登に破り、梟夷蕩定すること往々に神の如し、今日の事去就よく知たり、君若甲を卸戈を倒し、天に應じ人に順て曹操に降玉はば、必ず重く用られ、全家長く安して福祚必ず子孫に及ん、是萬全の計なり、某亂世に生れ、命を此國に托して君の恩を蒙る、此故に誠を盡して申なり、君明に察して後に悔玉ふなと云ければ、劉琮が曰、先生の教然と云ども、吾一人の心にては決し難し、母に此由申べし。時に蔡夫人屏風の後より出て曰、王粲が言、傅巽が論、蒯越が諫、みな是興廢の事見所相同じ、何ぞ我に問ことをせんと云ければ、卽時に降參の書を作り、宋忠を使として密に曹操が方へ遣ける。

〇孔明焼二新野城一

宋忠馬を早めて宛城に到り、曹操に見て降參の書を獻ければ、曹操大に喜び、劉琮を忠烈侯に封じて衣服鞍馬を賜ひ、永く荆州の主と成べし、我若國に入ば必ず城を出て迎よと云て宋忠を囘しければ、宋忠拜謝して囘り已に江を渡んとしける所に、向より一手の人馬馳來る。宋忠避べき路なく近くなりて之を見ば、關羽眞先に進來る。宋忠驚て怕入たる氣色なりければ、關

基を受て坐いまだ暖ならざるに、何ぞ身を屈て人に降んと云ければ、蒯越が曰、傅巽が云所尤も善、君若此諫を聞玉はずば其危こと三あり。劉琮が曰、如何ん。蒯越が曰、逆順有大體、強弱有定勢、今曹操南を伐北を攻、勅命を以て名とす、君若之を拒玉はば臣として勅を背なり、豈逆道に非や、是國の危き一なり、今君新に荊州を司て中國百萬の勢に敵せんとす、是勢の危き二なり、君いま勢弱し、玄德を賴で援を求玉ふとも、量に玄德爭か曹操を防べき、假令曹操を防得るとも、玄德何ぞ身を屈て君の下に居んや、必ず國を奪べし、是身の危き三なり、此の如なる三の危ありて曹操を防ぎ力を爭んは、譬ば一塊の土を以て大海を塡んとするが如し、況や荊州の將士、曹操が大軍その勢飄風の如く威雷電の如なるに、聞怕して戰ざる先に膽を冷す、安ぞ能敵すべき。劉琮が曰、諸將の善言われ從ざるにあらず、先君の基業を受て一旦に棄んことを恐るなり、必ず天下の笑草と成ん。時に一人昂然として進出、某一の計あり、荊州久遠の計を成んと云。諸人之を見ば荊州の上賓、山陽高平の人に王粲字は仲宣なり。劉琮問て曰、御邊いかなる計かある。王粲が曰、方に天下大に亂て豪傑雙び起る、今倉卒の間強弱いまだ分ず、此時に當て家々帝王たらんことを願ひ、人々公侯たらんことを欲す、某古今の成敗を見に、能先に機を見者は常其福を受、今君自ら曹操に比せばいかん。劉

なりと申ければ、蔡瑁怒て曰、汝何者なれば妄に無用の舌を動して故主の遺書に逆ふぞ。李珪大に罵て、皆蔡氏の逆黨此國を失んとす、我命を棄るとも法を背人とならじと呼はりければ、蔡瑁いよ〳〵怒り、武士に命じて引出して首を斬せしかば、聞人みな涙を流す。其後了に劉琮を國主と仰ぎ、劉琦にも知せず玄德にも告ず、劉表の柩を襄陽の東四十里にして漢陽と云原に葬り、此より蔡氏の一黨荊州の兵を摠領し、蔡夫人、劉琮を守護して襄陽城に陣を張、玄德、劉琦もし來ば一軍すべしとて、治中鄧義、別駕劉先二人を荊州の城に殘し置けり。劉琮已に襄陽城に入ければ、早馬急を告て、曹操已に近付直にこの所へ攻來と注進す。劉琮大に驚き蔡瑁、蒯越を呼で評議しければ、東曹掾傅巽字は公悌と云者進み出、いま先君新に亡玉ひ、長子劉琦は江夏に在す、若兵を引て來り玉ふ時は荊州危し、一つの利害なり、今この襄陽に居ながら曾て玄德に知せ玉はず、新野は此より纔に江一つを隔たれば、玄德知玉はば必ず兵を起して罪を問ん、此二の利害なり、曹操百萬の勢を率して江漢を呑んとす、是三の利害なり、此の如き三の害あれども、某一の計を用て一國の民をして泰山よりも安からしめんと云ければ、劉琮問て曰、いかなる計ぞ。傅巽が曰、荊州襄陽の兵を悉く曹操に獻り降參をし玉はば、曹操必ず重く君を用て百姓みな安穩ならん。劉琮大に怒り、是いかなる言ぞ、我先君の

云ん。その後劉表は日に從て病重く、又曹操が百萬の勢にて攻來と聞て、此驚小ならず、遺書を寫て玄德を賴み、嫡子劉琦を取立荊州の主と成べしと有ければ、蔡夫人大に怒て內門を密く鎖し、蔡瑁、張允に命じて外門を塞しめ、內外の出入を止て人を通ず。此時江夏の劉琦は父の病危と聞て、急ぎ荊州に來て城に入んとすれば、蔡瑁門を固め君父の命を受て江夏一大事の要害を預玉ふ、其任甚だ重し、然に打棄て輕々しく來玉ふ、若吳の兵虛にのりて攻來ば如何して防玉はん、今若入て父に見玉はば必ず大に怒玉ふべし、怒る時は病必ず重なる、是孝の道にあらず、早く江夏へ囘玉へ、內へ入玉ふなと云ければ、劉琦すべき樣なく强て入ことも叶ず、門外に立て痛く哭き、再び馬に乘て空く江夏に囘けり。其後八月戊申の日劉表了に逝去しければ、蔡夫人密に蔡瑁、張允と相議して遺書を改め、弟劉琮を國の主と成べしと披露しける。此時劉琮は年纔に十四歲なりと云ども頗る聰明なりければ、諸將を集て、吾は是漢室の宗親にて荊州の地を保つ、父已に世を辭し玉へども兄劉琦江夏に居玉ひ、叔父玄德新野に在す、汝等吾を立て國を保しむ、若兄と叔父と兵を起して罪を問ば如何すべきと云ければ、諸將いまだ答ざる所に、階下の幕官李珪列を出て、君の言道理至善に當れり、急ぎ使を馳て江夏に報じ、兄劉琦を國の主として玄德と心を合せ、北は曹操を防ぎ南は孫權を拒玉へ、是萬全の計

賊を市に斬んとて、卽時に廷尉に命じて孔融を捉しむ。時に孔融が二人の子家に在て碁を打けるが、人走り來て父君いま廷尉に捉れ玉へり、何とて斯る體にて居玉ふと告ければ、其子少も驚ず、那有二巢毀而卵不レ破者一乎と云ける所に、廷尉又來り、一家の男女一人も殘ず市に出して斬殺し、父子の首を獄門に梟ければ、京兆の脂習と云者其屍を抱き、孔文擧吾を棄て死せり、吾何ぞ獨生殘んと云て哀み哭きけるを、人之を聞て曹操に告ければ、已に殺んとしけるに、荀彧堅く止め、この脂習は常に孔融を諫て、御邊の剛直甚だ過たり、必ず世の患に罹んと云り、然る時は義人なり、殺べからずとて赦ければ、脂習乃ち孔融父子が屍を懇に葬りけり。

此時荆州には太守劉表重病を受て已に危かりしかば、使を以て玄德を召。玄德、關羽、張飛を從へ、急に來て見玉へば、劉表が曰、我今病危し、孤子を御邊に托す、我子不肖にして諸將も皆零落せり、我死して後は御邊荆州を治玉へ。玄德下り拜して曰、某必ず誠を盡して孤子を扶べし、荆州を治ることは我尊命に從ずと再三固く辭し玉ふ。次の日曹操自ら八十萬の勢を率して已に都を打起、此所へ推寄ると告ければ、玄德急に別て新野に回玉ふ。孔明其故を問に、劉表孤子を托し國を讓と云ども、我之を受ずと告玉へば、孔明申けるは、君今國を受玉はずんば禍必ず遠からじ。玄德の曰、我劉表の恩を受、危に臨で國を奪なば、人みな恩を忘たりと

再び諫ば必ず首を斬んと怒ければ、孔融外に出て大に嘆き、以不仁伐至仁安有不敗乎と云けるを、御史大夫郗慮と云ものが下人これを聞、家に回て其由を語る。郗慮常に孔融に侮れ、深く恨る心ありしかば、下人の語を聞て究竟の事よと喜び、曹操に見て曰、孔融が反逆を丞相は知玉はずや。曹操が曰、御邊明に語玉へ。郗慮が曰、孔融常に丞相を侮ること小兒の如し、我先一二を述て罪を正ん、丞相曾て禁酒の法を出し玉ひし時、孔融上言して、天に酒旗の星あり地に酒泉の郡あり、人に旨酒の徳あり、此故に唐堯も不飲千鍾無以成其聖、桀紂は色に溺て國を亡せり、今の世酒を禁ぜんより何ぞ婚姻を禁ぜざると云り、是深く丞相を誚に有ずや、又曾て丞相古の妲己が事を問玉ふ時、孔融答て、武王伐紂のち妲己を周公に賜と云り、丞相常に孔融が博學なるを以て、謂事みな古き書冊に在と思て深く信じ玉ふが、後に又妲己は武王に斬れたりと云、是丞相を如何なる人と侮や、曾て禰衡と交厚く、互に讃して禰衡孔融を稱して仲尼不死と云ければ、孔融又禰衡を稱して顏回復生ぜりと答ふ、先年禰衡が赤裸にて丞相を辱たるも乃ち孔融が所爲なり、此等の事は論ずるに足ずと云ども、孔融元より玄德、劉表と交深して常に音信を通ず、殊に孫權が使に對して朝廷を誹謗し、密に消息を傳ふ、是を以て其大逆不道を見玉へと言を巧にして云ければ、曹操大に怒り、我この

り、自ら面縛して曹操に見え階の下に跪ければ、曹操左右に命じて解宥し、廳上に召て軍の樣を問に、夏侯惇が曰、某博望坡に到り、敵軍を見て力を盡して攻入候しに、孔明に火を以て攻られ、自ら躁立て亂て候。曹操が曰、汝幼より軍を經て、狹所は必ず火攻を用ること を知ざるか。夏侯惇が曰、于禁曾てその事を申候しゆゑ、後悔すれども及候はず。曹操又于禁を呼で尋ね問に、事の樣ありし儘に語ければ、汝誠に大將軍の才ありとて厚く于禁に恩賞し、吾心に憂る者は玄德と孫權となり、今われ百萬の雄兵あり、此時南方を退治せずんば更に何を期せんとて、曹仁、曹洪を先手とし、張遼、張郃を第二とし、夏侯惇、夏侯淵を第三とし、于禁、李典を第四とし、自ら文武の大將と第五に備て各十萬の勢を分、都合其勢八十餘萬なり。又許褚を折衝將軍とし、三千餘騎を率して先手より前に進み、山に遇ては路を開き、水に遇ては橋を掛しむ。建安十三年七月下旬、吉日を定て都を起、荀彧を留て許都を守しむ。時に大中大夫孔融進み出て諫て曰、荊州の劉表、新野の玄德、皆是漢家の宗親にして遂に朝廷に叛くことなし、吳の孫權は六郡に虎踞して大江の險を保つ、皆輕々しく攻がたし、今若不義の師を起して兵を損ひ民を苦しめ玉はば、甚だ天下の望を失ん。曹操叱て曰、玄德しば〳〵我を侮り、劉表久く謀叛を企、孫權は命に逆て朝廷に叛く、是等の罪ある者を我何ぞ討ざらん、汝

飛は十分に打勝、二人馬の上にて孔明が計を感じ、二三里ばかり回ければ、糜竺、糜芳一輛の車を推、五百餘騎の兵簇擁して馳來る。關羽、張飛之を見に、孔明車の上に坐しければ、二人急に馬より下車の前に拜伏す。玄德も趙雲、關平、劉封等と敵の兵糧車百輛ばかりを奪來り、互に喜を述て諸將と共に新野に入玉へば、孫乾鄉の父老を引郭を出て迎へ奉り、皆拜舞雀躍し、吾等大敵の禍を免たるは君の賢人を得玉ひし故なりと云て共に城中へ入にける。

○獻㆓荊州㆒王粲說㆓劉琮㆒

玄德は孔明が計を用て夏侯惇が十萬餘騎を殘少に打破り、城中に入て喜を成玉へば、孔明が曰、今敵を破と云ども曹操必ず自ら來ん。玄德の曰、如何して防べき。孔明が曰、某一つの計あり、曹操を防べし、新野は分内狹して久くは住り難し、近比劉表大病を受て甚だ危しと聞り、荊州を借て安身を計るべし、荊州は兵多く粮足り、假令曹操攻來るとも何ぞ畏ること候ん。玄德の曰、此計よしと云ども、某深く劉表の恩を受、いかんぞ國を奪に忍んや。孔明が曰、今もし取玉はずば後に悔とも及ぶまじ。玄德嘆じて、吾たとひ只今如何なる禍に遇とても、義に背ことをせじと宣ば、諸人みな感嘆す。去程に夏侯惇は辛き命を助り、敗軍を引て都に上

簡雄
劉封
孔明
趙雲

関羽張飛
関平
玄徳
糜竺
糜芳
孫乾
張飛
関羽

る若武者なれば、屈强の兵を態と小勢にすぐりて自ら一陣に進ば、于禁、李典は大軍を驅て跡に續く。李典山際の路狹して蘆茅の茂たるを見て急に于禁に申けるは、敵を欺く者は必ず亡ぶ、輕々しく追べからず。于禁が曰、これ程の敵を何ぞ怕ん。李典が曰、南道路狹く、山川相逼て草木茂れり、敵若火を以て攻ば如何せん。于禁驚て申けるは、御邊の言當れり、吾先手に追付此山を報ずべし、御邊は此に在て能後陣を固玉へとて馬を飛して、夏侯都督暫く住玉へと呼はりければ、夏侯惇馬を住て何事ぞと問。于禁が曰、某量に南道路狹して草木茂れり、敵に火を付られては叶まじ。夏侯惇色を變じて曰、何とて早く知せざる、大事の處に深入せり、急ぎ囘せとて馬を立直せば、後より喊の聲響て早火の光見けるが、これを合圖に四方八面火燒出、狂風俄に吹起て火焰天地を焦しけり。夏侯惇が兵大に亂て互に踏死され、上を下へと躁立て火を突煙を冒て走ければ、後より趙雲兵を引て攻蒐り、去べき路も無れば死する者數を知ず。李典は後陣に居けるが夥く燒殺され、博望坡に貯置たる兵粮を救んとて這々出て走ければ、火の光の中より關羽一軍を引て路を塞ぐ。李典大に怕て漸々に切ぬけ只一人逃延たり。夏侯惇、于禁も後陣の軍に火の掛を見て小路より落失、夏侯蘭、韓浩二人は後陣に加んとて急けるが、張飛に逢て夏侯蘭は討れ韓浩は燒爛て辛き命を扶り、殘る軍勢終夜討れて曉に軍を收む。關羽、張

後は羅口川なり。夏侯惇乃ち于禁、李典に後陣を守せ、自ら馬を蒐出して副將夏侯蘭、護軍韓浩と數十騎にて敵陣を望み、馬上にて大に笑ふ。諸將何を笑玉ふと問ければ、夏侯惇が曰、徐庶さきに丞相の前にて甚だ孔明が才智を稱して神通ある樣に云しが、今目前に見て孔明を知、これ等の勢を以て我と戰んは、犬羊を驅て虎豹に鬪しむるが如し、吾丞相の御前にて必ず玄德孔明を生捕んと云しが果して違ず、何も急に進で新野を只一息に蹈破れとて一陣に騎出せば、新野の兵陣を開て趙雲馬を馳出す。夏侯惇大音あげ、玄德義に背き恩を忘る、汝諸の士卒、假に魂の宿れる屍を悉く討取んと訇ければ、趙雲聲を揚て申けるは、汝は曹操に從て國を賊む鼠なり。夏侯惇大に怒り馬を飛して蒐ければ、趙雲槍を撚て二三合戰ひ詐て引退く。夏侯惇勝に乘て兵を引て追掛しかば、趙雲十里ばかりにして取て囘し、暫し支て又走る。韓浩急に夏侯惇を住て申けるは、趙雲詐り負て敵を引、恐は伏勢あらん。夏侯惇が曰、箇程の敵軍は假令十面埋伏すとも吾何ぞ怕ん、只追つめて打んとて、已に博望の坡に到ければ、忽ち鐵砲を響して玄德一軍を引て討て蒐る。夏侯惇大に笑て申けるは、是乃ち敵の伏勢なるべし、我忽に蹴破て今夜の中に新野を取ずんば、誓て軍を休じとて驀地暗に攻蒐れば、玄德も趙雲も防兼たる體を成て散々に逃たりける。日も已に暮ければ、濃雲きびしく掩て月の光も幽なるに、夏侯惇氣早な

と云ければ、關羽、張飛之を聞て問て申けるは、吾等を遙々百里の外に出て戰しむるに、御身は又何の手へ向玉ふぞ。孔明が曰、我自ら此に留て新野を守る。張飛大に笑ひ手を拍て申けるは、されば此者の智恵の程こそ露たれ、吾等は皆遙々出て戰ふに、汝一人家に殘て安坐するは何事ぞ、笑へや人々と云ければ、孔明が曰、劍印こゝにあり、令に背ば必ず斬ん。玄德又張飛を喩して、汝令に違こと勿れ、運籌帷幄之中、決勝千里之外と云ことあり、聞ずやと云玉へば、張飛あざ笑て外に出關羽に申けるは、吾この度は彼の下知に從て計の違か違ざるかを見べしとて兵を引て出にけり。諸の大將も孔明が計を心の中に危けれども、皆悉く出向ければ、玄德問て曰、我は如何して敵を待べき。孔明が曰、今日兵を引て博望の山の麓に陣を居玉へ、明日の晩方に敵軍定て來ん、其時陣を棄て走玉へ、火を擧を見玉はば取て囘して討玉ふべし、夜の明方には必ず軍を收べし、某は糜竺、糜芳と五百の勢にて此城を守るべし、孫乾、簡雍二人は勝軍の喜を述ん爲なれば酒肴を用意せさせ、諸將の手柄を書記しむべしと云ければ、玄德も心の中覺束なくは思ながら、兵を引て出玉ふ。建安十三年秋七月、夏侯惇十萬の兵を引て博望坡に近付、精兵を擇で先手とし、殘る勢は後陣の兵粮武具を守せ、人馬を推て進所に、向に馬煙起て一手の勢陣を張。夏侯惇案内者を呼て處の名を問ければ、答て曰、前は博望坡

羽、張飛これを聞付、さらば此度孔明を先手に進て手柄の程を見んと云所に、玄德二人を召玉ふ。二人出て見ければ、玄德の曰、夏侯惇十萬の兵を率して此所へ攻來る、如何して防べき。張飛が曰、水を用て戰しめ玉へ。玄德の曰、智は孔明を頼み勇は汝二人を頼む、何とて怒を含めるぞ。二人退て出ければ、又孔明を召て如何して防んと問玉へば、孔明申けるは、只恐は關羽、張飛が某が命に服ざることを、若某を用て敵を防んと思玉はば、君の劍と印とを借玉へ、某諸將を下知して計を成ん。玄德乃ち渡玉ひければ、孔明諸將を呼集む。張飛是を聞て關羽に申けるは、まづ彼が計を聞て別に宜く料ふべしとて共に出て見ければ、孔明が曰、此を離ること九十里にして博望坡と云所あり、左に山あり豫山と云、右に林あり安林と云、此所伏を置べし、關羽千五百の兵を引て豫山に藏れ、敵の來り過るを待て後陣の備に打て蒐り、南に當て火を擧る時敵の兵粮武具を貯たる所に攻かゝり、火を付て燒崩玉へ、張飛は千五百の兵を引、安林に行て後の谷に深く隱れ、南に當て火を擧る時討て出て敵を破れ、關平、劉封二人は五百の勢を率して硫黄焰硝火を引ものを用意し、早く博望坡に到て兩方に埋伏し、初更の時分に火を放べしとて、趙雲を樊城より召寄て申けるは、御邊は先手に進み、只打負て佯て退き、敵を深々と帶き入玉へとて手分了ければ、玄德の計を約して、君は一軍を引て趙雲に接應し玉へ

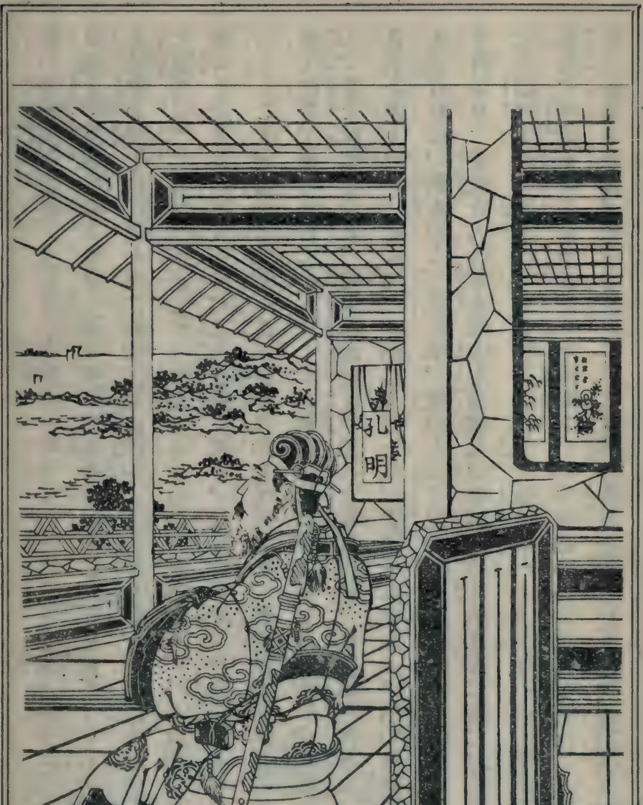
孔明を見こと芥を見が如し、何の怕ること有ん、若一陣に生捕ずんば願は某が首を獻ん。曹操が曰、軍中には戯言なし。夏侯惇が曰、願は軍令狀を致ん。曹操が曰、汝よく愼で早く捷軍を報ずべし。夏侯惇大に喜び奮然として打起ければ、曹操自ら是を送る。新野には玄德常に孔明を重じ、師の禮を以て敬玉へば、關羽、張飛心中に喜ず。この年若き者を如何なる才ありて敬玉へると云ければ、玄德の曰、吾孔明を得こと魚の水を得たるが如し、汝等又多言することと勿れ。張飛これを聞て彌怒り、孔明が名をば水と云てぞ呼だりける。玄德常に帽を結ことを好み、ある人犂牛の尾を贈ければ、之を以て自ら帽を結玉ふ。孔明内に入、君は大なる志なく只箇樣のことをのみ仕玉ふかと色を正して云ければ、玄德帽を抛て曰、是いかなることを云玉ふぞ、吾一時の憂を忘ん爲なり。孔明が曰、君自ら劉表に比せば如何ん。玄德の曰、我何ぞ及ん。孔明又曰、君自ら曹操に比せば如何ん。玄德の曰、我誠に及ず。孔明が曰、君この二人に及ず、兵は纔に數千あり、若曹操攻來なば何を以て防玉はん。玄德の曰、我常に之を憂ふ、如何なる計を用べき。孔明が曰、此處の百姓の中に年壯なる者を集て、某驅引を調練すべし。玄德これに從て新野の民三千餘人を擇出玉ひければ、孔明日夜に陣法を敎へ調練日を重たれば、一進一退皆節を失ず。浩る所に曹操夏侯惇を大將とし、十萬餘騎にて寄ると沙汰ありければ、關

出て江夏の城を守らしむ。

○孔明博望坡燒屯

この時曹操は三公の職を罷て自ら丞相と成、毛玠を東曹掾とし、崔琰を西曹掾とし、司馬朗を主簿とし、其弟河内溫人、司馬懿字は仲達を文學掾として選擧の事を掌しむ。其後諸の大將を集め南方を平んと議しければ、夏侯惇すゝみ出て曰、近比劉玄德新野に在て、孔明を師として兵を調練すと聞り、必ず大なる害をなさん、早く是を圖玉へ。曹操然るべしとて乃ち夏侯惇を都督とし、于禁、李典を副將として十萬の勢を授ければ、日を擇で打起んとす。荀彧進み出、玄德は輕々しき敵に有ず、殊更孔明を以て軍師とす、將軍此度の發行必ず然るべからずと諫ければ、夏侯惇申けるは、吾是程の敵を見こと鼠の輩の如し。徐庶が曰、將軍必ず玄德を輕じ玉ふな、今又孔明を得て虎の翼を添たるが如し。曹操が曰、孔明は如何なる人ぞ。徐庶が曰、この人諸葛亮字は孔明、道號を臥龍先生と云、上は天文に通じ下は地理を曉り、韜略を諳じて鬼神不測の機あり、尋常の輩にあらず。曹操が曰、御邊とは如何ん。徐庶が曰、某は螢の光、孔明は月の明なるが如し、爭か及ことを得ん。夏侯惇叱て申けるは、徐庶が言大に謬れり、吾

劉琦
劉琦孔明ゟ教を継母が難を脱る


孔明

蜜の香を聞て驪姫が身にひしと聚る、申生これを救んとて走り廻りて撲ければ、獻公簾の間より窺ひ、驪姫に戯るなりと疑て深く申生を恨けり、其後驪姫詐て先后の禫日なりとて、申生、重耳に祭を成しめ、母を祭たる物は父に獻べしと云ければ、申生胙を獻公に進む、驪姫密に毒を入置て獻ければ、獻公これを食せんとする時、驪姫諫て、外より來る食をば試ずして食ことや有と云て犬に與けるに、其犬立所に死す、獻公大に怒て申生を殺しければ、重耳禍の吾身に及んことを畏れ、他國へ走て後十九年して世に出、晉の文公とは是なり、されば申生は內に在て亡び、重耳は外に出て安し、君何ぞ重耳に效玉はざる、幸に今黄祖亡て江夏を守べき人なし、望で此城を守り、繼母の禍を免玉へと教ければ、劉琦喜で拜謝し、人を呼で梯を掛させ孔明を送りけり。孔明回て玄德に告ければ、玄德大に喜玉ふ。次の日劉琦父に見て江夏を守んと云ければ、劉表いまだ決せず、玄德を招て之を議す。玄德の曰、江夏は吳と境を接て第一の要害なり、身近き人に非んば守しめ難し、今劉琦の行玉はんは甚だ以て然るべし、東南のことは君劉琦と共に計玉へ、西北のことは某宜く計べしと云玉へば、劉表が曰、近比曹操鄴郡に出て、玄武池を造り舟手の勢を調練す、必ず南征の心ならん、御邊よく防玉へ。玄德の曰、某已に此事を知り、御心を安じ玉へとて別て新野に回玉ひければ、劉表乃ち劉琦に三千餘騎を添、

とて靜なる處に伴行、半酣に及で又問て曰、繼母吾を殺んとす、願は救玉へ。孔明が曰、これ某が知ことにあらずとて又別て出んとす。劉琦が曰、先生敎玉はずんば、暫く酒を飲玉へ、吾に二つの古き書あり、是を敎玉はんか。孔明が曰、いかなる書にで候ぞ。劉琦乃ち孔明を引て閣に上りければ、孔明が曰、書いづくにか候。劉琦再拜して曰、繼母吾を殺んとす、願は先生一言を以て命を救へ。孔明怒て閣より下んとすれば、梯すでに引取たり。劉琦が曰、吾累に身を安ずる計を問に、先生人の聞んことを憚て敎玉はず、今日上不レ至レ天下不レ至レ地、君が口より出て吾耳に入、誰か外に聞者あらん、願は敎玉へ。孔明の曰、疎不レ可レ間レ親、新不レ可レ間レ舊と云ことあり、人を全し害を避んと思玉はば、自ら能計玉へ、某が知ことにあらず。劉琦が曰、吾今難に逢て殺されんとす、先生敎玉はずんば是天命なり、願は君の前に死せんとて、劍を拔て自ら首を刎んとす。孔明急に住て曰、吾に良計あり。劉琦拜して曰、願は敎玉へ。孔明が曰、昔春秋の時に、晉の獻公の夫人二人の子を產、兄を申生と云弟を重耳と云、その後又驪姬と云女を寵愛して一人の男子を產り、驪姬この子に國を持せんと思ひ、常に申生重耳を獻公に讒言す、然ども獻公二人の賢才なるを思て殺に忍ず、或時春の暖なる日、獻公を樓上に置て簾の隙より窺せ、驪姬己が衣髮に蜜を塗、申生と共に園に出て遊ければ、多の蜂飛來り、

て國を理ること能ず、御邊吾に代て事を治め、吾死して後は乃ち國主と成玉へ。玄德の曰、某爭か國の重任を理べき、此事重て論ずべからず。孔明傍に在て累に玄德に目合すれども、玄德は只良策を以て國を守玉へと云て別て旅館に出玉ふ。孔明問て申けるは、劉表幸に荊州を讓んと云しに、君何とて受玉はざる。玄德の曰、われ劉表の恩を蒙り、危に臨で其國を奪に忍ず。孔明甚だ嘆じて、眞に君は仁義の主なりと云所に、外より報じて劉琦來り玉ふと申す。玄德自ら出迎へ、坐定りける時劉琦淚を流して申けるは、繼母蔡夫人常に吾を殺んと計る、事すでに急なり、願は救玉へ。玄德の曰、これ人々家の務なり、他人の計ことにあらず。孔明傍に在てあざ笑ければ、玄德問て曰、若計あらば教玉へ。孔明が曰、これは人の一家の務、某何ぞ知ことを得ん。暫ありて劉琦別て囘りければ、玄德自ら送り、明日孔明を遣べし、那時箇樣々々にして計を問玉へと私語玉へば、劉琦拜謝して去にけり。玄德その夜俄に腹疼とて孔明を召、吾に代て劉琦が家に行囘禮あるべしと云玉へば、孔明乃ち馬を早めて劉琦が家に到りけり。劉琦迎て後堂に入、禮了て問て申けるは、繼母吾を殺んと欲す、先生願は命を救へ。孔明が曰、某は他所の客なり、豈親子のことを云べけんや、恐らくは人の聞ことも有んとて坐を起て囘んとす。劉琦推留て申けるは、今先生の光臨を得て、爭か早々に囘し申ん、密室にて酒を勸ん

舟手の勢を付、鄱陽湖に泛で水軍を調練せしむ。此時劉玄德は新野に在て孔明と計を議し玉ふ所に、細作の人回り、呉の孫權兵を起して黄祖を破り、其首を取て父を祭り、大軍を以て自ら柴桑に陣を張、諸將を分て要害を守と告ければ、玄德驚き玉ふ所に、又荊州より使來て、一大事を議することあり、玄德早く來り玉へと云ければ、玄德心怪で孔明と議し玉ふ。孔明申けるは、呉の孫權すでに黄祖を殺せり、劉表いま君を招は、黄祖が寇を報ぜん爲なるべし、夫荊州は沃野萬里、武を用の地なり、某いま君に從て行時は荊州掌の内にあり。玄德これに從ひ、關羽を留て新野を守せ、張飛、孔明と五百餘騎にて打立、孔明に問て申されけるは、我今劉表に對面せば、先いかなることを申べき。孔明が曰、先日襄陽の事を述玉ひて、呉の國へ討手を頼候はば、必ず從ひ玉ふな。玄德諾して已に荊州に到りければ、五百の勢を張飛に付て城外に留め、孔明と只二人内に入、劉表に見て堦下に拜し、襄陽の罪を伸玉へば、劉表申けるは、吾御邊の害に逢玉ふと聞て蔡瑁を殺んと云ども、諸人の哭に因て閣たり。玄德の曰、これ蔡將軍の所爲にては候はじ、必ず下郎のなすことならん。劉表申けるは、今江夏の城破て黄祖亡ぶ、此故に御邊を招て計を議す。玄德の曰、黄祖心躁して人を用こと能ず、此故に自滅せり、若この恨を報ぜんとて兵を起して呉に向ば、曹操必ず虚に乘て攻來ん。劉表が曰、吾今年老病多し

ことも候はば某が首を獻るべし。孫權つひに蘇飛を宥し酒宴を設て勝軍の賀を成、自ら玉の爵を呂蒙に勸て、今黃祖が亡たるは汝が陳就を斬たる功に因りと云ければ、呂蒙頓首して恩を謝す。孫權諸將に官を加へ、呂蒙を橫野中郎將としければ、忽ち一人劍を拔て淚を流し甘寧に斬てかゝる。甘寧も前なる卓を取て立向ければ、孫權急に抱止たり。此人は年二十一歲、身の長八尺膽大に力雄なり。先に江の中にて黃祖が大將張碩を生捕、分取あまた仕たりし吳郡餘杭の人、凌統字は公績なり。去ぬる建安八年の軍に父凌操この甘寧に射死されしゆゑ、常に恨を報ぜんと思所に座上にて出合、日比の寃を雪んとす。孫權諭して曰、甘寧むかし汝が父を殺たるは、其時黃祖に仕し故なり、主に仕ては各忠を盡す、今日は御方に來て汝と共に我に仕ふ、然る時は兄弟の如し、何ぞ舊き恨を報ずべき、萬我に對して怒を止よと云ければ、凌統頭を扣き血を流して、某幼より父と共に君の御恩を蒙り、一命を棄て忠を盡んと思しに、今父を殺せる仇に遇て爭か命を惜べき、願くは御許を受て二人の勝負を決せんと云ければ、孫權諸將と推止て凌統を承烈都尉に封じ、甘寧に舟百艘兵五千人を與て行て夏口を守しむ。是凌統が難を避ん爲なれば、甘寧拜謝して出にけり。此より吳國彌勢を得て大船を夥しく作り、兵を分て諸方の攻口を守せ、孫權自ら柴桑郡に陣を取、叔の孫靜に五千餘騎を付て吳會を守せ、周瑜に

寧生捕にせんとて兵を下知して進所に、道の傍より五六騎の兵咄と喚て蒐出たり。甘寧これを見に程普なりければ、人に奪れんよりはと思ひ、弓を取て追さまに射けるに、黄祖背を射られて馬より下に落ければ、甘寧押て首を取、程普と共に本陣に回て孫權に見ける。孫權大に喜で其首を地に投、わが父を殺せる仇なれば國に回て墓を祭んとて匣を作て之を入、諸軍に恩賞を與へ甘寧を都尉に封ず。江夏城をば兵を分て守しめんと議しければ、張昭が曰、この小城一つを守んとて兵を殘は後までの備難かるべし、不如悉く本國に回なば、劉表必ず黄祖が仇を報ぜん爲に兵を起して攻來ん、是坐ら力を養て相待時は、敵の勞に乘て打破んこと掌にあり、其時逃を追勢に乘て攻かゝらば、荊州念なく破るべし。孫權この義然るべしとて、悉く兵を收め本國へぞ回ける。蘇飛は檻車に載られて吳の國に行けるが、密に人を賴で甘寧に救を乞けり。甘寧これを聞て、如何にもして一命を乞扶昔の恩を報ぜんと思ひ、諸軍みな吳に回り、黄祖が首と蘇飛とを以て孫權父の墓を祭んとする時、甘寧頓首して再拜す。孫權その故を問に、甘寧申けるは、某昔蘇飛が情に有ずんば、空く溝壑に死して今日君に仕ること能じ、今蘇飛が罪逃れ難と云ども、若憐を垂て一命を助玉はば、某この度の功に申易ん。孫權が曰、今汝が爲に蘇飛を助ば必ず逃て回るべし。甘寧が曰、蘇飛必死の命を助りなば逐立玉ふとも走まじ、若にげ去

て馳來けるに、吳の大將われ先に功を立んと氣に乘て攻かゝりければ、其鋒あたるべからず、一支も支ずして散々に落けるを、吳の大將に潘璋と云剛の者只一騎にぐる敵の眞中を蒐通り、大將蘇飛と引組ちつとも働さず、脇に夾で船中に回りければ、孫權目を怒し、汝等吾父を殺せる讐なれば微塵に成とも心あかず、暫檻車に入て本國に遣し、黃祖を捉て共に父の墓を祭んと云て兵を下知して攻かゝる。

○孔明遺計救劉琦

時に建安十三年春正月、吳の大將勝に乘て兵を進め、威風を抖擻して攻かゝりければ黃祖防こと能ず、大將を討れ舟を破れ、叶ずして江夏城を打棄東門より出走る。甘寧心の中に、御方の勢は悉く西門にあり、黃祖必ず東門より走んと思ひければ、東門の外十里に出て相待けり。黃祖は十騎あまりに討成れ這々のがれて荊州の方へ走る所に、向より一手の勢賊を造て蒐出たり。驚て之を見ば甘寧眞先に進來る。黃祖告て申けるは、汝我に從し時厚く恩を施けるが、何とて今情なき。甘寧怒て曰、われ汝に從こと久と云ども了に恩を承ず、大なる功を成ても一度賞をも被ず、今何の情か有ん、早々に刀を受よ。黃祖のがれ難思ひければ飛が如に走りけるを、甘

國家いま蕭何が任を御邊に付す、御邊守に居して亂を憂玉はば、何を以てか古人を希慕せん。孫權杯を擧て甘寧に勸て申けるは、汝行て敵を討こと此酒の如し、決して汝が望に任す、能忠を盡して武略を立よ、今黃祖を破ば汝一人の功ならん、張昭が言を疑こと勿とて、周瑜を大都督とし、呂蒙を先手の大將とし、董襲、甘寧を副將とし、孫權自ら後備として十萬の勢を起し、江夏を指て推よする。黃祖これを聞て大に驚き、諸將を集て計を議し、蘇飛を大將として陳就、鄧龍を先手とし、江夏の兵數を盡して出向ふ。去程に陳就、鄧龍兵船を揃て沔口を取截、小舟を灣港に屯て大弩千餘張を構へ、大索を水面に張て吳の勢を待ところに、吳の先手の兵五六百人小舟を馳鼓を打て進來り、射立られて散々に引退く。甘寧これを見て董襲に申けるは、事已に迫れり、いざや共に蒐んとて早舟百餘艘を選び、舟ごとに五十人を載、二十人に櫓を推せ三十人はつゝみ連て、手に刀を提て切ども射ども顧ず、張綱を切流して蓦地暗に進ければ、黃祖が勢當ること能ず、陳就退て走りけるを、呂蒙自ら櫓を推敵の中へ蒐入、兵を下知して火矢を射させしかば、敵の舟四方に亂て陳就岸に上んとしけるが、呂蒙に追付られ回し合せて戰けるに、胄板を切れて遂に失てけり。大將蘇飛は陸の陣に居けるが、舟手の先陣破ぬと聞て急に救んと

因て蘇飛酒を設て持なし、吾頻に御邊を薦れども黄祖用んとする心なし、年月の遷り去ること水の流が如し、人の生涯幾ぞや、早く外に行て然るべき主を求め遠大の計を成と云、甘寧いかゞして此處を出んと問ければ、蘇飛申けるは、吾御邊を薦て鄂縣の長と成ん、其時逃去と教しゆゑ漸のがれて出來りぬと申す、某君の賢人を招あつめ、舊き仇を恨ず能あるを用玉ふ由を語り、君の御前某よく申んとて矢を折て誓を成ければ、甘寧つひに數百人を引て御方に來れりと告ければ、孫權大に喜び、吾甘寧を得こと黄祖を滅すべき前表なり、呼出せと云ければ、呂蒙乃ち甘寧を引來る。孫權申けるは、吾甘寧を得て心甚だ喜ぶ、爭か昔の恨を思べき、願は黄祖を破の計を聞ん。甘寧申けるは、今漢祚日に危して曹操いよ〳〵憍る、是つひには天下を奪べし、荊州の地は山陵の形便ありて江川流を通ず、誠に國の西勢なり、某劉表が人となりを見に、遠き慮なくして其子も又大に愚なり、業を繼基を傳る主にあらず、君早く圖玉へ、若延引せば曹操必ず取ん、今荊州を取には先黄祖を破にあり、黄祖老疲昏邁にして事を修ず、貨利を貪て吏人を侵し、上下悉く恨を含む、兵粮武具の備なく軍に法伍を整ず、君今これを攻玉はば立所に破べし、其勢に乗て西の方楚關に至ば、次第に巴蜀を圖つべしと云ければ、孫權大に喜び、是金玉の論なりとて周瑜に命じて兵船を用意せしむ。時に張昭すゝ

和睦に成ければ、呉主孫權諸の大將を集め、黃祖を伐んと評定す。張昭が曰、いま母の喪未期年にも及ず、何ぞ兵を動べき。周瑜申けるは、讐を報じ恨を雪、何ぞ母の喪に拘ん。孫權心いまだ決せず、如何せんと議する所に、北平都尉呂蒙來れり。孫權問て曰、いか成故かある。呂蒙が曰、某龍湫の渡を固居たるに、江夏の方より舟一艘來て人馬十餘人岸に上る、某何者ぞと問ば、答て曰、某は黃祖の手下に甘寧字は興霸と云者なり、本巴郡臨江の人にて、少かりし時腕立を好み、世間の溢者を集てその大將となり、强き弩を持鎧を重ね、腰に鈴を付て江湖の中に縱橫す、人鈴を聞ては悉く逃わしる、後には屈强の若者八百餘人を聚め、山中に入て人を掠、舟には蜀江の錦を以て帆を作、これに因て世の人錦帆の賊と號す、若到る所每に重く持成ざれば火を放ち人を殺す、種々の惡行年月を送りけるが、後には前非を悔て過を改め、荊州に行て劉表に仕ふ、されども劉表が人となり始終よかるべしとも思ず、一旦事出來なば禍必ず身に及ん、不如呉に行て仕んと思けれども、黃祖江夏を守て人を通ず、此ゆゑに暫く江夏に住て黃祖に從けれども了に重く用ず、先に黃祖戰負て已に危かりし時、只一人大敵を防で黃祖を救ひ出すと云ども嘗て其賞もなし、數年を過て蘇飛と云もの黃祖に薦て重く用玉へと云ければ、黃祖答て、甘寧は本强盜をして人を劫たる者なるゆゑ重く用べからずと云、是に

大に哭き哀けり。其後呉主孫權兵を引て馳來けるが、早嬀覽、戴員が一類悉く誅せられたるを見て、孫高、傅嬰を牙門將に進て丹陽を守しめ、徐氏を家に回して老を養しむ。江東の人徐氏が德を稱して其名史册に留れり。斯て所々の山賊も悉く平伏しければ、大江の中に兵船七十餘艘を備へ、周瑜を以て大都督として水陸の軍馬を司しむ。建安十二年冬十月、孫權が母呉夫人大病を受て已に危かりしかば、張昭、周瑜等を召て申けるは、我は本呉地の人なるが、幼して父母に離れ、弟呉景と錢塘に徙り、了に孫堅に嫁して四人の子を生、長子孫策は吾夢に月懷に入と見て生たり、次の子孫權は日懷に入と見て生たり、易者に卜せたれば日月を夢みるは大なる吉事と云しが、不幸にして孫策早く死し、已に基業を孫權に讓る、汝等よく吾子を扶よ、今病あやふし、此故に後事を告、張昭、周瑜二人は師傅の道を以て孫權に教へよ、必ずこの國を失しむること勿、黃祖は累代の敵なれば必ず寃を報じ、能江東を保て萬全の計を成とて、又孫權に申けるは、汝よく張昭、周瑜が教を聞、切に怠こと有べからず、吾妹堂にあり、今より後汝母として事べし、汝が妹もよく育、婿を擇で嫁せしめよ、若吾言を用ずんば、九泉の下親子の對面有まじきぞ、能々敬めと言訖、忽然として死ければ、棺槨衣衾の美を具て諸人みな哀み哭き、父の墓の側なる高陵にぞ葬りける。建安十三年の春の比天氣

邊洪を捕て市に出して罪を正し、君を弑せる者なりとて了に其首を刎、これより二人心の儘に振舞、孫翊が貯たる財寶を分ち取美女を掠む。女房徐氏は勝たる美人なれば、嬀覽刀を提て家に入、われ邊洪を斬て汝が爲に夫の仇を報ず、今より後は汝我妻となるべし、若從ずんば斬死さんとて刀を拔て威しければ、徐氏の曰、夫死して一月をも過ず、晦日に至なば祭を了て其後に夫婦とならん。嬀覽喜で囘りければ、徐氏密に孫高、傅嬰と云二人の大將を呼、淚を流して申けるは、我夫ありし日常に汝二人が忠義を稱す、此ゆゑに面を羞ず告るなり、嬀覽、戴員計て君を弑し、罪を邊洪一人に歸して縱に財寶を分ち取、剰へ我を以て妻とせんとす、我詐てこれを許す、汝早く吳王に訴へ、密に計を成て二人の賊を誅せよと云ければ、孫高、傅嬰答て曰、吾等久く君の恩を蒙り、命をすてずして日を送るは、計を以て二人の賊を殺し、君の恨を報ぜん爲なり、御心安思召と淚を推て云ければ、徐氏大に喜び、早く人を以て吳主孫權に報じ、孫高、傅嬰を大將として屈強の兵二十餘人幃幕の內に藏し置、已に晦日に至ぬれば嬀覽欣然として來り、酒を飲で夫婦の約を成、半酣に及で密室にゆく。徐氏聲を揚て孫高、傅嬰いづくにか在と呼はりければ、二十餘人の兵刀を拔て躍出、つひに嬀覽を斬ころす。次に戴員を招き寄生捕て首を刎ければ、徐氏忽ち喪の服を被り、二つの首を以て亡夫の靈前に祭り、

を盡して孫權を扶よ、人質を送ること勿れ。これに因て了に人質を上せざりしかば、是よりしてこそ曹操呉を滅の心定て、常に計を思ふと云ども、北國に事有て隙を得ざりしゆゑに、未だ其沙汰無りけり。建安八年十一月、孫權舟を揃へ兵を集て荊州江夏城の黄祖を攻けるに、大江の中の合戰黄祖が勢散々に亂れければ、孫權が大將に驍騎將軍凌操と云大力の剛の者、敵を追て深入し、黄祖が大將甘寧に夏口にて射死さる。凌操が子に凌統とて十五歳に成けるが力を奮て攻戰ひ、父が屍を尋て馳回ければ、孫權軍の利なきを見て了に引て國に回る。建安九年十二月、孫權が弟孫翊丹陽の太守となる。此人元來性甚だ急にして、酒を飮では多く士卒を鞭打ければ、丹陽の都督嬀覽、郡丞戴員と云もの二人、志を合て常に孫翊を殺んと計る。然れども孫翊心剛にして勇を好み、出入常に劍を帶ければ未その便も無りけり。嬀覽思案を廻し、呉主孫權に見て山賊を討んと望む。呉主これを許しければ、嬀覽ひそかに孫翊が大將邊洪と云ものを語ひ置、諸の大將縣令を集て評議を初め、酒宴を設て孫翊を請じける。孫翊已に出んとしければ、其妻徐氏顏色も世に超、聰明にして易の卜を能す。此日卜を成て大に不吉なりければ、今日の會に出玉ふなと諫む。孫翊遂に聞ず、酒宴を成て晩に及び、賓客の歸るを送るとて劍をも帶ず出けるを、邊洪門外に從ひ來て一刀に斬死す。嬀覽、戴員大に驚たる體をなし、

を滅して後、使を以て孫權が長男を都に召て官人と成すべしと云遣しければ、孫權いそぎ周瑜等を伴ひ、老母吳夫人が前にて評議しけるに、張昭申けるは、曹操いま人質を求るは是諸侯を鎻法なり、然れども從はずんば必ず大軍にて攻來らん、若從はば萬づ彼が云所に背こと能はじ。周瑜申けるは、楚國初荆山の側に封ぜられて地百里に足ざりしかども、賢能繼で起り土を廣め境を開て基を郢に立て、遂に荆揚に據南海に到る、業を傳へ祚を延て九百餘年を保き、今將軍父兄の業を承六郡の衆を兼て、兵精く粮足り、山を鑄て銅を爲海を煮て鹽と成、將士命を用ひ、境內富饒にして人亂を思ず、舟を泛べ帆を揚て、朝に發して夕に到る、武士の風勁勇にして向ところ敵する者なし、然るに何の怕ること有て人質を送るべき、人質一度送る時は曹操が下知一つとして背がたし、若將軍を召とても行ずんば叶ふまじ、然る時は人の下に附身を屈て位一侯に過ず、僕從纔に十餘人、車數乘馬數匹、この上に出べからず、爭か南面して覇業を行ことを得ん、唯人質を送ことを休て徐々として變を伺ひ、曹操もし義兵を以て天下を正ば其時に從ひ玉へ、何の遲きこと候べき、若曹操漢を奪て暴逆を成ば、兵猶レ火不レ戢將ニ身焚一、將軍の韜略威を抗て天の時を待玉ふべし、何ぞ人質を送んと云ければ、吳夫人喜で申けるは、汝が云ところ當然なり、汝は元來孫策と同年にして一月遲く生たれば、我子の如に思ふなり、能忠

通俗三國志

巻之十六

○孫權渡レ江破二黃祖一

吳の孫權は去ぬる建安五年孫策死して後より、江東の地を保て討虜將軍に封ぜられ、父兄の業を繼で廣く賢人を招き重く謀臣を用ひ、賓館を吳會に構て顧雍、張紘等に四方の名ある人を接待せしめければ、了に數十人を薦得たり。其人々には、彭城の嚴峻字は曼才、會稽の闞澤字は德潤、沛縣の薛綜字は敬文、汝南の程秉字は德樞、吳郡の朱桓字は休穆、會稽の凌統字は公績、吳郡の陸績字は公紀、烏程の吳粲字は孔休、襄陽の龐統字は士元、鳳雛先生と號す。吳郡の張溫字は惠恕、これ等を宗徒の者として孫權重く禮敬す。又智將には、汝陽の呂蒙字は子明、吳郡の陸遜字は伯言、瑯琊の徐盛字は文嚮、東郡の璠璋字は文珪、盧江の丁奉字は承淵、共に忠を盡して佐しかば、これより江東の人物天下大に稱揚す。建安七年曹操河北を平げ袁紹

玉泉山關羽顯ㇾ神……六六三

卷之三十三

漢中王大哭二關羽一……六七三
曹操殺二神醫華陀一……六八二
曹丕執ㇾ政稱二魏王一……六八七
曹子建七步作ㇾ詩……六九二

孔明定レ計擒二張任一……四三三

卷之二十七

揚阜借レ兵破二馬超一……四四五
葭萌關張飛戰二馬超一……四五〇
玄德平二定成都一……四六三
關羽單刀赴二吳會一……四六九

卷之二十八

曹操擊二殺伏皇后一……四八一
曹操漢中破二張魯一……四八八
張遼大戰二逍遙津一……四九九
甘寧百騎襲二曹操一……五〇八

卷之二十九

魏王宮左慈擲レ盃……五一九
曹操試二神卜管輅一……五二九
耿紀韋晃討二曹操一……五三八
瓦口關張飛戰二張郃一……五四四
黃忠嚴顏破二魏兵一……五五三

卷之三十

黃忠斬二夏侯淵一……五六一
趙雲大戰二漢水一……五七二
玄德智取二漢中一……五七八
曹操忌殺二楊修一……五八六

卷之三十一

玄德進二位漢中王一……五九五
關羽威震二華夏一……六〇三
龐德擡レ櫬戰二關羽一……六一三
關羽渰二殺魏七軍一……六二四

卷之三十二

華陀刮レ骨治二關羽一……六三三
呂蒙定レ計取二荊州一……六四二
關羽大戰二徐晃一……六四九
關羽夜走二麥城一……六五五

卷之二十一

周瑜南郡戰曹仁……一九七
孔明一氣死周瑜……二〇六
孔明定計略四郡……二一六
趙雲計取桂陽城……二二〇
黃忠魏延獻長沙……二二七

卷之二十二

孫權大戰合淝城……二三七
周瑜定計取荊州……二四二
玄德入吳娶孫夫人……二五一
錦囊計趙雲救主……二六〇
孔明二氣死周瑜……二六七

卷之二十三

曹操大宴銅雀臺……二七七
孔明三氣死周瑜……二八六
孔明大哭周瑜……二九八
耒陽縣張飛薦龐統……三〇三

卷之二十四

馬超起兵取潼關……三一七
馬超大戰渭水橋……三二五
許褚赤裸戰馬超……三三六
馬超步戰五將……三四五

卷之二十五

張松入魏難楊修……三五五
龐統定計取西蜀……三七〇
趙雲截江奪幼主……三八三
曹操興兵下江東……三九〇

卷之二十六

玄德斬楊懷高沛……三九九
黃忠魏延大爭功……四〇七
落鳳坡亂箭射龐統……四一五
張飛巴郡釋嚴顏……四二三

通俗三國志中卷 目錄

卷之十六

孫權渡江破黃祖……一
孔明遺計救劉琦……九
孔明博望坡燒屯……一八
獻荊州王粲說劉琮……二六
孔明計燒新野城……三三
玄德敗走江陵……三九

卷之十七

長坂坡趙雲救幼主……四七
張飛據水斷橋……五九
玄德敗走夏口……六七
孔明舌戰吳群儒……七三
孔明智激孫權……八六

卷之十八

孔明智說周瑜……九三
周瑜定計破曹操……一〇一
周瑜三江戰曹操……一〇八
群英會周瑜瞞蔣幹……一一九

卷之十九

孔明計伏周瑜……一二九
黃蓋獻計破曹操……一三五
闞澤詐獻降參書……一四三
龐統詐獻連環計……一四九

卷之二十

曹操橫槊賦詩……一五七
曹操三江調水軍……一六〇
孔明七星壇祈風……一六五
周瑜赤壁鏖魏兵……一七三
曹操敗走華容道……一八三
關羽義釋曹操……一八八

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

DS
748
.2
C3619
1912
v.2

LIBRARY
SEP 03 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

通俗三國志

中卷

DS
748
.2
C3619
1912
v.2

Ch'en, Shou
Tsuzoku sangokushi

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

有朋堂文庫